新群書類從

第八

一幸若舞の詞は何人の何時の頃に作り出したるものなるか明らかならず。されど幸若舞といふ事は桃井播磨守直常の孫宮内少輔直詮の幼時比叡山にありて幸若といひし頃仕出でたるものなりといへば、おほよそ足利氏の義滿義持の頃にあたりて世に起りしものなるべく、隨て其の詞も其の頃よりの人々の作りしものとおぼし。義政の應仁の頃には既にめづらしからず行はれ、降つて德川氏の寛文延寳あたりまで諸侯貴人のこれを用ひて宴を助け酒を侑めたること諸書に散見す。されば詞も一時一人の手に成らざる事明らかなり。されども今存するものゝ中にては、新曲といふものの最も新らしく、其の餘は皆新曲以前のものと推測らる。新曲は後醍醐天皇皇子尊良親王の御上を作れるものにして、餘の例に倣ふ時は題して一ノ宮とも武文ともいふべき

筈なるに、たゞに新曲とのみ云ひ傳へて其題名無くて濟みぬるを思へば其の後に新らしき作は出でざりしなるべし。新曲の文勢筆意を考ふるに、他の曲とは大に其の樣を異にして、巧ならぬにはあらねども、蕪陋の中に健剛の氣を含める中古のをかしき趣は更に無く、他の曲と新曲との間に幾干の歲月あることはいと明らかに見ゆ。たゞ新曲と古曲とを倂せて、すべて皆何人の作るところなるか、一證左の存して之を明らかにするだに無きを恨むべしとなすのみ。

一今刊するところの舞曲計四拾一番、一のいづみが城を除きては、新古書目に散見するところのものを網羅して剩さず。

一舞曲古刊本の其の一は明曆板にして四年戊九月吉日山田市郎兵衞開板とあり。其の幾番を刊したるやは明らかならず。予はただ其の敦盛を睹たり。十四行本なり。其の二は寬永板にして、寬永

十二年乙亥二月吉日開板之と烏帽子折の末に見えたり。此の種の本は三十六番を具足せりとおぼしく、予は其數番を除きて之を目睹せり。すべて皆十行本なるが、中に八島一番のみは十一行にして字體もまた聊か異に、二部見たる本の二部とも然るを見れば、故ありて板本を亡ひなどし、蚤く既に他の板をもて闕けたるを補ひ、書肆みづから揣くも不揃ひなるものを鬻ぐに至りしとおもはる。其の三は刊刻の年時不明なる十五行本にして、予たゞ其の高館一番を睹たり。此の種の本の刊せられしもの三十六番なりやはた幾部なりや是亦不明に屬す。此の他猶異板の刊本ありや否や、年代久遠、今遽に武斷すべからず。

一舞曲寫本は淺草文庫舊藏にかゝる內閣文庫現存のもの最も古し。字體、紙質、綴様より考ふるに蓋し慶長前後のものなり。九行、鳥の子紙、大和綴、竪本にして繪無し、繼信忠信記と題したる畫巻の

影寫本一巻あり。題名は異なれども其の文は全く八島に同じ。而して其の卷端に詞書二條爲重卿筆とあり。爲重卿は後小松天皇の至德年間に新後拾遺和歌集を撰みたる人にして桃井幸若と年代相當るといへども、後人の記入に係れば深く信ずるに足らず。原本を目擊して後之を考ふべきのみ。唯中古の草子畫卷の類を其の儘舞の詞として舞々の用ゐたるか舞の詞の時に或は思ひのほかなる名を負ひて、草子畫卷の類として人に玩ばれたる事あるか、いづれにしても猶此の類の寫本ありや、是等は聊か心に留むべき事たり。別に予が所見に俗に奈良繪本と稱する畫入りの横本の景清あり。此の類は所謂仕入本なれば、予の目睹以外に猶多く存すべきやもとより論を待たず。予は目擊せずと雖も、予の友人素影齋藤君の予の爲に之を見、且つ其の幾部を影寫して予に餽られたる幸若氏故領地越前丹生郡西田中邑幸若氏舊

家隷打波氏の所藏寫本は、横本にして字體も優美に、年代の古さは蓋し閣本に及ばずと雖も、其の佳本にして信憑すべきは比類無しといふべし。此の他寛永刊本に詞章相同じき百數十年餘の古寫本十餘册あり。今刊するところの舞曲皆是等の本を比較して及ぶべき限りは佳良ならしめんことを期したり。

一入鹿、大職冠、百合若、志田、滿仲、硫黄が島、築島、伏見常盤、常盤問答、文覺、伊吹、夢合せ、馬揃、那須與一、笛之卷、烏帽子折、腰越、堀河夜討、四國落、富樫、笈さがし、八島、清重、高館、濱出、景清、元服曾我、和田酒盛、小袖曾我、劍讃歎、十番切、新曲の三十二種は寛永本に依り、鞍馬出は寛永本同様の古寫本に依り、敦盛は明暦本に依り、鎌田、未來記、靜、切兼曾我、張良の五種は内閣寫本に依り、木曾願書、夜討曾我は幸若氏寫本に依りたり。

一今刻一に各々其の本づくところの本に依り、一點を増減せず、一

書を改竄せず。假名遣ひの誤謬、文字の假借等、まさに改め正すべきものと雖も、其の舊を存するは却て當時の一般の發音ならびに舞舞の語り癖等を想見するに足るの料たるを以て之を改正せず。間々特に本のまゝなる旨を挿記して、奇異なる語法、難解の文言、既存の誤謬、無理なる文字の假借等を明らかにし、今刻の誤脱して然るにあらざるを明らかにす。

一　一番の曲其のやゝ長きものは、舊刻或は分つて上下とす。然れども本是書肆の便宜に隨つて分册せしに過ぎず。故に各刻定め有ること無し其の初より上下を爲せるにあらざること分明なるを以て、今刻すべて通じて一部を完くし、强ひて分册せず。

一　舞曲もと今を距る遠からざる時代の語り物なるの故を以て其の文法おのづから今人の耳目にも親しからず、上代の習風にも似通はざるものあり。例を擧ぐれば、してのて文字を略して、君の

御おぼえめでたくして、とあるべきて文字を省き、君のおぼえめでたくし、と云ふが如き、とものも文字を略して、如何に覗うとも擊たるまじ、とあるべきも文字を省き、いかに覗うと擊たるまじ、と云ひ、たとへばしやうもんあなたにあるともと云ふべきを。たとへばしやうもんあなたにあると、と云ふが如き、又事態切逼せる情景を叙する時は、ぞ、る、こそ、けれ、の古代語法中に、忽然として、此處に下女一人ゆきあふた、やあ此やかたのうちに何事かあるととふた、爰に相田の右座に疊が一でうあいた、といふたぐひの近代語格を交ふるが如き、又自他の談話の區別を明らかにすべき語を省きて、甲者乙者の言語を、わいだめ無く續くるが如き、間投詞を形狀の詞と名詞との間に挿むで、八尺五寸のさても棒をば、六尺三寸のさても長刀水車にまはいてといへる如き、皆卒然として之に臨めば、本文に誤謬脫漏あるべく思はるゝもの甚だ

多し、讀むもの漫に武斷して誤謬脫漏とする勿れ。

一語形もまた希異なるもの少からず。頭の事をうんきと云ひ、足にはくものをけいちといふが如き、普通辭書に其の語無しとも、漫に疑ひて本文誤脫あるべしとなす勿れ。

一本文一に舊に依れるは前記の如し。たゞ婆心止む能はずして讀者の便利の爲に濁音の點のみを付したり。佛經の音讀を假名のみにて記したるが如きは、濁點無き時は殆ど之を讀みて錯過すべければなり。若し嚴刻の士の婆心醜甚と叱呵するあらば、予もとより甘んじて其の責を受くべき也。

明治丙午十月初六　　幸田露伴識

新群書類從第八目次

舞曲

目次終

新群書類從第八

舞曲

いるか

抑かまたりの先祖をくはしくたづぬるに天津こやねのみことに三十六代の御末みけこのきやうと申て天下にかくれぬ臣下たりしかるにみけこのきやうは君の御おぼえめでたくし天下のまつりごとをわがまゝにしたまへば世をそねみ人へんしゆしていかにもして御なかのあさらけなむをたくみさんにんのきやうかいをそうもんすると申せ共みかど御もちゐなかりしかどげには又しよきやう一味のおんるにてなだめがたくやおぼしけんとがもなかりきみけこのきやうにちよつかんのせんじをかうぶりてはるかなりける東路やひたちの國にはいしよありおもひをはかんざむのゆふべの雲にかけながら涙を遠島のみちよりするしにさきだてゝ見もならはざる東路やひたちの國にくだりみやのあたりにいほりしてあかし暮させ給ひければあたりの里人見參らせかしまのみやにすめばとて四郎ねぎとぞ申けるいつしかはやく落ぶれのうふでんしやにまじはりさんわうのときを得一けいのすきをになひすんの田をかへしいつしのくはの葉をとりけんはくのたぐひをいとなみていみじからねどくわういんを去年は今年にをしうつりあやめもしらずすみ給ふかくてすぎゆき給ひしにわりなきいもせのなかなればわかぎみ出來給ふ有しにかはる御すまゐにもいつきかしつき給ふ

すでにそのとしもうちすぎなつくれゆけばみな月の中の五日のあつき日に田のくさとりにいで給ふいたはしや若ぎみをこの田のあせにぐし出てあを葉のしばを折かざしなかでいねよとちをふくめ夫婦ともに

もゝくさをとる手に付てなへのはのさかへむ事をよろこびてひめもす取てくらさるゝかゝりけるところにいづくからともしらざるに一つのきつね來りがまをくちにくはへようしのまくらがみにをきかきけすやうにうせければちゝはゝいそぎたちよりかまをとりて見たまふにこほり手のうちにかゞやくやうなかまでありもしもたからになるやとて此子にそへてぞそだてらるぶゆくれんまの時を得はや十六になり給ふたちばなのきやうの御時にのうぶでんじやのわざなれば庭の夫にさゝれなく／＼京へのぼりしにもゝしきや大内の庭の小草をきよめしにきやうしのべんは御覽じておほくのしちやう夫のなかにいとけなきわつぱありかたちはやつれはてたれどたゞ人ならずおぼえたりこんこつのさうの有こんこつのさうとは大臣のさうの事成るなかへ今はくだすまじ宮中にとどまりてみかどをしゆごし申せとてもんせうしやうににんせられ右京の太夫に經あがりて宮中のまじはりはやうんかくに成給ふくわほうのほどのゆゝしさよかゝりける處にそがの入鹿の大位（臣ノアヤマリ歟）とて大惡行の臣下あり君の御位をうばひとつて我わうにならんとたくむ此事天下の大事とて東山のおくにふぢのおほくはいかゝりたる大木のもとにてせんぎひそかにときを得かのいるかのしんをば右京の太夫に仰付うたるべきとのりんげん也ちよくめいなればそむきえずりやうじやう申かへりようしの時きつねのあたへたる一つのかまをたばさみねらひうかゞひ給へども彼入鹿の大臣は三年の事をかねてしりつるぎをたばさみほこをもち宮中の出仕にもけいごのもの前後にみちさきをはらはせ出いればうつべきやうこそなかりけれかまたりこゝろにおぼしめす人をたばかるはかりごとしたしくならではかなはじとおぼしめされけるあひだみめよき女を尋わがひめとがうしいつきかしづきたまひけりびしんはいはねとかくれなしみやこの上下かつ知てをよぶもをよばざりけるも望をか

けぬ人はなしある時かまたりいるかのしんの御かたへ御ふみをつかはさるうき世にきたる志るしにぐしを一人もちて候がせめて武運の至りにやかひなきひめにて候をいもとやらんの其ためかのぞみはおほく候へどもうけひくかたも候はず當君の御代に御かたさまならでは志たしみ申さむたよりもなし志うぢよとおぼしめさるゝともめしをかせ給ひなば身の面目たるべしとかきこそ送給ひけれいるかはをもき人なれ共いもにははやくくつろぎたねんのぞみの折節御ゆるされはきゑつとてやがてむかへとりいつきかしづき給ふかくてわが君出來たまへば家門のはんじやう時をえこれに志かじとさゞめひたりかまたりおぼしめすいまははやうちとけぬたばかりよせてやすやすとうたばやと思召かせのこゝちにもてなし日を經てばんし一せいのふりをまなびたまへば宮中の上下とはせ給はぬ人はなしされどもいるかは見えさせ給はずまちかね給ふふせいにているかのしんの御かたへ御ふみをつかはさるすでにうきよのしやうがいよめい今をかぎりなり親子わりなき對面も今度斗の事なるべし入鹿の臣も北の方も御いりあれとかゝれたりいるか此よし御覽じておほきにおどろき給ひくるまやりだせうしかひよいそがせ給へ御前とてさうなくいで給ひしがちうにてこゝろをひつかへし志ばしようしかひ此くるまとゞめよ御前ばかりやり申せ我はゆかじと思ふなりそれをいかにと申にむかし異國にさるたとへありみなめん／＼もきゝ給へ語てきかせ申べしれうきんこくのれうわうとけんこくのけんわうと國のさかひをあらそひて數度のたゝかひ隙もなしけんこくは多勢れうこくは無勢なりしかりとは申せともれうこくの味方にきんそんきんらくとて二人たけきつわものありてんをかける時うさくもをはしる事平路をつたふごとし大地をとをるときばんしやくをうがつ事はくへうをとをすがごとしうみのうへにて馬をのりみやうくわの中に身をかくし大つう

じざいにかけまはればけんこくのつはものかずをつくしてうたれけりすでにはやけんわうもうたるべきにておはせしがけむわうかしこき人にてみめ能女をたづねわがひめみやとがうしはとうによと名付きんそんをむこにとるきんそんたけきつはものなれ共いもにははやくくつろぎかのひめみやにちぎりをこめけむこくへこそわたりけれをとうとのきんらくもあにがやうになるうへちから及ばぬ次第とて兄弟つれてぞわたりけるけんわうなゝめにおぼしめし兄弟をちかづけかの姫宮と申はまるがまさしきひめなりちぎりをこむるなんたちなどか子にてはなかるべき親子わりなき中ならばれうわうをうつてたべもしさもあらばかた〴〵にれうこくをわたさんとむつましけにのたまへば兄弟の者のがれがたくや思けんやがてりやうじやう仕りれうこくへ忍のび歸てびんぎあらばとねらひけりれうわう此由御覧じてれいならずなんぢらがまるに近付ことよきはうちに悪心こもるゆ

へうたれじとだにおもひなばいかにねらふともうたるまじ忍かりとはいへども日比まるにつかへ數度のけういをほろぼし今まで國を忍る事も只なんぢらがきうこうたりひごろのちうのふかければ命をなんぢにあたふべしさりながら五體ふぐに有ものはぶつたいをうけがたしまるがほうぎよのはうたひをちつともそゝがさずしてきんさんにべうをつき籠奉るべき也すはたましゐとの給ひてみづからむねのあひだよりあをきくちなはとり出しみわげにとつてさしわげきんそんにたび給ふ御さいごのりんげむにまるの命は惜からずなんぢらたこくのたばかりを知ざりけるこそむざんなれかならずこうくわいすべきそとこれをさいごのりんげんにてたちまちほうぎよなり給ふ御ゆいごんにまかせてきんざむにべうをつき御からだをほりうづみたましゐのくちなはをけんこくへわたしけんわうにこれをみせ申けんわうなゝめに思召こゝまでのわざなればきんそんをもきんらくをもも

ろともにうち取て代をおさめんとのせんじにて官軍うんかにとりまひたりむざんのありさまやれうわうのおはせし時にこそきんそんきんらくがゆみ矢のゆうもつよくしてゐながらしよこうをせいせしにれうわうほうぎよの其後はつうりきもつかれはてはかりごともめぐらずつるきもとばすいはんやほこをなぐる事もなくいたづらにかれらうたるべきにて有しが猶兵法のとくによりおほくのなかを打やぶりれうこくさしてにげてゆくあとよりくわんぐん追かくるせんはうつきてれうわうの御べうのまへにまいりいかゞせんとかなしむべうのうちにこゑ有てまるがまつごのりんげん今こそ思ひ玄るべけれかたきはちか付ぬいたづらにかれらうたせん事のむざんさよいでいでさらばなんぢらを一見つぎ見つぎ今度のいのちたすけんまるがからだをほりおこしゝきのしゝにをしのせ一つのほこをあたへよふせいでみんとせんじ有べうはおほきに玄んどうしつかは二つにわれにけ

りふしぎの思ひをなしつゝほねをひろひつぐほどにいかゞはしてなかりけんおとがいのほねのたらざればひだりのひざのかはらをとつておとがひのほねにさしつく扨玄ゝむらはくちうせぬとりつくろふにあたはず青黄赤白の四色のしゝにをし乗ほこを參らせたりけれは拍子にあはせかけひくおもてをあはするものはなしけんこくのつはもの數をつくしてうたれけり玄かりとは申せども其日もすでにくれいりあひ時になればばうこつをつがふかばねにて日もいらばはなれてかなふつべしとも覺えずとたかきをかにあがりいり日を玄はしとゞまれとまねき給ひけりければげに日光もあはれみて山のはにかゝる日が又巳の刻にたちかへるかたき是をみていよ〳〵しんいをとゝめ合戰をとゝめてにげかへるこうだいのめいせきふかくにつくりをかれたり入日を返すまひの手此御代よりもはじまれりれうわうのひきよく此御事なりけりはたうのまひと申は養子のひめの事なりきん

そんきんらくはらくそんあつそり是也げんじやうらくはやたいなけんじやうらくに作らるゝ此ことはりを聞時は我も女にちぎりかまたりにたばかられあすこうくわいのあらん時せんぴをくふとかなふまじけふはゆかでもありなんあすは日がらよからずとうちとけ給ふ事もなく今度もたばかりそんじてうたでぞやまれけるとかやかまたりちから及ばせ給はす春日の宮にさんろう有て一せつたしやうの道理にてころすはとがにて候へども彼入鹿の大臣は天下をかろくするのるならず國をつゐやすげきとたりしかるにかのいるかのしんをやすく〳〵とうたせ給ふものならばならのみやこの其うちにこうぶくじのこんたうとてちやうろくの釋迦(しやか)のざうを作りきやうわうをいのり國家をごこくすべしと大願をおこしすこしまどろみ給ひけるにゆめ共あらずうつゝともなくあふひのさかき葉一ふさなをしのそでに落かゝる又あたりを御らんあればさかきのほそづえ一つありそも此つえと

申は何といへる子細ぞやをよそつえにもたしゆありほとけのつえはまかさつぢやう無明常夜のやみのうきゝよひをしるつえ也ぼさつのつえはしやくぢやうくどくの高きをへうせりごんぐげだつのち(も歟)くぢやうはくたわうのしゆはんぢやうしゆもんのとてるしゆぢやうこそふかきこゝろの有成に今のさつきのほそづえはまうろうのめいあんぢやうめくらのつくつえなり照日月はあきらかにましませどこくう常夜のごとくなればつえにひかれてたどりゆくかるがゆへに名付てめいあんぢやうと申なり我もめくらにあらずとも此つえをつきつゝまうもくのまなびをして敵にこゝろゆるされてうてと思召るゝぞとやがて下向のみちよりもこのつえをつきつゝ此間の病氣に目をやみつぶしたりとてたどりありき給ひけりいるかこのよし御覧じて人をたばかるはかりごと何とかたくませ給ふらんおそろしやとて用心すみな人の申けるはかのかまたりと申はひたちのくに四郎ねぎが子にて

てんぶやじんのものなるが宮中へめしいだされ宮路〔官ノア〕にのぼり〔ヤマリ歟〕天下をけがすとがによつてくらゐにうてヽまうもくになりたるものぞといひければ入鹿げにもと思召ちつとくつろぐふぜいありころは玄もつき下旬なかにかまたりいるかをしやうじゐろりに火ををかせいるかのしんとかまたり御手をあたヽめ給ひしにかまたりの若ぎみのまだいとけなくましますをめのとがいだき參らせてあたりをとをり申時むづからせ給へばなにとてその子はなかするぞこれへ〳〵とおほせければさうなく御手にまいらするとていかゞはしけんさかりの火のなかへとりおとし給ふいるか此由御らんじてまことといつはり爰なるべしなど見おとさで有べきかとさしのびて見給ふかまたりいとゞさとつてあらざるかたに手をあげてもだへこがれ給ふまにつゐにむなしく成給ふかひなき玄がいをとりあげておひざのうへに參らするかまたりいだき取給ひ爰はいづくぞおもこかほかしこはいづくまへうし

ろあし手をさぐりまはしつヽこはいかにあさましやあたりに人はおはせぬかなど取あげてたび給はぬじひとくどせんどたはぼさつのぎやうにあらずやあはれかたわの其中にめくらはことにうらめしや玄かも一子の若なればかくかたわなるうき身こそさきだちぼたいをもとはれんとこそおもひしに眼前みやうくわのなかにいるをたすけぬ事のむざんさよいきてかひなきうき身をもころしてたべや人々と天にあふぎ地にふしてりうていこがれ給ひければみる人も聞人もそでを玄ぼらぬ人ぞなきいるかこのよし御らんじてあらいたはしや誠にまうもくしたまひけるぞやされば我身いつはりあるものが人のまことをうたがへり今より後はうたがひのこヽろをとゞめ玄たしむべしと思召はやうちとけさせ給ひけりかまたりいまはかうとおぼしめしひんぎよさまなり御用意あれとうちへそうもん申さるヽみかどえいらんまし〳〵てかねてより御たくみの事なれば異國よりさんかのひよ

うをわたされたりひらかるべき道理有しよきやうのこらず參内あれとちよくしを立させ給ふしよきやうのこらずさむだい有かまたりばかりふさんありたとへまうもく成とも大事のせんぎ有あひださんだいなくてかなふまじとかさねてちよくしたちければかまたりのしんも參内あるいつよりもほうしひきつくろひようしのときつねのあたへたるひとつのかまをたばさみこはらえうのくるまのあざやかなるにめされやうめいもんにくるまをとゞめざつしきに手をひかれ御前ちかくなりければそれよりかいしやく申ものもなししやくもつてかまたり紫晨殿のきだはしをさぐり〱よぢのほり御床のすのごにしやく取なをしかしこまり御前をうしろになし申あらざるかたをふしおがむこゝろを知たる人々は愛をせんどゝきもをけすこゝろをしらざる人々はゆゝしかりけるしんかなとなげく人もありにけりみかどえいらんましましてあはれいかにかまたり本座にあれとのせんじなりしよきやうたちも殘らず御本座あれと申さるゝ御こし付てかまたりさぐり〱よぢのぼりすでにいるかの座ちかくなる入鹿かたひざをおし立かまたりの御手をとつてをしあげむとのしきだいなりかまたりはいるかをさしあげむとしたまひけりすでにはや御座敷身の毛を立ておぢおそれはやさわがしく成しかばかたきにいろをさとられてあしかりなんと思召三とせが間ふさいだる兩眼をくわつと見ひらき弓手のなをしの下よりもくだんのかまを取出しうちふり給ふと見えしかばいるかのしんの御くびは水もたまらずおちにけるくびもなきむくろがゐたるところをつんと立てかまたりをなをしのけめてのなをしの下よりもこほりのやうなけんをぬき御座へはしりかゝつて御しとねにいだきつき切つついつしこくして北枕にぞふしにけるされ共君はかねてよりあらうみのしやうじのまにうちかくれさせ給へばさらにつゝがもましまさずいるかうたれて其後國土もとみさかへた

みのかまどもゆたかなり

大職冠

それわがてうと申はあまつこやねのみことのあまのいはとををしひらきてる日のひかりもろともにかすがのみやとあらはれてこつかをまほり給ふ也さればにやかすがをはるの日とかく事はなつの日はこくねつす秋の日はみじかく冬の日はさむけしはるの日はのどかにしてよくばんぶつをしやうちやうす四きにことさらすくれめいしつなるによりつゝはるの日とかきたてまつりてかすがと名づけ申なりかのみやのうぢこはふぢはらうちにておはします藤原のその中にたいしよくわんと申はかまたりのしんの御事也はじめはもんしやうせうにて御さありけるがいるかのしんをたいらげたいしよくわんになされさせ給ふそもこのくわんと申は上たいにためしなしさてまつたいにありかたきめてたきくわんどなりけりこれによつて此きみをはふひとうとも申いつもかまをもち給へばかまたりのしんとも申なりかすがのみやにさんろうあつてあまたのくわんをたてさせ給ふ中にもこうぶくじのこんだうをさいしよに御こんりうあるべしとてしやうごん七ほうをちりばめしやこんたうをたてさせ給ふくわほうは天よりあまくたり國のなびき玄たがふ事はふるあめのこくどをうるほふしたゞ草葉の風になびくがごとし

きんだちあまたおはしますちやくによはくわうみやうくわうぐうと申たてまつりてせうむてんわうのきさきにたゝせたまふ二によにあたり給ふをこうはくによとなづけて三こく一のびじんたり玄かるにかのひめぎみのゆうにやさしき御かたちたとへをとるにためしなしかづらのまゆはあをふしてゐんざんににほふ霞にもものこびあるまなさきはせきやうのきりのまにゆみはり月の入ふせいひすいのかんざしはくろうしてながければやなぎのいとをはるかせのけづ

るふぜいにことならずすがたは三十二さうにしなさけはてんかにならびもなしかゝるゆうなる御かたちのいこくまでもきこゑのありて七みかとのそうわうたいそうくわうていはつたへきこしめされてみぬこひにあこがれ雲のうへもかきくもり月のともゝおのづからひかりをうしなひたまひけりしんかけいしやう一とうにそうし申されけるやうはぎよくたいの御ふぜいよのつねならず おがみ申て候なにをかつゝませたまふべきおぼしめさるゝ事のさうばちしんの中へせんじあれとそうし申されたりければみかどゑいらんまし〳〵てあらはづかしやつゝむにたへぬ花のかのもれても人のさとりけるかいまは何をかつゝむべきこれよりとうかいす千里日ほんならのみやこにすむたいしよくわむがをとひめを風のたよりにきくからにみぬおもかげのたちそひてわすれもやらでいかゞせんしんかけいしやううけたまはつてこれは何よりもつてめでたき御しようにて候物かなちよ

くしをたてゝりんげんにてむかひとらせたまひゑいらんあれとのせんぎにてうんかと申つはものをちよくしにたてさせ給ふうんかすでにたいそうのきんさつを給はりす千ばんりのかいろをすぎ日ほんならのみやこにつき大しよくわんのみもとにてゝうさつをさゝぐたいしよくわんは御らんじてわれはこれじちいきとて小こくのわうのしんかとしいかにとしていこくの大わうをさうなくむこにとるべきと一どはちよくしをぢたい有ちよくしたちもどつて此むねをそうもんすたいそういとゞあこがれ二どのちよくしをたてさせ給ふせうむくわうていきこしめしなさけは上下によるべからず小こくのしんかの子なりともそのはゞかりはあるべからずまるへんでうをいたすとてかたじけなくもくわうていのゐんはんをなされければちよくしめんぼくほどこしていそぎたちもどつてへんてうをさゝぐればたいそうおほきにゑいりよあり吉日えらびさう〳〵にむかひぶねをぞこされけ

るこんどのむかひのちよくしにはたちばなのあつそんにうだいしんほうけんなりそもほんてうと申は小こくなりとは申せどもちゑ第一のくになりみれんのいでたちかなふまじけつかうあれとのせんぎにてむねとのたいせん三百そうきさきの御ふねをばれうとうげきしうとなづけてしゆつたんをもつてかたどりへにはあふむのかしらをまなびともにはくじやくのおをたれたりふねのうちにしきをゑきちんたんをまじへくわうようらんけいみがきたて玉のはたは風になびきこがねのかはらは日にひかりぐぜいのふねともいつつべしはつひてんくわん玉をたれみをかざつたるによくはんじによ三百人すぐつてこれはせんちうの御かいしやくのためにとてかざりふねにぞのせられたりけるじちいきよりももろこしまです千ばんりのかいしやうの御なぐさみのそのためにおんがのまひあるべしとてちご百人すぐつてみをかざつてそのせられたりすでにふ月のすゑつかたともづなといておしいだすあまのかはせにあらねどもつまこしふねのほをあげたりかくてなみかぜゑつかにてふねはほんてうつのくにやなんばの浦につきしかばちよくしはならのきやうにつくたいしよくわんはうけとつてひとつはいこくのきこへといひ又一つはほんてうのいくわうのためとおぼしめされさんかいのちんくわを山とつみ五千人の上下をそのとしの八月なかばよりあくるう月はじめまでもてなしたまふ大しよくわんくわほうのほどのめでたさよ卯月もやう／＼すゑになりゆきければ吉日をえらびたまの御こしをたてまつるなんばのうらへ御出ありそれよりもれうとうげきしうにめされじゆんぷうにほをあげゝればふねはほどなくたいたうのみやうしうのみなとにつかせたまふだいりにきこしめされてすはやこくむのぎやうけいよいざ／＼御むかひにまゐらんとてひだりみぎの大臣によくわんところ百くわんけいしやうくわんにんしちやうにいたるまでのこるところはな

かりけり
そも／＼大こくのくにのかずを申に一千四百四十くにこほりのかずを申に九萬八千よぐんてうのかずを申に一萬二千六かじいちのかずを申に一萬二千八百ちやうあんのいちと申はざいけのかずは百萬けん人のかずを申に五十九おく十萬八千人たついちなりちやうあんじやうのみなとより十のみちわかてりけんろけんなんだうとはたつみをさしてゆくみち三十五にふみわけりおくなんだうと申はひつじさるへゆくみち五十九にふみわけりさいけいだうと申はにしをさしてゆくみち二十六にふみわけりかうほくだうと申はきたをさしてゆくみちすゑはたゞふたつとうやうだうはふなぢにてすゑは日ほんにつゞけりかゝるみち／＼よりもみつぎ物をそなへきさきをおがみたてまつるあら有がたやたゞ一めおがみ申人だにもひんくをのがれたちまちにぶつきのいへとなるさればにやくわうていもれうがんに玄たしみなれちかづかせたまへばしよびやうをいやしたちまちにやうじやうの大いにあへるこゝちして御持の間世すなをにたみのかまどもゆたかなり
かくてうちすぎゆくほどにきさきのみやおぼしめすわれはこれ小こくのものとありながら大こくのきさきにそなはりたるそのこうめいを日本にのこしてこそとおぼしめし御ちゝたいしよくわんこうぶくじのこんだうおなじきしやかのれいざうを御こんりうあるべきにかの御だうのせにうにぶつぐほうぐをおくつてまつだいの玄るしともなさばやとおぼしめしそろへ給ふたからにはまづくわげんけいしゆひんせきくわけんけいと申はうちならしての其後にこゑさらになりやますとゝめんとおもふときには九でうのけさをおほふなりしゆひんせきはすゞりかのすゞりのとくゆうは水なくもてすみをすつてこゝろのまゝにつかふなりほんぼんのほけきやうをたらようにてあなんそんじやのあそばしたるしちしやうるりのみづ

がめしやくせんだんのけいだいへいるりのはなたてせんだんのけうそくにくたんじゆのじゆず一れんくわうこのとらのかはこんじきのしゝのかはくわそのかは三まいかゝるたからの其中にしやくせんだんのみそきにて五寸のしやかをつくりたてにくじきの御しやりを御しんにつくりこめながらはう八寸のすいしやうのたうの中におさめてむげほうじゆとなづけてこれを一のてうほうにしをくりふみをべつしにかきいしのはこにをさめておくらせたまひけるとかや此たまはすなはちこうぶくじのほんぞんしやかほとけのみけんにゑりはめ給ふべきなりとかきこそをくり給ひけれさてしもかゝるてうほうをたれかはしゆごしてをくるべききりやうの人をえらめとてつはものどもをめさるゝに大こくのならひにて百人が大しやうを百ことなつけ千人が大しやうを千ことといひ萬人が大しやうを萬ことなづくかうほくだうのすゑうんしうといふ國にまんこしやうぐんうんそうとてだいがう一のつはものありをとらぬほどのつはものを三百人めひそへみやこをたつて大たうのみやうしうのみなとより一よふのふねにさほをさしをひての風にほをあげてす千萬里ををくりけりかいていにすみ給ふ八大りうわうのそうわうたまの日ほんへわたる事をじんつうにてしろしめしもろ〳〵のりうわうたちをあつめおほせられけるはわれらはすでにかいていのりうわうたりといへど五すい三ねつひまもなくをつこうにもあひがたきしやくせんだんのみそきにて五寸のしやかのれいぶつの此なみのうへに御ざあるをいさ〳〵むばひとつてわれらしやうがくなるべしもつともしかるべしとて八大りうわうのなみかせぢしづかならざりきされどもきどくふしぎのほとけのめしたる御ふねなればじやうかいの天人はくもをしのぎぶつほうしゆごのやしやらせつはなみ風をしづめさせたまへばふねにしさいはなくしてみつばの

そやをいるごとくことさらをひてとなりにけりりうわういとゞいかりをなしなみかぜにてとゞめずばおさへてむばひとるべしさあらんときにいこくのものさだめてつよくふせぐべしりうわうのけんぞくにしかるべきものはなししゆらはたけきものなればたのふでみんとのたまひてあしゆらたちをぞたのまれけるかのしゆらの大しやうまけいしゆらもろ〱のけんぞくをひきぐしてこそいでられけれもとよりこのむとうじやうなれば百千にやつかんのけんぞくどもをいぎやういるいに出たゝせほこたうぢやうをとりもたせかたきはすまんぎ候ともいくさはいゑのものなればたまにをひてはむばいとつてまいらせんと申て日ほんとたうとのしほざかひちくらがおきにぢんをとりまんこかふねをまちゐたりこれをばしらでまんこじゆんぷうにほをあげこゝろにまかせふかせゆくに日ごろありともおぼえぬ所にしまひとつうかべり見ればはたあしひるがへしくろがねのたてのあひよりもつるぎやほこのいなびかりたうぢやうのかげどもがうんかのごとく見えければあれはなにといへるしさいぞやいかなる事のあるべきぞとこゝろもとなくおもはれけれどもさあらぬていにふかせゆくにかのしゆらの大しやうまけいしゆら一ぢんにすゝみいで天をひゞかす大をんにてたゞいまこのおきにせきをすゑたるつはものをいかなるものとおもふらんしゆらといへるものなりかいていの龍わうたちを見つがんためしいしゆをいかにとおぼすらん御ふねにましますしやくせんだんのみそきにて五寸のしやかのれいぶつよのたからはほしからずそのすいしやうの玉すみやかにわたされ候へさらずば一人もとをすまじいと申まんこ此よしきくよりもあらこと〱しのいきほひさうや扨はをとにうけ給はるこのあしゆらたちにてましますよなわが大こくのならひにて百人が大しやうを百こと名づけくわん人といふ千人が大しやうをせんことなづけてしゆりやうといひ萬人

が大しやうを萬こと名づけしやうぐんとこれをいふなりかい〴〵しくはなけれども一萬人が大しやうなればまんこしやうぐんうんそうとはそれがしが事にて候もつともりうくうよりの御しよまうにしたがひてすいしやうの玉まいらせたくは候へども七御かどのなかよりもきりやうのしんとえらまれ日ぽんのちよくしを給はるときの日よりもして命をばわがきみのおんのためにたてまつるされぱめいのかろき事は此ぎによる事なればいのちのあらんかぎりはたまにをゐてはとらるまじいぞげにと玉がほしくば萬こをうつてとれやとてから〳〵とぞわらひけるしゆらどもこのよしきくよりもさらば手なみを見せんとててつぢやうらんぱのつるぎをひつさげうんかのごとくせめかゝるまんこ是を見てかなふべきやうあらざればふなぞこにつゝと入てしやうぞくをぞきたりける萬こがその日のしやうぞくにじんつうゆげのうでがねさはんやかんのすねあてしゆうほうれんげのつな

ぬきはきにんにくじひのよろひをくさずりながにきくだしてあのくたら三みやく三ぼだいの五まいかぶとをゐくびにきしのびのををぞしめたりけるがうまりけんの大がたなま十もんじにさすまゝに大たうれんといふつるぎあしをなかにむすんでさげけんみやうれんといふほこもつてふねのへいたにつゝたちあがる三百よ人のつはものどももおもひ〳〵にいで立てはしふねおろしをしうかべすでにかけんとしたりけりたうのいくさのならひにてみたんにかくる事はなしてうしをとつてがくをうつてひようしにあはせかけひくせいぞろへのたいこはらんしよ〳〵しよつてうしかけよとうつたいこはさそう〳〵とうつなりひけよとうつたいこはおんてうこつとうつなりくんでくびをとれとはつるてうこつとうつなりかなはぬときのせんにはしはうてつはうはなしみだれびやうしきりびやうしきうにをよぶときにはちをばたきとながしてかうべをつかにつめよとうつしゆらだう人の

たゝかひはむかしもいまもためしなしそのうへしゆらがたゝかひにくわゑんのあめをふらしあくふうをふきとばせばんじやくをふらする事はゆきのはなのちるごとくつるぎをとばせほこをなげどくのやをはなす事まなごをまくがごとしみをかくさんとおもふときけしの中へわけていりあらはれんとおもふときしゆみにもたけをくらぶべしかゝるゑんづうめいよをまのまへにげんじこゝをせんどとたゝかへばすでにはやたう人こゝろはたけくいさめど此いきほいにをされてのがれがたくぞ見えにけるさるあいだまんこはみかたのぐんぴやうどもをちかづけてとてもかなはぬ物ならばしゆらの大しやう四五人そこのみくづとなしてこそいこくのきこえもゑかるべけれわれとおもはん人々は供をしてたべやとてこんがうかいのまんだらたいざうかいのまんだらりやうかいしよそん一千二百よそんのまんだらをほろにかけてふきそらしふなぞこよりもめいばどもそのかずあまたひきいだすまんこがひさうのめいばにじんつうあしげとなづけて七き八ふんあけ六さいおがみあくまであつうしてをつさまむかふよこはたはりおぐちそうとうつまねのくさりしゝあひほねなみよめのふしあふつくりつけたるごとくなりらんてんのくらをゝきしよつかうのにしきのうはしきにこん〴〵ぬつたるりのあぶみりきしゆのちからがはをばしやう〴〵のちにてそめたりけりおなじきおもがひをかけさせこがねのくつはがんじとかませにしきのたづなゑつてかけ萬こゆらりとうちのつてなみに乑づまぬうくつを四つのあしにかけたればなみのうへをはしる事はへいろをつたふごとくなり三百よ人のつはものどもいづれもむまにのつたれどもみな〳〵うくつかけたればくも井にかりのとぶやうに一むらがりにさつとちらししゆらがぢん〴〵へきつて入しゆらどもこれを見て一ひき二ひきのみならず三百ひきのむまどもがいづれもなみをはしる事はふしぎなりときもをけし

かほどにいさむしゆらども丶にげまなこにぞなつたりける大しやうのうしあしゆらす丶みいで丶いひけるはなふこ丶ざうそかねてより申せし事のちがはぬなふめたれがほのすくやかしおもてかほくせめにすみたていらんあらそひあらがふぎにはにまじき事にて候ぞやてをくだかではいかにとしてかうみやうふかくが見えばこそ一合せんせんとていでたつたりしありさまはあくこうしんゐのよろひをきむみやうけんごのかぶとのををしめとうじやうむざんのほこつゐてしんゐぐちのはたさ丶せ百千にやつかんのけんぞくどもをあひしたがへしきりにときをつくればへきてんやぶれはじやうにおちかいていをうごかしなみをあげこく〳〵さながらどうようして月のひかりもうづもれてひこへにちやう夜となつたりけり此ほどをとにうけたまはるまんこしやうぐんうんそうにげんざむをせんといふま丶に萬こを中にとりこめたり萬こがつはものどもこ丶をせんど丶きつたりけりらごあしゆら三百人からこんらあしゆら五百人手をくだいてぞきつたりける

まんこはめいよの馬のりうみのうへにてのるたづなさうかいふとりうはいふのりうかべたるむまのあしゆんでのものをつくときあふぎやうのたづなきつとひくめてのものをつくときにふぎやうのむちをちやうどうつにぐるものををふときにはせんぎやうあをりのあぶみのむちをきよくしんだいにのつたりけりにしからひがしへうつてとをるときには三百よ人があとに付てこ丶をせんど丶きつたりけりいれかへ〳〵たゝかへばしゆらがいくさはうたれか丶つてかなふつべしとも見えざりけりそふ大しやうのまけいしゆら八めんはつぴをふりたて丶八したのほこをうちふりうちじにこ丶なりとおめきさけんでかけにけりまんこれを見てかなふべきやうあらざればうしほをむすびてうずとししよ天にふかくきせいするしかるべくはくわんぜをんひぐわんたがへ給ふなふゐ

ぐんじんちうねびくわんをんりきしおんしつたいさんちかい今ならではしゆらがおそるゝけまんのはたをたゞさしかけよいやさしかけよとげぢすればけまんらんばう玉のはたをまつさきにさゝせわれをとらじとせめかゝるまんこがつはものかつにのつてをつぷせ〳〵きつたりけりしんりきもつきはてつうりきひぎやうもかなはずしてそこのみくづと成にけりいきのこるしゆらどもすみか〳〵にかくれたりまんこかちどきつくりかけもとの舟にとりのりしゆらたうじんのたゝかひにかちぬや〳〵といさみをなしたうどかうらいはしりすぎ日ほんちかうぞ成にけるさるあひだりうわうたちこれをばさていかゞはせんとせんぎせられけりその中にとつてもなんだりうわうのたまはくそれにんげんのちゑをたばからんにはみめよき女によもしかじこゝをもつてあんずるにりうによをもつてこの玉をたばかつて取べぎなりりうわうのをとひめにこひさいによと申てならびなきびじん

たりしをみめいつくしくかざりたてうつぼぶねにつくりこめなみのうへにをしあぐるこれをばしらでまんこじゆんぷうにほをあげこゝろにまかせてふかせゆくにかいまん〳〵としては又はしやうちゝむたりへきこんのおきぬく風くわう〳〵としては又いづれのほくさうにかこゑやどさんかしらなしおほかはらきどのしまもろみのしまもめいしまさつまのくにゝきかいがしまゆきのもとほりつしまのないことゆゑなくはしりすき九ごくのぢをはゆんでに見てさぬきのくにに聞えたるふさゝきのおきをとをりけりながれき一ぼんうかんであをすいしゆかんとりこれを見て此ほどの大風にてんちくたうどのぢんかうばしふかれてながるゝやらんと人々あやしめたりければ萬こ此よしきくよりもなんのあやしめ事ぞたゞとりあげよとげちをなす御ぢやうにしたがひはしふねおろしとりみるにぢんかうにてはなしあやしやわつて見よとて此きをわつてみるになにとことばにのべがた

きびじん一人おはしますすいしゆかんとりこれを見てをのまさかりをなげすてゝあつとばかり申萬こ此よしみるよりもいかさまにも御身はてんまはじゆんのけゞむにてしやうげをなさんそのためなあやしやいかにといひけれどなにと物をばいはずしてたゞなみだぐみたるばかりなりまんこかさねていひけるはいやなにとたるませたまふともせひにつけておぼつかなしたゞかいていにしづめみくづになせといさみをなせばあらけなきつはもの御てにすがりうみへいれんとすりうによはいとゞあこがれてあらうらめしの人のことばやのにふし山をいへとするこらうやかんのたぐひだにもなさけはありとこそきけみづからと申はけいたんこくの大わうのいつきのひめにてさふらふなるがあるきさきのざんによりうつぼぶねにつくりこめさうは萬里へながさるゝたま〳〵きどくふしぎにじんりんにあひたればさりともとこそおもひしに何のつみにうきかいていにしづむべきぞうら

めしさよとかきくどきみだれがみをつたひてなみだのつゆのこぼるゝはつらぬく王のごとくなりしもをおひたるをみなへししたはしほるゝふせいしせいしがやさうにすてられてひしきものにはそでしぬれほす日もなしとわびけるもいまこそおもひしられたれかつらをかきしまゆずみはちすをふくむくちびるもものこびますあひきやうなみとなみだにうちぬれ物おもふ人のふせいかやうちむつけたる御ありさまよそのみるめもいたはしやさしもかしこき萬ことは申せどもやかてたるまかされげに〳〵それはさぞあるらんそれ〳〵とうせん申せとておなじふねにのするりうわうのわざなればむかふさまにかせふきてふささきのおきに十日ばかりとうりうすさなきだにりよはくはことにものうきにまんこあまりにたへかねて風のたよりにかよひきていねかりそめのうたゝねはなにとなるこのをとたかくよにもすゞめのすみうきにおどろかさんがいたはしさにあふぎの風をいさゝ

つゝ月てうさんにかくれぬればあふぎをあげてこれをたとへ風たいきよにやみぬればきをうごかしてこれををしゆあひみる人をこうるにはふみかよはねどこうるならひきみがこゝろをとりにくるなふいかに〳〵とおどろかすりう女はもとよりねもいらずさりながらうたゝねいりたるふせいにてたぞやゆめみるをりからにうつゝともなきことのはゝゆめのうきよのあだなれば人のことばもたのまれずよのまにかはるあすか川みづぼのゐ口のかりそめにかせにきえぬることのはの末もとをらぬものゆゑにあだなたちてはなにかせんなか〳〵人にははじめよりとはれぬはうらみあらばこそそのうへわれはうまれてより此かたかいもんをあやまたずむかしよりいまにいたるまでおほくのしやうをうけし事あるひは六よく四しやうにうまれ五すい八くのくをうけあるひは三づしやくにおちしだいもつのひにあへりかゝるざいごうをふりいま人げんとうまるゝ事もかいりきによつてなり第一せつしやうかいをたもつてはしんのざうとなるちうたうかいをたもつてかんのざうとなるじやいんかいをたもつてひのざうとなるまうごかいをたもつてはいのざうとなるおんじゆかいをたもつてはじんのざうとこれなるこれに五いんしつせいありいはゆるきうしやうかくちうそうわうひやうばんいちこつこれ又みめうの御のりとしごちのおんぜいこれ也これに五つのたましゐこんしばくいしむなりき此五つのかたちをぐそくするをほとけと申五のかたちかけぬればぐちあんへいのちくるいたりいかにも佛をねがはんずる人はまづ五かいをよくたもつべしひとつもかいをやぶりなばむそくたそくのものとなつてながく佛になるまじおほせはをもくさふらへど第三のかいもんをいかにとしてやぶらんとなみだぐみたるばかりにておもひ入てぞおはしけるまんこもたいたうそだちぶつぽうるふのくになればあら〳〵かたり申あらしゆせうやさてはごしやうの御ためにきん

かいをたもたせたまふかそのかいもんのなかに六はらみつのぎやうありその中にとつてもにんにくはらみつとは人のこゝろをやぶらずいかに五かいをたもつても人のこゝろをやぶりなば佛とさらになりがたしされぱにやほとけには三みやう六つうおはします是はひとへにくわこにしてしよはらみつをぎやうせしくどくいまにあらはれてほとけとなり給へりたとひ一どはたきのみづにごりてすまぬものなりとつゐにはすみてきよからんこひには人のゑなぬかさてもむなしくこひしなば一ねん五百しやうけんねんむりやうごうしやう〳〵せゝのあいだにつきせぬうらみのふかうしてともにじやしんとなるならばほとけとはならずしてじやだうにながくおつべしかいのしなあまたあり五かいをよくたもつては人げんとうまれて五たいをうくるなり十かいをたもつては天にんとうまれて五すいをうくるなり二百五十かいは又しやうもんとうまれてほとけにはなりがたし五百かいをたもつてはゑんがくとこれなるこれもほとけにゑならずぼさつさんしゆ一しんかい此かいをたもつてやがてぼさつとなりつゝほとけとさらに成がたし大せうゑんどんかいこのかいをたもつてはやがてほとけになるなり大せうのかいぎやうは二ねんをつかぬかいなりしんたいはむさうにてかしんもとよりじくうなりしやうじにもつながれずねはんにさらにぢうせずじやしやうすなはちきよければすゝぐべきあかもなしいとふべきぼんなうなしねがひてきたるほとけなしみる一ねんをほうとしきく事をみのりとすこゝをゑらぬをまよひとすゐんやうふたつわがうのみちいもせふうふのながらへこれぶつぽうのみなもとおろかにおもふべからすおんなびきあれやとぞおもふいかに〳〵と申けるりうによはきこしめされてそれはほつしんのみのりとしぶつぽうにをゐてはひさうのところなれどもねがふ事なくしては佛とさらになりがたし上だいはきもじやうこんにしてちゑも大ち

ゑなるべしまつせのいまは下こんにてちゑある人もすくなしむかし上だいの大ちゑの人だにもいゑをいでさいしをすてほうのためになんぎやうすしちた太子はかうゐなるばんせうのくらゐをふりすてわりなくちぎりふかゝりきやしゆたらによをよそに見十九にてしゆつけをとげだんどくせんのほうれいあらゝせん人をしとたのみわしのみやまのれいほうにたききをこりみをこがしせんこくにむすぶあかのみづこほりのひまをくむたびになんだはそでのつらゝとなるよるは又夜もすがらせんにんのゆかのうへにしざせんのとこのふとんとなりかゝる玄んくのこうをつみまさしくしやかとなりたまひ三がいのどくぞんししやうのゑことまし／＼て一大しやうけうをときひろめ給ふなりこゝをもつてあんずるにぼんなうそくぼだいしんしやうじそくねはんとてさいしをたいしさふらひてほとけとやすくなるならばなどやたいししやくそんはわうのくらゐをふりすてゝきさきをい

とひ給ひけんそのほかしようぐわのらかんたちいづれかさいしをたいして佛となりし人やあるさてもほとけの御をとゝなんだたいしと申せしはしづけぼんなうつきずしてによ人をこのみ給ひしをかくてはほとけにならじとて佛はうへんめぐらしてじやうどちこくのありさまをそくしんに見せたてまつりつゐにしゆつけとげさせてなんだびくとぞなし給ふいとゞこのじやぎやうをよしとをしへたまふはまうもくにあしきみちをしゆるふせいなるべしかやうに申せばとてもとより我は佛にてあるなりこくう一しやうとう一體かしらはやくしみゝはなはあみだむねはみろくはらはしやかこしは大日如來也そのほか十はうのしよ佛たちもろ／＼のぼさつとしわがたいにぐそくして十ぱうのこくうにほうによとしておはしますきたりもせずさりもせずいつもたへせずましますをほつしん佛と申形を作りあらはし淨土をたてゝ住家とし給ふをほうしんふつと申なり八相成道したまひて

法をときすなはち衆生をりやくしたまふを應身佛と申也三身をとりわき一しんを忿んずるはさとりのまへの佛なり三じむ一そくとくわんじいづれをも信ずるをさとりのまへと申佛とならんそのためなんぎやうくぎやうせんものいかで善惡みだるべき身はいたづらになさるゝとかなふましとそおほせけるまんこ此よしきくよりもことのほかにはらをたていかにやく〳〵きこしめせほとけをねがふ人はみなたうとちゑとじひしん一つかけてもなりがたしたうといつぱきやうたいちゑといつぱさとりのしんじひといつぱ一さいのしゆじやうをふかくあはれみて人のこころに忿たがへり第一じひのかけてはほとけとさらに成がたじあふしよせんものを申せはこそことはもおほくつくれいまは物を申ましかくてこゝにひれふしおもひじにとなつて此よのちぎりこそあさくともちごくがきちくしやうしゆらにんてんにうまれかはりしにかはり六だう四しやうのその中をくるり〳〵

とをひめぐつてうさもつらさものちのよにおもひ忿らせ申さんとそのゝちはものをいはずりうによはもとよりかやうにめされんためたばかりすまさせたまひ玉をのべたる御てにてまんこがたもとをひかへさせ給ひなふいたふなうらみたまひそよまことにこゝろざしのましまさばみづからがしよまうをかなへてたべくさのまくらのうたゝねのつゆのなさけはゆめばかりちぎりなんまんこあまりのうれしさにかつぱとおきてみをいだきなふこはまことにて御さ候かふたつとなきいのちをもまいらせんと申りうにょはきこしめされていやそれまでもさふらはずげにやらんうけ給はればしやくせんだんのみそきにて五寸のしやかのれいぶつのましますよしをこのふなうちにてうけたまはるそのすいしやうの玉みづからに一夜あづけさせ給へともかくもおほせに忿たがふべしといふまんこ此よしきくよりもあらしやうたいなやじよのしよまうとこそおもひしに此すいしやうのたまに

おゐては中〳〵おもひもよらぬ事なりとふつとおもひきりけるがいや〳〵なにほどの事のあるべきぞとおもひなをしさても〳〵御みは何として御ぞんじ候ひけるぞやさしくも御しよまう候ものかなさらばそつとおがませ申さんとてくろがねじやうをさしゐんばんをもつてふうじたるいしのからうとの中よりもすいしやうの玉をとりいだしりうによのかたへわたすけいせいとかいてはみやこかたぶくとよまれしも今こそおもひ忘られたれかくてしうあひれんぼのわりなきちぎりとみえつるが三日もすぎざるにかきけすやうにうせぬたまはと人に見せければとりてうせぬと申たゞばうぜんとあきれはてこくうにてをこそたんだくすれあらくちおしやりうぐうのみやこよりたばかりけるを忘らずしてとられけることのむねんさよさりながらとかふ申におよばずとてのこるたからをさきとしていそぎみやこにのぼりさま〴〵のほうぶつをとりいだしてたいしよくわんにまいらせあぐる太しよくわんは御らんじてをくりぶみの其中に第一のたからものすいしやうのたまの見えぬはいかにとたづねとひたまふつゝむべきにてあらざればありのまゝに申あぐるかまたりきこしめされてあまりおもへばむねんなるにせめてわれをぐそくしそのうらのありさまを見せよとおほせければうけ給はると申てもとりのふねにのせ申さゝきのおきへをしいだしてこゝなりと申たゝばう〳〵としたるなみのうへを御らんじてむなしくもどり給ふみちすがらおぼしめすさもあれむねんなるものかな三ごく一のてうほうをわがてうのたからとはなさずしていたづらにりうぐうのたからとなしけんくちおしさよよく〳〵物をあんずるにりうぐうかいは六だうにおゐてもちくしやうだうのうち人げんのちゑにははるかにをとるべきものをさあらんときはなにとしてたばかられけんふしぎさよ我又せんげうほうべんしいかにもあんをめぐらしこの玉におゐてはとらふずものとおぼ

しめしみやこにかへり給ひててうせきあんをめぐらし玉をとるべきはかりごとくふうましましけれどもさすがかいちうへだゝつてたしうゑんたうならざればふねのかよひぢあらばこそ志かりとは申せどもしんそくにおゐてをやたいせ太しはかたじけなくもによいの玉をとらんとてゑんしのかひをもつてちよつかいをはかりつくしつゝつゐにはうじゆゑたまへり大ぐはんとしては又つゐにむなしきこともあらじわれもちかひてねがはくはしやうじやうせゞのあひだに此玉にをゐてはとらふずものとおぼしめしみやこのうちを志のび出かたちをやつし給ひ又ふさゝききへくだらるゝかのうらにつきたまひうらのけしきを見たまふにあまどもおほくあつまりてかづきする事おびたゞしくかのあまのなかにとしのよはひはたちばかりに見えみめかたちじんじやうなるが流すいにもつれてあそぶ事たゞへいろをつたふごとくなりかまたり見こめたまひてかのあまのとまやにやどをかり日かずををくらせたまひけるにあまにもいまだつまもなしかまたりたびのひとりねのとこもさびしき事ながらこゝにてひをやかさねけん根かたけれどもひめまつのはやうら風にうちなびきなにはもつらきうらながらそよよしあしといひかたりてふたりあればぞなぐさみぬうきねのとこのかぢまくらなみのよるにもなりぬればとも〳〵なぎさのさよちどりふき志ほりたるうら風にこゑをくらぶるなみのそとすざきのまつにさぎあればこずゑをなみのこゆるにて志ほやのけふり一むすびすゑはかすみにきえにほひゆめぢにたるうたかたのなみのこしふねかすかにてからろのをとのとをければはなになくねのかりがねわれもみやこのこいしさにこゑをくらべてなくばかりうきみながらもまきの戸をあけぬくれぬとすぎゆけば三とせになるはほどもなしかくてなんによのなからへわりなき中のちぎりにやわかぎみいできたまふいまはたがひに何事もうちとけたりしいろ見えたりかま

たり見こめ給ひていまはなにをかつゝむべきわれこ
そみやこにかくれもなき太しよくわんとはわが事な
りこゝろにふかきのぞみのありて此ほどこれにあり
つるぞしかるべくはみづからがしよまうをかなへて
たびてんやあま人うけ給はりなふこはまことにて御
ざさふらふかあらはづかしや四かいに御名かくれも
なきかゝるき人にしたしみ申ける事よひとつはみや
うがつきぬべし又ははくぢよげせんにてはだへはな
みのあらいそたちゐはいそのながれきこゑはあらい
そにくだくるうつせなみのをとかみはやしほにひき
みだすつくものごとくなるみにてみやこのくものう
へ人にをきふしひとつとこにしてまみえぬるこそは
づかしけれしかじたゞみをなげてしなんとこそはく
どきけれかまたりきこしめされてとてもしせんいの
ちをわがためにあたへりうぐうかいへわけいつてた
づぬる玉のあり所を見てかへれとの御ぢやうなりあ
ま人うけたまはつてりうぐうかいとやらんはありと
はきゝていまだ見ずゆきてかへらん事かたかるべし
たとひいかなるおほせなりともいかでかそむき申べ
きとかまたりにいとまをこひ一よふのふねにさほを
さしおきをさしてこぎいでなみまをわけてつゝとい
り一日にもあがらず二日にもあがらず三日四日もは
やすぎて七日にこそなりにけれかまたりおほせける
やうはあらむざむやかのものはうをのゑじきともな
りけるかあやしやいかにおぼつかなしとこゝろをつ
くさせ給ふところによみがへりたるふぜひにてもと
のふねにぞあがりけるいかにとゝはせ給へばしばし
は物を申さずやゝあつて申けるはなふこのどよりり
うぐうかいへゆくみちは事もなゝめの事ならずひと
つのかしらをさきとしてくらきところをまぼつてち
いろのそこへわけいるにうしほのるすいつきぬれば
くれなゐのいろのみづぞあるなをしそこへわけ入に
こがねのはまぢにおちつく五しきのれんげをひふし
あをきくちなうおほくしてれんげのこしをまとへり

なをしさきを見わたすにれいかきよくながれみづの色は五しきにてさうがんたかくそばだてりかわにひとつのはし有七ほうをちりばめ玉のはたほこたてならべかせにまかせてへうようすかのはしをわたるにあしすさまじくきもきえゆめうつゝともわきまへずなをしさきを見わたすにろうもんこゝにさしはさみたまのまくさはかすみのうちこがねのかはらは日にひかりさうてんまでもかゞやけり三ぢうのくわいらうに四ぢうのもんをたてたり一つの大りおはしますりうぐう城これなりけりへいるりのはしらをたてめなうのゆきげたにはりのかべを入にけり四しゆのまんしゆのやうらく玉のすだれをかけならべちやうにもあやをかけつゝとこにゝしきのしとねをしきちんたんをまじへなをらんけいをみがきたつかゝるめでたきうたくにしやかつらりうわうはじめとしわしきつりう王にいたるまでほう口をかざりさせらるゝもろ／＼のせうりうどくりうこがねのよろひ

かぶとをきて四つのもんをまぼれりさてもたづぬる玉をばべちにでんをつくつてたからのはたをたてならべかうをもりはなをつみ二六じちうにばんをおきいねうかつがう中／＼に申にをよばざりけり八人のりうわうじゝこく／＼にしゆごすれば此玉をとらん事こんじやうにてはかなふまじましてみらいでとりがたしおぼしめしきり給へわがきみとこそ申けれかまたりきこしめされてさては玉のありどころをたしかに見をきつるものかなあるとだにもおもひなばとりゑん事はけつぢやうなりりうどももはかりごとをめぐらしたばかつてとりたればわれもたくみをめぐらしたばかつてとるべきなりそれりうじんと申は五すい三ねつひまもなくくるしみおほき御身なり此くるしみをまぬかる事はしらべのをとによもしかじこゝをもつてあんずるにりうわうをたばかるならばまいとくわげんにてたばかるべしこのうみのおもてにごくらくじやうどをまなび玉のはたほこ百ながれた

てならべさて又がくやをさうにかざつて左右のげんくわんをしらべすましそのみぎりにみめよきちごをそろへおんがくをそうするほどならばたゞ天にんににたるべしさあらんときに大そうじやうからりんをうちならししやうてん下かいのりうしんをおどろかしくわんじやうするならばすゝめによつてかみほとけのぞみらいりんましまさばりうぐうのみやこより八大りうわうをさきとしてそこはこのけんぞくどもをひきぐしていでらるべしそのあひだはりうぐうかいにりう一人もあるまじきぞるすのまをうかゞつてそろりと入てぬすみとつてやあたへかしとぞおほせけるあま人うけ給はりあらゆゝしのきみの御たくみやさふらふかゝるせんげうなくしてはいかでかたやすくとりしなんたゞしるすのまなりとも玉のけいごはあるべしたとひむなしくなるともたまにおゐてはしさいなくとりあげきみにまいらすべきがもしもむなしくなるならばまたたゝちうのみどりごのちぶさをはなるゝ事もなしきみならではのちの世をあはれむ人のあるべきかとてなくよりほかの事はなしかまたりきこしめされてこゝろやすくおもへもしもむなしくなるならばけうやうのそのためにならのみやこに大がらんをこんりうすべし又此わかにおいてはいまだようちなりといふともみやこへぐそくし天かの御めにかけふさゝきの大臣とがうしふぢはらのとうりやうたるべきよしをこま〴〵とのたまへばあま人うけ給はつてよろこぶ事はかぎりなしやがてみやこへししやをたてまひぬしをめしくだしあたりのうらのふねをよせしゆたんをもつていろとれるぶたいをこそはりたてけれ十ぢやうのはたほこ百ながれ立ならべかぜにまかせてひるがへせばさうかいはやがてじやうどゝなるひだりみぎのがくやにかざりたてたる大だいこまんまくをあげさせしゆれんに玉のすだれをかけほうざをさうにかざつてうげんちとくの大そうじやうからりんをうちならし上てん下かい

の龍じんをおどろかししやうずれば八大りう王しゆらいしてせんぎまち〳〵なりけりなんせんぶしうふさゝきのうらにしてほうざをかざりちうしやうあるいざやらいりんやうがうなつてちやうもんせんとせんぎしてそこばこのけんぞくどもをひきぐしてこそ出られけれすでにりうじん出たまへばこく中のちごたちみをかざりまうけこゝをせんどゝまひ給ふたゞ天にんのごとくなりさるほどにりうじん五すい三ねつたちまちまぬがれ給ひけるあいだなに事もうちわすれまひにみとれたまひてふさゝきに日をぞをくらるるすはやひまこそよけれとてあまもいでたちをぞかまへける五しきのあやをもつてみをまとひやくわうの玉をひたいにあてかねよきかたなわきばさみぬのづなのはしをこしにつけなみまをわけてつつと入たとひなんしのみなりとも一人うみにいらん事どくのうをりうかめ大じやのおそれもあるべきに申さんやおんなの身とあつて一人うみへいる事はたぐひすくなきこゝろかなす千ばんりのかいろをすぎりうぐうのみやこにつくやくわうの玉にてらされてくらきところはなかりけりことさら見をきたりしことなればまよふべきにてさふらはずりうぐうのほうでんにあがめをくすいしやうの玉おもひのまゝにぬすみとつてこしにつけたるやくそくの布づなをひけばせんちうの人〳〵あはややくそくこゝなりとてゝにつなをくりあぐるあまもいさみてかつげばうへよりいとゞひきにけりいまはかうと見えしところに玉をまもれるせうりう此よしを見つけあとをもとめてをふ事はみつばのそやをいるごとくせんちうの人々あはやほのかにみゆるはくりあげよとげちするにあまのあとにつゐてひとつの大しやをふてくるたけは十ぢやうばかりにてひれにつるぎをはさみたてまなこはたゞせきじつのみつにうつろふごとくなりくれなゐのごとくなるしたのさきをふりたてすきまなくをつかくるあまかなはじとおもひけるあひだかたなをぬい

てふせぎけりせんちうの人々このよしを御らんじてをあがきみをいだきおつつふひつころんつあはや〳〵とおほせけるかまたり御らんじぎよけんをぬきようちのときつねのあたへたる一つのかまにとりそへとんでいらんとし給ふを船中の人々ゆんでめてにすがつてこはいかにとてとゞめけりすでにはやこのつなのこりすくなく見えしとき大じやはしりかゝつてなさけなくもかのあまの二つのあしをちぎればみづのあはときえにけるむなしきゑがいをひきあげしよ人のなかにこれをゝき一どにわつとさけぶかまたり御らんじて玉はとりゑぬものゆゑに二世のきゑんはつきはてぬむねのあひだにきずあり大じやのさけるのみならずとあやしめ御らん有ければ此きずの中よりもすいしやうの玉いでさせ給ふさては大じやのをつかけしときかたなをふると見えしはふせがんためになくしたまをかくさんそのためにわがみをがいしけるかとよせめて此きずをわがみすごしおひたらばかほどに物はおもふまじきをおんなははかなきありさまかなおつとのめいをそむかじとていのちをすつるはかなさよともしびにきゆるよるのむしはつまゆゑそのみをこがすなりふゑによる秋のゑかははかなきちぎりにいのちをうしなふそれはみな〳〵しうあひれんぼのわりなきちぎりとはいひながらかゝるあはれはまれなるべしわれには二世のきゑんなれば又こん世にもあひ見なんなんぢはいまこそかぎりなれわかれのすがたをよく見よとていとけなきわかぎみをゑがいにをしそへたりければしゝたるおやとゑらぬこの此ほどはゝにはなれつゝたまにあふたるうれしさよむなしきちぶさをふくみつゝはゝのむねをたゝくを見て上下ばんみんをしなべてみなみだをぞながしけるあまはむなしくなりたれどかしこきせんげうはうべんによりりうぐうかいへむばはれしむげほうじゆをことゆゑなくむばひかへしたまふことありがたしともなか〳〵に申におよばざりけり此

たまはすなはちおくりぶみにまかせこうぶくじのほ
んぞんしやかほとけのみけんにゑりはめたまひける
とかやしやうじんのれいざうしやくせんだんのみそ
きにて五寸のしやかをつくりにくじきの御しやりを
御しんにつくりこめながら方八寸のすいしやうのた
うの中にをさめむげほうじゆとなづけ三こく一のて
うほうりうわうをしみ給ひしことはりとこそきこえ
けれ

ゆりわか大臣

抑むかし我てうに嵯峨の帝の御とき左大臣きんみつと申てならびなき臣下一人おはします志かれ共きんみつに御代をつぐべき御子なしかくてはいかゞ有べきと大和の國初瀬のてらにまふでしてひぐわんつきせぬ觀音のりしやうをあふぎ三十三度のあゆみをはこび申子をこそ志たまひけれ今にはじめぬくわんおんのねがひの志ほもはやみちてほどなく御子をまうけ給ふ志かも男子にて御座ある夏のなかばのわかなればはなにもよそへてそだてよとてゆりわかどのと名付申いつきかしづきたまひけり七歳にて御はかまめし十三にてうゐかふりめし四位の少將殿と申奉る十七にては程なくうだいじんにならせ給ふ御わらは名によそへてゆりわかだいじんと名付申三條みぶの大納言あきときのきやうのひめぎみをむかへとらせ給ひならびなうこそかしづきけれそもわがてうと申は國とこよりもはじめてさていざなきといざなみは彼國にあまくだりふたはしらの神と成て第一に日をうみ給ふ伊勢の神明にて御座あるそのつぎに月をうむ高野のにうのみやうじん月よみのみここれなりそのつぎにうみをうむつの國に御たちあるひるこの宮ゑびす三郎殿にて　おはします　そのつぎに　神をうむ出雲の國そさのおはおほやしろにておはしますそのほかまつしやのふるいとうはみな此かみのそうしやたりかみのほんぢを佛とはよくも志らざることばかなこんぽんぢのかみこそ佛とならせ給ひつゝ衆生をけどし給ふなれ其はともあらばあれそも我てうと申はよつかいよりもまさしくまわうの國となるべきを志んみづからひらき佛法ごぢの國となす大まわうたけ自在てんにこしをかけ種々のはうべんめぐらしていかにもして我てうをまわうの國となさんとたくむによりて則天下にふしぎおほかりき此度のふしぎに

はむこくのむくりがほうきして四萬ぞうのふねども
におほくのむくりとりのりりやうさうとくわすいと
ぶくもとははるくもかれ四人が大將にてつくしのは
かたにふねをよせせめ入とこそ聞えけれ
國に有あふゆみとりふせぎたゝかひけれどもかれら
がはなつどくの矢はふる春雨のごとくにて四方でつ
ぱうはなちかけ天地をうごかしせめいればかなふべ
きやうあらずしてみな中國さしてひき玄りぞくそも
我てうと申は國はぞくさんへんどにてちいさしと申
せ共玄んだいよりもつたはれる三のたからこれあり
一つにはしんじとて大ろくてんのまわうのをしての
判是あり二つにはないしどころとてあまてるかみの
みかゞみなり三つにはつるぎほうけんとていづもの
くにひがみのやまの大じやのおよりもとりしれいけ
んなり是みな天下のてうほうにて代々の御よに異國
よりきういおこつてあざむけ共神國たるによりつゝ
ばうこくとなす事もなし今もあまてるを御神のいす
ゞ川のすゑつきず伊勢へほうへい奉りないしどころ
の御たくせんによりつゝ討手をつかはすべしとてし
よしやのほうへいりんじの御神樂參らせ給ひけり其
中にとつてもないしどころの御たくせんはかたじけ
なうぞきこえける七つにならせ給ひしをとめがそで
にたくしてずゞふり立て玄んたくあるむくりがむか
ふ日よりして天下のかんたちたかまがはらにしゆゑ
していくさひやうぢやうとり〳〵也玄かりとせは申
せ共むくりが大將りやうさうがしよてうにはなつど
くの矢かすみよしのめされたる神馬のあしにたち此
きずいやさんそのためにかみのいくさをのべられた
りこれによつてきういどもちからを得たりとせあい
るなりされどもかれらがふるまひは風ふかぬまのは
な成べしいそぎこのたびぼんぶのいくさをはやめよ
かみもむかはせ給ふべし凡夫のいくさの大將には左
大臣がちやくなむにゆり大臣をむくべきなり彼人討
手にむくならばしよじんかうりよくまし〳〵てこん

がうのちからをそゆべきなりもしさも有て下向せばくろがねのゆみ矢をもつべきなりをそくて此事あしかりなんいそげ〳〵と玄んたく有てかみはあがらせ(若騰スルカ)たまひけり御ち丶さだいじんは御子のゆりだいじんをめして下かうせよとの御ぢやうなり玄んたくと申りんげん又はぶめい成ければ吉日をえらびみやこいでと風聞す扨玄むたくにまかせてかねの弓矢をもつべしとてかぢの上手をめしよせ一所をきよめかぢやとさだめせい〳〵をつくしてつくり立る弓のながさは八尺五寸まはりは六寸二ふん矢つかは三尺六寸矢かずは三百六十三ねには八つめのかぶらを入弓矢もくろがねにて引てはかへすべからずと人魚のあぶらをさし給ふ國にありあふゆみとりみなたうせんのつはものにて一騎も殘るところはなしすでにえらぶ吉日はこうにん七年かのへさる二月八日にみやこをたつだいじんどの丶御せいは三十萬騎に玄るさる丶そのほか以下のぐんびやうは百萬餘騎とぞ聞えける

みやこを立て其日はやはたの御まへに陣をとりあくればつの國なにはがたこや野におんをとり給ふ去程にわうじやうのちんじゆをはじめ奉りいくわんをぬぎかへよろひをめしせいれいみさいの色のうへにはやしやらしんのかたちをげんじ雲にのりかすみにのり一つは國家をまぼらんため又は氏子をしゆごせん爲我氏子わがうぢ子かたちにかげのそふごとくさきに立てぞまぼらる丶さてかみたちのきによりてうみかぜすゞしく吹ければつくしにぢんどるむくり共このよしを承て今度はまづ〳〵ひけやとて四萬ぞうにとり乘てむくり國へぞひきにけるさてこそ天下もおだやかに國も目出度おはしけれだいじむとのはこのよしそうもん申されたりければ內よりのせんじにはだいじんがこのたびのけしやうにはつくしの國司をとらするぞ急てまかりくだれとのせんじあり大臣殿は九國にすまむものうさにぢたい申されけれどもくにのまぼりの爲なれば在國せではかなふまじとかさ

ねてちよくしたちければちからをよばず御臺所をひきぐしていそぎつくしにくだり豊後のこうに京をたてさながら都にをとらずすませ給ふ又みやこにはくぎやうせんぎまち〳〵たりむくりが大將は四人ときこふるをせめて一人討取てこそいくさにかちたるしるしはあるべけれきういは二さうのものなれば何とか思ふて引つらんこゝろのうちもさとりがたし先かうらいこくへうちごえ七百六十六國をせめしたがへ其大勢をそつしはくさいこくをせめなびけ其後むこくをせめん事何の子細の有べきとせんぎしてつくしへせいをぞこされける大臣殿も吉日をえらび御いでとこそ聞えけれしんざうの大船百よそうえだふね(たかせの誤カ)は數しらずそのほかうら〳〵のれうせんかたせふねそうじてふなかずは八萬ぞうむくりは四萬そうにてむかひけるに一ばいましてぞむかはれける扨大臣殿の御座船をばにしきをもつてかざりたてともへにいはふかみ〳〵六十餘州のれいい神たちゐがき鳥ゐさかきは雲に光りをまじへつゝはうくわたいこをそうすればば身のけもよだつばかりなり卯月半に大臣ははや御座船にめされけり御臺なごりをおしみておなじ船にとのたまへども思ひよらずとの給ひてをしこそとゞめたまひけれさてふねどものともへには五色のへいをはきたてゝ神かぜすゞしくふきければましんまかひもおそるべしむかしのたとへをひくときは神宮(功ノ誤)くわうぐうのしんらをせめさせ給ひし時神あつめしてむかはれしもかくやとおもひしられけりむこくにぢんとるむくりどもてんのいろをきつとみて二さう神通のものなれば討手のむくとさとりをなしちかふよせてはかなふまじしほさかひへうつていでふせいでみんとせんぎして四萬そうのふねどもにおほくのむくり取乘唐と日本のしほざかひちくらがおきにぢんをとる大臣殿の御座ふねをもちくらがおきへをし出すかれもをそれてちかづかずたがひにをそれてよりもせで五十よちやうをへだてつゝ三とせ

の春をぞをくられけるむくりが大將りやうさう一陣にすゝみいで天をひゞかす大音にてわれらがいくさの手立にはきりをふらするならひ有きりふらせよとげちすれば承ると申てきりんこくの大將ふねのへいたにつゝたちあがつてあをきいきをつくいかなるじゆつをかかまへけんきりと成てぞふりにけるはじめはうすくふりけるが次第〳〵にあつく成て月とも日とも見えわかずこくうぢやう夜のごとくにて一日二日にてはれもせで百日百夜ぞふりにけるさしもにたけきゆみとりもきりのまよひにわろびれてゆみのもとすゑをだにも知らざればひくべきやうこそなかりけれこのきりばかりにおかされてさうはのみくづとならん事うかりなんとぞなげきける大臣殿はむねん至極におぼしめしいまならではいつのときかみのちからをあふぐべきとおぼしめされけるあひだうしほをむすび手水とし南無天照皇太神宮そのほか六十餘州の大小の神祇此きりはらしてたび給へときせいを申させたまひければあらありがたやきせいのしるしはや見えて伊勢の國おきふくあらしにきりもほどなくすみよしのまつふくかぜもすゞしくてまよひのやみも白山のゆきよりはやくきえければいつしかかしまかんどりもよろこびのほをぞあげにける大臣殿はなゝめならずに御よろこび有てさらばいくさをはやめんとてはしふねおろさせ給ひ態大ぜいはむやく思ふ子細のあるぞとて十八人を引ぐしてむくりが船へぞかゝられけるりやうさうくわすいこれをみてたうらうがをのといさみつゝほこをとばせつるぎをなげ四はうてつはうはなちかけ天地をうごかしせめけれども大臣ちつとも御さはぎなくむくりが船へぞかゝられけるふねのへさきにつかせたるくろがねのたてのおもてにははむにやしんぎやうくわんおんぎやうこんでいにてかゝれたるそんせうだらにの中よりもしややしややひしややといふもじが三とくふしぎの矢さきと成てむくりがまなこを射つぶいたりぶどう

のしんごんにかんまん二つの文字がつるぎと成てとびかゝりおほくのむくりが首をきる觀音經のめいもんにおふゐきうなんといふもじが金のたてと成てむくりが矢さきをふせげはみかた一騎も手もおはずさてこそ諸人ちからを得ちんこのかつせん手をくだく大臣殿は御らんじていつのれうぞとおほせ有てくろがねのゆみのつるをとすればくものうへ迄ひゞきあり三百六十三すぢの矢を殘りすくなくあそばせばりやうさうはうたれぬくわすいはらきりぬとぶくもとはしる雲かれら二人はいけどられぬそのほか以下のむくりどもあるひはうたれはらを切てうみへ入て死するもあり四萬ぞうにとり乘たるむくり多くうたれてわづか一萬ぞうになるさのみはつみになるべしとて起請を書せたすけをき本地へもどさせ給ひて日本はいくさにかちぬとて八萬ぞうのふなうちのよろこびあふ事かぎりなし大臣殿は此まゝ御歸朝有ならばめでたかるべき事どもをこのあひだのながちんにせいきをつくさせ給ひめのとのべつぷつをめしておほせけるはいづくにか島やあるあがりて身をやすめんとの御諚なりべつぷ兄弟承てはし船おろしたづぬるになみまにひとつの小島有げんかいがしまこれなりみかたのふねをば玄のびやかにあげ參らせ御しきがはをのべいはのかどをまくらにせさせ申すいめんならせ給ふだいちからのくせやらんね入てさうなくおきさせたまはず夜日三日ぞまどろみ給ふ

さる間べつぷ兄弟はとせんさの餘りにもの語りをぞはじめけるをとうとのべつぷのしんが申けるはあらめでたやこの君先度はつくし九箇國をたまはらせたまひうへみぬわしと御座ありしが剩このたびはおほくのむくりをせめほろぼし給へば日本國をたのさまたげなくたまはらせ給はん事のめでたさよ人のくわほうをねがはゞみな此君のやうにと申兄のべつぷが是を聞さればこそとよその事よきみはさやうにとみ給はゞわれら兄弟はもとのまゝにてくちはてむ

事こそ口惜けれいざこの君をうち申しうなくして御あとを知行せんと申をとうとが是をきゝあらもつたいなの御たくみや候此きみの御おんをあめやまにかふぶり人と成し我等ぞかしいにしへの御おんをわすれ申われらが手にかけ申ならば天命いかでのがるべき御ゑあん有べく候べつぷ此よしきくよりも扨はなんぢはきみと一たいよなつゐにこの事もれ聞えなばわれ一人かとがたるべしよそにかたきはなきぞとよわどのとあふて死なんとてかたなのつかに手をかけてとんでかゝらむとすをとうとがこれをみてげにとさやうに思召給はゞたとへば手にかけころし申さずともいきながら此島にすてをき申て歸るならばところはわづかのこじまにて十日ばかりも御いのちの何にながらへ給ふべきあにのべつぷが是をきゝこはおもしろくも申されたるものかなさらばさやうに仕らんとていたはしやきみをばげんかいがしまにすてをき申もとのふねにあがりみかたのぐんびやう共を近付て申けるはいたはしや君はむくりが大しやうりやうさうがはなつ矢を御きせながのひきあはせにうけとめさせ給ひて候をうす手にて御座有しをさりともさりともとたのみをかけし玄るしもなくつゐにむなしくならせたまひて候御ゑがいをもくがにあげ御臺所の御目にかけたくは存候へども諸神をいはひたる御座船にて有ゐひだいたはしながら海底に玄づめ申て候さて有べきにてあらざればふね出せよとげちすればみかたのぐんびやう共はひとへにゆめの心ちして我をと召しとをしいだす一そう二そうのふねならずそうじて船數は八萬そう一度にほをあげ梶をとれば天地もひゞくばかりなりこのこゑどもに大臣は夢うちさまさせ給ひてたれかあるとめさるれど御返事申ものはなしこはいかにとおぼしめしかつぱとおきさせ給ひてあたりを御覽ありければひと一人もなかりけりめしたる船を見給へばほをあげてこそをしいだせさてはべつぷがこゝろがはりを仕るかたとへ

ばべつぷこそこゝろがはりをするともなどや以下のぐんびやうら我をばつれてゆかぬぞやあのふねこちへとのたまへどもみなふねどものをとたかくきゝつけ申者もなしせめて思ひのあまりにやかいしやうに飛びたつていきをばかりにをよがせ給へど船はうき木の物なればかせにまかせてはやかりけりちからをよばず大臣はうかりし島に又もどりそなたばかりを見をくりてあきれてたゝせ給ひけりさうりそくりがいにしへかいがんはたうにすてられしもこれに似たりと申せどもせめて其はふたりにてかたりなぐさむかたもありところはわづかのこじまにて草木も更になかりけりさうてん廣くとをうして月の出べき山もなしあしたの日は海より出又夕日もうみにいる露の身はたのみなや夜ふけて聞もなみのをといはまのやどをたのめてやうちふしかたもぬれまさるまれにもことゝふものとてはなみにながるゝむらがもめなぎさのちどりなく時は猶又ともゝこひしくていとゞあけゆく夜もながく暮行日かげもをそかりけれつゆのいのちをくさの葉にやどすべきやうなけれ共なのりそつみていのちをつぎうき日かずをぞをくらるゝいたはしゝ共なか〳〵に申ばかりもなかりけりさるあひだべつぷきやうだいはつくしのはかたへふねをよせよろこびのきてうと風聞す豐後のこうに御座有御臺所はめづらしききよく共をかまへさせ給ひ御出をそしとまちさせ給ふところにさはなくしてべつぷ兄弟うちつれて先御しよさまさして參るみだいどころは御らんじてあれはいつもの御さきへのあんない申にこそ參りつらんと人してきこしめすべき事ををそくおぼしめし自身みすまじかく御出有てめづらしのきやうだいやなにとて君はをそく見えさせ給ふぞ兄弟しばし御返事申さずかさねていかにとたづねさせ給へばそのとき兄弟涙をながすていをして申さんとすれば涙おつる申さずばしろしめさるまじいたはしや君はむくりが大しやうりやうさうと申ものとをし

ならべくませ給ひ二人ながらかいていにしづませ給ひてそのゝち又も見えさせ給はねばそのおもひのみふかうしていくさにかちたるしるしも候はずさりながら御かたみの物をば給て候と御きせながとかねの弓御劍をそへて參らせあぐるみだいこのよし御覽じてこれはふしぎの事どもかなかたきとくませたまはんにいつのひまに御かたみをとゞめて海にいり給ふべきぞや前後ふかくの事を申ものかなあはれこのもの兄弟を取ておさへてごうもんしめしとはばやとは思へどもはかなきによしやうの御事なればこゝろひとつにくたしつゝれんちうふかくいり給ひかたみのものをめしあつめいだきつかせ給ひてりうていこがれたまひければ御まへなかゐのねうぼうたち一度にわつとなきければよそのたもとに至るまでしぼるばかりにあはれなり

其後べつぷ兄弟打つれて急都へ上りよろこびのき朝と風聞す天下のはんじやうよのきこえ何事かこれにまさるべきと上下さゞめき給ひけりしかりとは申せどもだいじんどの御きてうなきあひだ天下はやみのごとし御父左大臣御母御臺所としたけよはひかたぶきさかりの御子にをくるゝ事はかれ木にえだのなきふぜいつれなきいのちにかへばやとなげき給へどかなはずうちよりのせんじには大臣がきてうするならば日本國をと思ひつれどもうたれぬるうへちからなしたれにけじやうをこなふべきべつぷ兄弟にはつくしの國司をとらするぞいそぎまかりくだりごけにみやつき（本ノマヽ）だいじむがけうやうねんごろにとへとのせんじなりべつぷ承てあんに相違のせんじかな日本國をと思ひてこそ君をばふりすて申たれめづらしからぬつくしへとて又こそくだりけるとかやべつぷみちみちあんじけるはさもあれ我君の御臺所は天下一の美人にてましませばかせのたよりのたまづさを參らせて見んずるにうけひき給はゞしかるべしそむき給ふものならばふしづけ申さんとたまづさねんごろに

こしらへこれはみやこよりの御狀なりとてさゝげければきんじよのねうばうとりつぎみだいどころにまいらせあくるみだいどころはみやこよりの御狀を聞召なか／＼うはがきをだにも御らんじあへずいそぎひらいて見給へばおもひのほかに引かへてべつぷがかたよりのたまづさなりあまりの事のかなしさに二つ三つに引さきかしこへがばとすてさせ給ひいのちあればこそとの給ひて御まぼりがたなをめしよせじがいをせんと玄たまへばめのとのねうばう參り御まぼりがたなをむばいとり申御道理にて御座さふらふ三條みぶの御所よりもかならず御むかひのまいりさふらふべしいのちをまたふしたまへととかくなだめたてまつり返事をせぬ物ならばふとくしんなるべつぷにていかなるしよぞんかたくむべきとめのとの女房がそばよりも返事をする
三とせの後の新枕我にかぎらぬ事なれ共すまふ草も取／＼にひけばやなびくならひ也ゝ見えむ事はやすけれどもきみのむこくへ討手に御むきのときうさのみやにまいり千部の經を書よまむと大願を立七百よぶはかきよみぬいま二百よぶはかきよまずこのしゆくぐわん成就の後はともかくもと書とめてこれは御臺所の御返事なりとてかへす使は急ぎ立歸りべつぷどのにみせ奉るべつぷひらいて見奉りあらめでたや扨はなびかせ給ふべきやしゆくぐわんじやうじゆの間はいか程か有べきと百年をくらす心ちしてあかしくらしまちゐたり其後みだいどころかずのねうばうたちをめしあつめさせたまひ命あればこそかゝる事をもきくなればいまもふち瀬に身をなげ跡かきくれたく思へどもくさのゆかりも玄のぶゆゑそよぐこころもよしあしと君がおもかげのゆめうつゝにたちそふ時は又玄したる人とは見え給はずこひはいのりのものときくあふまでいのちおしき也大臣殿此まゝ御歸朝なきならばわれも身をなげむなしくなるべしさあらん時に御かたみを山野のちりとなさんよりた

つとき人にほうじ跡をもとはせ申さんとて御手なれのびはことわごんしやうひちりきさうしのかずを取あつめたつとき人にほうぜらる四十二疋の名馬どもみな寺々へひかれけり三十二疋の鷹(たか)犬のきづなを切てぞはなされける此程有したかじやうたちをも思ひ思ひにちらされけり十二てうのたかどものあしをといてぞはなされける十二てうのそのなかにみどりまると申ておほたかの有けるがきみのなごりを志たひてやたちさるかたもなかりけり御臺所は御らんじてあれはきみの秘藏のみどりまるなるがつかれにのぞみてあればこそ羽をたれひれふしてはゐたらめあれあれ女房達ゑじきをあたへてはなし給へとおほせければ承るとは申されけれ共いづれもみなねうばうたちの事なればゑかうやうを志らずしてはんをまろめてそなふるこのたかうれしげにて此はんをくはへ雲井はるかにとびあがりはねうちのべてとびけるがだいじんどのゝ御座あるげんかいがしまにとびつきぬ

はんをばとあるいはのうへにをきわが身もそばなるいはおに羽をやすめてぞゐたりけるあらいたはしや大臣殿は只うつせるかげのごとくにて岩間のやどをたちいでみぎはのかたを見給へばこのほど見なれぬたか一もとはをやすめてぞゐたりけりだいじんあやし〳〵思召いそぎ立より見給へばいにしへ手なれしみどりまるなりあまりの事のうれしさにいそぎたちより給ひてさてだいじんが此島に有とは何として知てきたりけるぞげに鳥類はかならず五つゝ有とはこれかとよさてもこれなるはむは御臺所の御わざかや此はんをたばんよりなどことづてぶみはなきぞ豊後にいまだましますかみやこへかへり御のぼりかふちは瀬(せ)となるならひかやいかに〳〵とのたまへばこゝろぐるしきふせいにてなみだばかりぞうかべけるだいじんどのは御うんじていまこれほどの身と成て此はんぶくしてあればとていくほど命のながらへむ鳥類なれ共あの鷹(たか)のみるところこそはづかしけれくはでも

本ノマヽ
あらでとおぼしめすがさもあれみどりまるが萬里のなみを分こしたる心ざしのせつなきにいで〳〵さらばぶくせんとて御手をかけさせ給ひければうれしげにてこのたかが羽をたゝきつめをかき御ひざのまはりにひれふしてものいはぬ計のふぜいなり大臣殿は御覧じてあらたよりもなやみどりまるなんぢがみるごとく木葉だにもなきしまなればおもひのいろをも書やらずいかゞせんとおほせければこのたかうれしげにて又雲井はるかに飛びあがるだいじんどのは御らんじて去ばしもかくて候へかしあらなごりおしのみどりまるやとおほせければさはなくしてみどりまるいづくよりとりて來りけんならのかしは葉ふくみて大臣殿に奉るそぶがここくのたまづさをかりのつばさにことづてしもいまこそ思ひ去られたれわれも思ひはをとらじと御ゆびをくいきり木葉にものをぞあそばしたるたんの落葉なりければたゞ歌一首かき付てをしたゝみまろめてすゞつけにゆひつけてはやかへれよと有しかばうれしげにてこのたかゞ三日三夜と申には豐後の御所にまゐりけりまださうてうの事なるに御臺所はぎやうだうして御座ありしがみどりまるを御らんじてなんぢはこくうをかけるものなればいたらぬところよもあらじ物いふものにてあるならば大臣殿の御ゆく衞をなどかは申さで有べきぞあらうらやましのみどりまるやとおほせければこのたかうれしげにて御前さして參りすゞつけをふりあげゐなをりたりみだいふしぎにおぼしめしくはしく見給へば木葉に血のついたるありいそぎとりあげ見給へばいにしへのんのことづてに一首のうたにかくばかり

とふとりのあとはかりをはたのめきみ
　うはのそらなるかせのたよりを

かやうによませ給ひつゝ扨は此世に大臣はいまだながらへ給ふぞや是こそいのちのある去るしなれかみなきかたにてあれはこそ木葉にものをばあそばした

れすゞりとすみ筆なければこそちにてものをばあそばしたれいざや硯を參らせておぼしめされん事のはをくはしく書せ申さんとてむらさきすゞりゆゑんのすみかみ五かさねにふでまきそへ御臺をはじめ奉りそのかず／＼のねうぼうたちわれをとらじとふみをかくとりあつめたるまきものはよしなきわざとおぼえたり

すゞつけにゆいつけかまへて今度はとくまいれみどりまると仰ければこの鷹うれしげにて又雲井はるかにとびあがりはねうちのべてとびけるがむらさきすずりのならひにてしほのみちひにしたがつて時々をもく成ほどに次第にひかれてさがりけりいまはとおもひとびけるがおほくのふみとかみ共につゆふくみてをもくなりたゞ引にひかれつゝそのまゝうみにひたりてむなしくなるぞむざんなるしまにまします大臣殿鷹だにもいまはかよはねば何になぐさみ給ふべきぞや此たかの又も參らぬはもしもへつふがかたへもきこえころされてもあるやらんとき／＼かよふいきだにもかぎりのいろと見えさせ給ふ猶も命のすてがたくてみるめあをのりとらんとていはまのやどをたちいでみぎはのかたを見給へばなみうちかゝるいはまに鳥の羽すこし見ゆる大臣あやしく思召いそぎとりあげ見給へば此程かよひし御たかなりあまりの事のかなしさにかしこにどうとまろびゐてたかを御ひざのうへにかきのせあらむざんのありさまやとくはしくていを見給へばしづむもひとつことはりなりむらさき硯ゆゑんのすみそのかず／＼のふみ共がしほにみだれて見えわかねどもこゝろしづかに見給へばとり／＼にこそ見えにけれこれやによしやうのはかなきとはかみすみふでだに有ならば是ほどおほきいはほにていかほども物をばかくべきにすゞりをつくるはなにごとぞやさても此たかゞきかいかうらいけいたんごくへもゆかずして又このしまにゆられきて二度ものをおもはするかならず生をうくるもの

こんはくふたつのたましゐ有こんはめいどにをもむけばはくはうき世にあると聞われもいのちのつゞまりていまをかぎりの事なればめいどのみちのしるべをしてつれてゆけやみどりまるわれをば誰にあづけてさてなにとなれと思ふぞとて此鷹にいだきつきりうていこがれ給ひけり

彼大臣の御なげききこみに見せばやとぞ思ふこれは大臣殿ちよにて御なげき豊後のこうに御座ある御臺所の御なげきはなか〳〵申ばかりもなしせめておもひのあまりにや宇佐のみやにまゐり給ひ七日こもり願書を書きてこめさせ給ふきみやうちやうらいそうべうしんもしも大臣殿きてうのゑみをふくませ給ひ二度御目にかゝるならばうさのさうゑひ申べし玉のほうでんみがき立こがねの戸びらをのべひらきるりのかうらんやり渡ししやこうのぎぼうしみがき立みぎりのいさごにこがねをませかべにはしつぼうをちりばめていけにはたまのはしをかけゐがきはくわうえうらんけいしくわいろうとはいでん四つのろうもんたまのまぐさをみがくべしとうりやうのむねをうきやかにしんでんひさしをひろ〴〵といかにもやうらくむすびさげけまんのはたはくもをわけしせんへいはくししこまいぬこがねをもつてみがくべし大塔としゆろうをいかにもたかく雲のうへにひかりをはなつてつくるべししきのさいれいべちりんじはなのみゆきをなすべきなり九本のとりゐをたかく立極樂淨土をまなぶべしごくらくほかに更になし諸神のしよけう淨土とすあゆみを神にはこべばしんたうよりもぶつだうにきする方便これなりそのかいていのいんもいまもたえせずあらたなりほうさいかみにいたせばぼだいのたねをつゝむなりそも〳〵神と申はしんそくたるをすがたとし正直たるをこゝろとすちりのうちにまじはりわれらにゑんを結べりほんぐわんかぎりあるならばわれをばもらし給ふなよ敬白とかきとめてくる〳〵とひんまひてしんせむにとうど置七

日七夜まどろまでしじやうしんにぞいのらる丶まことにかみのちかひにやいきのうらのつりんつりにおきへいでたるがみなみのかせにはなされてきたのおきへながれゆき大臣殿の御座あるげんかいがしまにふきつくる船人どもはしまかげにあがりいとゞ物うきおりふしに大臣殿を見付申けうがるいき物有やとてかなたこなたへにげさつておぢてさうなくちかづかずだいじんどのは御覽じてあらくちおしやさてははやわがすがた人間とは見えざりけるや何と成行事共とて御涙にむせばせ給へばなみだをながす體をみてちつとこ丶ろがうに成てさもあれなんぢはいかやう成いきものぞとゝへば大臣うれしく思召有のまゝにかたらばやとおぼしめすがもしもべつぷがたの者にてもありもやせんと思召いつはりかうぞ仰ける是は一とせゆりわかだいじんどのむこくへうつてに御むきの時ふなぶにさ丶れてむかひたりしものなりしがふしぎに船にのりをくれこのしまにすてられて候大臣殿御歸朝の後ははや三とせになるかとおぼえたりしかるべくは御はうしに我を日本の地につけてたべとおほせければ船人共が是を聞あらふびんの次第やなくしする身にはなにはにつきものうき事のおほひぞや人の上ともおもはねばたすけてさらばもどらふずる風のこ丶ろをしらぬなりわれ人くわほうめでたくばじゆんぷう次第に出すべし有ともうんがつきはてなばなをしもとをくはなさるべし只くわほうをねがへだいじんげにもとおぼしめしうしほをむすび手水とめされあらうらめしやなにとて日本の佛神は我をばすてはて給ふらんくわんおんぎやうのめいもんににうを大海けしこくふうすいこせんぼうひようだらせつたとひせんばうひようだらせつの國におもむくとわれ一人がきねんによつて本地のきしへつけてたべときせい申させ給へばまことに佛神もふびんにおぼしめさる丶か八大龍神なみかぜとめ俄に順風ふき來るほばしらのせみくちに八大りうじん

ことゞくおもてをならべ座せられたり船のへさきには不動明王のがうまのりけんをひつさげてこんがうけんごのさくのなはあくまをよせじとしゆごせらるゝかんまん二の御まなじりともにはかうもくぞうじやうでんびしやなてんたいくわうてんとらせつてん風天水天火天とう雨風なみを志づめんためじやうかいげかいの龍神しやしんのとくをとゞめて夜日三日と申にはつくしのはかたにふきつくる有がたし共中々に申ばかりはなかりけり

ふな人申けるはこれ迄とゞけたるちうに我に志ばらく宮使恩をゝくれといひければ大臣げにもと思召ならはぬわざを志たまひて恩をぞをくらせ給ひけるこくないつうげの事なればべつぷのしんがつたへ聞いきの浦のつり人がけうがる者をひろいきてやしなひをくとつたへきくいそぎつれてまいれと御つかひたつそのころなびかぬくさ木もなしやがてぐしてぞまいりけるべつぷたちいでつくゞみてあらけうがるいきものかな鬼かと見ればをにゝてもなし人かとみれば人にてもなしたゞがきとやらんはこれかとよわれに志ばらくあづけよ都へぐしてのぼりものわらひのたねとなさんとてをしとゞめかどわきのおきなにあづけやがてふちをぞくはへける彼かどわきのおきなと申は年比大臣殿にめしつかへしものなれども御かほにも御あし手にもさながらこけのむし給ひ御せいもちいさくいろも黒く有しにかはる御すがたをいかでかみしり申べきされ共なさけふかきふうふにてあらむざんとやせおとろへたるがきやとてかさねてふちをぞくはへけるある夜のねざめにおほぢかむばに語りけるは扨もせんぞのきみゆりわか大臣殿むこくへうつてに御むき有て又も御歸朝なき間そのおもひのみふかうしてそゞろにとしもよるぞとよさても御臺所はこうのちやうやにましますよなむば此よしを聞よりもされぱこそとよその事よべつぷどのゝみだいにこゝろをかけさせ給ひ御たまづさのありしか

どもさらになびかせたまはねばむねん至極におぼしめし此二三日さきほどにまんなうがいけにふしづけ申けるときく是につけてもうきいのちつれなくひさにながらへかゝる事をもきくやとてせきあへずこそ泣にければだいじんどのはものごしにて聞召あらなにともなの事どもや今迄いのちのおしかりつるも君にやあふと思ふゆへ今はいのちもおしからずあけなば急ぎたづねゆきまんなうがいけに身をなげて二世のちぎりをなさばやと思ひ入てぞおはしける其後おほぢがこゑとして今よりのちはいま／＼しうな泣きそとこそ申ければむばこのよしを聞よりもあはれげによの中に心づよきは男子なりおほぢのやうにつれなしこそしうのわかれもかなしまねわれら日比の御なさけ只今のやうにおもはれていかに云共なかうぞとて又さめ／＼となきゐたりおほぢ此よしきくよりもあらやさしのむばごぜやさほど君を大事におもひ申さば物語をして聞すべしかまへてくちばしきくなおそ

ろしや彼べつぷどのゝうしろ見の忠太はおきながをひにてあるあひだ御臺所のふしづけられさせ給はん事をおほぢかねて承り是をばさていかゞはせんと思ひあいこゑのびとりひめみだいどころと御同年にまかり成を御命にかはるべきかとたづねてあればひめはなゝめによろこふで男子女子にはかぎりさふらふまじ御しうのいのちにかはらむこそさいはいにてさふらへこゑのびやかにと申程におほぢ餘りのうれしさにひめをばみだいどころとがうしまんなうがいけにこゑづめ姫がゐたりしちやうだいにきみをばかくし申たれかたみはこれにあるぞとてかずのかた見を取出しむばが手へこそわたしけれむばはかた見をとりもちてこれはゆめかやうつゝかやさりながら君をたすけ申こそなげきのなかのよろこびなれこゑからとは申せ共人間にかぎらず生をうけぬるたぐひの子をおもはぬはなかりけり三界一のごとくそん釋迦むに如來だにも御子のらごらそんじやをば又みつけうとゝき給ふ

こしつてうは子をかなしみ玄ゆらのなげきにはしをたつるよるのつるは子をかなしみれんりのえだにやどらずやごうこうしをねむりやぐわいのゆかにふすときくいきとしいき生をうけぬるたぐひの子をおもはぬはなきものを我身をわけしひとりひめしうのいのちにかへし事うらみとはさらにおもはねどあらおしのひめやとてりうていこがれ泣ければおほぢもともになくときこそ大臣殿は聞召ともにつれて玄のびねのせきとめがたき御なみだやるかたなふぞ聞えける大臣殿はたゞいまも立出名乗てきかせばやとおぼしめされけれ共玄ばしとおもふしよぞんにて時節をまたせ給ふかくて其年もうちくれあらたま月にもなりければ九國のざいちやうらゆみのとうをはじめべつぷどのをいはふいたはしやたいじんどのには御かほにも御あし手にもさながらこけのむし給へばこけまると名付申矢とりのやくをぞさしにける大臣弓場にたゝせ給ひこゝにて運をきはめばやと思召あそこなる殿の弓立のわるさよこゝなるとのゝをしでのふるうとさん〴〵に悪口し給ふべつぷこのよしきくよりもいつなんぢがゆみを射ならふてさかしらを申ぞもどかしくば一矢射よ大臣殿は聞召射たる事は候はね共あまりに人々のいさせ給へるが見にくきほどに申て候べつぷ聞てさほどなんぢが射ぬ弓をさかしらを仕るぞ是非射じと申さばうさ八幡も御ちけんあれ人手にはかくまじぢきに切てすつべしとくいよとせめかくる大臣殿は聞召仰にて候程に一矢いたくは候へどもひくべきゆみが候はずべつぷ聞てやさしく申ものかなつよきゆみの所望か又よはき弓の所望かおなじくはつよき弓の所望にて候やすきあひだの事とてつくしにきこゆるつよ弓を十ちやうそろへてまいらせあぐる二三ちやうをしかさねはら〳〵と引おつていづれもゆみがよはくしてことをかひたと仰ければべつぷこれをみてきやつはくせものかな其儀にてあるならばだいじんどのゝあそばしたるかねのゆみ

矢を射させよ尤しかるべしとてうさ八まんの御ほうでんにあがめをくかねのゆみ矢を申おろし大臣殿に奉るいつしかもとよりおんたらしかゝりのまつにをしあてゝゆらりとはつてすびきしてかねの御てうつをうちつがひ的には御目をかけられずくわんらくしてゐたりけるべつぷのしんに目をかけて大音あげておほせけるはいかにや九國のざいちやうら我をばたれとか思ふらんいにしへしまにすてられしゆりわかだいじんが今春草ともえ出づる道理にまかせてわれやみん非道にまかせてべつぷやみんいかに／＼と有しかばおほともしよきやう松浦たう一度にはらりとかしこまりきみにしたがひ奉る

べつぷもはしりおりかうさんとて手をあはするいかでかゆるし給ふべきまつらたうに仰付たか手こてにいましめかゝりの松にゆひつけ自身立出たまひてなんぢがしたのさへづりにて我に物をおもはするいんぐわの程を見せんとてくちのうちへ御手を入したをつかんで引ぬいてかしこへがはとなげすてくびをは七日七夜にひきくびにしたまへり上下萬民おしなべてにくまぬものはなかりけりをとうとのべつぷのしんをもおなじごとくざいくわあるべかりしを嶋にて申ことばのなさけを有のまゝ申さらばなんぢをばるさいにせよとていきのうらへぞながされけるそのゝち大臣殿こうのちやうやへうつらせ給ふ御臺このよし聞召ひとへに夢の心ちしてたもとをかほにあてながら涙とともにいで給ふあはぬがさきのなみだはことはりなれば道理なりあふての今のうれしさにことの葉もたえてなかりけり何のつらさにわがなみだおさふるそでにあまるらんみだいどころはうさのみやの御しゆくぐわんのよしを御物語ありければだいじんなゝめに思召たてさせ給ふ御ぐわんは事のかずにてかずならず金銀珠玉をちりばめたまふ其後だいじんどのいきのうらのつり人にたづぬべき子細ありいそぎまいれと御つかひたついかなるうきめにかあふ

べきと只をににかみとるふぜいにてこうのちやうやへ參り庭上にひれふすだいじんどのは御らんじていのちのしうにてあるものがなにとてをそれをばなし給ふぞそれへ〳〵と仰有てひろえん迄めし出されうれしきをもつらきをもなどかはかんぜざるべきと御さかづきに指そへていきとつしま兩國をうら入にくだしたびにけりかどわきのおきなをめし出させ給ひてつくし九ヶ國のそうまんどころたび給ふおきながひめのためにまんなうがいけのあたりに御寺を立給ひ一萬町の寺領をよせさせ給ひけるとかやみどりまるがけうやうにみやこのいぬゐに玄んごじと申みてらをたて給ひけり鷹のためにたてたれば扨こそいまの世までもたかお山と申なれ大臣殿の御ぢやうにはつくしに住居をするならばものうき事もありなんと御臺所を引ぐして都へのぼりたまひけりあじろのこしは十二ちやうはりごしは百餘ちやうおほともしよきやう松浦たう御供を申さるゝきのふ迄はいやしくもこけまるとよばれたまひしがけふはいつしかひきかへて七千餘騎をひきぐしてみやこへのぼりちゝはは對面有てのちやがて參內申さるゝみかどえいらんまし〳〵ていかにめづらしや先度べつぷが上りうたれぬるよし申せしをまことぞと思ひてちよくしをくだす事もなしふしぎのいのちながらへ二度參內する事一眼のかめのたまさかに浮木にあふがごとくとて日のもとの將軍になさせ給ふぞ有がたきさてこそ天下太平國土あんをん壽命ちやうおんなりとかや

志だ

すでに承平は七年にて開元す〔改ノ誤〕天慶九年にかはる天暦十年きのと卯彌生するゑつかたに相馬殿のひめぎみを小山の太郎にとらせらるゝをやまの太郎ゆきしげはのぞむ所望のかなふうへよろこびこれに志かじとてむかへもてなしかしづき申ひとつには仁儀の法といひ草のかげなるさうまどのゝおぼしめされんところも有けうやうふかく申さんとてさむがのせつしやうをきんだむし有時はせんをひき又有ときは經を書こおもひいりてぞとぶらひける志だにましますみだいどころつたへきこしめされてをやまの太郎ゆきしげはあらおとこかとおもひてあればなさけのみ有人にてありおやの事を思ふものだにもよにはまれなる事ぞかしましてや見もせぬ志うとをかやうにふかくとぶらふ事はよくたのもしきこゝろかなとき〴〵こなたへ來れかしさうまどのゝかたみとも見ばやとこそおほせけり

有時みだい所うきしま太夫をめして仰ける はさうまどのゝ末期の時おぼしめしやわすれけんあれほどおほき所領をひめに一所も御ゆづりなしたとへばそれこそなくともむこのおもはんところも有志だのしやうを半分わけ小山にとらするものならば志だがゆゆしきうしろだてよのらうどうを百騎二百騎たのまんよりも一人なりともをやまはまことのせんにたつべきものぞ能はからひさふらへうきしま志ばし御返事を申さずやゝ有て申けるは古殿のあしき御はからひをいかでかおほせをかるべきそれ弓とりの君達にひめ子はつゐに他人となるむこはいしやうちかゝらずうつればかはるよのならひわりなくおぼしめされ候はゞおり〳〵のひきでものにたからはつくさせ給ふとも所領にをゐては一所もゆづらせ給ふべからず人にはどんよくこまうとてよくしんうちにふくめ

ば文たしきなかもうとうなり候よそ〳〵ながらの御對面こそなか〳〵するの世迄もめでたくわたらせ給ふべけれ小山殿に御たいめんもむやくの御事たるべしと以外に申けりみだいこのよし聞召御返事なふてたゝせたまひいつしかさうまにすぎをくれうちの者さへかろしめておかしきものとおもはるゝくわほうのほどのつたなさよなか〳〵うきよに有がほにいへをもちてせんもなし文だどのにいとまごひたつとき山のかくれがにも引こもらばやなんどゝふかくぞうらみ給ひけり文だどのきこしめされてはゝ子(御ノ誤)のうらみは御道理あすはなにともならばなれ一人ましますは母上の御意にもれてはせんなしとて信太の庄を半分わけはゝうへにまいらせらるはゝうへなゝめならずに御よろこび有て小山のたちへをくらせ給ふをやまなゝめによろこふでひとつにはむこいり又はよろこびの所知いりなりければあじろのこしは八ちやうはりごしは十二ちやうそうじてきばは三百騎上下は

なめきゆゝ文くしてしだの館へぞうつられける新殿をつくらせかくて爰に住給ひ今みたち殿とはやり文だの先祖の郎等ども日々に出仕はひまもなしされ共うきしま父子六人はおり〳〵ばかりの出仕にてさながら御前につめざればみだいの御意もうすく成何はに付て昔よりものうき事共おほくしてこゝろのとまる方もなしよの有さまをみるにつけ後の世あやうかりければながらへざらん物ゆへにしやいつまでと思ひきり文だの河内にひきこもりいんきよしてこそゐたりけれ御臺此よしを御覽じてあらおかしのうきしまがふるまひやそもあのうきしま太夫を郎等にもたぬものは世にはすまれぬものか小山殿一人だにもましまさば何の子細の有べきとよろこびをなしてさかへ給ふさりながら浮島太夫はいんきよしぬ文だはいまだようちなり大事のちけんまるかし家につたはるてうほうをうちにをきてはせんなしとて一つものこさずをしまくつてをやまの太郎にあづけらるゝ

さるあひだをやまゝ人なき所にひまこもりくはしくみるにまさかどだい〳〵よりももちつたへたるせうもんども一つものこらずこゝにありなに〳〵志だ玉つくりとうてうは八萬町の所也あらおびたゞしや此内わづか一萬町それがし知行仕るをだによにふそくもなきとぞんずるましてや殘る七萬ちやうひたち下總兩國のおほいのすけとなるならばわれにましたるゆみとりの國に二人ともあるべきかとやがて大よくしんぞ出來るかゝるめでたきてうほうをさうなくあづかる事天のあたへとぞんずれば安堵を申さんそのためにくまのまふでに事よせていそぎくにを打たつて都へぞのぼりける關白天下（殿ノ誤）につき申あんどのむねをそうもん申うちよりのせんじにはさうまが跡を申はなにものぞとのせんじなりさうまが爲には一子で候ゆづりの手つきせうもんども代々の御書共を志せうだゞしく參らせあげ理非をすまひてそうもむす其上國はうとくなりようにも志よしにも當別（別當ノ誤歟）にもたからをあかせていさませたりける君にもこがねれうの馬れうら金銀のたぐひを數をつくしてまいらせあぐる左右の大臣きさきのみやねうばうたち其外の人々にもたからをあかせていさませたりけりたとへばてきはうさうるともなどかはかなはであるべきましてあらそうものはなしむくうしさいに申なしあんど給はりくだりけりさるあひだ小山みち〳〵あんじけるは御臺所と志だどのに少分なりともとらせふちせばやと思ふがいや〳〵かゝるむづかしきものをたすけをくならば後のよのわづらひと成事も有べしたちまちうしなはんと思ふがそれは餘りなさけなし志よせん領内にをかぬ迄とおもひ國もとにもつきしかばさきへ人を立みだいどころと志だどのにひたち下總兩國に安堵はかなふべからずとをきくにの志らぬ里へとく落行給へへんじも國にまし〳〵て我ばしうらみ給ふなとをつたてのつかひをたつるみだい此よしきこしめしひとへにゆめのこゝちしてうつゝとさらに

わきまへずをやまどのが所存にはてんまはじゆんが入かはりたるかやいかなる事にてかくいふぞとくどきなげき給へ共あらけなきつかひにてなさけをすてゝふるまへば浮島太夫が言葉のすゑいまさら思ひしられたりさてあるべきにてあらざればしだどのばかり御ともにてなみだとともにいで給ふけふいでゝ又歸るべきみちだにもわかれといへば物うきにけふ出てのそのゝちに歸らん事もかたかるべしゆくもとまるもをしなべてもろきは今のなみだかなかひの國に聞えたるいたがきの里といふところにたづぬべき人ありて彼さとまではおちゆき給へとたづぬる人も跡なくなるなにはにつけてたよりなしいまはいづくへ行べきぞ名はいたがきと聞きけれどかせもたまらぬあばら屋にやどかりてこそおはしけれめづらしからぬ事なれど頼もしきは人の郎等也さうませんぞの家人さつしま兵衛むらをか五郎をかへの彌次郎たかみの左衛門この人々をさきとして以上十一人御あとをしたひ申いたがきのさとにまいりきみを見付申よろこぶ事はかぎりなし

さて／＼なにとすべきぞと内儀ひやうぢやうとりどりなりそのなかにとつてもさつしま兵衛すゝみいでて申われらがせんぞのさつしまたゆふ主君らうどうのけいやくを申君もわれらも三代也せうへいの合戰はじまつて數度のたゝかひ有しかどもつゐにふかくをかゝざりしにきみもにやくに御座あり我等もわかき者なればをやまどのにいやしまれ無二の本領おふりやうしてをひいだし申むねんさよいつまでかくてこらふべき敵は大せいなれ共ぶせいでうかゞふはかりごと夜討にしくはよもあらじもとより我等あんないしやひまをうかゞひしのび入三方よりも火をかけ一方よりも切ていり千騎萬騎のなか成とも思ふかたきは只一人をやまとくまんず事共は何の子細の有べきとはや手にとるやうにぞたくみける其中にとつてもといたの太郎が申やうこれこそよからぬせんぎな

れ理をもちながらのおらせんぎは思ひもよらぬ事にて候さいさんつがふたさたにてなし一もんだう二もんだう三もんさむたうつがつてまけをはつたるさたをだにもおつそふかんと名付て又取たつるはさたのはうましてや一度もせざらぬさたをてきはうさゝへぬそのさきにむくうに申なをしてたまはるところの安堵なりあれはまさしきたしやう是はさうまの御子とはよにはかくれもましまさずたとへばせうもんあなたに有とぬすみとられししよけんを立などかは取てかへさゞらんと理非をすまひていひければ尤此義に同ずるとて御臺所とゑだどのをぐしてみやこへのぼりけり小山此よし傳へ聞さればおんをみておんをゑらざるはぼくせきのごとしあはれみをたれたすけをきたればかたきとなることそやすからねのぼせ立てはかなふまじ道にてをつつめてうてやとてくつきやうのつはものを七十餘人さしつかはすかゝりけるところにこしまの五郎の申やううつては國にかくれ候まじ理のなければこそうつたれとてやがてほんりやうをばめさるべしされればむかしがいまにいたるまでちからに及ばぬかたきをば佛神申事のたちまちかなふよしをうけてたまはれば信田殿を調伏めされて御覽ぜよと申をやまげにもとおもひやがてかしまへ使者をたてかんぬしいそぎしやうじよせいつよりもきらめいてちうをつくしてもてなす酒も三こんと見えし時しやきん百兩よき馬にくらをひて引立たりかんぬしゑつきのいろ見えそゞろぎいさむふせいあり小山今はかうよとおもひあたりの人を遠々とのけゑだをてうぶくすべきよしをひとへにたのみ奉る神主けしきかはつてこはくちおしき御諚かなわれらはかしまのしやにんとし天長地久御ぐわんゑんまんそくさいえんめいといのるより外別にひしゆつは候はず殊さら人をてうぶくすべき事はなか／＼みやうのちけんもおそろしう候さるべしきほどのかうそうへおほせつけられ候へと立てにげむとすをやまこのよしみ

るよりもゐたるところをづんと立てたもとをとつてひつとゞめさては御へんは敵方と一所の人や一期のふちんみの大事をありのまゝにかたらせてたのまるまじきとはなに事ぞちから及ばず御身をばえこそは返すまじけれとてすでに討むとしたりければせんはうつきてかんぬしもはや事うけをそしたりけるにはかの事にてあるあひだ吉日えらぶまでもなし一所をきよめだんをたてゝ本尊をあんちしたりけりてうぶくのだんの次第はおそろしくぞ見えにける

四面のだんをかざつてほうびようにぼけの花にうもくに山うつ木しやすいの水に井もりのちくゞにはひつぢのいひをもつてせうかうつかううしのほねけまんにあせぼのはなをもりあかにはくじやの水をたれすでにとうみやうにはほそきのあぶら立にけりおんじき日々にかはつて初一日のほんぞん地ざうさつた南むき二日は観音北向三日はせいし東向四日はあみだ西むき五日はぐんだりがうさんぜ六日はすでにこんがうやしや第七日にあたる日はちうぞん不動みやうわうせめにせめてぞいのりけるされども道理なきによつて其しるし見えざればぎやうじや面目うしなひて二七日ぞかぢしける是にもしるし見えざればおんころ〳〵せんたりしやなんまかるしやなむとぞせめにける珠數のをつかれきれければこゝを持てひざをたゝきさんごをもつてむねをたゝきとつこを持てかうべをうちいたゞきをうちやぶりちやうじやうよりもあへけるちをばふどうのりけんにをしぬつて是はてうぶくにんの身の血成とくわんねんして天地をうごかしせめければあまりにつよくせめられて五だいそんはしんどうしてがうさんぜはとつこをふりこんがうやしやはほこをつかふ大いとくののりうしがつのをふつてぞほえにけるちうそむふどうのけんのさきになまちがついて見えしかば一ぽうは成就したりとてたんをやぶらせ給ひけるあらいたはしや信田殿これをは夢にもしろしめされずあけぬくれぬとの

ぼらせ給ひけるほどにをはりの國に聞えたるくろたのしゆくにつかせ給ふされどもてうぶくかぎりあるによつて志だとのにはおひたまはで母御臺におひ給ふ事のいたはしさよされどものぼらでかなはぬ道なやみながらものぼらせ給ふ日數やう〳〵かさ成て（四大或ハ肢體）近江（ノ誤歟）の國に聞えたるばんばの宿につかせ給ふ次第日々におとろへ今はぎやうぶもかなはねば四五日とうりうしたまへり信田殿をはじめ奉り十一人の人々はあとや枕にたちよりていかゞはせんとなげゝどもつゐにはかなはぬ生死の道あしたの露ときえ給ふあはれと云もあまりあり志だどのゝ御なげきたとへをとるにためしなしたれとてもむじやうはのがれがたけれどかゝるあはれはまれなるべし扨あるべきにてあらざればむえんのひとをかたらひてけふりとなすぞあはれなる十一人の人々は一つこゝろに申やう志だとのゝ御〱わほうはこゝまでなりとおほえたりいつまでつきそひ奉り京よゐなかと志んくせん又よの人をたのまばこそ弓矢のきず共なるべけれ是をぼだいのちしきとし世をのがれんと思ふとて志のび〳〵にもとひきりまどろみ給へる信田殿のまくらがみにとりをきていとまごひをも申たけれどさこそは志たはせ給ふべき志のびねなひて出てゆくさすがたねんの御なじみたのみし君にてましませばなごりのおしさはかぎりなしされ共思ひきりつゝわかれ〳〵になりにけり

てん明ければ志だ殿御目をさまさせ給ひてなげきてもかなふべき道かやいそげ〳〵と仰けれ共御返事申ものもなしこはいかにと思召かつばとおきさせたまひてあたりを御らんありければあらなに共なや十一人の人々のたぶさばかりぞのこりける志だどのこのよし御覧してあらなさけなの志わざやとてもうき世をいとはゞなどもろともにつれゆかで年にもたらぬ志だ一人を何となれと思ひてすてゝはいづくへ行けるぞとくどきなげき給へどもその志るしもましまさ

ずはらをきらんとし給ふところへ宿のていしゆ參り事の子細をうかゞひ申にはじめをはりの事共をくはしくかたり給ふていしゆ承てさほどの道理をもちながらなどやみやこへ御のぼりあつて御さたはなきぞと申せどもとも人ひとりもあらばこそうきよにすみてせんもなしふしぎにたづぬるものあらばかく成つるとかたれとてねんぶつ申かたなをぬきすでに志がいと見え給ふていしゆ餘りのいたはしさに御かたなをむばひとり志がいをとまり給へとよみやこまでの御ともをばこのおとこが申べし命をまたふもつかめはほうらいにあふとつたへたりつらき人のはてをばいきてぞ見はて給ふべきしゝては何のきよくあるべきとゝめ申たりければ御志がいはとまりけりあくればていしゆ御ともして都へとてぞのぼりける五條にやどをとりてをきさたの法をば申をしへてていしゆはいとまたまはりてばんばのしゆくにくだりけり志だどのたゞ一人都にとまりたまへども羽ぬけのかものみづなみにうかれてたゝぬふせいしかたわぐるまのなか〳〵にやるかたもなきごとくにてみやこに日をばをくれどもさたするむねもましまさずゐなかのえんをつたへねばなかざいきやうもかなはずしたよりもなふておはしますしよせんかなはぬ事をあんずるは却而ぐちの至なりわれひたちの國へくだりあねごを頼てゐんずるにせいじんの後びんひまをうかゞひ一かたなうらみん事なにの子細のあるべきとおぼしめされけるあひだめづらしからぬ志だへは又こそくたりけるとかやかぎりあらば我こそ人をふちすべけれどもとき世に志たがふならひとてをやまが門のへんにたゝずむであんないとおほせければうちよりもたそとこたふるいやくるしうも候はず志だにて候萬事はたのみたてまつるかうさんなりと仰ければをやまこのよしつたへきゝ尤かうこそあるべけれこなたへといはまほしけれども所存のうちをさつし申たるに便隙をうかゞつてひとかたなうらみんために

きたり給へるこゝろのうちかゝみにかけておぼえたりおさへてうちたけれどもかうにんの法なればたすけ申片時もくにゝまし〳〵てわればしうらみ給ふなとはる〴〵くだるしるしもなくもんよりうちへいれざるはいとゝむねんぞまさりけるあらいたはしや信田殿はる〴〵ちかくめぐりきて父のみはかをいまならではいつの世にかはおがむべきぞとおぼしめしみはかにまいり給ひ草木のはなをつみ手向何とてくわほうつたなき身をひとつはちすのれいたいへむかへとらせたまはずしうき世にのこし給ふ事よとくどきなげき給へ共ばうれいなればどく〳〵つより御こゑ出る事もなしさく〳〵としたるかぜのをとまつにぎんずるばかりなりばう〳〵としたる草のつゆのすそもたもともうちしほれつきせぬものはなみだなり

みはかを下向ありけるところにたちわきばさむだる男のあみがさふか〳〵とひつこうたるがあやしきさまにまいりあふたれなるらんと御覧ずれば是はわかれてとしひさしきうきしま太夫成けりかねてはしらざるすみよしのまつ年なればよろこびを引あはせたるさいはいとてぐして河内に歸り五人の子共をちかづけやこれ〳〵おがみ申せなんぢらがこのあひだこひ奉りたるにしよてんのめぐみあるによつて不慮にまいりあふたるは一がんのかめのたまさかにふぼくにあへるがごとしつゝむとすると此事さだめて披露有べしこの山里と申はむかしよりも能じやうくわくいかにかたきがせむる共たやすく落つべしとおぼえずなんぢらにいくさをさせ時々みてめさまひてとしを送てゐんずるにさだめてみやこへもれ聞え國のみだれはなに事ぞとかみの御つかひ立ならばとりつゝきをつそを立てよろこびのさたをきはむべしいまこそいしのせいなりともつゐには國をおさむべし俄にあはてゝなにかせんだに〳〵みね〳〵尾つゞきどもを人夫をそろへてほりきらせよはしりどうつきいしゆみ爰かしこのつまり〳〵にはりかけさせよかゝり

をたかせかひだてをあげうちとけゐるなどげちすればば子共もなゝめによろこふでとてもきゆべき露の身をきみゆへしなんうれしやとよろこびいさむぞたのもしきつゝむとすれどこの事小山がかたへきこえければをやまおほきにおどろきさてはせんぞの郎等にうきしまがたのまれけるや方々ひきあひつのつてはことの大事たるべしいまだちからのなきさきにはやよせよと申承ると申てをやまがしつしよこすか大將にて一の木戸迄せめいりけれども大勢うたせ引かへすかくてはかなはじとて小山が舍弟三郎ゆきみつ三千餘騎をそつしこゝをせんどゝたゝかひけれどもこれも大ぜいうたせてひつ返すさては自身むかはではかなふべからずとをやまどののむかはれければひたち下總兩國にのこるつはものは一人もなし城にもここをせんどゝたゝかひけれ共げにやよせ手は國がひとつに成て谷をもみねをもへいちに道をつくらせあら手を入かへせめければさのみはいかでこらふべきぞや二三の木戸をも打やぶられつめの城にぞこもりける父の太夫やぐらのうへより大音あげていひけるはいのちをたばふ合戰は事によるぞよにある人をしうにもちすゑをたのむときにこそいのちもおしくおもはるれいつまでいきて何どきに世に出づべしとおぼえず子ともはなきかうちじにをせよ太夫もこゝろやすく腹きらんと云まゝにれいのおほゆみとりいだしはりかへあまたもたせ矢びつ三がうかゝせ追手のやぐらにはしりあがつていかにやねうばうこなたへきてさま引てたべいくさをして見せんと有しときねうばう生年五十六かすをなるかみをからわにあげうすぎぬかづきやぐらにあがりなにとて子どもがいくさはこたれて今までをそひぞとしきりにちからをつけられてはやうきしま太郎かけ出るその日をさいごと思へばれうをぬふたるひたゝれにをにがたすつたるさうのこてびやくたんみがきのすねあてくまのかはのもみたびしろがねにてへりがねわたしあくちだ

かにふんごうだりゑしにぼたんのはいだてしいとひおどしのよろひのみのときとかゞやくをわだがみとつてひつたてくさずりながにざつくと着ゆつて上帯ちやうとゑめ九寸五分のよろひどをしをめてのわきにさひたりけり一尺八寸のうちがたなを十六字にさすまゝに三尺八寸候ひしゑやくどうづくりのたちはひて四十二さひたるたかうすべりをはずだかにとつてつけおなじけの五まいかぶとにくわがたうつてゐくびに着ゑらあやのほろをさつとかけぬりごめのゆみの四人ばりせめのせきづるかけさせ眞中にぎりよこたへ三のへだちのゑらあしげ七き八分あけ六さいにきんぷくりんのくらをかせゆんづゑにすがりゆらりとのり堀のはばたにこまをすゆる兄弟五人のもの共がおもひ〳〵のぐそくを着こゝろ〴〵のむまにのりたがひにたづなをとりちがへかけうかけしとゑたりしをかたきみかたが是をみてあつぱれむしやのいきほひかなとほめぬ人こそなかりけれちゝの太夫やぐらのうへにてつく〴〵みてあれ〳〵ねうばう御らんせよいづれもきりやうはをとらぬよなふあつたら子どもをよにあらせ所領のぬし共なさずして只今ころさんおしさよなはやゑね子どもさはいひながら今をかぎりの事なれば今一度こなたへかほ見せよたれも名殘はおしいぞとさしもにがう成太夫もはら〳〵とぞなきゐたるねうばうがこれを聞から〳〵とうちわらひおひにほれたか太夫殿わかれたいまのなさ事（さご）（誤脱）かな泣てもかなふべき道かやいかにや子どもいくさはさすが大事のものこゝろがうなるばかりにて兵法ゑらでかなはずみかたぶせいに有ながら敵の陣にかゝるにはすきのさきとかり矢かたぎよりんくわくよく兩陣也ぎよりんといへるかけあしは魚のいろこを學べりくわくよくといへるは鶴の羽かひをへうしたりこまのたづねゑ（な欤）らずしてかたきがむぐうにきられぬぞむかふかたきをきるときはけあげのむちをちやうとうつておもて返しのたづなをすくひおがみき

りに切すてよ弓手へかゝるかたきをばすみのたづなきつと引さうかうのむちをうつてきれめてへかゝるかたきをばたちのつかをかへしてさはらのむちをうつてきれおほぢもむばもこれにてみるぞさじきの前のはれいくさぞふかくをかくなよ子共とておかしき事はなけれども子共にちからをつけんがためさまのいたをうちたゝきから〳〵とわらひけりいとゞはやりた子どもが父にも母にもいさめられおごゑをあげてかけいづるまへのかはらはあしひきなりならひつたへしたづなの秘事をしへをかれしむちのきよくむぐうにむまをのりつれかけてはさつと引てみればまへのかはらのいしよりもおほきは死人なりけりとつてかへしてさつとはかけ五六度迄たゝかふたりねうばうこれをみて子どもがいくさのおもしろきにうしろづめしてとらせんとてかづいだきぬをさつとおろせば志だはむしやにいでたつたりくれなゐのはかまの志たにひざよろひにすねあてしもえぎにほひのよろひ着たけなるかみをからわにすへ太夫がこのみしつげのばうを志ばしかせとてうちかたげ追手の木戸をひらかせほりのはゝたにこまをすゑだいをんあげてなのるやういかにや小山の人々我をばたれと思ふらんやうせいゐんより三代つのらいくわうに五代也わたなべたうに大将軍みたのげんじがむすめにみたやしや女とはみづからなりとしつもつて五十六二つとなき命をば志だの御れうに奉るぞ我とおもはん人人かけよ手なみを見せんとかぶとをとつてうち着つつすでにかけむとしたりけりちゝの太夫やぐらのうへにてつく〴〵みて子ともがうなるは道理はゝが心がうなればかほどなるもの共が親子兄弟ふうふと成てよりあひけるこそふしぎなれいかにや御れうこなたへ御出有てをんないくさを御らんぜられ候へためしすくなき事どもとて志だどのをやぐらへしやうじ申くはしく見奉てまさかどの御まなこに人見がふたつまし〳〵て八ヶ國のわうと成て八ヶ年を御た

もち有しがきみにもゆん手の御まなこに人見が二つ
ましませばわうゐまてこそおはせずともかならず坂
東八ヶ國のぬしとはならせ給ふべしたとひわれ〳〵
討死を仕るとも君はいのちをまたふして廿五まで
は御まち候へかならず二十五にて御代にたゝせ給ふ
べしわれらもそれがおもはれて子どもが命もおしけ
れど當座のはぢをかゝじためみなうちじにをつかま
つるおほぢもむばもうちじにせば御身はかたきにい
けどられてをやまがたちにとしを經てよろこびの御
代を待給へいとま申てさらばとてやぐらをゆらりと
んでおりひとまどころへつゝといり一牧ませのおほ
あらめそでをはとひてからとすてどうばかりゆりか
けえびらがたなくびかきがたな三こし迄こそさひた
りけれその日さいごのうちものにとをちがうつたる
なぎなたの四尺八寸有けるがえをば三尺五寸にこし
らへひたえにかねをのべつけたり今ちつと此え長し
てきりかずやをとらんと二しやくばかりにさしさげ
ふつゝとねぢきりなげすてころにまはひてふづてみ
てあつぱれかねやとうちうなづゐてなむさんぼうあ
ぢきなやいか程のものがきられ妻子にものをおもは
せんなふねうばうと語りふうふともにこまのたづね
をかひくつてかたきの陣へかけて入おもてをあはす
るものはなしばうをつかふ兵法に玄ばなぎいしづき
はらひうちこの葉返しみづぐるまむま人きらはずう
ちふする長刀つかふ兵法になみのこしぎりりいなづ
まぎり車返しやるかたなねうばううちとをれば太夫
跡より切めくるさきに子共かくれはちゝはゝあとよ
りかけにけりものによく〳〵たとふればてんぢくし
うのたゝかひにふひやうがさきにかくればわうぎや
うかくぎやうかけあはする金銀けい馬かゝる時太子
もかゝり給ひけり此たゝかひの兵法をしやうぎのば
んにつくれるもこれにはいかでまさるべきうきしま
太夫がなぎなたもこらへで三つにうちおれば大手を
ひろげかけあはせねぢ首つゝぬき人つぶてからたけ

わりにひつさひたりきのふけふとは思へ共三年三月の合戰也此たゝかひは夜日七日うたるゝものはかずしらず子共も五人と申せどもこゝやかしこにをしへだゝりひとりものこらずうたれたり太夫ふうふばかりなりさのみにつみを作ては未來のごうとなるべきなりかちもせざらぬものゆへいざむばごぜと申てたがひにかたなをぬきもつてさしちがへて死たるををしまぬものはなかりけりしだどのこのよし御覽じてうきしまが云言はさる事なれどもふうふ討死するうへ何にいのちをたばふべきと御こしのものをぬきもつて腹をきらんとし給ふところへ小山が郎等參りまさなき君の御じがいや候こなたへ御出候へとていけどり申て出る

小山此由みるよりもさればひとのくわほうの有ときは只何事も心に任せけるぞや去ながらはくちうにかうべをはねむ事も天下の聞えもしかるべからずゆふさりの夜半にうちうみにしづめはやとおもひさうませんぞの家人ちはら太夫におほせつくるちはら信田殿をあづかり申大事の囚人是成べしもしうせや申さんといましめたりし其うへをかさねてつよくいましめおくふかにをしこめてふけゆく夜半をまちたりしはひつじのあゆみのちかづくもかくやとおもひしられたりあねごこのよし聞召あさましやみづから男のこゝろとひとつに成かくなすとやおぼすらんさいごを一目みんとて人しづまつて夜はんにちはらがもとへ御出ありしだどのにつけたりしかす〳〵のなはを御覽じてあらなさけなのしわざやみづからにもつけずしてなどしだどのばかりにつけけるぞや何とてものをばおほせられぬぞうらみのこゝろにてましますか日のもとにあらゆるかみもしろしめせうしろぐらき事はなしとかきくどきのたまへばしだどのきこしめされてうらむるしよぞんはなけれどもなみだにくれてことばなしとてもわが身はくわほうなく今をかぎりの事なればかやうにあこがれ出給ひ小山がかた

へもれ聞えかさねてうきめを見給ふな御歸りあれとありしかばあねごこのよしきこしめしたとひをやまにもれきこえおなじふちにしづむともうらみとは更に思ふまじかやうにならせ給ふ事たゞこれゆへの事なればうきものゝもちてまいりたり御らんぜよとおほせありたもとよりもまきものをとり出してたびにけりしだどのひらいて見給ふに本領のちけんまるかしこれは家につたはるべきてうほうにて候へばもちては何のゑきあらんとりて御歸りましませやあねご此よしきこしめしそれはさる事なれ共たとひ御身しゝたりとゑんまのちやうの出仕の時ぐしやうじんの御まへにてさゝげ給ふものならば道理かぎりあるによりなど一こうのつみとがもうかびのがれで有べきぞたゞ持給へとありし時とりてぞもたせ給ひけるさてしあられぬ浮身にてなごりのたもと引さけてあねごはかへり給ひけりすでにそのよも夜はん斗の事なるに小山よりもつかひをたてしだをばしづめて有けるかとくしづめよと有しかばちはらちからなふして小船一そうこしらへしだどのをのせ奉りしづめのいしをくびにかけさせ申おきをさしてこぎいて爰にてやしづめんかしこにてやしづめ申さむとさすがにしづめかねうかれてしばしたゞよへりあらあぢきなやよのなかにすまじきものはみやづかへわれ奉公の身ならずばかゝるうき目にもあはじむかしはさうまにつかへ申このきみを主君とあふぎしそのときは月共日ともおもはずやさんがくよりもたかきおんしらんよりもかうばしくつきそひまいり申せしがいつぞのほとに引かへてうつればかはるみのうさはわが手にかけてしづめなばくさのかげにてさうまどのさこそにくしとおぼすらんたとへこの事もれ聞えてあすはふちにしづむとも一たんこのきみをおとさばやと思ひてたゞいまこそ御さいごよと念佛をすゝむれば手をあはせたからかにかうしやうねんぶつを申さるゝちはらもともに申こしのかたなをひんぬいてなはさ

ん〳〵に切て捨しづめのいしばかりをばだんぶとうちいれ南無三ぼう今が見はてとたかくいひしづめた體にもてなしたすけてくがにもどりけりこれやしくわうの御ときにゑんたんが古郷に歸りしもかくやと思ひしられてあり

あけなば人めしげしとてよの間にをくりたてまつりあかつきかけてちはらはわが宿にぞ歸りけるすでに其夜もあけゝれば小山よりも使を立ちはら御前にめされしだをばしづめてありけるか中々御尋迄も候はずしづめ申て候小山聞てさほどしづめけるに其時のけむ見をばなどこはぬぞやがて心得たりなんぢはさうませんぞの家人心がはりをしておとしぬるとおぼえたりたゞとはんにはよもおちじあれがうもんしてとへ承ると申てむざんやちはらを取てふせちうにあげ七十餘度のがうもんはめもあてられぬふぜい也五體しむぶんきれそんじ餘りくつうの有ときはしやおちばやとは思へ共まてしばし我こゝろちはらは入日のごとくなり信田殿をたとふれば出る日つぼむはななれやよめいをいふ其かぎりありかはれや命とていかに問ふともおちざりけり氷火のせめをあてゝとふ是にもさらにおちざれば枯木よりもなはをさみげあぐる時にはいきたえておろせばすこしよみがへる七日七夜はひまもなくあらてを入かへせめければさのみはいかでこらふべきあしたのつゆときえにけり小山おほきに腹を立妻子はなきかかさねてとへ承ると申て二人のわかはゝもろともに庭上にひつすゆるをやまたちいでつく〳〵みてかほどくわほうめでたき身が世になきしだに思ひかへおとしぬるこそむねんなれ男が云し事をしらぬ事はよもあらじいつはるけしきのあるならばやがて男がごとくになすべしとおほきにいかり給へばねうばううれへたるいろもなくたとへばみぢんになされ申ともしらぬ事をは申まじ有し夜のあかつきしだとのをしづめ申に出るとて小船一そうこしらへしだどのをのせまいらせしづめの

石を首にかけさせ申おきをさしてこぎ出るみづから
あまりのいたはしさにはまにくだり事のやうを聞さ
ふらへば信田殿の御こゑとしてかうしやうに念佛を
めされちはらもともに申だんぶとものゝなつてより
のちはをともせずとてもかやうにうしなはれ申身を
信田殿の御いのちにかはり申一まづおとし申さぬぞ
や是いつはりとおぼさはあたりの浦人をめして御尋
あれと申さらばめせとてあまたをめされくはしくと
はせたまへばその夜のおきのていなに事ありとはぞ
んせねどもみなこの體と申扱はしづめけるものをふ
びんにちはらをとひけると妻子を返し給ふあらいた
はしや玄だどのなをもみやこのこひしくてあけぬく
れぬとのぼらせ給ひけるほどにあふみの國に聞えた
る大津のうらにづかせ給ふかどなみこそおほきにう
んのきはめのかなしさはひとをうとへてうるつじの
藤太が小家に宿かりそめに御とゞまり有藤太は信田殿
を見參らせかどへてうらむそのためよもすがらこし
らへたり御年もにやくに御座あるがいづくよりいづ
かたへ御とをりあるぞと問ければ玄だとのきこしめ
されてこれは坂東がたのものにて候がみやこへのぼ
り候藤太承て步行の御ありきのいたはしさよみやこ
までの御供をばこのおとこが申さんとてやせたる馬
に鞍をきしだどのをのせ奉り我身もともにいでに
ける不案内の御事なれば御やどをもそれがしがひけ
い申さんと五條に行てばくらう座の人あきびとのそ
うりやうわう三郎にいひかたりこま一ぴきにかへと
つて藤太は國に下るわう三郎がもとよりも鳥羽のふ
なとへうるそれよりも津の國さかひのはまへぞうつ
たりける四國西國にうりまはりのちにはほくろくだ
うのなだをうられさせ給ふわかさのをばま越前のつ
るがみくにのみなと加賀の國に聞えたるみやのこし
へぞうつたりけるものゝあはれはおほけれ共みやの
こしにてとゞめたりおりふしはるの事なるに玄づが
玄わざをしへて田をうてとせめければくわといへ

るものを持をだのはらへは出給へどうつべきやうはさらになしかのさむくわうのいにしへは玄んわうくわうていかたじけなくみづからすきをになひて其一けいの田をかへし五こくのたねをまきしかば玄んわうかんわう目出度玄しやくのほたけも長かりきそれはけんわうせいしゆにてくにをはごくむ道理ありかのしだとの丶のうげうは涙の種をまくやらん野にも山にもたつたひめさほのはやしにひれふしてなくよりほかのことはなし

是をみる人々がいたづらものと申てとなりの里りんごくにかはんといへるものはなしもてあつかふて玄だどのををひいだし奉るあはれとよそにしらくものたちいでぬればあまのはら身はなかぞらに成かみのとゞろ／＼とあゆめどもとまりさだめぬうかれどりなくねに人もおどろきあけぬる門をすぎのした道あるかたにまよひゆく身はうへ人となるまゝたもとにものをこつ（本ノマヽ）じきくさばにかゝる命をばつゆのやどにやをきぬらんさだむるかたのなきまゝあしにまかせてゆくほどに能登の國にきこえたるをやのみなとにつき給ふおりふしをやのみなとへは夜たうがよせて來るとてもん／＼かどをきりふさぎ用心きびしかりけりかゝるとよそにて玄ろしめされずもん／＼門にたゝずんで世になしものゝうかれたるに玄ひましませと有しかばおりふしよはひかたぶきたるせう一人來てあらおそろしやこのほど待かくるぬす人のけこ見こそきたつたれあれよつてうちころせわかものどもと下知をなすおりふしありあふわかものどもがろかひのをれやすのえを引さげ／＼たちいでさやうなるしれものはいづくのほどに候とて玄だどの見つけ申まづ一つえづゝぞうつたりける太夫かさねて云けるは一つえづゝはあそび事かあれといのものをたすけをきものをいはすれば後には人がそんじ候ぞたゞひたうちにうつてうちころせ若ものどもとげちをなすいとゞはやりたるわかものがいたはしや玄だどの

をさん〴〵にうちふせ申今ははや御命もたすかりがたく見えさせ給ふところにかのうらのとねのねうばうなさけのみ有者にて志だどのを見まいらせあらいたはしやこの人はよにすてらるゝ人の子のおやのゆくゑをたづねかねかゝる遠國はたう迄來りたりとおぼゆるなりまづひらこの人われにたべと申若者どもこれをきゝねうばうのおほせなりとも承る事も候べし又うけたまはらぬ事も候べしこの事にをひてはおもひもよらぬ事なりとひたうちにぞ打にけるねうばうあまりかなしさにさけをもらふぞたすけよさけとだにもきゝければおとなしきからわらはゞ迄つえをすてゝぞつきにける

かくてわかいゑにいれ申いつきかしづきたてまつる有しほどはなけれどもかたちもすこしなをらせ給ふかゝりけるところにはるかおくむつの國そとのはまのしほあき人かのうらへふねをのるとひはとねのものとなればしだどのを見參らせあの人我にたべとておさへて志ほにかへとつてふねにうちのせ申十八日と申にははるかおくむつの國そとのはまにぞあがりけるかの太夫はなさけもさらになきものにて一兩日もすぎさるにこのうらにすむものは志ほをやかではかなはぬぞ志ほやきたまへまれ人と志ほ木をこらせて志ほがまの火をたかするこそものうけれいとゞ志ほたれ衣きてしたもえくゆるかまの火をたくこそは物うかりけれつらき中にもなぐさむはしほやのけふり一むすびすゑはかすみにきえにほひてゆく衛のほども志らなみのよる〳〵そでを志ぼらしてひたちのくにのこひしさはいとゞ日々にぞまさりけるあきも半の事なるにかのうらの領主しほぢのしやうじどのといつし人はま出して夜もすがら月をながめてあそばれしが志だどの御覧じてこゝに志ほやくわつぱのめのうちのけだかさよ見いれなどのじんじやうさよいかさまにも太夫はよに有人をかどへきたりたるとおぼゆるなり我此としになるまで子をもたず我子にせ

んとの給ひておさへてばふてとりたまひちやくそんとがうしいつきかしづきたまひけりかくてげんぶくせさせ申しほぢの小太郎殿と申てかみからしもにいたるまでかつがうせぬはなかりけりかゝりしときのおりふしこくし國にくだり給ひたがのこうにつかせ給ふざいちやう御家人はせあつまつてひばん當番をつとむる國司よりの御ぢやうにはわれひたちの國に有しときさうまとないきがちんじによつて兩方たえて年ひさしくそれも座敷のろんさかづきのけんぱいさだめのなかつしゆへ也われ在國のあひだに座敷のやうをさだめんとて左はかつまの太夫右はしばたのしやうじそうじてざしきは十三ながれ人數かれこれ三百餘人くもりたる者をつけざればはれがましさはかぎりなしなかにもしほぢのしやうじどのわが身老體なるあひだ養子のちやくそん小太郎殿をいだし申さるゝならびのざいちやうこれをみてかなふまじとざさゝへける國司よりの御ぢやうには何とてしほぢは自身參らぬぞ上をかろくするゆへが其義ならばしほぢか本領こと／＼くめしあぐべきとの御諚也しだどのきこしめされて名のらばやとおぼしめすがいやいや國ひろきところにてもしをやまがないゑん一ぞくのありもやせんと思召名乘かねてましますがいまなのらずば養子の父母のはぢといひ又ざしきをたゝんもむねんなり名のらばやとおぼしめしけいづをとり出して國司の前にさゝげらるこくしこのよし御らんじなに／＼かつらはらの親王よりも六代のこうゐんまさかどの御孫さうまの實子しだの小太郎なにがしとうぢふみけんしよなるあひだ五十四ぐんが其うちに是にましたるぞくしやうなしと國司のたい座ゆるさせ申なをり給ふぞめでたけれすでに御さかもり七日とぞ聞えけるざいちやう御番人いとまを申てやかた／＼に歸らるゝしだどのもおなじくいとまをかうてかへらるゝ

國司御らんじていたはしゝ／＼奧州の國司を三とせ

かゐひだ奉る其まにこくしは都へのぼつて安堵を申て參らせんとてこくし都へのぼらるゝ去程に信田殿きのふまではしほをやき浮身をこがし給ひしがけふはいつしか引かへて五十四ぐんの主と成國をたいらげ給ひけるひたちの國に候ひしをやまの太郎ゆきし（本ノマヽ）げはゑいぐわさかへてきはもなし七月七日ひとてたからものを取いだし七夕にかすならひなり小山殿も金銀れうらかずのたからを取いだしてたなばたにかされけるなかにしだたまつくりちけむまるかじをいかにみれ共なしこれはよの人のしるべからず御身のぬすみ取てたのたからとなしたるとおぼゆるなりかかるうしろぐらき人をたのみて何のゑきあらんはやはや御出候へとていたはしやひめ君をひいだし申あらいたはしやひめぎみもとよりもかく有べしとごしたればはじめてなげくに及ばずとてめのとばかりを引ぐしてをやまのたちをぞいでられけるあさましやみづからたれを頼ていづくへとて かまよふ べきぞや信田殿が身をいれしうちうみにしづまんとてはまぢへくだらせ給ひけりかゝりける處にちはらがごけまいりなふいたふな御なげきたまひそよ信田殿の御命には男のちはらがかはり申てさふらふぞやかずかずのふみ共をとゞめをかせ給へ共ひまがなくして參らせずさふらふこれ〳〵御覽さふらへとて有しむかしのふみ共をあねごの御手にまいらせあぐるあねごこのよし御覽じてあらうれしやしだはいまだうきよにありけるぞやかなはぬ迄もさたのためみやこへとてぞのぼりつらんいざやめのと是よりもみやこへ上り尋むさりながらかくて都へのぼりなばよしなきあだなや立たんとあたりのたつとき寺によりたけとひとしき御ぐしをそりこぼし給ひけりめのともやがておなじすがたにさまをかへこきすみぞめに身をやつしみやこへのぼりたまひけり名所きうせきをながめこえさせ給ひつゝ三十五日と申にみやこにつかせ給ひけりにしひがしの京をたづねぬれど其ゆきがた

もなかりけり清水にまいり南無大悲観世音よろづのほとけのぐわんよりもせんじゆのちかひはたのもしや今一度しだどのにあはせてたばせ給へやときせいふかくぞ申さるゝ熊野のたうを詣(れんな脱スルカ)と南海道にさしかかりてんわうじすみよしねごろこがはをうちすぎてくま野に參りて三つのやまこゝろしづかにふしおがみたづね給へどゆきがたなし四國九國をたづねむとだうしやぶねにびんせむこうて四國に渡りあはぢしまもこゝろしづかにたづねけりつくしくだりのみちすがら長門のこうあかまがせきあしやのやまがはかたの津しかの島迄たづぬれどそのゆきがたもなかりけりなごやを出てせとをゆくひらとのおほしままつらみろくじしづのさとくわんきごたうじまいはうが島もちかく成ゆきのもとおりとをるにぞきゆるばかりのわがこゝろ日向の國にとさの島きのさとにあはしま豐後ぶせんをさしすぎて肥後の國にきこえたるおとりたうの山をこえこひはしうしのみつしあそのたけをこえすぎて筑前の國にいきの里遠國ははうにいたるまで名所はつきぬ物也しだの小太郎なにがしととへどこたふるものはなしつくしのうちにくもりなしいざやめのと是よりもちうごくさしてたづねむとすはうの國にさしかゝりおほちのこほりあさくらやごくらくいちときくからに立とゞまりて尋けりはりまの國にいりぬればあかまつ河原ゆいのしゆくたかたのわたりやのゝやど名所きうせきをながめこえさせ給ひてさかひのまつに出させ給ふさうまのもりからすざき人まつがをかを尋ぬれどそのゆきがたもなかりけりすまの浦はすのいけと聞からにおなじはちすにのらばやな兵庫につけばみなと川すゝめの松原うちでのしゆくこや野いたみ手嶋のやどおほたのまちやあくたがはかうないやまざききつねがは舟に乘らねどくがなはて月のやどるかかつら川うき世はくるまのわのごとくめぐりきぬればこゝのえのはなのみやこにつき給ふこゝのえの内にくもりなしいざ

やめのとこれよりももとの道にさしかゝりくだらんとの給ひてわれをばたれかまつざかやあふさかの關の清水にかげ見えていまやひくらん望月のこまのあしをと聞なるゝ大津うちでのはまよりも志がからさきを見わたせばかたゞのうらに引あみのめごとにもろきなみだかな勢多のからはしはる〴〵とたづぬる人のおもかげをうつしもやせんかゞみやまゑちの河瀬のなみちりてすそは露そではなみたのひまよりもすりばりやまをこえゆけばあれてなか〳〵やさしきはふはのせきやのいたまもる月見たるゐのしゆくすぎてうゑしさなへのくろ田こそ秋はなるみとうちながめ參河の國のやつはしのくもでに物や思ふらんふじをいづくととをたうみこひを駿河の身のゆく衛まつよひの月も雲間を伊豆のくにしだにはいつか奥州まで三とせ三月がそのあひだ志だの小太郎なにがしととへどこたふる者はなしそのとしの文月半にたがのこうにつかせ給ふころは十四日うらぼんとて上下ばんみんをしなべて慈悲をほどこす日成けり志だどのも父母のけうやうのそのためにつじ〴〵にふだをたてせぎやうをひかせ給ひしがびくにたちを御覽じてあれ〳〵しやうじ申せとてぢぶつだうにうつし申能にいたはりたてまつるあらいたはしやひめぎみぢぶつだうにうつらせ給ひ夜もすがら御經をあそばせしが曉方になりしかばゑかうのかねうちならし御こゑたかくゑかうありこの御きやうのくりきによつて一切の衆生こと〴〵くむじやうぼだいとせうすべしことにはちゝさうまどの母御臺志だどの成佛とくだつなり給へ其中に志だどのいまだうき世にあるならば御此經の十羅せつによのくりきによつてきたうとならせたまひて信田の小太郎に今一度あはせてたび給へなむさんぼう〳〵と衣のそでをかほにあてもろきは今のなみだかな信田殿もちゝはゝのけうやうのそのためにぢぶつだうに御座ありて夜もすがら御經をあそばせしがゑかうのこゑをきこしめし夢うつゝ

共わきまへずあひのしやうじをさつとあけくはしく見奉りしにあねごのなりゆくすがたなりする〳〵とはしりより御たもとにすがりつき是こそ志だの小太郎にて候へとてきえいるやうになき給ふあねごもこの事をうつゝと更にわきまへず扨いかに小太郎かこれこそいにしへのせんじゆのひめでさふらふなれうきときは道理なりうれしき今のなにとてかさのみ涙のこほるらんとむつまじげなる御ありさまよそのたもともぬれぬべし

志だどのおほせけるやうはかほどめでたきよのなかに何をかさして御なげき候ぞいさませ給へあね御前われひたちのくにへうちこへあまりうかりし小山がかうべをはね此あひだのむねんをさんせんとこそおほせけれ尤志かるべしとて五十四ぐんがそのうちよりもよかりけるつはものを三千餘騎そろへらるゝをやまこのよしつたへ聞國にこらへがたふしてにげてみやこへのぼりけるさるあひだこくしは志だどのゝ安堵を申給て國にくだり給ひしがみちにてをやま参りあひこまよりもとんでおりまつぴらこのたびのいのちを御たすけあれと申やすきあひだの事とてたばかりよせてからめとり京づとゝ名付志だどのにたび給ふ志だどのなゝめならずに御よろこび有てむさしのくにつまごひが野邊にひきすへくびうちおとしたまひてあしたの露ときえけるをにくまぬものはなかりけりやがて志だどの上洛ましまして天下の御目にかゝらるゝみかどえいらんまし〳〵て坂東八ヶ國を志だどのにたび給ふこのついでにあふみのくにとかや大津のうらを申うけつしの藤太をからめ取十日にとをのつめはなし廿日にはたちのゆびをもひでくびをひき首に志たまへり只人はなさけあれなさけは人のためならずつゐにはわが身にむくふとにくまぬものはなかりけりばんばのしゆくへうちこえまし〳〵てはる堂と小太郎もえ出て候ぞうれしきをもつらきをもなどかはかんせざるべきとをしまの庄三百町ば

んばのていにたび給ふひたちの國へ下向有て信田の河内にて討死したりしうきしま太夫が子孫はないかと問給ふ太夫が孫は三人めし出し候ひて三千町をたびにけりちはらが後家わかもろともにまいればなゝめならずにおぼしめし坂東八ヶ國のさうまんどころを若どもにたび給ふやがて御身は信田の河原に御所を立て御とし廿五にて御代にたゝせ給ひて日(非ノ誤)ばんたうばんつとめさせゑいぐわにさかへ給ひけりあねごのびくにおほかたとのと申ていつきかしづきたまひしすゑはんじやうときこえけり

滿仲

それひそかにおもむみるにおほつてほかなきは天の道なりのせてすつる事なきは地のとくなりはじめきよくしてすめる物はのぼつて天と成をもくしてにごれるものはくだつて地となるちうわうはにんたり是よりしてくんしのみちをこなはるゝものかをよそ仁王五十六代のみかどをば清和天皇と申奉る王子六人おはしますやうせいゐんさだひでの親王さだもとのしんわう彼さだもとのしんわうはびはひきにておはしますかつらの里にすみ給へばかつらの親王とも申さだひらのしんわうさだよしのしんわうさだずみの親王とて兄弟六人おはします中にも第六さだすみの親王の御子をば六そんわうと申六そんわうの御子はたゞのまんぢうと申奉る其頃みなもとのしやうを初て給はらせ給ひ上野守と申奉てゆみ矢をとつて天下にならぶ人なかりけり嫡子津のかみ頼くわう二男大和守よりのぶ三男たゞのほうげむとてひえいざんはちふゐんをはじめてたてられし人なりすこぶるてうかの御まほりとしてうてきをほろぼし國をしたがへ給ふ事はふる雨のこくどをうるほふすに似たりしやうりのくすりを以そせうの病をいやしけんはうのともし火をかゝげしうたんの暗をてらすしかる間人うやまふ事かぎりなし爰にまんぢうおぼしめしたち給ふ事ありそれしやうじのならひうゐてんべんのことはりはみなゆめまぼろしの世の中也此しやばのぢやうみやうをおもへばわづかに六十年下天のけうらうせう不定の夢なりゆく末とても夢ならざらんやせうじゆせんねんのみどりもしもの後の夢とつゐにさむべしいかにいはんやきんくわ一日のさかへも露のまの身たもちがたし朝にはこうがん有てせいろにほこるといへどゆふべにははつこつと成てかうげむにくちぬよひにはらうげつをもてあそぶといへどあかつ

きはべつりのくもにかくれりわづかなるよのなかに何にこゝろをとゞめてかいたづらにあかしくらすらん我今生にてかく弓矢をとつて人にをそれらるゝどいふともまことのみちにをもむかんずるときは數千人のけんぞくども一人もつきしたがふべからず只むじやうのせつきにをつたてられあはうらせつにかしやくせられんことのくちおしさよ佛法に近付三ぼうをうやまはんとおもへば弓矢のみちゆるくなるべしとおぼしめされけれども思ひたち給ふその御こゝろすてがたくてあるたつとき上人のあんじつに入ての給ひけるは我等ごときのしゆじやう等は何として後生をたすかり極樂にわうじやうすべく候やとたづね給へば上人きこしめされてかしこくも御たづね候ものかな尤出家のしるしにはさやうの事こそ承りたく候へそれきんめい天わうの御代より佛法我朝に渡りしやうぐう太子もりやをうちしたがへしより此かたぶつぽうはんじやうの今にをいてそうきやうたにこ

となり爰に法花經と申て八ぢくのきんもむの候が無二無三のほうもんにて候かれにちぐうしけちえんし給ふべしとおほせければまんぢうきこしめされてさて法花めうてんのほんしやくをば佛は何ととかせたまひ候らんとたづね給へば上人きこしめされてそれ法花はとんぢんちの三どくより我等衆生の佛生（性ノ誤）はまさに出生すと見えたりぢよくすいうでいのなかよりものりのはちすを開出すぢんらうまうざうはむさのかくたい也これによつて一代八萬のはなは五時のはるにひらき三代そくせの月ははつけふのあきに明らかなりきうせんたうぢやうにたづさはりせつにんたうくわつにんげんみな一ねんのうち也ぼんなうそくぼだいしんしやうじそくねはんととけりゐんぬちもみなこれむしやうのめうきやう也しやうどもえどもほんらいくしやく成とかやさても此御經を釋尊四十餘年のせつけうの後八ヶ年にしむじつのさうをときあらはしたまひて候この御きやうにげんせあんをん

後生せむしよととき又はにやくうもんぼうしや無一不成佛とのべたりいちげもんほうのくどくは五はらみつのぎやうにもすぐれ五ぎやくのせうだつはたうらいさぶつのきべつをうけ八さいの龍女も南方むく世界のしやうだうをとげたりいかにいはんやゆみ矢をとり給ふこともわたくしならずわうばう佛法のげご國家をまぼりたみをはごくみ給はんゆへなり一世つたしやうのくどく有へし佛もあくまがうぶくしたまふ經ありざいぞくの身にてましますとも御心のむけやうにこそより候はんずれかの天ぢくのぢやうみやうこじ我てうのしやうとく太子も在家にまし／＼ながら佛法しゆぎやうしたまひぬ十惡五ぎやくの輩もしゆゆのねんによつてむしゆごうのざいしやうをせうめつすべき事はうたがひなく候なりまんぢうとこそおほせけれまんぢうきこしめされあら有がたや候その儀にて候はゞ法花經を一部てむじゆ申度候たとへばぐどんに候共つねは參るべく候一字づゝなりとも御さづけ候へと仰ければ上人聞召れて子細にをよばずさづけ申べしさても此御經を釋尊ときたまひし時は草木國土しつかいじやうぶつと見えたりそくしん成佛をとげ給ふまでこそなくともすいりきえんせつ申べしとてほどなく一部てんじゆしたまひけるとかやまんぢう心におぼしめすそれ人の一大事は後生なり末の子を一人出家になしわれらが後生をとはればやとおぼし召びぢよ御ぜんと申て十二歳になり給ふ若君をめしておほせけるはなんぢ寺へのぼりがくもんしほうしに成われらが後生をとぶらひてたべと仰ければびぢよ御前はきこしめしあら何ともなや人のうへにだにも出家のすがたはこゝろにそゝずおもひしにいまさら我身にあたつて請ける事のむようさよとはおぼしめされけれどもちゝの仰にて有あひだちから及ばずりやうじやう申されければやがてなかやまといふ寺へのぼせ給ふまんぢうかさねておほせけるはなんぢ寺へのぼりせはがくもんさいしよに

法花經をよくよみおぼえ其外よろづのぎやうをしるべしと御やくそくありければりやうじやう申てらへはのぼらせ給へども御經あそばさん事は中／＼おもひもよらずむりやうの木のかはをはぎあつめよろづのかつらをもつてくさりよろひはらまきなんどゝいひ木なぎなた木だちをつくつて多坊のちごをかりもよほしとびこえはねこへはやわざすまひちからわざかゝる武藝のまねならでは一かうよるひるたゞてんぐの矢とりのごとくなりしやう同宿けうくんすればけつく却而ちやうちやくす寺一番のあくぎやうは此若君一人のちやうきやうなりとぞ聞えけるまんぢう此事を夢にも思召よらず今ははやびぢよ御せんきやうをば能よみおぼえてぞ有らんよびくだし御きやうよませちやうもんせんとおほせあつてふぢはらのなかつかさなかみつと申さぶらひを使にてびぢよ御せんをよびくだし給ふちごおもひたまひけるはあら何ともなやこの二三ヶ年寺には候へとも經の一字もならはず里にくだるものならば治定法花經よめとおほせあるべしいかゞはせんと思召がいまさらならふに及ばずとてたゞのさとにくだり給ふまんぢうやがて御對面有てめづらしやびぢよ御せんはひさしく見申さねばねんなふせいじん候やさてもやくそく申せし御經をよみおぼえてぞ有らんそれ／＼よませ申せちやうもんせんとおほせければ承はると申てしたんのつくえに八ぢくのこんでいの御きやうをならべちごのまへにぞをかれけるまんぢう御らんじてかねて申せし事はこれなりあそばせちやうもんせんと仰けれどもとかくの御返事もしたまはずまんぢう御らんじてなふなにとて經をばあそばさぬぞせひ一字もよみかけてはや／＼よめとぞ仰けるいたはしやびぢよ御前はつゐに一字もならはぬ經の事なればひぼとくまでもましまさず赤面してこそおはしけれまんぢう御らんじて賴むしるしのなきやつをばかくこそはから

ふべけれとてぬきうちにちやうと打給へばこのほどてらにてならはせたまひたるはやわざのしるしにつくえのうへなる御經一卷をつとつてちやうりやう一くわんの書と名付しつとゝあはせゐながらうしろへひらりと飛いなづまでん火ふゆうかげろふとぶとりなんどのごとくにはやちらりとうせて見へたまはずまんぢうおほきに御はらをたてさせたまひなかみつをめして仰けるはなんぢ此たちにてびぢよがくびうつて參らせよとてやがて御重代の御はかせを出させ給ふ

なかみつはあまりの御道理至極にて御座有あひだとかくの御返事を申さずしかうべを地につけ赤面すまんぢう御らんじていかさまなんぢはいぎにをよぶか是非うつてまいらせずば今生後生ふちうのものにてあるべしと仰ければかさねてぢたいの義はあしかりなんとぞんじ御はかせを給てわが宿所にまかりかへるあらいたはしやびぢよ御前はなかみつがもんのうちへにげいりよにめんぼくなげ成ふせひにてたゝずみたまふところへまかりかへるひたゝれのそでにすがりつき給ひかねてより御うちにおほきさぶらひのなかにとりわきなんぢをこそたのもしくおもひつれとてさめ〴〵となき給へばまさにうつてにつかはされけれ共あまりの御いたはしさになふ何とてそれに御座候ぞこなたへ御出候へとて內へいれ奉てなかみつ申さても御うちにおほきさふらひの中にたれにも仰つけられずしわか君の討手をなにがしに給はる事はひとへに御命のたすかり給ふべきゆへなりたとひそれがしかくびをはうたれ申共御いのちにをひてはたすけ申べし御こゝろやすくおぼしめせと申ところへまんぢうの御方よりもかさねて使をたて何とてびぢよがくびをそなはりたるぞとくうつてまいらせよとのかさね〴〵の御つかひたつなかみつ承てあら何ともなや扨は御いのちにかはり申それがし腹を切たりとも若君の御いのちたすけ給ふ事あらじさあらん

時は何にもむやくたるべし扨なにとすべきぞやまさにうてとおほせらるゝは三代さうおんの主君又たすけよとおほせらるゝも主君にておはしますとやせん角やあらましとかきあつめたるもしほ草しんたい爰にきはまりてぜひをもさらにわきまへずいや／＼こゝにおもひいだしたる事あり若ぎみと御同年に參りあふ子一人あり名をばかうじゆ丸といふ九つのとしより寺へのぼせ今年十五にまかり成わかぎみと御どうねんにまいりあふこそさいはいなれ彼者をよびくだし御命にかへばやとこそおもはれけれそうじてこのちごのこゝろざしよににうなんにして神妙なりければししやう同宿もおほく有ちごの中にも一大事とこそおもはれけれおほかたすがたしんじやうにしてやうりうよりもたをやかなりはだへははくせつのごとしあたか（もチ脱スルカ）十五夜の月の風情一たびゑめばもゝのこびありがくもん世にすぐれ一字を千字にさとるならびなきちごがくしやうの名を得たり殊には詩歌くわげんのみちにちやうじしゆえんゆうけう人にすぐれしかる間一字（寺ノ誤歟）のそうきやうあるひはこゝろをたかねの月にかけおもひをしがのうらなみによせざりけるはなかりけり一じゆの花をみてはみな我家のひかりをあらそふごとく也およそ心ざしはさんがくのごとくきはわうこんよりもなをかたし半夜のかねのこゑあかつきのわかれをうらむ一たんのはうし（本ノマヽ）わかれもこれもたゞおなじいつもこゝろに詩をつくりうたをゑいじてかんきよに月日をおくり給ひけりかゝるゆう成ちごのかたへおやきしよくして迎をのぼせちと申だんずべき子細の候いそぎくだられ候へといへばかうじゆ聞て此六七ヶ年か間父母にかうかん申さず内々こひしくおもふところへむかへの來りたりければうれしさたぐひなふしてしやうどうしゆくにいとまをこひやがて里に下る父なかみつはもんにたちてまつちご父を見つけうれしげにて馬よりおりあゆみよりけるすがたこつがら禮義したるふせいおとな

しやかなりけりちゝつく〴〵と是を見てあらむざんやかほどまでそだてをきたるしるしもなく只今我てにかけん事のふびんさよとおもへばしのびのなみだせきあへずなんぢをたゞいまよびくだす事べちの子細ならずそのゆへは主君びぢよ御ぜんまんぢうの御意にそむかせたまひなにがしに討手を給はるところに又若ぎみのたのみてにげいり給へば何としてなさけなくうち奉らんとぞんずるそれ義をおもくして命をかるくしさかひに望てかばねをとちうにすつる事はくんしむの法君は臣をつかふるにおんをもつてししん君につかへ奉るに義をまぼつて身をおしまざるは忠臣の法なり恩にそくするしんかつゐに一度は主君の御命にかはるべきもの也おやにかうある子は身を捨てぼだひをとぶら（衍）ふと云事有なんぢ此間寺にてがくもんのしるしにさだめて此むねをは能存知つらんめんぼくなき事なれどもあはれ此若君の御いのちにかはり申てたべかしとおもひて扨よびくだしたるぞといへばかうじゆ聞てにつことわらひうれしくもうけたまはり候ものかな弓とりの子とむまれ候よりしては主君の御命にかはるべき事をはおもひまうけて候ひとつには御しうの御いのちにかはり申又はおやの御　いにしたがはんずる事こそさいはいにて候へはやく〳〵首をめされびぢよごぜんをたすけまいらせ給へ身のいのちにをゐては露ちりほどもおしみ申まじそれしんおふのふすまをかさねてもしんたいのやぶれざる間也きくわくのちぎりをいたすもつゆのいのちのきえざるほどいづくの里人かひとりとしてのこりとゞまり候へき只とくしやうをかへんこそ身のよろこびにて候へ去ながらすこしの御いとまを給はり候へ母子（御ノ誤）にさいごのたいめん申たく候といへばなかみつ聞てあらふびんの申事やいそぎたちこえたいめんあれかまへて此事を母にしらせてたふなといへば其時かうじゆはらをたて扨は子ながらもみれんしごくの者と思召御みかぎり候かそこのほどは御こ

ゝろやすくおぼしめせとさもけなげに申なし母の御前に參りはゝを見奉てやがてなみだをながす母御らんじてめづらしのかうじゆや此六七ヶ年があひだてらに居たま〳〵くだりければさこそよろこぶべきとおもふ身が我を見てなく事よとおほせければ其時かうじゆおつる淚をおさへとりあへず申すさん候彼もろこしのかんわうここくをせめられしときかうせいしやうぐんを大將とし百萬騎をそつしここくへ御つかはされけるに合戰すでに十二ヶ年經てつゐに軍にうちかつて古鄕へ引てかへるときとくしやうのみやこをよそに見はゝのましますところへゆき母を見奉てやがてなみだをながすはゝ御らんじてこれほどいくさにうちかつてよろこびにてのぼる人の何のうれへの有てなき給ふそとおほせければ將軍きこしめされてさん候ここくへまかりむかひしときはしろき御ぐしも見えさせたまはざりしが今いくほどもなきあひだに御ぐししろたへに見えさせ給ひて候ほどにそれをなき候と仰ければしやうぐんのはゝきこしめし身につもる年月をぬしだにもおもはぬにおやのよはひのかたぶきすゑのちかくなる事をみてなく事よとあはれにもうれしくもおもはれけるとあるふみに見えて候を今更おもひあはされて候ぞや九つのとし寺へまかりのぼりし時は黑くわたらせたまひし御ぐしの今年十五にまかりなりくだりて見たてまつれば御ぐしやう〳〵しろたへに見えさせ給ひ候ほどにいまいくほどか見まいらせんとかなしくてふかくのなみだをながすなりといつはり申たりければ母は誠とおぼしめしふびんのものゝ申事やげに子にてなくば何ものかはゝがかみのしろくなるをばかなしむべきましてなからんのちの世をとはれんことのうれしやとたゞいまさきに立給はん事をばしろしめされずしよにたのもしくおもはれける母のこゝろぞあはれなる是にしばらく候て御物語申度は候へどもうけたまはれば主君びぢよごぜんまんぢうの御意にそむか

せたまひこれに御座のよしをうけ給はる卒度參り御めにかゝりやがてまいり申さんといつはり母の御前をまがり立これをさいごと思はれけるかうじゆのこゝろぞあはれなる

其後ちご一間所にたちいり御經よみ念佛申一首の歌にかくばかり

きみかためいのちにかはる後のよの
　やみをはてらせ山のはの月

かやうに書ししやうどうしゆくこしのはうへかずかずのかたみのふみまいらせたくは候へ共これさへかなふべからずとたゞ文一通にいつはりかうぞかゝれけるさて〳〵此たびまかりくだる事はべちのしさいならず其ゆへは主君びぢよ御ぜんまんぢうの御意にそむかせたまひ自身御手にかけさせ給ひて候をとぶらひ申せとてよびくだして候ほどにわがきみの御さいごのていみるにこゝろもこゝろならずちゝにもはゝにもしのびわか君の御骨をとりくびにかけ高野のみねとやらんへおもひ立て候ぞや三とせがあひだの春秋ををくりむかへかならず參り御めにかゝり候べしをしやう同宿こしのはうへかうじゆ丸とかきとめびんのかみをすこしぬいて文のおくにまきこめてこそをかれける我文なから一しほになごりのおしさかぎりなし一間所をたち出父の御まへにまいり母ごはさいごのたいめんこゝろしづかに申て候今ははや今生に思ひ置事候はずさりながら一間所にふみの一つう候をばこの年月すみなれしてらへをくりてたべとたしかに申をきつぼのうちにわれとしきがはをしきたけ成かみをたかくまきあげにしにむかつて手をあはせなむ西方極樂世界の阿彌陀佛ことには我願をかけ申大慈大悲のくわんせをんねがはくはほんぐわんをすてずわれを道引給へとまことにこゝろすゞしく見えければちゝたちぬきもつてたちよりけるがめもくれこゝろもきえはてゝ太刀のうちどもみもわかずかなしきかなや春三月の花も無常のかぜのふかざる

ほど三五のよるの月も雲のおほはざるほどなりむじやうのつるぎをぬき一度身にふれなばいつきのくらゐをてんじてすなはちとくだつすべき也いづれの人かおやとなり何ものか子と生れためしなき事をもらすらんめいえうおちやすし秋一時のでんくわうのかげのうちにつるぎをふると見えしかばくびは前へぞ落にける

かねておもひまうけたる事なればいまさらなげくにをよばずとて若ぎみの御ひたゝれを申おろしひたゝれの袖にかうじゆがくびをつゝみまんぢうの御まへに參り御意そむきがたきによりいたはしながら御くびを給て候今ははや御本望をとげさせ給ふうへ御はらゐさせ給へあら御なさけなの我君の御所存やと申もあへずくびを御まへにさしをきひたゝれの袖をかほにをしあてければまんぢう御覽じあへずいしくも仕りたりさりながらくびをばなんぢにとらするぞ能にけうやうし跡をばとふて得させよとてれんちうふかくいりたまへばそののちくびをとりわがしゆくしよにかへりねうばうをよびいだしくはしきことをかたりかうじゆがくびを見せければはゝはかうじゆがくびを見てやがてきえいりものいはずそれえうてうたるくれなゐのかほばせはなにそねまれしすがたもゆふべのかぜにさそはれせんけんたるみどりのまゆずみつきにねたまれしかたちもあかつきのくもにかくれゐしやぢやうりにんげんのならひしやうじむじやうのことはりはさま〴〵おほしと申せどもとりわきあはれなりけるはかうじゆがことでとゞめたりさればこそかうじゆてらよりくだりわれを見てなくほどにふしんをなしてさふらへば異國の事をかたり出しみづからをなぐさめしを夢にもみづからしらぬなりたとへば御しうの命にかはるべき事をみづからいかでとゞむべきぞかくとしらする物ならばともにかいしやくしさいごのていをみるならばかほどに物はおもふまじなさけなのなかみつやとくびにいだきつ

きふしゐづみてぞなきゐたり
おりふしびぢよごぜんはものごしちかく御座有しが
かうじゆがさいごのよしを聞召あひのしやうじをさ
つとあけ立出させ給ひて何と申ぞ夫婦のものかうじ
ゆがくびをうつ程ならば何とてびぢよが首をばうた
ぬぞかうじゆをきらせ我うきよにながらへたれに面
をあはすべきとおもひきらせたまふ御色を見て急ぎ
ふうふの者まいり御まぼりかたなをむばひとりけふ
よりしてぶようの御心中をとゞめさせ給ひがくもん
よきにめされかうじゆがぼだいをねんごろにとぶら
ひて御とらせ候へはや〳〵御ゐのび候へとて人ゝを
つゝむ事なれば夜半にまぎれてたゞのさとを出都に
つき爰は人めもゐげしとて天台山のゐもやま十せん
じの御まへに御供申この神意の御はからひとして此
山のいかならんずるせきがくの人にも御付有てがく
もん能にめされ候へいかにわが君聞召され天ぢくに
ゐしと申はけだものゝ中のわうなり彼ゐし年に三つ
づゝの子をうむ生れて三日と申に萬ぢやうの岩石を
おとしてみるにそんせずやぶれざるを子としむなし
く成はそのまゝ也かゝるけだもの迄も子をばためす
ならひの候まんぢうのわかぎみ樣を御かんだう候を
うらみとはし思召され候ならひせにてはかならずけ
ちえんすべき道理の候いとま申て若ぎみびぢよごせ
んは聞召やはや歸るかなかみつよ浮世はくるまのわ
のごとく命のうちに今一度めぐりあふべきよしもが
ななごりおしやとのたまひてはる〳〵見をくりたゝ
ずみたまへばゆく道更に見もわかずたま〳〵こと問
ものとてはみねにさわたるさるのこゑも我身のうへ
とあはれなりふりかへりふりかへり見をくりてあと
に心はとゞまりてたゞの里にぞくだりけるなかみつ
我宿所に歸り女房をよび出しなんぼう人のいのちは
すてがたきものぞかうじゆがさいごのときとにもい
かにもならばやと千度百度おもひつれ共わか君をひ
とまづおとし申さんためつれなくいのちながらへた

りいまは今生におもひをく事候はずいとま申てさらばとてこしの刀をひんぬいてはらをきらんとせし時女ばらかたなにすがり付しづまり給へなかみつよたれも思ひはをとらぬぞ先みづからをがいしつゝ其後腹をきり給へげにまことわすれたり我々なからん其跡にかうじゆ丸がさいごのていきみの御耳に入ならばいたはしやわか君の野の末山のおくにかくれしのびてましますをさがし出させ給ふならばくさのかけにてかうじゆまるなげかん事もふびん也然るべくばなかみつよ自がいをおもひとゞまりてわれ〳〵ふう ふ一すぢに念佛申かうじゆかばだいをとふらひてとらせなばなどかはとくだつならざらんかやうに申せばみつからがいのちをおしむに似たるべしとも角もよきやうに御はからひ給へといひければおもひきりぬる道なれ共至極の道理になかつかさじがいをとまりけるとかや是は津の國たゞの里の事扨も若君は十せんじの御前に誠に東西をもわきまへさせ給はず誰

につきがくもんし何と成給ふべき御覺悟もなく只ばう〳〵として御座ありしがまことに十せむじの御引あはせかとおぼしくて山よりもゑしんのそうづさんしやまし〳〵けるが若君を御らんじてあらいつくしの少人や當山にては未見まいらせたりともおぼえず國はいづく御里はいかやうなる人にてましますぞとたづね給へばびぢよごせんはきこしめしさん候是はようせうよりもおやにをくれいやしきひとり身にて候とおほせければそうづ聞召れてそれはいかやうの人にても御座あれかしそれ〳〵御とも申せとて同宿たちに手をひかせわがばうにをきたてまつりてかくて年月つもりければけいせつのまどのまへにひぢをくだきてんだいしくわんのもんにこゝろをてらしさんかうのしつないにはゑんどんじつさうのくわんねんにそこをきはめ御年十九と申時しやうほうねんじゆ經をよみ給ひしがかたはらにうちむきさめ〳〵となき給ふそうづ御らんじてきやうこつやちごはなに

をなき給ふぞと仰ければさん候此御經をよみ候におやにふけうの子はあび地ごくを出ずと候ほどに身のをきどころのなきまゝにそれをなき候とおほせければそうづきこしめされてふしぎの事をのたまふものかな御身はようせうよりも親にをくれいやしきひとり身にて候とまさしくかたり給ひしが今さらふけうとおほせらるゝ事こそ意得がたふ候へびぢよごぜんはきこしめしいまはなにをかつゝむべきがくもんもせずふように候ひしにより親のふけうをかうぶりたるものにて候扨おやはいかやうの人にて候ぞ津の國たゞの里にまんぢうと申人にて候とおほせければ僧都聞召してさればこそかねてよりたゞ人ならず御すがたを見參らせて候ひしが扨はをとに承るたゞのまんぢうの御若君にて御座ありけるを今迄存申さぬこそ愚僧がふかくで候へ是につけてもがくもんをいかにもめされ候へ御かんだうの御事をばげんしむ參てこひゆるし申さむとて十九のとし御ぐしおろしゑしんゐんのゑんがくとこそ申けれされればしくわんのまどのまへにはいちしづちうだうの月をすまし又にんにくのころもの袖には四萬相應のはなをつゝみつゐにてんだいゑんしうのわうさうをきはめ給ひて御年二十五と申にししやうゑしんの御供してたゞのさとにぞ下られける昔のばいしんはにしきのはかまをきてこそこきやうの人に見えぬると承りて候が今のびぢよごぜんはにしきにまさるすみぞめのころもをめされてふるさとにかへり給ひけりまづなかつかさがところへ御出有てひそかにあんないとおほせければなかみついそぎまかり出若君の御すがたをつく〴〵と見まいらせあまりの事のうれしさにしばしはものを申さずやゝ有てなかつかさながるゝなみだををしとゞめあらめでたのわか君の御すがたや候これに付てもかうじゆが事をこそおもひ出されて候へかねてよりまんぢうも御ほつたいの御すがたを御のぞみにて御座候あひださだめて御たいめん有べしやがてま

いりて申さんとてまんぢうの御まへに參り若きみの御事をばなにとも申いださずしこのほくれいに聞えさせ給ふゑしんのそうづ御たいめんのそのために只今御らいりんと申まんぢうきこしめされて何と申ぞゑしんの僧都これ迄の御出とやあらおもひよらずそれ〳〵こなたへ申せとて僧都をしやうし奉りまんぢうやがて御對面有てしよたいめんにかやうの事をたづね申せばはゞかりおほく候へどもわれらごときの大惡ぎやうのぞくはいかにとして後生をたすかり極樂に往じやうすべく候やと尋給へば僧都きこしめされてそれ法花のめいもんにだいつうちせうぶつじつこうざだうじやう佛法ふげんぜんふとくじやう佛道ととかれたりほとけも未出世したまはざるときは成佛もなくとがもなし一ねんみしやうい前にはむしやうむしにして成佛のぢきだうにあらす人のをしへによらずたゞわれとおぼしめすべきなりそれいちげもんぼうのくどくは九ていこうのせんこんたりをよそたしやうくわうりん有べし尤ぶつだうのたよりあり殊更ゆみ矢を取給ふとも合戰のみちまでもこれを思召いださは一念しやうかいのみなもとに立歸てじゆざいは草露のごとしきえてそくしん成佛たるべしとけんしうといふものに見えて候とのべたまへばまんぢうきゑつのまゆをひらきさては弓矢を取候とも一しんのむけやうによつてごくらくにわうじやうすべく候ひけりとて御よろこびはかぎりなし

ときしも比は九月十三夜の名月くまもなかりしにやまありとしらするしかのとをごゑもこゝろすごく聞なしてちぐさにすだくむしのねまでも我有がほにものあはれなるおりからにゑんがくたつとき御聲にてじやくまくむにんしやうどくじゆしきやうてんかにしいけんしやう〳〵くわうみやうしんとたからかにあそばせは誠にじむりんのぢうしよなりといふ共じやくまくにして人のこゑもなし四明のならにはあらね共どくじゆの御こゑはぼん天たうりてんの雲のう

へにもきこゆらんたつとしと申もあまり有こゝろの有もあらざるも袖をゑぼらぬ人はなしまんぢうしゆせうにおぼしめしまことにずいきのなんだをうかべそうづをしばしとゞめ申されければそうづきこしめされて是は日をさしてごんぎやう子細の候明日歸山とおほせければさらば御弟子の御僧を一七日とゞめ申たく候そうづ聞召れてこれはようせうよりも身をはなさぬ弟子にて候へども御きやう御ちやうもんのためならば一七日はとめをかるべし御用過なば本山へをくりてたべとのたまひて御かんだうの御事をば何とも仰出されずしよくじつにそうづは御登山有ゑんがくひとりとゞまつて七日御經をあそばすまんぢう御らんじてさもあれ貴方はいかやうの人にてましますぞそれがしも御年ほどの子をもつて候ひしががくもんもせずぶように候ひしによつてさぶらひに申つけくびをうつて候が今更こうくわい仕つれどもそのゑるしも候はず是に候女は其子がはゝにて候がわかれをかなしみ御覽ぜられ候ごとく兩眼をなきつぶして候何とやらん御すがたを見奉れば其子にすこし似させ給ひて候事よいかに御臺聞召せこのほど御經あそばされ候御僧こそ有しびぢよに少似させたまひて候と仰ければみだいきこしめされてあらなつかしやさふらふ今より後はさしたる御ようさふらはず共つねはたちよらせ給ひ御きやうあそばしみづからなぐさめて給はりさふらへゑんがく聞召れてさては我ぶようによつて母のまうもくとならせ給ふ事よさこそ佛神三ぼうも我をにくしとおばすらんざいしやうのほとこそくちおしけれとほつとていきうしたまひてきねん申されける事こそしゆせうなれなむりやうせむ世界の釋迦せんせ法花しゆご三十ばんじん本山こわうさんわう十ぜんし佛法のいりきれいげん地におち給はずば母のまうがんをたちまちひらかしめ給へがけんとうみやうぶつほんくわうすいによしと此もんをとなへかんたんをくだきいのられければ誠に

佛神もふびんにおぼしめさるゝか本尊の御まへよりこんじきのひかり立てきたの御かたのいたゞきをてらし給ふまんぢう大きにおどろきなふあれ〳〵御らん候へほんぞんの御前よりこんじきの光りのたゝせたまひて候と仰有ければ北の御方聞召それはいづくに候と御らんじければありがたやしゐてひさしき雨眼たちまちはつとひらけゝりきどくなりとも中々申ばかりはなかりけりまんぢう夫婦手をあはせ誠のいき佛にて御座有けりとてくぎやう禮拝したまへばゑんかく座をさつてをそれをなすまんぢう御らんじてあらかたじけなや何とて御座をさらせ給ふぞさん候釋尊御せつぼうのみきん父じやうぼん大わうの御ちやうもんに出させ給ふ時は佛たにもれんげ座をさり給ふにましてやわれらはいやしき僧いかでかをそれをなさゞらんまんぢうきこしめされてあらおろかのおほせやそれはをや子のれいぎ是はいしやうたもんの事何かはくるしう候べきゑんがくきこしめされて

今はなにをかつゝむべき我こそ有しびぢよにて候へなかつかさがなさけによつて我子のかうじゆをきり我をばたすけ候ぞや彼僧都につき奉りふしぎにかゝる身とまかり成て候とかたり給へばまんぢうふうふゑむがくのころもの袖にすがり付是は夢かやゆめならばさめての後をいかゞせんまことはうつゝなりければうれしさたぐひましまさずさればこそ能らうどうには別しておんをあたへめしつかふとは今こそおもひしられ候へなかつかさが情をば生々世々わするましとのたまひていそぎふうふをめされやこれ〳〵見よやふうふの者今より後はびぢよごぜんをなんぢら婦夫がためにはかうじゆ丸とおもふべし後生の事をばたのもしくおもへとてまんぢうも北のかたもなかつかさふうふのものゑんがくにいだきつき給ひうれしきいまのなみだには一しほぬるゝたもとかなをよそ九萬八千町の御領をふたつにわけ藤原のなかつかさなかみつにあてをこなはせ給ふ又かうじゆ丸が

ぼだいをとはんためせうとうじと云てらを立本尊にはちごもんじゆを作てしヽにのせ給ふそれ法花といつぱみたゑしやうほうまんとくのくらゐ三世の諸佛しゆつせほんくわいは衆生成佛のぢきだうなりきやうにあらはすときはめうほうれんげの五字につゞめなにとく時はなむあみだぶつの六字にせつする也あるひは五ごうしゆいのゆひしのきやうを六字のなにつゞめ十こうしやうがくのくわとく一念しやうねんの衆生にほどこすと見えたりしゆいといつぱ座ぜんのひみつ也てんだいにはしくわんとときしんごんにはしつさうけうさうとのべたりほつさう三ろんにはくう有のにうの二相にかヽはるくきやうきよゆうのめいせむも皆是いちしつふさうのかいけんにしかずたゞしヽふしゆせつかほうめうなんしとくわんずべしめうらく大師の御しやくにいはくしよけうしよさんたさいみたこゐ西方にゐ一じゆんゆいしんのみだこしんのしやかとなればほんらいむとうざいがせううなんぼくとききときはいかにもしてこゑに出して念佛を申べしあみだは本來のめんもく也十まんをくどもへだてす我等がほうすんのうちれき〳〵として分明なりもとよりはうがくなしたねんしやう〴〵たりあにしきさうにあづからんやもとより法花と念佛はいちくのほうもんなりされば古佛のてんにいはくしやくざいりやうせんみやうほつけこんざい西方みやうみだぢよくせまつだいみやう觀音三せりやくとう一體りしゆしやと云々いかにとじて法花と念佛かくべつにこヽろうべき只生死は春の夜の夢のごとししんによの月はもとよりめいはくたりたにんのじゆみやうをかつて自身の命をつぐまよひのまへのせひは是非ともにひなりさとりの前のせひはせひともにせなりじた一によたりふんみやう成かなやさきに死するかうじゆ後にしするびぢよ御前今ははや名のみばかりぞのこりけるされぱくうや上人の一しゆの歌にかく計

よの中にひとりと丶まるものあらは

　　もしわれかはと身をやたのまんと

ゑいじ給ひけるとかやとうばうさくか九千ざいうつらの八萬ざいも名のみばかりぞのこりけるひさう八萬こうむとうかねぶりもた丶夢のよのうちなりまんぢうの御こ丶ろ法のためにくわだてざいしやうみなかれをくみぼだいのみちあきらかにし丶そん〳〵もはんじやうし天下をたもち給ふ事千秋ばんせいのみなもとをあらはし給ふ物なり

又かやうに義ををもんじ命を輕くし名をのちのよにのこしをくかうじゆまるが心中じやうこもいまもまつだいもこれやためしなかるらんと人々申あひにけり

いわうかしま

爰にかどわきのへいざいしやうのりもり折を得て小松殿にまいりおとゞに申されけるは其人のなげきをやめ給はゞ身のよろこびも有ぬべしいわうが嶋のるにんを今度のうちにしやめんなりたまはゞさこそよろこび申べき先あんじても御らんぜよさつまがたいわうがしまのうきすまゐおもひやるさへふびん也おとゞげにもとおぼしめしじやうかいへ參り此よしかくと申されければじやうかい聞召れて丹波の少將なりつね平判官やすより二人の御教書出さるゝおとゞかさねて仰けるは三人をめしあつめ一つ島へながし二人めしかへし一人とゞめさせ給ひなばいよ〳〵うらみはふかかるべし只このついでは玄かるべうもや候らんと申させたまひければじやうかいきこしめされてほつせうじのしゆぎやうが事はずいぶんじやうかいが口入によつて人と成しものぞかしそれに東山しゝの谷にあつまつてさん〳〵にあつこうしぬと聞しゆぎやうが事にをひてはじやうかいは玄るべからすとおほきにいからせ給へば此上ちからをよばすとて二人のみげうしよばかり八でうどのより出さるゝおなじき使廿日に京を立さつまがたとは惣名奥七たうはたうどくち五たうは日本なりそうじてしまは十二島はじめは白石がしまちどりがしまいわうが島へ一人づゝながさるべきにて有しを門わきどのゝ御そせうふかきによつて一いわうがしまへながさるゝかく三人の人々はとせんさのあまりにいざや島めぐりしてあそばんとて島めぐりをぞ玄たまひけるげにや都にてつたへきゝしよりはるかにこえておぼえたりいぬゐよりたつみへてうさんつらなつて百千まんのいかづちのをとたえずみねにはらいでんひまもなくふもとのさとにあめふりて昔は鬼がすみければきかいがしまとも申なりいまは又何となくみねにいわう

がたゝければさつまがたいわうがしまとも申なりたまたま此しまにすむ人は我住國の人にかはり我いふ事をかれしらずかれいふ事をわれしらず男はあれどもゑぼしきず女はあれ共かみさげずしつがやま田をかへさねばべいこくのたねもなかりけりそのゝくわをとらざればけんぱくのたぐひもなかりけり水をむすばんとてはさはにくだりこたら（本ノマヽ）木をとらんとてはさんりんに入てまよひけり明暮月日をゝくりけるうき身のほどこそかなしけれ

され共少將の御ためにしうとにておはしますかどわきの平ざいしやうのりもりの所領肥前のくにかせの庄たるによつて少將一人のいしやうしよくじを日にしたがつてをくり給へばせうしやう一人のいしやうしよくじをもつて二人の人々をはごくみ給ふたんばのせうしやうなりつね平判官やすより一つこゝろに仰付けるはわれ都に有しときくま野をしんかう申十度參らんと大願をおこし五度づゝまいり十度にたさむと思ふときこのしまへながされぬることや熊野のごんげんはわれをねんぜむ衆生のあらばのゝすゑ山のおくにありともひかりをさしてみちびかんとの御せいぐわんほんしん今にたかはせ給はずばいざや此島へごんげんをくわんしやう申我等が歸路をいのり申さんさて僧都はなにとかおぼしめすそうづ聞召さんわうの御事ならばしかりごんげんの御事ならばさして信心は候はずこのうへちからをよばずとて二人すご〳〵と御立ありまん〳〵たる海上を見わたし（本ノマヽ）かくとあるいそ邊をめぐり三の御山に似たるところをたづねけりあるひは山高して津水ひさしくながれ出あるひは木々のこずゑれい〳〵としてそばだてり爰は本宮せうじやうでんかしこはしんぐうかんのくらはるかのきたにあたりつゝはくせきのがゝとあるよりもりうすいくもよりながれ出松のあらしもかみさびひれうごんげん出たち有なちの御山に似たりとてこゝをなちとぞ定めけるつの國くほつの王子より

九十九所ハわうじ〳〵をかたいことく〳〵わんじやう
申それよりくろへに御下向あるそのまにそうづはた
かきところにあがり東西南北を見わたしよろづくわ
んねんじてましますに黑雲あつくへだ丶つてせきが
んくづれて海に入其時僧都せん（本ノ、、）にふるき詩を思ひい
で風佛前に花をさんずきしくづれて魚がいすそのき
しこ丶ろなふして罪をえずされば五體は五つのかり
物地すい火風をかたどれりこ丶ろはこくうのごとく
にてかたちなければいろもなし諸法は有無の二道に
てありとも見え又はなし立てもゐても座ぜん也とは
かいむざんの高枕しをきぬふしぬとゑたまひけりか
くて二人の人々は日數つもれどもたちかふべきじや
うえのあらざればあさのころもゑほにくちたるをさ
はの水にてあらひ岩田川のきよき瀨にてぼんなうの
あかをそ丶ぎ五だい王子ふしおがみそれより山路に
あがりければたかはらやみねのあらしにさそはれて
いわうをこして參るにぞちうてんぢくもとをからず
ちうでうちかつゆくませ河ほつしんもんにもいりぬ
ればはやほんぐうにまいりけりあら有がたやこれこ
そ本宮せうじやうでんにてましませいざやわれらが
きらくをいのり申さんさんまいがあらざればはまの
まさごをうしほにてあらひさむまいと定め花を手折
て御へいにさ丶げ歸洛ののつとをぞ申されけるさい
はい〳〵これあたり來るさいし治承二年つちのへい
ぬ月のならびは十月二月日の數三百五十餘ヶ日吉日
りやうしんをえらむでかけまくも忝くましますす日本
第一だいりやう權現ゆや三所ごんげんならびにひれ
う大さつたのけうりやううつのひろまへにして信心
のだいせ主羽りん藤原のなりつねならびにしやみし
やうしゆ一しんしやう〴〵のまことをいたし三ごう
相應の心ざしをぬきんで謹以敬白それ淸淨大ぼさつ
はさいどくがいのけうしゆさんじんゑんまんのかく
わうたり兩所ごんげんはとうはうじやうるりいわう
のしゆ衆病しつぢよの如來たりあるひはなんばうふ

だらく能化しうにうしゆけんもむのたいしにやくわうじはしやば世界のほんしゆせむしやのたいしちやう上のぶつめんを現して衆生のしよぐわんをみてしめ給ふかるがゆへにかみ一人をはじめしも萬民にいたるまであるひはげんせあんをん又は後生ぜんしよのために朝には淨水をむすんでぼんなうのあかをそそぎゆふべにはゑんざんにむかつてほうがうをとなふるに感應をこたる事なしが〻と有みねのたかきをばゑんとくの高きにたとふけん〳〵とある谷のふかきをばぐせいのふかきになぞらへ雲をわけてのぼり露をゑのびてくだり反にりやくの地をたのまずばいかゞあゆみをけんなんの道にはこばんやごんげむのとくをあふがずばなんぞかならずしもゆうゑんのさかひにゑしゑさんやよつてしやう〴〵大ごんげむならびにひれう大ぼさつはしやうれんじひの御眼をならべさをしかの御み〻をふり立われらが無二のたんせいをちげんして一々のこんしゆをなふじゆせしめ給へゑくゝの（本ノマヽ）みりやうしよごんげむは各儀にゑたがつてあるひはうえんの衆生をみちびき又は無緣のぐゝんるいをすくはんがためにゑつほうしやうごんのすみかをはなれ八萬四千の光りをやはらげかりにすいしやくとげんじ六道三有のちりにどうじ給へりかるがゆへにしやうこうやくのうてん〳〵ちやうしゆとくちやうしゆとらいはいそでをつらねへいはくれいてんをさゝぐる事隙もなしにんにくのころもをかさねかつごうの花をさゝげ神殿の床をうごかし信心の水をすましてはりしやうのいけにたゝへたりゑんめいなふじゆましまさば諸願なんぞ成就せざらんやねがはくは十二所ごんげんりしやうのつばさをつらねてはるかにくかいのそらをかけつてさせんのうれへをやめ歸洛のほんくわいをみせしめたまへさいはい〳〵と禮拜してじやうえのたもとをゑぼるはありがたふこそきこえけれ

つきしま

抑中むかしの事かとよ其ころ平家の大將をばあきのかみ清盛と申奉る御出家有てのかいみやうをば淨海とこそ申けれある時一門れん座の座敷にてのたまひけるはそれ人のよに有ゑるしには大ぐわんおこしあるひは國をふらため里山くわうやを名所となしたみすなを成まつりごとを末代のかたみとするなり天下の玄きし玄きやうを我まゝにふるまふといへど平安城のこうりうはじやうかいがわざならず玄かるにかの平の京は左青龍右白虎せんしゆじやくごげんむしじむ相應の地を玄めし北にはたゞす鞍馬寺きぶねの宮よりながれ出る水のゆく衛を白川や東山に三井寺しゝの谷のみねつゞき鬼門にひえい山でんげう大師のさう／＼たり南におとこ山いは清水と名付和光のかげくもりなくはくわうほうそをしゆごし給ふ西山のふもとにまつの尾とほうりんじかめやまのおくよりもながれいづるきよたきをおほ井川と名づけすゑをばかつら河といふ（本ノマヽ）仁和寺御むろくわうりうじ佛法ごぢのこの京にてたえする事あるまじいつら／＼ものを案ずるになんばの四天王寺とならの京もたえせずたとへば九條にたらずとも末代のかた見に新京をたてゝ見ばやとことをき國のきしつまてくはしくみるに地きやうなしさでのみやまんむねんさに兵庫のうらをわつてみるにわづか五てうのところなりこれならではゑかるべき地形も更にあらざればしよせん是をふくはらの新京と名付里大りをざうしんせん此京はんじやうするならばじやうかいのなきあとのかた見と人もおもへかしあきのいつくしまをもこの儀をもつてざうしんす人々とこそおほせけれ御一門の人々此儀尤ゑかるべう候とておの／＼ひやうごにくだりさと大りをたてかくてこゝにすませ給ふ

時の御しうとに平大納言時忠でゝみ出て申さるゝあ

はれおなじう候はゞあのしゆかいをうめさせふねのとまりとなすならば本てうにをひてかほどの名所あらじとこそ申されけれじやうかいきこしめされてそれこそなによりもつてきかまほしき事さうよ四國西國の船どもがつくならばいよ／＼ふつきたるべしすまいたやとはとをあさなり一の谷にあらいそにてわだのみさきへよる船のいそまでつく事なきあひだ江嶋がいそより吹風にはつそんするとてかなしめば此京立てきよくもなしとてもいちごの大ぐわんにわだのみさきをすぢかひにたつみむきに海上を三町計うめさせそのしまのうへに在家をたて船のとまりになすならば數千ぞうのふねつくともかぜのなんにはあふまじいたゞしはるかのしむゑんをうめんずる事どもこそはかりがたふは候へども民をはごくむまつりごと龍神も佛神もなどかあはれみなかるべき五條の大納言くにつなのきやうはおはせぬか御身奉行して嶋つかせられ候へ國つなのきやうは承りかやうに申せばおほせのむねをそむき申に似て候へども昔もさるためしの候せうへいにまさかどはばんどう八ヶ國をたいらげ下總の國さうまのこほりに京をたてまつりごとをなし給へどもこよみのはかせがなくして年のさかひをしらざれば五せつのいはひもさだめえずほどなく運命つきはてぬ是は末代までもめでたかるべき御ぐわんなればはかせをめされ候てくはしき事の子細をも御たづねあれと申されたり淨海聞召さる事ありとの給ひて清明がながれあべのやすちかやすのりに三代のけうい安氏と申て天下のきつけう世をはかるはかせをいそぎめされけりやすうぢやがて參らるゝじやうかい御らんじていまにはじめぬやすうぢがうらかたにふしんはよもさうしわだの三さきのすぢかひにたつみむきに海上を三町ばかりうめさせて其しまのうへにざいけをたてふねのとまりにせさせんと近日におもひ立ぬるは成就すべきかいかゞさう占かたかんがへ吉日とつてしま成就のきせいをみ

やうのかごにまかせてたゞやすうぢとこそ仰けれ安
氏承てもとよりうらは上手うらきくところのしかん
きやくごぎやうさうそくのうをんたうしゆくやう十
二道六みやうたいやうさんじつ迄わうざうをきはめ
てかんがふるにあやまる處はなけれ共うらに一つの
ふしんが候島をつかせて御覽ぜよ一度にこの志ま成
就せし事のていにりをうけうらなひ申候はん吉日は
三月十八日吉時はたつの一天とうらなひさだめ申じ
やうかいきこしめしさらば國のなぶぎやうをせよう
けたまはると申て大和山城伊賀いせはりま津の國丹
波七ヶ國の人夫をもつてむこ山しうち山のいはがん
せきをくわつ〳〵と引くづしてわたの三さきへはこ
ばせけり朝うめける大もつはみつしほはやくてさし
のくる岩をかさね人夫をましよるにうめける大もつ
はあかつきひくしほはやくしておきへはつと引ては
出うむればさつとゆりくづす大もつ大石數志らずろ
うぎがいさごのだうにはおもはゝたよりも有ぬべし

五萬人の人夫をもつて十日ばかりはうめけれどもす
こしも志るしの見えざるは龍神なふじゆなきやらん
扨いかゞはせんとの御諚なり
じやうかいきこしめしことのほかに御はらをたてさ
せたまひはかせのやすうぢをめしておほせけるはな
んぢは何とうらなひたるぞさらに此島成就せずすい
れんを入て見せてあればうむべきところにいしもな
くよしなきかたにちりゐさすがそこにはなみもなく
殊外志づかなると申がいかやうの子細にてさやうに
は有らんさてのみやまんずむねんさよいかゞはせん
との御ぢやうなり安氏承てきうなくふしんをひらき
えずやゝあつて申けるはげに世にすむならひは大事
にて候うらのまゝ申せばわが身のあだ申さねばてん
しのゐをくだすりそうやうちうくわの身たるべしそ
れ人間にかぎらず生をうけぬるたぐひのいのちに過
たるたからはなしされば佛もいましめて五音かいの
其中にせつしやうかいを第一にたもてとけうげし給

へり此大願に御とが御座あるべし是はひとへにやすうぢがうと成なん事こそ何よりもつてくちおしけれそれをいかにと申に人ばしらを御たてなくしては更に此しま成就あるまじきとうらのおもてに見えて候ゆへしき罪業これなるべし御思案あるべく候一人ならず二人ならず三十人の人ばしらが立べきなりと申淨海聞召れてもたせ給へる御あふぎにてたゝみのおもてをちやうとうつてやあ此事披露有べからず何としても此島の成就すべき事こそさいはいなれそれ堂たうをたつるにも一たん國のゆるぎたみのこゝろをなやませばせんも悪をさきとする也それ善悪の二法といつぼうらとおもてのごとしいまこのしまの人ばしらにたちなむものもかならずくわこのしゆくゑんなくしてはいかに思ふとよもとられじさりながら人ばしらを一度にとらばあらはれてろじをとゞめて悪かりなんとき〲とれとの御諚にていくたこやののあたりにいかにも人をかくしをき京よりも下るものはじめて京へのぼる者中にてとつてをしこめてこしばしたつなといましめてこくしやうするぞむざんなるさこそきうりのこひしさをおもひやるこそあはれなれとられぬるもの共がかゝ有べしとごしたらは老たるおやにいとまごひなごりおしき妻子にも形見をとらせてゆくすゑのすぎはつべき言の葉をなどかは語りをかざらん只かりそめの事なればけふよあすよとまちくらし風のそよとふかんにもすはやとおもはん心ざしいつをたのみにまつかね山むなしき月日をぐら山ゆく衛をしらねばよもたづねじ我身のきえむ命より待よゐむなしきなるさとをおもひやるこそあはれなれとろうのとぼそにとり付てかなしみあへる有さまをみるになみだもせきあへず一人二人の事ならず二十餘人とりぬればいく田こやのゝへんにこそへんげのものが住やらん道ゆき人を中にてとつてゆきがたしらずと風聞すれ親をとらるゝ者も有一人もちたる子をとられきえむとかなしむものもあり丹

波はりま伊賀いせ近國たこくのもの共がいくたのあたりにみち〱てたとひまゐんのものがきてわがちち我子を取たりともせめて玄がいを見せてたべいつごろかこの野邊にたび人うせて候と尋かねたる有さまは野がひのうしのくれごとに子をたづぬるがごとくなりかくするほどにかべにみゝいはの物いふよのならひ兵庫の浦の人しらにこと〲くとられぬるとぞきこえける

たづねかねたるもの共が里大裡に參りていしやうにひれふしこれは丹波のわだのもの是ははりまのあかしの者これはきんやかたのゝものあるひはいが伊勢都のものたすけ給へと聲々にかなしみあへる有樣はめいどにおもむく罪人のゐんまほうわうぐしやうじんみやうくわん達のしやばにてのつみをかゞみにうつされごくそつの手にわたる時六道能化の地ざうそんたすけ給へところ〲にかなしみ給ふもかくやらん生死むじやうのうきよのなかげんせもめいどにたがはずとよそのたもともぬれぬべし御一門の人々此よしを御覽じてゑづむものこるもをしなべて一かたならぬしうたんども末來のごうとならせ給ふべしたとへばこの玄まなくしても何にふそくの御座あるべき今は扨のみ候へかしとをの〱申されたりければじやうかい聞召れて何とさう一門の人々たま〱淨海が思ひたちぬる大願をさまたげんとのせんぎさうやじやうかいもさほどの道にまよふべきにて候はずそれまかだこくのあじやせわうは佛生國のしやうぐんわうにうたれさせ給ふかいにち大わうは八萬四千人のきさきをころす一しやう太子はりうじゆぼさつのいのちをとる神通第一のもくれんはちくしやうげだうにうたれ給ふむしやう(本ノマヽ)のくにのほり給へる釋尊だにもだいばだつたに御あしをうたれ給ふこれおんぞうゐくのほうなりいはんや末世の人間にをひてをやせんあくふたつのりなくして成就する事あるべからずくにつなかきやうはおはせぬか庭上にひれふす

やつばらをもむよりそとへをひいだしじやうをつよくさひてをけ左右なく人をいる丶なとないしんにはらはた丶ねどもある丶けうきを見せんがため御ざしきを御たちありいたあららかにふみならし此島むやくとおぼさんずる御内とざまの人々御出仕はかなふまじいじやうかいけうくんせむものはあめがしたに覺えずとあひのしやうしをはたとたてれんちうふかく入たまへば御一もんの人々此よしを御らんじてやく神こんまがきたつてもこの人なだむる事あらじ三十人の人ばしらをなか／＼いそぎそろへよとてしのび／＼にとらすれば二十九人ぞとつたりける今一人とらんずる國ともへいあんあらざれば道行人もとゞまつてへんろ遠路ののたび迄もおぢをの丶ひてとをらず一人と成てぞ日ををくるあつぱれ國土のわづらひやあふさながらたみのなげきなり爰に諸國をめぐるしゆぎやうじや一人兵庫のうらをとをりける取手の人數是をみてこ丶をとをるはしゆぎやうじやの身

なれ共人待かぬるおりふしとをりあふこそさいはいなれ是を人數にせんとてくびにかけたる笠もぎすてやがて人數にぞなしにけるかくて三十人の人ばしらの思はいづれをとらねどなかにも彼しゆぎやうじやのゆらいをくはしく尋ぬるにたとへは津のくになにはいりえのみつまつに刑部左衞門國はると申人にて候か四十のいんにいるまで子のなき事をかなしみくらまのたもんに參り申子をこそしたまひけれくにはる三十二妻女二十八と申八月にゆふなる姫をまうくるときしも八月十五夜のくまなき月のさよなかに生れぬるひめなればとて名月女と名付てかん家本てうにもためしなふこそかしづきけれ其心中はくわう女にてえんでんたりしさうかはゑんさむの月にあひおなじかすみのうちのやまざくらにほひあくまで身にあまり人にまみゆる其すがたいけのはちすのあさつゆにかたぶくふぜいもかくやあらんひめのすがたを見きく人をよぶもをよばげりけるものぞみはおほく

ありけれどませのうちの八重ぎくもつゝめば色のますふせいりやうじやうするかたあらずして十三のくれまでひとりすむ十四と申花の春父にも母にもしのびめのとのねうばうはかりひきぐしてあしやの野邊にたちいでちぐさのいろをながめてあそぶ爰にひとつの物語あり丹波の國をがはのしやうのせと申ところはおむろの御領也けりかのところのあづかせをば仁和寺の藏人かねうぢとこそ申けれその人の子に藤兵衛いへかぬとて其ころ十九になりしが詩歌くわげんのみちにちやうじなさけも人にすぐれたりしが河内の國きんやに所領あるによつて十日ばかりきんやに有しが是もつれ〴〵さのあまりにあしやののべにたちいでゝうづらがりをぞしたりけるいへかぬ何となくひめのすがたを見付うつろひやすきむらさきのいろそめぬるこそよしなけれこゑたつばかりに思へども思ひのいろに立出てはあしかりなんとおもひとものものをばはる〴〵としのばせ我身は一むらすゝきのさぶらひけるにやすらひ立てひめのすがたをこころしづかに見たてまつれば夕日にしにかたぶき給へば姫は家路に歸らんとてこまつなぎの一ふさもえ出たるをとりもちて

春はまつこまつなぎにぞわか葉さす
　ふるはのいろも見えわかばこそ

くさむらにしのぶいへかぬがしのぶこゝろのつゝみかねて

春の野にぬしも見えざるはなれこま
　くものいにてもつなぎとめばや

かやうにゑいじてあらはれ出る名月は御覽じてあらはづかしや此のべに人あるべし其しらずしてくちずさみけんかなしやと思召れけるあひたおもひのいろもあをやぎのいとはづかしげなる御有様はつゆにしほるゝ花かとよめのともさそはでふりすてゝいそがはしげにてかへるさはあらしにたぐふ落花のふけゆくふせいもかくやらん家かぬいとゞこゝろのあこが

れてめのとがたもとをひかへふうふなさけの和合もわたくしならず玄しゆうのうちのあひしやうもいづもじの神の結びなりとらふすのべをふみならし草むらにきえむも此道なりいせ物語げんじにもかやうの事をこそつたへて候へたとへばそつじの儀なりともかせのたよりになびけてたゞ御供の人といひすてゝいそぎをつつき候ひてらうせきながら御ともを申べきにて候とこそことも玄らぬのべよりも取て馬にうちのせ申めのともともにひきぐして丹波ののせへぞかへりけるあらいたはしや二人の人々はふるさと玄のぶはなか／＼てうせきひまなくおもへ共めのとはなそれてをとづれす名月はちゝはゝのふけうをいたくはゞかりあけぬくれぬとせしほどに三年になるはほどもなし國はるふうふのなげきは申ばかりもなかりけり人の子の能よりもあしき我子をばなをしふびんにおもふならひいはんや是は佛神にきせい申て只一人もちたるひめにて有あひだよにたぐひなふかし

づきしをゆきがた玄らずうしなひてなげく思ひはいかばかりいたはしやはゝ御せんは二とせと申秋の玄もおもひにきえてぞはてにける刑部のせうくにはるはひとかたならぬ思ひともに妻女のかたみをとりあつめ高野のみねにのぼりつゝおくのゐんにてもとひきり妻女のかた見をこめをきて姫がゆく衞をたづねんとて高野のみねを下かうして先三熊野にまいらるる三つのお山をふしおがみたづね給へどゆきがたなしだうしやぶねにびんせむし四國に渡りてたづぬれどもそのゆきがたのあらざれば又船にびんせんしはりまのむろにあがりつゝ都の方のゆかしさにあけぬくれぬとのぼるとて兵庫のうらをとをりけるが取手の人數にゆきあひておさへてとられてろうしやと成とにもかくにも國はるの運のきはとぞ聞えけるすでにこの玄まは三月十八日のたつの一てんとさだまりけれ共人ばしらのわづらひによつて卯月も過て五月になる卯月五月はよき日もなしとて六月二十三日の

うしの刻にぞさだまりけるとられぬる者共がとてもたすかるべきいのちにあらずはやしてうみに入られてみくづと成てきえばやとおもひきるこそあはれなれなかにもくにはるの思ひぞいとゞあはれなるかくあるべしとごしたらば高野のみねにてつゆともえもともきゆべきものをうきよにもしもながらへばひめがゆく衛やきくとおもひかゝるしゆぎやうにおもひたつて今さらうきめをみる事よかほどにうすきえんならばなにしに生れきたりけんうらめしのちぎりやとてをや子のちぎりをは今更うらみ給ひけりか様におもひたまひけるうらみのねんやつうじけん又かみのめぐみにてや候ひけん丹波ののせにましますす名月女の御かたへふしぎのたよりぞ候ひけるそのゆへいかにと尋ぬるにたとへは津の國わたなべちかきかんざきにくつはのしやうじながきよと申人の子にこんどうじえげとてさふらひしが是もくにはるのひめのすがたを見つけより〳〵こゝろをつくせしに思ひのほかにかのひめのうせぬるよしをつたへきゝ世をあぢきなく思ひきつてやがてとんせいし諸國をしゆぎやう仕るがたんばの野せにつく名月女のましますとは夢にもおもひよらずいへかぬかもむぐわいにたゝずんでそでのうへのときれうを所望してやすらふかさもあれくにはるせんもむはひやうごのうらの人ばしらにとられぬるよとあさましくて何となく一しゆのうたをぞえいじける

うき世そとおもひすてゝも一すぢに
　人のうへにもうき事ぞきく

かやうにえいじてたゝずみけりおりふし名月はものごしちかく御座ありしが今のうたをきこしめしなにとやらんむねうちさはぎ人をいだしてしゆぎやうじやはいづくの人ぞと問すればしゆぎやうじや承てかくあさましき身にてよにありがほにふるさとを申べきにてあらね共つゝみても又何かせん是は津の國かんざきのものにて候めのとも名月もかんざきの者と

聞召ふきくるかぜもなつかしくてしやうじをほそめにあけそのひまよりも見いだせばとしにもたらぬしゆぎやうじやなりなふしゆぎやうじやいせんのあらましにうき世ぞとおもひすてゝも一すぢに人のうへにもうき事ぞきくとくちずさみ給ひしはさて世には何事のさふらふぞしゆぎやうじや承て人のうへと申も此ほつしんのゆらいなにをかつゝみ申べきかたつてきかせ申さんたとへば津の國なにはいりえのみつまつに刑部左衞門國はると申人の候ひしが一人のひめをもつたまのすがたを身にまとひなさけのふかき心ざしはやうきひりふじんにもあひをとらじときこえしをすみよしまふでのありしときそつとみしより玄づこゝろなきこひと成てより〳〵心をつくせしに思ひのほかにかのひめのうせぬるよしをつたへきゝ世をあぢきなくおもひきつてやがてとんせいしか樣に諸國をめぐり候がこの二三日さきほどにあき人のたよりにふるさとの事をたづねて候へば名月女のははは去年の秋むなしくならせ給ひぬちゝくにはるは高野のみねにてとんせいし諸國をしゆぎやう仕るとてひやうごのうらの人ばしらにとられ六月[本ノマヽ]二十三日に玄づめらるべきよしをつたへきくあふゆかりし人のゆく衞さへかくなりゆくよとあさましくて何となくこしおれをつらねぬると申名月はきこしめしゆめかとおもへばうつゝうつゝかとおもへばまことしからずかさねていかにとたづねさせ給へばなふさのみにとはせたまひそようきみのかやうになる事もそのひめゆへの事なればなにはにつけてうらみのかずなみたならではともなしよそのみるめもはづかしやとたもとをかほにをしあつる名月はきこしめしさる事のありしぞやすみよしまふでの有し時こしのさきにたまづさをひきむすびておとせしを供の下女が拾ひ取てみづからに見よと云何なるらんとみてあれば思ひもよらぬはなをみてつゆときえなんかなしさよもし此風のたよりをふびんと思召御返事ましまさば

かんざきに聞えたるしやかだうのかねのをにむすびてたべと書とめておくに一しゆのうたをかく

しらせてもしるしなくてはすぎのかど
　　あけぬくれぬといかでまちなん

とかきとゞめたりし水くきを只おほかたにおもひなしすてたりし事のありしぞそれをしのぶのこひごろも今きてみるぞよしなき我ゆへかやうになる人ならずばたゞいまもたちいでゝ父母の御事をもとはまほしくは思へ共われゆへかやうになるといへばさすがかうともいはしろのまつことの葉もかきくれておつるなみだのひまよりもめのとはなきかしゆぎやうじやにときれうたてまつれやとてれんちうふかくいり給ひきぬひきかづきたをれふしりうていこがれ給ひけりそいころ丹波のくにへはみやこよりほんけの一ぞく御下向有て三日のかりくらあり國に有あふ弓とりたち皆かりくらにいでらるゝ家かぬもおなじくまかり出るかゝるたぎやうのひまなりしにめのとのねうばうをめしておほせけるは此人歸らせ給ひてはいかに思ふとかなふまじすこしもいそぎゆきちゝのいのちにかはらんとおほせ有てとるものをもとりあへず夜半にまぎれて只二人丹波の野せをたちいでゝあしにまかせてたどりゆくかのみくさやまと申は木こりのかよふ道おほしかなたこなたとふみまよひとある木かげに立よりて一夜をあかし給ひけりかくてもはてぬ夜半なれば月西山にかたぶきほの〴〵とあかしかたなるさうてんにそう〳〵木かげをたち出る末の松山こひのもりこゝろばかりはいそげ共ゆく道さらに見もわかずにちりんいでさせ給ふをこそひがしとばかりわきまゆれせいほくにまよへど何とてか南へみちのなかるらんかくて二人の人々そのぬししらぬたまづさのふみまよひゆくおりふしをのまさかりをもちたりし山人一人ゆきあふたり此山人が見參らせあらふしぎや秋まちかぬるはぎの花ききやうかるかやおみなへし露をもげにてくねるかやしぐれに

そむるもみぢ葉とませのうちの八重ぎくにあひまが
ひぬる上らうのやかんのをそれもはゞからでそで忩
ほれたる立すがたは何を忩るべのたよりにか人りん
まれ成忩んざむにかやうにたちいり給ふらんとあや
しめ申てたつほどにとがめもとひもせられずしてた
がひにやすらふばかりなりいやこらうのへんげかあ
やしやと山人の思ふもことはりなりめのとのねうば
うこれをみてこゝろありげなる山人なればすこしい
つはりひやうごへのみちのあんないをも問ばやとお
もひいかに是なる山人にたづね申たき事のさふらふ
わらは共と申は當國はつかのこほりの（御ノ誤）ものにてさふ
らふがこれにましますす上らうのちゝ子はひやうごの
うらのつきしまのぶぎやうにたゝせ給ひて更にひま
なくおはします母子はけいばにて殊外にくませ給ひ
父子かへらせ給はぬさきにあらざる事を申つけうし
なふべしとのたくみのさふらふほどにみづからあま
りのいたはしさに夜半にまぎれて御供し是までまよ

ひてさふらへどもゆく衞を忩らでたゝすむ曲野にも
山にも忩るべぐさ兵庫の浦への案内ををしへ給へや
山人よ此山人がうけたまはつてさらばとくにも此み
ちをかくとはおほせもなくしてこなたへ御出候へと
てたに河をわたりそばを行めのとも名月もたがひに
たもとをとりかはし草葉々々をわけてゆきたかきと
ころにあがつて是はいにしへひやうごへのおひわけ
と申て候を近年人まつがたうけと申ならはすゆらい
の候をかたつてきかせ申度は候へどもすこしもさき
へといそがせ給ふ上らうたちにてましませばねんご
ろにはかたり申さぬなりあれ御覽候へにしへみちの
候はあれはむろたかさごへ下る道かまへてそなたへ
ゆかせ給ふなたつみへすこしゆき一だんたかきとこ
ろより東のかたを御らんぜられ候へみなとがはさい
たかしもかんとりすゝめの松原みかげのもりくもゐ
にさらすぬのびきやわたなべかんざき天王寺すみよ
しのはまも見えぬべしにしはあかしたかさごおほく

ら谷といふかたなり南にかすめるなぎさこそひやうごのうらにて候へ東西へわかつみちのべのいかにおほく候とさうへあやぶみましまさで兵庫のうらをめにかけてすぐにゆかせ給ふべしなごりおしほのゆふ日かげこれより御いとま申とて山人はみねにとまりけりめのともしうももろともにこのおそろしきやまの内道しるべせしうれしさよいかさま是は山人にてよもあらじ多年たのみをかけ申くらまの大悲たもんの山人とげんじ給ふかやありがたさよとかたりつゝさしもにものうきみちなれども此物語になぐさみてやう／＼ゆけば津の國のひやうごにつかせたまひけりあるうら人にゆきあはせ給ひ人ばしらのゆく衛をたづねさせ給へばこのうら人が承て惣じて人ばしらのゆく衛とてたづねきたりたらんずる者にあんないをもしらせ音信をもいはせたらん者をやがてとつて人ばしらに立べきとさだめさせたまへばいかに上らうたちをいたはしくおもひ申せばとてわが身にかへて申べきかなか／＼思ひもよらぬ事なりとかたりすてゝとをるさすがに道理なりければかさねてたづぬるまでもなくとあるところにやどを取て日數をくらせ給ふさても丹波のいへかぬは三日の狩くらすぎわがしゆくしよにまかりかへる御内の者はしりむかつてなふかみさまこそ過夜めのとのねうばうはかりひきぐしてうせさせ給ひて候をいかに尋申せ共御ゆき方もましまさずいかゞはせんと申いへかぬ聞てふしぎの事を申ものかなとれんちうにたちいり見ればげに／＼うせて見えたまはずこはいかにとあきれはてつねにすみ給ひしところを見ればくはしき事をかきをき給ふなに／＼今生ならざるはなのえんかやうにちりかはるべしとはゆめ／＼おもひよらざりしに父はゝきゞの御事をかせのたよりにきゝぬれば身のとががうもおそろしく御身のとがもうらめしやいたはしや母御前は去年のあきむなしくならせ給ひぬちゝくにはるは高野のみねにてとんせいし諸國をしゆぎ

やうめさるゝとてひやうごのうらの人ばしらにとられけふともあす共御さいごを定めぬよしを承るなさけのゑんがつきばこそ御身のうらみもおはせんめすこしもいそぎゆきちゝの命にかはるべし我もなからんそのあとにいかなる花になれ給ふ共おぼしめしわすれずはぼだいをとふてたび給へ返々とかきとゞむいへかぬこれをみてこはいかにひやうごのうらの人ばしら只大かたに思ひなしよそのなげきとおもひしに身のうへかゝるわがたもとの涙のあめと成ぬる事よ道理なりことはりやさらながらかねてはひよくれんりとこそちぎりしになどやゆめばかり忘らせておはせたまはぬぞととる物もとりあへずこまをはやめて打ほどにひやうごのうらにつきかなたこなたとたづねけるにひやうごひろしと申せどもげにやつきせぬちぎりにやねうばうのやどにたづねあひうれしといふもなか〳〵に申ばかりもなかりけり扨ちゝの御事はと問は中々音信をだにも申さぬ也とぞなげかれけるあふ御心やすくおぼしめせこのしまと申は五でうの大納言くにつなのきやうの一ゑんに御あづかりとうけたまはることさら國つなのきやうにはよきないゑんをもちて候やがてまいりてこのよしかくと申されければ國つなのきやうは聞召めんめんさまの御そせうを自餘の事にて候はゞいかでかそむき申べき此しまと申はわたくしならぬ御ぐわんにてくにつなばかりがはからひにて中々おもひもよらず明々日はかならず忘まつかるべきないだん有べしさとだいりに御まいり有てていちうあらはくにつなもこゝろのをよびは申べし御一門の御ざしきをうかがひ給へと仰ければいへかぬなゝめによろこびてわがしゆくしよにまかり歸りよもすがらしゆつしのいでたち引つくろひ明ればしゆつしつかまつるとてねうばうに語りけるは此事申かなへずば庭上にてはらきつてゑんまのちやうにてまち申さんとかたり里だいりに參り事の子細をうかがひけるにじやうかいか

ねこの御定めに三十人の人ばしら十八人はおとこにて今十二人は女ときくおとこをおきにしづめをんな十二人をいその方にしづめよとり〳〵のなげきをわきて見んずる事ども中々おもふもふびんなるべし一度にばつとしづむべしと仰いだされたりければ思ひきりぬるいへかぬもきもたましゐも身にそはず今申さではいつのよに申べきぞとおもひふるへるこゑをさしあげ一人ならぬなげきをわけて言上せしむる事世にもをそれいりたる申状にて候へども三十人の人ばしらのまんずるときめしをかれししゆぎやうじやはたとへばつの國なには入えのみつまつに刑部左衛門くにはると申ものにて候が去年のあき妻女にはなれさやうの心中にてや候ひけん高野のみねにてとんせいし諸國をしゆぎやうつかまつるとてこのうらをまかりとをり御ぐわんの人數にめしをかれ島のはしらと成さうべきか彼しゆぎやうじやがむすめは此いへかぬめがさいぢよにて候がちゝがさいごのよしを聞命にかはらんと申てこれまで参りて候へどもさすが女の身にて候ほどにをそれをなし庭中へ申あぐる事なふてあまりになげき候ほどにこの家かぬめが参りていちうに申あぐる事のかたじけなさよと申てをそれをのゝく有さまは水にしたがふ柳のふししづめるが如くなりじやうかい御らんじてやあれはなにといひたるそせうぞやそうじて人ばしらのゆく衞とてたづね來たらんものにあんないをもしらせいんしむをもいはせたらんものをやがてとつて人ばしらに立べしとさだめをきたるにたがはからひによつて是迄はきたりたるぞなんぢも思ふても見よ三十人の人ばしらを一人あはれ見とりかへば自餘のうらみはいかゞせんなか〳〵思ひもよらぬ事なれどもあまりになんぢがじやうかいにかけて申ところのふびんなれば明々日を相まちよそつとげんざむさすべしと仰有て御内にいらせ給へばいへかぬ時のめんぼくをほどこし我しゆくしよにまかりかへりねうばうにかたり

けるはあらめでたや明々日はかならず國はるを給はるべしとの御諚の候ぞ御こゝろやすくおぼしめせととにかくになぐさむれども名月はちゝにもあはでこのまゝ扱のみはてむかなしさよちゝよ／＼といひけるをものによく／＼たとふればきろうこくのはくとうがさんろにすてし父をこひらうふ／＼と三度よびきえ入つらんありさまもかくやと思ひしられたりさるあひだ人ばしらの吉日吉時にはや成ぬ三十のかごをつくらせ三十人の人ばしらをろうのうちにてかごにいれさせふね一そうに一人づゝとぞさだまりけるとられぬるもの共の妻子したしきものどもか近國たこくよりきたつてあれはわが子かわがちゝかあるひは兄弟なんどとてたもとにすがりかなしむをはういつじやけんのものゝふ共こゝろよはくてかなはじとしもつをあてゝをひのくる今をさいごの事なればいひたき事はかず／＼さこそと思ひやらるれどせめてちかづく事なければかさをあげたもとをあげ有にあられぬありさまはめもあてられぬふぜいなり中にもくにはるをばよの人ばしらにはまじはらせずそのゆへいかにとたづぬるに家かぬもさるゆみとりなればとてもさいごのきはと思ひいかなるしよぞんかたくむべきにくんびやうあまたそへよとてろうよりかごに入させちうにになひて出るめのとのねうばう是をみて只いまとをらせ給ふこそちゝくにはるにてましますと申もあへず名月はかさをかしこになげすて諸人の中ををしわけて此かごにすがりつきなふ名月女こそこれ迄まいりてさふらふ我もろともにしづまんといはんとすればものゝふ共しもつをあてゝのけむとすいへかぬ其身をはゞからでやあなさけなしとよものゝふたちその人一人ばかりをは御めんなるぞといひければ時の奉行のかづさのかみあらくな申そ其人はでう／＼そせうのあるかたなりすこしかごをかきすへなごりおしませ申せ承ると申てかごをかしこにかきすゆるつゐのわかれとおもへどもつかのまの

たいめんさこそやと思ひやられてなか／＼によろこびの涙はふちと成てくがにて玄づむばかりなりやゝ有て父くにはるおつるなみだのひまよりもげに心ざしのましませばこそ是迄たづねきたり給ふらめなにとてか人の子の親の思ふ心中にさういして有らんわごせがおもひふかうしてはゝはつゐに死してありくにはるもおなじみちへと千度百度思ひつれどもうきよにもしもながらへばわごせがゆく衛や聞とおもひかゝるしゆぎやうにおもひ立て今さらうきめをみる事もひとへにわごせゆへぞとよ子はかたきかたからかとせんおく二つをあんずるに人の子はたからにてわごせはおやのかたき也かくはいひてあれ共ふかきうらみはのこらぬぞ此年月佛神にきせい申せしりしやうには命のうちに見つるこそ何よりもつてうれしけれか樣に小車のめぐりあふべきみちならばはゝもろともにながらへてみるとだに思ひなばいかゞはうれしかるべきぞたゞしうれしきなかにもかくあさましきさいごのていをあのまれ人に見えぬるこそなによりもつてはづかしけれよし／＼それもことのゑんひめを思ひすて給はずばみしものとおぼしめしぼだいをとふてたび給へなさけなのめのとやかやうにちかきあたりにすみながらへてあるものが今までいんしむせぬ事のうらめしさよと有しかは姫はなみだのひまよりも御道理にておはしますゆるさせたまひさふらへやみづからともに玄づみつゝ御手をひかへて三津の川までの山路をこえすぎてゑんまのちやうの御供も申べきにてさふらふぞやみづからをもこのかごにそへさせ給へ人々とてもだへこがれかなしめばちゝもかごのうちにして泣てはくどきうらみてなくうとうがながす血いなみだ今こそおもひ玄られたれ人のなげきも我思ひもうきよにすめばおほけれどかかるあはれはたぐひなしと上下ばんみんをしなべてあはれと問ぬ人ぞなきかづさのかみは御らんじてかくては時刻もうつるなりはやしてかごをかへせよと

て又ちうにになひて出る
さるあひだじやうかいはわだの三さきの觀音だうに
て御けんぶつあるべしとてぎわうぎちよをさきとし
て御一門三百餘人さゞめき渡て見えさせ給ふ扨もは
かせのやすうぢはなぎさにかなしむありさまをみて
是はひとへにやすうぢがうとなりなん事こそくち
おしさよと思ひ觀音堂に參り庭上にかしこまりあれ
あれ御らん候へ諸人のなげきはひとへにあび大しや
うの罪人のねつてつのほのほにむせぶらんもかくや
と思ひしられて候されぱけうしゆ釋尊のなんぎやう
くぎやうじつさうをとかせ給ひて候を御思案あるべ
く候しやくそん一代のせつけうに法花經を經王とす
一萬部の法花經をしよしやさせられ三十人の人ばし
らの名字名乘を書しるししつめの石には年號日付龍
神なふじゆましませとてかいていにしづむる物なら
ば五十てん〴〵ずいきのくどくには八十をつこうの
生死のつみをめつし龍神なふじゆましまさばかなら
ずしまは御成就候べしいかゞと申されたりければ淨
海きこしめされてとかくの御返事もましまさず御ま
なこのけしきかはりければ御一門の人々もはかせの
安氏もみなせきめんしてこそおはしけれさても丹波
のいへかぬはそのをそれをもはゞからでねうばうめ
のとをひきぐしてくわんおんだうにまいり庭上にひ
れふしあら御なさけなの御事やたゞ御たすけあれと
申さんにこそにくし共おぼしめすべけれ二人のもの
に一人とりかへさせたまはんに何にふそくの御座有
べきぞしかるべくも候はゞ我々ふうふにくにはるを
とりかへさせ給へやとてんにあふぎ地にふしりうて
いこがれかなしみける淨海御らんじてふびんとや思
召れけんぎわうをめして仰けるは人のうへにふく風
の我身にあたらぬ事やあるいかにこゝろつよくとも
あの女にあはれをとふて得させぬかと仰いだされた
りければぎわうなゝめによろこふでいそぎ名月女が
そばにゆき御なげきをばじやうかいもふびんとおぼ

しめさるゝに御前ちかふ御まいり有て御申あれとて引たつるじやうかい御覧じてやあちかふきたつて申さず共なんぢがそせうをば聞わけぬるぞさらはくにはる一人をばあの女にとらせよのこる二十九人をば時刻うつればなげきのあるにとつくしづめよとおほせ出されたりければのこる人數のなげきはなか〳〵申許もなしかゝりけるところに淨海の御内に三十八のわらはの中にまつ〵わうこんていと申てみめかたちじむじやうなるが觀音たうに參り申けるは三十八人の人はしらをみな〳〵たてさせ給ふとも八のなげきのしまならば成就する事候まじ又おぼしめしたち給ふ御ぐわんをむだにしたまひては君の御意にもそむくべきなよせんはかせ御申のごとく一萬部の法花經をなよしやさせられ三十八人の代官になにがし一人立ならば末代島は成就してたえする事候まじいと申うけたるまつわうは上古も今もまつだいもためしすくなきこゝろかな

淨海ふびんに思召誠にずいきの涙をうかめあらふびんのものゝ申事やさらばはかせともかくもはからひたまへとおほせければはかせなゝめによろこふでいそぎはまに下り先くにはるをとりいだして名月女にたぶ扨又のこる二十九人をもみなとり出し給ひてこと〳〵くかへしたびければうけとり請取はまに出うれしきにもなみだつらきにもなみださきだつ物は涙なり三十八の人ばしらふしぎのいのちたすかるはなにはいりえのくにはるのひめゆへなりとよろこび我國さとへ歸てあるひは兄弟まこ子共に取付〳〵よろこぶ事うらしまがいにしへ七世のまごにあひぬるも是にはいかでまさるべきじやうかいよりの御諚にはたんばのくにのいへかぬが左うとが命にかはらむと思ひ切こそやさしけれきんやかた野のせの庄八百町をとらする左うとをふちし天下へ能心みやつき申せ本ノマヽとてくだしたぶこそめでたけれ又吉日をあらため七月十三日にさだめさせたまひて一萬部の法花經をら

くちう洛ぐわいのてら〳〵へ日記をあげて志よしや
させらる丶程なく御經出來ひやうごの浦へまいらす
るはかせ御經とりあつめかすの御へいを切たてふね
をしうかゐ打乘てはるかのおきへをしいだし御經志
づめ御へいをふつてきようしやくのつとを申さる丶
まことに松王のぞみ申ける間彼一にん人ばしらにた
てられけるぞそゆせうなるどくじゆの御經あるべし
とて一千餘人の御僧達を洛中洛外よりしやうじくだ
し給ひてなぎさに御經あそばせば大小ちくのけちゑ
んの龍神なふじゆあるによつて島は成就する十四町
の所なりきやうのしまと申て平相國のこうりうの今
に有とそ見えにける名月と申も只よのつねの人なら
ず鞍馬の大悲たもむてんの御はからひによつてきち
じやうてんによのけしんにてしまをも成就人ばしら
をもたすけんために名月とげんじ給ふ也扨松王と申
も只よのつねの人ならずだいにちわうのけしんにて
島を成就の其ためにたて給ふとぞ聞えけるつたへき
くいにしへのたいせ太子はかたじけなくもによいの
たまをとらんとてゑんしのかひをもつてちよつかい
をはかりつくしつゐにほうじゆ得たまへり大ぐわん
としては又つゐにむなしき事あらしこの淨海ゟ末代
たみをあはれみてひやうごに島をつき給ふ地ざうさ
つたのけしんしくうせいくわんの御ちかひありがた
しともなかなかに申ばかりはなかりけり

かまた

源氏左馬の頭義朝は待賢門の夜軍にかけまけさせたまひ東國さして落給ふ爰にせんぞくがけにてよかはほうしの大將におほやのちうきかはなす矢を信朝長の弓手の膝口にうけとめさせたまひ其御手大事にて美濃の國わうはかの長者のたちにつかせ給ふ長者いそぎたち出義朝の御目にかゝりさては朝長は御供かきかまほしやとありしかば義朝聞しめされて大事の手負さいごのきはといふならば長者の歎きふかゝるべしと思召さん候朝長をば惡源太とうちつれ鎌倉へつかはして候明年のころかならずぐしてまいるべしとふかくつゝませ給ひ其後鎌田を召れいかに正清朝長が手を見よ尾張をさしてひとまづおつべきにてもあるやらんくはしくとへ正清承りちうぐうの太夫信朝長に參りみやうにちは都よりうつてのまいり候べし夜半にまぎれてひとまづ御供めされ候へと申す朝長聞しめし御供申たくはさふらへどもいた手うすでに七かしよの手おいごたひやすからねば御供申がたし詞さらば平家の者どもにかきくびなんどにせられてはかばねのうへの耻辱たるべし唯々腹を切なんと御返事を申させ給ひやがて鎌田を召れいかに正清弓箭にたづさはりきゝうの家といひながらじがひをいまだしらぬなりいかやうにするものぞくはしく申せ鎌田承りさん候それじがいと申は十方じやうどとは申せども先最後の時は西にむかつて手をあわせかうしやうに念佛申腰の刀をするりとぬき弓手の脇にがはとたてめてへきりゝと引まはし心もとにさしたてゝ袴の着きはへをしおろし臟をつかんでくり出しずん／＼に切てすてたるをきよき自がいと申なり朝長聞しめし頓而心得たまひてをしてをしおきなをり腰の刀をするりとぬきゆんでのわきにがはとたてめてへやう／＼ひきまはしかへす刀を取なをしこゝろ

もとにさしたてゝきらん〳〵とゑたまへどもいたでうすでにうでこはり御身かうこうならざればゑがひをはんにゑかけたまひ鎌田はなきか首をとれ正清このよし見まいらせ泪とともにまいりつゝ御首をとらんとしけれども三代さうおんのしう君にいづくに刀をたつべきとなくよりほかの事はなし朝長は御覧じてふかくなり正清はやとく〳〵とのたまへばいたはしや御首をみづもたまらずかきおとし義朝にまいりつゝ御自がいのよしを申せば御落泪はひまもなし其後義朝かまだをめされこれより尾張へは何として着べきぞ鎌田承り長者の弟にわしのすのげんくわうをおたのみあれと申やがてわしの尾たのませたまへばやすきほどの御事とて柴舟くだすにことよせ人々をのせ申かせをたかくゆひあげ上に柴をつみかけこふづの七良が七百餘騎にてさゝへたる關所のまへをとかくちんじてをしとをしうつみの浦に船をよせ鎌田兵衛を御使にて長田をたのませ給ふ長田なんなくたのまれ申新造に御所をたて君をいれ申いつきかしづきたてまつるこの事都にかくれなし時刻うつしてかなふまじひいそぎうつてを下さんとて彌平兵衛家清に三百餘騎を下したぶ小松の内府御諚にはおろかなる御はからひかなかの東國と申は源氏に心ある事なりうつてくだると風聞せばあづまに殘る源氏がうんかのごとくはせあつまりいかさま大事も出來なんしよせんたばかり狀をこしらへ長田をたのませたまひくわぶんの國所領を一旦あたへみかたにめされ義朝をたばかりやすく〳〵とうつてのちかの長田もちうばつたる（あノ誤歟）べきに何のゑさい候べき此儀にゑくはあらじとてやがてたばかり狀をこしらへ長田が館へつけさせ給ふ長田なんなくたのまれ申御教書を戴きひらひて拜見申す其御書にいはく「下狀源氏左馬頭義朝は親の首をきるのみならずゑたしむべき兄弟をほろぼし六親ふはにして三寶のかごなし父母ふかうにして（本ノマヽ）天ばつをかうむるそのいわれあひかはすヵ、ル「去年

のつみきんねんにかんじ平治のたゝかひにかけまけていとをさつて遠島おんびにまよふわづかにろゐいをせきさり（本ノマヽ）にかけばせうのゑたひをらんぷうにまかすほゝたのみすくなきことは槿花一日の陰を待がごとく玄うふう春の雨をまつに似たり逆も玄めつすべきものおや此みかたにくみせんことはたゞゑんゑんにのぞんてはくひやうを踏に似たるべしはや義朝がかうべを切て天下に捧申べしけしやうには美濃尾張三河三ヶ國を宛行同じゆりやうは望たるべし仍狀如件平治二年正月一日長田が館へとかゝれたり詞長田御げうしよを戴夜半に人をまはし五人の子どもをちかづけこれ〳〵おがみ申せ綸旨のむね至極の道理是にありげにも義朝は親の首を切たまふ五ぎやくざいの人なるをしうにたのみてなにかせんいざ此君を討申美濃尾張三河三ヶ國をたまはり上見ぬ鷲とおもはゞいかゞはからう子ども承りこはゆゝしき御大事有候此人々三人を討には尾張國がうごきてもたやすく

うたれ給ふまじ御恩安（案ノ假借）あれと申す長田聞てふかくなりなんぢら勢をそろへてうたばこそたばかつて打べきに何の子細の有べきぞと申かゝつしところに三男せんじやうと申者ゑぼしのさきを地につけ仰のごとく此君は親の首を切たまふ五逆罪の人扨又一代ならず二代ならず三代さうおんのしうの首を切たまはゞ五ぎやくざいはさてをきぬ八逆罪をいかゞせんながながしくは候へども爰にたとへの候を語てきかせ申すべし昔てんぢくせつせんのかたはらにめいみやうてうといふ鳥ありかの鳥どうひとつにてはし二つひとつのはしがゑをもとめぶくせんとせし時ひとつのはしかしこくて此ゑをちうにてばうてくうひとつのはし思ふやういかなればよの鳥はどうも一つはしも一つ我等いかなるいんぐはにやどうひとつにてはし二つたま〳〵もとむるゑじきをもうばはるゝ事の口惜さよ所詮一方をたいぢせばやと思ひ毒の蟲をもとめてぶくするまねをせしとき常のごとく心得此ゑを

ちうにてばうてくう フシ はしは二つと申ともどうが一つであるあひだ フシ 其毒どうにおさまりてしんたひがやぶれつゝどうたひがそんしてをのれさへに死したると承りて候ぞ我も人も自然はもつてわひとしかるべし此君と申はせいたうかしこくおはします鎌田兵衛正清はならびもなきがうの者わらはにしぶやのこん王は弓矢をとつて名人と名をえたるほどのもの也是三人をうたんには尾張八郡うごきてもたやすく討れ給ふまゝ ツメ 我々が心中にはとてもすつる命ならば君にたのまれ奉りうつみに城をこしらへかたきむかふて見るならば軍兵どもをさしつかはして目ざまし軍せさせ（きサ脱スカ）軍兵つきば腹切てしでの山の御供こそ弓矢をとつての面目なれむかしが今にいたるまでむことしうとをうちとつていや世に出たるはうはなししかるべくば此事をたゞ思ひとゞまり給へとよ 詞 長田聞てことの外に腹をたて何と申ぞあのくはじやめそれ天地ひらけはじめてよりこのかた天は父地は

母父母のおんをかうむつて庄司が申事を直にそむくはきつくはいなりそうじてあのせんじやうめを見れば中々腹もたつ罷たてといふ儘に居たるところをづんとたち簾中ふかくいりたるはとかう申すにをよばれず グトキ 荒むざんやせんじやうは父にしかられ常のところに立ち入つくど〳〵あんじけるやうは親のめいをそむくとてしうに弓矢をひくならば八逆罪のとが主と一所になり申父に弓矢を引ならば五ぎやくざいのとがたるべししかじたゝもとひきつてさまをかへうき世をいとはばやと思ひとし十七と申すには緑のたぶさを押切て刀と友（共ノ假借）に西へなげつたのふぢ笈かたにかけ心と衣を墨に染とんせい修行に出たりしかのせんじやうを見し人のほめね人こそなかりけれ 詞 其後長田殘て子どもをちかづけにせんじやうめはとんせいしたるとなさてなんぢらはせんじやうにどうずべきか早々返事を申せ子ども承りともとくも御はからひのあしくはよも候はじと申す長田聞てうち

わらひかやうに申も汝等を世にあらせんがためぞかし先むこの鎌田をばせんじやうがていへしやうじ山海の珍物とりかゞ〱酒をしいよ酔たらんところを見て酌にたつたる者持たる酒をなげかけひらまん（るノ誤ニアラズ）とところをむずとくめひとまどころによき兵をかくしをきおりあふて討べしわらはのこんわうをばうつみの沖に大あみをおろしあみの奉行にことよせうつみにてうつべし主の義朝をば此庄司めにまかせよまづこんわうをたばかつてこそといふまゝにゑとみのもとのちりとらせ若き女をつかひにてこん王をしやうずるゑぶやさうなくきたる長田いそぎ立出三こん盃すぎて後いかになふゑぶや殿を頼み申べき事の候が但たのまれたまはんならば申べしこんわう聞て何事を仰候べき長田が大事たるべくは一命をなりともゑんずべし長田聞て打わらひそれまでも候はず我君の是までの御下向を一期の面目うどんげと存知蓬萊をからくみ君をいわひ申さんため蓬萊の下ぐみに魚と鹿がいることにて候程に五人の者どもをば三川の國あすけの山へ鹿狩にこしさふらびぬ又うつみの沖に大あみをおろして候が奉行にはつたとことをかいて候若き時のあそびにれうすなどりと申てくるしからぬ事なれば奉行にたつてたゞかしとうちとけがほにぞたばかりけるこんわうさゝあへずあかで腹こそたつたりけれたけなるかみをぶる〱とほどひておほわらはにぞなつたりける爰にたとへありはんくはいいきみをなせば菱甲のはちをおひぬくいつもはなさずもちたりし四尺三寸のかくつばの打ものつばもとノメ二三寸くつろげ長田をはつたとにらんで何とさう長田君を大事におもひ申さばごぶんなりともいづまじきかさなくばりんたんりんがうにはうばいども丶ありこそするらめなどよびよせて出さぬぞやうめいたいけんゆうはうもんとまり〱關々にて合戰に骨おりもののぐにかたひかせくだつて三日もすぎざるにあはの奉行にたてとさうや鳥のこがしろくなつて

こまに角のおいんほどまはられよ庄司定めて上へ申さるべし太刀とり繩とりさだまつて打て切てすてらるゝともまつたくこんわう出まじひ見ればなか／＼腹もたつ罷立と云儘に銚子かわらけけちらかしそとのていまでおどり出しかのこんわうかいきおひはいかなる天魔やくじんも面をむくべきやうはなし

詞去間長田はこんわうにおどされふるひ／＼座敷をたちかうのとのゝ御前にまいり何と物をば申さすしたゞさめ／＼となく義朝は御覽じてあれはいかに長田は何事をなげくぞさん候べちのしさいにてさふらはず我君の是迄の御下向をいちごの面目うどんげとぞんじ當世はやる蓬萊をからくみ君をいはひ申さんため蓬萊の下つみに魚と鹿がいることにて候ほどに五人の子どもをは家の子郎等がさしそへ三川の國足助の山へ鹿狩に越さふらひぬうつみの沖に大網をおろして候が奉行にはつたとことをかひて候ほどに御内のしゆやをたのうで候へば奉行にこそたゝざらめケトヽあまつさへとしよりたる庄司めをさん／＼にあつこうせられ申つれなく命ながらへこれまでまいりて候とはら／＼となく

詞義朝聞しめされてげにげにそれはさぞあるらんおたひあのこんわうはものぐるわしき者にて我いふ事をさへ五度に三度はそむく者ましてごぶんが申さんことをいかで承引すべきぞよし／＼庄司腹いて歸れ奉行には出さうずるにてあるぞとて長田を歸させ給ひて後こんわうをめさるしぶや承りあい庄司がそせう申たござめゆゝしき大事と心得御前にかしこまる義朝御覽じてあらけなくはのたまはでやあ何とて汝はちがうたるぞ都より此國まで長田をたのみくだる身が山ならば須彌山海ならば滄海よりも猶たのもしう候に一旦ちがうことありとながく承引はせざるべきその上れうすなどりとやらんは若き時の遊にてくるしからぬことぞとよ奉行に立て魚を取庄司が心をなぐさめよこんわう承り〳〵つしんで申けるはさん候それがしまつたく奉行に出

まじきにてもさふらはぬが長田がいまのふるまひを
見候に君に心がわりを申五人の子どもをばかりくら
にことよせさいそくまはし勢そろへ我君をうち申さ
んずるたくみをめぐらすと見て候を御存なきこそお
ろかなれ義朝聞しめされてよしそれとてもちからな
し長田が心かわるならば一所にありても何かせんも
しもちうしんたるべくば後のうらみをいかゞせんた
だ〳〵いでてうををとり庄司がこゝろをなぐさめよ
クトキこんわう承りあかぬは君の御諚とておうけを
申てごぜんをまかりたつが君も聞し召せとたからか
にフシ人はうんめいつきぬればちへの鏡もかき曇才
覺の花も散はつるらふどふがたばかるを御存知なき
ぞ口惜き詞かやうにかきくどきひとまどころへつつ
と入はだにはからくれなゐひつちがへしげめゆひの
ひたゝれの上下四つのくゝりをゆる〳〵とよせさせ
黒糸おどしの大鎧草ずりながにさつくとき惣而刀は
三腰さす四尺三寸の角鍔の打物三尺五寸の太刀をか

さねばきにはき四尺八寸の長刀をひきさげへにつゐて
かうのとのゝ御前に参りとうたいせんこの夕煙きの
ふものぼりけふも立ほくばう朝露のあた本ノマヽしみおくれ
さきだつ世のならひ君うつみにてうたれすばフシ参
りて御目にかゝらんと涙と友にたち出る義朝は御覧
じていまはしゝこんわうかど出いはへとの給ひてみ
づから酒をぞ下されける御暇申てこんわうはうつみ
の沖へ出にけりちぎりはあれど山鳥のおをへだつる
がごとくなり詞去間うつみにはかねてよりこんわう
にくみての人數を定むるに先一番にきしのおかの十
郎のくみをぐりをさきとしてむねとの大力卅六人大
船八そうもよほし上にあゆみのいたをわたしこんわ
うをのせ沖をさしてこぎ出爰にも魚がなきぞかしこ
にも魚がなきかと爰かしこと目を見合こんわうをう
たんとする澁谷もとよりぞんじのこととちつともさは
ぐけしきもなくもつたりし長刀にて舟ぞこをとふと
ふとつきならし何とてめん〳〵は夕日にしにかたむ

きたまふに綱手をばとらずしてや丶もすればそれがしに目をかくるこそふしんなれあふやがて心得たり汝等が主の長田君に心替り申某を此沖にてうたんずるたくみをめぐらすとおぼへたりカヽル思ひうちにあれば色外にあらはる丶天知地しる我しる人知まぢかくよつてかなふまじひ ツメ先長刀のきつてにはこむ手なぐ手ひらく手はつはうさひしき長刀の手をつかふものならばさんをみだしてうたるべし長刀おれくだけば二ふりの太刀をもつてさん〴〵に切べし太刀のつかおれくだけば三腰の刀をぬきかつ〴〵取て引よせさしころしてそこのみくづとなすべきなり運命つきはて丶太刀も刀もおれくだけば汝らがたぶさを取て五人も十人もさうのわきにかひこうで海底につつと入五日も十日もそこにて日をおくるならば汝等がめいはとゞまるべしまぢかくよつてかなふまじひとともへをかけり廻ればうつみを出しときにはこんわうならば我々まん誰々まんとはいさみしかど

此いきおひにおそれつ丶舟底せがいにひれふしてふるひわななきゐたりけるはことおかしうこそ見えにけれ是はうつみの物語爰に物のあはれをとゞめしは鎌田兵衛正清なりよひまではごせんに伺公申さよふ(候ノ假借)けがたにおいとまたまはりらうのやに歸りみたいしみた若とて二人の若のありけるをゆん手めての膝におきクトキをくれのかみをかきなで泪をながし申けるは正清都にて度々の合戰にそゞろに命のおしかりつるもたゞなんぢらが有ゆへなりいつかなんぢらせいじんし父が供をつかまつり耻ある矢をも一筋いるそのおりからを見るならばいかゞはうれしかるべきと フシあけ暮是をねがひしに思ひの外に引かへて君おちうど丶なり給へば御供申て正清もうたれんことは治定なりさあらんときに汝等は三川の國しんふくじのゐんしゆのごばうにふかくけいやく申なりゐんしゆの御坊にまいりつ丶せうきやうの一巻をもよきに學して正清がなからんあとをとへやとてつ丶むに

おまるその泪餘所のたもとも濡ぬべし詞らうのおかたは御覧じてこれはいまだ正月三日もすぎざるに御身は何をの給ふぞといひもあへぬにしうとの長田くみてをあまたよふひして鎌田どのやましますもの申さんとありしかば正清しうとの聲と聞これに候とて太刀をつとり出とする（人ノ脱スルカ）らうの御かたは御らんじて袂をとつてひつとゞめおはてたり鎌田殿さはいでみえさせ給ふものやけふこの比のならひにて親は子をたばかれば子は又親にたてをつくしかも御身おちうどにてよろづに心を置べき身が　サシ　あくまじき夜にてもなし今夜をあかしたまひて　フシ　夜明てお出さふらへやかまだ殿とぞとゞめける正清聞ていつよりもむつましげなるふせいにて立歸りうちわらひなふさのみ留給ひそよめさるゝは御身の父正清がためにしうとなりいながら返事を申さんはふかくのいたりとぞんずるなりやがて歸らんさらばとてなごりのたもとひきさけて長田とつれてぞ出にけるかりそめながら

別とは後にぞ思ひしられたる詞去間せんじやうがていへしやうじ山海の珍物こくどのくはしをとゝのへいろをかへては三度もりふせいをかへては五度七度盃の數もかさなればさしもにがうなる正清も次第次第にひらめいたり長田是を見てあは時分はよいぞと思ひちやうだいへつつと入かいを一つ取いだしみおんさつとうちはらひにつことわらつて申やういかになふ鎌田殿此間の御つかれ思ひやられていたわしう候こどももあまたさふらひぬしやうじもかくて候へばなにかはくるしく候べきたゞうちとけておあそびあれかいのみにとつては山田のがうと申て三百町の所の候を鎌田殿に奉る庄司三度たまはるなり　ツメ　御身も三度まいれとてむこの鎌田におもひさす去間正清しうとの呑たる盃に所領をそへてえさするうへいづくに心のおかるべきさしうけ／＼のむほどにみぢんつもつて山となりいさごちやうじて岩となる盃の數もかさなればゆんでの座敷がめてへまはりめての座

數がゆんでへまはつて天上のおほゆかゞひらりくるりとまいければうしろの忘やうじによりそひてとろり／＼と眠けり酌にたつたるともやなぎもつたる酒をなげかけおしならべてむずとくむ鎌田もとよりがうの者きつしつたりといふまゝにともやなぎがたぶさを取てひざの下にひつしいたり長田是を見て脇たる所をづんと立て鎌田がたぶさをとつてうしろへゑいとおりつくる鎌田是を見てなさけなし長田きやうにはせらるまじひと長田をかいつかんでとつてひきよせたりけれどもいかゞはもつてのがすべきかくしをきたる兵がすきをあかせずおりあひて一刀づゝと思へども十三刀きゝれて棲喰といきむ正清もよはよはとなつてかつぱとふすクドキ荒むざんや正清最後の言葉ぞ哀なるされば諸事にもつまじきものは國をへだつる妻子なりおやのおこす謀叛をなどかはしらでであるべきぞたとひえんこそつくるとも二人の若があるなればなどさいごをばしらせぬぞやなゝのこはなすとも女に心ゆるすなと申つたへて候さいしちんぼうぎうわういりんみやうじうじふずいしやげにもおもへばかたきなり子は三界の首かせとはいまこそ思ひしられたりさんがいのくびかせとぼんなうのきづなにひかれつゝふかくのしにをするものかなフシ南無阿彌陀佛みだぶつと是を最後の言葉にてあしたの露ときえにけり正清のさいごのていをしはかられてあはれなり詞さすがに長田もふびんに思ひ夜あけて首をとらんとてむなしき死骸にきぬ引おほひ各々なりをぞしづめける荒いたはしやらうのおかた是をば夢にもしろしめされずさよふけ人もしづまりて見弟のひと／＼もみな／＼歸らせ給ふがふしぎや妻の御前正清はなにとておそく見えさせ給ふらんとうすぎぬとつて髮にかけとうらうまはりまごびさしを通るとき人に忍ふだる聲にて鎌田殿やまします正清とよびけれどよひにうたれた事なれば夜更てよぶに音もせずよまのていを見てあればあぶら火すごくかきたて

あたりに人一人きぬひきかづきふしてありうたれたるとは思ひもよらず酔臥たるぞと思ひする〳〵とよつてなふ御身は鎌田殿にてましますかさやうに酒にえひたまひてはしぜん我君の御せんに何とてたゝせ給ふべきおきさせ給へといふまゝにきぬ引のけて見てあれば(クドキ)紅に身をぞ染にけるあまりの事のかなしさに(フシ)死骸にかばとうちかゝりしばしきえ入給ひけりすこし心を取直しさこそ最後に自をうらみさせ給ひつらん夢にも白しらぬなり我をば誰にあづけ置すてゝいづくへゆくやらん我をもつれてゆけやとて最後にぬかぬ刀をぬきすでに自害と見えけるがまてしばし我心明日になるならばむざんや二人の若どもは父母が行衛をしらずして父よ母よとよぶならばじやけんの祖父伯父ごにて鵜鷹のゑを打やうにうたせたまはんむざんさよ同じ道にと思ひ切又らうのやにたち歸二人の若を見給へば兄が手をば弟にかけ弟が手を兄にかけよねんもなうてふしにけりらうの

御かたは御らんじて二人の若をかきいだき父正清の臥たり(しナ脱スルカ)せんごにとうとおろしをきいかに二人のわか共よ祖父おぢごのしはざを見よなさけなの事やとてりうていこがれなきたまへば二人の若も諸ともに臥しづみてぞなきにけるさてあるべきにてあらざればいかに聞か兄弟よかくうらめしき浮世にながらへてあらんよりちゝもろともにうちつれてゑんまのちやうにて母を(まチ脱スルカ)てよとかたりつゝ兄みたいしを引よせて弓手のひぢのかゝりを二刀がいしてをしふする弟が是を見てあらおそろしの母上や我をばゆるしたまへとて居たるところをづんとたちさらばよそへもゆかずしてころすべき母にすがりつくいとゞ心はきゆれどもまなこをふさぎ思ひ切心もとをひと刀あつとばかりを最後にて兄弟のわかどもを三刀にがいしつゝわが身ははだのまぼりよりしゆへんのじゆずを取出し西にむかつて手を合わさゝやだに女は五障三從にゑらまれて罪のふかいとうけたまはるきうせんにかゝ

るみづからをたすけたまへや神佛南無阿彌陀佛とさいごにて刀をくちにくはへつゝ鎌田の玄がいにうちかゝりあしたの露ときえにけりらうの御かたのさいごのていあはれといふもあまりあり 詞 荒いたはしやごんせんは是をば夢にもおぼしめされず鎌田うたれぬると聞しめしさこそらうのおかたがなげくらんととふらはばやとおぼしめしらうのやに立寄よべどこたふるものもなしさては鎌田うたれぬるところにあるぞとおぼしめしよまのていを見たまへばらうのおかた二人のわかみな／＼あけにそみ同じ枕にふしてあり母此よしを御覽じて是は夢かや現かや クドキ さりながらだうりなりことわりや何にいのちのおしからん子よりもとごはいとうしきに花のやうなる若どもをさきにたてよはひかたぶくみづからが一人あとにのこりなば深山がくれの遲櫻 フシ 梢の花は散はてゝ下枝にひとふさ殘りて嵐をまつにゝたるべし我をもつれてゆけやとて母も玄がいをとげたまふ平治二年正月の二日の夜の事なるに鎌田をはじめ父子五人みづのあはとぞきえにける 詞 天あけゝれば長田鎌田が首をとらんとてよまのていを見てあれば我女房をさきとしてみな／＼あけにそみ同じ枕にふしてありさしもなさけなき長田とは申せどもこゝろよはりとんせいするか腹を切かいかゞはせんと思ふがいや／＼身より出せるざいなれば荒くはほうなのものどもがなつたるありさまや長田が世にいづるものならばくはほうのさいぢよはいかほどもあるべきになむさんぼうあみた佛とへんしゆの念佛を申鎌田が首をとつたるはとかう申にをよばれず其後義朝の御前にまいり今日は三ケ日の御かれい八幡宮へ御社參有べく候たかみのゆどのと申て玄さいなきところのさふらへば御出あつて御ぎやうずいと申義朝聞しめされてせんぞの郎等ならずはたがかやうにふるまうべきかまへて長田弓矢のみやうが七代まであんをんなれやとの給ひて御ぎうたいの御劍御腰の物を長田に預け給

ひしは御うんのつくるところなりとて[illegible]御めだの
のうたへ入給ふよゐよりさだめし事なれば都合二首
御前にてゆどのをふたゝび重にをつとりまひてとき
をどつとあぐる義朝聞しめされて心替りか長田さん
候由よりうつての勢にて既に御自害あれと申す義朝
聞しめされて長田がことはかねてより思ひまうけつ
ることなさけなし鎌田たとひ舅と一所になり我に心
かわるとも三代さうおんのしうになどさいごをば玄
らせぬぞやいかにゑい長田刀まいらせよ自がいせん
と仰ければ承はると申て刀に鎌田が首をそへゆどの
のうちへまいらせあぐる義朝鎌田が首を御膝の上に
かきのせ給ひてカヽル荒はかなのたゝ今のうらみご
とや我よりさきにたちけるぞや フシ玄での山にてま
（てノ誤カ）ちよゑいさんづの川でおひつかん ツメ腰の刀をする
りとぬきゆんでのわきにがはとたてめてへきりゝと
引まはしかへす刀をとりなをし心もとにさしたてゝ
袴のきゝわへをしおろしざうをつかんでくり出し四

方の雲になげつけゆんでにて御手をすゝぎ西にむか
つて手をあわせ何とて義朝[illegible]なれぬそさる事ありや
父爲義天台さんぐわちりんの御坊にふかく玄のびて
おはせしをたばかり出し申て御首を切申すそのいん
ぐはたちまちむくうて死なれぬ事は口惜しいかにゑ
い長田いそぎまいりて首をとれ長田さうなくまいり
えず長刀にてさしまいらせおづ／＼御首たまはりぬ
フシか[illegible]の御で うたれたまふたゞ人間のゐんぐはは
めぐるにはやきものであり去間長田は義朝の御首を
もやす／＼と給りぬいまはこんわうが首をおそしと
まつるさてもこんわうはうつみの沖にありけるが
いならすむなさわぎ玄きりなるは何事か君にましま
すらんと心もとなくぞんずれば舟をよせよとげちを
する方をよばゝ次第とてさうなく舟をさしよするこ
んわうゆらりととんでおりいとま申てめん／＼とて
五十町のところなるをもみにもうでぞはしりける爰
に鎌田がめしつかひし下女一人はしりむかひさて御

身はいづくへ行てましますぞ鎌田殿はゆふべうたれたまひぬ君は今日たかみのゆどのにて御腹めされさふらひぬいまは御身の首を遁しとまちさせたまふにいづくへもひとまづ忍のばせ給へと申こんわうきゝあへず泪をはら〳〵とながしさばかりそれがしが申つる事を御せうゐんなくてうたれさせたまひて候やさては鎌田は御心得をば申ざりけるやおふ尤かうこそあるべけれさだめて長田は我館にはよもおらじ君の御さいご所たかみのゆどのにぞあるらんそれがしがうたれんずる事を一定と心得うちとけたらん所へつつと行長田が首を打おとし御けうやうにほうぜんと心のうちにぞんずればツメたかみの城を心懸てゆらり〳〵とあがりけり長田是を見てすはやこんわうがうつみにてうちもらされ是迄きたつたるはあますなもらすなとてまんなかにとりこむるこんわう是を見ておもしろし長田そなたはまうせいなり我はたゞ一人まいりさうといふまゝに大勢のなかへわつていりさん〴〵にきつたりけり去間長田かなふべきやうあらざれば我館をさひてもみにもうでにげにけりこんわう是を見ていづくまでといふまゝに長田を目にかけてはしりけり去間長田我が館へつつと入堀のはしをひいて四穴のきどをちやうとうつこんわう是を見て荒もの〳〵しけら（本ノマヽ）のたけりといふまゝに三重の堀をばひらり〳〵とはねこして八尺ついぢのありけるに手をかくるこそおそかりけれかけずゆらりとはねこへおう門あんらうとをさぶらひ[illegible]間をおつては忍りしは荒鷹かとやくゞつて雉子をおふがごとくなり去間長田つま戸よりもつつとぬけ行かた忍らずなりにけりこんわう是を見て力をよばぬ忍だいとて又とつてかへして大勢の中へわつて入西東北南くもでかぐなは十文字八はながたといふものにさん〴〵にきつたりけり手本にすゝむ兵を五十三騎切ふせ大勢に手をおふせ東西へはつとおつちらしうそのわたりをさうなくし都をさひてのぼりけるこんわうが心中

をば貴賤上下をしなべかんせぬ人はなかりけり

ふしみときは

抑常葉御前のせんぞをくはしく尋に父はむめづの源左衛門はゝはかつらのさいしやうとてゐんにみやつきたてまつる一年天下に女くらべの有しとき千人が中を百人すぐり百人が中を十人すぐり十人のなかよりも三人えらびいださるゝ一人はあやめのまひ一人はまこものまひ今一人はとつこのまひとぞ申ける彼あやめまこもと申せしはかほいつくしくかざりつねにいしやうをめしかゆるとつこの舞と申せしは更にけしやうはなけれ共いつもたへせぬすがたなれば名をときはとつけよとてとつこのまひをひきかへて常葉の舞とぞつけ給ふそのころよしともは天下のしゆごとまし〳〵て家もさかへうへこす人もましまさずより〳〵さんだい有て所望申されたりけれ共みかど御用ましまさず有時よしとも之しむでんの之もくちにてへんげの物をきりとむるみかどえいらんましましてくわんもつかさもなにならずもとよりのぞみの事なればさらばときはをとらせよとてかたじけなくもみかどは常葉のまひのたもとに御手をかけさせたまひて一二のきざはしたんすのいしあまおちのきはにて給はりけり

（常：盤ノ假借　よ：へノ誤　とつこ：前ノ假借）

そのころときは十七さいよしともは三十三かりそめぶりになれそめていま三人の子をまうけかゝる思ひにふし之づむあらいたはしや常葉御せんいづくへもひとまづおちばやなんどおぼしめすがまて之ばし我こゝろ四條のばうもんほりかはのゝのとが宿所にをき申母子をばさていかゞせん又三人のわかどもがよはひをものにたとふるに出る日つぼむ花なれやいかにはういちじやけんの物のふと申共八十にあまり給ふはゝ子によも目はかけじ其儀にてあるならばいづくへもひとまづおちばやなんど思召あにいまわかのしやうぞくははだにねりぬき引ちがへあきぢしろの

（はう：御ノ假借）

ひたゝれのすそをとわかのしやうぞくはくれなゐのふたつぎぬひきまはしのおびばかり御身は十二ひとへもはかまのそばたからかにさしはさみ二さいになりし牛若を三五のあひにかきいだきいちめがさにてかほかくしとうのうらなしさしはひて五條あたりのくろつちをはじめてふむぞあはれなる

ころはいつぞの比ぞとよゐいりやく元年正月十七日の夜の事也清水參りと申て諸人かずをしらざりき上下のだうしやにうちまぎれきよみづに參りつゝひだりのかうしにつや申とをのれんげをもみあはせ八ふんのかうべを地につけて抑御寺は田村丸の御こんりう大同二年に立られやまよりたきが落ればみなかみきよき御てらとて扨こそがくにも清水寺とはうたれたりみづからが十七歳より今までまいりのりしやうには三人のわかどもがゆく衞までほりてたび給へなむ大悲くわんぜおんとわにぐちちやうどうちならしなみだにむせび給へばことに御ほぞんも御なふじゆやまし〳〵けんみすもきちやうもさゞめひてぼうしやもゆるぐかとおもへばいとゞしゆせう也さるあひだ常葉御前とゞろきの御ばうにうつらせ給ふひじり涙をながしそれきうちやうのふぢはまつにはなれていろ見えず三がいの女はかしこしと申せ共一人のつまにをくれたよりなしとはいまこそおもひしられたれいたはしやよしとものうき世に御座の御時はかりそめぶりのきふでもこしくるま乘物よとさこそゆゝしくおはせしにいつそのほどにひきかへてかちはだしなる御ありさまを見まいらせ候へば更になみだもせきあへずこれにしばらくとゞめ申たく候へども六はら近きところなればいづくへもひとまづおちさせ給へと仰けり常葉きこしめされてさんさふらふみづからがおちうするかたは大和の方にて候いとま申てさらばとてとゞろきの御坊を出させ給ひ爰はかたきのやかたのまへこなたへこよやわかどもとて二人の若の手を引てとをるところはどこ〳〵ぞ三十三間いまぐ

ま野一二のはし法性寺明ればは正月けふははや十八日の事なるに宇治ははるさめふりけれどこばたの山は雪ぞふるいつ君がたまさかにあはゞふならはせ給はねどふる京ら雪を御手にてうちはらひ〳〵あしにまかせて常葉御前まよはせ給ひけるとかやあらいたはしやわかぎみたち御こゝろをあげさせ給ひ何とてわれわれにおちやめのとはそはざらんさて又みだいさまにかいしやくにんは參らぬぞつめたやなふはゝみだいとおどろがなかにたをれふしりうていこがれたまひけりときは此よし御らんじてふかくなり若どもよされば（に）やなんぢらはげんじの大將たるべき身がかくふかくにみゆるか明々日に成ならば共はらがたへいけどられいま君はおとなしきとて六でうかはらできらるべしつぎをとわかはさしころしうしわかいまだにやくなれば時らうとゝもにいけどられかも河かつらがはに沈づめられなん其時はつめたい共申まじさむいともやはかいふたゞいとおしきものとてはうしわかひとりで候とてそこをみすてゝおち給ふわか君たちは御覽じてなふつめたいとも申まじさむい共申さじとて御たもとにすがりつきこばたの山にかゝらるゝいたはしゝともなか〳〵申ばかりはなかりけり

さるあひだときはごぜんと有松のこかげに立よらせ給ひてふる白雪をいとはれしがむかひの谷を見給へばともし火がほの〳〵とみゆる人すむところにてあればこそ火は見えてあるらめとはる〳〵くだつて見給へば賤がいほりぞさふらひけるとほそをほと〳〵とたゝき是はみやこのものにて候がこのゆきみちにふみまよひこれまで參りてさふらふ一夜の宿をかし給へとさも高聲にのたまへばうちよりもあるじのむばがたちいでゝ戸ぼそをあけ常葉の御すがたつくづくと見まいらせ内へはしり歸てなふいかにおぼぢごかどのほとりに女のこゝろとしてやどかせと申ほどにたち出でみてさふらへばあたりはとりもかゝやく程

の上らうのおさあひ人をあまたつれやどかせと申がうつたへの人にてはなげなぞなふこの山にすむなるこらうやかんのものがおほぢやむばをじきもつにせんためかさらずば今夜はゆきけしからずふりつみたればゆきをんなといふ物かあらおろしやと申おほぢ聞てそれはこらうやかんにてはあらじむばはよもしらじおほぢはあら〳〵すいしたりいで〳〵語てきかせんかたじけなくもしゆじやうじやうくわうのくらゐあらそひの御時六でうの判官ためよしじやうくわうがたをつかまつりつゐに合戦にかけまけてんだいさん月りんの御ばうにふかくしのびてましますを眼前の御子よしとも討手を給ててんだいさんよりさがし出し七條しゆじやかこんけたうをか田と申ところにて御くびを切申其いんぐわたちまちむくふてたいけいもんの夜いくさにかけまけぬるは道理なりこれによつて六波羅よりよしともがたの落人をばいはをもわりたいない迄もさがせといふ事なればもしもよしともがたの落人にてや有らんにかりそめにやどをまいらせておほぢは何となるべきぞ其ねうばうに宿かさずば今夜一夜のうらみたるべしうらみはするもとをるまじやあこなたへこよやむば御前とてしばのあみ戸をはたとたてこばたの里の事なれば皆くちなしとをともせずあらいたはしや常葉御前さきへとゆけばみちもなしあとへ歸れば山路なりあたりに人のあらばこそかなたこなたとかりもせめさて有べきにてあらざればおほぢが家かげに立よらせたまひあたりのゆきをはらひのけ御こそでをぬいでさつとしき若君たちをすへならべ人のおやの子を思ふみちほどにあはれなる事よもあらじいちめがさをそばだてゝ風ふく方のかきとなしかんぷうをふせぎ給ひけるさるあひだ常葉御せんあかつきがたの事なるに諸法のうゐてんべんのことはりをおぼしめしいだされていかにわか共ものをきけさればほつけ一乘のくりきはたつとし一の卷のはうべんぼんに十方佛土中ゆいう

一せうほう無二やく無さんしよぶつはうべんせつととかれたり此もんの心は十方佛土の中にたゞ一乘のほうのみ有て二つもなく三もなしほとけのはうべんのせつをのぞくのぞくといつぱいち一すなはちめうなりされば妙とかける文字はへんには女作りにはおさなしとかけり此ことはりを聞ときは只みづからとわか共はめうの一字にてあらずやさあらん時は十方の諸佛もなどかあはれみなかるべきうらめしのうき世やな南無阿みだぶつみだ佛と十ぺんとなへたまひつゝ又わかたちにうらかゝりりうていこがれ給ひけり

おほぢ此よしきくよりもかどの邊に女のこゑとしてたつときをとのきこゆるは宵に宿かり給ふ上らうのいまだかへりかねてましますげなぞなふたかきもいやしきも女はおなじ事にてあらずやあらこゝろつよやと申むばこのよしを聞よりもそれもこゝにたとへのさふらふたにの枯木はたかしといへどもみねの小松にかげさゝず宵におほぢごのよしともがたの落人にてやあるらんとかたくせいぶんし給ひしその一言のおそろしさに扨こそこなたへとは申さねおほぢさなしとのたまはゞむばはいやにてはさふらはずいざやこなたへ申さんとてふうふたちいで戸ぼそをあけなふあれはよゐの上らうにてましますか御身一人ならずおさあひ人をあまたつれいづくよりもいづかたへ御通有ぞと問ければときは聞召れてうちうら見たることはねにてさればこそとよ山人よ風にはもろき露の身のきえぬは人のいのちにていまだながらへてさふらふぞやいたはしの事やとていまわかどのをばおほぢがいだきをとわかどのをばむばがもりでゐへしやうじたてまつりあたため申に玄たがつてすそのつらもとけにけりかくておほぢはあひのしやうじのひまよりも常葉の御すがたをつく〴〵見まいらせなふいかにむば御前でゐにまします上らうはよのつねの人にてはなげなぞなふそれをいかにと申にむかし

みあ能人はかんのりふじんそとをりひめをのゝ小町の若ざかりびしやもんてんのいもうとにきちじやうてんによと申せしはもろこしてんのほとけにておれらごときの兼作等古名をのみ聞て目にはみず當時ふめよき人はあやめのまひまこもの舞よしとものみだいどころくらゐのうへのときは御せんとやらんもこれにはいかでまさるべき一しゆのうたをかけまいらせ御こゝろのうちそつとひき見申させ給へむば此よしを聞よりもそれはわらはがわかざかりみやこに有しときこそ月見はな見と申てうたれんがをもたしなみさふらへ三十年かあひだふしみのさとにすてられ歌道の事をばはつたとわすれてさふらふおほぢむかしをわすれさせ給はずば一しゆのうたをかけ參らせ御こゝろのうちをちつとひき見申させ給へおはぢなゝめによろこふであひのしやうじをほと〲と音づれ一首はかうぞ聞えける

本はた山おろすあらしのはげしくて
　　やとりかねたる夜半の月かな

常葉きこしめされてあらはづかしやすがたこそあまのゑびすに似たれどもこゝろは花の都なりけりみづからもこしおれうたなり其よまばやとおぼしめし

本はた山すそのゝあらしけはしくて
　　ふし見ときけとねられざりけり

おほぢやむばが承て扨はうたがふところもなしよしともがたの落人なりでゐは人目もあけければやあこなたへしやうじ申せとてぢぶつだうをこしらへときはをしやうじ奉り歌をよみ詩を作りけふもゆきがふり候けふもけはしう候夫はれて上らうのおぼしめされんもところ迄おほぢやむばがをくり申さんけふもけふとゝむればあるじのなさけにほだされて伏見の里にときは御せんはあらたまの月をこしきさらぎに成迄おはしますかくておほぢのあたりに人にめしつかはるゝ者もをんな共がひとつところにあつまつて申けるはむかひのたにのおほぢ（御ノ假借）子の本にこそ正

月のなかごろよりみめいつくしき上らうの御宿をめされいまだかへりかねてましますよしをうけたまはれ共我も人も人につかはれ參らせてひまなき身にてさふらへば參りておがみ申事もなしけふはそらはれ月も能さふらへば主々にいとまを申いざやまいりておがみ申さん尤去かるべしとて都合女は五人何ゑがなもつて參らふ時世に去たがふけうなればとてめん〳〵にちよくしゆを持つれておほぢがでゐへさつとかゝりさけのいりたる物をとう〳〵とする爲ならべ常葉の御すがたをつく〳〵とまぼりとれてぞゐたりけるときは此よし御覽じてあらおそろしとまほるやあのやう成げすはかならずくちのきたうなるにみづからいつはりをかたらばやとおぼしめしなふいかにねうばうたちわらはなぐさめにきたり給ふがうれしきにあんぼくなくは候へどもみづからが古郷を語てきかせ申さん本國は大和の國ふる里はうだのこほりやまざとのものなりみづから十四の春の此父母に去かられ參らせみやこにのぼり五條あたりにこやどを取高きもいやしきも女のならひこゝろにまかせぬ事とてやがてとのごをまうけ御覽さふらへ三人のわかをまうけてさふらふかゝるわりなきなかと申せどもあらたのみなの男の心や一でうむろ町にはじめてつまをかたらひ二とせかよふと申せどもみづからさらにねたまずそれもこゝにたとへのさふらふいせ物語につたへたり男は大和のものならひ（本ノマヽ）河内の國にかやすといふところにはじめてつまをかたらひこれも三とせかよへどもあとにのこれるふるき妻のねたむ事こそなかりけれ男猶[illegible]思ふやうわれたらでよのこゝろがあればこそ我をばねたまざるらんと兩女をねたむある夕ぐれにわれは河内へゆき候いとま申てさらばとてたちをつとりわきばさみ河内へはゆかずして南おもての花ぞのに夜すがらかくれゐてさいおよのていを相みるにあらむざんやこの女是をば夢にも去らずしてぢぶつだうに參り備前にむかひかうをもり

花をつみ夜すがらことをひきならしうらみなひてぞゐたりける夜半計に此女しろきひさげに水をいれむねのあひだにをきければかならずゆにぞなりにけるすてては みづをいれ夜すがらむをひやしけるこれは三とせが其間ねたしとおもふ心ざしいろにはいださざりけるがほむらとなりてにへにけりすでに曉のかねきくころにも成しかばくるしげなるいきをつき是より河内のたかやすへはたつたごえと申て惡所の有ときくものをいつの日の何時かこの山にて我つまの死せんず事のかなしやとおもひつらねて此女一しゆの歌をぞゑいじける

風ふけはおきつしらなみたつ田やま
夜半にやきみかひとりゆくらん

とかやうにゑいじたりければ男このよし聞よりもけんしむ二君につかへず貞女りやうふにまみえずといまこそ思ひしられたれ

すがたかゝりのまさる女はありとてもこゝろのまさるねうばうのありつべしともおぼえずとて河内がよひをおもひきりふるき妻にぞちぎりけるそれを誰ぞとたづぬるにざいご中將なりとかやかやうの事を思ひよそへみづから更にねたまぬをあたりのともたちが我をとぶらひいふやうはおかたはいまだしろしめされぬや一でうの上らうをこの家のうちへいれまいらせ御身をば大和のうだへをくり申さんとのたくみのさふらふおかたとそはん事共もいまいくほどか有べきあらなごりおしやといふまゝにたもとにすがりなくほどにねたまじものとはおもへども其ときみづからはらがたちうらめしやてんにすまばひよくのとり地にあらばれんりのえだ神ならばむすぶの神佛ならばあひせんわう五道りんゑのあなたなるしやか大悲のゆんでにさふらふねはんのきしはかはる共われらがいもせはかはらじとふかくたのみをかけつるに男のこゝろと河の瀬は一夜にかはるとつたへしもいまこそおもひしられたれとへみづからにこそ緣つ

きはてゝをくるとも三人のわかをさきにたてゝ出るならば子ともにめがくれよびかへさぬ事はよもあらじとそれをたのみにかけそら出にいでゝさふらへばなさけも志らぬ子どもの親にてよび返す事こそなかりけれ志かもそれはあらたま月に一度出たる男のところへ二たび歸らんはづかしさめんぼくなくはさふらへども又おやをたのみ大和のうだへくだりさふらふが此ゆきみちにふみまよひ有じのなさけにほだされこのほど是にありつるぞやわごぜたちも若ければせう〳〵ねつたき事有とも男のもとをそこつにいでゝこうくわいすなとの給ひてあまりの事のかなしさに志のび〳〵のなみだ也おはぢやむばが承てたゞ今こそ上らうの御ゆく衛をくはしく承て候へさてしも五人のねうばうたち御しゆをばよくもちてまいりたれどもさかながなくてはきよくもなし歌をもうたひ舞をもまふて上らうさまをなぐさめてたべ五人のねうばう承てみやこの人こそこゝろが月や花に似てうたをもうたひまひをも舞給へわらはどもの申はねにふしとらにをききんうひがしにかゞやけば常夜のねぶりはやさめやもめがらすのうかれ聲かうぞとなひてつげわたるとりもろともにねやをいであさゆふのせいろをいとなみ御主の御意にちがはじとそれをのみこそたしなみさふらへうたをもまひをも志らぬなりさりながらわらはどもの得たる事のさふらふ五月になれば田へおりて たうと おとこに はや(本ノマヽ)はれてめんめんにさなえをつとつて一拍子にさしかゝり田うたといふ事をすこしづゝ覺えてさふらふがそれをなりとも歌をふずるかなふおほぢ閉てあふさる事ありうしをばたうりんの野にはなし馬をくわざんのやうに返すかもさむうして水に入にはとりさむうして木にのぼるしよほうじつさうときくときはみねのあらしも法のこゑそれをなり共ひとつづゝ申せ〳〵とおほせけりさてしも五人のねうばうどもひとつくにのものにておなじ田歌を一拍子にうたふべきかとおもひ

てあればさはなくして五人が五國のものなり一人は
出雲一人ははりま一人は丹後一人はいづみいま一人
はとをたうみのくにの者なりおほぢ子のおほせにて
候にをぬしうたへいやそなたからうたひはじめてこ
そこなたにもうたふべけれそれうたへたれうたへと
ばつたひしとあらそふそのなかにとつても出雲の國
のねうばうとしすこし おとなしく見えけるがいや
いやもんだうはむやくみづからうたひ初てそのつぎ
つぎをうたはせむといふよりはやくづんどたち時な
らぬ田うたをはつたと上てうたふたり田うへよや田
うへよさうとめ五月ののふをはやむるはかんのふの
鳥ほとゝぎす山がらこがら四十がらこのとりだにも
さわたれば五月ののふはさかんなりしどろもどろに
うたひなし舞を一手まひおさめ一せいをこそあげに
けれめでたやありがたや天照大神くまのゝごんげん
かしまかんとりすはあつ田すみよしかもの下上祇園
しやうぢやにむめのみや八まん大ぼさつ惣じてかみ

の御數は九萬八千七しやとぞ聞えけるたかまがはら
に神とまします神の父神の母いざなぎいざなみのみ
こと也われらはが吾總出雲の國にたち給ふそさいをの
みことされはかみの御ためにそうまんどころこのた
びあゆみをはこぶともがらたれかりしやうをうけざ
らん是もしやうをうけとつてたゞ今の御座敷の上ら
うにまいらせんあらめでたやとうたふたりそのつぎ
をみてあればはりまなるたかさごや〳〵おのへの松
は高からで然たにすむは何やらん富とさいはいさつ
と請取て只いまの上らうに是をそへてまいらせんあ
らめでたやと申てさかづきをつとつてやがて御し
やくに參りけりそのつぎをみてあれば丹後の國のね
うばうかうこそうたふたれたんごの國にはひさしき
人をたづぬるにうら嶋の明神七百歳をたもち給ふを
つかうなれあひあまのはしだてくせのとのもんじゆ
のちゑとさいかくをさつとうけとつてたゞいまの上
らうのわか君さまにまいらせんあらめでたやとうた

ふたり其つぎをみてあればいづみの國のねうばう年を申せば十八さいにまかりなるかほにもみぢをちらしてうたひかねつゝ打うつぶひてゐたりけりうたふたる女どもこのよしをみるよりもわごぜは人に歌をうたはせてわれはなにしにうたふまじきと申ぞうたへ〳〵といふまゝにたもとをとつて引立るそれまでもさふらはずうたはんといふまゝにゐたるところをづんとたつてながえのちやうしをきつとかざひてひしやくとつてうちかたげざしきを二三度まはり候てはつたとあげてうたふためでたやなわらはが古郷いづみの國のものなれば其名によそへていづみがわひてさふらふぞのこりの女ども拍子を打そろへやごぜわごぜそこつなる事な申そいづくのほどにわひたぞあふこゝのほどにわひてさうながえのてうしに銀のひさくにてくむとも取共よしつきじかゝるめでたきいづみをばたれにかまいらせん〳〵あふそよまことわすれたりたゞ今の御座敷の上らうに参らせんあら

めでたやとうたふたり其次をみてあればとをたうみの國なるはまなのはしのつめのもの名所の者なればいかにおもしろくうたはんずらんどこゝろをすまし目をすますところに此女がまひをば辭して玄もおちさしてはしりいるうたふたる女どもこのよしをみるよりもわごぜはうたをうたはずしいづくをさしてにぐるぞ出よ〳〵とせめければさはなくしてこのをんなきるものゝつまをたか〳〵とさしはさみたもとよりもたすきとりいでさつとかけふりたるかさのところ〴〵やぶれたをきつと引そばめつゝといでゝきよくにかゝつてうたふた遠江なる〳〵はまなの橋の下成はこひかふなかはへの子かいかになんぢらかりりうめく共かりうめく共しや取てうちあげて只いまの御座敷のさかなにまいらせんあらめでたやと申てきよくにかゝつてくるひけりざしきうちの人々一度にどつところゑをあげおどるばかりにまひおさめ座敷にどうとなをりけりわかぎみの御くわほうするゑはん

じやうと聞えけり

ときは問答

去程にときは御前はほどなくきよもりになびき給ひけり老木の花のながらへてはるにあへるがごとし子共のみるめもはづかしやつまのかたきになびくこそたぐひすくなき次第なれこゝろつよくてさてはてばわが身の事は扨をきぬ母や子どものゆくすゑまでよもすなほにはあらじものをと思ひのほかになびかれけるさてこそきよもり引かへてあさからずちぎり給ひけり

三人の若たちにもあまたのめのとをそへさせ給ふ母のにこうもいたはりていつきかしづき給ひけりときは心に思召今こそかやうに有ともかはるならひのあるならば又うきめにもあひぬべしするゑ迄子細のなからんは出家のすがたに衣かじとていまわかどのはだいごの寺をとわかどのをばおんじやうじへこそのぼされけれうしわかどのはおさなくていまだめのとにいだかれてあかしくらすとせしほどに七歳にならせ給ひけりときはこゝろに思召あのうしわかと申は兄弟が中のくせものなりたいしよへのぼせをくならば人のくちもおそろしく都ほどりにひきこもれるてらをたづねてのぼすべしいづくにか有らんと仰いだされたりければ有人申けるやうは鞍馬寺と申はゆげの女院のみはかたう本尊は大悲たもんてんふくちゑともにまんぞくせり牛若殿の御ためにはよかりなんとぞ申ける

ときは聞召れて其儀にて有ならばみづからよそながら一けんしさも有なんと思ひなばうしわかをくらまへのぼせばやと思召かりそめぶりの御まふでなればあじろのこしの衣たすだれさあらぬていにかけさせ御とものの人々にも女房たち一二人はしたの女二三人りきしやばかりを御ともにてかはらをのぼりにまいらるゝかものみやしろふしおがみ七まがり八ちやう

ざかくらまにつき給ひけり地しゆごんげんふしおがみらいだうにまいらせ給ひてかうじのうちへ御いり有らいばんにむかひ禮しつゝ高座にむずとあがりてかうろとりあげけいならし玄ばらくねんじゆ玄たまへりかゝつしところに鞍馬寺の別當とうくわうのあじやり日中のつとめのそのためにらいだうに參りかうしのうちを見給へばゆふなる女着座してはやねんじゆなかばと見えにけり

とう光御覽じてやはか女のみとしてたい法座へはあがるべきたさんのちごの僞て寺をわらはんそのためにぶらいちやくざのねんじゆかやさありとても一たんとがめばやと思召いかれる面をふりあげてやあいかに聞か只今高座へあがる人をちごかとみればさはなくてはかいむざんの女なりおなじ人間といひながら女人はさはりおほくしてきよきれい地ふむ事なしましてや持かいぢりつの高僧貴僧ならではないぢんのかうしへのぞむ事はなきものをそのうへふじやう

げだいなき男子の身だにものぞまぬにかゝるいはれを玄りながらてらをあなづりのぼれるか又もとよりぐちのをんなにてまよへるまゝにのぼれるかぜひに付てひがことぞもつたいなし女房よはや出よとぞいかられけるときは聞召れてこなたの事をおほせさふらふか本よりぐちの女にて玄らで參りてさふらふぞをしへてたべとて仰ける東光聞召げに知ずはをしゆべしそれ釋迦佛と申はじやうぼんわうの御子なり七多太子と申せしが十九にて出家をとげだんどくせんにとぢこもりあらら仙人を玄とたのみなつみ水くみつま木取六年きうじ玄たまひ玄んくをとげさせ給ひて廿五にて僧に成ぐどんと申奉る又六年はちやう座にてまどろむ隙もましまさず十二年を經給ひてぼだいじゆの本にて佛とならせ給ひて御名をば釋迦と申なり三十の御年よりけごんきやうをとき給ふ三七日の間なりしちしよはちゑに是をとくあごんきやうと申は十二年のあひだ也はらないこくろくやおんにて

この法をとき給ふぞういちあごんちやうあごんざうあごんちうあごん此四あごむのなかにも女を殊にいましめりはんにやきやうと申は三十年にとき給ふあたらしきはんには一萬六百卷二百六十餘品なりかみのかずを申に一萬八百三十八文字の數は六十おく四十萬字に及るさるゝ此はんにやきやうのなかにも女高座へあがれといふようもん更になきぞとよもつたいなし女房よはや出よとぞいかられけるときは聞召れてげに〳〵いはれのさふらひけるぞやもし此きやうのなかに女をほめたるきやうもんのあらばこの高座をば出まし御ひじりまけさせ給ひなば法師のうへのふかくたるべしわらはまけてさふらはゞをんなのふかくたるべしずいぶん此女も一言つかひ申べしまづそまかどうじ經にとくしよさい（本ノマヽ）すべし男子をうみてたねをつぐなんし此ほうぎやうせばまさにげだつを得べしもしせん（本ノマヽ）こうとあつくわのほうこのことばをろんせばうちむちしゆたばらもんびしやしゆたとうに至る迄しやべつも更に有まじ經のせつとのたまはゞ一切經の惣一法花經をもつてほんとせり彼法花經と申はだいごみのきやう也まき數は八卷文字の數を申に六萬九千三百八十餘字につもれり彼だいがうに妙法れんげきやうととく其第一の筆はじめにめうといへるもじを書へんには女作りにはおさなしと書てこそめうとはこれをよまれためうと書ける文字のよみかず多とは申せ共先たへなりとよまれたり六萬九千三百八十餘字のもん〳〵は別の事をばほめずしてめうをほめんが爲也妙と書ける心は言にものべがたし筆にもいかでつくすべきごんごだうだんなる間しんきやうしよめつなりとかや愛をもつて安ずるにまんぼうのいたゞきは女をもつて極たりかの法花經と申は釋迦佛の御年七十三と申二月上の八日にときはじめ給ひて八ヶ年の間せりやうせん（及ノ誤）への十ぼんはじよぼんはうべんぼんひゆぼんしんげぼんやくさうゆぼんじゆき品けじやうゆぼん五百弟子品及んぎ

品ほつしぼんこくうへ（ゑノ誤）の十一品はほうたう品だい
ば品くわんぢ品あんらくぎやう品ゆしゆつ品じゆり
やう品ふんべつくどく品ずいきくどくほんほつしく
どくぼんじやうふぎやうぼさつぼんしんりきぼん是
也又りやうぜんへ歸て七品とかせ給ひけりぞくるい
ぼんやくわうぼんめうおんぼんふもんぼんだらに品
こんわうぼんふげんほんこれなり惣じて二十八品な
りそのほかのせうぎやう五千餘巻のなかにも女高座
へあがるなといましめ給ふもんもなしおぼつかなし
べつたうの扨こゝろのうちこそおかしけれとうくわ
うおほきにもきもをつぶさせたまひて此もんだうに
まけなばかつうは寺の名おりたるべしかなはぬ迄も
今一言つかはばやと思召面白ねうばうあるきやうの
なかにせうさんせんかい男子しよぼんなうかつしゆ
ゆい一人女人しごつしやうととかれたりこのもんの
こゝろは三千界のあらゆるなんしのもろ〳〵のぼん
なうをあはせあつめもつて女人一人のごつしやうと

すされば地獄は外になしをんなにかぎるところ也女
人一人生れなば地獄のつかひ來るとて三世の諸佛は
ゑたをまきおぢさせ給ふとこそきけとをくかんかを
尋ぬるに天台山の高山へ女の參る事はなしいわうざ
んまれいさんしやうりやうぜんに至迄女をゆるし給
はずまぢかきあきつしまにもゑんりやくじ高野山初
瀨をかでらやたへま寺たうのみねに至る迄ないぢん
のかうしへのぞむ事のあらざればはるかにおがみ奉
るかいぎやうの程のつたなさよ女と生れける事もひ
はうしやうほうなる間ぐちのやみふかふしてゑつと
のおもひあさからずじやねんをつくる事もなし御堂
のけがれ候ぞとうして御出ましませ猶も御出なきな
らばげそうともに申付をひいだすべしとぞいかられ
けるときは聞召おほきにはらを立給ひいかにやとう
くわうものをゑらずば無言あれたつとき人のけしか
らず女をそしり給ふ事にくむにはあらずかならずり
んゑのごうをはなれんがため也まよひの前になんに

よ有さとりのまへになんによなし善惡二つなきゆへにじやしやうも更にへだてなしこれはふかきこゝろにて申ともしろしめさるまじ先みゝちかに申べし佛も母がましませばこそまやのためにはじめてほうおんぎやうをとき給ひたうりてんにあがりひちげがあひだ法をときはゝのためにほうぜらる佛も昔はぼんぶにて太子をおはせし其ときは三人のきさきおはします一をばやしゆだらによ二のきさきをばいぎとてさうなく人にみせられず第三にくたみとてことによ
うがんびれいなりその三人の御なかに御子あまたおはします嫡子をばらごら太子つぎにぜんぢやうびくなりきやしゆだらによと申は釋迦佛のいんにしゆとうぼさつとおはせし時くいによといへる女に五もとのれんげをうえてのちねんとうぶつとくやうせしそのやくそくのつきずしていまやしゆだらによと生れて太子にちぎりこめ給ふ大唐のいわうざむしやうりやうぜんにいたるまでをんなをそしり給ふ共りやう

かいの法をばやはかはそしり給ふべきたいごんりやうぶかけて後ぢやうしの二法たちがたしさの玉ふ東光も母のはらにやどつてくちしんまんをぐそくせりさいせか（本ノマヽ）うらいしやうないしはらしやに至る迄父母ともにあたへし女をそしるほうしはゝのおんをそむけり父母のおん知ざるをば只ちくるいにたとへたりかみをそり衣をすみにそめたれ共ぐちなるものをぞくと云うへのかたちはかはらねどこゝろにほつしん有人を法師とこれを名付たりとうくわうのごとく
にきやうのもんをしるべにてこゝろにほつしんなき人をけうしやとこれを名付て木にかゝるふぢのそらへあがるがごとくにてをのがちからで更になしぐちまうねんをさきとしていたづら事をほんとする人のこゝろのはかなさよさもあれ此寺はいづれのみかどの御時にいかなる人の御願にてたてられけるととひ給ふとうくわうきこしめし我寺と申はくわうとくてんわうの御代の時勸進のひじりはもとはならほつし

くわんちやうばうと申せしが南部をいでゝ天台山北谷にすみ給ふせうそうづと申てうげんちとくのひじり也彼僧都のすゝめによつてめうらくだいしの御建立ゆげのねうゐんのみはかたう本尊は大悲たもんてんふくちゑともにまんぞくせりときは聞召よの事をはさてをきぬこのもんだうにはかちぬるぞそれをいかにと申に女をいれぬてらならば女院のみはかをばなどこれには立をかれけん其うへだいひたもんてん女をそしり給はずしんの御弟子御いもときちぢやうてん女御前とてひだりのわきに立給ふげにと女をえらみていださるべきにさだまらば女ゐんのみはかときちぢやうてんによもろともに御寺をいだしおはしませみづからも御供してべちに寺を結てあんじせんはいかにやべつたうとこそおほせけり

もんがく

爰に源氏の御代にいでさせ給ひたる由來をくはしくたづぬるにもとはつのくにわたなべげんじの大將にえんどうむしやとうふさがその子に遠藤たきぐちもりとうと申せしが出家してのかいみやうをもんがくとこそ申けれそのころあらざる大行をくはだてしんごんけうに心をかけごくねつに笠をもきずげんとうのさむき夜にふすまのかずをもかさねず大みねかつらぎを七度とをり熊野のなちのたきに三七日うたれ正身の大聖明王にあひ奉りしかばすでにごんじやとこそ申けれ其後みやこへのぼりあたご山のふもと高尾のしんごじと申古寺に御座有しがかゝるさうゐいぶつかくを建立すべき事こそ本望なれまづしゆろこんりうあるべしとて洛中らくぐわいをくわんじんしてまはられしが東山ゐんの御所ほうぢうじどのへまいり是はたかおのしんごじのかねつきだうの勸じんに參りて候御ほうがあれともんがくはくわんじんちやうをたからかにこそよみ上けれころは卯月上旬の事なるにをそざくらちる木のしたはさむからでそらにしられぬうの花の雪は御庭にちりしきてやまほとゝぎす村雨にぬれてさわたる折ふしに雲上のくわんげんかうは半也上らうたちは御覽じてそう〳〵なりあの法師後日にまいれ御ほうが有べしとの御諚也もんがく聞召れ何雲上のくわんげんかうとや笙笛きんくごびはねうとうのあそびは一たんのゐいぐわかねつきだうの勸進は末世のためにあらずやくわんげんかうをとゞめ御ほうがあれともんがくは又くわんじんちやうをたからかにこそよみあげけれ上らうたち御らんじてそう〳〵なりあのほつしをおひ出せとの御諚也承ると申て靑侍七八人はらりとたつてもんがくを引立後日にまいれ御ほうがあるべしとのせんじにて候にかさねて參る事こそきつくわいなれいそぎ

いでよといふまゝにそくびをつゐてをひいだすもんがくこゝろにあたはぬ事なればいかにもしづかにあゆみ出るいそぎ出よと云まゝに勸進ちやうをひんばふて二つ三にひつさきかしこへがばとなげ捨又取て引立て門の外へぞいだすもんがく御らんじて抑これは何事ぞいなならばいくたびも其由をこそいふべけれ黑衣のうへのちじよくをあたふるところはいこんなりつら〱物をあんずるにせんじゆの二十八ふしゆ藥師の十二神明とがうさんぜぐだりやしや明王のがうまのりけんを引さげてあくまを退治し給ふに何ぞもんがくがたいしたる此けんはいつのれうぞと思召うすずみぞめのころものそでをくる〱とくりあげてめてのわきよりもこほりのやう成劍をぬきをつぷせ〱さすほどに青侍を七八人時刻もうつさずさしころすしゆもんのぶし共あつまつてたか手こてにいましめて庭上のこにはに引すへたり上らうたちは御覽じてほつかうもの丶もんがくとはあのほつしが事かいそぎうんきをはねよと儀せられければすでに死罪にをよびけり

され共ほうわうよりのせんじにはたとへばあのしやもんこそはかいの者といひながら種々のほうゑを身にまとひたるものをつるぎのさきにはかくべきぞ七でうおほぢにどくつをかまへおとしいれ百日を待べし百日すぎばほりおこし跡をはとふて得させよとのせんじなれば宮人等すきくわをもつていで七條西の洞院に二丈五尺につちあなをほつてもんがくをおとし入うへにもつちをはねおほひ百日日數をおくりしはげにあはれなる次第なりかくて十日計うちすぎてもんがくのろうのあたりに聲有てこの内のひじりひじりとありしかば文學きこし召れてかやうにどくつにこもりて後とひくる者もなきものを一向にわれをうしなはんとのせんじにてありけるなぢよくあく世中なるあひだそれとてもちからなしとこそ仰けれさはなくしてちうだう藥師いわうぜんせいよりの御諚

にはたとへばあのしやもんこそはかいのものといひながらあらざる大行をくはだていまだ其願成就せず今度のいのちをたすけをき諸願せさせんとの御ぢやうにて十二神の中よりもこんぴら大しやう御つかひに參りて候どくつのくらきやみならばるりのつぼを得さするぞつぼのひかりでてらしてゆけ食事の望の有ならばとてもくすりを得さするうへ藥をぶくして命をつげそれ給はれやもんがくとてげにあてやかなる御手にてるりのつぼをぞくだされけりげにとくらきやみをばつぼの光りでてらしけりしよくじの望のあるときはくすりをふくしていのちをつぐ何に其身のおとろふべきやせず黑まずもんがくは日數をくりたまひけり又十日ばかり打すぎちうだうやくしいわうぜんせいよりの御諚には左樣にどくつにこもらんよりも我前にきたり御經をよみだらにをみて百日をまつべしとの御諚也文學承てかやうにどくつに籠て何としてかは出べきぞ其時こんぴらはらをたてさやうの心中にてこそかゝる無明のくを受れ神通自在たるべくばなどかたやすく出ざるべきもんがくげにもとおぼしめし居たる所を立とおもへばその身はけしのごとくにていでられけるぞしゆせうなるさてこんぴらとうちつれてちうだう藥師に參りつゝきやうをよみだらにをみて給ひてあかしくらすとせしほどにはや百日になりにけり

まんじける夜半にかたじけなくも御本尊はみちやうのうちよりもあらたに御こゑをいださせ給ひいかにもんがく日數もけふは百日とおぼふるなり人のこゝろをやぶるはぼさつのぎやうにあらずやいそぎどくつにかへりほうわうよりの御尋にあふべしとの御諚也承ると申て急ぎどくつにかへらるゝさるあひだほうわうよりの御諚には有し時のひじりは日かずもけふは百日とおぼえたりいそぎどくつをあけあとをばとふて得させよとのせんじなればくわんにんらすきくわをもつていてどくつをあけてみてあればやせも

せずくろみもせずいとゞ氣色はあてやかにつこと笑て出給ふ官人きもをつぶしつゝ東西へはつとにげちつたり文學御らんじてなふなにとてどうてんし給ふぞこれは有しときのひじりにてはなきかともんがくにちからをつけられてやう〳〵こゝろをとりなをしもんがくをしゆごし奉りほうぢうじとのへぞ參りける

上らうたちは御覽じて御めを見あはせ玄たをまいておぢさせ給ふほうわうえいらんまし〳〵てしゆせうなりもんがくさるたとへあり愚者のつくる善はせんともにつみちしやのつくるつみは罪ともにせんとは今こそ思ひ玄られて候へさらば有し時の勸進ちやうをよみ候へちやうもむあるべしとの御諚也もんがく聞召れてくわんじむちやうがあらばこそ時刻うつしてかなはじと持たるあふぎををしひろげくわんじんちやうをたからかにこそよみ上けれしやみもんがく敬白ことには貴賤だうぞくの助成をかうぶりて高尾山のれいちに一ゐんを建立し二世あんらくの大裡（利ノ）をごん（假借）ぎやうせしめんとこう勸進の狀それひそかにおもむ見れば玄んによくわうだい也しやうぶつのけみやうを立（絕ノ借）といへどほつしやうずいまうのくもあつくおほつて十二いん玄んのみねにたな引しより以來本有玄んでんの月の光りかすかにしていまだ三德（毒）四萬（滿）のたいきよにあらはれずかなしきかな佛日はやくばして生死るてんのちまたみやう〳〵たり只いろにふけり香にふけるたれかきやうざうてうえんのまどひをしやせんいたづらに人をはうし法をはうす是あい（借字）ゑんらごくそつのせめをまぬがれむや爰に文學たまたまぞくぢんを打拂て法衣をかざるといへど惡行猶こゝろにたくましくして日夜に罪をつくりせんべう又みゝにさかつて朝暮にすたるいたましきかな二度三づのくわきやうに歸てながく四生のくりんをめぐらさん事を此ゆへに無二のけんしやう千萬ちく〳〵（ぢくチ脫スルカ）に佛種のいんをあかしずいえん至城（誠ノ借字）のほう一つとし

てぼだいのひがんにいたらずと云事なしかるがゆへにもんがく無常のくわんもんになんだをながし上下のしんぞくをすゝめ上ぼんれんだいのえんをむすびとうめうがくわうのれいぢやうをたてむとなりそれたかお山うづ高してじゆふせんのこずゑをへうし谷しづかにしてしやうさんとうのこけをしけりがんせんむせんでぬのを引れいゑんさけんでえだにあそぶしんりん遠してけうぢんなししせきことんなふしてしじむのみありちけいすぐれたり尤ぶつてんをあがむべしほうがすこしきなりたれの助成せざらんやほのかに聞しゆしやゐぶつたうくどくたちまちぶつしんをかんずいはんやいつし半せんのほうざいにをひてをやねがはくは建立成就してきんけつほうりき御ぐわんゑんまんなんし（いノ音便歟）とひりんみんゑんきんしんそぎやうしゆんぶゐのくわをとた（うノ誤）ひしんによさいくわいのゑみをひらかんことには又しやうりやうゆうぎ前後大小すみやかに一佛しんもんのうてなに至るかならずさんしん萬とくの月をもてあそばんよつて勸進しゆぎやうのをもむきけだしもつてかくのごとし

治承三年三月日もんがくばうとぞよみあげけるほうわうえいらんましく\てしゆせうなりとよもんがく扨はごんじやにてましく\けるやけふよりしてもんがく上人にふせをき申いそぎ我山へあがり給へ御奉加有べしとのせんじはめんぼくとこそ聞えけれしかりとは申せどもしよきやうのこらず一とうにそうもん申されけるやうはたとへばあのしやもむをすなをにをかせ給ふならばらうぜき國にあまるべし死罪をばやめられてるざいさせられ候へとそうもむ申されたりければ右大將むねもりのきやうは此よしを承りもしさも有て候はゞなにがし申給て伊豆のおほしまの觀音堂へながしうしなふべしと申されたりければほうわうえいらんましく\てそのころ平家の事をせひをむだにしたまはずそれはともかくもむねもりがまゝたるべしとのせんじ也むねもり文學を給はりか

まへてほんだうはむやく也熊野のなだをわたし船路たるべしとの御諚にてふくゐのしやうしもつかさ次郎太夫ありはると申さぶらひに仰付上下三十六人にてもんがくしゆごし奉りほうぢうじどのをぞいでにけるあらいたはしやもんがく都のうちを出し事いまばかりとやおぼしけん七でうおほぢにたち出て東をはるかにながむれば音羽の山の松かぜはをのれときんや玄らぶらんふもとにおつるたきつぼはなになが れたる清水寺本尊はせんじゆせんげんにやくがせいぐわんの御ちかひもだしたまはずば今一度みやこへかへし給へときせいしてにしをはるかにながむれば丹波におひの山みねのだうたにのたうさがほうりんじうづまさのやくしになをもなごりありきたには鞍馬闘山鬼門にあたりてひえいざん中だう藥師の十二神さて我やまの十二神こんぴら大將七千のやしや北野をはいしたてまつりもんがくが此たびのおんるのざいをなだめつゝ今一度都へ返し給へときせいして南をはるかにながむれば八幡山にたつきりの石清水にやかゝるらんかいとくげだつぐせいりきこんがう八まんねがはくはげんじをまほりたび給へときせいを申させ給ひつゝ玄つか作り道鳥羽院の御さんさうよそながらふしおがみ刑部左衞門なにがしがそのきうせきをみるからにいとゞ涙もせきあへず念佛申經をよみそのゆふれいをとぶらひてよどの津につきければはやかはふねにうつされて水にまかせてながれゆく弓手をはるかにながむればことのね玄らぶるきんやの里彼ざいご中將のましろのたかをてにすへしかたのゝはらのかりごろもいまきてみるぞよしなきめては山崎闘戸のゐんたれかたてけんたから寺ひなをそだつるとりかひのかぶりの里は是かとよゑのぐはげたる古佛はや渡邊につきしかば海上はるかにかぢを取をひてのかせにほをあげてなみぢはるかにふかれゆく心ざしこそあはれなれ

文學仰けるやうはあつぱれ源氏のよなりせばか程の

ざいによつてよも遠島まではながされじをこれも平家のやつばらがてうくわするによつて也是より伊豆の大島へなん十日にもゆかばゆけげんじをまぼる𛀁るしには食事をとゞめぶくすまじとの給ひて船底にいらせ給ひまくら取てひきよせうちふし給ひてそのゝちはをきさせ給ふ事もなく又ねいり給ふ事もなしふしながらおほせけるは扨こゝはいづくをとをるぞ天王寺のおきと申もんがく聞召れて異國にてはなんがく大師我朝にては聖徳太子衆生さいどの𛀁ひふかしさりとも佛法方のもんがくをばよもすてはて給はじなさてこゝはいづくをとをるぞすみよしさかひうちのみなとわが吹あげやたまつしまぬのびきのまつきみゐでら藤しろたうげゆらのみなときりへの王子ちりのはまみなへたなべのおきすぎてなちのおきとぞ申けるもんがく聞召れて我此御山にまいり三七日瀧にうたれしやうじんの大聖明王にあひ奉りし其ときははやごんじやとこそいはれしになにとをこなひなしたる文學がぎやうぞや爰はいづくぞはまの宮さのゝ松原太夫の松新宮のみなといたの里いせの國𛀁まの國尾張參河のおき過ててんりうのなだにつき給ふ彼なだと申は東國一の惡所也ふじのたかねに黒雲が二なみ三なみさつとかゝると見えしかばあはけしきのかはるはなは手をとひてほこもをおろしほばしらを立なをせといへる時刻もなかりけりいせの國くつかあらしといふ風がま十文字に吹たりけりくま野成新宮おろしはうしろにふく一方ならず四五方よりもみあはせたる風なれば枯木はえだをおろしてふくもくえうをあらひくさの根をかへしてあぐるなみはひとへにけぶりのたつがごとくなり四方のかぜが一度にはつともみあはせてふくときは今はこのふねかなふべきやうあらずしてかたはらをたてゝくるりくるりとめぐりけり船の中なるものどもが聲をそろへて一同に南無あみだぶつと申けれども船底成もんがくはなに思ふたけしきもましまさずそらいびきし

てこそふされけれしゆごのぶし梶取どもこのよしをみるよりもあらぶだうなあのひじりやたとへはびんせんなんどにて乘たるとか申共かゝる風波のなんならば御きやうよみだらにをみて龍神なふじゆのきたうなんどもあるべきに此おきにて我々が死せんずる事どもはあのもんがくゆへとおぼゆるなりふなぞこよりひきいだし海へ入むといふもあり又有方のせんぎにはわたくしならぬもんがくなればいかゞはせんと云もありかやうにいろ〳〵さたしけるを聖はきこしめさるどもいよ〳〵きかぬていをしてそらいびきしてこそふされけれかゝりけるところにとも打なみがあまつて文學のつふりのうへをきつとうつてぞとをりける其時もんがくはらを立ふしたるところをかつぱとおきふねのへいたにつゝたちあがつて大音あげていかにこのおきを上人がとをると玄らぬかえさこそるにんといひながら龍王だにもあなづりて此なみかぜをたゝするは大龍めがわざか小龍めがわざか雨風やめぬものならばりうぐうとはいふまじきぞもんがくわけ入てためしをたつてくれうぞえ龍王めりうわうめとぞいかられけるしゆごのぶし梶取ども此由をきくよりもさればこそもんがくにははやものがついてくるはするぞりうわうめとざうごんせばいかでなみかぜやむべきぞ是につけてもわれ〳〵が死せんずる事どもはうたがひあらじと申つゝいよ〳〵念佛しけれどもひじりはちつともどうてんせずりうわうめとぞいかられけるもんがくの御こゝろすゑたのもしうぞ見えにける

かゝりけるところにびんつらさうにゆふたる龍女一人なみのうへにうかむわれをばたれとか思召りうぐうのをとひめにこひさい女とはみづからなり聖人の此なみのうへを通らせ給ふをおがみ申さん其爲につの國わたなべよりも是までつきそひ申せ共ふねのうちにぎよしん有てをきさせ給ふ事もなし角て大嶋の御堂にあがらせ給ひては又いつのよにかはおがみ申

べきと思此なみ風をたゝせ申上人の御すがたを拜申
事の有がたさよ今は十六のつの落成佛とくだつうた
がひなしいざさらばこうはの風やめて參らせんとて
かきけすやうにうせければいま迄あれておそろしき
風ノ字脱スルカ
やみうみのおもてへい〳〵としてをひての風がふき
ければしゆごのぶし梶取ども上人をらいしたてまつ
りろかひかぢをたてなをし風にまかせてふかすれば
都を立て文學伊豆の大島まで五十五日に着給ふ食事
をとゞめ給ひしはげんじをまぼるいはれなりかくて
もんがくは大玄まの觀音だうにあがらせ給へばけい
ごの人々も御いとま申都へこそかへりけれ爰にもん
がくの御弟子にがくもんばうと申ておはせしが片時
もはなれ申さねども今度はるざいの事なればちから
をよばず一人みやこにとゞまつてなげく事はかぎり
もなしかくてもあられぬ事なれば御あとをたひ申
くだらばやと思ひほんだうにさしかゝり夜を日につ
いでくだるほどに大島のくわんおんだうに參り上人
にあひたてまつりよろこぶ事はかぎりもなしかくて
師弟子の人々は觀音堂に御座有けれどもあたりの里
人まいりたつとみ申人もなし何としてかはちかづけ
むと思召さうきやうの法ををこなはせ給ふこうする
かた八十日過しかた八十日をこなはせ給ふ
ひるがこじまに御座ある兵衞のすけ頼朝はつたへ聞
召れてめのともりながをめして仰けるはまことや承
はれば大島のくわんおんだうへこそみやこよりうげ
んちとくの上人の御下向有てさうきやうの法ををこ
なはせ給ふがつゆほどもちがはぬよしをうけたまは
るいざやまいりて御うら一つとひ申さん尤玄かるべ
しとて主從御船にめされおほしまのくわんおんだう
にあがらせ給ひうしろだうのえんのいたをとう〳〵
とふみならし給ふ折節もんがく初夜のつとめのその
ために高座にあがらせ給ひしが只今うしろだうのえ
んのいたのなつたるをとを聞召ひじりはふしんにお
もひ玄かんを取て見給へばとをくは百日ちかくは五

十日の間に日本のあるじとなる人のあしをとゝ聞たる事のふしぎさよと師弟子御物語ありければ頼朝うしろだうにきこしめしあらめでたのうらかたや候是にましたる事あらじいざもどらんと仰ければもりなが承りかゝるうげんちとくの上人に御對面有てなをなをすゑのめでたかるべき事共御たづねあれと申よりともげにもと思召つとめ一座の過るまでうしろだうにたちやすらはせ給ふかくてつとめもすぎければたゞいまのまれ人こなたへと仰けりよりとも御座になをらせ給ふもんがく御覽じてあらふしぎや御身は誰人ぞわらはは名はもんじゆ子げんぶくめされて其後兵衞のすけ頼朝にてましますかよりともふしぎにおぼしめしさん候とおほせけりもんがくおほせけるは御身のちゝよしとものなれるはてが見たきかと仰ければよりともきこしめされて見たく候ともみたか（な字衍歟）ならずともなか〳〵申ばかりもなしいで〳〵さらばみせ申さんとそばなるをひをひきよせからげなはぶる〳〵とひつとひて上だんよりもにしき七重につゝみたるされたるかうべを取いだし是こそ御身の父よしとものなれるはてよ見給へとて頼朝の御手にまいらせらるゝよりとも御らんじて更に誠とおぼさねばさあらぬていにもてなしそばなるつくゑにをき給ふ文學御らんじてほどふりたる事なればさだめて御うたがいあるべしその志るしを見せ申さんとてつくゑなるかうべにむかひ兵衞佐よりともこそ是迄來り給へ義朝よしともと二三度よばせ給へばされたるかうべのうちよりも御なみだぞゝぎそれかあらぬかと御聲かすかに聞えければ其時よりともつくゑなるかうべをとりあげ御そでのうへにのせたか〳〵とさしあげ只今いきたる人にものの給ふふぜいにてさてもにし坂本までは御供申せしがくらさはくらしゆきはふるさがり松のへんにてをひをくれ參らせ夜もほの〴〵と明るまでりうげのやまにまよひしがよるはほうしの大將大屋のちうきといふものあとより手志げく

をつかけすでになんぎにをよびしをきた近江いぶきのふもと草野の庄司にたすけられかれがところにてとしををくり春にもならば御あとをゑたひ申さんとおもひしに尾張のおさだにうたれさせたまひ御くびのぼり獄門にかゝれるよしを承るせめてはかはらせ給ふ御すがたをなり共見まいらせむとおもひ草野のさとをたちいでゝゑのびみやこへ上りけりいまづかはらといふところにて彌平兵衛にいけどられうき六はらへわたされて六でう河原にてすでに死罪にをよびしをいけのにこうにたすけられ此國へうつされて二十餘年の春秋ををくりむかへてすぎゆけ共少も父の御事をわすれ申事もなしあれはもんじゆか兵衛のすけかと今一度仰候へとてきえいるやうになき給ふ文學もがくもんもさて御とものもりながもこゑもをしますなきゐたりもんがくこのよし御らんじてそれは五ぎやくざいのひとにてなみだをかけぬ事にて候それこなたへとおほせ有てにしき七重につゝみもとのごとくにおさめ給ひもんがくがあらんほどは御こころやすくおぼしめせ平家をてうぶくすべしとてやがて十二ヶ條のまきものをかきこそゑるし給ひけれそも〳〵十二ヶでうと申は第一に天地のきたう第二にこくわうのきたう第三にふものきたう第四に源氏のきたう第五にはげんじをまほるしゆしやうのきたうかくのごとくの五ヶてうは五體五きやう五せつのいはひをかたどるところなり今のこる七ヶでうは平家をうしなひほろぼすべきてうふくのゑちふしぎをあらはす七つの數なりけりこれは御身のはる〳〵ときたりたまへるこのたびの御引出物とて參らせらるよりともなゝめにおぼしめし三度いたゞきまぼりにかけ萬事はたのみたてまつるいとま申てさらばとて又御座ふねにめされてなごやの御所にぞかへられけるこれやこのげんじのはんじやうのはじめと聞えけり其後もんがくはしらきのこしをつくらせみなみのえんにかきすへこくうにむかつておほせけるはもん

がくこそたゞいま上洛つかまつれこしかきやあると
おほせければをつとこたへて程もなくりきしや二人
きたり御こしをかきこくうへあがると見えしかばせ
つながあひだにわうじやうのぎをんばやしにつき給
ふひるは人めをはゞかりよにいればもんがく四條の
まちへたちいでゝかずのぐぶつをかひあつめ祇園ば
やしの其うちに三ぢうにだんをつき七ぢうにたなを
ゆひ百八十本のへいぐしをきりたてかずの人形を作
て平家のむねとのうんかくの名字名乘を書ゑるして
うぶくの法をこなはるゝ三七日にまんずるとき上
だん中だん下だんの百八十本のへいぐしが一度には
つとみだれあひ平家のむねとの雲客の御くびきれて
みやうわうのりけんに立と見えしかば一法は成就し
たりとてだんをやぶつていで給ふかくてじゆゑいの
あきのころ平家みやこをおとされつゐにいくさにか
たずしてほろびはてさせ給ひしはもんがくのいきど
をりこはきゆへとぞ聞えける

いふき

義朝に三男わかは名はもんしゆすげんぷくしたまひて其なを兵衛佐頼朝いまだにやくにておはせしがたいけんもんの夜いくさにかけまけさせたまひ東國さしておち給ふ西坂本までは父の御ともめされしがくらさはくらしゆきはふるさがり松のあたりより追をくれさせ給ひよもほの〴〵とあくるまでふぶきにふかれみちもなき雪の山にぞまよはれける御年は十二歳いつしかみやこにおはせしときはこしくるまゝれにもむまにめすをだによにもふしぎにおぼせしにかちはだしなるゆきの道これがはじめの事なればさこそ物うくおぼすべきうぶきぬと申よろひをば小原のさとにあづけをきひげきりの御はかせをつえにつゐてぞおちられけりされどもゆみ矢のめいしやうとてかゝるふぶきのものうきにひげきりばかりすてもせでいのちとともにもたれたりすでにそのよも明ければ今はをひてぞかゝるらんゆく衛もしらぬざうひやうのそのてにかゝり中々にげんじの名をくださんよりもきよきじがいをせんとてゆきの上にしばおりしき御はだのまぼりより法花經一卷とりいだしこゝろしづかにあそばしてをひ手かゝらばじねんじやうにきよきしがいと思召しばらくいきをつき給ふかゝりけるところにみのかさきたるたび人の二人つれて京のかたへとをりしを頼朝御覧じて此者共を頼みいづくへもひとまづ落ばやなんとおぼしめしないかにたび人と御言葉をかけ給ふ何事にやと申て御そばちかくまいりければよりとも此よし御覧じて我は人めをつゝむものしかるべくは御はうしにたすけてたべと有しかば庄司此よし承りこれはまぢかき此近江伊ぶきのすそにすまゐせしくさのゝ庄司とは我事なり子にて候藤九郎きみの御供つかまつりまかりいでゝ候ひしがたいけいもんの夜軍にみかたかけまけ給ひて

ゆきがたしらずとうけたまはれば其ゆく衛をもきかんため片田のへんに有つるがみやこへのぼり候ぞやかゝるさしあひなかりせばやすきほどの事なれ共人をたすけまいらせて我子は何と成べきとすげなくそこをとをりけり頼朝このよし御覧じてさてはうんめいつきぬるやしばしとゞまりねがはくはしがいをなりともかくしてゆけはらをきるとのたまひてをしはだぬがせ給へばしやうじこゝろよはくして御かたなにすがりつきとしのほどを見申せばまだうらわかきみどり子のまつもひさしきすゑまでもげにたのもしきとしのほど御子もいきてあるならばこのきみにいか程年まさむ此きみしがいましまさばちゝ母つたへ聞召さこそしやうじをうとましくきちくのやうにおぼすべきこのきみを一まづおとさばやと思ひてみのにをしまき奉り十文字にゆひからげとものおとこにかきおほせうへにふるみの打かけてみやこへはのぼらずかた田をさしてくだりしはなさけ一とぞ聞えけるいくほどなくてあとよりもよるは法師の大將に大屋のちうきをさきとして五十餘人たてをつきおやししやたび人よとまれ〳〵とをつかくる庄司にもちをさきにたてわが身はあとにふみとゞまつて是はたしよよりきたらず御領内の百性小原のさとにすまゐする次郎太夫と申ものくわんさんのくわしのためにところをもたせて坂本へ參るものにて候なり落人は此さきへ其かずあまたおとをりあるとうしてをはせ給へやと雪ふみのけてやりすごすかくてよしともはかた田より御船にめされむかひの地へと聞えければもから及ばずをひての者どもはみなさかもとへぞかへりけるそのゝちしやうじしづかにあゆみかた田へ入參らせしる人をたのみ一えうのふねにさほをさしあさづまのはまにあがりさのみ御身をいかにとしてみのにはつゝみ申さんとそれよりも御手をかたにかけくさのゝさとにいれ申我宿所にていたはりてあらたまの月をおくりしはめでたかりける次第かなある時

しやうじ申けるはこれよりいづくをさして御いそぎぞ御心ざしのところ迄をくりとゞけ申べし頼朝此よしきこしめしさして行べきかたもなしいづくの里也共あはれと云人のあらばすみはてなんとぞおほせける庄司此よしうけたまはり我子の九郎まだ見えずおりふしきたり給へば九郎が生れきたれるかしう共子とも思ふべし是にまし〳〵候へとてふかくいたはりたてまつるこくないつうげの事なれば左馬のかみよしともは尾張のおさだにうたれたまひ御くびのぼりごくもんにかゝれるよしをきこしめしいかにしやうじわれをば誰とかおもふらんよしともに三男わらは名はもんじふ子げむぶくして頼朝なりさりともと思ひしちゝはうたれ給ひ御くびのぼりごくもんにかゝれるよしを聞てあり今はいのちのいきたり共たれかあはれとふべきぞみやこにのぼり今一度父の御くび一目みてもしも命のながらへばさまをもかへてひたすらになき人々をとぶらふへしいとま申てさらば

とてたちいでさせ給へば庄司をはじめ女房も御たもとにすがりさては我子の九郎めが主君にてましますやわが子にこそははなれむめきみさへわかれ參らせてわれらは何と成べきともとにすがりなきにけりよりとも此よし御らんじてげに〳〵申ことはりなりひげきりをとゞめをく是にをきてはあしかりなん美濃の國あふはかのちやうじやがもとへをくりつゝいかならん世までもうしなはでもてと申べし是に刀一つあり八まんどのゝ御かたな名をいはきりと申なりうきよのなかのかたみに庄司どのにとらするぞふしぎのよにもいでたらばこのかたなを忘るべにてたづねきたり候へとてわが身はわきざしばかりにてあみがさにやつれはてみやこへのぼり給ひける心ざしこそあはれなれさても六はらの御所には人々にけしやうをこなはる彌平兵衛むねきよには美濃の國たるゐをたまはりまかりくだりしがいまつがはらをとをるとて頼朝にまいりあふあみがさのうち人に忘の

ばせ給ふていあやしく思ひ申とて笠ひきおとし見申せばよりともにておはしますてんのあたふるかたきとてやがていけどり奉りみのの國へはくだらずいそぎ都にのぼり六はらどのに參りこのよしかくと申上るきよもり聞召さればこそ爰ぞとようんはてんのなすところくわほうはくわこのしゆくゆふよしともはうたれぬ惡源太ともなりははらきりぬよりともをばいけどりぬいまは誰かのこりゐて平家にてなをなすべきやがて朝賴きるべけれ共古刑部卿たゞもりの佛事おりふしさしあひなり佛事すぎて切べしそのあひだはむねきよにあづくるぞ宗清賴朝をあづかり申いくほどならぬしやうがいをみるこそなか／＼あはれなれあらいたはしやよりともいくほどならぬしやうがいとてこゝろましますす御そうたちをしやうじ申ごせのくわうせんくらきやみのまよひをたのみ奉りいまだようちにましませどぢきやうしやにて御座あれば日夜に御經をこたらずあかつきがたのゑかうには

此御きやうのくりきによつて父あに／＼さきだつ人一つはちすに生れ給へと一心にゑかうしたまへばむねきよもねうばうもこのよしを承りたゞ人のたからには子にすぎたるはましまさずあれほどなげきの御なかにねんぶつ申きやうをよみゑかうの心ざしをば十はうの神佛さこそうれしくおぼすらんくやしくも又むねきよがいけどりまいらせてうきめをみるかなしさよとふうふともにいひかたりふかきおもひとなりにけりさようちはけて殊更こゝろぼそげにましますところへむねきよふうふまいりしゆをすゝめ申せどもさらに見いれ給はずわかき人にてましませばいつはり御こゝろをもなぐさめばやと思ひいかに賴朝聞召れ候へげにや承はれば古刑部きやうたゞもりの佛事折節さしあひなり其ほか死罪の人々もみなくびをつぐと承る殊さら御身をばよかはのそうづめいしゆん三井の僧正ゆふはん仁和寺のけいうんおりしきりに申さるゝ御そせうのまへなればたとひるざいは

なさる丶とも死罪は更に候まじ御心やすくおぼしめせといつはりすかし申せば頼朝きこしめしあらおろかなりむねきよ命をおしみよりともがなげく身にてはなきぞとよむかしは源平兩家とてとりのふたつの羽がひくるまのりやうわのごとくにてをとりまさりはなくし天下のまぼりと有つるがせんせいかなる事有て此時ほろびはつるらんちゝあに〳〵さき立人ひとつはちすに生れむと此事ならでたじもなし今夜は此さけのむべき也をの〳〵も參り給へやとなげくけしきもましまさずよりとも仰けるは此ほどはくわんげんすさみつるにあまり思へばこゝろなしふえやあるとの御諚なりむねきよ承りかんちくのやうでうをとり出して參らせあぐるころは春のなかばなればそうてうにねを取てしゆつこんらくをあそばしうきみのうへのなげきにはくわいこんらくをあそばすむねきよもねうばうもかんるいおさへがたふしてびは一めんこと一ちやう取いだしねうばうにことをしあづけ我身もびはのををあはせばちをとけだかくひきければ女房なみだもろともに十二のけんをえり立るのをに手をかけにけりこれふつけうのうつはものうさもつらさもうちわすれ是になぐさみ給ひけり

よもほの〴〵と明がたに門をたゝくもの有八を出して問すれば頼朝を今日きるべしと申使なりびはことをとりひそめ頼朝にいだきつき申なくより外の事はなしよりともおとなしやかにの給ひけるは思ひまうけたる事なればいまさらなげくにをよばずさだめてくびをばおほぢを渡さるべしかみけづりてたび給へむねきよもねうばうもなごりのためと思ひければ三十三枚のくしとはらひをとりいだしきのふまでは一すぢを千すぢ百筋千秋萬歳といのりし黑かみをけふは又六でうがはらのよもぎがもとのちりとなさむ事こそかなしけれと落るなみだに目がくれてくものたてとも見もわかずさてあるべきにてあらざればふうふともにわけけづりぎやうずいせさせまいらせてす

ずしのひとへはだにめさせねりぬきにおほくちかさねうかりけるかな法なりとてたかてのなはをかけ申むねきよもねうばうもたかてのなはにとり付てそれ人は一じゆのかげ一河の水をくむ事もたしやうのきゑんとうけたまはるがこんじやうならぬ御きゑんにまいりあひ候て今さらうきめをみる事よ御もちゐも有ならばわれ〳〵ふうふが首をめされ頼朝の御いのちをたすけ給へやかなしやとりうていこがれなきければげになさけなきかたまでもあはれとはぬ人ぞなきよりともぎやくしゆのためにそとばを三本きざみ一ぽんは父のため一ぽんはあに〳〵いま一本は我ためとてかみにはあじをあそばしなかにはきやうのもんゑもにはしいしゆゑかうのむね年號日付みなもとの頼朝とあそばし此邊にいづくにてもこまのひづめもかよはすくるまにをされぬところやあるたづねてまいれとおほせければむねきよ承り三つのそとばをたまはりいづく〳〵と申共こまのひづめもかよはずくるまにをされぬところはいけどののさむさうなかしまなりと申てにし八でうにもちてゆきなかしまにわたり三つのそとばをたつる彼いけどのと申は古刑部きやうたゞもりのごけにておはしますきよもりには御まゝはゝじひ第一の人なりおりふしえんにましませしが誰そとばぞととひ給ふたゞいまきられ給ふよりとものそとばなりと申めしよせ御らんじて人してかゝせけるがいや自筆なりと申いくつになるぞと問給ふ十三と申としのほどよりも手ははるかにおとなしく見えけるやようもんおほしといへどもことにすぐれたるめいもんなりなに〳〵我從無數こうらいしやくじゆしよだいせんごん一ぶんふるがしんせよ十方しゆじやうこのもんのこゝろは我むしゆこうよりこのかたつみあつむるもろ〳〵のだいせんごんを一ぶんも我身にとゞめず十方の衆生にほどこしあたふこれひけきやうのめいもんなり此ことはりをきくときはたすけでいかゞあるべきくるまやりだせう

しかひよいそげ供せよむねきよとてとるものもとりあへず六でう河原にいで給ふさる間頼朝はをつたてのくわんぐむ七八十人がなかにして源五右馬のせうなは取なりかいしやく人はなんばせのを五條の橋よりしも六條河原へひきいだすさるあひだ頼朝しきがはになをり給ひければかいしやくにんがまいり西のはうへをしむけ御ねんぶつをすゝめければ手をあはせ高聲に念佛申さるゝいけどのゝ御車をはんまちばかりにやりよする御念佛の其こゑがくるまのうちへ聞えければいけどの聞召みづからゆくとおもはゞやがて頼朝きらふず人にしらせで此くるまをはやめよやれむねきよむちをうてやうしかひよたゞ一所におどるはわざとよりとも切せんとやよりともきらるゝものならば我は御所へはかへるまじやがて身をなげ死なふぞいかにやとのむねきよいだきおろしてたび給へたゞ一とびにはしらふに物見のすだれをさつとうちあげくるまのしぢにたゞ今ころびおちむとし給ふをけん見にたてた後藤内車のとふを見付いかさましがの大寺より大僧正かそうづか内人こはむくるまそとくきれやつとゆびをさすたちとりうしろへ廻てなげかけんとせしとき八幡のちかひかやかはらのいしにふみくじけうつぶしにかつぱとまろびたちをかはらになげかけおきあがつてたちをとらん〳〵とするひまにくるまをさつとやりよせいまだとゞめもせざりしにいけ殿ころびおち給ひよりともをひつたておなじくるまにうちのせもとめたとのがくびかないまはよもきられじこゝろやすくおもへとてはら〳〵となき給ふ頼朝もいけどのゝ御たもとにすがり付はら〳〵となき給ふものによく〳〵たとふればつみふかき罪人ぐしやうじんのてにわたりむけん大じやうのそこにおとさるべかりしを六道能化の地ざうのしやくぢやうをからりとうちふつてかゝかんみさんまいとよばはりかけすくひあげたすけむとし給ふもこれほどぞありつらん八でうとのに歸らるゝけん見ぶ

ぎやうもきりても六はらどのにまいりきよもりにかくと申ければとうきらぬこそふかくよと御こうくわいとぞきこえけるやがて主馬の判官もりくにをめしてなんぢ八でうどのに參り申べき事はちからをよばずよりともをばいけどのにまいらせ候げんじにつたはるてうほうによろひにはかんたかうぶぎぬ七りう入りうとて有たちにはひげきりとて候を今度よしともたいけいもんをいでし時嫡子惡源太にもゆづらず二男ともながにもゆづらず三男頼朝にゆづりぬるよし聞え候おほそれながらいけどの丶御こうしゆによつてたづね出して給はらば平家のたからたるべしと御つかひを立たまへばいけどのきこしめされてよりともにかく〳〵と仰ければよりとも聞召あら何共なの事共やいへに傳はるてうほうを命をおしみいかにとしてかたきのてにわたさんと思召れけるあひだとかくものをものたまはずおもひいりてぞおはしけるいけどの仰けるはおろかなりよりともいのちだにも有ならばたからをばもとめて持べし只みづからに御まかせさふらひてありのま丶仰られよ頼朝げにもとおぼしめしさむ候うぶきぬをば山しなのしやうじんがもとひげきりをば美濃の國あふはかの長者がもとにあづけをき候とありのま丶にぞの給ひけるいけどの御よろこび有て六はらへかくとおほせければ六はらより使をたて二つのたからをめしいだすかくて二つのたから平家におさまるべきにて有しを小松のだいふのおほせにはおろかなる御ぢやうかな是はげんじのたから也源氏方にもちてこそたからとはなるべけれ平家方にもつならばしやうげをばなす共たからとなる事候まじたゞ返し給へとてみな〳〵源氏へかへされけりさらばよりともをばいかならん波島へもながしうしなへと仰けり一番のたひにはいせのくにこさの島とぞ聞えけるいけどの聞召彼こさのえまと申はいせへいじがおほくしてかなふまじとおほせけり二番のたひには伊豆の國ほうでうひるがこじまこれも

こゝろもとなしとて御身まぢかき侍にくわうけつの源五もりやすが子にもりながと申て生年十六歳にまかり成をまぢかくめされいかにもりながよ頼朝がともをして伊豆の國にくだりてうせきみやつき申べしいさゝかの事もあるならばいそぎわれにしらせよ俄の事にてあるならばもりながさきにはらをきれあとをばとふてとらすべしいかによりともむまずとも我をばおやと思ふべし御身を子共おもはふぞなむやげんじのうぢがみの正八幡大ぼさつ頼朝の御れうをあんをんにまぼり給へやとうしろすがたをおがみ給ふ頼朝も立歸りふしおがませ給ひけり生れあふたる親子ぞと御よろこびはかぎりなしさるほどに頼朝もりながをともなひ伊豆の國にくだつてほうでうひるがこじまにて二十一年の春秋ををくらせ給ひけるとかやつゐに源氏一ぞんの御代となりたまひてせめしところはどこ〳〵ぞいちのたにひえどりごえさぬきにやしま長門にだんのうらはやともがおき迄も三年三月にせめなびけ天下ををさめ給ふ事八幡大ぼさつの御ちかひとぞきこえける

夢あはせ

去程にもりながはまださうてんの事なるに頼朝に參る君はいまだよるのところに御座ありけるにあひのしやうじをほとほとゝをとづれもりながが出仕申て候頼朝きこしめされいつ〳〵よりもあだちどのがけさの出仕のはやさよもりなが承てさん候今夜それがしふしぎなる御むさうをかうぶりて候たしかに夢物語申さむためさて出仕申て候よりとも聞召れすけが吉事のゆめならばはや〳〵かたれたもたんとの御諚なりもりなが承てあつぱれ御前にこゝろありまの人あらば語てきみにたもたせ申さんと申おりふし御まへにおほばの平太忘こう申て候けるがきみの吉事の御夢ならばかう申大場あがゆめあはせにはまいらふずるにて候はや〳〵御語り候へもりなが聞て先ゆめのいとくをかたつてきかせ申さんむかしちうてんぢくのあるじじやうぼんだいわうのきさきの宮は七月十四日に紫晨殿に御いで有ひるの御ゆめにこんじきのはだへの御僧御くちのうちにとびいらせ給ふと御夢を御覽じあくるせうへい元年に七多太子をまうけ給ふいまの釋迦は是也我朝のようめい天わうのきさきのみやはあるよの御むさうに金のたま手ばこをひだりの御衣にうつすとゆめを御らんじてしやうとくたいしをまうけ給ひなんばに四天王寺をたてもりやを退治したまふもみなこれゆめのいとくなり又わがてうのでんげうだいしはれんげをいだくと御ゆめを御らんじてひえいざんを建立しめいしゆつをあらはし給ふなりされはゆめとたかはあはせがらにて候ぞや能やうにあはせてたゞや大場殿とぞ申けるおほば聞てあらめでたの夢のいとくや候はや〳〵御語候へもりなが聞て先一ばんの御むさうに東やまに松原むらさきの八重雲をかきわけつる〳〵と出させ給ふ朝日を君の三五にいだきとらせ給ふと見參らせて候そ

のつぎの御むさうにきみはしろきじやうえにたてしぼしあさいくつをめされさがみの國やぐらがだけに御あがり有て東西南北へ七足づゝあゆませ給ふと見參らせて候其後やぐらがたけに御こしをやすめさせ給ふがひがしへもみなみへもにしへもむかせたまはずきたへむかせ給ひしみをふくませ給ふと見まいらせて候そのつぎの御むさうに君のゆんでの御あしをきかいがしまのかたへふみおろさせ給ひ扨又めての御あしをそとのはまのかたへふみおろさせ給ふところにきみの御てうあいにおぼしめす大場の平太かげよししろきへいじにてうがたにくちつゝませさかなにくけつのあはびをもつて御前に參るきみは御覽じてあはびのふときところを御手にもたせ給ひて酒をたぶ／＼と御ひかへ有ていかに貴僧法師さかなひとつとありしかばきそう承て御まへをづんと立てかもがいれくびしぎの羽がへしさつとさひていはひのわかをぞあげにけるそのつぎの御むさうにきみのさうの御たもとにさんぼんのひめこまつをぞたてをかせ給ふとたしかにもりながめが見まいらせて候ぞやよきやうにあはせてたべや大場どのとぞ申けるおほばきゝてあらめでたの御夢や候いづれも是は君のために御吉事先一番の御むさうに東山に松原むらさきの八重雲をかきわけつる／＼と出させ給ふ朝日を君の三五にいだきとらせ給ふと御らん有て候はうたがひもなくわがきみは日の本のせいしやうぐんとあふが（本ノマヽ）れさせ給ふべき御ずいさうの御むさう也其つぎの御むさうにきみはしろきじやうえにたてしぼしあさいくつをめされ相模の國やぐらがたけに御あがり有て東西南北へ七足づゝあゆませ給ふと御らん有て候は七なんそくめつしつふくそくしやう是成べし其後やぐらがだけに御こしをやすめさせ給ふが東へも南へも西へもむかせ給はず北へむかはせ給ひしみをふくませ給ふと御らん有て候はあふさるよみの候ぞやきたかさぬると書てはほうでうとよみの候ぞや爰をも

つてあんずるに北條の四郎を御たのみあつて御代にたゝせ給ふべき御ずいさうの御夢候也そのつぎの御むさうにきみのゆんでの御あしをきかいがしまのかたへふみおろさせたまひさてめての御あしをそとのはまの方へふみおろさせ給ふ處にきみのてうあいに思召大場の平太かげよしたろきへいじにてうがたにくちつゝませさかなにくけつのあはびをもつて御前に參ると御覽有て候はあはびは海の物なればきかいかうらいけいたんこくかいじやうはろかひのとゞかん程我きみの御知行にまいらふずるこそめでたけれ其次の御むさうに君の左右の御たちとに三本の姬小松をそだて置せ給ふと御覽有て候は一本は我君一本はあだちとの今一本はかう中大場の平太かげよし也そも松と申は一寸だにものびぬれば千々にえださかへぢやう千年のよはひをたもつ由を承る其松の如に若ぎみあまた御まうけ有て末ははる〴〵とさかへさせ給ふべき御ずいさうの御むさう也盛長の夢物語大場殿が合様ひとへに君の御吉事とこそ聞えけれ

馬そろゑ

さるあひだ頼朝もりながをめされ此間の事どもは夢うつゝの吉事もんがくのうらのさすところ天命爰にしよくわんしてくわほうの花のつぼみいでにほひかつがうふせいなり明夢とうらかた共すでにやう〳〵ときをうくるくわいぶんをまはしたのふで見んとの御諚なりもりなが承り先くわほうめでたき人なればと思ひ海の渡りを仕り三浦の館につくかの三浦のおほすけよしあきらは年つもつて百六に成しがひたゝれのひぼつかひつくゑに置てふしおがみまご嫡子わだの小太郎おほたうのひこ太郎をひそかにめされ先祖の君の御判をおがみ申せ子共まごともよいのりにもみやうもんにも又後生のうつたへにもなるべしさればゑんぽうけんのおきなはうんなむのろすいをのがれむとて大石によせてひぢを折たいこうばうといつし人ゐひんのなみにつりをたるゝへうたんゑばゑばむなしく草がんゑんがちまたにゑげしれいてうふかくとざす雨げん〳〵がとぼそをうるほふすに似たるべしされば くつげんはよのうき事をうらみつゝ草のいほりに身をかくしむかしをゑのび老にけりよしあきらも人ならば山にもこもるべけれども此老が身につもるゆき我身ひとつにとりなしてよるべもゑらぬおきのなみうらしまがたま手ばこあけてもいとゞくやしきかほどめでたきわが君の御判をおがみ申事一眼のかめのたまさかに浮木にあへるがごとしとうとうりやうじやう申さんとて三浦三百九十三騎となかちやうにはんをすへきみにたのまれ奉るそれよりもりながはちばのたちにつくおりふし千葉のすけ他行のあひだおほすけ出合見參有て子にて候つねたねこれになければちからなし昔より此ところはちばのすけ上總のすけとて父母のごとし一方かけてかなふまじかづさへ御越候て歸りがけにしいしゆのやう承

り度候まづ〳〵これは見ぐるしく候へどもとてがうたる馬にくらををきよろひかぶとをひきにけりもりながは是をみて野にもやまにもみかたぞとそれよりいとまごひつゝ千葉のたちをぞいでにけるかゝつしと頃に千葉のすけつねたねわかたう四五騎あひぐしさむぢんに乗て出來るもりなが是をみてのりながらの對面恐入て候へ共君の御使にて候へばまつぴら御めんなれといふまゝにちばがこまに打寄彼あらましをかたるつねたね聞てさておやにて候おほすけは何とか申され候ひつるおほすけのおほせには上總のすけがまいらばちばのすけも參らんとの御返事にて候つねたね聞て是は何よりも恐入たる御返事を申されて候ものかなたとひかづさはまいらずとも一騎成とも味方參りまづさきがけ高名し名を後代にあぐべき也いで〳〵りやうじやう申さむと駒よりもとんでおり本よりも千葉のすけはせうぶげんにて候へば手せい多くも候はず七百騎にて參らむとてなかちやうに

判をすへてきみにたのまれ奉るそれよりもりながはいはういなんちやうほくちやうなんあひろかはかみうさ山のべかなたこなたをふれまはるたのまるゝ國は十三ヶ國大名は七十餘人小名數をゑらずわれをとらじとはんをすへ君にたのまれ奉るさる間もりながは伊豆の田中をいでゝ百廿日と申には國々の人々の御請のはんをとりもつてなごやの御所へぞかへられける彼もりながをみし人のほめぬ人こそなかりけれさる間賴朝伊豆のおやまに御ぢんをめされ續く味方をまち給ふ我をとらじと參られけるをちやくたう付て御覽すれば賴朝の御せい以上三百五十三騎にゑるさるゝよりともちやくたうひけんの後是はすけがしうけんのはじめなればめん〳〵の馬共を一目みんとの御諚なり來り候とて先一番に君の御家の子あきのしゝとの四郎殿のたますだれといふむまをとをされたり面白のむまの名やたますだれとはかけてこゝろやすゝしかるらんそのつぎをみてあればあふみげん

じの大將にさゝ木の四郎たかつなのよつじろに白鞍をかせしろさほさゝせ御前をとをされたりおもしろのむまのふぜいや所々に四つ目結のかたつきやさしきむまのもんかなとどつとほめてぞ通されける其次をみてあればどひのこぐろに白くらをかせ御まへを通されたりこのむまと申はまだまき出の名馬にていさみにいさむで前の足をづんとあげうしろのあしをひつしきかしらをふつてめを見出しおどりいでゝいばふこれもをとらぬ名馬かなとどつとほめてぞとをしけるそのつぎをみてあればさても御しうとに北條の四郎ときまさのさゞなみあしげといふむまにしろくらをかせしろさほさゝせ六人のとねりにひかせ御まへをとをされたりおもしろの馬の風情やこのむまと申は骨はふとうてすぢおほし左右のおもかほしゝもなくみゝはみじかくちいさくて上くびながくあつくして下くびつつてみじかしむねはいでゝはたばりあり尾くちちいさくわけ入て尾は三ぢうのたきのおつるがごとくなり左右のもゝはからのびはてんじゆとはんしゆばらりともひで二面さかさまに立て置たる如也をつさまさんづにしゝ餘りよめのつきさまつまねの骨くろがねをのべたるごとしつめはあつふてつゝたかし千里を打とつかるまじ前よりみれば秋の鹿遠山をとびたるごとく也そばより見ればにはとりが大庭へおどり出ときをうたふが如くなりまはりてみれば龍が雲を引つれ虎が風に毛をふるひざうがきをかみならしゝがはがみしたりしも是にはいかでまさるべきあつぱれむまのいきほひかなとどつとほめてぞとをしける是をはじめと仕りさはらの十郎がいかづちあしげかり野すけがかなづちあしげたしろのくわんじや美女くりげ祐經が奥州くりげぬまたの平内がとびすゞめ南條が小鷹がはらけふるほりがほかけ船三島の源太がしゝの子にさう藤太が岩くだきつちやの三郎とらつきげ扨岡崎がみやまかげ大ぬきの四郎が黑かすげ惣じて名馬の色々はあしかふち黑

かけつるぶちかげぶちあひさうぶちかうしくりげひめくりげ我も／＼とひかれたり以上三百五十三騎はいづれもをとらぬ名馬也去程に頼朝治承四年八月の廿三日に兵見そろへ馬そろへめされていつも久しき源氏のしらはたをほの／＼とさしあげまなづるがたうげに打あがつて御陣をめされしが御代をめされん其爲に手勢七騎を引わかつてとひのやととかうらよりも御船にめされあはのれう島を心がけおきなかにしらはたをさしあげ給へは三浦よこ山たんこだま此よしを御覧じあは君のおきに御座有にいざやさらば參らんと千騎二千騎百騎二百騎うちつれ／＼參程に武藏の國とかやこうのろくしよぶんばいの宮の前にてちやくたうつけて見給へばよりともの御せい廿八萬騎にほどなくならせ給ひて一天四海に光をはなつ平家を三年三月にせめなびけ天下をおさめ給ふ事八幡大ぼさつの御ちかひとぞ聞えける

木曾願書

爰に信濃の國の住人木曾の冠者義仲は平家をせめむそのために五萬餘騎を卒し信濃の國を打立て越後のこうに着しかば木曾の給ひけるは平家大勢にてある間となみ山を打こえ越中のひろみへ出るならば定てかけあひの合戰にてぞあらん但かけあひの合戰は勢の多少による事なりいつも我いくさのかれいなれば勢を七手にわかつて方々よりもむかふべしまづ叔父十郎藏人行家に一萬餘騎をさし從て志ほのてへまはしからめてへこそつかはされけれ殘四萬餘騎をてんでにわかつたての六郎親忠に七千餘騎を指そへて北くろ坂へぞむけられけるにし名高梨山田の次郎是も七千餘騎南くろ坂へぞむけられける樋口の次郎かね光は五千餘騎にてくりからのだうのうしろへまはされけりねいこやた五千餘騎まつなかのくみのきばやしやなぎはらに引かくす今井の四郎兼平は六千餘騎を相志たがへわしの島をうち渡りひのみや林に陣を取木曾殿は一萬餘騎にて黑坂の北のはづれを西へのわたりをしてはにふの森に陣をとる木曾殿のはかりごとにはたさしをさきにたてよとはたさしをさきにぞ立られける五月十一日の巳の刻ばかりに黑坂の峠へ駒をかけあげ志ら籏三十ながればかり一度にさつと打たてたり平家も加賀を打たつてとなみ山にうちあがり源氏の勢を御覽じてあらおびたゞしの大勢や爰は山もけんそに谷もふかふしてからめてさうなくよもまはさじ馬の草かひすいひんともに志かるべき所なれば先々陣をとれやとて大勢さつとおり立て山路に陣をとりたりけり

木曾はやはたの社領はにふの杜に陣をとつて四方をきつと見わたしければ北のはづれにあたりつゝなつ山の嶺のみどりの木の間よりあけの玉垣ほの見えてかたそぎ造りの社壇あり前に鳥居ぞ立にける里の人

をめされてあれに御立ましますはなにの宮いかなる神をあがめ申ぞいかに〳〵と問給へば八幡大菩薩とあがめ奉る當國の新八幡宮はにふのやはたと申也木曾殿嬉しくて手書にだいぶかくめいを召て仰けるはさいはひに義仲當國新八幡の御寶前にちかづき奉つて合戰をとげんとほつす今度のいくさうたがひなくかちぬるとおぼふる也さるによつてかつうは後代のため又は當社のいのりにも願書を一筆かいてまいらせんとおもふはいかゞあるべきかくめいむしかるべう候とてむまよりもとんでおりゑびらのなかよりも小硯とり出したゝう紙をしひろげ願書をかゝむとつかまつる

かくめいがその日の裝束にはかちんの直垂にふし縄目の鎧にくろつのばのそや打てぬりごめどうの弓わきばさむで木曾殿の御前にひざまづいて是を書あつばれ文武二道のあふさて達者かなとぞ見えたりけるかれかくめいはいまだ南都にさふらひし時高倉の宮三井寺をたのふで行幸ならせ給ひし時三井寺なんなくたのまれ申南都へてう狀をこす返狀を大衆せんぎあつて彼しんきうにかゝせられけるに清盛を平氏のさうかう武家のぢんがいとかいてその名をあげし名人なればいかでか書は損ずべき此願しよにいたく皈命頂禮八幡大菩薩は日域朝廷のほんしゆ累世明君のなうそたり寶祚を守らんがため蒼生をりせんが爲に三身の金容をあらはし三品の權扉ををし開き給へり爰にけいねんよりこのかた平相國といふものあつて四海を我まゝとし萬民を惱亂せしむこれ佛法のあだ王法のかたきなり義仲いやしくも弓馬の家にむまれわづかにきゝうのちりをつぐひそかに彼のぼうあくを見るにしれうかへりみるにあたはず運を天道にまかせ身を國家になぐこゝろみにぎへいをおこさむとほつするきざみに凶徒しりぞけんとうせんりやうかの陣を取士卒いまだあはせずといへどいつちのいさみを得いましんしつを守る處に今一陣にをひて旗

ほめぬ人こそなかりけれ

をあげ戦場にしてたちまちに三所和光の社壇を拜す
きかん（かはうノ誤カ）のじゆんじゆくすでにあきらかなり凶徒誅戮
うたがひなしやくはんぎなんだこぼれかつがうきも
にそむなかんづく曾祖父前の陸奥守ぎかのあそ身を
宗廟の氏族にきふくして名を八幡太郎と號せしより
このかたその門葉たるものきぎやうせずといふ事な
し義仲その後胤としてかうべをかたぶけて年久しい
ま此大功を起す事たとへば嬰兒の貝をもつて巨海を
量り蟷螂の斧をいからして隆車にむかふがごとしし
かりといへど君のため國のために是をおこす身のた
め家のためにして是を起さずこゝろざしのいたりし
んし眞にありたのもしきかなやよろこばしきかなや
伏てねがはくばめうけんいをくはへれいじんちから
を合勝事を一時にけつしあだを四方にしりぞけ給へ
しからばすなはちたんき冥慮にかなひほうけん加護
をなすべくばひとつの瑞相をみせしめ給へ壽永二年
五月十一日源の義仲敬白と書たり彼かくめいが筆勢

敦盛

そも〱此たび平家一のたにのかつせんに御一もんさぶらひ大將そうじて以上十六人のくみあしのそのなかにもの丶あはれをとゞめしはしやうこくの御をと丶つねもりの御子息にむくわんの太夫あつもりにてもの丶あはれをとゞめたりその日の御しやうぞくいつにすぐれてはなやか也むめのにほひのはだよせのゆうなるにうらくれなゐをめされねりぬきにいろいろのいとをもつてあきの野に草づくしぬふたるひた丶れゆん手のてつかいりやうめんのすねあてむらさきすそごの御きせながこがねづくりの御はかせ十六さいたるそめはの矢むら志げどうの弓れんぜむあし毛なるこまになしぢまき白ふくりんのくらをかせ御身かろげにめされたりめされたる御むまよろひの毛に至るまでげにゆ丶しくぞ見えられける御一門と同じく主上の御供をめされはまにくだらせたまひしが御うんのすゑのかなしさはかんちくのやうでうを大裡にわすれさせ給ひわか上らうのかなしさはすてても御いであるならばさまでの事のあるまじきをかつうはこのふえをわすれたらんずゑ事を二もむのなをりとおぼしめしとりにかへらせ給ひてかなたこなたの時こくにはや御一もんの御座ふねをはるかのおきへをし出すあらいたはしやあつもり志ほやのはたをこ丶ろがけこまにまかせておちさせ給ふ

か丶りけるところにむさしのくにのぢうにん志のたうのはたがしらくまがへの次郎なをざね此たび一の谷のせんぢんとは申せどもさせる高名をきはめずむねんたぐひはなかりけりあつぱれこ丶もとをよからんかたきのとをれかしをしならべむずとくんでぶんどりせばやとおもひなぎさにそふてくだりしがあつもりを見つけ申な丶めならずによろこふでこまのたづなうつすゑて大をんあげて申あれにおちさせ給ふ

は平家がたにをきてはよき大將と見え申て候かう申つはものをいかなる者とおぼしめす武藏國のぢうにんしのたうのはたがしらくまがへの次郎なをざねかたきにをひてはよきかたき候ぞまさなくもかたきに鎧のあげまきさかいたを見せ給ふものかなひつかへし御せうぶ候へいかに〱とてをつかけ申あらいたはしやあつもりくまがへときこしめしのがれがたくはおぼしめされけれ共こまにまかせて落させ給ふかかりけるところにはるかのおきを御覽ずれば御座ふねまぢかくうかんでありあのふねをまねきよせのらふずものとおぼしめしこしよりもくれなゐに日出したるあふぎぬきいではらりとひらかせ給ひておきなるふねをめにかけてひらり〱とまねかるゝせんちうの人々にひとしもこそおほきにかどわき殿は御覽じてほろかけむしやの船まねくは左馬のかみゆきもりかむくわんの太夫あつもりかあれを見よとの御ぢやうなり惡七兵衛承りふなばりにつゝたちあがりなぎなたをつえにつきかぶとをぬいできつと見ていたはしの御事や何として御座ふねにめしをくれさせ給ひけんつねもりの御子息にむくわんの太夫あつもりにてわたらせ給ひ候ぞやめされたる御むまの毛よろひのけにいたるまでまがふところはましまさずいたはしさよと申けりかどわき殿はきこしめしあつもりならばこのふねをしよせてたすけよすいしゆかんどりうけたまはりろかいかぢをたてなをし船をなぎさへよせんとす此ほど二三日ふきしほりたる北風の名ごりのなみはけふもたつかぜはきほおつてなみはごうじやのごとく也はくらうせがいをあらひいさごを天にあぐればたゞゆきのやまのごとく也せうせんこそをのづから弓手へもめてへもおもふさまにはあつかはるれことにすぐれたる大せんに大勢はめされたりたゝむなみにせかれつゝ次第〱にいづれ共いそへよるべきやうはなしあつもり此よしを御覽じていや〱このむまをおよがせてあのふねにのらふず

ものとおぼしめしこまのたづなかいくつて海上にうちひてうきぬしづみぬをよがせらるゝいたはしやあつもりらうむしやにてましまさばさんづにのりさがつてとき／＼こゑをたて給はゞ御むまはいちもつ也おきの御座船になんなくむまはつくべきにわかむしやのかなしさはむまにはなれてかなはじとおぼしめされけるあいだまへがさにのり懸てさうのあぶみをつよくふみたづなにすがり給ひてうきぬしづみぬをよがせらるゝ馬いちもつとは申せどもたゞむなみにせかれつゝをよぎかねてぞ見えにけるくまがへ此よしを見まいらせまさなの平家やをきの御座ふねははるかにほどをへだてつゝしかもなみ風あらふしていかでかなはせ給ふべきひつかへし御せうぶあれさなき物ならばなかざしをまいらせんと弓と矢をうちつがつてそゞろ引てかゝりけりあつもり御覧じてなかなかさび矢に射あてられ一もんの名をりと思召こまのたづなひつかへしてとをあさになりしかばみづまりばつとけたてそめはのかぶらうちつがひかうこそゑいじ給ひけれ

あつさゆみ矢をさしはけてひくときは（一本うき）
返す事をは しるか そもきみ

くまがへもこゝろある弓とりにてあつとおもひさうのあぶみをけはなつて返歌とをぼしくてかくばかり

いたつきのはやはつれんとおもひしに
やといふこゑにたちぞとゝまる

かやうにゑいじてまちうけ申さるあいだあつもりゆみと矢をからりとすて御はかせひんぬいてうけて見よとてうたれたり熊谷さらりとうけながし取てなをしてちやうどうつ二うち三うちちやう／＼と打あはせけれどもいづれもせうぶ見えざればそれくまんもつともとてたがひにうち物からりとすてよろひの袖をひつちがへむづとくんで二人が兩馬のあひにどうとおつるあらいたはしやあつもり御こゝろはたけくいさませ給へどもらうむしやのくまがへにてものゝ

かずとはせざりけりやすくと取てをさへ申かぶと
ちぎりてからりとすてこしのかたなひんぬいて首を
とらんとしたりしがあまり手よわくおもひさしうつ
ぶひてさうがうを見たてまつるにうすげしやうにか
ねくろくまゆふとうはかせさもやごとなきでんじや
う人の年れいならば十四五かと見えさせ給ふ熊谷あ
まりのいたはしさにすこしくつろげ申上らうはへい
けがたにおひてはいかなる御きんだちにてまします
ぞ御名字を御名のり候へあらいたはしやあつもりら
うむしやの熊谷にくみしかれさせ給ひよにくるしげ
なるいきをつきげにや熊谷は文武二道のめいじんと
こそきゝつるに何とて合戰にほうなき事をば申ぞ
われらは天下のてうしんとしうんかくの座敷につら
なつて詩歌くわげんのみちにゝやうじたりし身なり
しか共この二三ヶ年は一門のうんつきていとをあこ
がれ出しよりこのかたぶしのいさめるほうをばあら
あら聞て候それ人の名乘といふはたがひのぢんにむ
らがつていくさみだれのをりから矢なきゑびらをこ
しにつけつばなきたちをぬきもつてこれはそんぢや
うそのくにのなにがしたれがしと名乘てうちものの
せうぶをし又くんでせうぶをけつするとこそきゝつ
るにわれはかたきにおさへられしたより名のるほう
とはいまこそ聞て候へあふ心得たりくまがへ名字を
なのらせくびをとつてなんぢがしうのぎけいに見せ
んためなよしくそれ世にはかくれもあるまじきぞ
たゞそれがしがくびをとつてなんぢがしうのぎけい
に見せよ見しる事もあるべしそれがみしらぬ物なら
ばかばのくわんじやに見せてとへかばのくわんじや
が見しらずばこのたび平家のいけどりのいかほどお
ほくあるべきに引むけて見せてとへそれがみしらぬ
ものならば名もなきものゝくびぞとおもひてくさむ
らにすてをけすてゝの後はやうもなし熊谷とこそ仰
けれくまがへ承て扨は上らうはぶしのいさめるほう
をばくはしくはしろしめされぬや世に物うきはわれ

らにて候きみの御意にしたかつて身をたすけんとすれば親とあらそひ子とたゝかひはからざるつみをのみつくるはぶしのならひなり花のもとの半日のかく月のまへの一夜のともせいふうらうげつ飛花落葉のたはぶれも今生ならぬきしんと承るこのたびの合戰に人しもこそおほきにくまがへが參りあふ事をせん世の事とおぼしめし御名乘候へ御くびを給てたゞ奉公の其ちうに後世をとぶらひ申べしあつもりは聞召なのらじものとはをもへどもごぜをとはんずうれしさにさらば名乘てきかすべしわれをばたれとかおもふらんかどわきのつねもりの三なんにいまだむくわんはかり名にて太夫あつもり生年は十六歳いくさは是がはじめなりさのみにものなたづねそよはやくびとれやくまがへよくまがへうけたまはつてさては上らうはくわんむの御すへにて御座ありけるやなに御年は十六さいなにがしがちやくしの小次郎も生年十六さいにまかりなる扨は御同年に參候ひけるやかほどなき小次郎みめわろく色くろくなさけもしらぬあづまゑびすとおもへ共我子とおもへばふびんなりむざんや直家なをざねもろともに今朝一の谷のをふ手にてかたきまれいの三郎がはなつ矢をなをいへがゆん手のかいなにうけとめなにがしにむかつて矢ぬいてたべと申せしをいたでかうすでかと問ばやとおもひしがいや／＼くまがへほどのゆみとりがかたきみかたのまのまへに（に字衍歟）てとふべきかとおもひはつたとにらんであらゆひにかひなの直家や其手が大事ならばそこにてはらをきれ又うす手であるならばかたきとあふてうちじにをせよ味方の陣を枕としゝのたうの名ばしくだすなといひてあればまことぞとをもひなにがしがかたをたゞ一目見かたきのぢんへかけ入てよりそのゝち又二めとも見ざりしなりさてもくまがへがつれなく命ながらへ武藏の國にくだりなを（本ノマヽ）いへがはゝにあひてうたれたるといふならばかんろのはゝがなげくべしつねもりとやらんも花のやうな

る若君をなぎさに一人殘しをきさこそなげかせ給ふらんつねもりの御しうたんとさてなをざねがおもひをばものによく／＼たとふればりうすいおなじ水なれどふち瀬のかはるごとくなり熊谷あまりのいたはしさに又さしうつむひて御さうがうを見たてまつるにせんけんたるりやうびんはあきのせみのはにたゝへえんてんたりしそうがは遠山の月にあひおなじ業平のいにしへかたのの野邊のかりごろもそでうちはらふゆきの衣たすいたいこうがんきんしうのよそほひをたとへばゑにはうつすとも此上らう（案ノ借字）の御すがたを筆にもいかでつくすべき熊谷こゝろに安じけるはいや／＼このきみの御くびを給てなにがしおんしやうにあづかりたればとて千年をたもちさて萬年のよはひかやまつだいの物がたりにたすけ申さばやとおもひなふいかにあつもり平家がたにてをほせらるべき事は武藏のくまがへと申ものとなみうちぎはにてくみはくんで候へ共わがこのなをいへにをもひかへ

たすけ申たりと御物がたり候へととつてひつ立たてまつりよろひに付たるちりうちはらひ馬にだきのせたてまつりなをざねもともにむまにのりにしをさひて五町ばかりゆきすぎうしろをきつと見てあれば近江げんじの大將にゐがたまぶち井ばみつ井よつめゆひのはたさゝせ五百騎計てをつかくるゆん手をみてあれば成田ひら山ひかへたりめてのわきにはどひどの七騎でをつかくるうへの山には九郎御ざうし衣ら旗をさゝせ御きんじよにとつては武藏坊辨慶ひたちばうかひぞん龜井かたをか伊勢駿河この人々をさきとしてこゑ／＼に申やうむさしのくまがへはかたきとくんづるがすでにたすくるは二ごゝろとおぼえたり二ごゝろあるならばくまがへともにうちとれとわれも／＼とをつかくるこのきみの有さま物によくよくたとふれば籠のうちのとりとかやあじろのひ魚のごとくにてもりて出べきやうはなし人手にかけ申さんよりなをざねが手にかけ後世をそれかしとふらは

ばやと思ひて又むずとくんでどうと落いたはしや御首をみづもたまらずかきおとし目よりたかくさし上をにのやうなるくまがへも東西をしらでなきいたりくまがへなみだをとゞめ御しがいをかなたこなたへをしうごかして見たてまつればよろひのひきあはせ〔に〕〔一本〕にかんちくのやうでうをしたんのいへにひちりきをそへてさゝれたり又めてのわきを見てあればまきもの一くわんおはします是はなになるらんとひらいてはいけん仕にあらいたはしやあつもりのみやこ出のことの葉をくれぐ〵とこそあそばしけれ此きみ都に御座の御時はあんせつしの大納言すけかたのきやうのひめ君十三にならせ給ひしが天下一のびじんにてましますを仁和寺おむろの御所にて月なみのくわげんの有しときあつもりはふえのやくおなしかくこにてことひき給ひし御すがたを一めみしよりこひと成てうたによみふみにかきこさるそのふみかずのかさなりておふせのなかとなり給ふ申三日と申にへいけていとのくわらくをさつてさいかいのはとふにをもむき給ふあらいたはしやあつもり御身は一の谷に御座あると申せ共御こゝろはさながらみやこへのみぞ通はれける

おぼしめしいだされしときにつくられけるかとおぼしくてしきにちやうをぞかゝれけるまづせいやうのあしたにはかきねこづたふうぐひすの野べになまめくしのびねややけいのかすみあらはれてそともの花もいかばかりかさねざくらに八ゑざくらきうかさんぷくのなつのそらにもなりぬればふぢなみいとふかほとゝぎす夜々のかやりびしたもえてしのぶるこひのこゝろすくわうきくしらんのあきにもなりぬればおのへのしかたつたのもみぢまくらにすだくきりぎりすさかでやはぎのさきぬらんげんとうせつのふゆのくれにもなりぬればたにのをがはもかよひぢもみなしろたへによもなりといへどもきえてあともなしなごりおしきこきやうのきゞの木ずゑを見すてつ

ついまは又一のたにのこけぢの下にうづもるゝつねもりのすゑのこのむくはんの太ゆふあつもりとかきとゞめてぞをかれけるかれを見これをみたてまつるにいとゞなみだもせきあへず御しがいをばらうどうにあづけをき御くびふえまきものともにもたせ大しやうの御まへに參り此よしかくと申あぐるはうぐわん御らんじてあらふしぎや此ふえはなにがしが見しるところの候それをいかにと申に一とせたかくらのみや御むほんくはだてのとき天下にこえだせみをれとて二くはんのふえありせみをれをば三井でらにてみろくにゑかうしたまへり小枝をば御さいごまでもたせ給ふよしうけ給るがみなせくわうみやうせんにてうたれさせたまひしとき此ふえへいけのてにわたる一もんのそのなかにふえのきようをめされしにじやくわんなれどもあつもりはふえにきようの人なりとてくだされけるとうけたまはるけさ一のたにのだいりやくしよにてふえのとをねのきこえしは此人のふきけるかとて大しやうなみだをながさせたまへばしるもしらぬもをしなべてみななみだをぞながしけるあつもりはめい大しやうくまがへいしくもつかまつりたり此たびのけじやうにはむさしのくにながいのしやうをとらするぞいそぎまかりくだれとの御ぢやう也くまがへらうどうどもしよちいりせんとよろこぶところにくまがへその御返事にをよばずなみだのひまよりかく計

人となり人とならばやとぞ思ふさらずばつゐに墨染の袖かやうにゑいじ御まへをまかりたち何としてあつもりの御しがひをげんじざうひやうのこまのひづめのかよふところにすてをき申べきをくり申てあればとてよもざいくわにはをこなはれじいや／＼をくり申さばやとおもひしほやのはたにくだりせうせん一さうこしらへざつしき二人さぶらひ一人あひそへじやうをかきしたゝめ八しまのいそへぞをくられけるへいけは元りやくぐはんねん二月七日に一のた

にをおちうらづたひ志まづたひして十三日のさうてうに八しまのいそにつくくまがへがをくりのふねもおなじ日やしまのいそにつくかたきみかたの事なればそのあひはるかにろかいをとゞめ大をんあげて申そも〳〵げんじがたよりもくまがへがわたくしのつかひにまかりむかつて候かどわき殿の御内なるいがのへいないざへもんのせうどのへ申たき志さいの候とたからかによばゝる　あらいたはしやへいけは一のたにをおちかいろはるかにをちのびたればさうなふげんじのせいのかゝるべしともおぼしめされずただ此ほどのもうきにはなみまくらかぢまくらゆめおどろかすまつのかぜいのちも志らぬまつらぶねこがれてものやおもふらんこゝろぼそくもおぼせしにげんじのふねよときこしめしわれさきに〳〵とろかいをはやめをちゆけどもとうごくのげんじにあはんといへるへいけなしおほいどのゝ御らんじてふかくなりかた〳〵世はぎようきにをよんでときまつぼう

にきすといふたとへばいこくのはんくわいがわたつてのつたりともあれほどのせうせんに何ほどの事のあるべきぞたれかあるゆきむかつてきひて參れと有しときへいないざゑもんうけ給はつてぞんずるみち候きひてまいり候はんとやかたのうちへつつと入ていでたつその日のしやうぞくははなやかにこそみえにけれはだには志ろきかたびらみなしろおつてひつちがへかちしのよろいひたゝれの四のくゝりをゆるゆるとよせさせやうばいたうりのさうのこてびやくだん見がき（本ノマヽ）のすねあてに志しにぼたんのはいだてしいとひどしのよろいのみのときとかゞやくをわだがみとつてひつたてくさずりながにざつくときゆつてうはおびちやうど志め九寸五分のよろいどをしをめてのわきにさいたりけり一尺八寸のうちがたな十文字にさすまゝに三じやく八寸候ひけるしやくどうづくりのたちはいてなしうちゑぼしにはちまきし志らえのなぎなたをつえにつき我におとらぬらうどう共

を七八人あひぐしはしふねをおろしうちのりて表にたてをしとませざゝめかひてをしよするはんくわいがいきほひもあふかくやとおもひ玄られてありそもそもげんじがたよりもくまがへがわたくしのつかいとはそも何事の玄さいぞやをくりのもの申さん候あつもりをくまがへがてにかけ申あまり御いたはしきによつて御玄がいにいろ〳〵のぶぐども又は玄がじやうをあひそへこれまでをくり申て候いそぎ御ざぶぬに御うつしあれと申もとくに聞てあらふしぎやあつもりは一もんの御ふねにめされあはのなるとにましますよしをうけたまはつて候がやはかうたれさせ給ふべきもしいつはりにてや候らんをくりのもの申御ふしんはことはり誠いつはりをばたゞせんちうを御らんぜよと申もとくにきひてげに〳〵これはいはれたりとてをくりのふねにわがふねをおしよせなぎなたを杖につきをくりのふねをさしうつぶひてみてあればげにといろ〳〵のぬいもの玄たるひたゝれに

あつもりの御玄がいとおぼしきをおしつゝみてぞをきにけるむらさきすそごの御きせながこがねづくりの御はかせ十六さいたるそめばのやむらしげどうのゆみも有まがふところはましまさずもとくにあまりのかなしさに長刀をからりとすてをくりのふねにのりうつり御玄がいにいだきつきなけどもさらになみだなしさけべどもこゑはいでざりけりやゝありてもとくにはなみだをながし申やういたはしや此きみの一の谷を御いでのとき此きせながをたてまつるおとなしやかにあつもりのいつしか御一もん世がよにましまし〳〵て四かいに風のおさまりつゝもとくにしよち玄らせ見るとだにおもひなばいかばかりうれしかるべきとおほせられしそのときはもとくにがうれしさを何にたとへんかたもなしまことのときはどうてんしめされざるあつもりを一もんの御ふねにめされつつあはのなるとにましますと申たるもとくにがこゝろのうちのふかくさよいま一どもとくにかとおほせ

いだされ候へとてきえいるやうになきければをくりのものもとも人もげにことはりやだうりとてみななみだをぞながしをくり（本ノマヽ）のもの申これは御つかひのみにて候いそぎ御ざぶねに御うつしあれと申もとくにきいてげに〳〵おもひにばうじおもひわすれて候とてあつ盛の御しがいをわがふねにうつし大船にこぎよせ此よしかくと申あぐるかどわきどのもつねもりもなにあつもりがうたれたるといふかさん候と申あらふしぎやあつもりは一もんのふねにのりあはのなるとにあるよしを風のたよりにきゝしほどはいかばかりうれしかりつるにくまがへが手にかゝりさてはうたれてありけるかとなみだながらにいでたまふにようばうたちにとりてはにようゐんをはじめたてまつりむねとのによくわん百六十人もはかまのそばをとりみなふなばたにたちいでゝ御しがいにいだきつきこれはゆめかやうつゝかと一どにわつとさけばれしを物によく〳〵たとふればこれやこのしやくそんの御にうめつのきさらぎや十六らかん五十二るいにいたるまでわかれの見ちの御なげきかくやとおもひしられたりやゝありてちゝつねもりはをつるなみだのひまよりもあらむざんやあつもり一のたにをいでしときこきやうのかたを見をくりこころぼそげにてたつたりしをいさめばやと思ひあらふかくやとよ敦盛よ三だいくわいもんのいゑをはなれかばねをやさんにうづみなをはんてんのくもゐにあくべきみがらうどうのみるめをもはぢよかしといふてあればさらぬていにてなぎさまでくだりしがふえをわすれて候とてとりにかへりしそのときともにかへらむとおもひつれどもかたきみかたにをしへだてられ又二めとも見ざりし也なさけあるくまがへにてかたみこれまでをくりたりむなしきしがいこのかたみけふはみつあすよりのちのこひしさをたれにかたりてなぐさまんなふ人々との給ひつゝもだへこがれたまひけりへいけがたの人々はいま一しほのなみ

だ也その丶ちくまがへがをくりたるじやうをめしいだし大しやうなれば此じやうをもしよしつねばしをくりてあるかつかひはせひをわきまへずたゞかどわきどのへとばかり申とてもいがのへいないざへもんへとかきたるじやうにてあるあひだいゑながふみをつかまつれうけたまはり候とてふねのせがいにひざまづき状をたまはりこし上たからかにこそよふだりけれなをざねつ丶しんで申ふりよに此き見とさんくはいしたてまつしあひだゑきにせうぶをけつせんとほつするきざみにはかにをんできのおもひをばうじかへつてぶげいのいさみきえあまつさへはしゆごをくほへたてまつるところ本ノマヽにたせい一どうにきほひかかつてとうざいにこれはゐるかれはたせいこれはぶせいはんくわいがへつてちやうりやうがげいをつ丶しむたま／＼なをざねはしやうをきうばのいゑにむまれたゞみをらくせいにめぐらしいのちをおなじうすちんとうがゆふへせゞはんはんにをよんでじたかくのかんぼくをほどこせりさても此たびかなしきかなや此きみとなをざねふかくぎやくえんをむすびたてまつるところなげかしきかなつたなきかな此あくえんをひるがへすものならばながくしやうじのきづなをはなれ一つはちすのえんとならんやかんきよのちしよをゑめしつ丶御ぼだひをねんごろにとぶらひ申べき事まことといつはりこうもんかくれなく候このおもむきをもつて御一もんの御中へ御ひろうあるべく候よつて恐惶つ丶しんで申げんりやくぐはんねん二月七日むさしのくにのぢうにんくまがへの次郎なをざねゑん上かどわきどの丶御うちなるいがのへいないざへもんのせうどのへとぞよふだりけり御一もんうんかくけいしやうどうおんにあつとかんじたまひげにやくまがへはをんごくにてはあほうらせつゑびすなんど丶つたへしがなさけはふか丶りけるぞやぶんしやうのたつしやさよひつせいのいつくしさよかほどやさしきつはものにへんじやうなくてかなは

じとおほいどの丶へんじやうをつねもりの志ひつにあそばしてたぶつかいはふみをたまはりいそぎ一の谷にこぎもどりくまがへどのにみせ奉るくまがへいかんとしてゆみやのみやうがなくしてはつねもりの御志ひつをおがみ申さんといたゞきひらいてはいけんつかまつるその御しよにいはくあつもりが志がいならびにゆいもつたまはりをはんぬ此たびくわらくをうつ立しよりこのかたなんぞ二たびおもひかへす事のあらむやさかんなるもの丶おとろふるはむじやうのならひあへるものにわかる丶事志どのならひしやくそんらごらてんの一しのわかれにあらずやいはんやぼんぶをやさんぬる七日にうつたてしよりこのかたつばめきたつてかたらへどそのすがたをみずきがんつばさをつらねそらにをとづれとをるといへどそのこゑをきかずされぱかのゆいせきのきかまほしきによつて天にあふぎちにふし是をいのる志んめいのなふじゆぶつだのかんをうをまつところによつて

七日がうちにこれをみるうちには志ん／＼をいたしほかにはかんるいそでをひたすによつてむまれきたれるにあへりきえつのはういなくしてはいかゞそのすがたを二たゝび見んずるすこぶるしゆみのいたゞきひきうしてさうかいかへつてあさしすゝんでこれをほうぜんとすればくわこおん／＼たり志りぞきこたへんとすればみらいやう／＼たるものかばんたんおほしといへどひつしにつくしがたしこれはむさしのくまがへのかへし志やうとぞよふだりけるさるほどにくまがへよく／＼みてあればぼだひの志んぞおこりける今月十六日にさぬきの八しまをせめらるべしときいてありわれも人もうき世にながらへてかゝるものうきめにもまたなをざねやあはすらめおもへばこの世はつねのすみかにあらずくさばにをく志ら露みづにやどる月より猶あやしきんこくにはなをゑいじゑいぐわはさきだつてむじやうの風にさそはるるなんらうの月をもてあそぶともがらも月にさきだ

つてうゐのくもにかくれり人げん五十ねんげでんのうちをくらぶればゆめまぼろしのごとく也一どしやうをうけめつせぬものゝあるべきかこれをぼだいのたねとおもひさだめざらんはくちおしかりき忘だいぞとおもひさだめいそぎみやこにのぼりつゝあつもりの御くびをみればものうさにごくもんよりもぬすみとりわがやどにかへり御そうをくやうしむじやうのけぶりとなし申御こつをとりくびにかけきのふまでもけふまでも人によはげをみせじとちからをそへし忘らまゆみいまは何にかせんとて三つにきりおり三ぼんのそとばとさだめじやうどのはしにわたしやどをいでゝひがし山くろだにゝすみ給ふほうねん上人を忘しやうにたのみたてまつりもとひきりにしへなげそのなをひきかへてれんしやうばうと申花のたもとをすみぞめのとうちのさとのすみごろもいまきてみるぞよしなきかくなる事もたれゆへ風にはもろき露の身ときえにし人のためなればうらみとは

さらにおもはずかくてれんしやうくろだにゝろうきよし忘やうねん念佛申てゐたりしがあるときれんしやうこゝろのうちにおもうやうさのくにに御たちあるかうや山へまいらばやとおもひ忘やう人に御いとま申つたのふぢをひかたにかけたのむものはたけのつえくろたにをまだ夜をこめていでけるがみやこいでのめいしよにひがしをながむればせいがんじいまくまのきよみづやさかちやうらくじかのきよみづと申はさがのていの御ぐわんじよすみとものざうりうたむら丸の御こんりうだいどう二ねんにたてられよろづのほとけのぐはんよりもせんじゆのちかひはたのもしやあつもりのしやりやうとんせうぼだいとゑかうしてにしをながむればたんばにをひの山おりくちにたにのだうみねのだうきたをかへりて見をくればうちのをいでてれんしのふなをか山のはか忘るしみるに涙もせきあへず南をながむればとうじさいじ四づか年はゆけども老もせぬむつだかはらとうち

ながめ山ざきたから寺せきどのゐんをうちすぎやはたの山をげかうしてこれたかのみこの御かりせしかたの丶はらをとをりきんやのきじはこをおもふうどのにしげきませがきのやどをすぐればいとだのはらくぼつのわうじをふしおがみ天わうじへぞまいりけるてんわうじと申はしやうとくたいしの御ぐはんなり七ふしぎのありさまこうはふるともつきすまじかめゐのみづのながれたえぬぞたつとかりけるとふしおがみ候ひてあまのにまいらるゝ大みやうじんと申はかうやのちんじゆにておはします御やまにほうしをさづけてたばせたまへとねんごろにきせい申てはやかうやさんへまいらるゝかたじけなくもかうやさんと申はていせいをさつて二百里きやうりをはなれむにんじやう八えうのみね八つのたにがゝとしてきしたかしせいらんこずゑをならせどせきしつのかげのどかなりあふかのてらよりみゑいだうのたにたいざうかいの大日百八十そんをへうせりさてまた大たうよりしおくのゐんへこれも大日の三十七そんをへうせうこんだうのほんぞんはあしゆくほうしやうみだしやかこれ又大しの御さくなり大たうと申はなんてんのてつたうをまなんでとそつ天のばんりをかたどり十六ぢやうのほうたうかみは千だいのあみだ中は千じゆの二十八ぶしゆしもはやくしの十二じんやう〱せゝにきはなくしゆじやうあくしよのつみきえらいがうのさんぞんをおがむぞたつとかりけるとふしおがみ候ひておくのゐんへぞまいりけるみちのほとりのはつこつはいさごをまくがごとくなりいよいよねんぶつ申おくのゐんへまいりあつもりの御こつをこめをきれんげだにのかたはらにちしきゐんと申あんじつをむすびみねのはなをたをりあかのみづをむすびをこなひすましれんしやう八十三と申に大わうじやうをとげにけりあくにつよければぜんにもつよしぶんぶ二だうのめいじんかんかはしらずほんてうにかゝるつはものあらじとかんぜぬ人はなかり

けり

明暦四年戊九月吉日　　山田市郎兵衞開板

なすの與一

なすの與一むねたかは大將の御前にゆみ取をなしかしこまる判官御覽じてたゞ今御へんをめす事べちの儀にあらずおきの平家かたよりも作りものを出して有御へんは弓の上手ときく一矢いよとの御ぢやうなり與一謹てかしこまる大將は御覽じてあらやう〳〵しや只つかまつれと仰ければかさねてぢたいの儀有あしかりなんと存知あのあふぎ射する事いとやすく候とおうけを申御前をまかりたち駒引よせて打のりわだちゝぶこだまたう大せいひかへておはしますぢんのまへをとをるとき與一申けるやうはそれものゝおもしろきは夏山や青葉まじりの木のまたにひわとこがらとうぐひすとそがぢやうそのきのえだにいくこゑなくと目にはみずしてこゑばかりとんちにかけ命もころさず羽もちらさず是をひきめの目のうちに射こふでとるぞ大事なるあれ體にまのあたりにさしあらはれたるぶんの物與一くわじやにてあらずとも弓取でひかんものかなのぎはより射ちぎり海上のはなとちらさん事いとやすく候とから〳〵とはわらひけれども與一もやうゆならざれば心ぼそさはかぎりなししほでむながひのひたるほど駒海上にうちひておきをきつとみてあればあふぎの立たる其間七八たんきりと見ゆるこゝはとをしと存ずれ共しばらくぢんをぞ取たりけるかゝりけるところにおきの平家三萬六千餘騎月卿雲客あひのこらず只今出たるなしうちゑぼしのしよくわんはあふぎの射手かおもしろしとさゞめきわたつて見えさせ給ふまづ一番にすゝむ船女房連の御座船也そつのすけどのふげんじどのさらしなどのおばすてどのしやうとうしの丹後の御つぼねあはの内侍に上總のおつぼねをさきとして上らうねうばう百六十八人下ともに二百八十餘人がまんまくをあげさせあつぱれ時の見物やとてさゞめき渡て

見え給ふ其つぎをみてあれば先帝をはじめ奉り御一門に取ては右大臣むねもり御子の中將ときざね四位少將ありもり藏人の太夫なりもりしゆりの太夫つねもり能登のかみのりつねさてそうかうにとつては三井のそうづけんしむぎやうめいぼうのあじやりほつせうじのしゆぎやうのふゑんさてさぶらひにとつては越中の次郎兵衛上總の五郎兵衛惡七兵衛景淸ひだの三郎左衛門此人々をさきとして諸國のじゆりやうけんびいしかりむしやに至るまであつぱれときのけんぶつやとてさゞめきわたつて見えにけりさる間與一はくがを歸てみてあれば大將をはじめ奉り武州にちゝぶとの相州にわだどのたしろのくわんじやのぶつなかはごえの太郎ゑげいへうつの宮の彌三郎ともつな山なさと見をさきとして源氏六千餘騎がなぎさへさつとおりくだつて射やあてんずらん射やそんぜむとてにあせをにぎりてかたづをのうでおはしますうしろはうりうあふはか前はむれたか松やくり八島も近かりけり比は元暦元年三月十八日の事なるにきのふ吹たる西の風いまだなみこそゑづまらねふねはうき木のものなれば浮つゑづんづたゝゑふたり能登のかみのはかりごとにげんじにちじよくをかゝせんためくるりをかまへて立たればはま風ははげしくひらりくるりと舞たるはくがをまねくがごとく也與一がむまと中はあけ六さいの野取のこまなみ風にたはぶれてあがつつおちつこの馬がたづなをうつてぞくるひけるふねもさしきになをりかねあふぎ矢つぼにさだまらねば乘たるむまもくるひけり持たるゆみにあせをこめあましつやうにぞ覺えけるさるあひだ與一うしほをむすび手水としなむやなすのゝ龍神正八幡大ぼさつなみかせゑづめてたび給へときせいを申ふりあふのひてみてあれば誠に氏神八まんの御かごにて候ひけるかなみ風ちやうとゑづまつていまはかうとみゆる與一こゝろに思ふやう女の立たるぶんの物なかざしにているときは花みてえだを手折風情と

おもひ上矢のかぶらぬき出しさつ〳〵とつまよつて（やノ音轉）みてあればちつとこの矢羽ひろくしはまかせにふかれあしかりなんと思ひしづわにのりゐまへわのはづれにをしあてこしのかたなをするりとぬきはしり羽二三度さつ〳〵とかひてすてければ源氏平家は御覽じてまことの射手ぞよくするとほめぬ人こそなかりけれ

その丶ち與一あぶみふんばりくらかさにつ丶たちあがつてだいをんじやうにてなのるたゞいまげんじろくせんよきがなかよりもあふぎのいてにさ丶れまかりむかひたるつはものをいかなるものとおもふらん下野の國のじゆう人金村の太夫に十八代のこうゐんいなの庄司の其子になすの與一むねたかとて生年十八歳にまかりなるそれあふぎと申は上下によつてしやべつの候かみかかなめかいづくを矢つぼと承て仕らんと申大臣殿きこしめしあつぱれ大がうの者かなあふぎならばいづくをなりとも射あてたらんをかちとはおもはず矢どころこひつるやさしさよ自餘のものはかなふまじいぜんにあふぎたてたるたまむしいで丶矢どころをとらせよ彼たまむしがゆらいをくはしくたづぬるに本は九國の住人はなみの太夫が末子はなやの八郎京ばらのいもうとあざ名をあふむのまへとめされしが一とせ女院北山にて花見の御遊の有し時百首つらねて參らせあぐる日本一番のときはにをとらぬ美人とて玄きに名をこそかへらるれ春はあをやぎいとざくら夏は又藤の花秋は七夕のあまのがは瀨にせきすへてたえ〴〵見ゆるはたきの水近くいろのませばとて名をたまむしとつけらる丶むめ地のおりこうばい七つひとへのきぬのつまをとり（がチ脫スルカ本ノマヽ）ふねのせかひにつつたちあがつてかれうびんなる聲をあげあらいまゐかしの射手殿やさふらふ日本ひろしと申共花のみやこにてとゞめたりくるまは千里をかけるとは申共くさびをもつてほんとせりはりをさげてはみづをを射かうがひ立てまちを射はさみものにはく

しを射あふぎをたてゝはかなめをいるとは申せ共かなめのへんはめづらしからずくもでのへんをあそばせと袖かざして立たるはかなをかがゑづにうつすともふでもいかでかをよぶへき與一このよしきくよりもことに大事のところを矢つぼにさゝれつものかな射ずものとおもひてかぶらをうしほにうちひて三人張に十三束とつてからとうちつがひ本はずうらはずひとつになれときり／＼とひき玄ぼりかつてつよにぞはなちける

せい兵のいる矢のくせとして手本にはならずにほひにほひととを鳴してあふぎのくもでの邊をばひふつと射切たりあふぎはやうのものなればはなのごとくさつとちるかぶらはいよ／＼とをなりして大臣殿のめされたる御座船のせかひのうちにしかいしやうへさつぷと入たりけり平家三萬六千餘騎いたりやくがの源氏いたりやしよくわんと玄ばしはなりも玄づまらず大將は御らんじて神妙なりと御ぢやうにてやがて御はんをいださるゝ

さるあひだ與一はたくる／＼とひんまひてあはのなるとのわたりをしいはやがせとをうちすきはなのみやこにつきしかばくわん東へくだつて頼朝にかくと申神妙なりと御諚にてやがて御判をいださるゝ二つの御はん給はり一門のこらずひきつれ所知入とこそ聞えけれ

未來記

去間牛若殿鞍馬の奥そうじやうがけといふ所へ夜な〳〵通ひ給ひけり天下をおさめん其ために兵法けいこのたしなみなり抑兵法と申は三略のじつしよたり昔大唐しやうざんのぞうけいが傳へしひしよなり吉備の大臣入唐し八十四卷の中よりも四十二帖にぬき書て我朝へわたされしを坂のうへのりじん九年三月にならひ敵をしづめたまひけり扨其後に田村丸十二年三月にならひならさかやまのかなつむて鈴鹿山の盜人かゝるげきとをたいらげ天下をまほり給ひけり（サシ）扨其後にすたりしいざんにこめられしを（詞）白河いんぢのこのかうべならふとは申せ共さしたるゆうはなかりけりさる間牛若殿唯さんがくをはしりまはり枯木の枝を傳ひ御身をかろめ給ひけり爰に天狗共さしあつまり内儀ひやうぢやうするやうは抑當山はしかゝ大師の祕所として行人ならでは此山へ通ふものもなかりしに鞍馬寮の牛若が我等がすみかをあざける事其いわれなき物をいざや天狗のほうばつをあてんなんどゝ申けり愛宕の山の大天狗太郎坊申やう抑此兒ふようにて親にも師にも不孝ならば天狗のほうばつあつべけれ共父母けうやうの其ために兵法けいこのたしなみなり父母にけうやう有者はかならず天道の加護を蒙にばつしたまはんせんぎこそしかるべくもなしといふひらの山の次郎坊進出て申やう抑我等が異名を天狗といふはいわれありむかしは人にてさふらひしが佛法を能習ひ我より外に智者なしと大まんじんをおこすゆへ佛にはならずして天狗道へおつるなりたとへまんじんおゝくして此だうへおつる共情をいかでしらざるべきいざや牛若合力し天狗のほうをゆるし親の敵をうたせん尤然べしとてむねとの天狗七八人若山伏に出たち牛若殿の前にゆきいかに小人きこしめせ抑此あたりに人住ところ候へ

ば御出あつてゑばらく フシ御あそびさふらへや小人とこそ申けれ牛若どのはきこしめし是唯ものとおぼさねどなんの子細の有べきと思召れけるほどに山伏のかたにのりそこ共ゑらぬ山を行ふかき谷にわけて入いづく迄牛若をぐそくするぞあやしやと思召れけるほどに山の氣色と木のこだちかんれいがゝとそびゑて萬木枝をならべては花しやうゑんにさかんなりりゝたるにほひはかうばしく松柏みどり色ふかし瀧のおとれい〱とひゞき岩間をくゞるおと是やまことにしやうりやうせんのきゝどくをんかとうたがわる爰はほんだうならびにはいでん玉を磨きゑんでんにしゆぎよくをつらね九重の塔は雲にそびゑ坊中むねをならべつゝ門々甍をつゞけたりかほどめでたきみてらの此せんこくに有けりと思召れけるほどにゑばらくたちておはしますコトバ懸りける所に有大坊の客殿にむねとの大衆百人ばかり連座してくはんげんかうのもてあそびせうちやくきんくごげんくわんをゑらべ面白かりける座敷なるが牛若殿を見付まいらせ管絃をとゞめててうしやう申はるかのざしやうにすへまいらせ山河のびしよくを調へちんけうをつくして持成申すらんぶになれば天狗共我をとらじのあそび事てんこつの物の上手がむじんのきよくをつくしてわれおとらじとぞくるひける老僧たち申されけるはあそびばかりにて事ゆくべきか源平の合戰の此すへに有べきをかねてゑつてはんべるなり小人の御持成にまなびて御目にかけよといううけたまはると申てゆゝしげなる天狗が是は平家の大將安藝守清盛と名乘てすゝみ出安藝國嚴島の明神の御はからひによりつゝ此世を今よりおさむべし平家に野心の者をば都のうちにをくべからず薩摩がた硫黄の島へ流すべしほうわうをば鳥羽の古宮に籠てまつり清盛が子共いよ〱はんじやうし一門六十三人はいづれも官ろくおもかるべしちやくし次男は左右の大臣孫は國王カゝルあるいは百官けいしやうなりフシあふれ

源氏のすゑ〴〵をたねをたつてほろぼすべし南都に敵がこもるときゝげきとこわくて手にあまらば大佛殿に火をかけよ ッメうけたまはると申てゆゝしげなる天狗が本三位の中將重平と名乘て三千餘騎をそつして南都へ押寄て大佛殿を燒はらふ春日のおとがめこはくして既にはや清盛は火のやまうを請とつてせうねつ地獄のかなやのほむらいかで是にはまさるべきあらあつやかなしやとこがれじにこそゑんだりけるとかやうに清盛のはや一期をかたつてさつと入コトバかゝりける所にゆゝしげなる天狗が是は平家の世つぎ右大將宗盛と名乘てかむりそゝたいのしやうぞくにてゆゝしげに座せられたり不思議やへいじのみだれのとき伊豆の田中へ流されし頼朝世をみだり伊豆の目代山木をうつて相模の國石橋山に幡をなびかせたてをつくおうばの三郎押寄て石橋山をいおとす頼朝主從七騎にて武藏の國へおち給ひこうのゑくしよぶんばいに幡をなびかしつゞくみかたをまち給ふに我も〳〵とさんせられけるをちやくたうつけて見たまふに夜日三日が其うちに頼朝の御勢貳拾八萬七千餘騎はたのゑたにあひなびき先陣は相模の國小林の鄉に京をたて新鎌倉とさゞめく爰に信濃の住人に木曾のくはんじや義仲は平家をせめん其ために五萬餘騎をそつし信濃の國をうつたつて越後の府に着しかば越路にかゝりせめのぼり ッメ都まぢかき越前の火打が城に陣を取平家の人々肝をけし驚さはぎ給ひて十萬餘騎にて都をたつて近江の國とかやあらちを越てちのゐ山うちこへかつるの山に陣を取源氏はくつきやうのじやうくはくに籠てさうなくおつまじかりしを有人のたばかりにようこくのせきをやぶられこらへかねて落給ふ平家跡よりせめつゞく加賀の國ゑのはらあたかのたゝかいは天地もひゞくばかりなりそこをも義仲うちまけて加賀越中の國境くりから山に陣を取平家の人々かつにのり彼山へせめのぼる其時源氏の氏神八幡大𦬇の御はからひによりつ

つ平家三萬六千餘騎は一夜がうちにくりからの谷の朽木とほろびはつ平家にげてのぼりしを源氏跡より責かゝる平家都をおとされ神祇をとつてはるかなる福原の京に落給ふコトバ去間義仲は天下を守護し奉りゆゝ敷見えて今ははや木曾のせいたうたるべきが頼朝の果報におゝはれ代を背くべきずいざう有サシクドキ平治のげきしんはさすが情の有つるにあゐらうかりけるかな源氏のげきふう四海にふきあれて雲の上迄浪たかし頼朝きこしめされて君をまぼらんためにこそ義仲都の守護共あれ却て天下をなやますは重而けうい成べし其儀ならばうつてをのぼせんとて大將にはかばのくはんじやのりより此牛若殿元服して九郎義經と名乘べじ牛若をば鞍門の多門伊勢の兩社まぼり守護し給ひきんようをあらはしきゝうの家をつぐべきなりカヽル是によつて敎頼義經を兩大將と定めカヽルフシ都へせめてのぼるべし フシむざんやなよしなかは天下のにくまれてうぃのはぢゆみやのすゑもすたれはて粟津が原でうたるべしツメ義經都のけいごとして三種の神祇事故なく都へかへし申さんと三くさのたうげひよ鳥ごへからめてをまはし責入べし平家こらゑで城をおつ汀のみくづとなりはつる終には西海のあかまもじだんの浦はやともが沖にて二位殿先帝宗盛を始めたてまつり平家三萬六千餘騎は水の淡と消えはつべし フシ扨其後に牛若殿兄ににくまれ給ふなよ梶原に心ゆるすべからず兄弟中不和ならば其身の運はつくべきなり クル六親不和にして三寶のかごはよもあらじカタツメ爰迄するをばおしゑぬ扨其後をしらぬなり是迄しやうじまいらせて對面申ゑるしには天狗のほうをゆるすなり是をまぼりにかけよとてくろがねの玉を取出し牛若殿にまいらせてかきけすやうにうせければ有し所はうちうせてそうじやうがけなる松の枝にぞおはしける扨は天狗がうしわかをかどへけるよと思召東光坊にかへらるゝ

ふえのまき

さるあひだ牛若殿くらまのてら東光坊にてがくもんきはめ給ふふでをとつての筆法にきよりんこさう水露のてんくしらうしの筆のあとぶんじよのかずをのこらずならひぞきはめ給ひけるときはこゝろにおぼしめすそれちごのもてあそびになに〳〵と申ともくわげんにすぎたる事はなしそのなかにとつてもふえはいちの名物なればよからんふえをもとめくらまへのぼせうしわかにとらせばやとおぼしめし都まぢかきよどのつのみた次郎がもとよりもふえを一くわんかひ取て鞍馬へのぼせ給ふうしわかなゝめに思召きさらぎなかばの比よりもふきはじめさせ給ひつゝその年の神無月すゑはのころになりければ百二十調子のがくをば吹こそきはめ給ひけれ牛若こゝろにおぼしめすそれ人の持たからの威徳をきかねば何ならず此笛のいとくを聞ばやとおぼしめし淀の津のみた次郎をぞめされけるみた次郎承てくらまでら東光坊にまいりうしわかどのゝまします庭上にかしこまる牛若殿は御覧じてよどの津のみた次郎とはなんじが事かさん候と申此笛はかんちくか本ちくかきかまほしやと仰けりみた次郎承てさん候此ふえと申はさぬきの國びやうぶのうらにてほうき五年に生れ給ふ弘法大師入唐し青龍寺にましますけいくわくわしやうをしとたのみしんごんのひみつをきはめ給ひわれ入唐のついでにてんぢくりやうじゆせんにおはします大聖もんじゆをおがまばやと思召し〳〵とある遠島をわけこえ給ひけるほどにかうしうといふ國に十の道わかてり其中に取てもかうなんといへる道こそせきけんの南なれこの道にさしかゝりたいたくの野邊ゆきすぎてはんにやだいをぞおがまれける彼はんにやだいと申はなんがくだいしひさしくをこなひ給ふ御寺也いま日本に生れてはまやどのわうじ聖徳たい

し共申なり衆生さいどの忝ひふかしなむがくだいしとふしおがみ又五十里をゆき過てきよくせんじとて御寺有かのてらと申はなんがく一の弟子ちき上人の御寺なりかの天台にかよひ御法をとかせ給ふなりあなたへも五千里こなたへも五千里一萬里の道なるを夜日七日にゆきかよひ御法をとき給ふなりかるがゆへに御しやくにもけいやうわうふくとしやうばんりとゝき給ふかゝるえんたうをわけこしたまひけるほどにたうてんぢくのさかひなるりうさ河につき給ふ彼河のひろき事は三百二十餘町なりなんばんてんにさかのぼりいさごをあらひながせりりうさのかはと書てはいさごながるゝ河とよむさうれい山のふもとに一のはしわたる石橋と是を云しやつけうと書ては石のはしとよむいはれにはりをつらねてはしらとしるりをならべてかうらんとすはしげたはしらにはめなうをつくりつけはしのうへせばくして尺にもたらずとをくしてそれる事はにじをなせるがごとくなりみるにきもきえひざふるひ足すさまじく身のけだちわたるべきやう更になしさりともこれをわたらずば白雲萬里をへだたりて何としてかは參るべきわたるにこそと思召いのちをすてゝわたらるゝほうりきなれば相違なくはやむかへにぞつき給ふ水上さしてよぢのぼりさうれいのみねにあがりつゝはるかのそらを見給へば夕日程もなかりけりてにとるばかりちかくしてかすみはたにのそこにありらひでんくもをひゞかし風せううんを拂てきんはくはことにちちんたり爰にはつせんどうじゆきあひ給ひいづくよりいづかたへとをるものぞととひ給ふ弘法聞召れて是はじちいきのこうぼう成がてんぢくりやうじゆせんにおはします大聖もんじゆをおがまんためこれまで參りて候どうじきこしめし是よりりやうせんじやうどへははくうん萬里をへだゝりて何としてかは參るべきもどれとの御ぢやう也こうぼうきこしめされて萬里のみちも一足の下よりつゞく事なればこゝろなが

くあゆまばなとかまいらで候べきどうじきこしめされておろかなりなんぢはけしにたとへたるぞくさんこくの小僧が唐土をこゆるだにもありがたき事なるにましててんぢくあゆみすぎりやうさむじやうどへ參らん事なか〳〵思ひもならぬ事也たゞもどれとの御錠なり弘法聞召れて國は小國なれどももじちいきと名付て目をかたどれるくになりてんぢく其名高けれど月氏國と名付て月をかたどる國なりたうどひろしと申せども晨且國と名付て星をかたどるくになり國は大小にはよるべからず只ちゑこそほんにてあるべけれどうじ聞召おもしろしこうぼうちゑくらべには參らんさてこうぼうは日本よりこれまでたつね來れるはぐちのそうにあらずやもんじゆもこゝろのうちにありりやうじゆせんもこゝろに有むねのほとりにもちながら遠島を尋ぬるはぐちのそうにあらずやこうぼうきこしめしおもしろしあのどうじ法にはじりのふたつあり心の內のもんじゆはそうのもんじゆこ

れなりりやうじゆせんのもんじゆは別のもんじゆ是也別ときらへばそうもなしそうときらへばべつもなしじり惣別の不二なるをちしやとは申候ぞどうじ聞召ことばのしよけんむやくなりめいよをげんじてきとくをみせまもちゐんきどくはなにをあらはさむかみもなく筆もなくすみもなくして只今もじをひとつ書てたべ弘法聞召かゝむず事はやすけれどどうじのきどくを先見せよいで〳〵さらばかゝむとてはしる雲にむかつてあびらうんけんとゆびをふるあらしにくもははやけれ共ぼんじはちつともみだれずあざあざとこそ見えにけれこうぼう御らんじてしゆせうなりあのどうじさらばかくとの給ひながるゝ水のおもてに龍といへる文字をかくさしもに水ははやけれどもんじはちつともみだれずおびをむすべるごとくにあざ〳〵とこそ見えにけれどうじ御覽してあの字にてんをうつてこそりうとはよまれ候へこうぼう聞召うたんず事はやすけれどもりうとならんがいぶせさ

にさてこそてんはりやくしたれなに程の事の有べきぞたゝうち給へ弘法さらばうつとの給びてひとつのてんをうちたまひいまだそのてもひかぬまにいかづちなつて雨くだり大水出來たり水ばなをみたまへばもゝいろの大龍がかしらを高くさしあげ水におをたたひて大木枯木のえだくだき岩をながしてくだすをと地震のゆるがごとしすはや見よどうじにげ給へとありしかばどうじちつともさはがずこくうにあがり雲をふんでさらぬていに御たちあるいたはしやこうぼうにげ給へとありしかばこうぼうちつ共さはがずばんじやくのゐんをむすんで河のおもてになげ給ふ二十余丈にそびへたる大ばんじやくとなりしかば其上にとびあがりとつこをにぎりこうぼうしはらくねんじゆしたまへりどうじ御らんじてしゆせうなりとよこうぼう我を誰とか思ふらんりやうじゆせんのもんじゆ也いで本體をあらはさんうてんわりはなきかしゝいてこよとありしかばをつとこたへてほどもなく金のほうくわんをいたゞきせきいにけんをはきししにはらつてんのくらををき御前にひつたつるどうじ則もんじゆなり五色の光りをはなちつゝしゝにめされたりければところはやがてじやうどと成りやうざん淨土これなり抑もむじゆと申はじやうるりじやうどのそのなかに八大ぼさつの惣一なり行者をむかへとりては極樂にをくらるゝ有時はりやうざんじやうどにて法花のずいさうをとき又有ときはじやくめつ道場にして三世諸法のじつぎをたてしゝの上にしては又釋尊の左のわきに立給ふかゝるありがたき大聖もんじゆをまのあたりにおがみ給ふ弘法大師の御こゝろさこそうれしくおぼすらんもんじゆかさねて仰ける末世の衆生のまよひにはうざうむざう是おほし有相といへるこゝろはよろつのものをありとみる是は有相のまよひにて地獄へおつるはじめなり又無相といへるこゝろはよろづのものをなしとみるこれはむざうのまよひにて地獄へおつるはじめなり一ね

んふしやうなるをこそもんじゆのちゑと申てぞつこんの佛に成ものぞ此みちをまぼりはや下向せよとの御諚なりこうぼうよく〳〵ちやうもん有てあらしゆせうや候さらば御いとま申とて其よりもどり給ふさうれいの山のふもとにひとつの瀧落るかのたきのさうがんに三本の竹有こうぼうけんをぬきもつて末のよを三ふしこめてきり給ひ契りのあらば日本にてめぐりあへやとの給ひて川にぞながしたまひけるそれよりもとのはし渡りはや大唐につき給ふたうどの寺のはじめはやうしうの白馬寺殊更たつとかりけり歸朝のこちがふきければみやうしうに出給ふ御船にめすときに持ところの佛具に五ことつこさむこをこくうへなげさせ給ひけり紫雲くだつてこれをまきはるかの海をわけこしてきの國の高野のみねにとゞまれりさんこの松と申事此時よりのいはれ也とつこははなの都なるとうじの塔にとゞまれり五こは越後の國くるみの寺にとゞまれりそれよりもだいしはのゐ島

ときさみのしまはるかのにしに御覧じて堀川といへるみなとこそたうどのわうのみやこよりながれ出たる大河なれそれより三日はしり過かしらなしといふ津こそもろこし船のとまりなれきみしうといへるおきすをすぎかうらい唐土のさかひ成もめいじまをはしり過きやうのみさきはくたいしゆもころいのみせんもゝ島きとの島もろみのしま船こしすぎてつちよりもあくればつしまのないにつくいきのもとおりはしりすぎいきのさかもと目にかけてあはや筑前の箱崎よはかたのつこそ見ゆれとてをの〳〵いさむ折ふしに惡風俄にふきおちてかうらいのおきすなるきとの島までふきもどす大師ひゐんをむすび我又歸朝する事ひほうのためにあらず衆生さいどのためなり順風たべや龍王ときせいを申させ給ひければなみのうへにどうじ一人たゝずみ此なみ風と申はかうらい唐土の神佛大師になごりをおしみ今一度たうどへむかへんための風なれば龍神のしよいならずとてかきけ

すやうにうせにけりこうぼうきこしめされて其ぎにて御座あらば先日本へつけてたべ我日本につくならばたうどのてらをまなびきんかうふしとがくをうつてかうらいたうどの神佛を勸請申あれにて御めにかからむときせいを申させ給ひければ梶取共がこれをみてあそこなるほうしは何をいふてさゝやくぞ死なふず事が目に見えてひとり事をするやとてわらふものもありにけり誰も命はおしいとてなげくものも有にけりだいしのきせいまことにてをひてぞふきにけるとかや過にしくわんむ天皇の御時三十七にて入唐ましへてさて又四十七にてさがのていの御ときに御歸朝とこそきこえけれされ共人はなどやらんしらざりけるぞふしぎなるつくしのはかたにあがりふぢをひ取てかたにかけみやこへ上り給ひしがきうりをしのき有によりさぬきの國びやうぶのうらにたちより父母のみはかをふしおがみあるいそべをとをらるるよりたけひとつ有あやしく思召れてとりあげ御らんありければ天ぢくりうさがはにてきりながしたるたけで有きたいふしぎにおぼしめし三ふしの竹をみつにきざみ給ひてをひのあしにゆひつけ都へのぼり給ひしが三ふしの竹がよに入は五音の聲を出す五音のこゑと申はきうしやうかくちうこれなり三くわんの笛にえり給ふおほすいれうこすいれう青葉のふえと申すあをばのふえと申はたけはしほにかれたれどあを葉はふしに一つあり枯ざるとくに名付たりこすいれうと申はしゆじやくゐんのをにが取よなへこれをふきしかば天人是をとらんとて羽衣をもつてなでゝはてんにあがりなでゝはてんにあがるかるがゆへに名付てひとえかくしとこれをいふ此三くわんのふえをば天下のてうほうなりとて大裡にこめ給ひしをさごろもの中將吉野山にて花見のけうの有しとき此笛を申うけてふきて遊ばせ給ひしにまんじゆらくをふきしかば天人是をちやうもんし五すいのくをのがれてぼさつと成てまひあそぶ其後に中將院の津に

住居するちうじやう年を老て後みた次郎がおほぢのみだ太郎がこんをもつわれ〳〵までは三代也ふく事はなけれ共此ふえを持ぬればさいなん更に來らず佛神のかごにあづかるてうほうして候をいかなる人が申けんかみさままても聞召めしをかせ給へばちからにをよび候はす若君とこそ申けれ牛若聞召おもしろしみた次郎いはひに三度かたれとてをし返しかたらせ猶もあかずやおぼしけむ草子にとゞめ給ひて笛のまきと申て鞍馬でらにありとかや其後にみた次郎なんりやう五つ給はり家路へとてぞかへりける

鞍馬出

さても六はらの御所には牛若殿の惡行の身にあまるときこしめし御一門さしあつまり御評定はとり〳〵なりかの人おひたつものならば當家のゆゝしき大事たるべしうつてすつるか忍びてながすかなんどゝひやうぢやうある母の常葉はきこしめしあるにあられぬ御身にてしのびてふみをあそばし牛若殿につけたまふ牛若文を御覽じてかやうに母の御手より文をたまはりいづくの國たれやの人をたのみて下るべしともおぼえずや所詮牛若御本尊より外たのみ申方もなしとかうたうにお參りあり夜と共きせいを申されたりそも〳〵比沙門と申は四天の中の第一に八天たうの尊者たり佛法ごぢの其爲に弓箭を守りたまふなり牛若がいちごの本望は身の爲おこすむほんならず父母敎養の其ために平家を討とおもひたち兵法稽古の嗜なり多門のしつしゆの福をば父母敎養せんものにあたへんとちかひなりほんせい今にたがはずばうしわかにこそたぶべけれとふかくきせいを申しうちまどろみたる御夢にしろきうさぎとねずみとが袂にいると御覽じてうちおどろきおぼしめすうさぎは東のものねずみは北のいきものなり東北のすみをばうしとらとこそ名付たれいしやなそんと申はこのはうにおはしますかるがゆへに名付つゝ多門てんと申なり比沙門のすみかをばべいしらまなやじやうとて米の降みやこなりいかさまにも牛若はうしとらの方に立越て代に出よとのぢげんかやあら不思議やな北と東のあひにはたれやの人をたのみて下るべしともおぼえずとまだいとけなき御心につく〴〵と案じたまひけり既に天はれまた早朝の事なるに道者四五人にうだうす尊者とおぼしき男のうとくの人とおぼしくてみはちに金をまき入珠數さら〳〵とおしもんで千五百里の道のあひだをあんのんに守りたまへやとふか

くきせひを申さるゝ其後かうしのうちよりも五十ばかりなる僧出て御道者はいづくの人ぞ態とのまいりか便宜さふかいやこれは便宜ながらわざと參りて候そばなる法師これをきゝ御邊はいまだみしらぬかあれこそ都にかくれもなき三條の金商人殿吉次殿よといひければあふさる事ありめづらしやおくよりもいつの比の御登りぞ去年の冬まかりのぼりて候が餘寒漸うちとけば此間に罷下り候べしさもあれ音に承る秀平殿と申はいかほどの分限の人ぞひでひらどのと申は五十四郡のそうすいふくし白河の關よりも東は殘る所もましまさずざいちやう國民あひしたがひ勢を持事はその數をしらず日本半國より猶おほき分限とこそうけたまはれさて其人は奥州の住人かいや都の人と承るが一年源氏のお大將八まんどのと申せしがおくへくだらせたまひさだたうむねたうやすたうをたいらげ御上洛の御時奥州の守護代をかのもとひらにくだしたまふ五十四郡の國人は皆もとひらに思ひつくこはきを和げよはきをなで民をあはれみまつりごと古法にまかせてとりおこなふ國のなびきしたがふ事は草木の風になびくがごとくなりかくてをくを納めつゝ秀平殿の代々は吹風も聲をとめたつ波もきしをあらはずよき大將とうけたまはる秀平殿と申はぞくしやうよき人にて國をもよく納め給ふ七珍萬寶あきみちてたゞ長者のくらゐと申なり牛若殿はきこしめし是は多門のたくせんや秀平は先祖の家人たのみくだる物ならばなさけなくはよもあらじ吉次をたのみ道づれしてくだらばやとおぼしめし吉次とふかくけいやくをめされ東光坊にお歸りあり常のところに御いりあつてたびの出たちをしたまふになみだもさらにせきあへずいつも御身をはなたれぬこがねづくりの御帶刀こんねんとうのこしのものこれぞしのびてもたれたるめしつかはれしわらはのあひずりのひたゝれに御身のめされたるせいがうの大くちをぬぎかえさせたまひ御ぐしからはにたかくあげ七さ

いの御としよりすみなれさせたまひたる東光ぼうをたゞ一人さ夜にまぎれていでたまふさすがにみてらのおんなごりかたえのちごたちこじどうじゆくのなこりどもあひねんふかき人おほしみらいをかけてちぎりしものいまもしらせであるならば前後をしゆごしゆくべけれども人めをしのぶたびなればたゞ一人ぞおいであるこゝろざしこそあはれなれ

師匠になごりのをしければかたみのためとおぼしめし一首のうたをぞのこされたる

　おもひきや身をおく山にすまゐして

　　　このみひとつになりゆかんとは

かやうに詠じたまひ庭の名木ぬいせきどもをいつのよにかはたちかへりまた見んずらんあぢきなやたうりものいはねばわがいでぬるをよもつけじ梅けいせつをふくめどもなどあかつきをしらせぬぞさて本坊を立出て地主ごんげんふしおがみあかゐの水もさえくもりかげさへやどす月もなし七つに出るくらまざか夜ふけてものうき道の邊をきぶねの神のやしろこそげにたのもしくきこえけれなごりぞをしきいち原のたちとゞまりてみぞろいけちはやふるらんかみがものみちをたゞすのもりすぎて夜はほの〴〵としら川や吉次にいまもあわだぐちはやまつざかにうしわかどのほどなくつかせたまひけりまつきちじはみえずしてみののくにのぢうにんせきはらのよいちわうばんをうけとつて夜を日につゐでのぼりしがその夜は大津にとまりまつざかのあたりにてうしわかどのにまいりあふ牛若殿は御覧じてげんじのものしのかどいでに平家のらうどうにあふところはむねんなりいかさまきやつに見合みやこにひろうせさせてはあしかりなんとおもひあふぎをかざしあみがさをかたむけさらぬ體にておとをりある與市が馬と申はあけ六さいの野とりのこまものをみてはきれやすしよひにふつたるあまみづのみちにたまりてありけるをそぞろにけあげけるほどにうしわかどのゝひたゝれは

たゞしぼるばかりにぬれにけるうしわかどのは御覽じてこまのあしたちしどろなりあしくもゆきあひけるやとてそなたもみずににげたまふよいちらくにほこつてにぐるこゝろのいたゐけさに手綱もとらでけかけたり牛若どのは御覽じてなふしかるべく御馬をしづかにうたせたまへや我等がやうなるわらんべこそけあげの水はいとはずともみやこがたの弓とりのとがむるかたも候べし手綱にあまらばその馬をすてておとをり候へあたら馬をすてうよりをりてひけとの御ぢやうなり與市むねんのこと葉をきゝこほどのものにあてられて返事をせぬものならば京いなかのものわらひとなるべしまたさらぬていにてとをりたらばさしてなんにもなるまじきをあれほどのわらんべあつれは路次のらうぜきあてねばときのちじよく太刀のむねにてうちふせておひうしなへと下知をするうけたまはり候とてわかたう三人ちうげん六人上下九人のものどもが太刀長刀のさやはづし聲ばかりにておどさんとておのれは〱とぞおどしけるうしわかどのは御覽じておのれがありさまはいなりまつりかぎをんの會か加茂のまつりのものまねか其足に風をひかせんとやあおそろしうもないぞとてからからとぞわらひける與市このよしきくよりもにくいやつがこと葉かな具足よごしに切ばしするな太刀のむねにてうちふせておいうしなへと下知をする承候とて眞中に取こむる牛若殿は御覽じて僧正がけにてならはせ給し天狗の法出やう所と思食御帶刀すりとぬいてみけんにさしかざし大勢の中へわつて入むかふものを拜みぎりめてへまはるは車切弓手にうけて左太刀よせてかへすはさゞ波ぎりこずへをもむは嵐ぎり天狗だをしのわらひぎりこゝはと思ふひじの手をば殘さずこそはつかはれける牛若殿の御はかせひらめくとみえしかば手のうらいまだかへさぬまに六人死て三人は痛手負てぞひれふしける與市このよしみるよりもあれほどのわらんべたとへば十四か十五

かにいかほどかあまらじ手なみ見せんといふまゝにこまかけよせてちやうとうつ牛若殿は御覧じてきやつは日本一ばんのおこのものにてありけるや直にきつてすてゝはおもひ出のあらばこそなぶり切にきやつをしてあそばゞやと思しめしうけだちにうちてぞまはりけるよいちこのよしみるよりもさればこそ此わつぱは北て行かいづくまでにがさんとなげかけなげかけ切たりけりうしわか殿は御覧じていつまできやつをなぶるべきとおぼしめし弓手にきれてかいちがひ與市が馬のさんづをひらきうちにちやうどうつ馬はうたれてはねければくらだまにとられてまつさかさまにとうどおつるおきん／＼とするところをはしりかゝつてむねうちにちやう／＼とこそうつたりけるすこしもくぼき所にて雨水にぬれにけり牛若殿は御覧じてあふもつ體もさふらはず兒と女には御めさふかや馬よりをるゝいんぎんさよ御供の者はいづくにあるぞやあの馬引て與市殿をのせ申せそれそれとありしかば返事するものなかりけり牛若馬を引寄是にめされさふらひて御歸候へや與一どのとありしかば與一あまりのはづかしさに馬も下人もふりすて山科寺のかたはらにふかく忍びていたりけりそれより牛若殿奥へくだらせたまひて天下を納め給ひけり

十六七のせう人のとをらせたまふ事のあらばみやこへ御とも申のぼりたらんともがらに上下をゑらますくんこうあるべしとふれてその日にみやこへとをりけり

うしわか殿はきこしめしそのぎにてあるならばなにしにくらまをばいでけるぞやそれはつしやうのおほぢひろしといへどとしにもたらぬうし若がみのをきどころのなきこそなによりもつてくちをしけれさりながらたゞいまはちごとこそふれて候へおとことふれてあらばこそしよせんおとこになりてくだらばやとおぼしめし下ぢよをちかづけこのへんにゑぼしおりばしさうか下ぢようけたまはつて今日みやこよりくだらせたまふ人のこれにてゑぼしを御たづねさふらふか去ながらゑぼしの御しよもうにて候はゞあのむかひに見えたるたかもがりのうちこそ五郎太夫と申てゑぼしの上手にてさぶらへうし若なゝめにおぼしめしもがりのうちへたづねいりあんない申さうう

ゑぼしおり

そも〳〵あんげんぐわんねん三月中じゆんにみなもとのうしわか殿くらまのてらを御いでありけふよろこびにあふみなるのだのしゆくにてきち次のぶたかにゆきあはせたまふその日のとまりはかゞみのしゆくきち次がやどはきくやときこふるかゞみのしゆくのゆうくんざつしやうかまへ吉次殿をもてなすさるあひだきち次世にありがほなるふせいにてじゆんのさかづきくだしぎやくのさかづきとばせければそののちはさか盛は成あらいたはしやうしわか殿は人めをつゝませたまふあひだきりどのわきにすご〳〵とたゞ一人たゝずみ給ふかゝりけるところにへいけのさぶらひ大しやうけんもつ太郎よりかたあく七びやうゑかげきよひだの三郎ざゑもんはやむまにのつてばんばのしゆくよりもふれてとをりけるは此ろじを

ちよりたそとこたふるいやくるしうも候はずきちじのぶたかのともしてくだるくわじやにて候がゑぼしのしよまうにてこれまでまいりて候そのときゑぼしおりの大夫うしわかどのをしやうじ申くわじや殿のめされうずるゑぼしは大さびざうかこさびざうかゑんせいやうたうせいやういかやうなるをめされうぞ御このみ候へやがておつてまいらせう牛若どのはきこしめしあらくちおしやゑぼしはたゞくろければくろひとばかりこゝろへたるにあまたなのありけることよなにとがなおらせうなしよせんおもひいだしたりわれらがせんぞはひだりおりをめさるゝよしをうけたまはつて候へば人かずならぬうしわかもひだりへ折せきばやとおぼしめしなふ太夫どの此くわじやがきうずるゑぼしはそれなる大さびにつぶのちつとあらゝかなるを一くせ三くせませひながたにあひをあらせくしがたをいが〴〵と一ためためてひだりへおつてたび候へそのときゑぼしおりの太夫ことのほ

かにはらをたてさればあのやうなる下らうにものをこのますればわがみのくわかいのほどをもゑらずこともかたじけなやひだりおりをめされうずる人は一とせをはりのくにのまのうつみにてうせ給ひしさまのかみよしともその御こにて御ざ有ちやくしあくげんだよしひら二なんともながさんなんよりとも四郎はあのゝ御ざうし五郎はとをたうみのかばの御ざうしのりより六はだいごのてらのきやうの公七はおんじやうのあくぜんじのきみ八なんにあたらせたまふたうじくらまでらに御ざあるうしわかどのこそめされうずるにわどのばらがやうにきち次がともをするくわじやがひだりおりをきうずる事おもひもよらぬしようかな牛わかおかしくおぼしめしおほせはさにて候へどおくへまかりくだらふずせき〳〵とまりとまりにてひだりおりをきたるよとひとのとがめのあらんときみやこのやどにふるきゑぼしのありつるをしよまうしてきてさうがひだりおりもみぎおりも

このくわじやはゑらぬなりかゝるむづかしきゑぼしをせきやにあづけ申といふてうちすてゝとをるならば御みのなんもあるまじきわつぱがとがものがるべし太ゆふきいてあらおもしろのことばづかひやいかさまこれはやうある人とおもひ一たんは申までといふてやがておりすましてまいらする

牛若烏帽子とりまはし御らんじて能烏帽子にて候か一のなんが候太夫きいて地になんがさうかさびにくせが候かひながたくしがたこゆびどころ何くになんが候ぞうしわか殿はきこしめしいづくになんも候はずゑぼしはわがしよもうのごとくおらせまいらせておりふしかはりをもちあはせざるが一つのなんにて候太夫きいてあらこと〴〵しのくわじや殿が申事やあの吉次は一ねんに一ど二ねんに二たびおりのぼりするそのともしてくだるくわじやどのなれば心やすくおもはれよくわじやどのがおくはなむけにとらせぞうしわか殿はきこしめし世にありがほなる太夫がとらせことばかなうしわかよにいづる物ならばいゑのきずともなるべきことばなればたちをとらせてゆかふずるがそれは千五百里のみちのようじんもかくるかたなをとらせてゆかばやとおぼしめし源じ御ちうだいのこんねんとうのこしのもの取出させたまひてなふ太夫殿このかたなをゑぼしのかはりとばしおぼしめされ候なみやう年のなつのころおくよりもよきむまをようい申さういとま申て太夫とてうしわかやどにかへらせたまふそのゝちゑぼしおりの太夫女ばうをよびいだしされば此とし月かゝるげざいをつかまつりゑんみやうをたすかるをぶつ神三ぼうもふびんとおぼしめさるゝによつてこのかたなをたまはる見たまへこれはみなこがねぞみやこのまちにてこきやくし一どのうちをらく〳〵とすぎうする事のうれしさはさていかににようばうきいてなにとものをばいはずして太夫がもちたるかたなを一め見やがてさめ〴〵となく太夫これを見てふしぎのによばうの

ふぜいかなおのこがたからまうけてよろこばゝともによろこばずしてわごぜはなにをなげくぞにようばうきいていまはなにをかつゝみさふらふべきさてはさきほどにゑぼしおらせたまひたるくわじやどのはみづからがためには三だいさうおんのしうぎみにて御ざさふらひけりそれをいかにと申に御みのもたせたまひたるかたなはげんじ御ぢうだいこんねんどうと申かたなみづからをいかなるものとおぼしめすぞこれは一とせおはりのくにのまのうつみにてうせ給しよしともものみうちかまだがためにはいもうとなり君にはなれまいらせみのをきどころのなきまゝに御みにちぎりをこめことしは九ねんになりさふらふ九ねんのなさけにそのかたなをみづからにたべかしなふわがきみのあうしうへとはる〳〵御くだりましますにおくはなむけにまいらせん

太ゆふきいてなか〳〵の事ふうふかいらうたんせつのわりなきいもせの中なればなにをかさしておしむべきとにようばうにとらするにようばうなゝめによろこふでへいじ一ぐてうはながたにくちつゝみこゆひとりそへきち次がやどへたづねいりあんない申さううちよりたそとこたふるいやくるしうもさふらはずさきほどにゑぼしおらせたまひたるくわじやどのに物申さんとうちに入うしわかごにあひたてまつりなふいかにわが君みづからをばいかなるものとおぼしめすぞこれは一とせこきみの御とも申のまのうつみにてうせたりしかまだがためにはいもうとなりなんしのみにてもさふらはゞ御さいごの御とも申べきがたとへおんなのみにてさふらともいかならんふちせにもみを玄づめんこそじゆんしにてはさふらへどもすてがたきはいのちめんぼくなくはさふらへどもゑぼしおりとちぎりをこめことしは九年になりさふらふ九ねんのなさけに此かたなを太夫にしようもうしわがきみのあう州へとはる〳〵御くだりましますを一めをがみ申さんためにこれまでまいりてさふら

ふぞやそれゑぼしをきるにはこゆひをゆふてきる事ざふらふそのゑぼしたまはれこゆひをゆふてまいらせんとはしげたやうにくも井にざつとゆいあげこのゑぼしをめされておくへくだらせたまひさとうひでひらを御たのみあつてすまんぎをいんぞつしへいけの人々を御こゝろのまゝにほろぼしいま一度御よにたゝせたまへいとま申てわがきみとてにようばうやどにぞかへりけるうしわかどのはきこしめしげんじのものゑのかどいでにせんぞのらうどうにあふたる事のめでたさよそれゑぼしをきるには二人のおやをとるならひのあると申がうしわかはたれをゑぼしおやにとらうぞしよせんおもひいだしたりわれらがせんぞ八まん太郎よしいゑは七さいにてやはたへ御まいりあつてあれにてげんぶくめされ八まん太郎よしいゑとなのらせたまふ二なんにあたり給ふはかもにてげんぶくめされかも次郎となのらせたまふ三なんにあたりたまふは大つのゑんらへ御まいり有てゑんら三郎殿となのらせたまふと承るそのごとくうしわかもかたおやをばうぢがみ八まんをとり申さうずかたおやをば此とし月すみなれしくらまの大ひたもんをとり申さうずたちはたもんのつるぎかたなは八まんと心ざしないのはしらにたてをかせたまひ九つのもとゆひみづからめされ御ぐし御はやしあつてゑぼしためつけめされへいじのさけをみづからうつしたちのまへにも三々九どかたなのまへにも三々九どたむけその丶ちわがみも御めしあつてさもあれこんやのきやくじんがなをばなにと申けみやうはげん九郎じつみやうはよしつねと申なりと一人ごとをゑたまひてゑきのいはひをとげさせたまふあらいたはしやこのきみの御よが御よにて御げんぶくましまさばあめが下のしよさぶらひまいりはうこう申べきがときよにゑたがふならひとてよぶもこたふるもたゞ一人の御げんぶくめでたきが中にもさきだつ物はなみだなり天あけければうしわかどのゑぼしためつけめさ

れきち次がまへにかしこまつておはしますきち次きつと見てくわじや殿はゑぼしをめして候かそれゑぼしをきるには二人のおやをとるならひのあると申がくわじや殿はたれをゑぼしおやにめされて候ぞうしわか殿はきこしめしさん候あまり人々のゑぼしめしつれたるがうらやましさにこゝろならずにきて候へどもおほせのごとくいまだなをばつかず候とてもはや天ともちともちゝはゝともばんじは頼申うへいかやうにもなをつけてめしつかはれ候へきち次きいてあふこのうへはちからをよばず今日よりして御みがなをばきやうとうだとつけうぞやかしこまつて候ただしといふに御みがやうになまめひたるわかき人をかちにてろじをつれんずが大事今日よりしてきち次がたちをかづいておくへくだり候へそれいなとおもひなばこれよりみやこへのぼられ候へうしわか殿はきこしめしこれをたとへに申かや世はまつせに及といへど日月はいまだちにおちたまはずてんじやうの

からにしきくだつてでいしやにまじはる事なしなにとしてげんじのちやく〳〵がうき世をわたるきち次がたちをもたうぞあらはかなの心やなきち次がたちをもたばこそめいどにましますちゝよしともの御はかせをもつにこそとおぼしめしひげきりの御はかせをわつそくにかけ吉次がたちをかづいておくへくだらせたまひけり涙のあめはたまかづらむかしはかけて見しものをきち次やう〳〵くだるほどにみのゝくにゝきこえたるあふはかのちやうじやのしゆくしよにつくかの長者が中のでゐには大みやうかうけの人人だにもとまりたまはぬにきち次がとまるいはれはよしともの御ためにいつけん四めんにひかりだうをたてられしときかね五十りやうむま十ひきくわん進にまいるなさけのふかきものなればとておりのぼりにはとゞまり候おほはかのゆうくんざつしやうかまへきち次殿をもてなすさるあひだきち次世にありがほなるふぜいにていままいりのきやうとうだはなき

かこなたへまいり上らうたちの御前にて御しやくを申せあらいたはしやうしわか殿いつしやくとりならひたる事御ざなけれどもときよに志たがふならひとてをつとこたへてめさるゝにまことにとりならはざる事なれば謬し（銚子ノ假借）のさけをゆんでへさつ〱とこぼしたまふきち次きつと見て大のなまこにかどをたてふかくのものかな人の御まへの御しやくをばさやうにたまはるものかきつくわいなりまかりたてと志かるあらいたはしやうしわか殿ときならぬかほにもみぢをさつとちらしさん候われさいこくがたにてしよやまでらのしゆとのしゆつしの御とも申しきみつみあかのみづさやうのほうこうをこそ申ならひて候へぶしの御前の御しやくはこれがはじめにて候いかやうにもをしへてめしつかはれ候へきち次きいてやさやうの事もわたくしにてこそ申せこれは人の御ざしきぞたゞまかりたてと志かるあらいたはしやうしわか殿志ほ〱としてざしきをたゝせたまふ

こゝにはまちどりのつぼねちやうへまいりて申されけるはなふきみきこしめせしうだにもふかぬふゑをいままいりのきやうとうだとやらんがふきけにさふらふよにありがほにふゑをひてさふらふぞやきみのちやうはきこしめしわごぜはとうかいだうのなをりを申ものかなげいはぬしをさげずでいのうちのはち志るを志んりんといひ志らざるをきちくにたとへたりいかに吉次がつれたるきやうとうだと申ともふけばこそふゑをばさすらめてうし一つしようせよはまちどりうけたまはつてうしわかどのゝ御そばちかくまいりきみのちやうよりの御しようにてさふらふ御みのこしにさゝせたまふそのふゑ一てあそばせうしわかどのはきこしめしなにこのくわじやにふゑふけと候ややまとだけにめをあけたるくさかりぶゑにて候をあづまのたびのとぜんさにもちはもつて候へどもふく事はなか〱おもひもよらず候吉次きいてやあなにと申ぞかみさまよりの御しようは

なんぢがためにはしやうがいのおもひでにてはあらずやたとひきこりぶゑにてもあれ又くさかりぶゑにても候へかしなどてうし一つふき申さぬぞうしわかおかしくおぼしめしこれは一たんのれいまでさらば一てふいておもいでにきかせばやとおぼしめしは丶のときはの淀のつのみだ次郎がもとよりもかいとらせ給ひたるこうぼう大師のせみをれなればいつくしきともなか〱に申ばかりはなかりけり此ふゑをとりいだしかんごじやうさくちうろくげくとて八つのうたぐちにはなのつゆをゑめしとうばんしきにねをとつてくも井にさつとふきあげばん事をゑづめてあそばしたりちやう此よしをきこしめしおもしろのふゑのねやからはしの中將殿は日ほん一のふゑ吹ふし一けんのそのためにおくへ御くだりましませしが此しゆくに御つきありよと丶も笛をあそばせしおんせいいきざしほどひやうしものあひすむたるところはからはしどの丶笛にはみぎはまさつておぼえたりこれほどのふゑにてさだめてがくはふくらんがく一てあそばせみなもとはきこしめしてもてうしをふくうへふかばやとおぼしめし一こつでうにねをかへしゆつこんらくをあそばしやがてをしかへしくわいばいらくをあそばすちやうこのよしをきこしめしおもしろのふゑのねやあらおもしろのがくのなやくわいばいらくといふがくさかづきをめぐらすたのしみげこも上戸もをしなべて酒をのめとの笛のねやゑかるべくはあすばかりきちじどのがとゞまれかしきやうとうだにふゑをふかせくわげんしてあそばんきみのちやうはきこしめしあらおもしろのふゑさふらふやみづからひとつたまはつてたゞいまのふゑのとのにおもひざし申さうきちじきいていかにきやうだいうちのものちかうまいりてものをきけそれがしがみやこにて申せし事はこれぞとよふゑはふかずとこしにさせまいはまはずともつねにあふぎをもてと申せし事はこれなりきやうとうだがふゑをふかずばかみさま

の御さかづきをばなにとしてたまはらふぞそれ一つ給てげんぜのみやうもんごしやうのうつたへにせよあらうらやましのきやうとうだとさかづきをうらやみしはことはりとぞきこえける

そのゝちうしわか殿三とぎこしめすうしわかどのゝさかづきをかなたこなたへまはし夜もふけければはまちどりさかづきをおさめてみなつぼね／＼へぞかへられけるこゝにはまちどりのつぼねごぜたちをちかづけていかにごぜたちきゝたまへいぜんにふゑふいたるきやうとうだとやらんはみめもいつくしいものふゑも上手たゞしと申におかしき事を申つるものかなそれふゑのなはかんちくこちくやうちくあをば二ば天人のひとへがくしこうぼう大しのせみをれわがてうのふゑはうちやまとしまたけよりたけなどゝこそ申せまだこそきかねくさかりぶゑとはあふむかしの人はこゝろのいたりがなふてふゑにてくさをかりたればこそ草かりぶゑとは申つらめおかしさよなどゝ申てとり／＼にこそわらひけれおりふしきみのちやうはものごしにてきこしめしわごぜたちはそのくさかりぶゑのいはれをしつてわらふかしらでわらふかたとひ百やうをしつたりともいちやうをしらずばあらそう事なかれと申たとへのあるぞとよいでいでわごぜたちにその草かりぶゑのいはれをかたつてきかせんむかしわがてうにようめいてんわうと申は十六にならせたまふまできさきのみやもましまさずある時くぎやうてんじやう人さしあつまつてあふぎを六十六本おりゑにようばうをかゝせくに／＼へまはしいかならんずるしづのめしづのこなりとも此あふぎのゑににたるにようばうやあるいそぎだいりへまいらせよ一のきさきにいはふべしと日ほんこくをばふれられける日ほんひろしと申せども此あふぎのゑににたるにようばう一人もなくしてあふぎはみなみやこへぞのぼりけるかゝりけるところにつくしぶんごのくにうちやまと申ところにちやうじや一人

あり四はうに四まんのくらをたてゝすめば四萬のちやうじやと申せしを人の申やすきまゝにまのどのとこそ申けれ四十のゐんにいるまで子のなき事をかなしみうち山のしやうくわんおんにまいり申ごをこそゑたまひけれあらありがたやきせいのゑるしはやあつてほうじゆをたまはるときたの御かた御らんずればやがて御ちやくたひのみと成七月のわづらひ九月のくるしみ十月はんと申にさんのひぼたいらかなりとりあげ御らんありければ玉をのべたるごとくなるひめぎみにておはします御むさうによそへたまよのひめとなづけいつきかしづきたてまつるかのひめ十四のはるの比みやこよりゑあふぎのくだりけるをひきあわせて見たまへばものいはゞあふぎのゑがねたむべうにぞ見ゆるさるあいだだいりへそうもん申されたり御かどゑいらんまし〱ていそぎだいりへまいらせよ一のきさきにいはふべしとやがた（たノ字慾削ルベ）て勅した（キカ）つちやうじやうけたまはつてたとへせんじにても候へたゞ一人のひめなればおもひもよらぬ事なりとせんじをそむき申されたりみかどゑいらんまし〱てそのぎならばまのどのけしのたねを日のうちに一まんごくまいらせよそれがかなはぬものならばひめをだいりへまいらすべしとかさねてちよくし下るちやうじやうけたまはつてたとへいかていのものなりとも日かずをふらばもとむべきがけしのたねを日のうちに一まん石なにとしてかはもとむべきぞたゞひめをだいりへ參らせよちやうじやのにようばうこれをきゝなふまの殿いとうなさはぎたまひそよ御み十八みづから十四のあきよりもちやうじやのゐんがうかうふつて四はうに四まんのくらをたてうちのけんぞくなにはにつけてともしき事はなけれどもかゝるものはときとしてくさあはせにもあふやとてあのいぬゐにあたつてかやのくらをつくらせとし〱のけしのたねをとりあつめてをひたるが一まんごくはそはゑらず十萬ごくもあるらんちやうじやなゝめによろ

こふでさらばくるまをかざれとてぐるまのかずをかざつて日のうちに一まんごくだいりへそなへたてまつるみかどゑいらんまし〳〵てしよせんたゞまのどのは三ごく一のちやうじやであり
御かどゑいらんまし〳〵て其ぎならばまのどのしよつかうのにしきをもつてりやうかいのまんだらをはたいろに七ながれおりつけてまいらせよそれがかなはぬものならばひめをだいりへまいらすべしとかさね〳〵のちよくしたつちやうじやうけたまはつてこはいかにしよつかうのにしきをもつてりやうかいのまんだらとやらんはほとけたちのじやうどにてはすのいとをもつておらせたまふとうけたまはるそのうへわれらはぼんぶのみとしてなにとしてかはもとむべきにようばうたゞ姫をだいりへまいらすべしちやうじやのにようばうこれをきゝたゞ一人のひめなるをだいりへそなへまいらせぎよくろうきんでんのうてなのうちのすまひをせばわがことはおもふとも見んずる事もかたかるべしゆふさりはなごりおしみのくわんげんとてよとゝものくわんげんなりされどもあかつきはすこしまどろみたまふかゝりけるところにうち山のしやうくわんおん長じやふうふのまくらがみにたちよらせ給ひていかにちやうじやきくか御みがむすめはみづからに申ごよなおしむところもふびんなればもろ〳〵のほとけたちをしやうじ申ちやうじやが中のでいにてにしきをおるぞちやうもんせようけたまはりてちやうもんすたなばたひこぼしのおるひのをとはていほろゝころはさながら御のりなりはたいろに七ながれおりつけてちやうじや殿の中のでゐにをき給ふちやうじやなゝめによろこふでいそぎだいりへまいらせけり御かどゑいらんまし〳〵てしよせんたゞまのどのはほとけにてましますやほとけのむすめをこひかねて十せんのくらゐをすべる共なにかはくるしかるべきくらゐを御すべりましまして十六のはるのころたどろ〳〵とくだらせたまひ

けるほどに十八日と申にはぶんごのくにゝきこえたるはやうちやまにつきたまふさるあひだみかどはとあるせうけにたちよらせたまひ一夜のやどをかりたまふやどのていしゆみかどを見まいらせあらいつくしのせう人や御みはいづくの人ぞさん候これはならはぬたびをうきくものとまり定めぬしゆぎやうじやにて候あらやう〳〵しやたゞくにをおほせ候へみやこのものにて候花のみやこの人はかゝるをんごくへは何のための御くだりぞさん候ほうこう（本ノマヽしようゝ上）ののぞみにて候（しゆチ脱スルカ）そのとき太夫よこでをちやうどあはせしようのくわじや殿がほうこうごのみや此太夫こそちやうじやどのゝじつしなれこのとしになるまでこをもたずけふよりして太夫がこになり候へでんぢをかうさくせんずるとも又かいせんをせんずるともそれは御みがまゝざうよみかどゐいらん（に）ましく〳〵て御らんせられ候ごとくやうりうの風にふけたるごとくにて田ぢをかうさくせんこともまたかいせんとやらんもなかなかおもひもよらず候たゞほうこうならばのぞみにて候太夫きいて此うへはちから及ばずさらばちやうじやに申さんとちやうじやどのに參り此よしかくと申あぐる ちやうじや きこしめされ ていそひでつれてまいれうけたまはると申てみかどをぐそくしたてまつるちやうじや御らんあつてあらいつくしのしよくわんや御みはいづくの人ぞみやこのものにて候なをば何といふぞさんろと申候さんろとは山のみち人のなにははじめて聞たあらおもしろいなやいかにさんろどの此ちやうじやはうしを千びきかひ候が九百九十九ひきにはとねりがそふてかひ候があれなるあめなるうしをばとねりどもがはつたとにくんでくさをもみづをもかはぬなりけふよりしてさんろどのにたてまつるくさをもみづをもよきにかうてたび候へあらいたはしやみかどはこひゆへりやうじやうしたまひてあくればうしのくちをひき千人のとねりとうちつれうしろの野べへいでさせ給ふ千人のとねりど

もはかりならひたる事なれば手でにかまをひつさげかきよせかきよせくさをかるいたはしや御かどはいつかりならはせたまはねばうしにうちかゝりふゑうちふいてましますむまはばとうくわんおんうしは大にちによらいのけしんとうけたまはるがげにやさありけるかにんげんは見しり申さねどちくしやうなれどもいろふせいを見しりたるかとおぼしくてくさをもはまずつのをかたぶけゑたをたれみかどのふゑをちやうもんす千人のとねりどもこのよしをきくよりもさんろどのがふくもの丶なをばなにといふやらんよこぶゑと申さうおもしろひぞやさんろどの草ばしかるなふゑをふけなんぢがうしにはくさをかりてかけふぞよふけよ〳〵といふほどに一どもくさをかりたまはずこれをもちてこそよふけてこ丶ろすめるをばさんろのくさかりよるのふゑわかめかるは田ごのうらわかくさかるほむさし野よわかめわかくさはわかのうらようめいてんわうのこひゆへあそばすふゑをこそくさかりぶゑと申なりこれはつくしの物がたりさても都にはみかどをうしなひたてまつりくぎやう殿じやう人さしあつまつてはかせをめさる丶にはかせまいりてうらなひ申さん候こうずる八月十五日にうさ八まんの御まへにてうはうじやうゑと申事をとりをこなはせたまへそれはさていかていのものにさすべきぞつくしぶんごの國うちやまと申ところにちやうじや一人ありかのものに御じんじをつとめさするものならばみかどはみやこへくわんぎよあつて天下はめでたかるべきよしをれいもんをひいて申さらばつくしへゑしやをたてよとてちやうじやのもんにさか木をたつるおりふしちやじやいであひたまひてこれはなにと申ゑだいぞやさん候こうずる八月十五日にうさ八まんの御まへにてうはうじやうゑと申事をとりをこなはせたまへそれはさていかていのもの丶入事にて候ぞさん候しきしやうこくしやうじんぐわん宮人八人のやをとめ五人のかぐらおのこまい

りていとうのつゞみをうちさつ〳〵のすゞをふりあげけいばあげむまみこのむらしゝでんがくとをつてのちやぶさめ候よしちやうじやきこしめされてあらむづかしげなる事やとてきんごくりんごうをたづぬるにのこりはこと〳〵くそろひけれどもこのやぶさめとやらんにはたとことをかくそのとき千人のとねり共をあつめてもしなんぢらが中にやぶさめばししつてあるかとねりどももうけたまはつてかみにだにしろしめされずそのうへわれらはあけくれうしにこそのりならひて候へやぶさめとやらんはなか〳〵おもひよらず候ちやうじやきこしめされてげに〳〵それはさぞ有らんあの山路はみやこのものときくもしやぶさめをしつて御神事をつとめさするものならばたとひいかていのものなりともちやうじやがむこにとらふぞそのときみかどにつこと御わらひ有てやぶさめとやらんはなによりもやすさふなる事にて候御かどには十町にばゞをやつて二町をばのけばゝとなづけ

八ところにまとをたてゝあそばすをば八つまとゝなづけてこれはくぎやうでんじやう人のわざかみのまへには三ぢやうにばゞをやつて三ところにまとをたてゝあそばすをばやぶさめと申てこれはぶしのしわざにてなによりもやすさふなる事にて候ちやうじやきこしめされてさてはなんぢはよく心得つるものかな此やぶさめをしつて御じん事をつとめさする物ならばうさ八まんも御ぢけんあれぜひちやうじやがむこにとつて四はうに四まんのくらをたてすたのたからをそへてゑさせうずとかたくけいやくしたまひけりさるあひだ八月十五日にもなりしかばうさ八まんの御まへにてきんごくりんごうの大みやうせうみやうさじきをうちらちをゆひをの〳〵けんぶつしたまふちやうじやふうふもおなじくさじきをうつてけんぶつするあひだしきしやうこくしやうじんぐわん宮人八人のやをとめ五人のかぐらおのこまいりていとうのつゞみを打さつ〳〵のすゞをふりあげけいば

あげむまみこのむらし丶でんがくとをつてのちやぶさめになるさるあひだみかどにはいろよきしやうぞくたてまつりかげなるむまにかひぐらをひてひつたて御かどにたてまつるみかどな丶めにおぼしめしひきよせゆらりとめさればゞわたしとつて返し一のまとちやうどあそばす二のまとはたとあたつて三のまとに此たびひらいてか丶らせたまひけるにしんでんにはかにしんどうしてしろきすいかんたてゑぼしきんのしやくを御もちありかたじけなくも八まんはゆるぎいでさせたまひてしらすにかしこまりいかなる御事候ぞわうは十ぜんかみは九ぜん九ぜんのかみのじんじを十膳の御みとしてつとめさせたまへばいよいよ五すいをもうなり候いまはみかどへくわんぎよあれくわんぎよならぬものならばまつせのしゆじやうをばつせうずるで候ぞ人おほきそのなかにちやうじやうふうふはさじきよりこぼれおちさせたまひていかなる御事ぞ十ぜんの御みを二とせがあひだつかひ

申事どもくちおしさよと申てりうていこがれたりければみかどゑいらんまし〳〵てよし〳〵くるしかるまじ御みがむすめをこふるゆへにみとせはほうこうありつるぞいまはひめを參らせよ受たまはると申てかたじけなくもうさ八まんのかいしやくにんにてたまよのひめは十六ようめい天わう十八と申に御かどにくはん御なり玉ろうきんでんのうてなのうちのすまゐしゑんあうひよくのかたらひあさからずこそきこえけれその丶ち御こをまうけさせたまひてしやうとくたいしと申てわがてうにぶつぽうをひろめさせたまふなりたまよのひめはしやうくわんおんようめい天わうあみだ如來のけしんしやうとく太しくせくわんおんのけげんなりようめいてんわうこひゆへあそばすふゑをこそくさかりぶゑと申なれしらぬ事をばわごぜたちわらはぬ事であるぞとよその丶ちきみのちやうはまちどりをめされい前にふゑ吹たるきやうとうだとやらんはおもへば見るところのあるにこ

なたへつれてまいれうけたまはると申てうしわか殿をぐそくし申さるあひだうしわかどののざしきになをらせたまふちやう此よしを御らんじてあらふしぎのくわじやどののやざしきになをるふぜいはよしともにたがはず御めのうちはひとへにあくげん太にて御ざさふらふもののたまふこはいろはともながにたがはずもしもげんじのゆかりかゝりにてましまさばはやはや御なのりさふらへやうしわか殿はきこしめしこれは上らうのこにても候はずみやこは三でうよねまちにすまゐするげらうのこにて候ものをちやうこのよしをきこしめしなふ御みはなにをの給ふぞみづからはよしとものさいぢよなりまんじゆのひめと申てわすれがたみの御ざさふらふをいらたかじのふもとにしゆつけになしをき申なりさて此あなだに一けん四めんにひかりだうをたてゝみだの三ぞんを安じ申よしともあくげんだともながふし三人の御ゑいをあらはし申なりもしもげんじのゆかりかゝりにてましまさばせうかうなんどあれかしなふあらこゝろぶかのくわじやどののやみなもときこしめしのきのたまみづちり／＼ぐさつゝめどもつゝまれずさてかくせどもかくされず父よといへるこゑをきゝやまぶきがほにうちにほひいまはなにをかつゝむべきよしともには八なんときはばらには三なんくらまのてらにすまゐせしうしわかと申ものなりちやう此よしをきこしめしさてはくらまにおはせしうしわかごにて御ざありけりわかぎみを見申せば志してひさしくなりたまふよしともの御すがたを見まいらすることゝちのありてなつかしさよとのたまへばみなもとも二歳のとしはなれ申せしちゝごをばゆめともさらにわきまへずたゞいまかやうにおほせらるればめいどにましますちゝ御前をおがみ申こゝちのありてなつかしさよとの給ひて御たもとにすがりつきふし志づみてぞなきたまふたがひにつきぬそのなみだよそのたもともぬれぬべしきみのちやうはまちどりをめされあれ／＼

ぐそくし申御ゑいおがませ申せうけたまはると申てうしわか殿をぐそくし申さるあひだうしわか殿たちいり御らん有ければげにもよしともあくげんだともながふし三人の御ゑいをあらはし申うしわかなゝめにおぼしめしせうかう禮をまいらせならはぬたびのつかれらいばんひきよせまくらとさだめすこしまどろみたまひけりかゝりけるところによしとも惡げんだともながふし三人まつくろによろひうしわか殿のまくらがみにたちよらせたまひてうれしくもおさなごゝろにおもひたちておくへくだるものかなきち次きちないきち六とて兄だい三人がいふ事をわれ〳〵ふし三人がいふ事とおもひにしをひがしきたをみなみともそむくべからずきち次がたちをかづいておくへくだり候へいとま申てさらばとてたちかへらんとゑたまひしがそよまことわすれたり日ほんごくのぬす人がきち次がかはごにめをかけあをのがはらによりきしゆふさり夜うちによせうぞようじんよきにつかまつれわれ〳〵ぶし三人のものくさのかげにてくろがねのたてとなるべきぞかくてもあらまほしけれどもしゆらはじまるにいとま申てうしわかとてたちかへらんとゑたまひしときみなもとゆめごゝろにあらおさなけなの御事やいまゑばらくとおほせあつてよろひのそでにすがるかとおぼしめしりやうがんさめて御らんずれば御ゑいのそでにとりつき申すさてはゆめにてありけるやあへなのいまのたいめんやとてりうていこがれたまひけりたしかにうしわか殿御むさうありけるものをとおぼしめしもとのざしきに御かへりありもゑぎにほひのはらまきをくさずりながにざつくとめしこんねんどうのこしのものを一もんじに御さしありかうがひぬきいで枕とさだめひげきりの御はかせをはらのうへにとうどをきゆんでのあしをさしのべめての足をきつとたてゆんでの御めのまどろむまにめてのまなこがてんじやうをはつたとにらんでとのゐしてこそふされけれ

さてもあをのがはらによりきするぬす人はたれ〳〵ぞまづゑちごとしなの丶さかひなる熊さかのちやうはんおやこ六人ざすせんくわうじなん大もんのゐばからひのうまのせうごちやうの與次さいくちの七郎はつたのぎやうぶかひつかみのわし次郎まどをのぞくはそらめくらよひにぬつたるなまあせをあかつきはしるけら次郎でんがくがくぼにはともをまよはすきつね三郎おなじくいたち次郎ふじにばんどうじばんどうないいづのおやまのやげじたの小六此人々をさきとして大しやうは七十よ人そのほかつがうこぬす人三百人にはすぎざりけりあをのがはらにうちよつて大まく三ゑにうたせ大つ丶たいへいかきすへわれらがさけをのまばこそ吉次がかはごをのむなるにのめやうたへやもつともとてまふつうたふつさかもりをする

か丶りけるところにくまさかのちやうはんはとうざいのなりをしつと丶しづめなにと面〳〵はおもひさだむるしさいによつてさけをまいるぞいで〳〵ちやうはんがぬすみしはじめしゆらいをかたつてきかせ申さんまづそれがしがおやにて候ものはゑちごとしなの丶さかひなるくまさかといふところたゞほとけのやうなるまたうどなりそれがしはいかなるぶつしんの御はからひにや七歳のとしをかのがうといふところにておぢのむまをぬすみ取てならひいひだのいちにてうりたるにちつともしさいが候はずそれよりもぬすみはもとでも入ずよきあきないとおもひさだめ日ほん六十六かこくをはしりまはつてぬすみをするに一どもふかくをか丶ずかくてちやうはんはこを五人もつて候が太郎はひるがんだうがじやうず次郎はしのびがじやうず三郎はようちがじやうず四郎はむまをよくぬすみ候五郎は人をかどひとつてあのさどがしまにてうつたるにちつともしさいが候はずきやつばらは一ごすぎうずるのふをみなもつて候かくてちやうはんこんやむねこそさはげあつぱれ三百

七十よ人が中にさいかくまはつたる人や有らんに吉次がやどへたちこゑてけごをそつと見てやがて御もどり候へ人おほきその中にいづのおやまのやけじたの小六なにがしみて參らんといふまゝにかきのすゞかけしかまのときんまゆはづかにひつこふてあふはかのきみのちやうのもんぐわいにたちよつて大音あげてよばはるくまのさんのやまぶしぶつぽうしゆぎやうのそのためにおくまつしまへとをるなり山ぶしは十人にあまつて候こんや一夜のほいたうたべやつとよばはつてうちのけごをゑづかにみてとをるやゝあつてうちよりもよねのたはらをなげいだす小六きつと見てものゑのかどいでになわかかつたるものをとおもひこしのかたなをひんぬいてかけなわはらりときつてすてよねをすこしとりあをのうはらにはしり歸て中のざしきにとうとゐて二のいきほつとつぐちやうはんこれを見てさていかにやげじた殿小六うけたまはつてゑものはいくらも候八十四のかはごをきりどのわきにつんだるは只たからの山のごとし四十二ひきのざうだ三疋ののりむまいづれもみなよきむまにて候四十よ人のひやうじのものゆみやなぐひ大だちをつとりそへようじんするていには見え候へどもれいのどうづきをあつるならばきやつばらはみなゑんのゑたへかくれうずむまもかはごもやす／＼ととらうずるがこゝに大事のことが候ちやうはんきいていまにはじめぬやげじた殿の大事とはなにごとぞ小六うけたまはつてかたらばきこしめせいにしへはつれてもくだらぬ十六七のしよくわんが候が此わつぱがいしやうのていそつとみたるところはいろゑろくじんじやうなるがはだにはどんきんをきて候きたるひたゝれはからぎぬをもつて地をば山ばといろに一はけざつとはひて十八五しきのいとをもつてものゝじやうずがぬい物をあり／＼とぬふて候まづゆんでのひぼつけにはいがきとりゐしやだんをぬいめてのひぼつけにはたけくらべにすぎを三ぼんぬふて

げんじのうち神ゑらはとが十二のかひごをかひそだてはぶしとはぶしをくいちがへばつとたつてはざつとおりまひあそびたるいはひのところをありくとぬふて候うしろのこくとぢにはきた山殿のさんざうすみよしのすいびん御むろの御しよのけいきをありくとぬふて候さてまたはかまのくだりにしくうせいぐわんをまなんでたうどのましも千びき日ほんのましも千びきたおどは大こくなればせいを大きふおもてをゑろくぬふて候日本は小こくなればせいをちいさうおもてをあかくぬふて候たうど日ほんのゑほざかひちくらがおきといふところにてたうどのましはにほんへこさんとす日ほんのましはたうどへこさんとすこさうこさじのかまのさうのところをばありくとぬふて候さて又はかまのけまはしに岩にまつつるにがめいせきにかゝるかはやなぎおきのなみがとうとうつてさつとひいてゆくゑほざかひをぬふて候きたるはらまきはけはもゑぎおどしなりよのつ

ねのはらまきはくさずりを八まいさぐるが此くさずりは十二まい十二まいのくさずりにゑろがねこがねをもつてやくしの十二じんをいがくとあらはすさいたるかたなはみなこがねづくりなりとつけさやくちにくりからふどうみやうわうのたきつぼへとんでおりけんをのうだるところをありくとほつて候おもてのめぬきはふどうのたいうらのめぬきはくらまの大ひたもんの御ゑんたいをあらはすさげをにはほけきやうの七のまきやくわうほんを三ながれくんで候ぞもつたるたちは二しやく六寸か七寸かとおぼえたりせつばもゝよせうんとうかかぶとがねまことのめぬきそらめぬきせめしばひきいしづきかはさきにいたるまで上ぼんのこがねをもつてひかめきたつて見えて候きたるゑぼしは六はらやうのたうせいむきのつぶのちつとあらゝかなるを一くせみくせませひながたにあひをあらせくしがたをいがくと一ためためてひだりへおつたゑぼしなりびんのかみはち

ぢむだりまゆのけはかつたりきのふかけふかの山いで此わつぱがありさまをものによく〳〵たとふれば木ならばしたんとりならばほうわうかねならばしやきんむかしをとるならばげんじのたいしやうたうせいやうをとるならばきよもりむねもりの御きんだちでましますがけいふの中ににくまれあづまときいて吉次をたのみておくへくだるとおぼえたりこのわつぱがめのうちを只一め見て候がゆだんする物ならば三百七十よ人のぬす人のほそくびはたすかりがたくおぼえたりちやうはん聞てやけじたどの丶ものがたりさらにきもさんせぬ事にて候さりながらそのわつぱがなにともはやらばはやれれいのちやうはんがばうをもつて只一うちのせうぶ候よ夜はなんどきぞ八つのころじぶんはよきぞはやうつたてやもつともとて手でにたいまつをとぼしつれあふはかの君のちやうのもんぐわいにの丶めきたつてをしよするくまさかの太郎はどうづきをつとつてどう〳〵とあてたみなもときこしめしあは夜たうよとおぼしめしわざとおもての乏とみを二三げん取てゑんより下へなげおろしよするぬす人をいまやおそしとまちたまふくまさかの太郎はくろかはのどうまるきかみをばつとみだしなぎなたをひきずりたいまつをふりたて八はなひぞ只参れまいれや〳〵とげちをなすみなもと御らんじてきやつはくせものかなきらばやとおぼしめしはしりか丶つていかづちぎりとなづけてちやうときつて御らんずればむざんやな太郎はあへなくくびをうちおとされてくびはうちへころびければどうはそとへぞたをれたる

くまさかの四郎がいそぎはしりか丶つていかになふちやうはん太郎殿こそ手おふてましませちやうはんきいてやあいた手かうすでか四郎うけたまはついた手やらんうす手やらんくびがうせてさうばこそちやうはんこのよしきくよりもむねんの次第かなそのわつぱに手なみ見せんといふま丶に八しやく五寸の

さてもばうをばくきながにをつとりのべみなもとにわたりあふみなもとは御覧じてちやうはんがばうをば一しやくをひてづんときり二しやくをひてちやうときつて手もと計のこされたり三百七十餘人のぬす人みなもとをまんなかにとりこめてひみづになれともふだりけりみなもとは御らんじてたまになれたるほうらいのとりのふせいもかくやらんおどろくけしきもましまさず大ぜいの中へわつていりにしからひがしきたからみなみくもでがくなわ十もんじ八つはながたといふものにわたりたてをんまはしてさんざんにきつてまはる天はうずまひてちはあけにそめかへれうがみづをゑくもをわけこくうへあがるごとくなりいまだときもうつさぬまにくつきやうのぬす人どもを八十三ぎきりふせたりちやはうん此よし見るよりもぜひそれがし手なみみせんといふまゝに六しやく三寸のさてもなぎなたみづくるまにまはひてみなもとにわたりあふみなもと御らんじおほくのかたきに渡りあひほねほをつたりげにやちやうはんはあらてのむしやなり大なぎなたにてたゝき立られうけだちになつてきつ〳〵とひきたまふちやうはんこれをみあはよきそとこゝろへすきまなくうつてかゝりけり

さるあひだみなもとそうじやうがかけにてならひしさても天ぐのほうは出あふところとおぼしめしきりのほうをむすんでかたきのかたへなげかけ小たかのほうをむすんでわがみにさつとうちかけちやうときつて御らんずればむざんやくまさかまつかう二つにうちわられあしたのつゆときえにけりそれよりもみなもとおくへくだらせ給ひて天下をおさめたまひけり。

こしこえ

去程に判官おごる平家を三とせ三月にせめなびけ三種の神器ことゆへなく二たび帝都におさめ申剰平家の大將大臣殿父子いけどつて天下の御めにかけたてまつる彼義經を見きく人あつぱれ弓矢の大將かなとほめぬ人こそなかりけれ有時よしつねさんだい有てそうし申されけるやうは彼大臣殿と申は平家によつてもよき大しやうにて候へばみやこにてもうしなはるやうもや候らんか樣に申せばおほそれいりたる御事なれども一には御朝敵又はわれらがいへのかたきなれば關東の賴朝にくだしたび候はゞ家の面目たるべきよしをそうし申されたりければみかどえいらんまし／＼て其儀ならば大臣殿ふしとらするぞいそぎしゆごして下るべし承ると申て手勢すぐつて三百騎みやこの中のかみ／＼にもさま／＼の御いとまを申

殊更やはたの御神は當家弓矢のしゆごじんめでたき神にてましますとやはたの御山をふしおがみ五月七日のあかつきあは田ぐちをうちすぎておほうちやまを雲井のよそにながめこしせきの淸水に着給へばおほいどの思ひつゞけてかくばかり

　みやこをはけふをかぎりのせきみつに
　　又あふさかのかげやうつさん

とくちずさみたまひさしていそがぬみちなれどもこまもうちでのしゆくにつく是やてんぢてんわうの大和の國をかもとの京よりも此ところにうつりみやつくりしたまひし其きうせきをふしおがみ勢多のからはしうちわたりのちしのはらのしゆくすぎてくもりかゝらぬかゞみやまそのかみならのおきなの

　かゝみやまいさたちよりてみてゆかん
　　年經ぬる身はおひやしぬると

おひをいとひてよみたりし其いにしへのことの葉までおもひいだされてあはれなりゑち河わたればちど

りなくをのゝほそみちすりばり山ばんばさめがゐかしはばらをちこちのたつきもしらぬ山中におぼつかなくもよぶこどりふはのせきやのいたびさし月もれとてやまばらなるたるゐのしゆくを打すぎてはやくあつたにつき給ふかの明神と申はかけまくもかたじけなや天照大神の其ひとつにておはしますをはり第三の宮とは申ながらもをよそは日本第三の御かみにてましますと其時こそおほいどの判官に語り給ひけれなにとなるみときくからにいそべのなみにそでぬらし參河の國にいりぬればはや八橋にかゝりはしのふせいを見給ふにいさごにねふるえんあうは夏をしらでさり水にたてるとじやくは時をむかへてひらけけり花はむかしをわすれずしておなしいろにぞさきにけるはしもむかしの名なれどもいくたびかわたしかへつらんかげくらからぬ赤坂のしゆくにもつかせ給ひける是や大江のさだもとが當國のかみたりけるときにかのしゆくの遊君にふかきちぎりをこめたり

しがうきよのならひのはかなさは見はてぬゆめと成たりしあかぬわかれをかなしみてぼだいのみちをさとりけんゆかりおもへばしゆせうなりすゑをいづくと遠江はまなのはしを見わたせば南には海上まんまんとしてきはもなしきたには又こすい有人家きしにつらなつて松ふく風なみのをといづれものりのたぐひぞとうちながめ下るほどに大井川にもつき給ふ大臣殿御らんじて我よが世にて有し時かめ山の御かうの御ともしもみぢみだれてながれ出し清瀧川や大井川思ひいだしつゝなつかしやうきしまがはらよりもふじの高根を見あぐれは時しらぬ雪のいろ雲井にしろくたなびきてふもとには東西へながく見えたるぬまの有あしわけ船にさほさしてむれいるかもめのこころのまゝにかなたこなたへとびさるをうらやましくやおもはれけん大臣殿ふしともに思ひつゞけてかくばかり

しほちよりたえすおもひを駿河なる

身はうきしまに名をはふしのね
御子有衛門のかみも
我なれや思ひにもゆるふしのねの
むなしきそらのけふりはかりは
はらにはしほやのけふりへん〳〵とし風にまかせてゆくゑもしらずまよへり伊豆のみしまにつき給ふかの明神と申はむかしのうゐんがなはしろ水とよみたりし歌のみちをなふじゆありしんかんの天より雨くだりかれたるいな葉もたちまちにみどりの色と成たりしめでたき神にてましませばたのもしくおもひ申なり來世にてはかならず九品のれんだいへむかへとらせ給へやときせいを申させたまひつゝさがみの國に入ぬればぎけいのためによろこびをきくがはの宿とうちながめすゑはさかわのしゆくにつく判官むさしをめされ案内申さでかまくら入ぶれのいたりとぞんずるなりひきやくを立鎌倉へあんないを申べし辨慶承てこの儀尤しかるべう候とていせの三郎よしもりをもつてあんないを申されたりらいてう聞召れて扨ぎけいがさかわまでくだりけるかやめでたさよこのかまくらと申はしんさうの所にて見參どころ見ぐるしゝげんざむところをつくらせよわかひの津よりもざいもくをあげさせよかぢばんじやうをそろへつつ急げいそげとおほせける梶原承てをつとこたへて御前を立てこゝろのうちに思ふやうあさましや此きみ在鎌倉ましまさばまつりごとしきでうたゞしきたみのむねまでもみな此君の御はからひとなるべしさあらんときにかぢはらがさかろのいこん殘てわれわれ父子ひきいだされてゆいのはまにてきられん事はうたがひ更にあるまじそのぎにて有ならば先追かへし奉りより〳〵ざんそを仕りこのきみうしなひまいらせてうきよのなかをらく〳〵とすまばやなんと思ひければあんじすまして梶原は又君の御まへに參りけりいかにわがきみきこしめされ候へけうとおんむの誰があふさかにかくれゐて世を亂らんとたくむよ

し風聞候關東には君かくて御座有都にはぎけいのけいごとまし〳〵てこそ天下はおさまりめでたかるべきに一ゑんに關東に御座有ては天下を誰かしゆご申さん頼朝聞召れて其ぎにてあるならばさねひらをつかはし大臣殿ふしをうけ取てぎけいをばみやこへのぼせよかぢはら承て御前をまかり立土肥の次郎さねひらをちかづけ御身さかわへうちこえおほいどの父子うけとつて義經をば都へのぼせ申され候へさねひら承てあつばれこれほゞ大事の御使かなとはぞむずれともきみの御意とある間よしもりとうちつれさかわのしゆくに參り此よしかくと申あぐるぎけいきこしめされていや〳〵是はよりともの御返事ともおぼえずれいの梶原がちうにて申とおぼえたり只かまくらへをし下てかぢはら父子がかうべをはね此あひだのむねんをなさんせむとこそおほせけれさねひら承て御ぢやう尤にて候さりながらまづ大臣殿父子をばかまくらへうつし御申有てしばらくこのところに御とうりうなされより〳〵御そせう候はゞ實平もかくて候うへ能やうに申なすべしととかくなだめ奉りおほいどの父子うけ取てかまくらへうつし申されたり其後又いせの三郎よしもりをもつて土肥の次郎して申されけれども是もかぢはらがちうにて心得とくとく御のぼり候へと申つけて候に長々とうりうめさるゝこそこゝろもとなく存ずれ此たびのけしやうにはいよのくに一ヶ國を申あづけたてまつる別してちうのあらばをつて九國の御代官を申あづけ奉らんとの御意にて候とよしもりをかへす吉盛やがてたちかへりさかわのしゆくに參り此よしかくと申あぐるぎけいきこしめされてこはいかにきそよしなかをちうりくせしよりこのかた平家を三とせ三月にせめなびけ三種の神器ことゆへなく二たび帝都におさめ申剩平家の大將大臣殿父子いけどつて是までくだりたる義經にいかにざむしんありとても一度の對面はなどかはなふて有べきぞ是もおもへばかげときがざんし

むによるなれば頼朝にうらみさらになしまつたくふちうなきよしを諸寺諸社の牛王ほうゐんのうらをもつて申されけれ共是もかぢはらがざんそによつてかなはすぎけいむねんに思召いかに武藏きくかとよ一通の狀を書て參らせ頼朝の御めにかけ返事によつてとも角もはからふべきにてはんべる也それ〳〵むさしと仰ければべんけい承てすみすりながし筆にそめさうあん迄もなくし只一筆にぞ書たりける

みなもとのよしつねおほそれながら申上候との（とハミノ誤カ）意しゆは御代官のひとつにえらばれちよくせんの御つかひとしるいだい弓せんの藝をあらはしくわいけいのちじよくをきよむちうしやうをこなはるべき處に思ひのほかに虎口のざんげむ（本ノマヽおかすノ誤歟）によつてばくだいのくんこうをもだせらる（もハあノ誤カ）義經おかしなふしてとがをかうぶるこうもつてあやまりなしといへど御かん氣をかうぶるあひだむなし　こうるいにしづむつら〳〵事のこゝろをあんずるにざむしやのじつぶをたゝさずかまくらへだも入られざればそいをのぶるにあたはず數日ををくる此ときにあたつておんがんをはいし申さずむばこつにくどうたいのぎたえすでに宿運きはまつてむなしきに似たるか將又ぜんせのなういんをかんずるかかなしきかな此でうこばうふそんれいさいたんしたまはずば誰の人か愚意のひたんを申開かんいづれの人のあひれんをたれられむや事あたらしき申狀じゆつくわいに似たりといへどよしつね身體はつぷを父母にうけはくたいの時節をへずしてこかうのとの御他界の後みなしごと成はて母のふところにいだかれ大和の國宇多のこほりにをもむきしよりこのかた一日片時安堵の思ひに任せずかひなきいのちを存すといへど京都のけいくわいなんぢの間諸國をるぎやうし身を在々所々にかくし邊土遠國をすみかとし土民百姓等にぶくじせられしかるにかうけいたちまちにじゆんじゆくして平家の一ぞくついたうのために上洛せしむる手あはせにきそよしなかちう

りくの後平氏ほろぼさんためにあるときはがゝとある岩石に駿馬にむちをうつてかたきのためにいのちをうしなはん事をかへりみず又有時はまん〳〵とある海中のうへにして風波のなんをしのぎ身を海底にしづめん事をいたまずかばねをげい〳〵のあぎとにかくしかのみならずかつちうをまくらとしきうせんをげうとする本意併ばうこんのいきどをりをやすめ申年來の宿望をとげむと思ふよりほか他事なし剩はよしつね五位の尉にふにんのでう當家のちうしよく何事かこれにしかんしかりといへどいまうれへふかふしてなげきせつなり佛神のたすけにあらずよりほかたじなしこれによつて諸寺しよしやの牛王ほうゐんのうらをもつて野心を更にぞむせぬむねを日本國中の大小の神祇めうだうをおどろかし奉り數通の起請文を書進ずといへどなをもつてゆうめんなし此國は神國たりしんは非禮をうけ給ふべからずたのむところたにあらず則貴殿廣大のじひをあふぎびんぎをうかがひかうぶんにたつしひけいをめぐらされあやまりなきむねをゆうせられはうめんにあづからばしやくぜんのよけい家門にをよびながくゑいぐわを子孫につたへんよつて年來のしうびをひらき一期のあんゑいをとくしゆせしめん事をつきす事のこゝろをあんずるに爰につの國渡邊にてさかろ立のいこんによつて義經けいしのなかよからずやゝもすればひまをうかがひ折を得てよしつねをうたむとほつす猶もつてかなはざれば敎頼（範ノ假借）の御てに付てさき立て關東に下着し頼朝にちか付たてまつりより〳〵ざんそをいたすところそのいはれなきものなりほん〳〵のつみのうたがひをばかろくする共無實のつみのうたがひをば重くせよ理はばんみんのよろこび非は又諸人のなげきたりけんわうは一しんのために理をまげず先車のくつがへすをみてはこう（後）しやをそれをなせりかみす（よハご歟）なほなればゑもやすし水上すまざればかりうによつて月やどらず何ぞかぢはら一人に諸國のしよさ

ぶらひを思かへられむよりいそぎ遠島にはいりうせ
られ諸家のなげきをやめちうきんのいさみをなし給
へ誠惶誠恐謹言元暦二年六月五日進上因幡のかうの
とのへ義經はんと書たりし彼辨慶がひつせいほめぬ
人こそなりかけれ

ほりかわ夜うち

さるあひだはうぐわんあけければさんだい申されたり御かどゐいらんまし〳〵ていくほどなくてしやうらくはこゝろもとなくおもへどもみかどをしゆごし申さばあふさかよりにし三十三がこくをたまはるとせんじをまかりかうぶつてほりかわどのにうつらせたまふかくてきんごくりんごくの大みやう小みやうくわんとうよりの御しやうらくとうけたまはりくんこうけじやうにあづからんとてもんぐわいにこまのはなゆるすことこそなかりけれされどもくわんとうより御ゆるされなきあひだをこなひたまふ事もなし四こくさいこくはみな此きみにおもひつき申いまこそかやうに御ざありともつゐには日ほんはんごくの御大しやうにてましますといつきかしづきたてまつるこの事くわんとうにかくれなしかぢはらはやくききつけらいてうの御まへにまいりいかにわがきみきこしめされ候へすでにはや御ざうし御ゆるされなけれどもあふ坂よりにし三十三がこくをわがまゝなりとのたまひて四こくさいこくよりもくわんとうへまいるつはものをみやこにてをしとゞめたまふ此きみみやこに御ざあらばつゐには日ほんは此きみの御はからひとなるべきなりいたはしくはぞんずれども此きみをうちまいらせ御けうやうねんごろに御とひあれと申頼朝きこしめされてそのぎならばいそぎうちてをのぼせよかぢはらうけたまはつてたれをかうつてにのぼすべきあふこゝにくきあひてあり御うちのとさしやうぞんはこゝろもがうにちゑふかしやゝともすればそれがしにてきをなすあひてなりかれをうつてにのぼすべしかれをうつてにのぼするならはあんふかきものにてぎけいもうたれたまふべしたとひうたれたまはずとさをばつゐにうたるべしとさだにうたれてあるならばぎけいもほろび給ふべしり

やうてきながらほろぼしてうき世のなかをらく〱とすまばやなんとおもひければあんじすましてかぢはらはしやくとりなをし申やうたれ〱と申とも御うちのとさしやうぞんはこゝろもがうにちゑふかしかれをうつてに御のぼせあれと申らいてうきこしめされてあふさる事あり此もの十九のとしいまだこんわう丸とありしときかうのとのゝ御とも申おはりのおさだがたちにて御さいごのかつせんにおさだがこどもそのかず人をほろぼしそこにてもうたれずしそのなをゑたるものなればかれをうつてにのぼせよかぢはらうけたまはつて御はんをたまはれおほせつけんと申らいてう御はんをいださせたまふとさがやどへぞつけにけるとさは御はんをたまはりあらあさましの事どもや日ほんがよつてせむるともやはかはうたれたまふべきぎけいのうつてをとさ一人におほせつけらるゝ事御まへにひきいだされくびをきらるゝほどの事ぢたい申たけれども御ゐにもれてもしやう

ぞんがいのちいきてもかいあらじたとひのぼると此事をふかくつゝめといふまゝにむねとのつはものを八十三ぎそろへつゝかまくらうちをしのびいでみちにていでたちけるやうはかまくらどのゝ御だいくはんにくまのへまいるといひろうしてかみからしもにいたるまでじやうゑひざふりたちきせ一めがさにしでつけさせよろひいれたるながもちにおはけたてしめひかせひきむまどものおがみにもゆひしできつてつけさせわたるせごとにこりをかき夜を日についでうつほどにかまくらをいでゝ廿日にはみやこいりとぞきこえける五でうあぶらの小路にやどをとるとさはきこふるめい人にてまづおんなをかたらひ御しよのけごをぞみせにけるおんなははしりかへつていついつよりも御しよさまには御ようじんもましまさずよきおりからと申さてはおりこそめでたけれ明々日の暮ほどに是非におゐてかゝるべしつめかゝせたるこまどものすそをひやせといひければ承ると申てざ

つしきどもがのりつれてか原おもてに打いで駒のすそをぞひやしけるかゝりけるところに大將のみうちなる伊勢の三郎よしもりは清水にまいりを忘けるが河原おもてを見わたせばかふたる馬のきよげなるをのりつれてぞひやしけるよしもり是を見て都にては大將の御内にもか程の馬はなし東國方の大名の上洛にてありげなやとはばやとおもひたちより物をとひけるにつゝみてさらにあかさずいかさまこれはやうありげなとおもひとねりおほきそのなかにくちのきひたるとねりありかれがそばへたちよりてきたるかさをひんぬいでものをばとはずしてまづのつたるむまをぞほめにけるあつぱれ御むま候やつめかみのきりやうはかまくらやう候なをつさまむかふよこはたばりおくちそうとうつまゐのくさりしゝあひほねなみよめのふしあふつくりつげたるごとくなりあつぱれ御むま候やかほどにおほき御むまのなかにうりむまなんどや候らんきやうがるかはりにひきかへてま

いらせんとぞ申けるとねりこのよしきくよりも御みいかなる人なればそゞろにくちのきゝやうはあやししとぞとがめけるよしもりきひてぢたいわれらがならひにてくちをきかではかなはぬわざきやうとゐ中をいへとしてむまをあきなひみをすぐるもとはたんばのくにのものゐはらのことうさことてくすりかひのはりつかひすそのちをもいだすべし御むまなんどや候らん御ひけいあれとぞ申けるとねり此よしきくよりもさてはくるしうなき人やこの御むまどもこそみやう／＼日のくれほどに大事にあはんず御むまて候へすそのちりをもいたすべしやどをたづねて御いりあれあふ御やどはいづくで候ぞ五でうあぶらの小路にてとさどのゝ御やどゝたづねて御入候へとさ殿と申はほうしの御みやう候か又ぞくの御なにてましますかとねりがきいてうちわらひけふこのごろくわんとうにかまくら殿の御うちなるいほうぎほうとさばうとて三人のほうしむしやありとはくにゝかくれ

もなし志らぬはいこく人かなとてから〳〵とぞわらひけるよしもりきいてさほどあらんず大みやうのしやうらくまし〳〵候にくに丶ひろうなき事はそらごとかなとぞいふたりけるひろうなきこそだうりなれ大事のかたきをうたんため志のびてしやうらくましませばさてこそひろうはよになけれ大事のかたきとのたまふは天下の御かたき候かわたくしのしゆくい候かとさどの丶御みにあて丶なんでうかたきの候べきかまくらどの丶御みにあて丶うつべき御かたき候ようたれたまひてその丶ちみやうじかくれよもあらじなむあみだぶつと申ければよしもりともにねんぶつしさてはぎけいの御事とき丶すましつ丶よしもりは堀かわの御しよへぞまいりけるきみの御まへにまいりいかにわがきみきこしめされ候へとうごくのとさばうがきみのうつてにまかりのぼりたるよしを申はうぐはんきこしめされてよしつねがうつてにとさなんどをのぼせらる丶事たうらうがをのをとつてりうしやにむかふがごとし志こくうつしてかなふまじいそいでつれてまいれうけたまはると申てとさがやどへたづねゆきあんない申さううちよりたそとこたふるいやくるしうも候はず大しやうの御うちなるよしもりなりとぞこたへけるしやうぞんきひてさればこそ人のみ丶はかべにつきまなこは天にかけるとはいまこそおもひ志られたれゆふべついたるしやうぞんをたれやのものがまいり御しよにてかくと申つらんたいめんせではかなふまじこなたへつれてまいれうけたまはると申てよしもりをでいへしやうずや丶ありてしやうぞんは大びやくゑにびやくだんしわたぼうしにてひたいをつ丶みわつぱ二人にてをひかれていへよろぼひいでよしもりがたいざにどうどゐていかによしもりひさしく御めにか丶らず候それがしがた丶いまのしやうらくべちの志さいにて候はずくわんとうのきみの御いれいもつてのほかにまし〳〵ていづはこねみしまわかみやのほうへいは中〳〵申

ばかりもなしことにとりわき候て人かずならぬしやうぞんはみつの御やまの御だいくわんをたまはりくまのへまいり候がせゞのこりみづに玄みぎやうぶこころにまかせず候へどもかゝる御きたうのおりふしいれいと申せばくわんとうへのきこえもをそれとぞんじゆふべしやうらくつかまつりくわんとうよりの御じやうなんどの候をもつでまいらんとずいぶんぞんじて候へどもいれいもいまだすまざればふさん申ところおもひのほかによしもりの御めにかゝる事こそなによりもつてしうちやくなれなにさま御しゆを申さんと三々九どぞ玄ゐたりけるしゆもなかばと見えしときしやうぞん申めん／＼の御中へいなかづとのありけるをとりこしぬとぞんずるなにかある御めにかけよ承ると申てくらぐそくをぞひいたりけるしやうぞんこれを見てあらみぐるしのくらぐそくやむまにそへてはなどひかぬぞかねて申せしよしもりのれうの御むまはこしらへたるかうけたまはると申て

くろつきげなるめいばの五きにゆりたるをやどの小にはへひきいだすさきにひきたるくらぐそくまのまへにて（とヲ脱スルカ）とりをかせ此あひだのなかたびにつめをかゝせてぞんすれどもこれにのつて御かへりあれ御しよさまの御きげんをばばんじはたのみたてまつるとまことし（本ノマヽ）らかにたばかりければさけにはたけきをにがみもとらくるならひなるあひださしもにたけきよしもりもやすく／＼とたばかられなに事をもか事をも御しよさまの御事をばよしもりかくて候へば御こゝろやすくおぼしめせ御ざいきやうのあひだはかさねてまいり候はんといとまをこふてよしもりはほりかわの御しよへぞまいりけるきみの御まへにまいりとうごくのとさばうはかまくら殿の御だいくわんくまのへまいると申くまのまいりのだうしやなればさしもをかせ給へかしわがきみと申はうぐわんきこしめされていや／＼日ほん一のよしつねをうちにのぼりたるくせものにて萬事にきよくをかへいかさまにもよ

しもりはしやうぞんにかたらはされ（本ノマ、）たるとぞんずる
（本ノマ、）いぶしう候御たちあれけうこうたいめん申まじいと
御ざをたゝせたまへばよしもりはときのめんぼくを
うしなひきでものこそかたきよとてむまをばおが
みをきつてかはらおもてへをつぱなしくらぐそくを
ばやいてたゞ一人きつて入しやうぞんとさしちがへ
てゑなんとこそくるひけれそのゝちべんけいをめさ
れいかにむさしとうごくのとさばうがよしつねがう
つてにのぼり五でうあぶらの小路にあるときくいそ
ぎつれてまいれまいれといふにまいらずばくびをき
つてまいれべんけいうけたまはつてあつぱれこれは
一大事の御つかいかなとはぞんずれどもさりながら
あんのうちとおもひ一まどころへつつと入どうまる
とつてうちかけうわおびゆつてちやうどゑめ一しや
く八寸のうちがたなを十もんじにさすまゝにくろき
むまにゑろきくらをかせひきよせゆらりとうちのり
わつぱ一人あひぐし土佐がやどへつつとゆきこまを

かしこにのりはなつておちゑんにずんとあがり事の
やうをきゝければしやうぞんはよしもりをたばか
りおほせいまはとゆるすこゝろにでおんないろごの
みなみするゑてさかもりなかばときこふるべんけいあ
ひのしやうじをさつとあけずいぶんしやうぞんのう
しろをそしらぬむさしめにてよきときすゑさん申た
りなにさま御ゐのとをりをまぢかくまいりて申さん
と大ぜいのつはものをのりこゑ／＼とをつてとさが
たいざにとうどゐてめての小うでをむずととつて申
せとの御ぢやうの候いれいときこしめされてもりに
むさしをまいらせらるはや／＼御まいり候へとこが
いなとつてひつたてゝぢゝめかひてぞいでにける大
ぜいのつはものどもそばなるうちものをひつたをし
をしはゞきもとをくつろげすでにたゝんと惑たりけ
りとさは此よし見るよりもてごめにはせられつかな
ふべきやうあらざればやあなにをさはぐぞわどのば
らいまにはじめぬむさしどのにてじやきやうことな

くましますぞゑばらくそれにてさかもりせよやがて
かへらん人〳〵とやどの小にはにいでにけりとさが
らうどうつゞいていであれまで御とも申さんとわれ
も〳〵とすゝみけりべんけいこれをみてきやつばら
にすゝめられかなふまじいとぞんずればやあめしも
なきにすいさんしてむさしめうらむなかた〳〵と大
のまなこににらまれてすこしひらむそのひまにとさ
がよはごしむずとだきくらつぼにどうとをきわがみ
もやがてとびかゝりうしろむまにうちのりゆんでに
てしやうぞんがはかまのきぎはむずととりめてにか
たなぬきすかしさもあれ御へんはいれいしてぎやう
ぶこゝろにまかせずとうけたまはつて候がおもひの
ほかにひきかへておんないろごのみなみすゑてさか
もりゑたまふあやしさよ何事にのぼりたるぞしいし
ゆをのこさずはやかたれいかに〳〵といひければと
さはきこふるめい人にてあふこゝにて御へんとそれ
がしがもんだうたいけつしたればとてりひをわくべ

きなかでなしとても御ぜんへまいるうへあれにてし
いしゆを申べしゑばらくまてやむさしとてこまをは
やめてうつほどにほりかわの御しよへぞまいりける
もんぐわいにこまうつすゑてはやまいりたるよしを
申あぐるはうぐはんきこしめされてさすがにしやう
ぞんはかまくらどのゝ御だいくはんにくまのへまい
ると申すくまのまいりのだうしやなればまぢかくめ
せとの御ぢやうにて中もんまでめされさぬきゑんざ
をなげいだすおめずなをりしきだいしかうべをちに
つけせきめんすはうぐわん御らんじてめづらしやと
さばうげにやらんなんぢはよしつねがうつてにのぼ
りたるとなせいはいか程もちたるぞいづくにかくし
おきたるぞありのまゝに申せいつはるけしきのある
ならばまつたくそこをばたゝすまじいぞやあいかに
との御ぢやうなりしやうぞんうけたまはつてさん候
それがしがたゝいまのしやうらくべちのゑさいにて
候はずせんどよしもりへも申あぐるごとくはんと

うのきみの御いれいもつてのほかにまし〳〵て伊づはこねみしまわかみやの御ほうへいはなか〳〵申ばかりもなしことにとりわき候て人かずならぬしやうぞんはみつの御やまの御だいくわんを給りくまのへまいり候がはやらうたいにまかりなりせゞのこりみづみにしみぎやうぶこゝろにまかせず候へどもかゝる御きたうのおりふしいれいと申せばくわんとうへのきこゑもおほそれとぞんじゆふべしやうらくつかまつる御ことづての御じやうなんどの候をもつてまいらんとずいぶんぞんじて候へどもいれいもいまだすまざればふさん申ところにおもひのほかによしもりを御つかひにたまはるきみの御いくわうにをそれ申いれいもすこしとりなをしかみそりしやうじつかまつりまいらんといでたち候ところにいまにはじめぬ五でうの女いろこのみさけもたせかどいでいはひ候ところへあのむさし殿御いであつておさへてつれて御まいりあるくわんとうよりの御じやうなんどの

候をもつてまいらんとぞんじ候へどもをくびやうしごくのくわじやばらどもにてむさし殿の御いせいにをそれ申かなたこなたへにげさつてどうてんのあひだとりまぎれもつてまいらず候しよじのしだいをばよしもりとむさしどのゝ御らんぜられ候うへしきよくはゆめ〳〵候はずとまことしらかにたばかりければ日ほん一のよしつねも二さうをさとるべんけいもまさるとさにはたばかられげに〳〵それはさぞあるらん見えたる事もなきものをきつてすつるはむざんなりげになんぢすごさずはしやうじつゐでにきしやうをかけゆるすべしとの御ぢやうなり正尊うけたまはつて中々御ゐならばたゞいまつかまつらんと申はうぐわんきこしめされてそれ〳〵むさしとおほせければべんけいうけたまはるとくまのゝ午わう一まいにすゞりをそへてぞいだされけるとさはきこふるぶんじやにてしひつにかふこそかいたりけれ

うやまつて申天ばつきしやうもんの事かみはぼんで

んたいしやく〻もは四大天わうゑんまほうわう五だうのみやうくわんげかいのちにはいせてんせう大じんをはじめたてまつりゆやはくさんきふせんわうじやうのちんじゆいなりぎをんかもかすが八はたは正八まん大ぼさつまつのおひらのむめのみやそうじてゑんぶだいのうちのうせいむせいかうかうたんのまうりやうきじんき丶いれなふじゆたれたまへこんどしやうぞんがきみのうつてにまかりのぼりたる事は候はず又わたくしのしゆくいさらに候はずもしいつはり申て候はゞたゞいま申おろす〻んばつみやうばつをしやうぞんが四十四のつぎめ八十三のわう／＼ごとにまかりかうぶり候てこんじやうにてはしやうぞんがゆみやのみやうがながくすたりらいせにてはむけんのそこにだざいしやうがうかぶよさらに候まじいよつてじやうくだんぶんぢぐはんねんう月廿日ふぢはらのしやうぞんはんとかきたるはさてみのけもよだつばかりなりはうぐわん御らんじてきしや

うのおもてこまやかなりしんりよにまかせてかへすぞはやかへれとの御ぢやうなりしやうぞんわがやどにかへりいへのこらうどうをちかづけされはゆみとりはとにもかくにも物をかくべきものなりしやうぞんもんまうなりせばかた／＼の御めに二たびか丶るべきかあつぱれほうしよきほうしとそゞろにみをぞほめにけるさりながらほりかわどの丶あんないを見おふせぬるこそうれしけれゆふさりの夜はんにせひにおゐてか丶るべしなごりおしみのさかもりせようけたまはると申てたりはらとうかうをかきすゑまふつうたふつさかもりするよは何どきぞ八つのころ〻ぶんはよきぞ人々はや打たてやもつともとて手々にたいまつともしつれほりかわ殿へをしよせみなみのもんをうちやぶつて大にはさしてみだれいるさてもそのよ御しよさまには御ようじんもましまさず十二人のおもひ人をめされ夜とともにくはんげんなりかかる御あそびのおりからとのばらたちはむやくとて

みな／＼やどへぞかへされけるむさしばうべんけいもきたじらかわにやどありてわたくしにかへりていざりけりたま／＼ありあふものとてはねうばうたちに中ゐの人さてはじよしよくのものばかり／＼うたてかりけるしぶんかなみな／＼しゆしんにくたびれせんごもしらずふさせ給ふそのなかにしづか御せんばかりこそよひの間にしらぬねうばうのけごを見つるとあやしめゆめもむすばずまどろまでまぢかくるところにあんのごとく夜うちうんかにみだれいるさればこそとおもひぎけいの御すがたを見たてまつればせんごもしらずふさせ給ふなふ／＼とおこし申せども御返事もましまさずしづか心におもふやうげにたけきゆみとりはもの〻ぐのをとにおどろきたまふとき〻つるものをとおもひ御きせながをとりいだしまくらがみにざつくとをくぎけいかつぱとおどろきあらことそうぞうしやしづか御せんなに事やらんとおほせければしづかうけたまはつて夜うちの入てさふらふにおきあひたまへと申ぎけいきこしめされて夜うちといはんにこと／＼しくしやうぞんにてあるなんなにほどの事のあるべきぞよひのくわげんにあまりくたびれまづしばらくやすまんとの給ひて又こそやすみたまひけれしづか見まいらせなふすでにまぢか／＼まいるなりおきあいたまへと申すぎけいかつぱとおどろきさらばきせながまいらせようけたまはると申て御きせながをたてまつるゆんでのこてをさしたまへばめてをしづかゞまいらするめてのすねあてしたまへばゆんでをしづかゞまいらせけりはいだてとつてをしあつればもの〻ぐのわたがみつかんでひつたてくさずりながにざつくとめすうはをびしむるそのひまにかたなをとつてまいらするさやがらみしたまふまにたちをとつてまいらするおびとりしむるそのひまにかぶとをとつてまいらするしのびのををしむるまにゐびらをとつてまいらするかけを〻とどむるそのひまにゆみをばしづかをしはつてすびき

つるをちやうどしてぎけいにこれをまいらせけりぎけいこのよし御らんじてあつぱれ玄づかはゆみとりのおもひものやとの給ひてすでにすゝんでいでられたり

玄づかもつゞいていでにけりぎけい御らんじてささうなり玄づか御ぜん玄のべ／＼とおほせけれどもみみにもさらにきゝいれずまつさきにこそすゝみけれすゝむすがたを御らんすればもゑぎにほひのはらまきをきぬの玄たにぞきたりけるぎけいのひさうの玄らゑのなぎなたゆんでのわきにかひこふでたけなるかみをばつとみだせばくろほろやらんと見えたりけりぎけい御らんじてあらおもしろのかつせんや四こくさいこくのたゝかひにもかほどおもしろきいくさはなしとてもの事にてあるならばにはへいでゝのあそびこそはなとてうとのみだれあし見てこそこゝろはすみ候へやあこなたへこよや玄づかとてにしのこにはにいでたまふころはいつぞのころぞとよ文じぐわんねんう月廿日の夜の事なりとうくわはまつにかかりていろ／＼のさうくわはかたきのひにいろをますらんでんしたるありさまはに玄きをさらすごとくなりいけのみぎはにのぞむとき玄づかゞすがたははなにていまだあきにてあらねどもをみなへしかとうたがはるぎけいなかざしつがつてやさきにかたきはきらふまじうけて見よとのたまひてさしとりひきつめさん／＼にこそあそばしけれおもてにすゝむつはもの十七八きはらりといられすこしやごろをひき玄りぞくぎげいゆみやをなげすて御はかせひんぬいてきつていでさせたまへば玄づかもつゞいてきつていで二八のひと／＼のこゝをせんどゝきりたまへばくつきやうのつはものを三十三ぎきつておとしたまふのこるつはものは風に木のはのちるやうにむらむらばつとひいたりけりよしつね玄づかゞてをひいておちゑんにつつとあがり事のやうを御らんずればておひ玄にんのふしたるはあふさんをみだしたごくな

りかゝつしところに大しやうの御うちなるいせの三郎よしもりはきみの御ふしんかうぶつて七でうしゆじやかにありけるがようちのよしをうけたまはつてどうまるとつてうちかけうはをびゆつてちやうとしめ一しやく八寸のうちがたなを十もんじにさすまゝに三しやく八寸のいかものづくりのうちものをするりとぬいてうちかたげもみにもうでぞはしりしがほりかわどのにつきしかばみなみのもんにつつたつて大をんあげてよばはるやうこんやのようちの大しやうはとさばうにてましますかかう申つはものをいかなるものとおもふらん大しやうの御うちなるいせの三郎よしもりなり御みゆへにそれがしきみの御ふしんかうぶるうへてなみのほどをみせんとておもてもふらずきつているとさがらうどうどもしうをかたきにうたせじとまんなかにとりこむるよしもりこのよし見るよりも大せいの中へわつていりにしひがしきたみなみくもでかくなは十もんじやつはながたといふものにわりたてをんまはしてさん／＼にきつたりけりくび二つとつて大せいにてをおふせとうざいへばつとをつちらしきみはいづくにおはしますよしつねこれにひかへたりこれへ／＼とありしかばうけたまはると申ておちゑんにづんどあがつて二つのくびをさしあげざけいにこれをみせ申すかのよしもりがふるまいはたゞはんくわいもかくやらん

よしつねかたさにいきをつがせてかなふまじいとのたまひて又きつていでさせたまへばゆんでにしづかめてによしもりがすがりつき申いまはむさしもかたをかもくま井もげん八もさだめてまいり候はんと申もあへずもんぐわいに人のよばはるこゑはかすかなりむさしがひとつのふしぎにうまれつきたるずいさうありことのあらんとてはむなさはぎしきりにしひだりのてをだにかきぬればはやことありとさとりをなすがいまことさらこのずいさうのしきりなるにより候てほりかはどのになに事か御ざあるらん見てま

いらんといふまゝにどうまるとつてうちかけうわおびゆつてちやうど志めれいの大だちさげはいてよるはつゑこそよけれとてばうをもつてぞいでたりけるせつなが間にほりかわ殿にはしりつきもんぐわいをみわたせばあんのごとく夜うちうんかにみだれ入ただものにてはあらじしやうぞんにてぞあるらんされどもかれはきこふるつはものなればもしきみやうたれたまふらんとごゝろもとなくぞんじよばはるこゑにてぞ候ひけるぎけいきこしめされてむさしかやあこれにありとの御ぢやうなりべんけいうけたまはつてさてはこゝろやすく候かくあるべしとごしたらばなぎなたもつてこふずるものもちもならはぬばうをついていかゞせんされどもむさしうまれてより此かたばこにて人をまだうたず人のもつほどにうらやましさにこしらへたりかのむさしがばうと申はあらしはげしきかうざんのいはまよりをゑいでたる志らつげを八しやく五寸につゝぎつてなかをあつくはしをひらくとうかいわたるふなゐなりにこしらくしさうかねをのべつけはむねをやつてやいばをつけ八しやく五寸のそのうちに八十三のいぼをすゑくぎのかしらをみがきたてはざまをくろくぬつたればいぼはかかやくぢはくろしやいばは志ろし物によく／＼たとふればひとへにつるぎひしほこてつぢやうなんどのごとくなりかゝるめいよのばうついでみなみのもんにつつたつて大をんあげてよばはるたゞいまこゝもとにすゝみいでたるつはものをいかなるものとおもふらんめづらしからぬむさしばうべんけいなり夜うちの大しやうにげんざんせんやつとぞよばはりけるかゝりけるところにあらいがわのよろひきひおどしのそでつけながふくりんのたちはいて三日月のごとに一そりそつたるなぎなたをひらりくるりとまわいておもてもふらずきつてかゝるべんけいこれを見てむさしとなのるにをこのけなくもかゝるはたゞものにてはあらじみやうじをなのらせきかばやとおもひ

たゞいまこゝもとにすゝみいでたるつはものはたうかかうけかみやうじをなのれきかんといふみつかげきいてむたい夜うちのならひにてなのるほうはこれはわたくしならぬ夜うちなればしんでもめいよをせんためむつのくにのぢう人にあねばのへいじみつかげとしつもつて二十六八十五人がちからなりむさし殿のてなみのほどをうけてみんと申べんけいきゝてさてはなんぢはしやうぞんがらうどうよななんぢがしうのしやうぞんをだにもあはぬかたきとぞんずるにそこをひけとぞいふたりけるみつかげきいてはらをたてさしもかくれなきむさしどのゝ御ぢやうともおぼえぬものかなよにある人をたのむはみなゆみとりのならひせんぢやうにてのぞくしやうだてさらにきかれぬ事さうよこゝろのがうなるものをこそむしやとは申候へいやしきものゝうつたちは世にある人の御みにたつやたゝずやうけて見たまへむさし殿といふまゝになぎなたのいしづきをつとりのべべんけいがひざのあたりに小風をふかせさらり〳〵とないだりけりべんけいこれをみてあつ事なしとおもひばうをにはへさしおろしいしづきをおどらせ木のはがへしといふてをいだしすそをはらつてすねあてのはづれをくびやうがねまねきのいたばうのいしづきからりとあてやゝともすればみつかげはあふうたれつやうにぞ見えにけるさるあひだみつかげもなぎなたは一てならふたりばうにあひては大事のものあしがきかではかなはぬわざいかにもかたきをなぶりたてひらまんところを一たちとこゝろのうちにぞんずればかたきがかゝればとびしさるなぎなたのきつてにはこむてなぐてひらくてうしろをきるはなかきりさざなみぎりにみづくるまきりこみわきこみたゝくやみうちすてがたなずいぶん大事のひしよのてをのこさずこそはつかひけれ（てノ字脱スルカ）べんけいあまりのやさしさにしばらくうたであひしておもしろいてをやつかふとめをすまひてぞ見たりけるされどもいまはむさしに

本ノマヽ、ましひ事とおもふてもなければいつまでをゐてつみ作りにいとまとらするさらばとてばうのいしづきをつ取のべおがみうちにちやうどうつかぶとのからくりはらりとくだけ落花のごとくちりければ首の骨がうちこまれてどうへとつとぞにへ入たる五十四郡にかくれもなきあねはの平次光かげも武藏坊が手にかかりみぢんに成てぞ失たり
のこるつはものこれを見てむさしばうにてあればとておにがみにてはよもあらじもらさずうてやもつともとてまんなかにとりこむるべんけいこれを見てばうのいしづきをつとりのべ八ばうをさしからんで一はうへをんむけひしほことをしやすづきさてくしざしといふものにさしつなぬいてゐいとなげてやなぎさくらまつかゑで四ほんかゝりのにはのうちくるりくるりと追めぐりいけのみぎはのたゝかひにさんてうすいてうけたてつゝげんざんどころたいのやちうもんめんろうとをさぶらひこみ入つこみだいつむさしがばうにあたるものいきてかへるはなかりけりかまくらにて正ぞんは一きは十き十きは百きにむかふほどのつはものを八十三ぎそろへしがたゞ十七きにうちなされゆきがたゐらずおちにけりむざんやな正ぞんもから〳〵いのちたすかつてかはらをさしておちけるをよしもりとべんけいがあとをもとめてをつつめてからめてつれてまいりけりぎけいこのよし御らんじてくまのまいりの正ぞんになはをかくるはもつたいなしいかに〳〵とありしかば正ぞんちつともさはがずゐだけだかにのびあがり大をんあげて申やうめいはぎによつてかろしいのちはおんのためにたてまつる頼朝の御ためにすつるいのちはおしからずきみもにくしとおぼすなよとく〳〵いとまたびたまへぎけいふびんにおぼしめしあつがうなりや正ぞんたすけたくはおもへどもなんぢ二くんにつかへじさらばいとまとらせようけたまはると申て六でうがはらできりにけりかの正ぞんをみし人きせん上下をし

なべかんせぬ人はなかりけり

四國落

さるほどに判官だいりを退出ましまして堀川殿に御下向有武藏をめしておほせけるはみかどのせんじをかうぶるうへ義經みやこにあらん事いちよくのゑをかうぶるうへ義經みやこにあらん事いちよくのゑんとぞんずるたびの出立をかまへよ辨慶承りむねとの人々二百餘騎すぐり都の内を出させ給ふ十二人のきたのかたも御供なりとぞゑたはせ給ふぎけい此よし御覽じていかなる事ぞすでにはや關東よりのふけうの身にて候へば天にごうのあみをはり地にさかもぎの關をすへいづくにても義經がうたれん事は治定也さあらんときはなか／＼御前ぐそくし奉りそこともなき遠島にすてをき申さば義經が跡のゆみ矢のきずたるべしたゞ／＼とまり給へとよ十二人の北のか本ノマヽた此よしをきこしめしたとへりうたつ山のおくしでゝ三津のかはなり共ともにこうればうかるまじとゞまるまじの都やとてさきにぞたゝせたまひけるぎけい聞召れてあふゑたふもひとつだうりたれをたのみてまつらひめみやこにとゞめをくならば道のさはりとなるべしきれどもきられぬあひよくのうき身のさはりこれ也とて二百餘騎の人々は御こしをなかに取こめてなみだとともにたち出る是やゑんぎのせいだいにいへをはなれて三四月落るなみだは百千行萬事は皆夢のごとしより／＼ひさうをあふぐとゑいじ給ひしきうせきと今のぎけいのはいるのたびすがたはいづれがはるとも思ひはさながらひとつなり末は山崎たから寺かうないかちおりすぎければゑどろもどろにらんもむじあらむづかしやあくたがは牛島瀬川はんせうじみのをやまのこうえうにこゝろのとまる折節又うち出ればにしのみやなんぐうの御前のおきのあらゑびす松ばらどのゝ御さんさうむかしこひしとうちながめかすむうらぢはすみよしかきりのひまより松見えてなみにたゞゑふあまをぶねこゝろ

ぼそしと打ながめはや大物のうらにつく辨慶申けるやうはこれより西國へのたびのみちなむじよがんせきにて御こしのかち路ゆめ〳〵かなひ候まじこれより御ふねにめされ四國にわたり伊與の河野を御たのみ有あれにゑばらく御座あり世のありさまを御覽せられ候へ四國九州一ゑんに思ひつき申さば十萬餘騎は候べしその大勢をそつし都へせめてのぼりざんしむのともがらを御こゝろのまゝにほろぼしなどか御代にたゝせ給はで候べき義經きこしめされてさらば船を用意せよ承ると申てむねとの大船八そう十二人の北の方の御供の人々二百餘騎おもひ〳〵こゝろごころにとりのりをひてのかせをまつほどに日ものどかなり出せよとてともづなとひてをしいだすまことに順風はよかりけり二時計の事なるにをとにきこえたる和田のみさきをこゝろぼそくもはしりすぎ弓手を見ればゑしまがいそめては明石の人丸のあめのふる夜もふらぬ夜もかせのたつよもたゝぬよも島がくれゆくあまをぶねこゝろぼそしとうちながめ尾上たかさこ過ければむろのおきにぞつきにけるぎけいおほせけるやうはいかにや水主梶取こゝかしこの津どまりにて中々ふねをよするならばゑせんの事もありぬべし順風よくばたゞすぐに四國へわたせとおほせけり承ると申てかぢとりなをし御座船を四國をさしてをし渡す

かゝりけるところにさぬきのやしまのうへより黑雲一むら立て惡風こそおこりけれ水主申けるやうはいかさま惡風のおこらんやらんくもの氣色らんてんしうみのおもてどうようし玄らなみせがいをあらひいかゞはせんと申ぎけいきこしめされてそれがしもさ存る去年やしまへむかひしとき渡邊よりもふねにのりをしいだしたるかざ〳〵もにちつともちがはぬけうあひなり船をよく乘用意せよ夜ふねにならばこのふねいかさまかせにさそはれてふね人ともにうせぬべしたとひ風がはげしく共とちうをさひてやつて

見よなをしもかせかはげしくばきなかほかけてはしらせよそれにもかせがふきこはらばほばしらばかりでやつて見よおもかぢをつよく取とりかぢをよはくとりわいゐをたてけしきをみて四國をさしてやつて見よかんどり共とぞおほせける承るとは申けれども能程のかせにこそ思ふさまにはあつかはるれ此あくふうと申はつの國むこやまおろしきの國の岩山おろし四國のしろみねざむよりもおこつたる惡風にてへい〳〵としたるうみのおもてに俄にたにみね出來てしらなみせがひをあらふなりすいしゆ梶（從ノ借字）取ゐかひとるべきやうはなし十二人のきたのかた近所の人々はふなぞこにひれふしてさながら前後をわきまへずかかりけるところに四方より惡風がもみあはせてふくかせにほばしらふたつに吹折て八そうのもやひのつなが一度にはらりときれたりけり風にとられてふね共がおもひ〳〵におとさるゝ四國へおとす船も有西國へおとすふねも有とさのみなとへおとすもありあるひはもとの明石なだひやうごのおきへおとすもあり八そうのふねどもがみなちり〴〵になりにけりあらいたはしや大將のめされたる御座ふねには十二人の北の方御供の人々三十人あらきなみにはあてられつさながら前後もわきまへずやう〳〵のこる人とては義經辨慶只二人ふねの前後をあつかひてかせにまかせておとさるゝ心ざしこそあはれなれべんけい申けるやうはそれ風は龍王の出し給へるいきとして時のふしぎをなし給ふにたからをしづめて御覽ぜられ候へさらばたからをしづめんとて十二人のきたの方のかさねの小袖くれなゐのちしほのはかま判官のこがね作りの御はかせ海底にしづめたまひけりもとよりもこの人々てらそだちのがくしやうにて法花經の一の卷をときうつるほどこそじゆせられけれまことにりうわうも御なふじゆやまし〳〵けんなみかせすこししづまればふねはこなみにゆりすゆる又八島のうへよりもからかさほどなるひかりものが七つ八つ

とんできて悪風こそおこりけれ辨慶これをみて只事ならずとおもひふなぞこへつつと入ときんすゞかけうちかけふねのへいたにつつたちあがりだいをんあげてよばはるたゞ今こゝもとにすゝみいでたるつはものをばいかなる者と思ふらんをのゝたかむら右大臣が末孫田なべのべつたうたんぞうが嫡子生るゝところは出雲の國枕木のさとそだつところは三條京極がくもんするは天台山あくまがうふくの貴僧と生れ（本ノマヽ）それ風はりうわうのいだし給へるいきとしてときのふしぎをなし給ふにしんぞき（リニアラズ）給へといふまゝにいらたか數珠をとりいだしさら／＼とをしもんで東方にはがうさんぜみやうわう南方にくだりやしやみやうわう西方に大いとく明王北方こんがうやしや明王ちうわう大しやう不動明王けんがしんしやほつぼだいしんもむがみやうしやたんあくしゆせんちやうがせつしやとくだいちゑちがしんしや卽身成佛とこのゑむごんのひみつにてくろけふりをたてゝいのられたまことに龍王もさてもあくりやうも御なふじゆやまし／＼けんなみ風すこしゑづまれは船はこなみにゆりすゆるかゝるきざみに平家のあくりやうたちそのかずゆしゆつせられけれども辨慶にかちせられ皆海底にいり給ふあかつきがたの事なるにそこともなき遠島にともし火がほの／＼と見ゆるぎけい御らんじて里ちかき浦なればこそ火は見えて有らんとあの火をたよりにこのふねをこぎよせとの御諚なり承ると申て火をたよりにこぎよせ見れば八十餘りなるらうおふのつりをたれてぞゐたりけるぎけい御覽じていかにやせうとの此うらはいづくの國いかなるうらにてあるやらんと御たづねありければおきなうけたまはり其返事にはをよはずふねほと／＼と打ならし一しゆはかうぞ聞えける

　ゐさり火のもしほのけふり風にきえて
　　ふきあかしたるおきの一むら

義經聞召れてあらおもしろや誰か此うたのこゝろを

知たる人の有やらんと御たづね有ければいづれも船ごゝちにて前後もしらず見えさせ給ふ十二人のおもひ人のなかに靜御前ばかりこそふねにはゑはざりけるがすゝみ出て申さるゝあらうれしやこのふねしんらはくさいしんたむとやらんへもおとされても有やらんとこゝろもとなく思ひしになふいまははや安堵にてさふらふぞされはおきにあまたのいみやうありよし共申あしともいへる村といふは里の名そのうへふるき歌にもゐさり火と云事はなにはいり江によせられたりいかさま此うらはつのくにのあしやのうらの事やらむなふ我きみと申けり義經きこしめされてそれがしもさぞんずるいかにやせうとの此うらは津の國あしやの浦かさむ候扨せうどのは此うらの人かいや住吉のかたのものなりとてけすが如くにうせさせ給ふ扨はうたがふところなしたつみのみやうじんの義經をあはれみてをしへ給へるたつとさよとうしほで手水うがひしてそなたをらいし給ひけりさるあひだ御座ふねをあしやのうらへをしよする彼浦の國氏あしやの三郎みつしげふな子にあふてとふた船子こたへて申さん候是はかまくらどのゝ御舍弟太夫の判官義經西國下向ましますが惡風にふかれこのうらによらせ給ひて候と申みつしげ聞てされはこそ此きみは鎌倉殿の御中たがはせ給ふ人よいざ此君をうち申關東へ參らせくんこうけしやうにあづからん人々やつといふまゝに浦うちをふるゝ尤しかるべしとて我もと思ひしうらの人二三百人まつくろによろひ御座ふねを二重三重にをつ取まひてときをどつとあぐるいたはしや御座ふねにはいづれも船ごゝちにてせんごもしらず見えさせ給ふその中に辨慶船にはゑはざりしがかねてようじんきびしければものゝぐこぐそくさしかため三十六指たる大中黑のそやおふて五人ばかりのまんなかにぎり船やかたにつつたちあがつて大おんあげてよばはる

たゞいまこゝもとにすゝみ出たるつはものをいかな

るものにてはんべるぞやこれは鎌倉殿の御舍弟太夫の判官よしつねの西國下向ましますが惡風にふかれ此うらへよらせたまひて候に御ふれ狀こそなく共御けいごをば申さずして何ぞやいまのらうぜきは下なみのほどを見せんとてさしとりひきつめさん〴〵に射たりけりおもてにすゝむ能つはものを十七八騎はらりといられすこし矢ごろをひき忩りぞくみつ忩げこのよしをみるよりも御座船に今は矢種やつきぬらんかへせもどせ人々とて御座ふねまぢかく切てかゝるべんけい是をみてゆみ矢をからりとなげすてなぎなたひんぬいてふねより下へとんでおりみつ忩げとわたりあひをふつまくつつさむ〴〵にたゝかふたりさるあひだみつ忩げ辨慶が打なぎなたうけはづし候て光重がかぶとのまつかうを二つにばつかときりわられうしろはしころほろつけまへははつぷりよだれがね四まいがなどうひつ敷くさずりふたつにさつときりわられて弓手めてへさばけたり是こそいくさの手はじめ大勢の中へわつて入西からひがし北から南くもでかぐなは十文字やつはながたといふものにわりたてをんまはしてさん〴〵にきつたりけり手もとにすゝむよきつはものを五十三騎きりふせ大勢に手おふせ東西へはつとをつちらしいくさの門出めでたしとて又御座ふねに取乘すみよしのうらにあがらるするゑはんじやうと聞えけり

志つか

去間梶原平藏景時鎌倉を立て都に着判官殿の思ひ人（本ノマヽ志づかトヨマス）司土御前の御行衛を尋申せど行方なしつじ／＼に札を立其つうげを相待る九重のうちにもあはれ司土かのがれよかし縱くんこう有べくとたれやのものが參六原にて角登申さんと上下涙をもよほして哀ととはぬ人ぞなき爰に司土が母の召使しあこやと申女有札を讀て見るに判官殿の思ひ人司土御前の御行衛を六原殿に參り申たらんずるともがらにじやうらうならば（本ノマヽ）くわんをなしけならはいとのしやうくんこうこうによつてけしやうのぞみたるべし景時判とかきとめたりあこやなゝめによろこふで此ふだをくわいちうし六原さしていそぐ梶原は司土御前を尋かね關東下向とて馬引立のらんとす（ばけ脫スルカ）あこやさうなく走寄人目をはかり此札を梶原がたもとへをとし入る梶原やがて心得此女房をさき馬に取てのせ六原を出る女手綱をひきむけて大和おうぢにさしかゝり三の橋打渡りほうしやうじをもさし過て伏見と深草のさかいなるしやうとうじへ乘入て爰ぞといふて馬をとむ梶原馬の上よりも大音上てよばゝる判官殿の思ひ人司土御前の此寺にましますよしを承り關東の梶原が御迎に參りて候はや／＼御出候へ鎌倉へぐそくし申さんと大音上てよばゝる司土も母上ももろともに夢にも人の知らじと祉ふかく賴みをかけつるにたれやのものがまいり六原にて角と申つらんうらめしさよとかきくどきすだれのまより見出せば年比召使しあこやと申女さき馬に乘て來りたりあふ拗ははや此をんながちうしんによりてけりどんよくまうねんはなさけをもすてはてゝはぢをもさらにかへり見ずあこやがゐるべをする上は何と思ふとかなふまじいかゞはせんと申つゝなくより外の事はなし母のせんじすだれ卷き上たち出梶原に見えければ先のがさじととらんとすせ

んじなみだをおさへ司士御前はきのふまで此寺に有つるがみやこの人目をつゝみかね大和の方を心がけ小夜更がたに出つるが人をつれざる道なれば宇治方にやまよふらん追手を掛させ給へやと一たん僞たりければ梶原聞てげにもさやうに候覧先さがし申てげになくば追手を掛申べし東はあくる津輕のはて西はろかいのとゞかんずる程天下の其内をさがさぬ所有まじゐ誰か有參りてさがし申せ兵どもと下知すれば司士此由きくよりもなふそれまでもさふらはずみづからは是にさふらふぞやしばらく暇たび給へ此程なじみ申びくにたちにいとま申やがて罷出べし梶原殿と有しかば景時聞て腹を立更ば先より此むねを角とは仰なくして其間は門前に待社申さふらはめこなたへしされ兵ども門より外に引出すあじろのこしのふりたるに力者計をあひぐして門より内に入に堯あら滿しや司士御前此程なじみ申びくにたちにいとまをこいなく／＼出んとし給へば母のせんじ是を見てしばらくなふ司士御前いとゞだに女はごしやうさんじやうしらされつみのふかいと聞えさふらふよしつねの草のたねやとして露もきこえやらぬたらちねの其中迄もさがせといふ事あらばめいどにおもむく人ぞかしかたきの手に渡らぬ間にかみそり衣ぬきかへかいたもつてめいどの道をおしへられて出給へげにげに思ひ忘れてさむらふとてひじりをしやうじたてまつり髮をろしと有しかばおとがめいかゞ有べきと人を出して梶原に出家のいとまをこひければ景時聞て是は關東よりの御使也わたくしにてはかなひ候まじおぐしをつけながら御下向あれよきやうに申なし御出家の御暇をばまいらせんと申すげに／＼是も道理とて髮をばいまだつけながら髮そり計ひたいにあてかいみやうのもんをとなへて五戒を請させ給ひけり抑五戒と申はせつたういん(本ノマヽ)まうごおんじゆ其みなもとを尋ぬるにりやうへんたしやうのかゝ(か、暁スルカ)のなれをくんでかんしんの法をつたへたり天平勝寶六年に奈良

の都にかいだんをたて聖武皇帝はじめて受戒し給へり又天台の戒だんは弘仁五年にきんざすの立させ給ふ上下萬民をしなべて誠の道に入人の誰かは戒を請ざらん抑第一にせつしやう戒と申はものゝ命をころさぬ也其いはれをあんずるに命はおもきたから也昔げんじやうさんさうのしやうけうをわたさむとて流沙を渡りそうれいのみねをこえさせ給ふ時ろくそくわう來りてしやうげうをうばい取る見る人是をとぶらいければさんぞうのたまはくをろか也縦しやうげうはとらるゝとも命と云おもき寶をとられねば何をさのみになげかんとうれいたいろもましまさず此世一世の身ならず生々世々の命はおもきたからなるべ志このことわりを知らずしてあるひはとんにたえず志たしきをうしなひうときをほろぼするぐちのいたせる所也今は人をころすとも因果は身につもるべし一世にものをころして七しやうまでころさるゝくわぎうの角の上にして何事をかあらそはむ石火の光水のあわたゞまぼろしの夢のよに一たんのどんにふけつてせつしやうをするぞはかなき第二にちうたう戒と申は他の寶をおかさぬ也此戒をやぶる人はまどしき身と生るゝ也今もひんくに有人はさきの世にものをぬすみしと思ふべしとうばうさくが三度までせんのもゝをぬすみせんきうにこめられしもさこそはくやしかりつらめとを山どりの花の色霞にこめて見えねば匂ひをぬすむ春の風おなじ其名はたちながら科にはあらじとぞ思ふおさへてあやめらるゝ事三更のふかき夜に啼郭公音をぬすみめいどの鳥と成にけり荒淺ましやかりにもちうたうをおかす事なかれ第三に邪婬戒と申すは我がいもならぬ女にことばをもかけずわがせならぬおつとのことばをもかゝらぬ也志つとのつみはたしやうまできちくしやうに生るゝ也むらかみのあんしのねうゐんはせいりやうでんのくわうぐうにねたまれさせ給ひしゆじやくゐんの鬼となるおそれてもあまり有じやゐんかいをたもつべし

第四にまうごかいと申は空言をいましめり此いはれをあんずるに僞りおほきことばには其科多き物也されば北野の天神のかむせうじやうにておはせし時ゑへいのおとゞにざんせられ心つくしへながされゑの木寺にてうせ給ふ其科におとゞはならくにゑづみ給へばかんせうじやうはまさしくも今の北野の神となりまうしやうくんがいたづらに鳥のそらねにせきをあけて仇にうたれ給ひけりなをいましめのふかき事はまうごかいでとゞめたり抑第五におんじゆ戒と申は酒にゑひてひれふし口口かう事をいましめりきくわどうによといつし人は五百しやうのあひだくろのやみにまよひしもぶくしゆはかいなるがゆへあるひはしゆふうせんのいましめとかうし又は三十六の科有とき丶(こノ誤歟)へりいましめふかき酒を何とて天台山にはゆるすぞと尋ぬるに昔てんだい山におんじゆをことにいましめ酒をきらひ給ひしに九重のせうしやう御登山有し時けうおうのあまりに始て酒をゆるす事寒をふせがんため也たいれいのゆうかんになを此酒をゆるせりましてくわていのゆうれいに誰かは酒をのまざらんそんの前にゑいをすゝめ林水に盃をうかべしうのちやうやを見渡せば山ももみぢにゑふとかや酒をあひする人をばふくしゆと是を名付のむ事をゆるし口口かふ事をいましめたりそれはいはれぬところ佛をはじめたてまつてあなんがせうしゆぼだいいづれか酒をまいりよろぼひありき給ひし酔ては心みだれつゝをのづからじたをたちまちせつがいすなをいましめのふかきはおんじゆ戒にてとゞめたりかゝる五戒をまたうして一つもやぶる事なくばてんりんわうと生るべしむかしゑしんの僧都たうぎんのぎやうかうをかならず拜み給ふそうづのあねあんやうのあまふしんをなして問給ふ何とてそうづは王をおがませ給ふぞ僧都こたへての給ふさん候王のたつときにて拜み申さずせんしやうにて戒をよくたもちいまこくわうと生れ給ふしゆくぜんのちからのたつとさ

に拜むとぞ仰けるいかにも我等さきの世にかいぎやうなき故により心もぐちにさとりなしいまこの申すかいぎやうにより玄んげうの衣のうへにかいほつをつゝみすてざれよたうらいにてはかならずじゆかいのしゆゐん淺からずむじやうとくだつ成給ひかへつて我をみちびくべし祠覺に忘れ給ふなと懇にときをしへ申す其日すでにいりあひのかねつく〳〵とちやうもんす梶原は待かねて遲しといひてせめければ聖なみだをながしゑかうのかねうちならしとうみやうをけしあんじつに入せ給へば玄づかはもの丶ふの手に渡るともしびくらうしてすごうぐしがなんだ夜ふけねれば玄めむそかのこゑとはぐしか別れをかなしみてつくり給ひしにてありけりそれは異國のものがたり是は司士が身のなげきかんと和朝はかはるとも思ひの色はひとつ也かみは玉樓きんでん玄もは司士がふせやまで玄づかをおしまぬ人ぞなきみめといひのうといひ心の情の道といひたぐひもやわか有べきと人々なげきしうたんは四方にもあまる計也かゝるあはれをもよほす處ににくき事こそ候ひけれあこやと申女梶原にむかつていふやう忘れさせ給はぬさきに御約束のほうろくをいそぎたべと申す梶原聞て腹をたて何と申ぞあの女是程司士御前關東下向とて上下淚をもよほす處に申さんやなんぢはきのふがけふにいたる迄其内に有しものぞかし別れをばかなしまでほうろくのこいやうこそ心得られぬ餘りにものを知らぬ女なれば因果れきせんの道理を語てきかせんそれにてよくちやうもんせよよひには樓月をもてあそぶといへどもあかつきは離別の雲にかくれぬ心はこくうじやうじうにしてかたち計はかりの宿みゝはとせいのみゝ目はじやうはりのかゞみ口はわざはひのかど舌はわざはひの根舌三寸のさえづりにて五尺の身をはたす誰かあるあの女に引手物とらせよ承ると申てさうくるまに取て打のせて渉　所はどこ〳〵ぞかみは一條柳原玄もはから九重こうぢ〳〵を渡し

見るものごとににくませ後には此女かつら河のふかき所を尋ねてふしづけにしたりけりみやこの上下是を見てものいひしたる女房がしよ地をばたまはらでよみの國の大國をたまはつたりやと申見る人聞ものをしなべてにくまぬものはなかりけり角て梶原は司士御前をこしにのせしやうとうじを出る母のせんじもなく〳〵かちにてあくがれ出る司士此由見るよりも母をかちにあゆませ申我身がこしにのりたればとてやすき心の有べきかとしよりたる母上をのせてかけとてこぼれ出るげに〳〵是も道理とて馬をたてゝ母をのせみやこに名殘うき思ひものうき事にあわだぐちわれをばとめよ關山しなのすさまじさにすきふる雪の下道をあとよりも誰か大津浦きえばや爰に栗津が原思ひはなをもせたの橋野路に日暮て篠原やうきふししげきかりの宿の夜ごとに物や思ふらんこのほどは心のやみにかきくもりかゞみのも見もわかず名はさめがいときくからにふかき心はいづみかないとゞなみだのおほかるに雨山中やとをるらんあらしこがらしふわの關月のやどるか袖ぬれてあれたるやどの板間よりしぼりかねたるたもとかな夜はほのぼのとあか坂やうちこそは（わノ誤）たれくんせ河うゑしさなへのいつの間に黑田とは成てはらむらん夏はあつたとなるみがた三河にかけし八橋のすゑをいづくととをたうみ戀をするがの富士の根の煙りは空によこをれてくゆる思ひは我ばかり伊豆の三島や浦島があけてくやしき箱根やまさがみの國に入ぬればなをうき事をきく河の宿にもはやく着にけり梶原道よりもはや馬をたて司士御前をばきく（本ノマヽ）河の宿迄めしぐして候道の草ばの露霜となしをやせんと申す頼朝聞召れて鎌倉までめしぐせよ尋ぬべき子細有承て司士を大御所さしてかき入る折節有合大名連所せきまでなみゐたり司士こしよりをりかゞみをも見わかずしはるかにざしきのあひたるをわがためぞと思ひ人々の方をうしろになしつゝめどこぼるゝなみだの色みだれがみ

をつたひてつらぬく玉のごとく也や丶有てより朝御對面の其ためにあをかり衣にたてゑぼしめし和田ちちぶ左右にして御座になをらせ給ひいそのぜんじがむすめ司士とは女房が事か四國九國のた丶かい合戰は珍しからぬ物がたり義經一人合戰世を治めたるこうにあらず賴朝がいせいによつて諸國はをのれとしづまりぬ世は我世にもあらぬには兵法のじゆつも叶ずとをくいてうを尋ぬるにけいかしんぶやうはんよきがくびをかつてしくわうていをねらひあはうごん迄のぼるといへど運つきぬればうたれぬさしもなだかき弓取もきんの音にとらかさるいわんや義經はけいかしんぶやうはんよきほどはよもあらじましてはんくわいちやうりやうがいきをいにもをとりたる義經一人戰ひ天下にみちし平家をかたぶくべしともおぼえずより朝がいせいのおをき所なるべしそれによしつね此世をくつがへさんと思ひ立義經といちみしあひねんふかく定なきちぎりをこむるしづかには心

をゆるすべからずたとひ女の身なれどもおんみの心ふかきをがうてきとする也何樣ひくて定なき遊女の身と有ながらさしも賴朝うらめしき草のたねをつぐときくやあいかにとの御諚なり司士うとましげにして袂を顏にあてながらなく／＼申けるやうは人のちぎりと申は定なしとはいひながら生々世々舊緣のつきせずくちぬきえんにや昔源氏の大將もきりつぼははき木うつせみのもぬけの衣きたりしあまにもちぎり給ひぬ若むらさきすゑつむ花もみちのが花の緣あふひさかき花ちる里すまや明石みをつくしせきやよもぎふゑあわせ松吹風や薄雲それのみならず源氏は六十帖の物語はかなきちぎり是ををし一じゆのかげや一がの水をくむこともたしやうのえんとこそきけとめる人もいつまでぞいつ迄草のいつまでとしもがれゆくをしらぬぞと袂をかほにをしあて丶なくより外の事はなし賴朝大きに腹を立給ひことばを丶しと申せ共いつ迄草といひつるはかべに生ふる草也へい

ちにねをさすだにも秋はてぬればしもがるゝましてやかべにつかぬまのねをかくる草なればみのあきはてぬそのさきさかりの夏にかるればいつ迄草と是をいふさればにやしづか我身の上をくわんじ源氏によそへ六十帖所々かたりつなりそれはともあらばあれいつまで草といひつるはよりともがことを申なりいま世に出てあめがしたを我まゝにするともいつまでさかふべきぞと申つる處それはしづかゞいはずともうひてんぺんの世の習ひあすまでたのむ事や有しかりとは申せども世に有程はいつまでも久しかるべきためしにかねては松をうゑをきすみよしとこそいはふなれみやうをんじしやう中々うつろひやすき世中のいはへばかなふ事なるにそれにしづかなんぞ其源氏の物語にいつまで草といひかすめ頼朝が身の上をてうぶくするとおぼえたりかゝるふしやうをきくみみはゑいせんのながれあらざればあらふべしと覺えずと御座敷をづんとたちいたあらゝかにふみならしない所へ入せ給ひけりれんざん有し人々一度に座敷をはらりとたつこゝろぼそくも司士たゞ一人ぞ殘りける去間梶原は思ふさまにしすまし内々うちはらひ（わノ誤）しづかゝあたりへ立寄て是は公方の御座ちかしこなたへ入せ給へとてともなひ出したりけるがいや〳〵かゝるめしうどなんどを時刻うつせばないえん有今夜のうちにたいないをさがしてうてきの御するをからさばやと思ひ宿を取てをしこめ日の暮るをぞ相待けるさすがに人のせんどなれば最後を知らせて其支度あらせばやと思ひ司士が宿へうちこへ今夜みうちよりたいない（脫字アルカ）をさがし申せしつけむとの御諚の候おぼしめたることのさふらはゞ母ごぜんに何事をも仰をかれ候へとてそらなきしてぞかたりける司士が母のせんじ娘にいだき付つゝ人の親のならひにてあしき子のあまた有だにも別れといへばものうきにましてや申さんみづからはたゞ一人の司士御前みめかたち心きは上下にならぶ人なしと世にもかくれぬひと

り子をさき立何と成べきぞいかなるてうてきげきしんも女をころす事はなしたといけんかくあらけなきゑびすのすみ家なれどもさかりの花を風なふてきりからしたることや有うたてかりける鎌倉のまつりごとゝかきくどきりうていこがれなきにけり能々物をあんずるに頼朝の御諚はゆめ〳〵もつて有まじいただ是はざんしむのなせる所成べしこともなのめの時にこそ人目もつゝみはづかしけれ御所中へまいり北のたいへ此事を申さばやとおもひ司士御前にいとまをこい御所中へ參り然るべき方に付て志づかゝ事を申上る北の御方はをりふし御きげんめでたくて人の親のならひにて子を思ふ道はあさからぬぞたといいかなる仰成ともみづから心得てさふらはゞなどかはたすけざるべき其上是は時刻うつしては叶ふべしともおぼえずはやとく〳〵との御諚にて忝も北のたい奉書をくだし給へば司士がはゝのうれしさを何にたとへむ方もなし鳥ならば一飛にとんでもつきにけ（たノ誤カ）れ

共女の身のこの程の思ひにやせをとろへ夢路をそへるごとくたゞ一所斗におどるやうにぞ覺えける

角て梶原は日もいりあひの鐘をきゝこし一ちやうよういしけいごのもの四五人けしからぬ姿にていでたたせ司士がやどへをしよせてはやめされよと申志づか此由見るよりも今を最後の事なればからあやのふたつぎぬかけおひ守りかけながらしゆへんに御きやうとりぐしてこしの前へぞ出にける我よりもさきに涙はたれをさそふてさきたつぞやなどやかんろの母上の都のうちを出しよりかゝるべしとも志ろしめされずやとてもかなはぬそせうゆへけさ御所中へ出られつる面影計のたちそひてけさの別れを限りぞと知らで行つるはかなさよ親（子チ脱スルカ）は一世ときくなればめいどに又ぞあふべきかそれもこうくわいすべからずそれ人間の習ひにてすゝみ志んぞきとにかくにものうかるべきうき世かな心に任せざりけるはしやうじ無常の世成けりか樣にかきくどき最後の輿にのり給ふの

るかとすれば武士どもこしをちうにとばせ由井の汀へいそぐ爰にてたいないをさがさんとたちかくす所に土肥次郎實平は鎌倉のけいごにて暮れば十騎廿騎にてかまくら内をまはりしが何とは知らずはまばたにあやしく人の見えければ馬打よせてたそと問くるしうも候はず梶原是にありといふいそぎ馬よりとんでをり何事にやととへばしづかゝたいないをたゝいまさがすなりと申すそれはよくこそしたゝむれさりながら此邊は若宮ちかき所也是より少引のけなごいが入のさんまいはいしかりなんと申おふ尤とどうじてまたこしよせてうちのせておうなごいが入江へいそぎけり司土此由見るよりも是やめいどのかしやくかきやうくろうのたびもかくやらんかねて一世ときひたりし親にはいきて別れてまたもあはぬによみがへりくらき闇路を入行や當鎌倉の貞本ノマヽ神はかの若宮にしくはなし然も八幡大菩薩そうべうのしんとしてはうじやうゑをなしたまふ毎年八月一日より一切のうじやうのとられてしすべかりしをあたい本ノマヽをほうじてかいあつめ同じき月の十五日にいはし私のながれにはなちてたすけ給ふ也此ことわりに任せて放生會とは申也神々ならばきこしめせ人こそ人をころすともわくわうのかげのあまねくば我をたすけてたび給へたといいのちは露の身のきえやすきならひにてなげくしるしのあらずともいきて別れし母上を今一度見せてたび給へ神は歌にかならす本ノマヽなふじうましますことなればこしをれながらはうたいのくゑいをよみてまいらせむ

なとされはなにははにすてし浦浪の
しつかもあらき濱の名はたつ

かやうに詠じて若宮にゑかう申されたりけるになにとは知らずうしろに人のよばゝるこゑがかすかにこそ聞えけれけいごのものきもをけし何事にやときけば司土が母のぜんじのよばゝるこゑはかすかなり梶原はやくきゝつけもし奉書やくだし給ふらんにたす

けやせんくやしや何とも是非のなきさきにはからへやれ兵うけ給はると申てこしをちうになげをとし志づかを取てひきいだしがいせんとせしとき土肥の次郎ふさがつてさねひらかうて有ながら若奉書やくだし給ふらんにあはてゝ後の大事とをしとめたりければ梶原いとゞいかつてたゞがいせんと申ぜんじは奉書これありとよばゝりさけびはしれば志づかは母のこゑをきゝておそしともだへこがるゝをものによくよくたとふればつみふかき罪人ぐしやうしんの手に渡つてむけんだいじやうのそこにをとさるべかりしを六道のうけの地藏の尺杖（錫ノ假借）（リノ誤カ）をからりとうちふりからかみさんまいとよばゝるかけすくいあげたすけんと志給ふも是程ぞ有つらん扨こそ奉書よみあげて司土も母ももろともに同じこしに取乘きらくのゑみをふくめば司土は母にすがりつゐて是はゆめかといひければ母はむすめに取付夢とないひそうつゝぞさもあれあやうかりつるわごぜがけふの命とはら〳〵となきにけりうき時は道理ながすなみだはことわりやうれしき今の何とてかさのみなみだのこほるらん角て司土御前をば土肥の次郎にあづけらるゝ賴朝よりの御諚には男子ならばてうてきにてちからにおよぶべからず女子のたいと有ならば母がたからたるべしとかねて御下知ぞ下りける志づかも母も都に有し時には義經の忘れがたみにてましませばなんしに生れ給へとねがう心を引かへてたゞ女子になれとぞいのりけるされどもかなはぬうき世の有さま玉をのべたるごとくなる若君いでき給ふ梶原はやくきゝつけ源太をつかはしいはするやう御さんすでに平安に御座有由をきこしめし男子女子のあひだを見てまいれとの御使に源太が參りて候と大音上てよばゝる司土も母ももろ共に源太がこゑときくよりもあはう羅せつの使のゑんまのせめをつぐるかときもたましゐも身にそはず母のせんじいそぎ出ないかに源太殿女子をまうけてさふらふにかねてよりの御約束のごとく母

にたべと申かげすゑきひてそれは何より目出度御事候よ何様いまのまれ人をそとおがみ申て後ともかくもと申すゑづか産所よりたち出源太にうちむかひつつなく／＼申けるやうはなゝいろの島に八いろのふねをかくすとやらん申たとへのさふらふなれば兎に角に源太殿をこそたのみ申さふらはゞ是々御らん候とて玉のやうなる若君をいだきあげて見する源太是を見てあらいつくしの御若君や候是程の御事をわたくしにては叶ひ候まじ御所中へ御供申御目にかけやがて返し申さんとたもとにつゝみふところにをし入駒ひきよせてうちのり油比（由井ナリ）の汀へいそぐ二人はあとをしたひてなふせめてなくこゑを今一度きかせてたばせたまへやとよばゝりさけびはしれども馬にはいかで追付べきあら情なや源太油比の汀にて取はづしたる體にて浪うちぎわへぞをとしける磯うつ浪なくこゑ濱松をさそふ風の音身にしみ／＼と思へども取もとゞめぬ事なればあたりにまろひふしこがれこゑをならべてなげゝども源太は少もあはれます沖より浪がどうときて玉のやうなる若君を落花のごとくにうちくだく其後ふち（むノ誤カ）をしとゝ（衍）うち源太は家にかへりけり司士も母ももろともにちりたるしがいを取あつめたもとにつゝみかほにあてりうていこがれなきけるがゑづか思ひにたえかねて身をなげんとせし時に母のぜんじ是を見て道理也ゑづかごぜ何に命のをしからんわれもつれて行やとて二人手に手を取くんで身をなげんとしたりしをおりふし有合人々がすがり付てぞとゞめにける思ひきりぬる道なれども心に任せぬ事なれば此人々のゑうたんをあはれとはぬ人ぞなし角て日數をふるほどに御所中の女房たち大名達の北の方ゑづかが思ひさこそやととぶらひとなづけて其ふみどもは數知らずゑづかもしゆせきよにすぐれ源氏いせ物がたりをばうちをくふみのことばにもたゞ此心計也御所の北の御方仰出されけるはうら山しやな司士はいかなるちへのふかうしてをんな

ののふをのこさずしゝたる事のゆゝしさよそれ我朝の女はやまとことばをむねとして歌のみちをしるべしさのうのみこ（本ノマ、）のやくもたつと歌に詠じはじめ給ひし我朝のまぼり花郭公と月雪はあだなるものと思へどもしきてんべんのむしやうをあらはすところ是也佛もたゞ此事を一大事とて五十年ときをかせ給へどもしむなふふかうしてとゞかぬことばなりければふせつふかしぎなるがゆへたゞふかとくとばかりにてことばにのべつくされず爰をもつてまさしくもふりうもんじなるゆへぶつそふてんと是をいふたというばそくうばいにてかたちは女成ともさとりをうけば佛成べし殊にかのしづかはないてんげてんくらからずしかも我朝のふうそく和歌の道達者也いまやしづかにより合て源氏伊勢物語のふかき心を尋んもつともしかるべしとておの／＼うつらせ給ひてうちとけあそばせ給ひけるに北の御方仰けるはいかにしづかごぜん歌のふしんはさま／＼をゝしと申せどもいせものがたりのあふぎをくはしく知る人まれなればしづかごぜんが情にをしへてをかせ給へやと仰出されたりければしづかうけ給みづからなればとていかでかそのあふぎをば知り候べきさりながら心得てさふらふ程をば申べし抑いせ物がたりと申は業平の中將の一生界をかたる也業平と申はへいぜい天皇に第四の御子あはうしんわうに第五のわうじ母はくわんむてんわうに第八の御むすめいとうないしんわうの御子也てんちやう二年きのとのみのとし生れ給ふしゆんわ天皇の御時七歳にてわらはでんしやうし給へりふかくさのみかどの御時春日のりんじのまつりのとき内裡よりれうのすがたに出立てすきびたいのかぶりをきこせつのれいしむにてたちしゆへしのぶすりのをみのころもをきたりし也又承和七年にうちのくらんづにふせ給ふこれたかのみこの御時かたのゝみかりにあひぐせり彼業平の中將はしやばのほうさんつきはて給ひ大和の國なかの郡有原といふ所にみは

かをてんじ給ふ是迄は業平の一生界をかたる也此物語をとうぐうの御所にてつくられけるにふるされ色のきぬきたる人一人來りゆゝしくも此物がたり作り給ふ物かなそれがしも歌二首入むと有し時にいづくよりの御使ぞととひければ其返事にをよばずして

神風やいせのはまをきをりしきて
　たひねやすらんあらき濱邊に
思ふ事いはてたゝにややみぬへき
　我にひとしきひとしなければ

かやうに詠じたちかへらんとし給ふとき人々たもとにすがりつひてさも候へいづくよりいづかたへ御とをり有ぞと申せば是はいせよりと計にてけすがごとくに失給ふさてはうたがふ處なし伊勢太神宮の御使成と心得このことわりに任せつゝいせ物語とは申也北の御方きこしめしあら殊勝やさふらふさてういかふむりと申はいかなるいはれにてさふらふそれはふか草のみかどの御時春日の祭りのときだいりよりれうのすかたに出立てすきびたいのかふりをはじめて給りしによつてういかふむりとは申さふらふおうこれもはや心得ぬ其外のふしんにはながめあかしつみをつくしとぶほたるぬきすといふことぞたのむのとりみのしろ衣地いろのたけしのぶずり都どり此志な志なのふしんはいかなるいはれにて候（本ノマヽ）ぞ其志な〳〵のふしんはしんごんのごくひしあはんうんのたうにあはらかけやのこもんごちの如來のしゆじとして四季てんぺんのしきさう雨土ひらけはじめにちぐわつしやうの三くわうじやうひじやうのたねとしていんやうふたつ和合して志きてんぺんの色をなす春の色はあをけれど何とて花はくれなゐの色にはいでゝひらくらむ夏の色は赤ければてる日もやがてごくねつす秋の色はうれいにてむしの啼音はことわりや冬されぬればねはんにて雪ふる山は白妙の是を生老病死の志きさうさだめなき事を三十一字の歌によむこの歌のすがたはしやばせかいの人の身こくうとをな

じ事にて佛としゆじやうへだてなしされば歌をよくよめば神も佛もなうじうあつてしゆじやうもやがて佛となるとときおしへ申とき北の御方をはじめまいらせつヽ其外の女房たち和歌の道はくらからずたうとくむじやうぼだひのしんによの道に入給ふ角てうかりしかまくらきのふけふとは思へど女房達のなさけの得さりがたきにほだされてふかくさのいみもはれにけり大名かうけさしあつまつてさヽやき申されけるやうは彼しづかゞ(とチ脱スルカ)舞と申すは日本一の上手也それをいかに申すにゐんじやうの夏の比ひでりをヽくつゞき草木もこと／＼くせいめうのこるべからず此事天下のせうしとてくぎやうせんぎまち／＼たりそれ龍神のはらをやすめ神の心をとる事は女の舞にしくはなしたれかめいじんなるらんと御尋有し時こむえの院の左大將すヽみ出て申されけるはたれ／＼と申ともいそのせんじがむすめ司士と申しらびやうし父は伏見の中將とて藤原氏のくぎやうたり其子に司士生年十七歳に罷成天下にならびなし是をやめさるべからむとせんぎ申されたりければおふもつともときせられ(かチ脱スルカ)しやがてちよくしをたてないし所へめされするがの舞をまひけるにげつけいうんかくひやうしをうつてはやされたり舞のそでへうやうしてんにんのかけるごとく也うたな聲はさながらかれうびんがのごとく也きみをはじめたてまつりげつけいうんかくかんにたへさせ給ふときてるひにはかにかきくもりとゞろ／＼となる神もひやうしにあわせたりければ雲へきらくにあつうしてしんの雨こそふりにけれこのほどてりし草木いつちうの雨をそヽげばみどり若ばと成にけり扨こそ五穀菓はさかへねはふかくするゐは雲井にのび秋は其身のまたきことすんのいなつぶ玉ににてしやくのほどけもなかりきしんも君も此舞をかんせぬ人はなかりけりかヽるめい人たまさかにまれにもいかで候べきいかゞはせんと內談す北の御方司士が宿へ御使有はゞかりをヽき事なれど日本一

の舞とやらんを一目見ばやと仰けり司土こたへて申すやうまはぬとがめにふたつなき命をめされさふらふともまはじとこそは思へども君が情のふかければまはではいかゞなんどしたうちとけて申けり北の御方きこしめしあら（本ノマヽ）うれしやさふらふまはせ給はゞ若宮殿のすきらうにてしんちよも諸人迄も目をおどろかす物ならばひとつは神のかいなさし又はわが身のいのり彼是もつてめでたしと仰出されたりければ司土も是にどうし吉日取て若宮にてかいなさしと風聞すすでに當日にも成しかば若宮殿の志やうめんに大將殿の御座敷にはまんまくをひかれたり北の御方のざしきには戸にはみすをかけうちにきちやうをひかれたり諸大名はくわいらうとおほ庭にところせきなくなみゐたり貴賤群集は中々に申に及ばさりけり彼若宮と申はうしろは山前は海左右には軒をならべみんかの門家〱むねの數おほふしてたいたうのみやうじうの津ともいつゞべし荒面白や寺〱のろう門はうんこんにさしはさみ峯の嵐は松にふき汀の浪はよせひいてむしゆのざいこうをあらひけり沖のかもめばかいじやうの志ら浪よりもたちゐけりとうなくしんによのをきのなみほつしやうのきしをよせてうつだひじだいひの若宮はむみやう（きれハれぎか）の闇をてらさんと神樂おとこのしやうこのをときねか袂になる鈴いつれをきくもいさぎよくわくわうのかげ涼しく司土が舞のしやうぞくはちばどの御やくふへはちゝぶの六郎どのつゞみはくどうすけつね彼すけつねと申はだいりにもんやくの有し時つゞみを打てめいよをすきんろうきんちうのひやうしをだにもはやしたりし上手にてさゝるゝも道理也下武藏の住人なかぬまの五郎はとひやうしの役也司土は是にはやされてなにのなさけにかまくらにて舞まふべしとおぼえずとたもとを顔にをしあてゝ泣より外の事はなし母のせんじ是を見ていかなる事ぞ志づか御前かほど目出度御座敷にて舞まはぬ物ならば御とがめをばいかゞせん

まづ庭はらひさふらふとてさきに立てぞ舞たりける
もとより舞は上手かたくりしほりはきをうたいすま
したりければ司土此由見るよりもあら痛しや母上の
何に心のなぐさみてかやうにうたい給ふべきぞ是も
たゞみづからをたすけんためのまいぞかしそれにみ
づからたゞいまものうき心あるまゝに舞まはぬ物な
らば母のとがめをいかゞせんまはばやと思ひなをし
うちぎぬのそでひきろひ袴のおひさしはさみ立出た
りし心のうちさこそやと思ひやられたり見渡せばれ
き／＼と座せられたる人々に和田ちゝぶ殿江戸笠井
ちば小山宇都宮いづれか日比我まゝにふるまはざり
し人やあるぎけいと妻とありし程は大名かうけをそ
れをなし舞まはせて見る迄は思ひもよらでありつる
はきのふは人をしたがへけふは人にしたがへりてん
にんのごすいのはふさめぬると思へばよ所のみる目
もはづかしとはづかしながらしづかごぜん時の祝言
成ければ君をはじめておがむには千代も經ぬべし姫
小松とうたいすましたりかたちは日本一也聲はたゞ
かれうびんがめうのひゞき也けりうつぶくもみな上
手ひらりとあぐるかいなにてん人もあまくだり地神
もうごく計也いりまひに成ければ

しつやしつ賤かおたまきくり返し
　むかしをいまになすよしもかな

とうたいすましたりければみすもきちやうもさゞめ
きさけぶところに頼朝みすをおろさるゝゆへをいか
にと申にしづやしづしづかをだまきくり返しむかし
をいまとうたふたはよし野て別れし義經をしたふ所
それはよりとも見ぬところちゝぶどの申さるゝむか
しをいまとうたふたはこていのむかしいまにき世は
おさまるといふ處目出度覺えて候にみすをあげられ
候はでいかゞと申されたりければ御れうげにもとお
ぼしめしみすをさらりとあげ給ふ司土是を極樂淨土
の玉すだれかんじゆまんじゆのたまのはにあぐれば
いよ／＼ひかりますぎよくたいつゝがなふしてあめ

がしたこそのどかなれと三返ふんでまはればみすも
きちやうもさゝめきほうしやくゆるく計也頼朝かん
にたえかね給ひてとにかいなをさし給ふ大名かうけ
ていしやうにころびおちこゑをあげてぞおめいたる
さてしも舞はおさまりぬ君よりの御諚に駿河の國神
原八十餘町たびにけり大名連のほうろくたからの山
を前につむゑづかはいよ〳〵是にはちいつぞの程に
舞まふてはうろくにほこるべきかへせばおそれあり
やとかまくらうちのみやしろみだう寺にきしむしよ
しつねの御いのりまたは我子のためにとひとつも身
にそへずみやこへとてぞのほりける

とかし

去程に判官やまぶしのすがたをまなびくだらせ給ひけるほどに加賀の國あたかの松にほどなくつかせ給ふほうぐわんまつを御らんじてあらゆふちやうなるすがたかな四國西國みやこにてそのかずまつをみてあれどかほどゆふちやうなるすがたはなし名のなき事はよもあらじたづねてまいれむさし辨慶承てまつのあたりをみてあれば十四五なるをさきとしてわらむべ四五にんまつの葉よせてぞゐたりける辨慶するするとたちよつてやあいかにわらはべ當國にてこの松はなにのまつといふぞこざかしきわらはべがすゝみいでゝ申さむ候たうごくはさかをへだてゝこなたくさふかき遠國にてかほどの松に名づくる人も候はずさりながらざいこ中將のながめにはあたかのまつ共よまれて候それのみならず鳥羽院の御内なる佐藤兵衛のりきよはうはのそらなるこひをして北國しゆぎやうに出るとて西行とかれは名のるかのさいぎやうのうたにはねあがりのまつとよまれたりなふきやくそうと申けり判官きこしめされてもの聞給へかたがたくわんがくいんのすゞめはもふぎうをさへづりちしやのほとりのわらはべはならはぬきやうをよむとはよくこそ是はつたへたれこざかしきわらべに引出物をとらせこれよりおくひらいづみへのじゆんだうをくはしくとへべんけい承てをひのなかよりもいろよきあふぎとり出しわらはべ共にとらせやあいかにわらはべ是より奥へはいづくをどなたへとをるぞとくはしくたづねとふときにこざかしきわらはべがすゝみいでてもうすさむさうらふこれよりおくへはあまたのみちが候まづかみみちしもみち中みちとて三つ道が候がいづれも是がなんじよ也先下道のなむじよをかたらば聞召るべししくろへは四十八ヶせ親玄らず子玄らずいちぶりしやうとうたのわき二三のは

ざまもがみ川あねはの松かめわり坂と申つゝ四十二ところのめいよのこれがなんじよ也少人もおはしますがいかでかくだり給ふべきさてかみ道のなんじよはみやこのはるは過ゆけどこしぢのゆきがまだきえず去年の雪のむらぎえに今年のゆきのふりつもり谷のした水おちあひてみづかさまさり鳥ならでかよふべきやうさらになしなかみちと申は道もじゆんだうにて人のこゝろもしひなるがこゝにひとつのふしぎありかまくらどのよりもこの國のとがしどのへふれ狀がくだつて城くわくをかまへやまぶしきんせいこはくしておとゝひの暮ほどに九人とをる山伏をはうぐわんどのゝ御つれとておさへて切てかけられたりきのふのさうてうに六人とをる山伏を五位殿の御つれとてこれをも切てかけらるゝゆふべも五人きらるるけさも三人きられて候かほどなるなんじよをたしやうごうはふるともいかでかくだり給ふべきなふきやくそうと申ける

判官聞召れてさてはなにがし一人がゆへにゆく衛もしらぬ山伏たちのさやうにいかほどもきられさせ給ふことよ行てとぶらはばやとおぼしめし五人のわらはべをさきとして松原に入て御覽ずればげにも去年のふゆのころよりもきさらぎ下旬迄きりかけたる事なれば百ばかりほどまつしぐらにかゝる十三人の人人はれいじせんぽうをたつとうあそばすそのなかにべんけいせんぼうをばよまずして爰かしこをはしり廻て首共をひけんし五人のわらむべをはつたとにらんでこの國のとがしはなにもしらぬといふわらはべ聞てはらをたてこの國のとがじどのゝ物しろしめされぬいはれは候べんけい聞ていで〱とがしのものしらぬいはれを語て聞せんらんぎやうふぢやうの大ぞくのくびをはるかのうへにかけびんぱつをまろめげだつどうさうの種々のほうえを身にまとひほうかいたうちやうにしてみろくのしゆつせに生れをなさうずほうしのくびはるかのしもにかけたるはさても

のをばしらいでかけぬるれわらはべ聞てうちわらひよこ手をちやうとあはせわかれ本ノマヽたりきやくそうそれをとがめ給ふかうへにかゝつたそくのくびにあまたのたんざく付られたりむかふはそつてさる眼こびんの髮のちゝむでいろの玄ろきをばかまくらどのゝ御舍弟に源九郎義經の御くびとがうしてはるかのかみにかけられたり又しもにかゝつたほうしの首にあまたのたんざく付られたりかう申てあればとてはらばしたゝせ給ふなよ御坊のごとくにあく迄せいはたかふてきはめていろはくろくしてまなこににくちをもつたるがもの云たるこはつきのぎごとなき法師をば判官殿の御うちなるひざもとさらずのさいたうの辨慶とがうしてはるかの下にかけられたるぞ御坊といひければさしもがうなるむさしばうも我身のうへと聞なしてひざふるうてぞ立たりけるべんけい聞てさてはとがしはなにがしが面をばよくも見しらざりけるや其儀にてあるならばなにがし一人うちこえとがしが城のていを見ばやとおもひきみの御まへにまいり此よしかくと申あぐる判官きこしめされてこゝろがはりかむさしこゝろがはりに及ならばみやこのつちとはなさずして北国のみちしばとならむ事こそくちおしけれべんけい承てこは御諚ともおぼえぬものかなかほどやま伏きんぜいのところを一人ならず二人ならず十三人わめひてとをりあやしめられてはいかにちんずるともかなふまじまづなにがし一人うちこえとがしが城のていをみんずるに見おふせんはふぢやう見そんせんは治諚なり見おふする物ならば山伏の法にてあるあひだよろこびのかひを二つ三つふかふず又みそんずるものならばさいごのかひをたゞひとつふくべきなりかひばし一つたつならばすはやむさしめがさいごぞとおぼしめしきたかたのみまん堂にてきよきじがいをおはしませいとま申てさらばとてたちはなれんとしたりしが思へばこれがさいごなりはうばいの人々に名殘やおしくおもひけん龜井

かたをか伊勢駿河まちかきさまにちかづけていかに
かた〳〵むさしめ一人とがしのたちへうちこえ城の
けごを見そんじたらば辨慶が腹きらふず侍御はらを
めされなばしでのやまにてまち申さんおかた〳〵さ
きにもはらをきるならば三津のかはにてまち給へい
とま申てさらばとて名殘おしげにわかれけり
かくて辨慶ひたのたくみがうつすみなはにてはあら
ね共只一すぢに思ひきつてふぢづか手とりうちすぎ
さしもまちかくるとがしのたちへ入たるは人にかは
りておぼえたりやまぶしの法にてあるあひだれいし
せんぼうをこそよむべきにむさしなにとか思ひけん
たか念佛を申あげつちもんよりつつといりとがしが
しやうをみてあればまつほどにこそこしらへたりお
もてのやぐら十三ところわきのやぐら九ところ二重
三重にたかやぐらをあげさせひがしおもてにくらを
き馬を四五十疋引立てをひたりけりにしのとをさぶ
らひをみてあればとがしがわかたう百人ばかりなみ

ゐてひきめくつたり矢はひだりごしやうぎすごろく
にこゝろをいれたるところもありちやく座をみてあ
れば四十ばかり成男のひようもんのひたゝれにゑぼ
しのさしきをたぶ〳〵とあけさせふんとうにかゝり
てわかさぶらひにすごろくうたせじよごんしてゐた
りけるはこれぞ此國のとがしのすけとおぼえてあり
あらくちおしやときこそあれ日こそあれとがしのい
でたるところへなにがしきたつたるはつめたるごう
と覺えたりしのばばやとおもひしが見えたる事もな
きさきにかたきにけごを見えられてあしかりなんと
ぞんずれば大のこはねをさしあげて熊野山のやまぶ
しが佛法しゆぎやうのそのために出羽のはぐろへと
をり候ときれうたべとこうたりけりとがしこれをみ
てもつたるあふぎにてたゝみのおもてをちやうとう
つてあれを見よ人々ぐにん夏のむしとんで火に入と
よくこそこれはつたへたれこゝろをつくして待かく
るさいだうの辨慶こそ只今きたつたれうてはれから

めよさしなはなんど丶ひしめひたもとより武藏我身のうへとは知たれどもきかぬていにもてなして大ぼくこぼくの花ながめそらうそぶひてぞ立たりけるぢこくもうつ さず とがしがわかたう百人ばかりまつくろによろひむさしを眞中（なノ音便ニ）にとりこめたりべんけいこれをみていや〳〵はやりうのわかもの共にひしひしとうちとられかなはじと思ひとがしがゐたりしえんのはなへづんどあがりとがしをはつたとにらんでいかなるやしんちやうきやうのものをめしをかれたゞいま參りたるほつし迄うき目を見んずるやらんとよく〳〵承て候へばこのほつしが身のうへと聞なして候はひが事候がとがしどのとがし聞てさて御坊は判官殿の御うちなるひざもとさらずのさいたうの辨慶にてはなきかどこに候それ山伏の名よのつねおほしと申せども判官坊ひざもとさらずなど丶いふ山伏の名今こそ聞て候へとがし聞てさやうにさいかく廻てべんせつのあきらかなるは扨辨慶にてはなきか

武藏聞てさいかく廻てべんせつのあきらかなるがべんけいならばさの給ふとがしどのゝ才覺こそはつてべんせつのあきらかなるは扨御身もべんけいよとがし聞て何ともちんぜばちんぜよたゞ辨慶と云べんけいあまりにちんじねもしかう申ほつしがひたいにべむけいといふ字ばしすはつて候か字のすはつたるとおなじ事かまくらどのよりもたんじやうの有うへはうたがひあらじといふむさし聞てたんじやうはよもあらじたばかり事にいふぞとおもひしせうのあらばみんとこうたあらむざんや辨慶がいくほと命ながらへむとてたんじやうこうつるやさしさよそれ〳〵とありしかば承ると申てとがしがわかたう四五人ばらりと立て八しやくびやうぶをとり出し武藏が前にさつとたてゑづをさらりとなげかけべんけいに見するうつしもうついたりかきも書たるゑしかなむさしがたけは六尺二ふんゑづも六しやく二分なりいろくろくたけたかくまなこのにくちをうついてありあまさへ

はむさしめがひだりのまなさきにあざのあるまでうついたはのがれつやうはさらになし武藏今はことばをかへてちんせばやと思ひなふいかにとがしどのいぜんこのほつし熊野山伏とのべて候は御身のこゝろをちつと引見申さんがためなりこれこそ南都東大寺のくわんじんひじり候よとがし聞てたつとう候南都のすゝめにて候はゝくわんしんちやうはおはすらんおがまんとこはれたり武藏なんとのすゝめとはのべたれどもくわんじんちやうのあらばこそもたぬといはばばうちにうちふせられうずもつたといはんとすればあらばこそぜひをむさしわきまへかねて立たりしがいや／＼持たといはばやと思ひおろかなりとがしどの三國一の大がらんのすゝめをせうずるひじりかくかんじんちやうをもたであるべきかせひ見參にいれんとてをひをひつたとおろしからげなはぶるぶるとひつとひて上だんに手を入からり／＼とさがしけれ共みやこにていれざる事なればをひには更になかりけりむさしあまりのくちおしさに目をふさぎなむや八幡大ぼさつげんじのうぢ子をは百わう百代まぼらんとの御ちかひと承りて候ぞ一つのずいさうを見せしめ給へやとからり／＼とさがさるゝげにや八まん大ぼさつのあたへたびけるかみやこにてこのたびいれたりともおぼえぬしぜんのわうらいのまきもの一卷候ひけるををつとつてさしあげて勸進帳はこれにありおがみ給へとみせにけりとがしこれを見さらば是へたべおがまんとこはれたりむさしこのくわんじんちやうがまことのくわんじんちやうならばいかにとがしがおがまじといふともおさへておがますべけれ共これはしせむのわうらいの也あやしめられあしかりなんとぞんずればおろかなりとがしどの恭も十膳（善なり）ていわうだにもかふりのこしをかたぶけおがませ給ふくわんじんちやうをいはんや御身は大ぞくの身として手にとりおがむものならば五體すくむで立どころあやうししとおどすとがしむさしにおどさ

れさらばそれにてあそばせこれにてちやうもむを申さんむさしこのくわんじんちやうをよみおふせんはふぢやうよみそんぜむは治定よみそんずるものならば人手にはかゝるまじあれにつゐて立たるしらえのなぎなたひんばふてとんでかゝらむ若ものどもをおもひのまゝにをつぱらひあれにひかへてたつたるあしげのむまのつめかたさうていかにかけあしのはやかるらんにひんばふてうち乗てみまんたうに參り一のたちにて御前がいし奉り武藏ゐはらをきらふずきみ御はらをめされなば十一人の人々もみな〳〵腹をきらふずいきてはこうをなさず共死てはこうをなすべきなり日ごろ我きみ七しやうまでとちぎりをかせ給ひたる愛宕のやまの太郎坊ひらのやまの次郎坊やま〳〵のせうてんぐてんのやしむ八しやうじんごつめづあはうらせついぎやういるいのをにどもをひきぐし候ひて本望なれば關東へせつながあひだにみだれ入てはこね山のたうげより黒雲をたなびきでんくわうをとばせたまをみがくかまくらにしやぢくのあゐをふらせやつ七がうをあらひながしにくかりしかぢはらをさうなくもころさずして百鬼神におほせ付ねつてつのゆをわかしくちのうちへながし入六ふ五ざうをやきはらひ七代子孫を取ころして本望をとぐるならばかんせうじやうにてあ[illegible]ず共あら人がみと武藏ゐがあふがれむずる事どもはあんのうちとおもひければちつともさはぐけしきはなし武藏此くわんじんちやうをたかくもつてよむならばうしろなる人によまれうず又ひきくもつてよむならばまへなるとがしにそれはといはれあしかりなんとおもひ六尺二分の辨慶が七しやくゆたかにのびあがりしらうちての笠をづかうきつと着なして字ならば二くだり三くだりそつとひらいてさうがんにをしあてゝなにとはしらねども敬白とあげたりけりうやまつて申勸じんのしやもんこくたんのちしきの狀にいはく和州やましなの里東大寺のくわん進の事ことに十方だんなの

じよじやうをかうぶらむとほつすみぎのしいしゆいかんといふにかのがらむのらんじやうはしやうむてんわうのきさきくわうみやうくわうぐうと申はたいしよくわんの御むすめしやうじんのくわんおんなりしかるにうろのしやうがいはあゆみをたかひにかくるしやくそん又さうりんのけぶりと上り給ふしかるにみかどきさきの御わかれたへにしてうんじやうにくもりあればげつけいひかりをうしなへりかのついぜんのために一字のがらんを建立し給ふいまの大佛殿これなりみだうのたかさは二十丈本尊の御たけ十六丈とをく異朝をたづぬるに大唐四十八ヶのだいがらむにすぐれてんぢく祇園しやうじやにもこえまして我朝にならびなしさればしやうごんしつぼうをちりばめくわうえうらんけいをみがきみだうの内にしゆぎよくをかざりるりのかべしやこのたるきめなうのゆきげたはりのはしら本尊はこんどうるしやなぶつならびに四てんはこがねをのべ十一ぢうのやうらくこくうむかの風にみだれはなせうえんのたまのはたかゝるぶさうの大がらんにらいくわふつてくわしつすはめつのときにあひたがはずこゝにふかくさのみかどのきやうさうこしのきざみにかうりよくしこと〴〵くみがき給ふこれはこれわうほうのはんじやう也わうほうのはんじやうは天下のきつけいたりめでたかりける折節に東大寺こうぶくじ両寺のあひだにしゆとけむくわをいたしたがひにはめつの火をはなつまことにましんのしよいをなしけぶり庭に飛て落らいくわ雲をはしればぶつざう跡をけづりごぢのはこやけはつけうのぢくもはひとなす爰によたいのみかどのぎやうざうくわんじんのちからをはげますとはいへども三たい御くわんもはんさくなりめでたかりけるおりふしにこゝに平家の大將ごくあくぎやくのげちにしたがつて本三位中將しげひら左衞門ともかた民部しげよしつがうそのせい三千餘騎治承四年十二月廿八日に南都へはせむかふ南都のしゆと

ふせぎたゝかふとはいへどもほう末世につき忝もにかいのさうもん手かひのもんにはうくわをせしむかのみやうくわみち〳〵てだうとうそうばうじんじやぶつしんをきらひなく一宇ものこらずやきはらひ訖けぶりうちやうてんにあがり雲と成てあらそひければ十六丈のるしやなぶつのみくしおちてつかのごとし御しんはわひてやまのごとしこんじんせかいのしやうごんをうつし奉るとうこんだうさいこんだうせつなが内にやきはらひおはぬかなしきかなやおんあひべつりの生死のをくるまかれを見是をみるにいつをかごすべきぞ御まなこしかと成て春日山にとびいり給ふひくもびくにだうぞく男女のきらひなく大佛殿のなごりをかなしみほのほのなかへとび入とびいりやけ死するものはかずしらずあなむふぞくのれいちのけさくわいじんと成てちにふまるきやうごうほろびけいきよくたりこそたへぬ露じやう〳〵たりたまく〳〵のこりとゞまるものししやうきやうていのかどにたちよりしばらくはねをやすむる爰にしゆしやうばうひじりせんせいばうかすが大みやうじんの御しげんをかうぶりくわんじんちやうをひたいにあてをそれ〳〵ほうわうの御方へそしやうを上らるゝほうわうこんしつをはこばせ給ひ肥後肥前ちくご筑前豊前豊後日向おほすみさつま九國をよせらるゝ女院の御かたより伊與さぬきあはとさ四國をよせられたり四國九國よりかぢ千人ばんじやう千人そま千人三千人かすが山へわけ入てざいもくを取て淀こづ河へくだす事おびたゞしゝ彼大もつせうもつをいかにとしてちきやうのおもてに引つぐべきとなけきかなしむかつごうの涙きもにめいじ三ぼうのめぐみによりたいこくよりもちしやのうしが來て一日一夜にひきつけてうし大こくへかへりけり日本人よろこうでちぎやうのおもてみだうのたかさは廿丈本尊の御たけ十六丈かうは八ちやうたもんぢこくぞうちやうくわうもく百よせんのふづくしれいとつこはなさら本の

ごとくには奉るさりとはいへどみだうのくやう佛の
くやうかねのくやう三くやうをまだのべす此くやう
をのべむため六十六人の扨もこひじり六十六ヶ國へ
をの〳〵廻てすゝむるところの勸進也いつしはんせ
む入たらんずともがらこむじやうにてはあんをんけ
らくのとくをかうぶり來世にてはぐせいの船にさほ
をさしせんえうのれんげにたはぶれんず事うたがひ
あるべからずなむきみやうけいとよみあげくる〳〵
とひんまひて本のをひへなげいれたるむさしがあり
さま人間わざてなかりけり

おひさかし

武蔵坊弁慶はとがしのたちにて勧進ちやうほうがちやうをこと〳〵くよみ上ければとがしよく〳〵ちやうもん有てまことに是は南都のすゝめにて御座ありけるをぞんじ申さで一時なれども玄らすにたゞせ申つる事よさこそ佛神三ぼうもわれをにくしとおぼすらんそれ〳〵こなたへ申せとてべんけいをしやうせらるゝむさし安堵のおもひをなしいまはおひをこゝにをかばやと思がいや〳〵玄れたるものにをひさがされあしかりなんとぞんずればをひかけながらざしきにむずとなをるとがし御らんじてせうくわんじんにて候へどもとてまきぎぬ五十疋武蔵のまへにつませらるゝとがしのきたのかたもまきぎぬ三十疋むさしが前にをかせらるゝそのほか心ざしの人々はむさしどのがまへにたからのやまをつむ弁慶これをみてあらおびたゞしの御ほうがども候やたゞいまも賜はりたくは候へどもこれよりおくへあまたのなんじよの候へばこうずる三月のころ都のやどへつけてたべと申とがし聞てきやうはなむでうとゝはるむさしいつも云つけたる事なればみやこは三條河原崎の弁慶が宿へつけてたべといはんずとおもひみやこは三條かはらさきのべんといつしがあつとおもひてべんぞうの御ぼうへつけてたべとぞのべにけるさらば御いとま申とてたがひにいとまをこひこはれとがしのたちをいでにけり

みまんだうにまいりてきみにかくと申ければむさしどのにてなかりけりたゞはちまんの御げんげとて御手をあはせたまひけり

その夜はみやのこしさらたけの明神に一夜のつやを申夜をこめていでたまふ里人申けるやうはこれより越中への御下向はおもひもよらぬ事にて候それをいかにと申にくりからがたうげにはとなみの七郎が七

百餘騎にさゝへやまぶしをとをし申さず〆もみちのあひだをば加賀と能登のさかひを〆ほの小太郎がふさぎさら〳〵やまぶしをとをし申さず越中への御げかうはおもひよらずと申判官きこしめされてびんせむのたよりもあれかしと仰ければべんけい聞てはまにくだりもし能登のかたへくだる船やあると問たおりふし能登の國すゞのみさきへ下る船こそ候ひけれてんのあたふるところとてこのふねにびんせんしその日のうちにのとのくにすゞのみさきにほどなくつかせたまふおんふねよりもあがらせたまひみぎはのいはにこしをかけあたりのやまを御らんずればせきがんがゝとそびへかぜちゝむたる萬木はゑに書たるがごとくなり西のおきははてしもなくさうかい雲をひたしろかひをわたるこしふねやなみまにかつきうき〆づむみづにはふれてとぶかもめみぎはのいはになみかけてそこあらいそのいは間にもくだけてみゆるうつせがひ人のこゝろはあらいそのかた思ひ成あはびがひみるめなのりそとらんとてあまどもうみにおりひたりかつぎのためにうき〆づむかくてべんけいはとあるいはまよりもにしにみるめのついたるをとりあげて御前にまいらせければにしはいきててうごきければみるめもともにうごきけりはうぐわん御んらんじて御前のみやこにましまさばいきたるみめるをば何としてかは御覽ずべきぞ遠國のはてまても義經がとくによりかゝるめいよのもてあそびを御覽ずるよとおほせければ御ぜんとりあへさせたまはず

みやこよりなみのよるひるうかれきて
　みちとをくしてうきめみるかな

判官きこしめされてあらおもしろの御ゑいかや候いで〳〵義經も御返歌を申さんとて

うきめをはもしほとともにかきすてゝ
　よろこひとなるすゝのみさきや

このうたになぐさみたまひ今は船路のたよりもなしはる〳〵のまはりをして越中へこそあゆまれけるい

そづたひ山づたひたへ〴〵ほそき谷のみち順道なれはせきたうざんをふしおがみくだらせたまひけるあひだ越中の國に聞えたるろくどうしのわたりにほどなくつかせたまふわたしもりが申けるはこのわたりと申は南都ざうゑいのためなりちんなくしてはわたし申まじと申べんけい聞ていかなるせき〱津どまりにても山伏のならひにてちんといふ法はなきぞただわたせと申いやちんなくばわたし申まじその儀にてあるならばこれより御もどりあれと申ちんはなしいそがはしゝちさむせばあとよりもいかなる事が出來なんと御前のくれなゐのちしほのはかまとりいだしせんはうつきてふなちむにこれこそあれとてたびにけれわたしもりが申けるは是はわれ〱が見ゑり申さぬ物にてちとふそくにはぞんじ候へども本ノマヽさらばわたし申とてろくどうじをこきわたしはうしつをあゆみすぐいはやのわたりけふもはやうちでのしゆくとうちなかめおんとをりありしところにたび人あまたゆきあひてこれよりおくへのみちすがら少人をあゆませ申ていかでかくだりたまふべきなふ客僧と申けるはう官聞召れてそれはせき〱のふさがりかいかなる事にてあるやらんと御たづねありければたび人申けるやうはいやみちにせきも候はずこの國をゆきすぎて越中と越後とのさかひにくるはまをふはまをにぶしおちあひなむどゝ申てあまたのなんじよのさふらふそうじてくろへは四十八ヶせときしもはるのするゑなれば去年の雪のむらぎえにことしのゆきのふりつもり谷のゑたみづおちあひて水かさまさり鳥ならでおよぶべきやさらうになしはうぐはんきこしめされてびんせむのたよりもあれかしとおほせければおりふしゑちごの國なをえの津へくだる船こそ候ひけれ此ふねにびんせんしゑちごのくになをえの津にほどなくつかせたまふ御船よりもあがせらたまひてなをえの太郎の宿所に一夜のやどをかりたまふうちの人々さしあつまつてないぎひやうぢやうするや

うはこの浦は當國のかう善光寺へ參るみちそうじてあまたの道つじ見も玄らぬやまぶしたちのせい〳〵つかせたまふはもし判官殿かあやしやいざ〳〵とがめ申さんとてわれもとおぼしき浦の人七八百人あつまつてゆみ矢をたいしひしめひたりおやどのねうばうなさけふかき者にてべんけいをまねきよせさゝやき申されけるやうはあらいたはしややまぶしたちを判官殿なりと申てからめとりまいらせて鎌倉へぐそくし申さんとてたゞいまおほせいそつしてむかふなりと申辨慶聞てうちわらひあふうれしくもきかせたまひて候物かなわれ〳〵ははぐろのかたのやまぶしにてべちに子細もよも候はじ御こゝろやすくおぼしめせとてさあらぬていにもてなしさて我きみの御前に參りこのよしかくともうしあぐるぎけいきこしめされてこはいかによしつねはいかなるつき日生れけるぞやてんにごうのあみをはりちにさかもぎのせきをすへ五しやくにたらぬきやうがいをかくしかねたるむねんさよくちおほくしてはことばのあやまりもありぬべし御へんたちはやまぶしのみねのこきとるふせいにてうへのやまに入（しナ脱スルカ）たまへよしつねひとり殘りゐてもんどうてみんずるにちんじそんずる物ならばあひづのかひをふかふずその時はおりくだりてともに腹をきれ承ると申て十一人の人々はかたはらにたち玄のぶ其跡に浦の人うんかのごとくあつまつて鎌倉殿の御舍弟太夫のはうぐわんよしつね此うらへ御つきあつたるよし承てらいてうの御だいくわんになをえの太郎が御むかひに參りて候はや〳〵御出候へかまくらへ御とも申さんと大音あげて申ぎけい聞召れてなにはうぐわんどのとはいづくにましますぞいつぞやの事かとよ平家をせめんそのため十萬餘騎をそつしておくよりうつてのぼらせたまひしをはぐろのかたはらにてそと見たてまつりて候ひしがたゞいまも千騎にをとる事は候まじやはかかほどの小勢にてかなはせたまふべきぞ山伏たちにもたうぐたべ

でゐのとの丶御供し一方ふせぐべしとおはせければ
うらの人々あれを聞もつてのほかに相違してあきれ
てこゝに立たりけりなをえの太郎が申やうはうぐわ
んどのと申はせいちいさくいろゑろくむかふばそつ
てさるまなこあかひげにましますとうけたまはり候
がたゞいまさやうにおほせらる御ばうのぎやうさう
ちつともちがひ申さず判官殿におゐてはうたがふ所
なしはや〳〵御出候へ鎌倉へ御供申さむところゑ〳〵
に申義經きこしめされてあらうれしやついでをもつ
てをとにきくかまくらとやらんをみてとをらふにと
ふしてつれてゆきたまへ浦の人々これをきゝもしも
さもなきやまぶしをかまくらまではる〴〵とぐそく
したりともさしたるかうみやうはなくしてやまぶし
どもにのろはれよかりつべしともおぼえずしよせん
をひをたまはりなかをひらいてみんずるに山伏のぎ
やうじやならばやまぶしのだうぐあるべし又そらや
まぶしにてあるならば山伏のだうぐよもあらじしよ
せんをひをたまはりなかを見んところゑ〳〵に申はう
ぐわんちからをよばせたまはず八ちやうのをひを取
出しうら人のかたへわたしたまふうら人此をひをと
りてゆきなかをひらいてみてあればまづ一ばんのを
ひにはこんがうかいのまんだらたいざうかいのまん
だらごまの次弟諸尊のほうかずをつくしていれにけ
りめくらしふみかあやしやとうたがひ申ところにく
がみの寺よりもほうし一人來てこと〴〵くおがみ知
てあしくしてばちあたるなとてほんのごとくにとり
おさむる二ばんのをひのなかにはけんみつ二しゆの
ほうしやつけうのとめい有これもかたじけ無やとて
ほんのごとくにとりおさむる第三ばんのをひにはさ
んことつこれいしやくぢやうくわじやはなざらを入
にけり四番のをひのなかには五だいそんのれいざう
ふどうがうまのしよてん本尊のかずをつくしたり五
番のをひの中にはへんぢやうがんもんわうらいかな
まなの手本弘法の御自筆たうふうがふるひふでひほ

んのかずをつくしたり知もしらぬもをしなべてたつとしと申つゝ手をあはせぬはなかりけりをひに子さゐがあらばこそいざもどらんと申なをえの太郎が申けるは一切のわざがそつじにてはかなはぬぞ殘るをひをばたがためにをきたるぞたゞさがせと申げにげに是もいはれたりとて又つぎなるをひをとりてゆきなかをひらひてみてあれば判官殿の都よりもたさせたまひたるもえぎにほひの御はらまきこてこぐそくをとり出して是もやまぶしのだうぐ候かさればこそはうぐわんどのよところ〳〵に申判官聞召れてさて〳〵めん〳〵は當國しよ山寺の山伏たちを見ならつてはぐろの方の山伏の禮儀をばしろしめされぬかなふ抑はぐろざんと申はゑんのぎやうじやのこけのみちやま伏のひしよたりこゝにしゆとと名づけてわがまゝにふるぎふかたありやまぶしこれをそねみしんゐのいかりたへせずこれによつてぶぐきうせんをもたぬほつしが候はゞこそこのへんにもあはようりぐそくや候御ひけいあれ山伏のかつちうもつ事しよはうにかくれ候はゞこそせけんせばやめん〳〵浦の人々是を聞げに〳〵にこれもいはれたりとて又つぎなるをひをとりてゆきなかをひらいてみてあればあらいたはしや御前のみやこよりもたさせたまひたる五しやくのかつら七尺のかけ帶からのかゞみ十二のかけごいれたる手ばこなんどをとり出してこれは山ぶしの道具候かあらしゆせうとをこなひすまさせたまひたるやまぶしたちやさればこそ判官殿よところ〳〵に申よしつねちつともさわがせたまはずあふめん〳〵の御ふしんは道理まづかけをびかつらしやうぞくの由來はそれがしがおばごにてましますははぐろのごんげむの一のみこたるによつていまむかふ三十こうの御こしの御供のため都にてあつらへかひくだしたまふ扨かけご手箱のゆらいは越中の國みつはしをとをりし時みつはしどのゝひめ君ぎやへいをつよくいたはりぞんめい不定におはせしを此山伏の

なかにげんしやの上手あるにより七日とまりかなしたちまちげんにつけ申是によつてさいほうをほん尊の前にとりかくるおぼつかなくは使しやをたてみつはしへ問せたまふべしうらの人々これをきゝさやうに御のべあらんにはいづくにつめの候はゞこそ御身にてもましませ同行にても候へぜひ一人賜て鎌倉へぐそくし申さんところ〴〵に申判官ちからにをよばせたまはずこしなるかひをとりいだし二つ三つふきたもふかひのこゑだにしづまりければうへのやまにかくしをく人々にむさしばうべんけいひたちばうかひぜん龜井かたをか伊勢駿河この人々をさきとしてうちかたなまさかりめんめにもつてみだれ入て何とてわほつしはかひをば吹ぞそれやまぶしのかひふくはやくそくが有てふくものをさうなふかひをならす事ひが事なりと申つゝぎけいをなかにとりこめたりはうぐわん聞召れてなふしづまりたまへかた〴〵このうらのめん〳〵此ほつし一人とりこめて判官にな

れぎけいになれと仰あれどうちもしゆじやうもなきによりならじと申候へばたゞなれ〳〵とおほせ候程に餘りせんばうつきはてゝたゞいまのかひをふひて候御めんあれやとおほせけり辨慶がこれをきゝさてはきたいの事かなはぐろのかたのやまぶしによしなき事を云つけはうぐわんになれぎけいになれとはなに事ぞとてものことにてあるならばなをえ千間をわれらか住家となすべきなりこゝに立たる太夫殿見しらぬかほにはゐたれ共六ちやう船のせんどう七月の初あいたさかたこぎ出し八月のはじめ越前の國とかやつるがの津にきこえたるせいしがもとを宿として七里半あらちのなかやまかひ津のうらよりふねをたてゝ大津のほりおほちの藤太が本を宿として一年に一度づゝおりのぼりしたまふ六ちやう船のせんどうと見なした事はそら事かいまこそこめはみるともみやうねんのなつのころいづくにても參りあひあらくちおしや此わんれいを申さんとてから〳〵とわら

ひければ浦の人々これを聞はうぐわんどのでましまさばわれらがふねのつきどころやはかはしろしめさるべき事のこはらぬそのさきこちこよ浦の人々とひとり二人にげてゆくべんけいつゞいてをつかけてなことてめん／＼はをひをからげてかへさぬぞそれ山伏のかけをひわたくしならぬ事ぞとよみねの八たいこんがうどうじの乗うつりたまふなるかけをひをふちやうの身にてとりほどき候ひてたゞは置べきかをひからけて得させよとつゞいてをふていでければ手をあはせたちもどりけんきにとかく候はゞこそ何事もうちわすれて御めん候へ少人も御座あればてむまなんどの御用は御めにかゝるべしといふさしもがうなるうらの人御かいりきにおされて其後物を申さぬはことはりとこそ聞えけれ

判官武藏を召れくがをゆかば此さきにものうきことも有ぬべし便せんのたよりもあれかしと仰ければ辨慶承てそうじて我君のこゝにてはびんせんかしこにてはびんせんと便船ごのみをしたまふによつてかゝるむづかしき事の候ぞや四國西國のかつせんはみなふないくさにてあるあひだ船路の事をはよく心得て候ふねを一そうかひとりて我とこぎくだらんになにの子細の候べきはうぐわんげにもとおぼしめしなをえの太郎をめされこのへんにうりふねや候御ひけいあれなをえうけたまはりよそをひけい申迄も候はず小鷹はやぶさなみくゞりいしわり太郎よぶこどりと申てはやふねを七そうもつて候御ようにまかせてめさるべしと申義經聞召れてあらおびたゞしともたさせたまひたるふね共や候そのなかにとつてもこたかといへるふねはいか程もせよかしとて義經の祕藏におぼしめすしろさやまきの御こしのものをとり出させたまひてなをえの太郎にたぶなをえ御こしの物をたまはりふなぐそくひし／＼としつくろひふねをしうかべはやめされよと申十三人の人々はわれも／＼とめされけり

うかりけるなをえの津をことゆへなくこぎいだし順ぷうを得てほをあげゝりうんかいまん〱としてきはもなしくものなみかすみのけぶりわけがたしさうはなをみちとをしみぎはのうみはにしきに似かりほくてんにとびにけりいづれのせいけつかよしつねともろともにかへらんことをえんことはかんせうじやうのながめなりうらやましやなかりがねははつきにならばきこそせめ義經はいつのときにみやこへとてはかへるべしせめてたまつさ計をばことづてむとのたまひつゝ歌をよみ詩をつくりかぢをとりほをあげてなみぢはるかにふかれ行心ざしこそあはれなれかゝりけるところに佐度のくにほくさんのたけよりも黒雲一村立おほふ雨か風かあやしやとおはせられけるところに又越後の國ざわうだうのうへよりもらいでんくもをひゞかすあはけしきのかはるはやまかげかせのかくれじまいづくにかあるふねよせてこのなんをのがるべしといふいはせもはてずして大風こずゑをふきくだきなぎさにいさごをとばすればへいへいと立たるうんかいにゆきの山こそおほかりけれみつをてんにふきあげさかさまのあめとぞ成たりける上下ふねにゑひたまふそのなかにとつてもよしもりと辨慶二人ばかりこそおほはだぬきにはだぬいてともへに立てぞまはりけるいかにもして此ふねをいそへよすべからずあらいそにふねをよせ船そんじてはかなふまじかせにまかせてかぢをとれほこもが風にもまればほばたを切て風をとをせなをしも風がはげしくはおほつなこづなをきりおとしともづなにゆひつけひかすべしとりかぢより水いらばおもかぢへのりなをせ龜井かたをかはせんぢやうばかりのたしなみにてかゝるときには前後をふかくに見えたまふものかなふなそこへおり立てあかゆをなりとかへたまへたとへこのふねがきかいかうらいけいたんこくへおとさるゝと申共われ〱二人あらん程は何の子細の候べき我君と申はうぐわんきこしめされてあの

よしもりと申は伊勢の國のものにてわたりの船にのりならつて船路の事をば心得べきがふしぎやな武藏はぶんにも武にもたつしやなるがふなぢのみちをもこれほどに心得たるゝふしぎやとそゞろにはめさせたまひけりあらいたはしや御ぜんの御身もたゞもましまさぬにあらきなみこはき風によはりはてたけとひとしきおんぐしをなみとなみだにゆりながしむづかるこゝろもよはりはて今をかぎりと見えたまふ十一人の人々は此よしを見まいらせげに〳〵ふうふの中ほどにわりなき事はよもあらじいたはしや御ぜんのみやこに御座の御時は七重のひやうぶ八重のきちやう九重のまんのうちみすふきかへすかせをだにも人かといとひたまひしに今はいつしかかはりはてかゝる遠國はたうにて扨はてたまはんいたはしやとをにがみをあざむくともがらもふかくのなみだながしける今迄はありともおぼえぬふねどもが其かずあまたほの見えたりあれはたすけ船かうれしやとおほせられけるところにさはなくしてあかはたさしあげたるむしや共がいかほどもおほくわきいでたりふしぎにおぼしめすところにふねのうちにこゑありてむねもり父子これにあり東國の九郎くわんしやこひしやとよばゝり近付とみゆる能登守のりつねはせうせん一そうに梶取めしぐしちかづくと見ゆる二位殿とおぼしきにこうせんていをいだき申たゞいまかいていに身をしづめんとてよしつねの方をうらめしげにみてたゝせたまふべんけい是をみていんだうせばやと思ひふなそこへつつといりときんすゞかけうちかけふねのへいたにつつたちあがつて大おんあげてよばはるきのふはにしのかいうんにてたせいのなげきを得けふは又北國の江にしてがんせむなげきをなす事はゆめまぼろしのごとくなり有為の法はさながらいまふく風のごとしむさのくわんをなす事はいまたつなみのごとく也大小のきろんはかせによつてかたち有一つのかせがあればこそおほくのなみもかたちあれ

ふうはの二けんはまよひのまへのゆめなり一のうみくうかいにしてしやうとなしとさとるときはかぜもなみもあらばこそいたはしやへいけにはさるべきちしやのなければこそおほくのおんりやうをほとけとはなさずしてしうちやくのたうしやうにりんゑしたまふいたはしさよ只今申辨慶がいんだうにつき法心の一りをさとつてりんゑのきづなをはなれてめうかくむゐのくらゐにつかせたまへと申とき二位殿のこゑとしてむかしは一てんのこくむとしばんせうのせいしゆと有しかど今は又みもすそがはのながれ遠里はていに身をいれししうたんのていきうしつとのしうねんはいさごよりも猶おほしこれによつて六道おほくの里をめぐりさんづ八なんのきうこうをのがれがたく思ひしにたゞいま申べんけいがいんだうにつき法心の一りをさとつてりんゑのきづなをはなれてめうかくむゐのくらゐについたる事のうれしさよむかしはかたきいまはだうしとなりたまふいとま申て

さらばとてなみのそこにいりたまへば風もなみもしづまつてふねはこなみにゆりすゆる人々のうれしさたとへんかたもなかりけり

やしま

さるほどに判官山ぶしのすがたをまなびくだらせ給ひけるほどに七十五日と申にははるかをくにきこえたる佐藤志のぶにつき給ふ判官むさしをめされ日はやうこくを出ふさうをてらしやう〳〵にしの山のはにかゝるいづくへもたちこえ家のつくり志かるべからんずるところをみて宿とり給へ辨慶承て我おひにはわか君を入申たればいかゞは思ひけんかめいがをひにとりかへれんじやくつかんでかたにかけ爰にのぼればゆん手にあたつてまるやま一つそびへり彼まる山のふもとにむねかどたかき家あり此家に立こえ宿とらばやとおもひほりのふなばしうち渡りおひをばいくわによせかけうちの體をみたりければいにしへはよし有人のすみけるかすみあらしたるとおぼしくて門はあれども戸びらなしついぢあれどもおほひもなくかはらも軒もくちはてゝきうたひはかとをとぢむぐらはかべをあらそひてのきのひわだはこぼれをちちり〴〵水はもりゆけどもむすびてとむる人はなしさてでいをみてあれば一ちやうのことに一めんのびはをば立ならべてはおきけれども引人のあらざればつねに松風ふきをちてざらりんとひかんよりほかはびはこと志らぶる人はなし昔にかはらぬものとてはなでんのさくらほしのひかり月のひかりと日のひかり水のそこにてとしをふるかはづばかりぞねをばなくうちの體のいたはしさに宿とらふずる事をはつたとわすれときをうつして立たりしがにしおもてをながむればぢぶつだうとおぼしくてほうぎやうづくりの御だうありたちよりおがみ申にあみだの三ぞんと八丸をゑざうにうつしかけ堂のあたり四せつの志きをまなぶあれはてゝは在けれどもそのこゝろばかりはたがはず先ひがしは春にて大ゆふれいのむめの花むかしながらの山ざくらふし見さゑだの花まで

もきゃのこずゑにさきみだれひはこがらうぐひすののきはの梅にはをやすめねをだしかねたる所にはフシけい〳〵ほろ丶のきじのこゑけいならばけいとはなくしてなんぞや後のほろ丶のこゑいつも春かとみえにけり南は夏ににてすはまに池をほらせたりいけのその中にほうらいほうぢやうゑいじうとて三つの島をぞつかせたる島よりろく地へはそりはしをかけさせはしの下にはうら島太郎がつりぶねとうなんくわぢよかうつをぶねを五しきの絲にてつながせじやうらくがじやうのかぜふかばみぎはへよれとつなひだるはいつも夏かとみえにけりにしは秋ににて四方のこずゑのいろづきしらぎくたえぬふぜひきたはふゆかとうちみえさんがくはが丶とそびへたりばいたんのおきなはをのがころもはうすけれどふゆをまつこそやさしけれ冬にもなればすみをやくすみがまのけぶりのあをふてほそくたちのぼるはいつもふゆかとみえにけりコトハあらおもしろやと打ながめ山

ぶしのこゑたて丶やどとるほうのあらさればこしに付たるほらのかいのおをときのべてむさしやどとりのかいをしばらくふけど人をともせずいや〳〵これは人はなきやらんとおもひたちがへらんとせしところにかぜもふかぬにつま戸がきり〳〵となるふしぎやと思ひそなたをきつとみてあれば六十にあまり七十におよびたるにこうのくちばのこそでかみにかけすいしやうのじゆずをつまぐりくちにぶつごをとなへ十三人の山ぶしたちをつく〴〵と御覧じてなにとものをはおほせもなくて我子の事を思ひ出してさきだつものはなみだなりうけたまはれば御大將判官このくにへ御下向のよしを申がわが子のつぎのぶた丶のぶが西國がたにてうたれずし御とも申てくだるならばはにふのこやにたちよりやどとり立たるらんも是にはいかでまさるべきと思ひまはせば小ぐるまのやるかたなきはこ丶ろかないにしへの山ぶしたちはよくつれたもふときは五人六人こそ御とをりありし

にこのたびは上下十三人御ざある中に少人も一人ましますや法は萬ぼうぎやうは萬行とてよろづのぎやうのその中に山ぶしのぎやうほどにものうきことはよもあらじあれほどいつくしき花のやうなる少人を馬にものせ申くだれかしさらずばわかき山ぶしたちのかたにものせてくだらずしじやけんのまなこをふませ申事のいたはしさよせう人のちゝはゝのふるさとにまし〳〵てさこそなげかせ給ふらめみづからが明くれと子どもが事をおもふにぞいとゞ思ひのかはらじとなみだにくれてたち給ふにこう涙をとゞめこれはらうたいが住あらしにて候日のくれさせたまはぬさきに他しよにて御やどをめされさふらへ御やどはかなひさふらふまじべんけい聞ていや〳〵このところにて宿とりそんじ野じゆく取てかなはじと思ひすゞかけのゑもゆひきつくろひあらうたてのにこうのおほせや一とをり一村雨のあまやどりも百しやう（賛長房ノ假借）のきゑんとうけたまはる飛鳥坊ていれいはつるの羽

がいにやどをかるだるまそんじやはあしのはにめすちやうはくばうがいにしへはうき木に宿をとるとこそ承りをよびて候へわれらばかりと思ひなばとてもねられぬ月の夜に野にふすとてもちからなし御らんせられ候へ十羅せつによの御あとをつがせ給ふべき少人をたゞ一人ぐし申でいまでがいやならばのきのゑたの御はうしの有べきなりとかりにけりにこうきこしめしてげに〳〵もつとも御道理このところにてみづから御やどを參らせずばたれやのものが心有て參らすべきこなたへ御出候へとて十三人の山伏達を中のでいへしやうぜらるゝをの〳〵うつらせ給ひれいじせんぼうたつたうあそばすせんぼうも過ぬればへいじ一ぐてう花がたにくちつゝませねうばう達にいだかせにこう出あはせ給ひ人のおやのこを思ふみちほどにあはれなる事よもあらじかれらがゆくゑのきかまほしさに自身立いで給ひ行衞もゑらぬ山伏たちにそゞろに酒をぞゑあられける酒もなかばとみえ

し時にこうむさしがたもとをひかへひる御宿をめさ
れしとき都の人と仰さふらひしほどにそなたの方よ
りふきくる風もなつかしくさふらふもし御大將判官
の行衞をばし志ろし召れてさふらふか志ろしめされ
てさふらはゞゆめばかりかたつて御とをり候へ辨慶
聞てさてはわが君の御下向がをん國ゑんりにかくれ
もなくてぐぢ（本ノマヽ）あまを出しとはするぞと心得にこうを
はつたとにらんであらおかしのにこうの仰やそれ山
伏の名はよのつねおほしと申せ共御大將判官坊とい
ふ山ぶしの名は今こそ聞て候へさりながらきやくそ
うは五人は五ヶ國十人は十國のものしつつる方もや
候らんよの方へ御尋候へ此ほつしにをひてはいざ志
らぬさうとあひさうなげにこたふるにこうきこしめ
されてげに〳〵もつとも御道理人のゆくゑを問申と
てわがせんぞをば申さずし御かたりあれと申ほどに
御かたりなきはことはりさふらふいで〳〵みづから
がせんぞを語てきかせ申さん是は兩國のひでひらが

いもうと出羽の志やうじがごけ次信たゝのぶ兄弟が
我ははゝにてさふらふぞや一とせ御大將判官この國
へ御下向有て佐藤ひでひらをもよほし十萬餘騎にち
やくたうつけ御上洛の御時きみはあのむかひにみえ
たるまるやまのふもとに御ぢんをめすつまの庄司ざ
つしやうかまへて參るつぎのぶたゞのぶ兄弟のもの
きみの御ともと申佐藤殿聞召やあいかにこれより西
國への御ともは國をへだてせきをこえはる〳〵の道
ぞわれ又らうたいにて子共のすがたを二度あひみん
事かたしあに御とも申さばおとゝは國にとゞまれ弟
御とも申さばあにはくにゝとゞまつて老體のちゝは
はがならふずるやうをみはてよあにが申けるやうは
御ぢやうもつともにて候にたゞのぶは國にとゞまり
父母をなぐさめ申せなにがし御共と申又おとゝが申
けるはおとなしやかにつぎのぶはとゞまりちゝはゝ
をなぐさめ御申あれなにがし御ともと申これがたと
へかや諸佛念衆生しゆじやう不念佛父母常念子々不

念父母ととかれたりもろ〳〵の佛は衆生を思ひ給へ共しゆじやう佛を思ひ申さずたかきもいやしきもおやは子をおもへど子は親をさらにおもはずわかき者共にて候程にみやこをみんずるがうれしきと申たちよ刀よ馬ものゝぐと用ひず佐藤殿御らんじてちからをよばせ給はず白川二所の關まできみの御とも申こまをかしこにのりはなつて子共をかんじよへちかづけやあいかにきやうだいよ是より西國のかつせんはおくのいくさにゝべからずけしやういくさにてあるあひだかくるはやすけれども引が大事に有ときくかけうずるときも兄弟つれてかけ又ひかうずるときもきやうだいつれてひけまばらがけするなじやうをおとさばかさへまはれかさに付ておとすならばはるかのなぎさにくだつて小河についておとせ小河なかれば大河に出よ大河に付ておとすならばやあかならずさとに出べしむらがらす立ならば手をひ死人のありと知てねんぶつ申とをれおきにかもめをとづればかたきのふねと思へ西國がたにて兄をうたせ國もと候ちゝがみたう候はゝがみたいなんどゝてあにがかたみをとりもつてたゞのぶ國へ下てらうしたわれをうらむるな弟をうたせつゝつぎのぶ國へ下るなよかくはいひてあれど花のやうなる兄弟を玄ねとはさらにおもはぬぞたゞし弓とりは名こそをしう候へ人は一代名はまつだいなについたらんそのきずはまつだいまでもよもうせじとても御とも申ならば命をまたふ高名をきはめとのばらもなをあげ庄司が家の名をもあげてたべとかやうにおゝせられ君に御いとま申宿所にかへらせ給ひかれらがこひしきおり〳〵は此ものどもがうへをきしはなぞのやまにたち入つねはなぐさみ給ひしが明れはつぎのぶこひしや暮はたゞのぶこひしや戀し〳〵との給ひしこひかせやつもるらんさてぢやうごうやきたりけん一日二日とすぎのまどかぎりのゆかにふし給ふみづからあまりのかなしさにいまだ庄司ぞんじやうにありしときききやうだい

のもの共に毛ぎれのしたるよろひきせみやこへのぼせたりつるがこゝろにかゝり思ふなり鎧をどしたてよろこばせんと思ふとて兄のつぎのぶは小櫻をこのめばこざくらおどしにけつかうすさてをと〳〵のただのぶは卯の花をこのめばうの花をどしにけつかうしいまやおそしとかのもの共まつしるしこそなかりけれあらいたはしや庄司殿今をかぎりとみえ給ふみづからかなしさに二りやうのものゝぐとり出し二人のよめにきせ申中門にたゝせつぎのぶまいりて候ぞ忠のぶまいりて候ぞなふちゝごぜと申時今をかぎりの庄司どのかつばとおきさせたまひて二人のよめのすがたをつく〴〵と御らんじてそのいにしへのおもかけの有とのみばかりにていまの心はなぐさみぬ三月のなごりにはこざくらばかりやのこるらん四月のなごりには卯のはなばかりのこりけりそれ天ぢくのならひにこひしき人のおもかげをみんと思ふ時にはせいせき山にあがりいはのかどをたゝひてゐきろの

すゝをふるとかや大國のならひにははんごんかうをたくとかやさて我朝のならひには夢にならではみえばこそこれはうつゝにおもかげをみつるうれしさよこひしのつぎのぶやあらこひしのたゝのぶとこれをさいごのことばにてあしたの露ときえさせ給ふ庄司にはなれて三とせになり子共にわかれ七ねんなふきやくそうとの給ひてたもとをかほにをしあてゝはらはらとなかせたまひけり

判官御ざをたゝせ給ひ辨慶を召れ今迄はいかやうのものぞと思ひてあればさてはなにがしか命にかはりてありしつぎのぶ忠のぶきやうだいがはゝにて有ける事よかれら二人に一人めしつれ下りたる身にてもあらず何のいみじさにいにしへのよしつねとは名乘べきぞむさし心得てかれらがさいごをよそながらみたるていにかたりにこうがこゝろをなぐさめてたべ辨慶承て御ぢやうのごとくふびんに候かたり出してなぐさめうずるにて候とてもとの座敷になをり思ひ

よらぬ物がたりを二つ三つかたりざしきのけうをもよほし只今思ひ出したるふぜいにてよこ手をちやうとあはせそのつぎのぶ忠信とやらんのさいご所をこそ此法師がみて候ひしが御のぞみにて候はゞ語てきかせ申さんといふにこう聞召れてあらうれしやさふらふかれらがゆく衞をきかんには十物十百物百をなりともつむべけれ共折ふしもちあはせさふらふとてまきぎぬ三十疋むさしが前につませらるゝさて又かれらがためにとておどし立たるものゝぐをとり出しなふこれ〳〵御覧さふらへやかれらがこひしき折々はこのものゝぐをとりいだし人にもきせかけてもをき是をみてこそなぐさみしにきやくそうたちにまいらせてあすよりのこひしさを何にたよりてなぐさまんさりとては力なしかれらが行衞をきかんにはあすの事をも思はずいで〳〵さらば參らせんと二りやうのもの〻ぐのわだかみとつて引立て武藏殿がまへにをく次信たゞのぶのわすれがたみつまのゆく衞をきかんとてしや金百兩みつなりのたち花がたにつませつゝ四間のでいへいだき出てむさし殿がまへにをきかみからしもにいたるまで物がたりきかんずとて三戸をひそめてをともせず西塔のむさし八島のいそのかつせんをもとよりしたる事なればはじめよりをはりまで事こまかにぞかたりける年號はげんりやく元年ころは三月下じゆん四國さぬきの八しまのいそをとをりしとき源平のかつせんまつさい中とみゆるその時山ぶし六人さふらひしが二人はみんといふ三人はとをらんと云中にもこのほつし人はなにともおもはゞ思へかやうのことをみをきてこそ熊野にまかり歸て人にもかたらばやとももひおひをおろし小松のえだにかけをきはるかのなぎさに下て源平のかつせんを玄づ〳〵とみたりければさるのなかばの事なるにおきの御ざぶねより六ひろばかりの小船一そうさざめかひておさするをみれば人三人のつたりけり一人はかんどり一人はわつは今一人は大將大將とおぼ

しきひとのはだには何をかめされけん大くちのそばたか〳〵とおつ取て卯の花をどしのよろひをめしなしうちゑぼしをつこふで白あやたゝんではちまきにむずとゑめようだうづくりの五人ばりまん中にぎりよこたへ手矢ばかりおつ取て惣門のなぎさへ舟をさざめかいておさすくがちかく成しかばふなばりにつつ立あがつて大音あげてぞ名のられたる只今こゝもとにすゝみ出たる兵をいかなるものと思ふらん一ぽん式部卿かづらはらの親王に九代のこうゐんかどわきの二なん能登の守のりつねそう門のなぎさへ度々におひてかよふといへどいまだ東國の大將にげんざんせず東國の大將に見參とぞなのられける源平なりをゑづめみやうじなのりをたしかにきく又げんじの陣よりも大將とおぼしき人のすゝんで出させ給ふはだには何をかめされけんあかぢのにしきのひたゝれひおどしのよろひをなじ毛のそで五枚かぶとにくわがたうつてたつがしらすへたるをゐくびにめされこ

んねんだうのこしのもの二尺七寸のこがねづくりの御はかせあしをながにむすんでさげ二十四さいたるきりうの矢はずだかに取てつけ三人ばりの眞中にぎりたけ七きばかりにてまつくろなる馬に金ふくりんのくらをかせ御身かろげにめされたつしがみかたのなかをゑづ〳〵とあゆませ出あひちかく成しかばあぶみふんばりくらかさにつつたちあがつて大音あげてぞなのられける只今こゝもとにすゝみ出たるつはものをいかなるものと思ふらん事もおろかやせいわてんわうに十代源九郎よしつねそうもんのなぎさへ度々にをひてむかふといへどいまだ能登殿とやらんにげんざんみせず能登殿ならば花めづらしう見參とぞなのられけるのと殿此よし聞召れて大將の御めにかゝりたるゑるしなくて候べきか小兵にては候へどもなかざし一すじ奉んにいづくとや〳〵ほを承て仕らんと有し時げんじの御大將のがれがたくやおもひけんこしよりもくれないに日を出したるあふぎぬきい

だしはらりとひらきむないたをほと〳〵と音づれ矢ごろはまつほどござうぞこゝの程をあそばせとぞおゝせけるすでに御命あやうくみえさせ給ふ處に又げんじのぢんよりもふしなはめのよろひきあし毛の馬にのつたるむしや一騎かけ出きみの矢おもてにかけふさがつて大音上て名乘やう只今ぢんとうにすゝみ出たるつはものをいかなるものと思ふらん奥州の住人に佐藤の庄司が二人の子あにのつぎのぶ也のと殿の大矢をまつたゞ中にうけとめて志んでゐんまの帳にてうつたへにせんとよばはつたりのと殿此よしきこし召あつがうなるつはものかな一騎當千とはかゝるものをいふらん心ざしのさぶらひをのりつねがてにかけいをとしてあればとてまけうず軍にかつべきにてもあらず又たすけてあればとてかたうず軍にまくべきにもあらばこそ心ざしのさぶらひをたすけてことの給ひてはめたるやをゆるされたりいしかつゝる處にわつぱの菊王丸がさゝへ申けるやうはなふ御

諚にては候へども次のぶたゞのぶはがうの者にて候ぞやそれをいかにと申に一の谷の落あし八島のおちあしにもこゝにては次信かしこにては忠信と名乘てせんてい女院の御ざぶねをもおそれずさび矢をいかけしらうぜき人にて候ぞや其上ぐん陣にてかたき一騎うたるればみかた千ぎのつよりみかた一きうたるればかたき千騎のつよりと承て候ぞや其上彼者共は異國のはんくわい張良をもあざむく程の人でさういくさ神の御たむけにはや一矢さうとさゝへたり能登殿此よし聞召いしうも申たる菊王丸かな其ぎにて有ならばなかざし一筋とらせんと十五束三かけつるぎのやうにみがいたるを五人ばりにからりとつがひもとはずうらはず一つになれときり〳〵と引しぼりまちをこぶしに引かけゐいやつとかつてうつたるはだうづきなんどのごとく也一陣にすゝんだる扨も次信がむないたにはつしとあたゝちけぶりがばつと立をし付へくつとぬけにけりむざんや次信さいごはよか

りけりたうのやをいんずとて弓とやを打つがつて打上てひかんあふはなさんと二三度四五どしけれ共せい兵の大矢にきものたばねはとをされつ何かはもつてこらふべき弓と矢をばかゝりと捨弓手のあぶみけはなつてめてへかつぱと落にけり今思ひあはすれば御身の御しそくかいたはしさよとかたりけり二人のよめ三人のまごにこうもろ共に一度にわつとさけびければぎけいをはじめ奉り十三人の人々も八島のいそのかつせんを只今みる心地してすゞかけのたもとをしぼられけりにこうなみだをとゞめつぎのぶは其手にてはかなく成てさふらふか弟の忠信はさてなにとなりてさふらふぞ判官きこしめされて猶もすゑをかたつてきかせよとおぼしめしむさしが方を御らんずれば辨慶やがて心得あらむざんや次信其後とをあさの事なるにかぶとの左のひのおがきれてたぶさはなみにゆられぬかゝりけるところに能登殿のわつぱ菊王丸なにさまつぎのぶがくび取てげんざんに參らんと舟より下へとんでをるゝたゞのぶ此よしみるよりもあにのくび平家がたへわたしては弓やのちじよくぞと思ひ四人ばりに十四そく取てからと打つがひよつ引てひようといたあらむざんや菊王丸がいさみにいさんでをり立たるひざの口にしたゝかにたつ大事の手なればうけもあへずいぬゐにだうどふすたゞのぶ此よしみるよりもわつぱがくび取てあにのきやうやうにほうぜんとこまをかしこにのりはなつてうちものぬいてさしかざしもみにもふてぞよつたりける能登殿此よし御覧じて一時なりともそれがしがうちにあらんわつぱがくびげんしがたへわたしては弓矢のちじよくとおぼし召舟よりもとんでをり菊王が上おびをかひつかんで舟のうちへゑいやつといふてなげられけりあらむざんや菊王丸この手にてかんびやうするならばしぬまじかりつるものなれども大ぢからにふねのせがいにしたゝかになげつけられてからべみぢんにくだけてつゐにはかなくなつたりけり

事かりそめとはおもひけれどもげんじにさふらいうたるれば平家にも郎等しんだりけり能登の守のりつね此よしを御覧じてすきまかぞへのたゞのぶにたゞなかとをされ候ひてはあしかりなんとおぼしめしおきへ舟をおさせらるゝかどわきのへいざいしやう能登の守のり經こそくがのいくさにしまけてあれのりつねうたするなようつゞけつはものと仰けりうけたまはると申てつくし大名に大ともしよきやうきくちはらだまつらとうこれとうこれずみへづきやまずみ此人々をさきとして七百餘騎にはすぎさりけりふねーめんにをしならべむまどもをば海上におひひてふなばらにひつつけ〳〵さゞめかひておよがせらるゝくがちかく成しかばこまを引よせ〳〵ひた〳〵とうち乘て一まいはぎのわたりだてを馬のかしらにつきかざし七百餘騎がむれたか松へ一度にさつとかけあげたり源氏二百餘騎おもてのひろきぢやうだて一ゐんにつかせやぶすまつくつてさし取引つめさん〳〵に射たりけり平家のぐんぴやう共は一さゝへもさゝへずしなぎさへさつと引たりけり惡七兵衛これをみてにくしきたなしかへせもどせとおめきさけんでかけにけりげんじ二百よき矢だねつくればうち物のさやをはづしわつといふてかけ合平家のをはるゝ時も有源氏のおはるゝ時も有おふつまくつつかけつもどいつさるのなかばよりとりのをはり迄はかけあひの合戰に源氏平家つかれつゝあひ引にさつと引たりけりさいたうのむさしばうか此よしをみるよりも是非それがし一合戰仕りげんざんに參らんとこのむ所のなぎなたみづぐるまにまはひてさいたうの辨慶がただ今かくるなり平家がたのぐんぴやうどもにくしきたなしかへせもどせと大ごゑをあげてぞかけにける平けのくむ兵どもは辨慶がかゝるをみて中をあけてとをしけり本より辨慶かたきにあふてはやき事ゑんこうが木するゑをつたひあらたかゞとやをくゞつてきじにあふがごとく也大こくのしうちくわいはかんこ

くのせきをやぶつててきにあふがごとくなりもとよりむさしうでのちからはおぼへたり長刀のかねはよしなぎなたをとりのべてむかふもの丶まつかうにぐるもの丶をしつけほろつけたかごしだうなかくさずりのあまりをあたるをさいはひにはらめかいてぞきつたりける手もとにすゝむつはものを三十六騎はらはらときりふせ大勢に手をおふせ東西へばつとをつちらしなぎなたかたにうちかたげあふみかたの陣へ引たりける武藏坊がありさまはたゞはんくわいもかくやらんへいけのぐんひやう共舟よりもあかりしときは七百餘騎とみえしかども二百騎ばかりにうちなされおきへまばらにさつとひくげんし二百餘騎も八本ノマヽ十三騎にうちなされうりうむざんにあがりをの〳〵ぢんどり玄づまりければいぬゐのこくにぞなりにける判官むさしをめされ奥州の忠信はいづくにあるぞぐして參れ辨慶承て御前を罷立此へんに奥州の佐藤殿やましますつぎのぶいづくに有ぞ大將のめしのあるにとつく御參りあれとたからかによばはるあらむざんやたゞのぶひるしやきやうつぎのぶ手をひぬるとみるからに合戰こゝろにそまずとあるやまのはにそなたばかりをみをくり心ぼそげにて立たりしが大將のめしと承てむさしとつれて君の御前にかしこまるはうぐはん御らんじていかにたゞのぶあにつぎのぶが行衞は玄らぬか忠信承てさん候兄にて候ものひる手をひぬると見候いしか共かけあひのかつせんに隙なくしてその行衞をもぞんせすと申あふそれはさそ有らん今しやうにもあらばとふべき玄さい有又玄してもあるならばきやうやうよきにすべしはやとくとくとの御ぢやうなり忠信承てあら有がたの御諚や候御意くだらずともたづねたく思ひしにまして御ぢやうのうへおつとこたへて御前を立ゝのとに玄のぶの十郎みつとををともとしてはるかのなぎさにくだりけり比は三月廿日あまりの事なれば月は出ずしてみちみえずなみだぞ道の玄るべなる太刀をつえにつ

きはるかのなぎさにくだりつゝ晝のいくさばは此へんぞと思ひてむれたかまつの西東すさきのだうの北南なきさにそふて尋けり此へんに奥州の佐藤どのやおはします次信やましますと玄づかによふでぞとをりける軍みだれの事なれば手をひ死人のふしたるはさんをみだしたごとく也手をひ共のにようごゑみゝにふれてあはれなりのりこえ〳〵尋るにいとゞあはれぞまさりけるむれ高松の事なればすさきによするなみのをとはまちどりのともよぶ聲われを問かとおぼしく心ぼそさはまさりけりあらむざんや次信は大事の手をひて有けるがおと〳〵の忠信にさいごのなごりやをしかりけん玄にもやらずしてあげふねのあたりに下人の男にかんびようせられてゐたりしが忠信がこゑときゝいそうつ波ともろともにたそよとこそこたへけれ忠信あまりのうれしさにする〳〵とはしりより御手は大事にましますか心は何と御入候ぞつぎのぶ聞て我身の事をばなにともいはずし玄ばらく有ていきをつきみかたはいか程にうちなされて有ぞ大將は御手もをひ給はぬかさておことは手をばおはぬかたゞのぶ承てさん候みかたはわづか八十三騎にうちなされ候ひぬ大將御手もをひ給はずなにがしも手もおはず御心やすくおぼしめせつぎのぶ聞てあらうれしいものかなその義にて有ならばいまだ今生にいきのかよふ時大將の御めにかゝりたひぞぐして參れたゞ信あまりのうれしさにすさきのだうよりもやり戸をいそぎとりよせつぎのぶをかきのせまいらせてさきをたゞのぶかきければあとを玄のふぞかきにけるなみだぞみちの玄るべなり

武藏殿ひたちどの龜井かたをか駿河殿弓取と申はけふは人のうへあすのわがみのうへぞかしいざや佐藤をみつがんとはるかのなぎさにをりくだり次信をかいしやくしてむれ高松にあがりければひがしの山のはに月ほの〴〵と出にけりはやかいて參たるよしを申判官聞召れてちかふかけ承と申て御ざまぢかくか

きよせければ忝もはうぐはん御ざをよせさせ給ひつぎのぶがかうべを御ひざのうへにかきのせ給ひ手は大事なるか心は何と有ぞ思ひをく事あらば只今申せ明日にも成ならば奥州へ人をくだすべしいかに〳〵と仰けれども御返事をば申さずうちうなづいたるばかりにてたうのうちにてよう聲ありわだちゝぶさうにしてあらむざんや次信さこそ心がうなるむしやと申ながらさいごちかづきぬればちからなしふびんなる次第かなとておの〳〵涙をながされけりあとにてかいしやく仕るおとゝのたゞのぶ手をひにちからをつけばやと思ひあららかなるこゑをあげあらゆいにかひなのつぎのぶのふせいや候たとへ事にては候は（本ノマヽ）ね共かまくらのごん五郎かげ正はくりや川の城にてとりのうみの彌三郎にゆんでのまなこをいさせその（つニアラズ）矢をぬかでおりかけ三日みやもつてまはりたうの矢をいをふせてこそ今かまくらの御りやうのみやといははれ給ふと承れそれ程にこそおはせず共か程のほ

そや一すじにさやうにやみ〳〵とよはりたまふがかたじけなくもまくらもとは三代さうおんの主君弓手はちゝぶの志げたゞめではわだのよしもりなりあとにてかやうに申はおとゝの忠信にて候ぞや何事をも御前へ申させ給へとてさしもにがうなる忠信も今のわかれのかなしさに二手のくさりをぬらしけりつぎのぶ聞てなにと申ぞたゞのぶ權五郎かげまさはくりや川のじやうにてとりのうみの彌三郎に弓手のまなこをいさせたうの矢をいをふせけるよなそれは少事の手なればこそ三日はもつてまはりつらめかげまさにつきのぶがをとるべきにてあらねども能登殿の大矢は大國までもかくれなきにたゞ中をとをされ次信にてあればこそ今迄もながらへ御前でものを申せるい何事も〳〵みないつはりとなるぞとよ國へかたみをくだすべしはゞのまもりをば老してましますちゝはゝの二人に一人ながらへてもましまさばゆきみのまどのをれ竹の世はさかさまの事なれどかたみにこ

れを參らせんびんのかみをばわか共が母にとらすべしむちとゆがけをば二人のわかにとらすべし太刀をば玄のぶにとらするぞよろひは毛ぎれしたり共わどのとつてきてつぎのぶにそふたと思ふべしかまいてたゞのぶよ次信うきよに有やうに心づかひを仕てはうばいにくまれ申な御いとま申て我君いとま申てはうばいたちあらなごりをしのたゞのぶよかうしやうにねんぶつ十ぺんばかりとなへしがかすかなるこゑをあげむさしどのはいづくにぞを〳〵のたゞのぶにめがけてたべといひすてゝをしかるべしをしむべしあしたのつゆときえにけり上下ばんみんをしなべてあはれとはぬ人ぞなき判官ふびんに思召たゞ今もきやうやうすべけれどもひる平家まけいくさにて有あいだもし夜うちにやあるらんとようがいかまへようじん隙もましまさず明ければ四ど（志度ノ借字カ）の道場のひじりをしやうじきやうやうねんごろに玄給ふあらむざんやつぎのぶ度々所望せし事をかなへぬ事のむざんさよ所望といつぱ別の義にても候はずあれに候太夫ぐろか事一とせよしつね奥州へくだり佐藤ひでひらをもよほし十萬餘騎にちやくたうつけ上洛の時秀平入道大黑小ぐろとて二疋の馬をひさうしてもつ小黑といつしはあの馬よりもたけばつくんにのぼつて候ひつれ共心をくれたるによつてこぐろと名付大ぐろとはあの馬の事秀ひら申せしはそれ弓取の戰ぢやうにのぞんで高名をきはむる事馬ものゝぐに玄くはなし是にめされて御代をひらかせ給へとてものゝぐ一りやうをしそへてゑさす何がしが手にわたりのり心よし足のはやき事とぶ鳥なんどのごとく也がくの名によそへてせいがひはと名付かまくら殿のいけづきするすみかばどのゝとらつき毛何がしがせいがひはとてわてうにうへこす馬はなしげんりやく元年正月廿日にうぢ川を渡ゝ同き二月七日に一の谷てつかいがみねをおとし平家のくびおほく取て大路をわたし院の御めにかゝり太夫の判官になされ申其時馬も

源氏に吉事の馬なればとて黍もりんげんにて太夫黑にふするされはゑんぎのみかどの御ときは白さぎをいだきとつて五位になされしためしこそ候へ馬の太夫づかさはためしまれなりとて太夫ぐろにぞふせられける東寺四塚の邊にてあらむざんや次信何がしがあたりへ駒かつし〳〵とあゆませあつぱれ御馬候や奥にてみ申せしよりはたけばつくんにのぼつて候あはれ此馬を給れかし君のまつさきがけ討じに仕らんずるいのちは露ちり程もをしからじと度々所望せしか共其比つぎのぶにおとらぬちうのぶしおほし自餘のうらみをきじと思ひ今までとらせぬ事のむざんさよさいごなれば忠信引たふこそ思ふらんよし〳〵おりいで〳〵義經も太夫黑引て命のをんをほうせんと黍も手をたゆふ黑がみづつきにかけさせ給ひ次信がゑがいのまはりをかなたこなたへ引まはしその〻ち忠信給りげにやつぎのぶ此世にてほし〻〳〵と思ひしねんやつうじけん馬はきたのものなればほくふうにいばひて玄らあはかふてつゐにむなしく成にけり以下のもの是をみて正しく次信給りてめいどまでのるよとはいはぬものこそなかりけれつたへきく大國の大そうくわうていはひげを切てはいにやきこうしんにあたへたびにききずをいやし血を玄めしせんしをなでしかば命はぎによつてかろし命は恩のためにつかはずいかにも其身のころさる〻事をいたむまじほんてうのぎけいは忠有さぶらいに太夫ぐろをひかれけりこれをみる人々いよ〳〵いさみ有べしとかんせぬ人はなかりけりあくる日の合戰にげんじ七騎にうちなされ四どの浦とかやまつがはなといふ所に陣取てましますす熊野の別當たんぞう一千餘騎のせいにてみかたに參らる〻源氏の御せい一千餘騎に成給ひをごる平家を事ゆへなくたひらげ三しゆの玄んぎこともへなく都にかへし給ひけるおとうとの忠のぶ吉野山まで御供すよしの山にて大しゆたちの心がはり

の有しときその時たゞのぶ判官つかさときせながを申給り一人みねにとゞまり判官殿と名乗て吉野法師を待うけさん〴〵に合戰しそこにてもうたれずみやこへのぼつて腹切てむなしくなるその人〴〵の事ならば今生のたいめむは思ひもよらぬ事也念佛し給へとてむさし殿がおひより次信の形み忠信の形みを取出し候ひてにこうに是を奉るにこう形みを取上かほにあてむねにあてりうていこがれかなしむ何にたとへん方もなし判官御覽じ心づくしにいつまでつゝむべきと思召れける間是こそいにしへの源九郎義經と御名乘有ければにこう承子共が事は扨置ぬ三代さうをんの君をおがみ申こそなげきの中よろこびと悅ぶことはかぎりなし是に玄ばらくとゞめ(借字)申てひらいづみへ使を立にけり秀平悅ふでちやくし西きど二男やす平を先として三千よきのせいにて御むかいにまいりひらいづみへ入申衣川たかだちと申所に玄んざうに御所を立やなぎの御所と申てあいたさかたつがるがつふそとの浦ひわうばん(本ノマヽ)をかまへいつきかしづき申かの秀平が心中をばきせん上下をしなべかんせぬ人はなかりけり

きよしげ

判官武藏をめされいかにむさし聞かとよ諸國の大名高家たちもよしつねに心ざしのせつなき人も有らん急ぎ廻文をまはし賴てみんとの御ぢやうなりべんけい承て狀を書て參らせければ判官御判をすへさせ給ひ扨此狀をたれやのものにかふれさすべきたれ〳〵と申とも伊勢の三郎よしもり駿河の次郎清重かれら二人ぞ候らんいそぎめせとて御まへにめされいかにかた〴〵此じやうを諸國のぶしにみせてたべ萬事たのむとの御諚なり二人の人々承て世間のやうをあんずるに合戰はひさしく候まじおなじく候はゞとゞまつて御供せんと申はうぐわんきこしめされていくさのともをせん事も此くわいぶんをまはさむももつてはひとしかるべしたゞたのむとの御ぢやうなり

二人の人々承てこのうへはちからをよばずとてやまぶしのすがたにさまをかへをいに御はんをかくしもちたかだちどのを出にけりかりそめながらわかれとは後にぞ思ひしられたるかくて二人の人々はおくちかき國々下野上野安房かづさひたち下總かひ信濃武藏の國へうちこえちゝぶどのを初七たうの人々に御はんおがませ申本田のしゆくへぞ出にけるよしもりがいふやうはこれより中道越よりも駿河の國へ出んといふ清重聞て日本の花のみやこは日のもとの大しやうたゞし當時は猶かまくらかはなやかなる新京たりと聞てあり四十にをよぶきよしげがきこふる名所を見ざらんはふかくのいたりとぞんずるなり此つゐでに鎌倉をひとめみばやと申けりよしもりがこれをきゝかほどの大事をもちながら遊山見物むやくなりもしも此事めでたふておゝかまくらの御わひようあらば見あかうずる鎌倉をしかるべくは駿河殿すぐに伊豆へと申けりきよしげ聞て腹をたてかゝらんようのためにこそさまをかへたるいろ見ゆれ諸國一見や

まぶしのいかほどおほくとをらんなかにするがばかりがあやしめられんはきよしげ計が運さうか御身は一とせかまくら　おりのぼりをゑげくしてみゑれる人もありこそするらんいづくとあひづをさし給へやがてをつつき申さんといるまのしゆくをのぼりに鎌倉さしてゆくほどにちからをよばずよしもりも同道申たけれ共おほせのごとくそれがしは大略人が見ゑりたり駿河のくに成たけのゑたにて待申さんとくをつつかせ給へとよしもりは伊豆の國駿河次郎はかまくらへゆきわかるゝをさいごとはのちにぞおもひゑられたる

さるあひだきよしげはふたまた河をわたりつるがをかくも井のみねをはる〴〵とうちながめけはひざかにあがりかまくらうちを見わたせばこゝろことばもをよばれずあらおもしろのかまくらや神宮寺のまつかせはりよじんの夢やさますらんぶつかくむねをならべつゝたみの在家はのきつゞきやつ七がうについぢのかず以上八百餘もんなりゆいのはまに大とりゐいづみがやつにいひしまは名にしおほたる名所かなしやうぐんの御所をまんなかにひがしむきにぞ立られける諸大名のざい鎌くら日夜朝暮のはん(本ノマヽ)すかふゆゆしかりける御くわほうかなあはれわばきみ判官をかやうにいつき申さでとおもへばたけき清重もなみだこぼるゝばかりなりその夜は若宮殿に參籠申夜もすがらげんせあんをん後生ぜんしよときせいしさこそよしもりがたけのゑたの宿にてまつらんものをとおもひあけゝればをひ取てかたにかけいそげばほどなく音にきくたかせ川にぞつきにけるかゝりける處に梶原の源太かげすゑはやきとりがりして歸りしが河中にてむずとゆきあふたり日比みゝえし事ぞかしあやしめられあしかりなんとぞんずれば笠をかたぶけ清重はさらぬ體にてとをりけりうんのきはめのかなしさはならひの風が一もみはつともふて來てきよしげがきたりけるかさをずんと吹切てときんとつ

れてかはにおち浮つしづむつながれたり清重これをみてさかやき人にみしられてあしかりなむとぞんずればすゞかけのさうのそでをさつとかざひて笠ををふてぞはしりける弓づえ二つえ三つえにてほどなくをつき候ひてぬれたるかさをうち着つゝさらぬ體にてとをりけり

源太目ばやき男にてこゝをとをる山伏の河風にかさをとられしがひたいを見たればさかやきのしろく見えつるあやしさよ山伏ならばとをすべしやうあらばめしとれとてかけ足はやき駒共にめん／＼にむちをもみそへ／＼いかにこゝもとをとをり給ふ山伏にもの申さんといふまゝに我も／＼とをつかくる清重これをみて一あしなりとも弓取のかたきにうしろを見する事ふかくの至とぞんずれ共きみの御はんどくにぐにの人々のおうけの判共のあらはれむずるかなしさにみゝにもさらにきゝ入ず五町ばかりゆきすぎこだかきところにはしりあがつてをひをひつたとおろしをひのかたはこよりも火うちつけだけとりいだしちやう／＼とうちつけ御はんとおうけのはんどもをせつなにやひてすてたりしはがう成ゆへのはやわざかなとほめぬ人こそなかりけれ

そののち大ぜいとりこむればをひのあしにゆひつけたる三じやく八寸のいかものづくりするりとぬいてまつかうにさしかざし大をんあげてなのるやういかにかた／＼が見とがめたるはだうりなりはうぐわんどのゝ御うちのさぶらひ駿河次郎清重と申者にて候がきみの御意にちがひ申おくをばいだされまいらせて二ちやうのゆみをひかじため山伏のすがたにさまをかへ諸國一見まはりしがうんがつきて源太にみあひぬればちからなしいまにおひてそれがし判官殿の御內にあるなしなんどのちんばうをすべき身にても有ばこそ四國九國のたゝかひにも駿河次郎がふるまいをみても聞てもありつらんそこをひくなといふままに大ぜいのなかへわつて入するが次郎がありさま

をものによく〳〵たとふればまつふくかぜにかれ葉をちらし小鳥千ばに鷹一もとはなちあはせたごとくなりいまだときもうつさぬまにくつきやうのつはものを二十七騎きりふせ大勢に手をおふせ東西へはつとをつちらしがうなるもの丶自がいのやうを見ならへ源太といふまゝにたちの眞中をつ取てはら十文字にかき切て三十八と申にはかたせ河にて討れたる彼駿河次郎きよしげをほめぬ人こそなかりけれ

さるあひだ源太は郎等あまたうたせけれ共きよしげが首をとりなゝめならずによろこふでいそぎ頼朝の御めにかくる頼朝御覧じてぎけいがらうどうのくびならばゆいのはまにかけよとてはまのかうにぞかけられけるさるあひだよしもりは竹の下のしゆくにてやくそくの日かずをいかにまてどもをそかりけりあまりひさしくぞんずれば海道にたちいでみちゆき人にも問ばやと思ひはやかいだうにぞいでにけるかゝりけるところに二人つれたるたび人のきやうのかたへとをりしがよしもりをみるよりもやまぶしを見申せばおとゝひの事のあはれさよ人間有爲のならひとは申せどもきうせんにかゝる事なげきのなかのなげきぞとかたりすてゝぞとをりけるよしもりがこれをきゝやうありげなとおもひていそぎをつきたび人のたもとを取てひつとゞめなふいかやうなる山伏がなにと成て候ぞわれらがやうなるものならばきかまほしやと申けりたび人聞ていふやうはさむ候おとゝひの事なるにかまくらをいでゝこなたなるかたせがはといふところにて判官殿の御内のさぶらひ駿河次郎清しげと申人にて候が梶原の源太景末(季ノ借字)に見あひぬればちからなしをひふみやぶりかたばこよりも火打つけだけ取出しちやう〳〵と打つけ御判とおぼしきまきものをせつなにやひて捨給ひ其後大勢とりこむればをひのあしにゆひ付たる三尺八寸のいかもの作りするりとぬきまつかうにさしかざし大せいのなかへわつて入そこばく人をほろぼし我身もはらをきり

給ふくびをばとつて鎌倉へのぼせられて候ぞ山ぶしとてぞとをりける
よしもりがこれをきゝさばかりそれがしがとゞめつるをもちゐず扨はうたれてありけるぞやかくと申てそれがしが奥へまかりくだるならばいかばかり判官も御こゝろぼそくおぼすらんとてものがれぬあさがほの日かげをいとふふせいにて奥州くだりもよしなやとて明ればやどにていとまごひ竹の下をぞ出にけり其よりもよしもりは都まぢかき大名小名に御判おがませ申すぐに京へぞのぼりけるたそがれときの事なるに備中殿のかゝりのまへを笠をかたぶけよしもりはさらぬていにてとをりけり番のつはもの是をみて夜ゐんにとをるやまぶしはやう有て覺ゆるなりかさをぬがれ候へとて一度にはらりとおり立たりよしもりこのよしみるよりもそれやまぶしのならひにてみね渡りをする時はこの葉をしき木の根を枕とつかまつりよるをもひるをもきらはぬきやう出羽のはぐろのやまぶしがくま野へ參るとこたへたり番のつはもの是を聞何の山ぶしのぎやうにてもあらばあれかさをぬがれ候へとてよしもりがきたりける乞らうちての笠をひきおとしてみてあればあんの內のよしもりなり
ばんのつはものこれをみて一度にどつとわらひてだうりにて御身はよるはとをり給ふぞとまんなかにとりこむるよしもり此よしみるよりもをひやくひまのあらざればはら〳〵とふみやぶつてをひのあしにゆひつけたる一尺八寸のうちがたなするりとぬいてまつかうにさしかざし大おんあげて名乘やういかにたゞ〳〵が見とがめたるは道理也判官殿の御內のさぶらひいせの三郎よしもりなりたゞし當家のばんののあはぬかたきとぞむずれどもゆみとりの乞にどころをばさだめえずそこをひくなといふまゝに大勢のなかへわつていりにしひがしきたみなみくもでかぐなは十文字やつはながたといふものにわりたてをん

まはしてさん〴〵に切たりけり手もとにすゝむつは
ものを十七八騎きりふせ大勢に手をおふせ東西へは
つとをつちらしかたなのまんなかをつとつてはら十
文字にかききつて四十三にてうたれたるよしもりが
心中を貴賤上下をしなべかんせぬ人ぞなかりける

たかだち

さるほどにかまくら殿かぢはらをめされいかにかぢはらうけたまほれまことにぎけいがむほんにおゐてうたがふところなしいそぎよしつねをたいぢしよをおさめんとの御ぢやうにてながさきの四郎に三百よきをくだしたぶ長なき三百よきを給はりいそぎおくにもつきしかばさいそくまはしせいぞろへやすひらがたちによりきしてるいの太郎をふでとりにてちやくたうをつくるまづそうりやうなればやすひらつぎにしきど四郎もとよしひづめの五郎たまつくりのまくらどの御きやうだいそのほかの人々にけつその彌七きはらのげんごくも井の小太郎あつせのぎやうぶ中じまようとうじまつしまたまつくりをしまのひやうとうをさきとしてみやうじのさふらひ七百よきそのほかつがうつはもの七千三百よきとはやちやくたうをつくるそも/\ころはいつなるらんぶんち五ねんうるう四月二十七日こんにつはひがらよからずみやうにちのたつの刻にむかふべしとさだめ大田やま口なかむらにすでにぢんとつてひかへたりさてもたかだちの御しよにはかたきむかふよしをきこしめしさぶらびたちをめさるゝによひまではさふらひ八人大將ともに九人ときこゑしがつぐ日の御かせんに侍九人大將ともに十人のゆらいをくはしくたづぬるにきしうくまのゝぢう人すゞきの三郎玄げいへなりあるよすゞきにようばうにかたりけるはなにがしおもふ事ありて此あかつきあうしうへまかりくだり候べしこゝろのまゝにまかりくだりきみのめでたふましまさばみやうねんのなつのころたよりのふみをまいらせんなつのころしもすぎゆかばうきよはふぢやうのならひみちのくさばのつゆしもときゑぬるよとおぼしめしあとをばたのみたてまつるいとま申てさらばとてぢたいがすゞきとのくまのそだちの人なれば

山ぶしの姿にさまをかへをいとつてかたにかけもの
うきたゞのつゑをつきそのふし〴〵によをこめてふ
ぢしろをたちいでゝはやこゝのへにつきにけり人め
しのぶのたびなればいつしか花のみやこをばかすみ
とともにたちいでゝ大津のうらより舟にのりかひづ
のうらにあがりつゝほつこくみちのうきなんじよを
くだらせ給ひけるほどに人のやどをかさゞればやぶ
れたゞうてらいはのほらかみすみあらすやしろをば
やどなきまゝのやどとして七十五日と申にはあうし
うころも川たかだちの御しよにつきにけりすゞきな
にとかおもひけんをひすゞかげをばかたはらにとり
かへしをひのなかよりもうちかけとりいだしきるま
まに十二ふかけたるあみがさをぶか〳〵とひつこう
でたかだちどのゝていをこゝろしづかに見たてまつ
るにきしうふぢしろにてうけたまはりをよびしとき
は日ばんたうばんそせうにんさながら御うちにみち
みちてもんぐわいにこまのたてどもなきやうにうけ
たまはりをよびしがこれはなにとてさびしく御ざあ
るやらんふしぎさよとおもひもんのからゐしきにこ
しをかけ御うちのていをきゝゐたり
さてもたかだちの御しよにはかたきむかふよしをき
こしめしさぶらひたちをめさるゝにいつもかはらぬ
むさしばうをさきとしてい上八人きみの御まへにか
しこまるはうぐわん御らんじていかにかた〴〵がて
にかけくびとつてくわんとうへまいらせくんこうの
しやうにあづからばはうこうのちうにはごせをとへ
いかに〳〵とおほせけれども御へんじを申ものはな
しかたをかかめ井の六郎がめとめときつと見あはせ
てこはくちおしき御ぢやうかなたれあつてわがきみ
の御くびをたまはつてかまくらへかうさんをば申べ
き今までおちぬ人々はみな御ともとこそおぼすらん
さはありながら此なかにもおちんと思ふ人のあらば
ひらにいとまを申ておちよたれもうらみはのこるま
じとざしきをきつと見わたせばよしたけひろつな一

どうにすゝしく申されたるものやたれもかやうに申たき御へんじにて候ぞやおもふにかたきあかつきよすべしをふてからめてと二てにわけぬ事あらじみかたはたとひぶせいなりともりやうぢんにむらがつていくさははなをちらすべしまだほのくらきさうてうにあれはをふてこれはからめてなんどとてこゑをばきくともすがたはみじわれも人もこゝろしづかにあるときにかみへ申て御しゆ給はりさいごのなごりをおしむべしもつとも然るべしとてしゆ〴〵の太へいおほづゝを御でゐへ申いだしつゝきみも御いでましましてにようばうたちの御しやくにてかみにさかづきすはりければ下はい上八人三ごんのさけすぐればのちにはたがひに入みだれておもひざしおもひどりじしやくじもりのらくあそびまふつうたふつ吞ほどにかめ井がのうだるさかづきをむさしどのにおもひざしたつてまひをぞまひにける

ほうらいさんにはちとせふるまつのゑだにつるすくういはほのかたにかめあそぶしほりみつがしらかものいれくびゑぎのはがへしをさつとたちまはるところにてもんぐわいを見てあればたちわきばさんだ男のあみがさまぶかにひつこうだるがからゐしきにこしをかけかめ井がまひをきゝゐたり

かめ井の六郎もあれはたれなるらんとおもひしがげにとおもひよりなければまひすでにまひおさめしやくにてかけてゐたりしが門なるおとこのこゑとして大のこはねをさしあげてなふ〳〵御うちへあんない申候はんとたからかによばはるなりをしづめてざしきにはたれなるらんときく處にさいたうのむさしこのこゑをきゝつけてあれはかたきのやつばらがあんないけんみのそのためにいつはりまなんできたつてさうなにさまてうのつかひをばあますまじといふままにはかまのそばをたかくとつてなぎなたをつとりいでんとすかめ井の六郎もつゝいてざしきをつつと立むさしがそでをひつとゞめなふしづまり給へむさ

しどのふしぎやこのこゑをきいたるやうにおもふとてむさしをとゞめてかめ井はしりいで丶見てあればしやきやうすゞきのさぶらふどのたびやつれにおもやせて一人こ丶にたちたまふかめ井ゆめともわきまへずする〳〵とはしりよりすゞきがたもとにとりつけばあにもをと丶にとりつきてさていかに〳〵とばかりなりはるかにありてすゞきどのやあなに事かあるかめ井かめ井此よしうけたまはりその事にて候ぞやきみの御うんもわれらがうんもいま此ときにつきはて丶あすをかぎりとはやなりぬそれをいかにと申にひでひらうきよにありしほどはきみをもたつとみ申せしがうゐむじやうのならひとてひでひらこぞの冬はかなくなりて候ぞやそのこともわがきみにこ丶ろがはりをつかまつりかまくらよりのけんみにはながさきの四郎どのを申くだし給はりてさてくにの大しやうにてるゐだてがむかひつ丶おほた山ぐち中むらにぢんとつてあると聞てさうなどやかほどに御みのおぼしめしたつならば二ねんも三ねんもさきに御くだりまし〳〵て一たんらくをゑ給ひておもひでとおぼしめすべきになんぞつめたる御うんかはこんにち下りたまふこそよろこびのなかのなげきなれこんじやうにてみ丶ゑ申こそなによりもつてうれしう候へうきよのまうしうはれてあり上にもゑろしめさるまじとがめあやしむものあらじをちこち人のふぜいにて御かへりあれやすゞきどのすゞき此よしうちきいてふかくなりかめ井れうもんげんしやうの土にほねはうつめどもなをばうづむがふかくさよゑていしうぢうふしふうふ三世のきゑんなくしては何しに今日まいるべきぞすゞきがまいりて候とかみへ申せかめ井とてわらんづぬぎすてうへにきたるうちかけぬいでふはとすておとゞひつれてはうぐわんの御まへをさしてぞまいりける

はうぐわん御らんじてめづらしやすゞきどのじやくあくによわうありいんぐわれきせんだうりにより へ

いけにきせしそのつみをいまよしつねがみにかぞへてきてあすをかぎりとはやなりぬされはすゑのつゆもとのゑづくとなるふぜいいしやうたもんのかたきにうけかくなりぬるとおもひなばうらみもさらに殘るまじこれにある人々もかたきゆるすならばおとしたくはおもへどもゆるさねばちからなしわぎみは人も見らるまじとがめあやしむものあらじをちこち人のふぜいにてはや〳〵くまのへかへられ候へ見しものとおもひなばごせをばとふてたべすゞきありてもこのいくさにかつべきにてもあらばこそとうしてかへり候へすゞきうけたまはつてこはくちおしき御ぢやうかなきみにをかせるとがなくしてうたれさせ給はんずるせんごをいかゞおはすらん何ぞやそもすゞきめが月日こそおほきに今日まいりあふ事は三世のきゑんくちせぬゆへいくささんじてまかりくだりさもあれきみの御さいごどころはいづくにてかあるらんとおもひやり申たるばかりにてもんのから井しきにこしをかけたゞ一人すご〳〵とはらきらんずる事どもはなんぼうむねんに候べき御ぐそく一りやうたまはつてうちじにをせんと申きつておちんずるきしよくはなしはうぐわん御らんじてこのうへはちからをよばずいで〳〵更ばすゞきどのにぐそくを一りやうとらせんとてじやうもんじうつたるからうとのふたをあけ小ざくらおどしのよろひをとりいださせ給ひて此よろひと申はおぐりのさとうせんもんが子共のまうけのためにぐそくを二りやうおどしたつあにつぎのぶは小ざくらしやていたゞのぶはうのはなおどしにけつかうしあひまつるところにかれら二人はうたれぬめんぼくなけれどよしつねさとうがたちへうちこゑこどもがさいごを語てきかすはゝのにこうはなげかずしかゝるいへのめんぼくさふらふ御とも申ていでしよりかへらん事はふぢやうぞとおもひまうけてさふらへどもさはいひながらきやつばらが御とも申てくだるならばとらせんずるそのためにぐそ

くを二兩おどしたつるこれ〳〵御らんさふらへやまちてかひなき此かたみを見つる事のはかなさよたれによろひをまいらせんわがきみにまいらせん小ざくらおどしをよしつねにうのはなおどしをむさしどのにゐさせたるぐそくなりひとつはかれらがかたみといひ又はさねよきぐそくなりゐせんの事のあるならばよしつねちやくせんそのためにこれまでもたせてはんべれども御へんにこれをとらするとておなじけの三まいかぶとにうちものそへすゞきがまへにとうと置て旅やつれにさここそあるらんはやそこたまはれすゞきどのすゞきめんぼくほどこして御代が御よの御時に千ぢやうまんぢやうたまはつたるより今このよろひに亠かじとてかはらけとりあげ三ばいくんだるすゞきどのがしよぞんをばほめぬ人こそなかりけれさいたうのむさしちつとも亠ほれぬまなことよりなみだをはら〳〵とながしいこくは亠らずほんてうにをひてをやわがきみの御うちの人のやうにそろふた

る事あるまじそれをいかにと申にひとゝせつぎのぶたゞのぶが討じにいせとするがゞきやうかまくらにての亠にざまいま又すゞきどのが御ぐそく一りやう給はつて千ぢやうまんぢやうの御おんにかへじとよろこふづる事のゆゝしさよかほどまでよきらうどうをもちたまふわがきみの御くわほうのほどのうたてさはせめて大こく四五ヶこく御ちぎやうなきこそくちおしけれおくがたのぐんびやうがなん千ぎにてよせきたると申ともくじむしやのかりびやうおもふにさこそあらんずらん今は此よもふけゆくらんにのめやうたへやもつともとてまふつうたふつさか盛するすでにそのよもやはんばかりの事なるにすゞきの三郎亠げいへはゐたるところをづんとたつて中もんのらうにいで弟かめ井をちかづけいかにかめ井こんど亠げいへきしうふぢ代を出しときせんぞぢうだいにつたはるはらまき一りやうきてくだるみなはうばいたちもきこしめせ此はらまきと申はかたじけなくも

くまのゝごんげんのいにしへまかだこくのあるじと
しぶわうが中のぶわうにて天かをおさめたまへばか
いだいことに玄づかなり玄かれどもかのみかどに御
よをつがせ給ふべきわうじのたんじやうあるべきと
きさきのかずをそろふるにすでに千人いはひ申てう
あひにおぼしめされたるきさきにわうじの御さなけ
ればましてやうときかたさまにいかでかさらにおは
すべきされどもする玄のきさきに御すいでんと申こそ
くわいにんとおはしませ御かどゑいらんなゝめにて
今ははやよのきさき御きしよくさらによからず五す
いでんにたちそひてすでに一のきさきとし大りへう
つし申さんとせんぎありしおりふし數百人のきさき
たちこれをねたみそねみつゝみかど御座なきおりふ
しにものゝふをかたらひて五すいでんにみだれいり
きさきをがいしたてまつり玄んざんふかくすてにけ
りされどいかなるふしぎにや玄がいもやぶれ損せず
やかんのものもあぶさずしまんずる月にたんじやう
ある玄かもたいしとおはします人すむ山にてあらざ
ればえんりんさらにたちよらずこらうやかんはたち
よれどもじきしぶくすこともなくしゆごをくわへ申
せしにいたはしや太しはゝの玄がいのにうみをぶ
くしたまへばたちまちに玄きとなりやかんのものを
ともとしてとし月をふるほどにあまのいはとのあけ
くれとはや七とせになりたまふ天下にはなげきにて
をんごくゑんりはたうまでたづねたまへどましまさ
ず世をうき事におぼしめしすでにはや位をすべりた
まふおりふしたつとき人のまし／＼てきよしよをた
づぬるおりふしに太しを見つけたてまつつて大りへ
かへつてそうもん申玄んかけいしやうふしぎのおも
ひをなしつゝ山中にいたつてくはしく見たてまつれ
ばかたちは五すいでんにしてそのおもかげもかはら
ず太し御とし七さい人を見なれたまはねば玄んらあ
たりへたちよるをおぢをのゝかせ給ふをちけん上人
はしりより太しをいだきとり五すいでんの玄がいを

ばさんちうにべうをつきこめたてまつつてそのゝにち
太しを（チ脱スルカ）ばうんしやうへうつしたてまつる御かどゑい
らんまし〳〵て太しをいだきとりたまひちけんひじ
りをちかづけてくわしくとはせたまへばひじりもい
かでぞんぢせんさんちうにいたつてじゆけ石上を心
がけきよしよをたづねるおりふしに太しを見つけた
てまつつてそうもん申て候とありのまゝに申みかど
ゑいらんありあふにごれるよにうまれてかいをたも
つごういんにかゝるつみをつくる事はまるがとがに
てあらずやかゝるものうきくにはありてしき（なきチ脱）事と（スルカ）
てばんりのひしやとなづけてこくうをかけるくるま
に今のたいしもろともにすでにせうじたまひけり第
一のしんかにのうみの大じんしげたかおくみの中じ
やうかねみづかれら二人をともとしてくるまのしぢ
にせうじてひがしをさしてとびたまふわがてうきの
くにむろのこほりをとなしさとにしては又ゆやごん
げんとあらはれてしゆじやうをさいどしたまへり五

すいでんのわうじはにやくわうじにておはしますの
うみの大じんはこもりのみやとげんせらるゝおくみ
の中じやうはひぎやうやしやこれなりその御あとを
したい申ちけん上人とびきたつてひじりのみやとげ
んせらるゝそのほかのかみたちはしだい〳〵にきて
うしてしよしやみやうじん五だいわうじくはんじや
う十五しやこんがうやしやしよしやとげんじたまふ
もみな此ときの人々ぞしかるにかめ井よくきけしげ
たかよりしげいへまで十六代とおぼえたりしげたか
のいにしへまかだこくよりわがてうへとばせ給ひし
おりふしみかどひやうじのそのために此はらまきを
めされてとびきたりたまふなり代々ちやくしにつた
はるいへのたからを今鈴きまでさうでんすぢうだい
なればみをはなさず此たびもきてくだつておくがた
のやつばらにとられてつゐにたもんのたからとなさ
んおしさよそれとてもちからなししげいへはゐんば
くにきみのきせながたまはりぬ此たびのつかれに二

りやうかさねん事かたし御へんにこれをとらするとてからにしきおどしこがねざねの腹まきをぬいでかめ非にとらせけりかめ非はらまきひつたてこれみ給へ人々六みやうぎやうのそのなかに人のくわほうはぎによつてしなんにむまれてもそうりやうをつぐべしととかれたるはこれなるべしこのときいへのぢうだいをかめ非の六郎ゆづりしてちすぢのやさきにあたる共むないたにうけとめてしなんず事のうれしやとおどりあがつてよろこふだるあつぱれぶしのてほんやとほめぬ人こそなかりけれ

すでにそのよもあけがたになりければむさしばうべんけいは四まどころへつつといりいつもこのむかちんのひたゝれにみづにをしのはいだてし三びきりやうのゆごてさしいまだよろいはきざりけり二尺ばかりなるうちがたなを十文じにさすまゝになしうちしぼしをづこうでしらあやたゝんではちまきにむずとしめ人々御めん候へとて四間のでゐより中もんのらうにいでからうとにこしをかけてひがしむきにぞゐたりけるすゞきの三郎しげいへもぎよれうしまずりのひたゝれきみよりくだし給はつたる小ざくらおどしのよろひをき同じけの三まいかぶとのををしめ三尺八寸のいかものづくりのたちはひて三十六さいたる大中ぐろのそやおふて三人ばりのまんなかにぎりこれも四まのでいよりちうもんのらうにいでからうとにこしをかけてひがしむきにぞゐたりけるわしのおかたをかくまい太郎源八びやうしひろつなびせんのへい四郎けゞのよろひかぶとのををしめたちはきやおひてみなながらからうとにこしをかけめと〳〵きつと見あわせたる此人〳〵のありさまははんくわいちやうりやうあんろくさんもおもてをそばめつゝはぢぬべしその中にとつてもかめ非の六郎重きよはひときはすぐれていでたつたりはだに取てはからくれなゐひつちがへびせいがうのはつたるによせかけめゆいのひたゝれのくゝりをゆつてしめたりけりや

うばいたうりのさうのこてびやくだんみがきのすねあてくまのかはのもみたびしろかねにてへりがねわたしあくち高にふんふん（ふん重複カ）ごうだり衣しにぼたんのはいだてしからにしきおどしこがねざねのはらまきざつくとゆりかけいとひおどしのよろひ二りやうかさねはらりときおどりあがつてたかひぼかけゆつてうわおびちやうと玄め九寸五分のよろひどをしをめてのわきにさいたりけり一尺八寸のうちがたな十もんじにさすまゝに三尺八寸候ひしあをひづくりのたちはひて四十二さいたるたかうすべうをはずだかにとつてつけおなじけの五まいかぶとにくわがたうつていくびにきしらあやのほろをさつとかけぬりこめのゆみの四人ばりせめのせきづるかけさせまん中にぎりよこたへ四間のでゐより中もんへゆるぎいでたるその有さまものによく〳〵たとふればめいぼくたいしはくたわう我てうにてはまさかどすみともよしの山にてなをあげしあうしうのたゞのぶもたゞこれほどこそありつらめきりやうによせていでたつたりやところゑをそろへてほめたりけりすでにそのよもあけければおくがたのぐんびやうもうつたつよしこそきこえけれ先をふてへはときのじつけん人ながさき殿を大將にて三千八百よきころも川ひがしのもんへをしよするからめてはだてとりのうみ三千五百よきにしの小もんへをしよする御しよのてはをふてはすゞききやうだいかねふさたゞ三きにてかためぬからめてはわしのおかたをかくまゐ太郎源八びやうへひろつなびせんの平四郎以上五きにてひかへたりべんけいはうきむしやにてをふてのやぐらにはしりあがつていくさのげちをぞ玄たりけるかめ井の六郎も同じくやぐらにあがりかぶとをぬいでどうとをきゆみとりなをしつるくいしめしすびきしてこそゐたりけれあにのすゞきが見あげてきつと見てや御へんはやぐらにあがりたるかかめ井がきいてさん候此じやうはひらじやうにて候へどもひさしくこしらへたるじや

うにてほりひろくしてそこふかしいかにかたきがつめかけてうめ草をこむと申とも三重のほりをばたゞ一ときにはよもうめさうじしげいへしげ清きやうだいとなのつておくがたのぐんびやうにてなみを見せてくれさうずすゞききいてあふよくいふたりかめ井たゞししげいへはながたびにはらまきにかたひかせやつぼやづかもおぼしねどもさらば射て見んかめ井とておなじくやぐらにあがるかくてよせての人々はをふてからめてもみあはせときをどつとあぐる六しうしんどうかくやらん天地ひゞいておびたゞしゝじやうには以上九人の人々いくさのほうとてやさしくもときをおつとぞあはせけるものによく〳〵たとふればいかづちわたるはるの野にふるすをいづるうぐひすのはつねをつぐるごとくなりときのこゑしづまりければてるいの太郎たかなう一ぢんにこまかけいだし大おんあげてなのるいかに御ぢんへ申たき事の候きのふまでははうぐわん殿をしゆくんとあふぎ申といへどもかまくらどのゝ御ゐにそむきおはしますさるによつてながさき殿御ぎよしよたいし御下こうのそのうへあめが下にありながらいはい申にをよばざるによつてぎけいの御しがいましまさばかいしやく申せとの御つかひにたかなう參て候と申させ給へ人々とてゆんづえにすがつてひかへたりむさしばうべんけいはやぐらのあゆみのいたをこぼれよととう〳〵どふみならしなにかういふはてるゐめかれつのうつたるかぶとをきようぎこつがらゆゝしくてよきむまに乘たればひでひらがこどものなかにはたれなるらんとおもひしに又らうどうのてるゐめがこのもんぐわいまでまいりきたつてむまのうへにてのなのりやうらうぜきなり其ぢんをやひいてのけとぞ申ける

てるゐの大郎がこれをきゝかくのたまふは武藏どのかことめづらしきざうごんかなきみをふかくたつとめばしんをうやまふだうりありかまくらどのゝ御ぎ

ようしよたいしけふの大しやう給はつてまかりむかつたたかなうにてわ人ともをはしんじつのもの丶かずとはおもはぬなりむようのくわうげん申さんよりもさぶらひは渡ものぞかぶとをぬいでゆづるをはづしいのちをつげとぞ申けるむさしばうべんけいはことばなくしてたつたりけりかゝ井の六郎がむさしがあたりへたちよつてなふ〳〵むさし殿えんめいをもたつとまずぶめいにもをそれずほうにまかせてふるまい候ばうじやくぶじんのやつめにはなにをおほせ候ともたゞけんをけうすにゝたるべしむようのろんをとめたまへきみこそ御はらめさるゝともわれらがかくて候はゞいくさははなをちらすべしかう申つはものをいかなるものとおもふらんゆやごんげんの一のえんかにのうみの大じんえげたかよりも十六だいのこうゐんすゞきのしやうじが二なんかめいの六郎えげきよなりとしつもつて二十六てるゐどのにや一すぢたてまつらんやうけて見よといひもあへず四人はりに十四そくとつてからとうちつがいもとはずうらはすひとつになれときり〳〵とひきえぼりまちをこぶしにひつかけゑいやつとかつてうつたるはどうづきなんどのごとくなり一ぢんにすゝんだるてるゐがしやていにたか野の四郎がこまひつそばめてひかへたるよろひのそでの三のいためてのはいだておぐりのいたきものたばねをするりとをしあひびき懸てうらをかきくつとぬけてあまるやがうらにひかへたるてるゐがむまのふとはらにはぶくらせめてづつぱとたつたかのはいたでなりければうけもあへずめてがへしにしころをつゐてどうどおつればてるゐがむまはいたでおひびやうぶがへしにひつたとかへしかたひざ折てふしければてるゐはむまよりおりたつたじやうにはむさしすゞきをさきとして射たりや射たりとゆりあげ〳〵わらひけりよせてはいられてをともせずいこくのきんくわがゆみのいもたゞこれほどこぞありつらめとよせてもえたをまひたりけりあ

にすゞきが弟かめ井がすがたを見あげてきつと見てあ射たりやかめ井この五ろくねんはなれ御へんのかほどにおひたつてあるやらんとこゝろもとなくおもひきのくによりはる〴〵くだつて見てあればようぎこつがらよりすぐれたるながやづかのおほゆみはよにもふしぎにおもひしにをしでかつてのさだまつて射たりやかめ井どのたゞいまのそのきしよくをきのくにゝとゞめをく一ぞくどもにみせばやなきみも御いであつて御けんぶつあれかしなしげいへもや一すぢいて見せもうさんといふまゝにじゆうさんぞく三がけのなかざしぬいてあぶらひきやさまひろ〳〵とひかせいかにやおくがたのぐんびやう今のかめ井があにすゞきのしやうじとはわがことなり四こく九こくの御かせんに御とももうしどどのかうみやうなをあらはし御よしづまつてきしうふぢしろはほんりやうなればあんどをたまはりしよりやうにくだりぎけいのみやこ下ちやくをばしらで

御とももうさぬなりさはありながらこの五ろくねんきしうふぢしろにありとはいへときみのおんことかめ井がゆくゑ一かたならぬによりさうてきうしふぢしろをいでいそぐとすれどかち路にて日かずつもつてきのふまで七十五日にてゆふべつき今日の御かつせんにあふたるはなんぼうくわほうのものぞいまのかめ井がやほどこそなくともうけてみよとぞいふたりけりよせてのぐんびやうはたてのはをつきかざしすゞきがいるやをまちかけたりすゞきこのよし見るよりもじゆうさんぞく三がけさんにんばりにからりとつがひもとはずうらはず一つになれときり〳〵とひきしぼりかなぐりばなしにかつきとはなす一ぢんにすゝんだるてるゐがいとこにまるたの藤じがたかのがたうのや一すぢとすゝみかけたるむないたにたつよりはやくくつとぬけうらにひかへたるむぎのゝ四郎がくびのほねにびつしとたつ二きのむしやがためずしてゆんでめてへどう〳〵とおちにけり

つゞくぐんびやうこれを見て此ものどものやさきにはくろがねのたてをつゐたりともかなふつべしともおぼゑずやこのぢんひけやといふまゝにむら／＼ばつとひいたりけりすゞき兄だいやぐらよりくだりこぶしにけよきむしやをかひえり／＼さしとりひきつめさん／＼に射たりけりやだねつくればやぐらをゆらりととんでおりこまひきよせてうちのり衣川のなかのせをみづにかもめが一むすびなみまをつたふふぜいにてあぶみのはなにてなみをたゝかせざゝめかひてわたしけりおくがたのぐんびやうこのよしをみるよりもすゞききやうだいてどりにせよたちもかたなもいるべきかとておりかさなつてひしめいたりすずききやうだい此よしをみるよりもたまになれたるほうらいのとりのふぜいもかくやらんおどろくけしきはなかりけり大ぜいのなかへわつていりにしからひがしきたからみなみくもでかくなわ十もんじやつはながたといふ物にわりたてをんまはしてさん／＼にきつたりけりすゞきの三郎しげいへ十三ぎきつておとせば弟とのかめ井がてにかけて二十七きなぎふするげにはかたきもこらへばこそかせにこのはのちるやうにむら／＼ばつとひいたりけりこの人々はてもおはずしかわゑづ／＼とわたしもどしいきほいかかつてひかへたるはいこくのはんくわいちやうりやうもかくやとおもひしられたりむさしばうべんけいはやぐらのうへにてつく／＼と見てあらおもしろとすゞききやうだいが合戰したるやうやさすがにあのかた／＼は天かの御よういくしよのいくさをしならふたる人々にてかたきのいろをさとつてかけひいつる心ねのおもしろさよしばらく人々やぐらにあがつて御まち候へべんけいもでたつてこんといふまゝに四間どころへつつといりうの花おどしのよろひきさきのなしうちゑぼしにて今度はゑらゑのなぎなたをうちかたげをふてのやぐらにはしりあがつてひがしむきにぞたつたりけりそも／＼ころはいつなるらん

ぶんぢ五ねんうるふ四月の二十八日のいまだみのこくばかりなるにてりにてつたるあさ日にものゝぐのかなものはおりからいろやまさるらんひらいたあふぎはくれなゐにて日にさしむかつてたつたりけるむさしばうがありさまはたうはつびしやもんゑてんわうのあれたるけしきもかくやらんいかにやおくがたのぐんびやうなりをしづめてことの心をたしかにきけそれ人げんのいのちはでんくわうてうろうつもうたるゝもゆめのたはぶれきのふまではかたをならべひざをくみし人々のけふかたきとなる事もいんぐわれきせんの道りによつて世をも人をもうらむまじさりながらなんぢらがをんごくにすんでいりとりがうだうをしさかひのはうじをろんじ二十き三十騎こゝかしこにひきわけ〳〵そらゐんじしてつぶて打たらんにはにまじいぞこんにちむさしがするいくさこそてほんよ見ならへべんけいがなぎなたにてきりのこされたらんともがらは見しものとおもひなばごせをばとふてたべべんけいが末代のものがたりにまひを一てまはふぞやはやいてたべや人々すゞききやうだいもかねてよういやしたりけんやぐらよりもつゞみを取いだしたゝきあげてぞはやしけるぢたいむさしはさんとにてもらんぶゑんねんの上手まひをばひとてならふたりてうしをうかがつてたつたりしがかすみにかすんでおほきなるこゑをはつたとあげて一せいをこそとつたりけれうれしやとう〳〵どなるはたきの水日はてるともいつもたへせじおもしろやいかだをくだすはおほ井川はなをながすはよしの河もみぢをくだすはたつた川みやこあたりに名河はさまさまおほけれどをんごくながらめいしよかなきりやまたかねの殘のゆききえたにのつらゝもとけぬれば衣川のみかさまさつておくがたのぐんびやうをべん慶がなぎなたにてみなとをさしてきりながす切ながすともみゑぼしといふきよくを一ひようしはらりとふんでひらいたあふぎをやぐらよりころもがはへさつ

となげいれあふぎのおつるよりはやくやぐらをとんでおりたりけりさんのめだちのしらあしげ七き八ぶんあけ六さいに引よせゆらりとのつたりけりわしのおかたをかゞさきにかけんとすゝみけりべんけいがこれを見ていで〳〵むさしあらぎりせんあとをばこなせわかむしやどもとてさきがけしてこそわたしけれむかひは玄のぶもとよしたけびまるたをさきとしておくにはわれとおぼしきもの三百きばかりてひかへたるぢんのなかへむさしこまをざつとかけ入たりおくがたのぐんびやうぢんをふたつにわけたりけりされどもこゝにたかたの太郎と名乘てむさしばうにわたりあふべんけいこれを見てもつてひらいてよこてぎりにがんじときるかぶとのゆんでのふきがへしおもてのほうさきめてのかぶりのいたをかけてづんと切てぞおとしけるはなさき此よし見るよりもあきつたりやむさしどのそこをひくなといふまゝにすきまもなくかゝりけりべんけいこれを見てもつてひらいておがみうちにちやうどうつかぶとのまつかうきりわつてうしろはしころほろ付まへははつぷりよだれがね四まいかなどうひつしきくさずりふたつにざつときりわつてゆんでめてへさばけたり

玄ばたの四郎がこれを見てあきつたりや武藏殿そこをひくなといふまゝにすきまもなくかゝりけりべんけいこれをみておくがたのぐんびやうはあふ心はがうにありけるやしりぞく風ぜいをみせざるはてなみのほどを見せんとてもつてひらいてちやうどうつたりけりしばたもきこふるつはものにてかぶりのいたにてうけながしさらぬていにてかけとをす二ぢんにつゞいたるかめ井の六郎がむさしどのゝきりのこしをうけとつたりといふまゝにあふひづくり三尺八寸よこてぎりにがんじときるかめいがうでやつよかりけんたちのかねやよかりけん四まいどうをゝしかけ二十五さひたるそやをかけしやこしのつがひをくるまぎりといふものにふつときつておとしければかみ

はぬけてどうとおつればしもはくらにのつたりけりこれを初て七きの人々いれちがへもみちがへさんざんにきつてまはりけりかゝりけるところにとさの八郎たかなうとかめ井の六郎玄げきよむずとくんで二人がりやうばがあひにとうどおつるかめ井ぶさうのかうのものかたきとくむならば大ぜいさだめておりあふべしといろかねてさとりとさをとつておさへてくびふつとかきおとしたちあがらんとするところへとさがめのとの十郎がすきをあらせずおりあひてかめゐがゆんでのかひなを水もたまらずうちおとすかめ井ぶさうのがうのものこゝろはたかさごやたかさこのまつのみどりとはゆれどもいたでおひぬればたちをつえにつきいまをかぎりと見ゆるしやきやうすゞきの玄やうじ大ぜいの中にてたゝかひしがをとおとかめ井がいたでおひぞんめいふぢやうなるを見てかたきを四はうへをつちらしわがみをきつとみたりければいたでうすでにきらひなく十三ところてお

ふたりいまはかうとおもひてかめ井をかたにひつかけてじやうのうちへつつといりたかきところにおろしをきやそこではらきれかめ井なむあみだぶつとももろともにすゞきはしやうねん三十三かめ井の六郎二十六さしちがへて玄にけるをおしまぬものはなかりけりむさしばうべんけいはきみの御まへにまいりはやすゞききやうだいうちじにつかまつりて候と申判官きこしめされてなにとすゞききやうだいうちじにしたるといふかさん候と申かめ井が事はさてをきぬあらむざんやすゞききのくにより はる／＼くだりよになき玄うのかたうどしてうたれぬるこそむざんなれけさよりよむ御きやうもはやほうなうの時分になるぞふせひてたべや武藏殿べんけいうけたまはつてこんどはそれがしがしにばんにあたつて候と申もあへず御でゐへつつと入くろがねをあつさ五ぶんにきたはせたるををけがはどうとなつけてかたなだまりにぞきたりけるうのはなおどしのよろひいとひおど

しのどうまる三りやうかさねざつくときゆつてうわおびちやうどしめ一尺八寸のうち刀を十文じにさすまゝにゑびらがたなくびかきがたなぎなたこぞりはを取ちがへくらのまへわにしめつけゆんでにくまでをつとつてめてになぎなたうちかたげひざにてむまにのつたりける辨慶がかけいづればたゞ小山のうごくごとくなり大ぜいの中へわつていりひざぐちたかもゝむまの腹はらり〳〵とひきやぶればしやうぎだをしのごとくなり此いきほひにをそれてすてむちうつてにぐるところへ辨慶駒をかけよせくまでをさし渡しかぶとのてへんにひつかけゑいといふてひきよせさげぎりしてぞすてにける

いわんやかんわうもろこしまでもそのなをゑたるべんけいがいまをさいごのかつせんにおもてを合するものはなしいかれるまなこはくろくもの處々のはれまよりあさ日のうつろふごとくなりかたきをなびけてをめくこゑらいでんいなづまはたゝがみゑゝざうとらのほふるこゑもかくやとおもひゑられたりべんけいが二どのかけにおくがたのぐんびやうは百八十騎うたれたり今はむかふかたきのあらざればものぐさひいくさかなとてこだかきところへこまかけあげゑばらくぢんをぞとつたりけるかゝりけるところにゑのぶのゑやうじが子に小太郎生ねん十八さいになりけるがべんけいがいせんのかけあしにちゝをうたせびんひまをうかがつて一やいばやとねらふところにはやこゝにて見つけ二人ばりに十二そくとつてからとうちつがひよつひいてひやうどいたあらむざんやべんけいがのど〳〵とひかへたるむないたにばつしとあたる小兵のいるやのかなしさはやたてにやをばためずしてひぞりけるそのやがうちかぶとにからりと入てふえのくさりにひつしとたつもの〳〵といふまゝにやをかひかなぐつて見てあればとりのしたにてやいたりけんやがらはぬけてねはとまるさしもにがう成べんけいもこまよりしもにどうとおつるあ

らむねんやさいたうのむさしとておにがみのやうにいはれしにかほどのほそやにあたつてはかなく成らんくちをしさよさいごにきやつをきらずばよみぢのさはりとなるべしさりながらいせんのごとくむまにとりのりをふならばおぢてさうなくちかづくまじ去よせんそらじにをはじめちかづかんところをきつてくればやとおもひそば成かぶとひつかけてそらじにしてぞたるみける去のぶこのよし見るよりもあれあれ御らん候へさこそ人々のをにがみのやうにの給ひしむさしばうべんけいをばなにがしがてにかけいおとして候くびとつて見せ申さんといふまゝに三尺八寸のいかものづくりまつかうにさしかざしもみにもふでぞよつたりける

べんけい去ころのひまよりも見あげてきつと見てあつぱれきりやうや能きりやうかなあつたらわかいものをべんけいが手にかけうしなはん事のむざんさよたちの寸はのびたるやきやつに一たちうたれてはあしかりなんとぞんずればちか〴〵とつめよせうしおきにかつぱとおきらうぜきなるやつめにてなみのほどを見せんとてそばなるなぎなたをつとりのべをつつめさらりとないだりけりたかもゝきつておとされのつけにかへすところをはそくびちうにうちおとしあけにそうだるなぎなたゆんでのかたになげかけこまひきよせてうちのりじやうのうちへつつといりこまをかしこにのりはなし大なぎなたにすがりたぢたぢとたゞよひあらくるしやかねふさよきみはいづくにおはしますかねふさむさしがてをひいて御まへさしてまいるはうぐわん御らんじてあれはむさしかさん候と申聲をきけばいにしへのむさしすがたはたゞきじんのごとしうら山しやなむさしどのはしやうをかへずたちまちにあら人がみとなりたるよなそれへそれへと仰ければうけたまはると申ておち椽につつとあがりよろひのそでをかたしきていまをかぎりと見ゆるがかねふささいごに若君を一めお

がみ申さうかねふさわかぎみをいだき申武藏がてに渡す辨慶若君をいだき申をくれの髮をかきなでかめわり山の峠にて御產あらせ給ひし時武藏が參りうぶゆをひかせ申男子は七歲迄ものあやかりと承る若君の御くわほうあやからせ給はゞはくぶ賴朝に御あやかり候へかいりきは御ゑんぶはうぐわんゆみはためともの御ゆんぜい二さうをさとつてあくまのもの丶をそれんは平のちゝぶにあやからせたまへうち物めされもの丶ほねきつて人におぢられたまはんはものそのかずにて候はねどもかう申むさしめにあやからせ給へいのちながくわたらせ給はんは三うらのおほすけが百六になりしにあやからせたまへと申せし事のゆめとなりいまだとをにもたらずして衣川の水のあわと消させ給はんいたはしやとはら／＼となきければあらいたはしやわかぎみはなにのよしみをもゑろしめされざりしがべんけいがあらけなきいで立にもおぢたまはずむないたをくだりにあけのちしほにみそかへしながる丶ちを御らんじていたいけしたる御てにてかきなでさせたまひつ丶ひし／＼といだきつきわつとさけばせ給ふにぞ御前のにようばうお末の人かねふさも武藏も消入やうになきゐたり

はうぐわん御らんじてべんけいがさいごにさけをのませよかねふさうけたまはると申てながゑのてうしにもみぢのかはらけすへてまいらせあぐるはうぐわんとりあげさせたまひてこれは二世までのさかづきをさすぞたまはれべんけいあまりのかたじけなさに三度いたゞきたぶ／＼とうけゆく／＼とほしけれどもあらなにともなやふゑがきれたる事なればちにまじはりて此さけがむないたをくだりにさらり／＼とながれけり

はうぐわん御らんじてべんけいがさいごはちかづきたるぞねんぶつをすゝめよかねふさうけたまはつてねんぶつをすゝめければおくがたのぐんびやう此よしをきく／＼よりもじやうのうちにあたつてねんぶつの

こゑのきこふるはいかさまむさしがはらをきるか大がうのもの丶じがいのやういざ見ならひてほんにせんもつとも左かるべしとてわれさきにと見だれいるはうぐわん御らんじてあはやかたきのちかづくはかねふさはふせぎやいよべんけいははらをきれ御きやうせんずるあひだとて御ざをたゝせたまへばべんけいはかたきのよばはるこはねをちからとして大庭におどりいでなぎなたにすがつて又たぢ〱とたゝよふはうぐわん御らんじて又うつていづるかむさしさん候と申はうぐわんおもひつゞけてかく計

のちのよも又のちのよもめぐりあへ
　そむむらさきのくものうへまて

べんけいうけたまはつて返歌とおぼしくてかくばかり

六たうのちまたのするゑにまつそきみ
　をくれさきたつならひありとも

とかやうに申てほりのふなばしをかぶ〱と渡しけりおくがたのぐんびやうこのよしを見るよりもあらおそろしや又べんけいがかゝるは爰をひけやといふまゝにわれさきにとぞにげにけるころもがわさつとをつこしむかいのはばたにて（本ノマゝかはばたニアラズ）へうたうするつはものを十七八ききりふせこなたのはばたへかへらんとしたりしが次だいにしやうねみだるればにしむきにつつたつてなぎなたまなごにゆりたてくわうみやうしんごんとなへつゝしやうねん三十八にしてころもがわのたちにてわうじやうをおしまぬものはなかりけりおくがたのぐんびやうこのよしを見るよりもあらおそろしや又べんけいが人をきらんずるはかりごとよちかふよりてはかなふまじとをやにいよといふまゝにさしとりひきつめさん〲にこそいたりけれむさしにあたるそのやはあしをたばねてまきのいたどをつくふせいもとよりし丶たるべんけいにてそのみをちつともいたまず

ぬまだてのしやうじ此よしを見るよりもや至てこゝ

ろのがうなるむしやはたちながらしするいはれのあるぞたれかあるゆきむかつてゆみのはずをもつてそつとついて見ようけたまはると申て二十き三十きかけよせ〳〵しけれどもおぢてさうなくよりつかずぬまだて此よしみるよりもをくびやうなるかた〴〵かなそこのけぬまだてつかんといふまゝにこまのたづなかいくつてかつし〳〵とあゆませよせゆみのはずををつとりのべをづ〳〵かつぱとついた本よりしゝた辨けいでかれ木をたをすごとくにかつぱとまろびけりまろびけるそのせんにもつたるなぎなたがひらりとするを見るよりもぬまだてのしやうじはしゝたるものとしらずしてまたきつてかゝるとこゝろへきもだましゐもみにそはずこまよりしもにころびおちうきぬしづみぬながれてころもがわのゐせきにせかれてしんだりしをきせん上下をしなべてにくまぬものはなかりけり

はまいて

そも鎌倉と申はむかしは一足ふめば三ちやうゆるぐたいふのぬまにて候ひしをわだはたけやま惣奉行を給はりいしきりつるのはしをもつてたかきところをきりたいらげたいふのぬまをうめ給ふ上はつかい中はつかい下はつかいとて三つにわる上はつかいは山ちうはつかいは在家下はつかいは海なりけり上はつかいの一だん高きところにはげんじの氏神正八幡大ぼさつをあがめいはひ奉る中はつかいのざいけをかまくらやつ七郷にぞわられけるあらおもしろのやつやつや春はまづさくむめがやつつゝきのさとやにほふらん夏はすゝしきあふぎがやつ秋は露くさゝゝめがやつ冬はげにもゆきの下うめがえがやつこそひさしけれ

遙の沖を見渡せば舟にほかくるいな村がさきとかやいひしま江の島つゝいたりほうらいきうと申ともいかで是にはまさるべきかるがゆへに名づけてあゆみをはこぶ輩は諸願かならずまんぞくせりていとうのつゝみのをとさつ〳〵のすゝの聲々にちはやの袖をふりかざす神慮すゝしめの御かぐらのをとは隙もなし

かゝるめでたきおりふしよりともしやうらくましまして大佛くやうをのべさせたまひ御身は左近の右大將に經あがらせ給ひ兵衞つかさ十人右衞門つかさ十人廿人のくわんどを申給て其ころちうの人々にあてをこなはせ給ふ中にも左衞門つかさをは梶原の平三景時にくだされけるを嫡子の源太にゆづる源太司をたまはりいそぎ國にくだり此事披露申さで有べきかと大名小名てうしやう申いつきかしづき奉る先初番のざつしやうにはほうらいの山をからくみ中にかんろの酒をいれ不死の藥と名付銀のさほに金のつるべを結さげはねつるべにて是をくむさけにあまたの威

徳ありうとき人さへちか付したしきなかは猶ゑたしむをちこちのたつきもしらぬたび人になるゝも酒のいとく也ほうらいの山のうへにはりふじんがたちばなけんぽのなしさうふのしゐかゝくりゆとうなんせいのくりとかや皆いろ〳〵になりつれて其あぢはひはしゆみをなす誠にふしのくすりぞとゑひをすゝめてまいらする二日の日のざつしやうにはさかなの數をあつめぢんのほだじやかうのへそ鐙腹卷たちかたな名馬の數をそろへ思ひ〳〵にひかれけり三日の日のざつしやうには江の島まふでにこと寄て御はまいでとぞ聞えける忝も御れうの北の御方出させ給ふ其上人々の北の方もみな御供とこそ聞えけれ船のうへにぶたいをたかくかざり立ゑたんくわりほくやりわたしかうらんぎぼうしみがきたてぶたいの上にあやを敷みづひきににしきをさげぬれば浦吹風にへうようして極樂淨土は海の面に浮出ぬるかとうたがはるおんがのまひ有べしとてげんくわんのやくをそさゝれけるちゝぶの六郎殿は笛のやくとぞきこえけるなかぬまの五郎は調拍子（とひようし）のやく也梶原の源太景末はたいこのやくとぞ聞えける御れんちうにはびは三面こと二ちやうきんのことのやくをは北の御方引給ふ一めんのびはをば北條殿の御内様かづさのすけの御内様わごんをしらべ給ひけりげんくわんいづれも名にしおふたる上手也ぶたいのうへの舞ちごにちゝぶどのゝ二男ふぢいしどのと申て十三になり給ふしくわうそだちのめいどうなり左の一とうけとりのたかさかどのゝつるわか殿惣じてちごは十八人九人づゝにわかちて左右の舞をまひ給ふいづれもまひは上手なり

龍王に一おどりげんしやうらくのさしあしはとうのまひのはちがへしりんたいはにはさすかひな青海波にはひらくてことりしよに羽返しいづれもきよくをもらさず夜日三日ぞまふたりける打もふくもかなづるもぼさつのぎやう是也天人はあまくだり龍神は浮

あがり船ぎやうだうにめぐるらんけもんかくちの輩うかれて爰にたち給ふ御前の人々御所領給はり所知入とこそきこえけれ

景清

今度頼朝の御代をめされし由來をくはしくたづぬるに御舍弟九郎御ざうし御こゝろたけくわたらせ給ふゆらひなりとぞ聞へけるかくてけんきう元年にきみうゐ京上ましくて二度の御上洛おなしく南都のくやうをのべ給ふこうれいなればちゝぶどの先陣とぞ聞へける去間しげたゞ本田の次郎をめされいかにちかつねうけたまはれ今度もしげたゞがせんぢんを給はるや都のみにかぎらず五畿内の者共がだうぞくいちをなすときく本田どの御諚也ちかつね承りわつぱにとつてはたれくぞかた田のくまわうほうらい丸ふくだのまんざいをさきとしてわつぱ廿人にあかぢのにしきのひたゝれをきせまるまきのたちをかつがせて弓手のわきをぞとをしけるぢしろ二十人におりえぼしをきせしらえのなぎなたかつがせてめてのわきをぞとをしけるちゝぶどのゝ御せいは七千餘騎鎌倉殿の御せいは十萬よきとぞきこへけるせんぢんも後ぢんもへいあんぢやうを御たち有なんとへとてぞいそがれける東大寺四つの門はゆふきながぬま小山うつのみやをのくかため給ふ其中に取てもてかいの門こそ大事なれとてちゝぶどのゝしてん王ほうしやうをあざけるほどのつはものを五百餘騎にてかためらるかくてなんとのくやうはまつさいちうと聞へけり其中にとりわきてものゝあわれをとゞめしは平家のさぶらひ大將に惡七兵衛かげきよにてものゝあはれをとゞめたりあわれよの中にひんほどつらき事あらじしたしき中はとをざかりうとき人にはいやしまれひんしやの家に生るゝほどつたなかりける事あらじうけたまはればかまくらどのなんとのくやうと聞て有ほうゐの庭とはぞんずれ共主君のかたきでましませばしのびみやこへのぼりつゝ頼朝を一かたなきり中大臣殿のけうやうにほうせばやとおもひけれ

ばをはりのあつたをたちいでゝ丟のびみやこへのぼりけり清水坂のかたはらにあこわうと申て遊女の有けるにあさからずちぎりければかれが宿所に立よつてなんとのやうをくはしくとふあこわううけたまはりちぎるなさけのせつなさに有のまゝにぞかたりけるかげきよなゝめによろこふでいそぎ南都へ下り人の心のうちをもひき見ばやとぞんずれば出立やうこそおもしろけれもえぎにほひのはらまきを草ずりながにさつくと着もぢのころもをうへにきて上帶丟つかと丟めたりけりちやうけんのけさをもつてほうかぶりを仕りおほい殿よりも給たるあざまるといふうちがたなを十文字にさすまゝにぬつたりしけいちにあひがはにてをたてつめはきにはくまゝにつくしみのなぎなたの四尺八寸ありけるがぬけば玉ちるばかりなるをさやをばきつとはづいて弓でのわきにかひこふでちゝぶどのゝかためてましますてかひのもんを景清はあふさらぬ體にてとをりけりちゝぶどの

の御うちなる本田の次郎がこれをみてあらけなふこそとがめけれあれはいかなる人さうぞこれはちゝぶどのゝかためてましますてかひの門とは丟らざるかそれよりももどれとよかげ清は聞よりもあつことなしと存ればなぎなたまてにとりなをしちかふよつて小ごゑたつて申やうなふくるしうも候はず東大寺のかたはらにすまゐつかまつるつゝ井のじやうめうめいしゆむなりやあとをしてたべとぞ申けるまくのうちなるちゝぶどの此よしをきこしめし大まくつかんでうちあげあらふしぎの事共や只今のなまりの聲はほくろくだうのかたはらのなまりのこゑと聞てありそれよりももどれといへ運命つきはてゝちつともたてつく物ならばはからへとの御諚也さうけたまはり候とて其せいは三百餘騎たち長刀のさやはづし御とまりあれとてをつかくる景清はみるよりもあらわれぬるとぞんずればはひたりしけいちをとあるところにぬぎすて三百よきがまん中にて長刀のきつ手には

こむ手なぐ手ひらく手石付をかひつかんではらりはらりとなひだりけりくつきやうのつはものを三十騎ばかりまつしくらにきりふせのこりのつはもの共にいた手うす手おふせて四方へはつとをつちらしきりのほうをむすんで我身にさつとうちかけてかすが山へつつと入世間のていをきゝゐたり景清心におもふやうしよせん爰にて叶ずば明日はんにやじへ御まいりと聞てあり山伏のすがたをまなびねらはばやとおもひかきのすゞかけしかまのときんまゆはづかにひつこふでたけとひとしくあるをひを取てかたにうちかけゐのめすかひたる大まさかりをうちかつぎみねいりしたる山伏たちを廿人ばかりともなひはんにやじのまへにてよりともの御まいりをいまやをそしとあひまつるさるあひだしげたゞ此よしを御らんじてあらおびたゞしの山伏達やめん／＼はどこやまぶしと見なしたるぞしげたゞは奥山伏と見なしたりおくにとつてもまつしまいはしまひらいづみあけずのいはやそとのはま大みねなんどをぎやうどしていそにつかれたるやまぶしたちと見なしたりさりながらさきよりも九ばんあとよりも十二番めにいかにもせいわからたかにてなまめいたる客僧をまことの山伏とおもひてふかくをかくなよかた〴〵あれこそきのふてかひのもむにてのひげ大しゆのたぐひなれたゞをつつめからめ取君の御めにかけ申せ本田殿御諚也ちかつね承て其勢は五百よきたち長刀のさやはづし御とまりあれとてをつかくる景清は見るよりもあらはれぬるとぞんずればかけたりしをひをとあるところになげすてあざまるをするりとぬいて五百餘騎をうちやぶり又きりのほうをむすんでわが身にさつとうちかけて人よりさきにかげきよはしのび京へぞのぼりけるかの景清がふるまひはたゞはんくわいもかくやらんあらむざんや景清いまはせんはうつきはてゝわが身をだいて立たりしがいかにもして主君のかたきをうたばやとおもふこゝろのうちこそあわれなれ

爰にひとつのたとへあり一とせたかくらのみや三井寺をたのみぎやうかうならせ給ふ三井寺なんなくたのまれ申南都へ重狀をこす大衆せんぎあつて返狀をかのしんけうにかゝせられけるにきよもりを平氏のさうかう武家のぢんがいと書てをくる其とがによりしんけうが討手をなんばせのおがたまはり一千餘騎をそつし南都へせめてぞのぼりけるなんとの大しゆたちしむけう一人にたのまれきよもりとてきになりかなふまじいとせむぎしてこゝろがはりをしたまひけりあらむざんやさいせうばうがたのみ申大衆たちは心がはりをしたまへば今はせんはうつきはてゝこつがい人のまなびをししんのうるしをかひとつてつぎめ五體にしつかとさすみのうらかへしきるまゝにやぶれたる笠をくびにかけほそきつえをたよりとしなんとを立いでゝふてゝみやこへのぼりけりならざかやはんにやじのあたりにてうつてのせいにぞゆきあひける日比はかたをならべひざをくみしはうばいたちまのあたりをとをれ共あれはいかにさいせうかと目がくる人もなかりけり其も心ががうなればわにのくちをのがれて鬼神が門を立いでゝなるみがたにくだりつゝいしをもとめてれうぢをし本のごとくにへいゆうなつてかくてさいせうくまのにこえ新宮の十郎ゆきいへの御てにつき申ぢせう四年の夏の比あつたのみやの願書のときにさいせうばうとぞ書たりける其後信濃にくだりつゝ木曾殿の御手につき申北國となみやまはにふの宮の願書の時にさいせうばうとはかゝずしてその名をかへてきその太夫覺明とぞ書たりけるあはれしるしのなかりせばさいせうばうが命はあやうかりつるものぞかしかく申かげきよもそれにはすこしちがふましこつがい人のまなびをしてねらはばやとおもひ四條の町へたち出てしんのうるしをかひとつてつきめ五體にしつかとさす夏のうるしの物うさは五たいをしむるそたへがたきむざんやかげきよはわが身をきつと見てかくなりはつるも

たれゆへぞ主君の爲とおもへばうらみとはさらにおもはずいかに二さうじんつうのしげたゝと申ともかの景清がふるまひをみしらるべうはなかりけりみのうらかへしきるまゝにやぶれたるかさをくびにかけきよみづ坂のかたはらに百四五十人なみゐたるこつがい人にまじはりなふ人なみ〳〵にこなたへもせぎやうたべよとこふときぞいとゞむかしをこひごろもこひごろも袖はなみだに朽ぬべしさるあひだ重忠本田の次郎をめされかゝるはうゑの庭にはすんぜむしやくまと申て大事の事が候ぞあのやう成こつがい人は四季のてうしをそむくなり先春はきのへきのとにてそうてうにてあらふずなつはひのへひのとにてわうしきにてあるべし秋はかのへかのとにてひやうでうにてあらふず冬はみづのへみづのとにてばんしきにて有べしどようはつちのへつちのとにて一こつにてあらふずこれによつていしをんやうにもそうわうひやうほん一とつかひ候いまはあきにて候ほどにひやうでうにてあらふずるがあらふしぎや只今せぎやうたべとこふつるこゑをきくもひやうでうなり弓手のまなこはしんのざうよりつうじてそのいろくろくみゆるめてのまなこはかんのぞうよりつうじて其色青くみゆるさうこくさうでうのかたちまさしく御身はこつがい人ではなくして平家のさぶらひ大將に惡七兵衛かげきよと見たわちゝぶがひが事かかくとふがむねんならばかう申しげたゝが君に御いとま申むさしへくだつてあらん時大御所えしのびいりめんらうすきがきにてもねらひたくばねらひ候へしげたゝがあらんほどはふつつとかなふまじいとまつしろにいはれ申あつはづかしと存れば打うつぶひてぞ居たりけるかげきよこゝろにおもふやう我等がちゝのかづさのかみをげんぶくの親とたのませたまひたらばわれらが父のたゞしげはちゝぶのしげにてちゝぶのはたけ山しげたゝと名のらせ給ふとうけたまはるえぼしおやとるぼし子は七生までのきゑんと承て候に

なさけなくもしげたゞの一度見ゆるし給はぬところ
はむねむなりその儀にてあるならばとても死せんわ
がいのちしげたゞとまいりあひとにもいかにもなら
ばやとおもふこゝろをさきとして上なるみのをさつ
とぬぎすていづくにかさひたりけんあざまるをする
りとぬいてみけんにさしかざしあふおとまりあれと
てをつかくるちゝぶどのは御らんじて心得たりとの
たまひて四尺二寸のかうひらぬいてわたりあふてぞ
見へられけるあやうかりつるところに御馬まいりの
人々が一度にはらりとおりたつてしげたゞをしへ
だてたてまつりかげきよ中にをつとりこめて火水に
なれとぞもふだりけるぢたいかげきよはこゝろはが
うなりちからはつよしもちたるかたなはつるぎしん
けいがじゆつはならふつ手をくだひてぞ切たりける
むまにとつてきるところこぐちとこわきおのうへさ
んづりうの毛からつらとからはなつかひをざむぶと
切ておとす人に取てきるところまつかうこびたいさ

うのこてふりあをのけばうちかぶとほろつけととう
なかこてのいたのはづれをばはらり〳〵となひだり
けり馬人のきらひなくのりこえ〳〵さん〴〵にきつ
てぞまはりけるくつきやうのつはものを共かずこ本
ノマ、れはきりとゞめのこりのつはもの共にいたでうすで
おふせて四方へはつとをつ散すそうじてかげきよが
ねらふところどこ〳〵ぞたにのたうにみねのたうを
とはかづらときわの里なんとにては東大寺今度は清
水まふでまで一度ならず二度ならず三十七度に及で
こゝろをつくしきもをけし君をねらひ申せどもくわ
ほういみじくまし〳〵てちゝぶどのにさとられ申前
後にかなふ事もなしかげきよ心におもふやふいやい
やかゝる事そう〴〵しきときかげきよが京ずまひは
むやくなりしよせんしうとの大宮司をたのみくだら
ばやと思ひ尾州あつたに下るさるあひだよりともか
ぢはらをめされいかにかぢはらうけたまはれ今度頼
朝よを取たりといへども取たるしるしもなしそれを

いかにと申に平家のさぶらひ大將惡七兵衛かげきよといふものにこゝかしこにてせばめられよにもくちをしくぞんずるいかにもして彼ものをちうしてすてよとおほせければかぢはら承て御まへをまかりたちしろかつしいたをそのかずあまたとりよせふだにけづらせ筆にてものをぞいはせける平家の侍大將に惡七兵衛かげきよをうつてもからめても六はらどのへまいらせたらんともがらにけしやうのぞみたるべしかげときはんとかきとめて京白川のつじ〳〵にたつる札を立て十日ばかりはさしたるしるしもなかりけりかゝりけるところに清水坂のかたはらにあこわうと申女きた野まふでをしけるが京白川のつじ〴〵にたてたるふだをよふでみるに九年つれたるわがつまのあく七兵衛景淸をうたんと書てたてゝ有あこわうあまりのものうさに此ふだをぬすみとりかも川かつら川へもながさばやと思ひしが中にてこゝろを引かへしましばし我こゝろ日本六十六ケ國に平家の知行とて國の一所もあらばこそ平家一味のものとてはつまのかげきよばかりなりつゝむとするも此事つゐにはもれてうたれうずかげきようたれて其後に不慮にをもひをせんよりも九年つれたるなさけには二人のわかのあるなればこの事かたきにしらせつゝかげきよをうちとらせ二人のわかをよにたてゝあとのゐいぐわにほこらんとおもひすましたあこわうがこゝろのうちぞおそろしき此札くわいちうし六はら殿へまいり札のおもてにまかせてまいりてさふらふと申あぐるらいてうなゝめにをぼしめしあこわうをめされくわしく問せ給へばあこわう承りさん候景清がゆく衛を人のしらぬも道理とおぼしめせ此あひだはをはりのあつたにさふらひしが平家の御代の御時よりもきよみづをしんかう申月に一度は參りさふらふ明日は十八日かならずみづからがところへきたるべしもとより大酒の事なればさけをすゝむる物ならば前後もしらずふすにてさふらふぞ大せいそつしをしよ

せ景清をうちとらせみづからに所知をたべなふ我君と申らいてう聞召れてうれしう候あこわう御前たつて所知をばあたふべしそれ〳〵とおほせければ承ると申て玄やきん三十兩わこわうにくだしたぶあこわうたまはりさふらひて清水坂にかへりつゝ其日のくるゝを待たるはなさけのふこそ聞へけれあらむざんやかげきよ是をば夢にもしらずして明日は十八日清水へまいらばやとおもひ尾州あつたを打立て四日ぢのみちなるを其日のくれほどにきよみづざかのかたはら成我宿所へ立よつて門ほと〳〵とをとづるゝうちよりもたそとこたふるいやくるしうも候はずかげきよなりとぞこたへけるあこわうなゝめによろこふでいそぎたち出門をひらき景清をうちへぞ玄やうじける二人の若どもはちゝをはるかに見なれねば父があたりへたちよつてむつまじげなるふせなりあこわうなみだをながす風情にてあらいたはしや景清平家の御代の御時は惡七兵衞かげきよとて公家にもぶけにもにくまれず一時のまふでにもちうげん小者はなやかに馬くら小ぐそく玄んじやうにさもゆゝしくおはせしがいつしか平家にすぎをくれ口（本ノマヽ）せいきたまほこやつれはて御とも丶なふて景清はさこそくるしくおはすらんかまへをきたる事なれば玄ゆ〳〵のさかなを取いだしかげきよにさけをぞ玄ゐたりけるかげきよはみるよりもいとをしき子どもはなみゐたりしやくに立たるはねうばう也いづくにこゝろがをかるべきさしうけ〳〵のむほどにさしもにがうなる景清もかたきの事をばはつたとわすれうれしう候あこわう御前きよみづへは明日參ふずるにて候いとま申てさらばとてあひのしやうじをさらりとあけれんちうにうつりてとうのまくらになみよりて前後も玄らずふしたるはうんのきはみとぞ聞へけるあこわうなゝめによろこふで清水へはみづからが參らふずるにて候とてうすぎぬ取てかみにかけ門より外へ出ると見へしがきよみづへはまいらずして六はらどの

へ參り此よしかくと申あぐる賴朝聞召れてさらば打たてつはものとて其勢は三百餘騎はたひとながれささせあこわうさきにをつたてゝあふ清水ざかへぞよせにけるころはいつなるらん八月十七夜のさようちふけての事なるに月は出てくまもなしえたのこぐさにいたるまでかくるゝ所はなかりけりさるあひだあこわう御ぜんかたちを見れば春の花すがたをみれば秋の月みめもかたちもならびなきらく中一ばんの美人とは申せども九年ちぎりをこめたりし惡七兵衞をうたせんとて大勢そつしよせたるはひとへに鬼神のごとくなり三百餘騎のつはものを門のあたりづいちのわきにかくしをきわが身はうちへつつといりたゝ今こそ下向申てさふらへかげきよとぞおこしけるかげきよかつぱとおきあざ丸をひざのうへにとうとをきあこわうをつく〴〵と見ていや〳〵御身は清水へはまいらぬ人と見なしたりそれをいかにと申に日本六十六ヶ國に平家の知行とてくにの一ヶ國もなしへいけ一味の者とてはそれがしばかりなにがしが事をかたきの方へそせうしてうちとらせあとのえいぐわにほこらんとおもふ共いんぐわたちまちむくうてまつたふよにはいづまじいぞあこわうあまりのふしぎさにいやさもなひものと申てかほにもみぢをひきちらす景清是を見てやあ有事はちんじそあることをちんずればもみぢのいろにみゆるぞやさればけてんのりうしゆほんけうにも七の子はなす共をんなにこゝろゆるすなと申つたへて有ほどにそらうたがひに言たるぞあこわう御ぜんといふこそをそかりけれひろえんにおどりいでついぢのおほひに手を掛のびあがつて見てあればかしこに二十き三十騎かぶとのはちをならべつゝむらくもだつてひかへたりうちへはしり歸てにつことわらふていふやうはいかにやあこわう御ぜんわごぜはさなしとちんずれ共こづめづあはうらせつかしやくをはやめてをそし〳〵とせむるもいかでこれにはまさるべきさいごの別いかゞせんや

あねうばうとこそよばはりけりあこわうあまりのかなしさに二人のわかの手をひいてあひの玄やうじをはたとたてれんちうふかくいりにけりかげきよこのよしみるよりもあらおかしのあこわうがふるまひやたとへばをにのたいしやうはちめんだいわうがいはをたゝんて四十餘ぢやうについぢをつきくろがねのもんをたてたりともかげきよほどのつはものがなどいつぽうちやぶらであるべきぞいはんやかみ玄やじの一重やぶらんことはやすけれどもひごろのなさけとうざの玄しやく九年つれたるなさけにわごぜはこゝろかはるともかげきよはこゝろかはるまじやがてことばをかへらるゝいかに二人のわかどもよはゝこそつらくともこれがかぎりのことなればちゝがすがたをいでゝ見よわかどもとありしかばむざんや二人のわかどもはゝがところをたちはなれちゝがひざになみよりてかほをなでひげをなでちゝよ／＼とばかり也かげきよは御覽じて二人のわかをゆん手めてのひざにをきをくれのかみをかきなでゝをのれが母の心中ほどつたなかりける事あらじそれをいかにと申になにがしが事をばかたきの方へそせうしてかげきよをうちとらせ二人の若をよにたてゝあとの玄いぐわにほこらんとおもふ共いんぐわたちまちむくうてまつとふ世には出まじかくあさましきこゝろにてよにしもたゞはあるまじい又よの妻にもそふならば一つにおもへばけいしのなか又は敵の子孫とてあしからふずるたびごとに玄やけんのつえにてうつときに父よ／＼とよぶならば草のかげにて景清がみんずる事もむざんなりいかにきくかわか共ようらめしきはゝにそはんより玄んまのちやうに參り父をまてよとかたりつゝあにいやいしをひきよせて弓手のひぢのかゝりを二かたながいしてをしふするおとうとがこれを見てあおそろしのちゝごぜやわれをばゆるさせ給へとてゐたるところをづんとたちさらばよそへもゆかずしてころすべきちゝにすがりつくかげき

よは御らんじて何と申ぞいやわかよころす父はうらみぞころす父はころさずしたすくるはゝがころすぞおなじくはあにとうちつれて玄でさんづをなげきこしゐんまのちやうにてちゝをまてよとかたりつゝこころもとを一かたなあつとばかりをさいごにて兄弟のわか共を三かたなにがいしつゝおなじまくらにをしふせてかたなをかしこへからりとすてつがはぬをしのゐいやこゐうかれこひのふぜひにて我身をだいてたゝれたり

かげきよ心におもふやういや／＼弓とりの心はたけくもてばがうになるちつとゆるせばふかくに成只今こゝもとへよせられたる人々の家名をたしかに承て討死さはめばやとおもひたゞいま爰元へよせられたる人々はたうかゝうけか名字を承てうちじにを仕らんと大音あげて申よせての人々これをきゝえまの小四郎よしとき御所のかげするゐ是にありとこゐ／＼によばはるかげきよ聞てあふえま殿と申はたうきみのこじうと御所のかげするいつれもかたきにきらひはなしまことや平家のさぶらひのがうおくのところと覺へたり命のおしき時にこそながひぐそくもほしう候へ又れいのあざ丸ばかりでさうすは參りさうといふまゝにさつ／＼とはしりよりもんのくわんぬきを取てかしこへなげすてかた戸をひらいてかた戸をまへにあてそとなるかたきをうちへとひらり／＼とまねけどもさうなふかたきはよらざりけりあまりまてばひさしきにまいりさうといふまゝに三百よきがまんなかへひらり／＼とかゝりしをものによく／＼たとふれば玉ばんにたまらずりうの水を得くもをわけこくうへあがる如くなり大ぜいのなかへわつていりにしから東きたから南くもでかくなは十文字八つはながたといふものにわりたてをんまはしさん／＼にきつたりけりくつきやうのつわものを七八十騎きりふせ大ぜいに手をおふせ東西へはつとをつちらしはしつて門をちやうとさしころいておきたりし若共にすがりつきはら／＼となひて立たりけるかのかげき

よの心中をば貴賤上下をしなべかんせぬ人はなかりけり

去間景清はあこわうがゐたりけるれんちうにむかつて申やういかにあこわう今夜それがし死なんとくるへどもかたきのこゝろがをくびやうにてぢたい兵衛はうたれぬ也いとゞ申てさらばとて天じやうにありはふせきいたをけやぶつて家のむねにつつとあがりきよみづざかの事なればのきつゞきの在家を十四五間はしつてそれよりもはやしの中へつつと入せけんのやうを玄ばらく聞けれどもちかづくかたきはなかりけりそれより觀音の御まへにまいり心しづかにきねむして京中迄いでけるがかゝる折ふしかげきよが京住居はむやくしよせん四國西國へも落ゆかばやど思ひしがいや〳〵かゝるときこそ人をもたのみ頼まるれ又しうとの大宮司を頼み尾州へ下らばやとおもひみやこをば夜半斗にたち出てかもがわ白川うちわたり祇園ばやしのむらがらすうかれごゝろかむばたまのくろかみもわけてゆく別路とめよ逢坂の關の明神ふしおがみ大津うちでのはまちどりともよぶこゑに夢さめてうきみのたびをしがのうらなみよせかへるあまをぶねからさきのひとつ松たぐひなき身をおもふにぞうき身のうへとおもはれていとゞなみだもせきあへず勢多のからはし打わたりひばりあかれる野路のしゆく露もたまらぬもり山おもかげみゆるかゞみ山馬ふちなはてこれたかのみこのうきよの中をいとひて立をかせたまひたるむしよじをふしおがみ入てひさしき五條宿年をつもるかおひそのもり河かぜさむきたび人はさよのねぶりに夢さめてゑちがはわたれば千鳥なくをのゝほそ道すりばりやまばんばさめが井かしはばらいまず山中うちすぎてあれてなか〳〵やさしきはふはのせきやのいたびさし月もれとてやまばらなるたる井の宿をうちすぎてみのならば花もさきなんくんせかはおほくま河原の松風はきんの音をやしらぶらんすのまたあしかをよひの橋

ひかりありたまの井の黒田のしゆくをうちすぎてをりつかひづを過しかばをはりの國に聞へたるあつたのみやにまいり三十三度のらいはいをまいらせてつつ立あがつて景清は東をきつと見てあればまだよこぐもはひかざりけりかくて大宮司のたちにもつきしかば門ほと〳〵とたゝくうちよりたそとこたふるいやくるしうも候はずかげきよなりと申うちより門のじやうをひきければかげきよ內へぞいりにけるこれにも二人のおさあひ者こそ候ひけれあらむざんや景清二人のわかを左右のひざにとうとをき今夜それがしみやこにてなんぢらが兄弟のわかどものありつるを女のこゝろがにくきによりがいしてこれまてくだりたりふびんなるぞ若どもとて淚ぐみてぞゐたりけるあらむざんやあこわうさてのみやむものならばいしかるべき事共を又六はら殿に參り彼かげきよと申者は色ごのみの男にてみづからにもかぎらずおはりの大宮司の三のひめにちぎりをこめこれも十年になると承るおつるともよの方へはゆきさふらふまじしうとゝさいしをたのみをはりへおちてぞ候らんいそぎ討手御くだしあれと申よりともきこしめしあらおそろしのあこわうや九年迄ちぎりしものが重々そせうするこゝろのうちのにくさよ自餘のをんなの見ごりきゝこりのためも有それはからへとの御ぢやうなり承り候とてあこわうをとつてふせざうぐるまに打のせて九重のうちをわたしして其後かの女をかもとかつらのおちあひにいなせがふちのふかき所をたづねてふしづけにしたりけり上下ばんみむをしなべてにくまぬものはなかりけり其後よりともかぢはらをめされてをはりへの討手にはたれをかくだすべきとの御諚也かぢはら承ておはりへの討手はしかるべうも候はずそれをいかにと申にかのかげきよと申ものは合戰にをひてはなにとしてもうたるゝ事は候まじ先しうとの大宮司をめしのぼされろうしやさせられ候ひて後日の御さたにをよぶべきと申らいてうげにも

と思召やがて御状をあそばされ大宮司のたちに付給ふ大ぐじ此御書をひらひてはいけん仕りいつよりもきらびやかにひきつくろひ御上落ときこへけり六はらの御所にもつき給へばとがは何ともしらねどもこのつじかしこのもんのわきよりもくつきやうのつはものがひた／＼とおりあひていたはしや大ぐじを手どりあしどりなはかけてやがてろうしやと見へにけり梶原たちよつて申けるはなにとて大ぐじは君てうてきのかげきよを御ふち候ぞかげきよをいだされよ出されぬ物ならば大宮司の御いのちを給はるべしと申大宮司聞召れて扨はそれがしがすごしたるとがはなけれどもきみてうてきの景清をふちしたるいはれによつて籠者させられ候やその儀にて有ならば景清をめしのぼせかたきの手へわたさばやとおぼしめするまでしばし我こゝろ大宮司もこゝろがはりをしかげきよを敵の手にわたしたるなんどゝいはれんもはづかしやむざんや我ひめのうらみの程をいかゞせんなさけなのちゝごやまさしく身づからが二世までかねし景清をかたきの手にわたしつゝきらせ給へるうたてやとふちにもせにも身をしづめばあとのなげきをいかゞせんこほりはみづより生ずれども水よりこほりはひやゝかなりまごはわが子の子なれ共子よりもまごはふびんなり我身をものにたとふればをざさのうへにをけるつゆ水のうへにふるしらゆきみやまがくれのをそざくら木ずゑのはなはちりはてゝ今したえだにのこれるがさそふあらしをまつふぜい我子と孫のふびんなれば大宮司このまゝきらるゝ共景清をたすけむとあむじすましておはしますかの大ぐしのこゝろのうちたとへむかたもましまさずかぢはら申けるやうはあらいたはしや大ぐしは此二三日のあひだにきられさせ給ふべしかたみのものををはりへ御くだしあれと申大宮司きこしめしこのきはにのぞむでかたみはむやくとおもへども思ふ子細の候へばすゞりれうしをたび給へ承り候とてすゞりれうし

まいらするすみすりながし筆にそめ其狀にあそばされけるやうは今度大宮司が上洛の義べちの子細ならずそのゆへは君てう敵のかげきよをふちしたるいはれによつてろうしやさせられて大ぐしはみやこにてきらるゝなりそれがしきらるゝ物ならばやがて討手くだるべし討手くだらぬそのさきにいそぎ信濃にくだつてうんのもちづきむらかみたうをたのむべしそれより奥州へ下てへいむしやをたのむべしかのへいむしやと申は大ぐしがためにはをひながらえぼし子なりかれらをたのむものならば十萬餘騎は候べしその大勢をいんぞつしていそぎみやこへせめのぼりうち勢多東寺をさしふさぎあみだがみねに城をしてたへてひさしき平家の赤はたらくちうにはつと打立おごるかたきをついたうして草のかげなる大宮司にただ一目見せてたべ兵衛尉へとあそばしてをはりへくだし給ひけり三日と申にこの狀をはりにつくかげきよひらいてはいりけん仕り女房にかたりけるはあらめでたや大ぐしはこのあひだに御下向有べしとの御狀の候ぞ御こゝろやすくおぼしめせといつはりまたそれがしは大宮司の仰にしたがつて奥州へくだり候三ヶ年にてはのぼるべしそれすぎば五ヶ年五ヶ年過るものならばみちのくにて景清むなしくなりたると思召後世とぶらひてたび給へいとま申てさらばとてあつたをは立出やう／＼いそきくだる程に遠江の國はま名のはしにつきにけりこゝにて景清おもふやういや／＼それがし奥州まで下りたりとももはや大宮司は都にてきられさせ給ふべしゆへもなきそれがしがはる／＼とくだりたのまれよといはんずるにたのまるるもの一人もなくしてけつく落人ありやとてきられん事は治ぢやうなりとても死せんいのちをしよせんこれよりみやこへのぼり大ぐじの御いのちにかはらばやとおもひそれよりもひつかへし又都へぞのぼりけるとてものぼるものゆゑに一時なりともとくのぼり御命にかはらばやと思ひて一足に弓つゑ二つゑ三つゑほどづゝをとりあかりはねこえひらり／＼との

ぼるほとにあつたをはたつの刻に打たつてあわだぐちにも着しかばさもあれけふの日は何時やらんとおもひてふりあをのひて見てあればほつせうじの八つのたいこをとう〳〵と打たりけり先清水へ參らばやとおもひ觀音の御まへに參りこゝろしづかにきねんしてそれよりも六はらの御所にまいり南おもてのついちをゆらりとはねこゑ御前のまりのかゝりに二わうだちにぞたつたりけるおりふしよりともはゑんぎやうだうしてまし〳〵けるが彼かげきよを御らんじてあのまりのかゝりにたつたる者はいかなるものぞと問給ふちゝぶのはたけやまさしよつて申さるゝあれこそきみてうてきのかげきよにて候へよりとも聞召かげきよにて有ならばそれはからへとの御ぢやう也承ると申て御前の人々にさんまほんま土肥つちやあすけ中將よこちかつまたの人々がひたゝれのつゆをむすんでかたをこしたちなぎなたのさやはづしかげきよをまん中にはやをつとりこめてぞ見へにける

かげきよこれを見てあらげう〳〵しの面々のふるまひやそれがしおもひきるならばかた〳〵をきりころさんも天にあがらんとも大地をわつてくゞらんとも景清がまゝでありさりながらこのたびは大ぐじの御いのちにかはらんためにのぼりてあればたちもかたなもなにならずとからりとすててかげきよはこゝろとなはをぞかゝりけるよりともの御ぢやうにはいかでざうひやうの入たるろうには入べきぞはじめてろうをつくらせよ承ると申ていち井しらかしとがくすの木ながさ一丈にとらせて地へは七尺いれうへをば三尺のつめろうにこしらへ四五の木をとりよせくもでがうしにきりくんで一尺三寸の大くぎをもつてちやう〳〵とうち付くぎのさきをかへさねばろうのうちはほらをほつてつるぎをうへたるごとくなりてうつなはからむしにてたか手こてにいましめ七尺ゆたかのかげきよを二重にとつてをしいれかみをば七はにたばねて天じやうのかうしへ七方へつつたりけり

あしをばろうよりひきいだし三寸間のかうしをあしのぶんをひろふして弓手めてへとりちがへ山出七十五人して引たるくすの大物にてあけほたしにぞうつたりけるひつつぬがねと申はうすう平打けるをかげきよをいためんために丸ふとううたせたりしつちやうつめかね八さうかきがねとう〳〵くるり木千引のいしざいもくをうへにとりつむだりこしにとうのつな三すぢゑつてつけさせくびにはねほりの大つゝを三ほんまでかつがせたりむざんやかげきよろうのうちにてかよふものはいきばかりはたらくものは兩眼なりせつたんより其ほかはすこしもうごくところなしよりともの御ぢやうにはかげきよをめしとるまでのことにてこそ候へ大宮司はよりともがためにはげしやくの祖父にてましませば對面あるべしとの御ぢやうなり承ると申て梶原の源太かげすゑがろうの戶をひらいて大ぐじをぐそくし申よりとも御たいめん有てこのあひだの籠者の御しんらうさこそとおもひやられていたはしう候このたびのけしやうにはかさねて所知をまいらせんいそぎ國にくだり給へとの御ぢやう也大宮司きこしめされてあら所知もしよりやうもほしからずおなしくば景清をともなひてくだるとだにもおもひなばいかゞはうれしかるべきとさきだつものはなみだなりさてあるべきにてあらざれば大ぐし御いとま申て國へくだり給ひけりかくて景清ろうしやしてきのふけふとは申せども七十五日になりにけりいたはしとも中々に申ばかりはなかりけりかゝりけるところに六はらのみなみおもてを京わらべの三人づれにてとをりしがさきなるものゝ申やうあのしんざうの籠にはいかなる者のいりたるぞと申跡なる者が申けるはあれこそ平家のさふらひ大將惡七兵衛かげきよの入たるろうにて候へつぎなるものがこれをきゝ彼かげきよと申ものは平家の御代の御ときは二さうをさとつてふづしんのけゞんなんどゝ聞つるが平家にはなれ申かけきよが二さうもなにな

らずげんじがたにまさるつはものあればこそやすやすといけどつてわづかの籠にをしこめてはをきつらんあつぱれゆみとりはみると聞とはひとしからざるものかなとどつと笑てとをるかげきよろうの内にてこれをきゝげにもきやつばらは道理をいひつるものかなかげきよほどのつはものがわづかのろうにこもつてうき名をながすむねんさよさらば籠をやぶつて出ばやとおもふがとがもなき大ぐじに二たびうきめを見せ申さんもいたしく又千引のいしざいもくにあたつてなにごゝろもなくならびゐたるろうもり共をうちころさんもむざん也いかゞはせんとおもふがそれもおんびんのいたりいや〳〵籠をやぶつて出末代のものがたりにせばやとおもひおくのちからをいだしゐいやつとうごきけれ共ちびきの石ざいもくがをもければろうはちつともはたらかずもとより觀音をしんじ申事なればみやうがうをこそとなへけれなむやせんじゆせむげんくわん世音生々世々けう有しや

聞ノ假借

一文みやうがうゐつてうざいむしやうぶつくわとくしやうしゆと此もんを三べんとなへゆんでのあしをゐいと引たまことにくわんをむのりやくこそふしぎのはうべんにてや候ひけん一しやく三寸の大くぎがふつつときれて左右のあしはうちへいるたかてのなはを一しめしむればはらり〳〵ときれてのく七はうへつつたるかみをゐいやつとひきければかみのねがつよふしてぶる〳〵はつとみだれたりこしに付たるとうのつな寸々にねぢゝてかついだねほりの大つゝをみぢんのことくをしくだいて身をちつとほそめて籠のかうしよりつつと出てかげきよはにつことわらひてたつたるは人間のわざにてなかりけり景清こゝろにおもふやうとてもいでたるつゐでに又きよみづへまいらばやとおもひ觀音の御まへにまいりなむや大じ大ひのくわん世音さしも草さしもかしこきちかひのすゐ一せう一ねんなをたのみ有かまへてかげきよをあつけんにおとし給ふなとねんごろにきせいを

申おくのくわんをんに參り後世の事いのりそれより もさいもんに立いでゝみやこのかたをながむればそ のいにしへぞしのばるゝいたはしや平家の御一門は なのみやこに御座のときはきんくわをつらねすいし やうを家にかざりつゝくわうしやにぎよしてはくわ ゆうのきよくらんにのぞみ給ひしも人一さかりはな ひと時ふちは瀨と成世中とて名のみのこりていまは なしとてもろうより出るうへこれより四國西國へも おちゆかばやとはおもへどもしうとにうきめをみせ じためもとの籠にわれといりこゝろと死をしたりけ る彼景清がこゝろのうち何にたとへんかたもなし其 後かぢはらよりともの御前に參りなにとてかげきよ をひさしくろうしやさせられ候ぞ御意をうけはから ふべきと申賴朝聞召ともかくも梶原はからへとの御 諚也承ると申て嫡子の源太に申付る源太承りくつき やうのつはもの共を三十余人こしらへかげきよを籠 よりとつて引だし六條河原にはめいて出にしむきに

ひつすへたりかげきよなにとかおもひけんゐたる所 をづんとたつて南むきにぞなをりける源太これを見 てげにや景清は二さうをさとつて佛神のけやんなん どゝ承りしがさいごにもなりしかばこゝろどうてん し給ひて西方をさへしらずして南方にむかひ給ふか 景清これをきゝおろかなり源太殿それ法花の名文に 十方佛土中ゆいう一乘ほう無二やく無三しよぶつは うべんせつときくときは西方にかぎらす十方はみな ぶつどさうぞはやきり給へ源太どの源太このよしき くよりもそれは御身とそれかしがもんだうたいけつ いたさばこそくちはきゝをとるべけれうけて見たま へかげきよと三尺八寸のいかものづくりするりとぬ きよこ手ぎりにちやうとうつおしむべき年のほど三 十七と申にはくびはまへにぞおちにけるさる間源太 は景清が首をとつていそぎよりともの御めにかくる よりともをはじめたてまつり八ヶ國の諸大名をのを の首をじつけんし給ひけりその中にちゝぶのはたけ

やま殿は清水參りをし給ひてくびのしつけんにもあひ給はず六波羅の南おもてをうつて下向し給ふ處にこゝにひとつのふしぎありかのかげきよがろうに又人の有て申けるはあれをとをらせ給ふはちゝぶのはたけやまどのと見申たりさいごの時は萬事賴たてまつるしげたゞきこしめされてそれゆみとりと申はけふは人のうへあすはわが身のうへにて候へば御こゝろやすくおぼしめせ御さいごの御ときはかならず人をまいらせんとて馬よりおりしきだいしそれよりもすぐに六はらどのに參り何とてかげきよをばひさしくろうしやさせられ候ぞよりとも聞召扨は景清といふ者はいくたり候ぞ一人をば源太が手にかけ六條がはらにてちうし首はいまだこれにありそれ見給へとの御ぢやうなりしげたゞ謹言承りしばし物も申さずやゝ有て申けるはこれはかげきよがくびにても候はず又餘人のくびとも見えず候よりともきこしめしふしぎの事をのふ給ものかなたゞいま迄は景清がくびとこそおもひしに重忠のことばに付てちつとふしむにこそ候へよく／＼見給へとの御ぢやう也しげたゞ承ていかでそれがしもくわしくは存候べきされ人間はみづと見れば魚はいへとみる天人はるりと御らんずればがきはほむらとみるこれをしけんの不同とは申なりよく／＼見たてまつればせんじゆの御くしにておはしますかたじけなくも五智のほうくわんよりもこんじきのひかりのたゝせ給ふぞやよりともきこしめしうらやましやなかげきよはいかなるぜんごんを仕りかゝるりやくにあづかるらんはたけやまとの御諚なりしげたゞ承てあらおろかの御ぢやう候たとひぜんごんをしゆするともがらと申ともみやうりをさきだてん者は無智無形のものにおとり候べしたとひむちむぎやうのともがらとは申とも諸神しよぶつを賴申さんものはなにのうたがひの候べきされぼさつのさんげのぎやうと申は三つに下ると見えたりあるひはせつしやうちうたう

しやけんはういちのともがらにあひまじはり給ふ時もありあるひはこつじきひにんにあひまじはりせぎやうをうけ給ふときもありあるひはかゝる死縁にのぞむで其苦にかはり給ふ也五りん玄ゆししゆへんきちくほうかいにんでんかいせ大日ととかれ佛道ならぬ事なしかの景清と申はその身はけゞんのよろひをきると申せ共玄んいの火をけしまうねんのちりをはらひほんらい玄やう〳〵のくわんに入てありければかたじけなくもくわんおんはかたちをずい玄んのはやしにわかちかげをきゑんの水にうかべ給へり大ぢひ心大びやうとう心大にんにくしんうせんちやくしんくうくわんしんいせつしんむしやうぼだいしんこれ也はつかんはつねつのそこまでもらし給はぬは大ひのりやくとこそきけこれ〳〵御覧候へとかたじけなくも御くしをさしむかへ申せば鎌倉殿をはじめてその座にありし人々かんたんきもにめいじつゝひるいそでをうるほしてみならいはいをたて

まつる頼朝ふしぎにおぼし召かげきよがろうへつかいをたて扨かげきよはいかなる佛神をたのみ申て候らん景清承てさん候それがし玄やくねんよりもとをきかたきを射ておとしちかき敵を切ておとすかゝるぶげいをこそたしなみて候へいかなる佛神をも頼申さず候さりながらつねに清水を玄んかう申て候と御返事を申されければよりともきこしめされて東山清水寺へ御使たつまことにきよみづのありさま申もおろかなりしとみかうしもみなあきて御ちやうをさつとをしあけてみくしもなきみそきれんげのうへにそなはりて御身體よりあゆる血はひとへにたきのごとく也ないぢんにあまりつゝらいばんなるとこまでうかぶばかりに見え給ふ御使此よし見奉り六はらどのに參りつゝありのまゝに申ければ扨はうたがふところなしと諸寺のそうを千人玄やうじ一萬座のごまをたきみくしをみそきにあわせ申二度清水寺とはやり給ふぞありがたきよりとも仰けるはかほどせんじ

ゆのふびんと思召るゝかげきよに對面有べしとの御ぢやうにていそぎ御前にめされひとへにおことをば清水の觀世音とおがみ申なりおことをちうするならばせんじゆの御くしを二度うち申たるに似たるべしこのうへはたすくるとの御諚なりかげきよ承りあら有がたの御たすけや候是と申も景清が十六のはるよりも三十七のいまゝでまいりたるりしやうとおもへばありがたきはかぎりなしよりともの御ぢやうには平家のときの所知はいかほどさうぞかげきよ承て二萬ちやう給て候よりともが代にも二萬ちやうあはせて四萬町あてをこなふいまよりのちはあくしんをひるがへしよりともにつかへ候へかげきよ承てあら有がたや候命をたすけたまふのみならず剰御おんをそへてたぶ君は世にありつべしともぞんぜずさりながらたちゐにつけきみを見申さんたびことにあれこそ主君のかたきよあつぱれ一かたなうらみ申さでとをもふ所存はつゆちりほどもうせ候まじそれおんをみておんをしらざるはうへ木の鳥がをのが住えだをからすにことならずちゝぶどのゝこがたなをこひとつて兩眼をくりいだしうす折敷にならべよりともの御めにかくるよりとも御涙をながさせたまひされば唐土に玄といふとりを三とせかふて古人ひとつのとらをとる我朝のはぢあるさふらひにをんをよくあたふれば玄うのいのちにかはるとはかやうの事をや申らんいかにかげきよこのまゝみやこに有たきか景清承て花の都も何ならずなか〳〵おもひもよらずと申さらばおはりに妻子があれば下りたきかとの御ぢやうなりかげきよ承てゆくもゆめとまるも夢二世とかねしも夢なればくだりてゐきも候はずおなじくは西國へくだしてたべと申せばやすきあひだの事なりとて日向みやさきの庄をたまはると御判をすへてくだされけりかくて景清ははだのまぼりにおさめて御前をばまかりたち又きよみづに參り三百三十三卷の觀音ぎやうをどくじゆして三千三百三十三度の禮拜を奉

るありがたやくわんをんの三十三しんに身をへんじ十九せつほう御法をのべ衆生のぐわんを見て給ふとはいまこそおもひしられたれ内ぢんよりこんじきのひかりさいてかげきよかうべを半時ばかりてらし給へばとつてなかりし兩眼がたちまち出來て本のごとくに見えにけり爰をもつてあんずるににやくがせいぐわん大ひちう一人ふしやう二世願かたこまうさいくわちうふけん本覺しや大悲佛は三世にましませどせんじゆのちかひありがたきされぱうゐの法佛は夢のうちのこんくわさて又むさの三身はかくの前の玄つぶつゐきゐのすゞのよるのこゑはんごむかうのけぶりこそなきおもかげのかた見なれそれよりもかげきよ清水を下向しつくしにくだりけりみやこを立て東寺四塚うちすぎ月はなけれどかつら川ふねにのらねどくがなはてやまざきせき戸打すぎ兵庫にもつきしかば御一もんのすみ給ひしふくはらの京とは爰なりけりとふしおがみすまいたやとはりまにいりぬればそつ名ばかりはたかさごのおのへの松とうちすぎきみにたのみをかけ川の西方淨土はちかきやらんこはあみだがしゆくであり備前にきびつみや備後にともをのみちそれよりもかげきよ日向宮崎の庄に付て里人をよびいだし御判おがませ三とせと申に一間四ゐんにひかりだうをたてをき新清水とがくをうち朝夕他念こゝろなくねんぶつ申經をよみせんじゆのみやうがうをとなへて八十三と申に大往生をとげにけりかの景清が心中貴賤をしなべかんせぬ人はなかりけり

きりかね曾我

安元元年神無月の比奥野の狩場にて河津の三郎うたれし時五つや三の若有しを曾我の太郎助延（祐信ノ假借）養育し兄の一滿十一歳弟の箱王丸のとし物うき事こそ候ひけれ東八ヶ國の大名小名頼朝の御前にて御物がたりのありし時頼朝おほせけるやうは天下におゐて頼朝にまして果報の者は候まじそれをいかにと申に保元の合戰に祖父爲義をはじめ一紋（門ノ假借）みなうち死し中一年有て父義朝惡右衞門督にかたらはれ其軍にかけまけ東國さして落給ふ其時朝頼も御供申て候ひしが暗さはくらし雨は降西近江さがり松のあたりにて追おくれ奉り唯一人龍牙（華ノ假借）の闇に迷ひしに横川法師ゐ大將に大屋の忠寄といつし跡よりも追かけすでになんぎに及びしに北近江伊吹の麓草野の庄司にたすけられかれが所に年を越今はかうよとおもひしに義朝は長田をたのみ給へどもたのむ木の下に雨もりてやみ〳〵とうたれさせ給ひ御首のぼり獄門にかけられ給ふ由をきくせめてかはらせたまひたる御姿を成とも見參らせ猶も命のながらへばさまをもかへて御菩提を問參らせんとおもひしのびて京へのぼりしにいますかはらといふ所にて彌平兵衞にいけどられ六はらへわたされうたるべきにて有しを池の尼口（后字ニ似タリ公ノ借字カ）に助けられ北條ひるが小島へ流され伊藤北條兩人に守護せられ廿一年の春秋をおくりむかへて過し時伊藤の入道助近（祐親）につらくあたられ候ひつるその時の心にはあはれ伊豆を從へ野心の者を亡しおもひ知らせばやと明幕佛神に祈誓申せししるしにや日本をあつめてしるのみならず四海を太平にいたす事是しかしながら君の爲身の爲武略の功にしくはなしと仰られたりければ御前なりし人々もげに〳〵ゆゝ敷御果報やと同音に感じ申さるゝかゝりける處に工藤一老助（祐ノ假借）經すすみ出て申けるは今こそようせうに候得共末の世に野心を存べ

き者一二人おんひざのもとに候と申よりともきこしめされてそれはさていかなるものぞ助經さん候一とせちうせられ申たるいとうがまご河津が子一萬箱王とて二人の者候を曾我の太郎助延がやういく仕たるよしをもうすよりともきこしめされて曾我の太郎助延はさやうにふちうはあらじとこそおもひ候へそれをいかにともうすによりともが世をとりたるはじめよりふかきちうの候へばずゐぶんこなたをばたのもしくおもひしによりともがすゑ世のてきとならんことこそきつくわいなれいそぎかれらをめしのぼせよたれか有との御諚なり助經又申けるは誰々と申とも梶原の源太景末（季）ぞ候らんと申いそぎ源太をめされ如何にかげするゑ伊藤が孫河津が子一満箱王とて二人の者の候を曾我の太郎助延がやういくし成人するを待と聞いそぎ彼等をめし上せうんきをはねてすつべしはやとくとくとの御諚なり源太承荒淺ましやとは存ずれとも主命なれば背得すかしこまつて候とて御前

を罷立駒引寄て打のり曾我の里（にチ脱スルカ）も着しかば助延の宿所にたち寄君よりの御使に源太がまゐりて候とたからかにいひければ助延やがて立出かげするゑに對面し扨君よりの御使はなにの爲にて候ぞ源太聞て別の子細に候はず御子息達をめし上せ御對面あるべしとの御諚にて候まだようせうの人々に御罪科は候まじはや〳〵とく〳〵といひければ助宣（祐信ノ假借）聞しめしとかく返事もなかりけりあきを送るらうようは風なきに散うれひをもよほすなみだはとはざるに先おつる助延の心の中おしはかられてあはれなりや丶ありての給ひけるはあはれ世の中に子に縁なき者を尋ぬるに助延にとゞめたりそれをいかに申におさなき者を二人持て候ひしがいとけなくしてはかなくなり（なりノ下しノ字チ脱スルカ）かれらが母は別れをかなしみいく程なくてむなしくなりかつまのわかれ子どものなげき一方ならぬおもひ（おもひノ下とノ字チ脱スルカ）ともに助延も遁世修行とおもひたつて候處に伊藤の入道つねにきたりなにがしをなぐさめ物がたりのついでに承

れば曾我殿は妻子にはなれ給ふときくなにがしが孫一萬箱王とて兄弟の候をかれらを養（子ノ字ヲ脱スルカ）にし給ひて母もろともをき給へと再三申され候程にさすがうき世もいとはれねばかれらをやういく仕はや七年の春秋を送れば成人程もなし一萬生年十一歳箱王今は九つなり身のすいらふをもかへり見ず成人するを待たるは別のためかうらめしやげにも仇のすゑなれば君の仰は理りやされ共助延君の爲いままで不忠をいたさねばもしやたすけ給はんとほうこうだてを申さるるいかにがするよりともの御世をめされたる始めをかたつて聞せ申さん石橋山の合戰に御身の父の景時かう申す助延と平家方にてむかひしに源氏の勢を見渡せば唯蟷螂がおのづからはつかのせいをたなびきて雲霞の如くの平家の勢をふせぎ給ふはあはなれなるむかしが今に至るまで多勢に無勢叶はねば源氏合戰にかけまけてまなづるかうら引なみの頼朝御方にをくれ給ひふしきの中を頼つヽ御身をしのばせ給ひしは

御世のひらけんはじめなり其時かげとき助延心をあはせ申やう是はたくしのきにあらずせんぞのためかう〳〵也いざやとぶらひ申さんとふし木の中を見てあれば御物具のかな物白く見ゆる處を弓の弭をとりのべ木の葉をあつくはきかけさらぬ體にていたりしにつゞく共者あやしめかたらひよれば二人ふし木の上にあがりとうとうとふみならしそもなにものか今まで此木のほらにあるべきぞあやしきさまに宣ふはいかさまかげとき助延に心をかせ給ふかと兎角ちんする處に正八幡の誓ひかや此木のほらよりも鳩一番たち出てこくうをさしてとんで行くその時二人力を得あれ見給へやかた〴〵人のあらんず木のほらに今まで鳩のあるべきかかたきはかうこそ落つらんおつつけや人々と大勢の兵者をすぢなき方へおしへやり君を引たて奉り眞名鶴が浦まで御供申せし心ざしやはかは忘れ給ふべき其時頼朝我世に出る物ならば命の恩を忘れじと返々も宣ひしたとひおかす科ありと

などかは御免ならざらん御身の父のかげときに此事かたり給ひてそせうかなへてたび給へ景末聞てそれがしも存の事にて候父もろともに御前にてよきやうに申べきにて候御心やすくおぼしめせといひければ助廷聞しめされて莞嬉しやさふらふ去ながら母にしらせ候はんと簾中にたち入此よしかくとおほせければ母は夢ともわきまへずやがてきえ入給ひけり河津殿にはなれ申せしその時はつゆの命もおしからず消うせばやとおもひしが兄弟に目がくれいままたかかる身となればいつかかれら成人し助延のたよりにもなりもやせんと佛神にきせい申せししるしもなく今更かかるおもひをせんとしらずやと兄弟の若どもを弓手めての膝に置をくれの髪をかきなでていかに二人の若どもよおうち伊藤の科により鎌倉殿へめしのぼせころさるべきにあるぞとよ何とて君にはか程までふかき敵をばなしつらん扱若どもをさきだてゝみづからはなにとなるべきとりうていごがれ給ひければ二人の若ももろともになくより外の事ぞなき源太物ごしより申けるは御なげきを承なみだにむせびて候去なから口（是ノ字カ）は御使の身にて候程にはやとく〱といひければ母上聞しめされてげに〱御道理にて御座さふらふ去ながら別の悲しさにこそかやうに申さふらへ今は力に及ばずと二人の子どもを出立たせともの者どもいつよりもきらべ（びノ誤）やかにこしらへ父もろともに打つれて鎌倉へ行ぞあはれなる痛しや母上はあるにあられぬ心にてちうもんまで出させ給ひ兄弟の若どもか行つる方を見給へば雲かうかくのあとをうづみおもかげだにも殘らねばおもひの外にわかれ行霧に迷へる雁がねのなく音も我をとぶらふかよしなや今はおもはじと常の所に歸りかれらか住し所のしやうじをあけて見給ふに常に手なれしもてあそびこゆみにちくばつくり太刀つくりがたなのいつのまにはやかたみとは成たるや痛しや母上は責めておもひのあまりにやにうぼうたちを近づけてかたりなぐ

さみ給ふやうかなはぬうき世の有さまをなげくべきにはあらねども一代けうしゆの釋迦如來も子には迷の親の闇らこいちやうしととき給ふましてや申さん人間はあまたもちたる子をだにも一人におくるれば皆に別るゝ心地あり我はたゞひもなでしこの二人が中にもし一人いかなる事もあるならばなにとなるをの一松たぐひいかにとおもひしにかれにわかれて母ひとりおもひこがれていきてよもあすまで命ながらへじ此夕暮におとづれの聞まほしやとの給ひてきぬ引かづき打ふしてりうていこがれ給ひけり去間助延はとしよのひつじのあゆみひま行くこまのをのづからいそがぬたびとおもへどもその日のとりの刻にはや鎌倉に着にけりその夜は梶原が宿所にとまり二人の子どもを左右に置夜もすがらかいしやくし定めなき世をあんずるにげに／＼心にまかせぬ別の道とおもひきりおや子の契もけふ迄とあふ時よりもさだまりぬなげくは迷ひの凡夫なりさとり則佛にてあふも

嬉しかるまじ別もいかがうかるべきとおもひきつてまします處にかげするゑ申けるはなふいかに曾我殿それがしも御前にてことの子細を申とも此まゝ御免は候まし御對面も候はゞとり合よきやうに申べきにて候とく出たゝせ給へと(缺歟)口にいひければ兄弟此よし聞よりもいとけなき心にも最後とやおもひけんたがひに目と／＼見合てなくより外の事はなしなかぬもおやはかなしきにましてかれらを見るよりも父が心はかきくれて覺えず落す涙かなかくて有べき事ならねばかげするゑ御前に參る賴朝は御らんじてあれはいかにかげするゑ何とて昨日は歸らぬぞかれらはいかにと仰ければめしぐして參たる由申時刻うつして叶ふまじ由井の汀に引すへ首をきつてすつべきなりはやく早くと仰ければかげするゑ重て申べきやうのあらずして我宿所にぞ歸りける痛しや助延二人の子どもに宣ふやう助延過去に科ありと實子ならねばよも報いし伊藤河津がつみ科今養育をうけざればなにの報のあ

るべきぞ唯願は神佛まいり給ひて兄弟を助けてたはせたまへと祈念もいまだおはらねにはやかげすゑは歸りけり助延いそぎ立出て上意はいかにと問給へば源太涙にむせびつゝとかく返事もなかりけりやゝありて申けるは荒口惜や候貴て御對面も候はゞよそのそせうも賴べきに此儀由井の汀へ御供申首を切て參らせよ若君樣の御敎養に難ぜんとの御諚にて候と申もあへぬ處にまた御使ぞたちにける曾我の一萬箱王丸をとく〳〵きつて參らせよ時刻うつらばかげすゑもおなじ罪科たるべしとかさねて御諚候とかたりすて〻ぞ歸ける曾我も源太も兄弟もあまりのことに肝もきえむねふさがりて聲出ず實にせんだんはふた葉よりも香ししといふ鳥（鳥ノ上脱字アルベシ）はちいさけれど虎をとる得あり（名ノ誤歟）かれは育ければと儀による命をかろんじ後命を家に傳えんとなげくけしきもなかりけり兄弟申けるやうはいかに候父御前いそぎ乘物給り由井の汀へ出べきなりもしや賴あるにこそしばしもかくてありたけれ又御使たつならばかげすゑの御爲しかるべくも候まじとても叶はぬ物故にかまへてなげかせ給ふなよ父御前といひければ曾我は子どもにいさめられこしさしよせて兄弟のせ由井の汀へ出けるが落る涙に目が暮て道もさだかに見えわかずしどろもどろにあゆみけり鎌倉中の貴賤上下曾我の一萬箱王丸のさゐ後の體のあはれさよと袖をゑぼらぬ人ぞなきかくて汀に着きしかば敷皮敷せこしよりおりいまが最後候よきられて後に我〳〵はいかなる所へゆくべきぞおしへてたばせ給へ父御前といひければまたようせうのものどもが最後をゑらぬあはれさよとみな涙をぞ流しける助宣さしよつてのたまひけるはいまが最後よ兄弟きられて後に汝らは祖父伊藤の入道父河津の三郎と一蓮に生べし必死て行者は佛の御前に參るなりまづ初七日はしんくわう王本地は不動明王也二七日は初江王本地は釋迦にておはします三七日はさうてい王本地は大聖文珠なり四七日は五官王本地は普賢

菩薩なり五七日は閻魔王本地は地藏菩薩なり六七日は變成王本地はみろく菩薩なり七七日は泰山王本地は藥師如來なり百ヶ日は平等王地本は觀世音一周忌はとし王本地は勢至菩薩なり又三年はごだうてんりん王本地は阿彌陀如來なり七年記（忌ノ借）はあしゆく佛十三年は大日如來三十三年は虛空藏菩薩なりかくの如くの佛たちもろ〳〵の非（悲ノ借）願おこし衆生齋（濟）度したまへりいとけなければ汝らはつくる罪のなきによりかゝる佛の御前へ參るべき事どもはうたがひさだめてあるまじひかまへてふかくに見ゆるなどさもかうしやうにのたまへども見ればあまりの不便さに人目もさらにはばからずふかくの淚をながさるゝかやうに時刻をうつす處に一つのよろこび候けり三浦の儀（義ノ誤）盛宇都宮の友綱千葉助經高この人々を先として東八ヶ國の大名に君そせうの爲に連參申也源太殿も曾我殿もそぞろにきらせ給ふなよと使をたて給ひ各御所へ御參ある申上られけるやうは曾我一萬箱王丸を誅せらるるよし年まだようせうの者どもになに程の事の御座候べきたすけ御をき候へかしとおの〳〵申されたりけれど賴朝聞召て誠面々の忠節いつの世にか忘れ候べきさりながらみな〳〵存の如く伊藤の入道助近につらくあたられ候ひつる其時の心にはかれら程のものを千人切てあくべきか扨はめん〳〵は伊藤に賴朝をおもひかへ給ふか口おしさよとおほせければ連參の人々もかさねて申べきやうのあらずしてみな〳〵屋形にかへらせ給ふ助延此事を汀にて傳へ聞扨はいかやう成人の御申成とも叶ふまじひとおもはれければ草のかげなる助近にうらみ事をぞせられける金はいさごにまじはれども朽ることの候か君は正しき淸和のなかれ一旦落ぶれ給ふともすゑに賴をかけ申不忠の心なかりせばかゝるうきめにもあはじ北條殿は君の爲不忠の心なきにより君をむことり給ひ今は子孫も富榮へ肩をならぶる人もなし浦山しの北條や浦めしの助近やと過しむかしをうら見しははかな

かりける次第也さてあるべきにてあらざればはやきり給へ源太殿扨々母が方へはなにとも申まじひかと涙と共に仰給へば兄弟此由聞よりもさん候心にかゝる事とてはよはひかたぶきおはします母御をさきに立て參らせ御あとをもとひ參らせんとおもひしにおもひの外にさきに立ち申あとにて物をおもはせ申さんこそよみぢの障りとなるべき去ながらいまこそかやうにありとも來世にては一蓮と候ゆへに生れあひ申べし叶はぬ事をたのみになげかせ給ひ候なとはゝ上の御心をもなぐさめ給へ父御前とおとなしやかにいひければ貴賤群集の人々もみななみだをぞながしける扨あるべきにあらざればはやきり給へかげすゑ念佛申せ兄弟と懇にすゝむればいとけなき聲をあげ南無阿彌陀佛彌陀佛と十返ばかりとなふればかげすゑもおもひきり太刀とりあげぬきもちてあゆみよりて見てあればいづくに刀を打かけてきるべきやうのあらずして本の座敷になをりけり助延御らんじてなふなにとてきらせ給はぬぞさん候一定きりそんじつべう候なにがしか內に吉田兵衛と申てふてきの者の候こなたへ參り兄弟の太刀とり申せとてかたはらよりも呼出す助延御らんじてなにがしが子にて候を御內の人の手にかけきれとの仰は口惜ふ候なにまでも候はずなにがしが手にかけよみぢをかろくすべきなり嬉しひか一萬座敷になをれ箱王とすてたる太刀をとり上歩みよらせ給へばわれおとらじと手を合せ父にきられんうれしや兄なれば一まん先さきにとぞすすみける箱王は我を先とく〳〵（しヲ脫スルカ）きらせ給へとて左右の袂にとり付てむつまけなる有さまをなににたとへん方なしかやうに時刻をうつすところに一つの悦候ひけり父部（秩父ノ假借）の重忠はすぢかい橋の屋形を出濱面を見てあれば貴賤群集をなすなに事にやと問給へば曾我の一萬箱王丸を誅せらるゝと申候へばかねてもきひつる事源太殿も曾我殿もそゞろにきらせ給ふなと使をたてさせ給ひ御身は御前へ御參有申上られけるや

うは唯今出仕申とて涙をもてを見て候へば貴賤群集をなすなに事にやと尋ねて候へば曾我の一萬箱王丸を誅せらるゝ由年まだよう少のものどもに何ほどの事の候べきたすけ御置候てなにがしに御あつけ候へかしかれ成人仕もしも不忠を存はなにがしが手にかけ首をきつて參らすべし此度の命を御たすけ候はゞ時の面目たるべき由申上させ給へば賴朝聞しめしてなふいかに重忠かやうの事を申さねば唯賴朝がひが事もおもひ給はんする程にかたつて聞せ申べし賴朝流人たりし時北條ひるがこ島へながされ伊藤北條兩人に守護せられ廿一ヶ年の春秋を送りむかへてすぎし時伊藤が娘にいひかはしはいしよのうきをなぐさみぬかくて日かずをふるほどに若を一人まふけつゝ嬉しさたぐひ候はずかまへて果報目出度正八幡の嘉護ありて家をおこし名をあげて天下のぬしとあふがれよといつきかしづき日を送るかゝりけるところに伊藤の入道助近は三年のわうばん勤めて都より下りしがはや此事を聞付誰がはからひに賴朝をはむこにとりてありけるぞ平家の御恩を此間天山に蒙り妻子をふちし身をたてゝ人となる助近が世になし者をむこにとり孫をまふくるものならば老のくげんに縄かかりうき目を見んこそ悲しけれとむすめをばとり返しやまきはんぐわんむこにとり三つになりし若をば伊藤がたきにしづめしはなさけなかりし次第也やがて賴朝をもうつべきにてありしを伊藤の九郎がなさけにて命ばかりはとにかくにながらへけるぞふしぎなるはぢの上（本ノマヽ）のなげきなつき（本ノマヽ）のちりよくをは筆にもいかで盡すべきその時の心にはあはれ伊豆を下が（從へノ）へやしん（假借）の者をほろぼしおもひしらせばやと明暮佛神にきせい申せし志るしにや日本國のぬしとなるやまきいとうをほろぼしくわひけひ（本ノマヽ）のはぢをすゝぐなりさればふるきこと葉にもぞちうをばなづきをわつてずいをとりてきとうをは根をたつて葉をからせと申ことの候ぞ彼等は正敷伊藤が孫此世に助けておかん

事虎の子を野にはなし龍に水をあたふるに似たるべしよく聞給へ重忠じよの事にて候はゞなにかは背き申べき此事におゐてはおもひもよらぬ事なるべし時刻うつして叶ふまじひぞはやとくきれとぞ仰ける重忠かさねて申上られけるやうは御諚を委敷承り涙にむせびて候人間不定の慣ひにてはやきむくひを存不忠致す伊藤こそ返々も口惜ふ候へされぱいんぐわたちまちれきせんたり御物がたりのつゐでいんぐわの道理を申上べしいま三しやうがさきかとよ天ぢくくしな國にれう王と申御門一人おはします是隱なき惡王なり彼國にいんねんほつしと申て賢人の候がひだうのちよくをそむくとて親子三人誅せらる今度はいんねん法師太唐のゑんのゆうわうに生れかはり給ふ扨天ぢくのれうわうはたいたうのごめいしこうと申民のやつこにうまれかはり給ふゑんのゆうわうにきられ給ふこれ前生のむくひにてのがれかねたるわうじなりさればかやうのいんくわに若君樣もあへなく

むなしくならせ給ひぬ扨三じやうはちんりんすなをこのねんをすて給はでいんぐわをかへり見給はずばたがひにうつゝうたれつ生々世々に盡すまじひあはれ此者兄弟を御たすけ候てともにしやうじをはなるべきたよりとならせ給へかしいかに〳〵と申さるれどとかく返事もましまさずやゝや（あノ誤カ）りてのたまひけるは今朝よりも八ヶ國の人々の訴訟ありつるをもちいず唯此事をは賴朝にゆるさせ給へと仰ありさうなく用給はず重忠承口おしの御諚や候今朝よりも八ヶ國の人々の訴訟ありつるそのあとに重忠が參り無用の訴訟申かゝり叶はで歸物ならば父部の家のふかく末代とても面目なしきみは正敷せい將軍にて理非をたゞし國を守り給ふ身が是程の訴訟をなどや叶へてたび給はぬぞ祖父伊藤は過し事またようせうの者どもに是程迄の御罪科あるまじき事にて候何までも候はすかゝるそせうを申さんとおもひ立て候事ちゝぶみやうけん大菩薩にはなされ申此度一門の運のきは

まる處成べしかれをきらせ給はゞ御前にて腹切ていとけなき兄弟がさうの手を引候て四手三づ（死出ノ假借）を引わたしあびたんしやうのそこに有わうぢ伊藤の入道と父河津を呼出し二人の子供を手わたして□□□□（古はうばい歟）の玄るしにせんいかに本田半ざいよ濱（ほノ誤）に下りて兄弟が最後の體を見て參れ暇申て我君と刀のつかに手をかけておもひきられし有樣を物によく〳〵たとふれば漢の高そのたゝかひにかううがせんにかけまけかんやうの陣をはつしりよ馬どうをまねけどもかたきおそれてちかづかねば我とつるぎをぬきもつて我首をかききりかたきにわたすいきほいもいましげたゞの有樣もいかでかおとりまさるべきコトハ賴朝仰けるはあらふしやうの重忠の訴訟や叶はずばはらきらんとのたまふや前代未聞の事どもかな力及ばず兄弟を重忠に參らする去ながら今朝よりもそせう有つる人人の口口はうらみも有ぬべし心得たまへとのたまひてくだしたぶこそ有がたけれ重忠あまりのかたじけなさにかうべを地に付給ひあら有難や候唯今のそせう叶へてたまはる事生々世々の間にやはかわすれ申べきとあまりの事の嬉しさに嬉しなきにぞなかれける頓て御前を立半ざいを使給へば半ざい濱に下り重忠の御そせう有兄弟の人々を御たすけ候なり源太殿も曾我殿もはや〳〵歸らせたまへとたからかにいひければイロフシ濱にあつまるのみならず聞人ごとにイロフシ手を合ありがたの重忠やさしの人の心やとよろこばざるはなかりけりコトハ助延は半ざいと打つれ二人の若を引具し重忠に參らせ給ひあら有難や候唯今の御そせう有兄弟の者どもか命たすけてたまはる事生々世々の間にやはかわすれ候べきとカヽルフシあまりの事の嬉しさに同嬉しなきになかれければ重忠ももろともに悅の泪をながさるる其後助延申されけるはいま玄ばらく御物がたり申度は候へども古鄕に殘りたる母にて候者さこそなげき候はん先□歸此ほうしの有さまを委敷申聞せかされて參り候はん

とねんごろにの給ひて二人の若をこしにのせ古郷にかへらるる心のうちの嬉しさをなにゝたとへん方もなし痛しや母上は子どものおもひにたえかねてなきふしてましますに處に曾我殿も若達も御よろこびにて唯今かへらせ給ふといひければ母は夢ともわきまへずカヽルフシ二人の若もこしよりおりカヽルフシ母の袂にとりついて是はゆめかやうつゝかとなくより外のことはなしやゝありて母上は涙とともに宣ふやう此程はげにうばたまの夜もすがらなきあかしつるかなしみに由井の汀できられしが若も夢にや來りけん死たるものはさなりとも父は夢にはよもきたらじあな嬉しの夢ならば又やわかれもあるべきとおもひこがるる心こそことはりせめてあはれなれ片ツメやゝありて助經はじめおはりの事どもくはしくかたり給へば母やめのとは手を合ありがたの事どもや重忠のましまさずばいかでふたたびあふべきとよろこぶ事はかぎりなしクセされば うい の ほうふつは夢のうちのごんくわさてまたむさのさんしんはがくのまへのしちぶつふきろの鈴のよるのこゑ反魂香のけふりこそなきおもかげもうつるらめカタツメ是はたゞひもなくとりのあくがれ母のなげきしに君のめぐみのふかうして科をゆるし理をたゞしあふげはたかきつくば山をいもかへす松風のみどり子なればなきおやの君に不忠のすゑなればかくしそだてし古しへの心にいまは引かへなげきはかへり悦の御酒もりと成に（てノ字ナ脱スルカ）けり扨兄弟の人々成人年をかさね兄をは曾我の十郎弟を五郎時宗と隠れなきゆうしなりおやのかたき助經を野にふし山に隠れ居てねらひうかがふ有様をよその見る目も中々に心ぐるしき次第也ねらふ所はどこ〳〵ぞばんにうと目らつかおほいそこいそまりこ川あみのいつしき小田原此世をいでの屋形まで三十八度ねらひ終に本望とげつゝこうめいを家に殘しけり

元服曾我

文治元年正月十三日に鎌倉殿箱根まふでとぞきこえけるさるあひだはこれにはかまくらどのゝ御まいりとてだいしゆ衣を用意しちごのいしやうをけつかうす其中にかはづの三なんはこわうどのいしやうの事をばおもはずしようちではなれしちゝごの御事今のやうにおもはれてしのびの涙せきあへずこしの式部をちかづけてかまくらどのゝ御參りに我は出仕を申まじそれをいかにと申におほぢ伊藤ふちうの者とて御にくみ有し事世にかくれも候はずしきぶ此よしうけ給はりさも候へこれほどちごだいしゆけつかうあるによそながら御見物候へかしさらば見物申さんとてかうだうのにはに出かまくらどのゝ御まいりをいまやをそしとまち給ふかくて鎌倉殿御登山ましくてかうだうにうつらせ給ふ去程にはこわう殿しきぶたゆふをともとしてげちんのかうしのきはまて出さもあれかたきのすけつねと名のみ計はきゝけれど其すがたをばいまだ見ずかたきをとはて（本ノマヽ）とおぼしめしかまくらどのはいづくにましします式部殿とぞとふたりけるしきぶ此よし承りだいもんのさしぬきにたてゑぼしめされたるこそ鎌倉殿にておはしませはこわう聞召おろかの人のをしへ事やさればとてかまくらどのを見そんずべきにてあらね共かたきをとはんがためぞかしすけつねはとふならばしきぶたゆふがこゝろへてあれよとをしゆる事あらじ八ヶ國の大みやう小名の名字をとひてみんずるにすけつねといふ者にとひあたらぬ事よもあらじとまだいとけなきこころにもあんをまはすぞおそろしき

扨君の弓手のわきになをられたるは誰候ぞあれこそむさしにかくれなきちゝぶのしげたゞと申人にておはしませ扨又めてのわきになをられたるはたれ候ぞさがみの國の住人わだのよしもりと申人にて候又き

みの御前に中座につきましますはいづくの國のたれ候ぞ伊豆の國の住人ほうでうの四郎ときまさとて君のためには御ゑうと其つぎなるはたれ候ぞたしろのくわんじやのぶつなとて是も伊豆には大名なりそのつぎ〳〵は誰候ぞへんみたけだ小笠原一條いたがきなむぶしもやまみなついたりといひけれどなを祐經ときかざりけり扨又げぢんのかうしをきたむきにはらりとゐながれたるはたれ候ぞあれこそ相模大名にさんまほんま土肥つちやとをたうみの國の住人にしたらなかやま皆ついたりと云けれどなを祐經ときかざりけりさて又げぢんのかうしを西むきにはらりとゐながれたるはたれ候ぞあれこそ信濃大名にしなたかなしうむのもちづきいぬかひすは殿原こもりしろとりはつとりたうみな御ともといひけれどなをすけつねときかざるはこわうにつゝむかおぼつかなし扨はすけつね此度の御ともをば申さゞりけるや御供申て有ならば伊藤の大將にて有あひだばつ座にはよもあらじさらばかへらんとおもひしが又たちかへりとふたりけりさてあのらいばんのきはにうすかうそめのひたゝれを着さもゆゝしげなる大名はいづくの國のたれ候ぞゑきぶ此よしうけたまはり今までゑろしめされぬやあれこそ御身のためには限ぜんのいとこくどう一郎すけつねと申人にておはしませ箱王どのは開召能こそたちかへりとふたりけれようちにてはなれしちゝごにすこし似てや有らんとおもへば敵ながらもなつかしく見とれてこゝにはこわうどのばうぜんとしてこそおはしけれ祐經何とかしたりけんはこわうどのを見つけあふぎをあげて是へ〳〵とまねきけりはこわうどのは御覧じてかたきのよぶがうれしさに大勢の中をのりこへ乘こえとをつて祐經がそばへぞよつたりけるすけつねはこわうどのをひざのうへにかきのせ申いかに箱王殿それがしも御一ぞくのかたはしとめしをかれくどう一郎祐經と申ものにて候はこわうどの此寺にましますよし承て候

へどもくはうひまなさゆへ御めにかゝらぬなり見參のはじめになにをがな參らせん少人の御ためには似合ぬ引出物なれ共家につたはる重代とてあかぎのつかにしろかねのめぬきどうがねうちたるこさすがをとり出てはこわうどのにぞ引にける

箱王此由御らんじてあらうれしやかたきの手よりもかたなを得たる事ひとへにはこねごんげんのいたさせ給ふつるぎなりとつてひきよせ一かたなと思ひ切ては有けれどすけつねはふるつはものはこわうは生年十三なりうてがほそくしてきごめのうへをとをすまじとをさぬものならば鎌倉殿の御目の前八ヶ國の大みやう小名の御らんずるところにておやのかたきをうちそんじめいどにましますかはづどのまつだいそがのうきなをくださん事のむねんさよとやせんかくやあらましとあんじわづらふその時刻にかまくらどのゝ御下向とて大名小名一度にざしきをはらりと立すけつねも座敷をたつまのあたりなるかたきをうたですごすぞむねんなるそれよりもはこ王殿がくもんじよにたちかへり只この事をぞあんじけるぬればかたきが夢に見えをくれば身にそふこゝちにてがくもんこゝろにいらずかくて年月ををくるほどに十六になるはほどもなし去程にべつたうはこわうどのゝの御ぐしおろさんとて吉日えらび曾我へ案内を申されたり母上きこしめされて明日箱王法師になすべしとてけさころもをよういしはこねへのぼせ給ふ十郎どのはきこし召ちごのすがたを今一度見ばやと思召はこねへのぼり給ひけりはこわうなゝめによろこふで一間どころへしやうじ申扱はこわうはほうしになるべく候やはこわうほうしになるならば御身にたぐふものあらしたゞしほうしになるならば一人はてらのすまゐをし祐成はさとにましまさばかたきのくどうすけつねをなにとしてかは打べきぞ十郎どのとかきくどきなくよりほかの事はなしすけなりさうがんに涙をうかべあはれげによの中に兄弟にえんなきも

のは祐成にてとゞめたりそれをいかにと申に京にま
します小次郎殿は都の住居とましませば身の本望を
もかたりなぐさむ事もなし越後成ぜんじばうは國は
る〴〵にてをとづれなし二のみやのあねごはによし
やうの身あるゑるしもましまさずはこわうさへ法師
になり祐成はともゝなぎさのうつせがいくだけても
のをおもふともたれかあはれととふべきぞ箱王殿と
かたりつゝ又はら〳〵となき給ふその義ならばはこ
わうもおとこになりすけなりの御供申べきかたゞし
母上の御ふけうもや候べき御身男になりて後たとへ
母上御ふけう候ともそれがしよきやうに申なをす
べしさらばおもひたらんとてつねのところにたちか
へりくわしき事をかきとむる名殘をばなごりをば（カヘシ歟重複本ノマヽ）は
こねのおやまにとゞめをきふたつとなきいのちをば
めいどにましますちゝかはづどのにたてまつるしし
やう同宿人々に名ごりのかずはおほけれどおもひた
ちぬるたび衣又こそきてもあふべけれかへす〴〵も

なごりおしのしきぶたゆふとかきとゞめ夜のまにゑ
のび出にけりはまべの宮をすぢかひにやけゐの露に
そぼねれてそがの里にぞくだりけるすけなりおほせ
けるやうはやがておとこはなすべきがゑほしおやに
はいかなる人を取べきぞ伊豆の北條をとるべしさり
ながらかちにていかゞ行べきぞ祐成馬を用意すさす
がむまは一疋なりすけなり馬をひきまはし乘やはこ
わうめされ候へ十郎殿すけなりきこしめされてあら
おろかの事やちごをかちにてあゆませ大ぞくの身と
して馬にのりろじをゆかうずほどのぎやくなる事の
候べきかいかなる御事候ぞ舍兄をかちにてあゆませ
申弟の身として馬にのり路次をゆかうずるほどのぎ
やく成事の候べきかめされ候へ十郎どのはや乘やは
こわうと兄弟馬をゑきだいす時刻うつりて夜明なば
おほかたとのにもれ聞えとゞめられてはかなふまじ
はこわうどのものり給へ助成ものらんとてむまいつ
ぴきに兄弟のりそがのさとをぞ出にける上古も今も

末代もためしすくなき次第なりこまをはやめてうつほどに北條のたちに着馬するにてむまよりおり門外にこそたゝずみけれ折ふしえまの小四郎出あひていづくへの御とをりぞすけなりきこしめし是へ參る事別の子細にて候はずこれなるわつぱにゑぼしがきせたく候てこれまでまいりて候えま殿きこし召やすきほどの事にて候さりながら父北條に申きかせんとてうちにいりときまさにかくと申ほうでう聞あへず涙をさつとうかべたまひそれむかしは六十六ケ年を一むかしとし中比は三十三ケ年當代は廿一ケ年を一昔とすあらむざんや此人々よが世にてゑぼしおやを取ならばげんじにてはかまくらどの平家ならば小松殿の御前にてゑぼしをきうする人々が時代にしたがふならひとてはうばいをたのみきたる事のあはれさよそれ〳〵こなたへしやうせよとてなけれどでゐのちりをとりやれねどすだれかけなをしひきつくろへばすでにはや時うつり返事もなかりけりはこわうおほきにはらを立いかにや十郎殿ふしぎやなえまどのはなにとてをそく見ゆるぞやがて心得たり昔は伊藤ほうでうとて鳥のふたつの羽がひくるまのりやうわのごとくにてをとりまさりはなかりつるに當きみの御代と成て我々兄弟よになし者にて有あひだ北條がいやしめてゑぼしをきせじそのために扨ばしをそく見ゆるか其儀にて有ならばすは八まんも御ちげんあれ今生此世にておやの敵はうたずともれんちうへみたれ入てほうでうとさしちがへ死なふずるにて候ぞやそこのほどをは十郎殿も御用意あれとぞ申ける助成きこしめされてよし〳〵北條もさはおもはれ候まじこゝろをしづめてまたせ給へとせいし給ふところへ江馬殿たちいでざつしやうかまへ候とてをそく參り申て候こなたへ御出候へとて兄弟をしやうずその時箱王いろをなをし兄弟つれてぞ入にける一にはちご又客人なればはこわうをゆんでのわきになをしすけなりをめてのわきにしやうせらるゝ其外えまの小

四郎をはじめ一ぞく家のわかたうくるま座にはらりとゐなをり三ごんの酒すぎてのち北條ざしきをたち給ひゑぼし一かしら取いだしはこわうどの丶かみはやゑびんかきすましきせ申名をばほうでうの助五郎時宗とつけいかにめん／＼聞給へそれゑほしをきる事はわたくしならぬ事にて有清和天皇の御代の時異國よりも我朝へ作り物をわたされたりくぎやう殿上人納言さい相以下北面うくわんむくわん關白殿下さしあつまつてのせんぎなりみかどえいらんまし／＼て是はおのこのたましゐ名をはゑぼしといふものなりへりは大海つぶはほしくしがたは半月とがるは國のたけきさうかさくちのひろき事はいのちの長きさうにてありこゆいをゆひてきる事はさながらたゆみのはんふくのまなびなり此ゑぼしをきる人はいのちもながく名もたかく壽命長遠德有富貴の家に生る丶なりこのえぼしめされてするゑはんじやうといはひつつたちとかたなをとり出しはこわうどのにひき給ふ

助成御らんじてうれしやとはのたまはでなみだをさつとうかべたまひあらはづかしやむかしがいまにいたるまでゑぼし子のかたよりもゑぼし親のかたへこそ引出物をば申ならひの候に却て給はる事のはづかしさよとおもへばあせもなみだももろともにとゞめかねたるばかりなりほうでうとの御らんじてあらむざんや助成弟が烏帽子をきるほどに有し昔をおもひいだし涙のふせいのあはれさよすけなりがこ丶ろをもなぐさめばやとおぼしめしさけたぶ／＼とひかへ給ひ承はればちゝぶには六郎殿三浦にあさいな曾我には十郎殿一師に付て舞ならはせ給ふが中にも十郎殿の御まひすぐれたるよし承はるこれははこわうどの丶たうげんなればたゞ一かなでとこはれたりすけなり聞召まはじものとはおもはれけれ共まはではざしきのけうもなしまはばやとおぼしめしいつせいをこそあげにけれ

たつやたつ駿のをたまきくりかへし

昔をいまになすよしもかな

むかしを今になさばやとやゝしばらくうたひしがあら何ともなやこれはむしやうのたいぞかしまひなをさばやとおもひて和歌のたいをぞあげにけるきみをはじめておかむには千代も經ぬべしひめ小松〳〵と三返ふんてまはれば北條をはじめ奉りれつ座有し人人一度にあつとかんじけり其後まひもすぎければいとまをこふて兄弟曾我ふるさとにかへりけり。

和田酒盛

相模の國の住人わだのよしもりは一門九十三ぎをひきぐして出したじゆくかはら長者の宿所にうちよつて夜日三日のさかもりはおもしろふこそきこえけれちやうじやもかねてごしたる事なればかうしやうしゆんによせきくあひと申てとらにをとらぬゆうくんを十八人すぐつて和田どのをもてなせどされどもわだの心ざすとらはざしきになかりけりつかひをたててめさるゝに一度のつかひにまいらず二度の使に返事せず三度にもなりしかばわだ大きにはらをたて異國をみねばそはしらずほんてうにをひてをや武州にちゝぶ相州によしもりなんどがうちよつてさかもりをせんずるに人はよばずと出あひしやくをもとり今やうをもうたひすいさんせんこそほんにてあるべきにかほどめすに出あはぬとらはふしぎのものかな山下内をいでよといへあさいなとこそいかられけるははのちやうじやこのよしを聞召いや／＼あしかりなんとおぼしめしとらごぜのゐたりける一間所へたちいりゑやうじをへだてゝのたまはくいかにとらごぜたとひまん／＼の事有とも只今出てわだのまへにてゑやくとつて三うらへかへし給へそれふてんのしたに生をうけ王土にその身ををく事は大事にてあらずやとらごぜとぞおほせけるとら此よしをきくよりもあらうたてのはゝ子の（御ノ悟）御やけんしむは二君につかへず貞女りやうふにまみえずと申ほんもむこそさふらへすけなりにけいやくし又助成をひきかへてわだにけいやくあらんとやおもひもよらぬ事なるべしとらは是にありつるがよになしものゝ十郎とちぎりをこめ鎌倉のかたへとも申させ給へはゝうへとめせどもとらはいでざりけり母のちやうじや至極のはらにすへかねていかにとらごぜきゝ給へむかしもおやにかうあるともがらをわごぜに語てきかすべしそれはく

ゆうは母にうたれ打つえをばかなしまでよはるつえにねをぞなくしんのまうそうはゝのねがひ物とてときならぬしはすにたかんなをもとむるに雪くうざんにふりつみたかんなさらになかりけりしよてんこれをあはれみたまひ雪のなかに竹の子三ぼんまてそだつよろこび是をとりてかへり八十にあまりたる母のねがひをみてけるとうけたまはるくわつきよはははをやしなひかね我子をつちにうづまんとうちけるくわの下よりもこがねのかまをほりいだし二度ちやうじやに成ときくさればにや人の子のたいないにやどりたねをおろすはかりごとはぼんてんよりもいとをそろし大かいのそこなるはりのみゝをとをすよりなをうけがたふてまうけたり二百七十餘日はたいないにやどり神ほとけにもいまれ申九ほんのじやうどへ参る事もなしたま〳〵人に生れくる其ときのくるしみはいきたるうしのかはをはぎせんからたちの其中へをひいるゝよりたへがたしげんとうそせつのふゆの夜はふすまをかさねはごくめり九夏三伏のなつの夜は松風にたはぶれてそらふく風をまねきよせをよそさんしをはごくめり三歳になるまでのみけるにうみぼんぶいかでしるべきぞかたじけなくも釋尊はだんどくせんのかたはらにてしづかにさんだむして見たまふにをよそ一百八十石にしるさるゝ此ことはりをきくときはしろきほねはちゝのおんしゝむらははゝのおんほうじてもほうじがたきは父のおんととかれたりしやしてもしやしがたきははゝのおんととかれたりじふおんかうによしゆみせん悲母おんしむによ大海いづれをほうじつくすべきぞやあとらごせたゞ今いでゝ和田のまへにてしやくとつて三うらへかへし給へそれさなきものならばそうじてあの十郎殿のむまくら見ぐるしきていにてそがよりもこれまでのしゆくがよひを思ひとゞまり給へとあらかにのたまひてちやうじやさしきへなをられしは十郎どのゝためにはめんぼくなふぞきこえけるすけなりさ

うがんになんだをうかべそれ天人の五すい人間の八苦とて八つのくの有其中にあはれたゞひんくほどものうき事はよもあらじひんくとだにもなりぬればゑたしきなかもうとふなりうとき人にはいやしまれたんぼの衣をそめされば佛ぼうそうをもくやうせず朝夕ともしければ三ぼうのふせをもをこなはず（本ノマヽ）ひやりしゆんしにましはらねはなぐさむかたもなしたまたまばつ座につらなつてこゝろはかうしやうに人にすぐれておもへどもかさねのきぬを身にきねばかたみつまりてはづかしゝけふこのごろすけなりなんどがたのみたらんずるゆうくんをそらくばあの殿原がぶんとしてゆうくん出せさかもりせむなんどゝいはしなれどもよにゑたがへばちからなしさぶらひか侍にむかつてうでくびをにぎり（本ノマヽ）きちちよくするはならひ也世をも人をもくずのはの〳〵うらむべきにてなしやとてはんくわいそねむ助成もわがみのほどをくわんじつゝたもとをかほにをしあてゝなくよりほかの事はなし

とら此よしをきくよりも十郎殿は何事を仰さふらふぞむかしの人がめに見えさふらふが東方さくが九千ざいうつゝらの八萬歳りうちくわしやうの二萬ざい上明こしのおきなの一千ざい二千ざいをふるとは申さふらへど名をのみ聞ていまは見ずあすをゑらざる心にてけふのらくこそうれしけれとゝろ〳〵となるかみもおもふなかをばよもさけじ一人ましますはゝのふけうはかうふるともざしきへはいづまじき十郎殿とかたりけり助成きこしめされてあらやさしの女のことばやかほどやさしきゆうくんを座敷へいださぬ物ならば長者のうらみふかゝるべしと思召いかにとうごぜたゞいまの言葉はやまならばしゆみせんうみならばさうかいよりも猶たのもしく候が爰にちかふことのはの候おやのふけうと仰らるる事はわたくしならずさんがいをいたゞひてましま す佛の御名をけんらう地神と申釋尊よつてとひ給ふ三がいをいた

だひてましますはいかほどをもきぞと問給へば地神こたへていはくしゆみの山にとうしみを一すぢをきたるたとへよりもなをかろく候が爰にをもきものありおやのふけうを得しうのかんだうをかうぶりたるもの丶とをるとき大地がわれてみがいればあたりの木草もかれはて川をわたれば瀬だへしそこのうろくづも生をめつし地神がかうべに七尺の劒をたつるよりたへがたしとのたまへばしやくそんもあみだ佛三世のしよぶつたち玄たをまひてぞおぢ給ふ又五しやうと申は五のまきのたいばほんに一しやふとくさぼむ天わう二しやたいしやく三しやまわう四しやてんりんしやうわう五しや佛しんととかれたり三じうと申はいとけなきとき父母の家とて家をもたねばおやに玄たがふく一つわかくさかんなる時はおつとの家とていへをもたねばつまに玄たがふく一つさて老して其後子どものいへとて家をもたねば子に玄たがへるくひとつされば佛のとかれたり三がいにかきもなし六道にほとりなし女に三の家なしとこ丶をほとけのとき給ふか丶るいはれの候ぞやたゞいま出てわだのまへにてしやく取て三うらへ返し給へそれさなきものならば名ごりおしくは候へども助成は曾我へ歸るべしとら此よしをきくよりもは丶ごのふけうとおほせらる丶をさへ御身にかへておもひしに御身もふけうと仰あらばさらば出んといふまゝに十二ひとへのきぬのつまを取てざしきへこそ出られけれつもる年は十七歳がいたう二ばんのゆうくんおとなげなくもよしもりのとらにこ丶ろをかけられしはことはりとこそ聞えけれとらごぜ出て和田殿ともてなせどもさかづきのけうたいこ丶ろにそまず吉盛(義ノ誤)御らんじていかさまにもとらごぜがさかづきのげうたいこ丶ろにはまずみゆるはつま十郎がうちにあるかゐたらば出て酒のめとつかひをたてよ虎ごぜとらな丶めによろこふで十郎のかたへつかひをたつるすけなりきこしめされて出じばやとおぼしめすがたゞいま出ぬも

のならばおくしたりと思召候の事にてある間かけえぼしにぞ着たりける夏の野にすりつくしぬふたるひたゝれ九寸五ぶんのよろひどをしたみたるあふぎをつとりそへ前はんにぞさひたりける大まくつかんでうちあげすけなり是に候とてざしきをきつと見わたせばちやく座にはよしもりをはじめ虎も長者も一もん九十三騎くるま座にはらりと居ながれすけなりがゐうするざしきはなし爰に和田の右座にたゝみが一帖あいた和田は三浦の大將とて恐れてなをる人も（はノ）なし（誤歟）祐成御らんじてあらこと／＼しや和田といふに三うらの大將祐成は伊藤の大將まつごかくなるさぶらひがわだがゐうずるざしきに祐成座せて有べきかとおめずおくせずはゞからで右座にむんずとなをるかくてさかづき三ごんとをつてのち母の長者ゐたるところをづんとたつてちやうだいへつつといりまきゐのばんにもみぢのかはらけすへていでいかにとらごぜ此さかづきひとつのふで何方へなりともおもふずるかたへさし給へとらこのよしをきくよりもあらむづかしのはゝごの仰やわだへならばよしもりへ十郎殿ならば祐成へさせとは仰もなくしていづかたへなりともおもふずるかたへさせとは和田にさすならば十郎のうらみあり又十郎にさすならば和田のうらみありとやせんかくやあらましとあんじたりしありさまを物によく／＼たとふればあかしのうらの人丸のすゞりと筆とれうしをそばにをかせたまひて出る船入ふねたつなみ吹風によそへて三十一字のことのはにもらさじとあんじ給ひしもこれにはいかでまさるべきふかくものにたとふるに大國の事なるに御門一人おはしますみかどの御名をはげんそうくはうていと申しかるにくわうていに三千人のきさきあり第一のきさきをぐし君と申さてその次のきさきをこうのうのやうげんゐんの御むすめやうきひとこそ申けれしかるにやうきひ三國一の美人たりみかどてうあひなゝめならずくぎやうせんぎまち／＼たりいやし

きひさぶらひの子どもやうきひか一のきさきにそなはらばもゝしきや大宮人をふりすてわれ〳〵内裏をまかり出むとそうもんすみぎをくだりにやうげんゑんの一たうぐしきみの一のきさきにそなはらばもゝしきや大宮人をふりすてわれ〳〵大りをまかり出んとそうもんすみかど此事をえいらんまし〳〵てやうやうしのありさまやあなたをいはへばこなたのうらみあり又こなたをいはへばあなたのうらみありいづかたのうらみをもおはぬやうにと思召てんほう十二年七月七日のひしゝむでんのかくのまに二人のきさきめされてるりのばんにはくせき黒石のてうづにすいぎうのつのゝさいを白かねのどうにいれはやく三ばん一とくせうぶにかけてくらゐをあらそひ給へきさきたちとせんじあるきさきは聞召れてうらみもこひものこらずさらばうたんとてさいのめをあはせらるはじめのかちはやうぎひそのつぎはぐし君手づめのせうぶに成ておりはになりければやうきひのこひめにてう三をこはれたりぐし君のこひめにてう四をこはれたりやうのこゝろいくばくぞてう三にもてう四にもかたきつておりずしどうのうちでこのさい二つづゝにわれては四つに成てぞ出にけるやうきひのこはれたるてう三もおりて有ぐしきみのこはれたるてう四もおりてありみかどえいらんまし〳〵あふやさしのさいやなんぢは牛のつのなれど人のこゝろをちゞに知てさやうにふるまふかやさらばくわんをなせとてさいのめにしゆをさいてそのときまではてつち重二てう三てう四でく重六と申せしをしゆさんしうしと申事この御代よりも始まれりそのさいと申はものゝこゝろ玄つたれば二つにわれ四つでいて二人のきさきそなはるそのごとくみづからもさしたきかたは兩かたなりさかづきはひとつ二つにわれてのけかしとちぐさにものをあんじけるとらごぜの心中たとへんかたはなかりけりはゝのちやうじや此よしを御らんじてあらをそやとらごぜさらばそのさかづ

きひとつのふでいづかたへなりともおもはざらん方へさし給へとら此よしをきくよりもはゝごはさながらものにくるはせ給ふぞやこのことばのなかりせばらう人なりきやく人なりわだへこそさすべきに此ことばをきゝながらわだへさすならばかいたう七ヶ國の遊君のなをりたるべしなんでうこのさかづきをばわだへはさすまじものつまの十郎にさそうず男なればとつてのまふずのむほどならばあさいなかふるこほりか座敷をたてぞせんずらんそのときみづからうへこそ女なりともこゝろは男子にちがふましあらなさけなしとよわだとのいろある人にいろなきは花みてえだを手折かやこゝをばひたすらみづからにゆるさせ給へとさゆるていにもてなしあさいながめてのわきにさいたる刀ひんばうてねだのこゝろもとにさしたてかへさんかたなにてみづから自がいし妻の十郎にはらきらせして三途の大河をすけなりもろともにてに手をとりくんでゆかばやとたゞ一すぢにおもひきりいかにや御一もんの人々はゝごのおもひさしせよと仰さふらふほどによそのけまふもさふらふまじとつまの十郎にさかづきをむずとさすすけなり御らんじていや／＼のふでは事あしかりなんいかゞはせんとおぼしめすが只今のまぬものならばおくしたりと思召あらめづらしの御さかづきやともつて三度ぞくんだりけるよしもりきしよくかはつてやあ十郎只今のさかづきはのむまじきさかづきなれどもまさしく吉盛をさけてとつてのふづるものかなそれさかづきのむはうがあるぞ玄ぜんわかきとのばらの川がりかりくらうちすぎゆうくんのもとへうちよつてさけをのむにさかもり亂舞に成ておもはしきゆうくんが一つくむでこれをばあれにまします人へとさいたるをとつてのふだるをこそ時のめんぼくなれさすは日比の女のむはひごろの男二人のものがたちいて又ざしきに人もなきやうにさかづきをさしかよはしのふづるところはよしもりがぞんじにははつくんちが

ふて存ずるそれおひたるをもつてうやまふを父母のごとしわかきをもつてあひするを師弟のごとししるをもつてじんりんしらぬはきちくおくせきはうばいのこらしめに座敷をとつてをつたてよはやたてよとぞいからるゝ

かみをまなぶ下なればしも座なるわかものそばなるうちものをひつたをし〳〵はゞきもとをくつろげおほせにて候ぞたてとをつたつるいたはしやすけなりからのかゝみに身はひとつ立もさすがなりいぶんさんしゆに至てぢく〳〵になをきんぎよくのこゑありかはづとのゝ御名をばくださじものとぞんずれはいかにわだどの大名なれど三浦の大將すけなりは身こそひんなれど伊藤のこれは大將まつごかくなるさふらひに當座のはぢをあたへ給ふものかな只今ざしきをたてうず者はそもをつはたに孫太郎いとひさに源八ゑがらの平太たねながあさいなぞ有らんにたゞ一人が立ざればうしろの體もさびしきによしもりも立給へとかたなのこひくち三寸ばかりくつろげたもとの下にかくしをきはんじこふてまちゐた助成の心中はしんゑんにのぞむではくへうをふむがごとくなり

すけなりこゝろにおもひかへすおとゝの五郎ときむねがたび〳〵せいぶんしつるものをそれしゆくがよひと申はうとくなる人のしゆくがよひをば人がうらやみひんなるものゝ宿通をばかならずにくみ候馬ののりあひかさとがめにても助成うたれ給ふならば時宗一人のこりゐて親のかたきと申御身のかたきといひ何としてかはうつべきぞ理をまげて宿がよひをおもひとゞまり給へとたび〳〵せいぶんしつるものをもちひずし打こえあさいなかふるこほりがてにかゝつてうたれん事は治定なりしぜん命はつゆちり程もおしからねども年來のすけつねおやのかたきをばうたずしてしやうがいをうしなひなにかせんあさいなの三郎がざしきをたてといふならばたゝばやとこそ

おもはれけれかくおもひ給ひけるがそがへやつうじけん弟の五郎ときむねはふるゐといつしところに矢のねをみがひてゐたりしがあまりねむさにごばん引よせまくらとしゆたかにこそふしにけれかゝりけるところに舍兄すけなり枕がみにたちよらせたまひてやあいかにときむねそれ長者（良ノ誤歟）が四十二ヶ條の兵法のまき物をがくしたりといへどもさけをすごしぬれは何にもをとれり千日したる用心もめをつよくぬれば一夜にむになるぞかほどのはくちうにさやうにゆたかにふす物かやあおきよ〳〵と二三度四五度おこさせ給ふとゆめ見てかつぱとをきあたりをみるに人はなしふしぎさよとおもひ下女をちかつけて十郎殿はと問ば下女承て宵よりもおほいそにて是にはるすと申時宗聞て扨はうたがふところなしかたきくどうすけつねか一騎うつてとをるを五郎だにも有ならばはぢある矢をも一すぢいてはらきらばやと思召がかくおもかげにたつかさらずばばんどう海道十五ヶ國の人々のうつてとをらせ給ふが十郎殿は只一騎と忩ためにかけてねむるがかくおもかげに立かその儀にてあるならばすはの上下ゑ御ぢげんあれしやきやう助成の影をば人にふますまじ物をと云まゝにちやうだいへつつと入しやうもんしうつたるからうとのふたをあげおうち伊藤の入道殿よりつたはつたるさかおもだかのはらまき四人してもちけるをわだかみつかんで引たてくさずりながにさつくと着かたなと申にかたきくどう祐經がはこねまふでのありしとき見ぐるしけなれ共とてえさせたるあかぎのつかに忩ろかねにてめぬきどうがね打たるこさすがをさひたりけるたちと申に河津殿おくのゝかりはのかへりあしにおほみの五藤太やはた三郎が一二のまぶしをかためはなちける矢にあたつてやみ〳〵とうたれさせ給ひしとき是をはこわうにとらせよとかたみにくだし給たる四尺八寸有けるがぬけばたちまちるばかり成忩ろきたづなにてまん中むずとゆふてわつそくにぞ

かけたりける御馬屋へはしり入て見てあればおりふしかげ成こまにゆあらひしてぞをきにけるくらをかむひまがあらざればはづなはらがけ引ちぎつてあらひぐつはをはめさせひきよせゆらりとうちのりまはれば三里すぐにうてば五十町まはらは時刻もうつりなんとおもひ曾我中村にさしかゝりかけあをつてはしとゝうちしとゝ打てはかけあをりこまにゑらあはかませ只一打にといそひだるときむねが心中あすはむけんからこくゑんぶのちりともならばなれけふにをひて時宗あつたのもしくぞみえにける

せつながあいだにちやうじやのしゆくしよにつきもんぐわいを見てあればくらをきむまいくらも有さればこそとおもひおほみかどよりいらんは大はらまきに大だち座敷の體もことなしとおもひこみかどにまはる爰に下女一人ゆきあふたやあ此やかたのうちに何事か有ととふた下ちよ承さんさふらふ宵よりもわたの一門九十三騎打よらせ給ひてさかもりのさふらふ座敷へ十郎殿もとらごぜも出させ給ひてさかづきのこうろんたゞ今なかばなりと申時宗聞て扨其さかづきをは和田へさひたるか十郎へさひたりけるか下女承て虎ごぜのやさしくまし〳〵て十郎殿にさゝせ給ひてさふらふぞ時宗聞てさてそのさかづきをおくしてとつてのまざりけるかなふ御こゝろやすくおぼしめせ取て參て候ぞときむね聞てから〳〵とうちわらひ日本六十六ヶ國に大がうのつはもの又二人ともなかりけり舍兄すけなりにてましますよなけんじんなる女よにおほしといふともとらにましたるけん女よもあらじとらなればこそさひたれ十郎なればこそあれほどおほきかたきのなかにておくせで取てのふではあれのふだりや十郎殿さひたりやとらごぜとたちのつかをたゝむて、ひとりかんしてたちにけりさていづくからゆくぞこなたへいらせ給へとてめんらうくわいらうまごびさしをさし過しやうじを一間へだてあれなるは新左衛門ふるこほり左衛門えびな兵衛

あしな兵衛すのさきの孫太郎これなるは十郎どのといち〱にをしへけりときむねこれを見てたとひなにものなりとも舍兄すけなりにとつてかゝるものあらばしやうじの一けんもの〱しはら〱とふみやぶつて大將とかしつき和田がほそくび中につんと討おとしあさいながみけんからたけわりといふものに二つにさつときりわりのこりのやつばらとしにもたらぬしよくわんどもものゝかずにてかずならずしやうぎだをしをするごとくさん〲に切てすてしやきやうすけなりとさしちがへて玄なんはあんのうちとぞんすればふんじかつて立たりしはたもんぢこくぞうちやうつくりすへた二王にちつともちがはざりけりよしもり御らんじてやあいかにあさいなかんぢは日ごろのちせうにはにぬものかな十郎をとつてをつたてよはやたてよとぞいかられけるあさいなこゝろにおもふやうあふさひたるも道理又のふだるもだうりそのうへ弓とりはけふは人のうへあすは我身のうへなるべしさすが名あるゆみとりにいかにとしてはぢをすみべきぞげにやらんこのもの殿原兄弟は魚と水とのごとくにてあにがさけをのむときはをとゝがのます弟がのめばあにがのまでたがひにようじんすると聞つるもの今もや弟の五郎が内に有らんにおしうかゝつて座敷をは立そんじまつかうわられあしかりなんとぞんすれば人もはやさぬまひを立てぞまふたりけるうすをしきのそばを取て其ころかいだうにはやりし硯わりと云歌のたいをはつたとあげ半時ふんでぞまはれけるよしやあしゝとてきりすてられしくれたけも竹も本に一夜はある物をよしやあしゝとてつきすてられし庭くさも本しのふとてあるものをよしもり此事を御はらゐさせ給ふべし十郎殿も虎ごせも心にかけ給ふなよ一かうこのよしひでにゆるし給ふべきなりとはんじふんでぞまはれけるあさいなが心ざし生々世々に至るまでわすれがたくぞおぼえける舞もすぎ時分

になりしときしやうじのうちにかなもの丶をとがか
らりとなつたされぱこそとおもひこ丶をちつと御め
んなれやといふま丶にあひのしやうじをさつとあけ
内をきつと見てあればなにはゑらねども六尺ゆたか
成大おとこのむないた見ればまつしろなるが五尺あ
まり成たちを七八寸くつろげか丶らばきりよげに見
えしかばをにのやうなるあさいなもたゞひざふるう
てぞ立たりけるいかにや御身は五郎殿にてまし#ます
か舍兄助成もざしきにましますになど出てさかもり
をばゑたまはぬぞと有しかばときむね聞て仰かしこ
まつて候へ共御らんせられ候ごとくびやくえでさう
とて出もせずあさいな心に思ふやうげにやらん五郎
はじやにつなを付たりとも馬ならばのらんとくわう
げんすると聞つるものを座けうながらじつにちから
のほどをためさばやとおもひげに御へんは出まじい
かといふま丶にはしりか丶つてはらまきのくさずり
二三まいかひつかんでどうのいたにひつしめ前へゑ

いやつといふて引けれ共ちとも更にはたらかずげに
これはつよかりけるぞや三うら一もんは九十三騎れ
んばんは四百八十餘人が中にこばやしのあさいなと
て名にしおふたるそれがしが五郎をたゞいまざしき
へひきいださぬものならばしやうがいなりとおもひ
てあさいなの三郎がちからの出るゑるしにさうのう
でとかひなにちからすぢといふものが十四五二三十
ふつ〳〵といでにけりむねをおふるちからげごはん
のおもてにあかゞねのはりをすりならべたるごとく
なりどうのすぢがひたいへあがりひたいのすぢがど
うへさがりものによく〳〵たとふればきうちやうの
藤が松をからんできりんかともをこうたるにちつと
もちがはざりけり
あふけう〳〵しのありさまやうさみくすみかはづ三
ケの庄のうちにしてあら馬のつての大ぢからの五郎
とよばれあさいなほどの小男にやみ〳〵とひかれて
ざしきへは出まじものげにつよく引ならば三まいの

より猶たのもしうぞおもはれけるなに五郎が内に有かおとなさぶらひのめしのあるになどいでゝ御しやくを申さぬぞときむね承てびやくえでさう御ゐんあるぞ只まいれうけたまはると申て大はらまきをきながら大だちをもちながらゑどけなげにもいで新左衞門のめてのたい座につめ座にちやうどなをる新左衞門はいらんしてこれほどひろき座敷にてつめさかもりはしようさうそこゝ本ノマヽをちつとくつろげたまへさかもりせんとありしかば時宗聞てなんさう新左衞門殿まいれとおほせあればこそ參りたるにざしきを立とおほせあらば只今たゝんといふまゝにはらまきの草ずり二三まいひざのうへにゆりかけ猶つめかけてなをつたるけうさめてぞ見えにける吉盛御らんじていかに五郎殿御身はようせうよりはこねにのぼり別當の御坊にてがくもんし其後伊豆に下り北條をえぼし親にたのみ助五郎ときむねと名乘せたまふとは承はれどもげんざんは是がはじめそれ〳〵とありしかば

くさずりがきるゝかひざのふしがちがふかふまへたいたが大地へ落つくか三つにひとつはぢやうのものとおもひてふんじかつてたつたはつしんをいらちげ前へゑいと引たうしろへゑいとひた草ずりきれてのきけれどたちどころをさらずしてふんじかつて立たそがの五郎時宗を大ぢからと申ておぢぬ人こそなかりけれ三まいのくさずりをもつて父の御前に參りこれこれ御らん候へ五郎ときむねの內にゐられて候これをさかなにて今一つさかもりゑたまへとありしかばよしもりきしよく引かへ何五郎殿のうちにまします か舍兄すけなりも座敷にましますになどいでゝさかもりをゑ給はぬぞとありしかばときむね承ておほせかしこまつては候へどもびやくえて候とてをともせせず

去ほどに十郎殿弟の五郎ときむねがうちに有とだにも聞ければ只きまんこくのきわうとらせんこくのらわうをあざむくほどのつはものを千騎萬騎もちたる

うけたまはると申てもえぎにほひのはらまきにたちとりそへて引たりける時宗これをみてたゞいまの引手物をとらばやとおもふがまてしばしわがこゝろ明日に成ならば坂東かいだう十五ヶ國の人々のつたへ聞召れてあらむざんや曾我殿原兄弟は身のひんなるにしたがつてひき手ものにめがくれ遊君を和田へばはれたなんどゝあらんずるときはこうなん也とおもひいかによしもりたゞ今の引手物を給はりたくは候へども後日に三うらへ參て給はるべしそのあひだはあれにましますわかき人にあつけ申さんといふまゝにたちのおびとりとはらまきのわだかみかひつかんでしも座へからりとなぐる吉盛御覽してたゞいまのふせいはれうけんさうか座けうさうか時宗聞てうとく成人のうへにこそれうけん座けうは候へひんなるものゝ座けうはしらぬて候と申よしもり聞召ようさう五郎殿いとま申て長者とてざしきをたゝせ給へば九十三騎はらりと立てこゝやかしこにてこまひきよせ〳〵ひらり〳〵とうちのる其中に和田殿大將でましませはえんのはなへ馬ひかせのらんとし給ふときむねこれを見ていせん舍兄助成にこめをみせたごとくにおどさばやとおもひて四かく成まなこを五かくにくわつと見ひらきいかに和田殿此やかたと申は和田殿もたてられず十郎殿もたてられず又時宗がたてたる事も候はずばんどうは八ヶ國海道は七ヶ國十五ヶ國の人々のつしさかもりのそのためにたてをかれたやかたなりこれからの乘うちはびろうさうぞわだどのおりさせ給ひ候へおりられぬ物ならばすは八まんも御ぢげんあれときむねがたゞ今おろすべしとぞ（本ノ）（マヽ）おどしけるよしもり聞召いや〳〵きやつばら身をふつるものによせあはせ爰にてことをしいだしわかたうたせあしかりなんと思召ようさう五郎殿年はよつつ目は見えず日はくれがたになりさうつくらぐそくみんためにひかせてこそは候へそれ〳〵わかたうむまひけやと有しかば承ると申てしつけざかまで引

たるは五郎におぢたところ也兄弟の人々はかまのそばをたかくとりゆみ矢のれいぎ是まで候はや〳〵めされ候へとく〳〵めされ候へとひきはしまでぞをくりける其後兄弟やかたに歸てもしも三浦より夜討によせやせんとて夜まはりつじがためようじんきびしかりけれど一門の中なればよする事こそなかりけれ此人々の心中をばきせん上下をしなべかんせぬ人はなかりけり

小袖曾我

去ほどにそがきやうだいの人々はふじ野へのいとまごひの其ためには丶うへにまいらるゝ祐なり仰けるやうはいかに五郎どの御身はしばらく待給へまづそれがし一人參り御きげんをうかがひ申御みのそせう申さんとて母うへに參りふじのへのいとまごひをぞ申されける母上聞召れてふじのとはおとに聞えたるゆきの有所なればさだめてよさむなるべしとて御こそでを下さるゝ祐成謹而申さるゝ哀同は時宗にも下され候へかし母上聞召れて何時宗とはたが事ぞみづからが子共の中にときむねといふ者おぼえず京の小二郎は名乘ずゑちごのせんじばうは法師の身なれば名乘ましあふさる事ありおさなくてはこわうとてわらはの一人さぶらひしをちゝの ぼだいをとはせんために別當にけいやくし箱根へのぼせて候へば母がめいをそむきはこねの寺をにげ下いづの北條をゑぼしおやに頼みすけ五郎ときむねとなのるときくその時宗とやらんが事申いだしたらんには今生後生ふちうのものにてあるべしと仰もあへず御なみだにむせばせ給ふ祐成うけたまはり其御事にて候むざんやなときむね十六の春のころ法師になると申て里へ人をくだすちごのすがたを今一度見ばやとぞんじはこねへのぼりて候へばはこわうなのめに祝て一間所に引入さて箱王は法師になるべく候やちごは法しになりぬれば三年は山籠と申てさうなく里へくだらぬよしを承る其うへらうしやうふぢやうのならひ此まゝ御めにかゝらぬ事もや候べきとふかくなげき候ほどに祐成ふびんにぞんじ其儀ならば里にくだり男になれと申せばさだめて母うへの御ぶけうもや候べきと申御身おとこになりて後たとひ母上の御ぶけう候ともよきやうに申なをすべしととかくすゝめよのまにはこれをにげくだりこれへ參らん事ををそれと存すぐ

にいづにくだり北條をゑぼしおやにたのみあれにてげんぶくせさせ北條の助五郎時宗とはそれがしが名乘するにて候ぞ御ふしんむざんさよはこわうつねになげくやう母うへの御ふしんは十郎の御とく候と明暮うらみ候ほどにおとゝながらもめんぼくなしあはれおなじく候はゞ時宗が御ふしんを十郎に御めん候へかしこゝろやすくめしつれてするがのふじへまかりのぼり候はんとかさね〳〵申共つや〳〵返事もましまさず時むね物ごしにて承りさてはいかやうの人の御こうしゆなりともかなふまじまづかへらんとおもひしがいま申さではいつの世に申べきぞとおもひしやうじのあひをばふるひ〳〵たち出ふるへる聲をさし上落ゑんに手うちかけおつるなみだをおしとゞめ二時ばかりくどくにぞ上下涙をながしけるそもそもそれがしがみのとがをなに事やらんと只今承て候へば男になりたる御ふしんなりそれはなによりもやすき程の事にて候男になりては候へども五百かいをたもち給ふ御そうの身にもおとり申さず魚とりをもぶくせす寺へ上たるゑるしにはちゝのけうやうのそのためにかみつけのほけ經を五百ぶかゝんと大願をたて去年の秋のころ二百七ぶかたのごとくかきたて箱根へこめて候へば其御經のくりきもなどかはなふて有べきそれのみにかぎらず日夜に經はおこたらずちゝのためにはけうやうさて又母の御きたうとせつなもさらにおこたらずつとめぎやうずる身なれども申上る人なふしてあくれば御かんだう又くるれば御ぶけうとうけたまはるぞかなしきその身男の體なれども道智津師（律ノ誤カ）といつし人はいけをゑいじてわうじやうすくわかいびくといつし人はうゐをえいじてわうじやうすはくらくてんはまさしく竹をあひして往じやうすゑんらうびわを引きんわうことをたむじつゝ一心にまよはん事をかなしめばわうじやうのそくわいはとげん事はうたがひあらじと承る又佛に四ぶの御弟子有びくびくにうばそくうばゐとてあま法師男

女も御弟子にてしやうあみだやくし御くしあおふしていとをわくるがごとしてんとう佛の其中にけんさくつるぎほうほう弓矢をたいし給へ共ぐせの願あさからずぼさつたちもみなながら男の體にてましませどにうは（わノ誤）のじひこれおほし十方さつたのそのなかにぢぞうぼさつはいはれ有かみをはもたせ給はずされはほうねん上人の一しゆのうたにかくばかり

そめはやなこゝろのうちをすみぞめに
　　ころものいろはとにもかくにも

とゐいじ給ひけるとかや叉布衣和尚の十無やくにきやうがくとせつにて僧形むやくとのべ給ふ我朝の開白（闢ノ假借）いせ明神の御前へ法師をむかへ給はず爰をもつてまさしくしんていはつぷをふぼにうけ赤白の二ていはたいこん兩ぶの佛にてかみひげゐしむらは母のあたふるせいとくほねは父のあたふる父のあたふる骨をばみのおはるまで捨ず母のあたふるかみひげをそりすつるこそまよひなれとこゝを神明いましめて法師をむかへたまはずなが〳〵敷は候へ共爰にたとへの候てんぢくの事かとよせんならと申て弓とり一人おはしますゐかるにせんならぶ女とちぎりをこめ給ひ二人のわかをまうけさせ給ふあにが名をばけんしやう弟がなをばかうしやうばらもんとぞ申けるかれらせいじん程もなし七月十四日にすまふのばへ出事をゐいだしおほくの人をほろぼしあけにそふだるうち物を弓手のかたになげかけわがやをさして引て入父せんならは御覺じてこはそも兄弟にはものがつゐてくるはするか二きのひがん卯月の八日七月十四日は一年があひだの六さい日にさゝれたるに今日人をがいする事いかゞ有べきと大きにいからせ給ひければ兄弟承はりそれをたがゐらぬ事ぞ親ぎしよくしてかゝるけうけはむやくかな手なみのほどを見せんとてちゝせんならの御くびを水もたまらずうちおとす母のぶ女は御覽じてあらあさましの事共やくわこのしんもふかくげんざいのしむもふかとくみらいのし

んもふかとく三世ふかとくにいづれのしんかおやとなり子の手にはかゝるぞやいづれのしんが子とむまれ父のくびをはきるやらんいづれのしんが當母となり跡にてものを思ふぞやかやうにふかくなげかせ給ふ兄弟の者承りとてもちゝせんならわれらをよかれと思召るまじいさや父のけうように千人ぎりしてあそばんとて爰のつぢかしこの門にてきる程に九百九十九人切て今一人たらずしてせんほうだうへぞ參りけるかのだうの庭にはちすのいけありおりふし萬ごうをへたるかめがこうをほいてぞゐたりけるけんしやう申けるやうはいかにばらもんかめは萬ごうをへぬれば佛になると申いざや此かめをがいし千人の行にたつせん尤と同じて此かめ引上がいせんとせし時かめも生ある物なればもんを三度となふ我八十三年龜八萬劫必生安樂國龜成佛とゝなふる母のぶ女もこのたびせんならにはなれ給ひ是も又千のいき物の命をたすけてまいり給ひしが九百九十九たすけ今ひとつたらずしてせんほうだうへぞ參り給ひしがかめの聲を聞召いかにきやうだいたゞ今のかめの聲ばしちやうもんしけるかいやきかぬ也と申あふなんぢらが聞しらざるはだうりいで〳〵語てきかせんがはちといふははらに七つの子をもつてわが身共にはやつなり七つの子をきうせんにかけん事をかなしみとなへたるもんにて有き八萬ごう必生安樂國龜成佛ととなふるは龜は萬ごうをへぬれば必佛になると申に只いまきうせんにかゝり佛體をやぶらん事をかなしみとなへたる文にて有されば人のこのたいないにやどりたねをおろすはかり事は梵天よりもいとをおろし大かいのそこなるはりのみゝをとをすよりもうけがたふてむまるゝなりしろきほねは父のおんしゝむらは母のおん父のおんがいやしくばしつくと名付てなかなる骨をぬきすてよはゝのおんがいやしくば八くと名付てあかきしゝむらをそぎすてよ此ことはりにまかせて其かめをたすけよ兄弟承て我ぎやうをばたつ

せんとや人のぎやうをばやぶらんとやあふそれは尤いはれなし只がいせんといふまゝに此かめを引あげてがいせんとせし時はゝ此よしを御覧じてみづからかめの前にてかゐをがいする物ならば九百九十九たすけたるいき物が無にならんと思召やあをのれらがぎやうにはみづがらをがいせよみづからが行には其かめをたすけんきやうだいとこそ仰けれ兄弟承てたれもさこそは存ずれとてかめをばいけにはなつて打ものぬいてかゝりしにいかゞはよかるべきぬいたるたちが三つにおれてのきにけり刀をぬいてかゝりしにふたつにおれてのきにけり心得たりといふまゝに大手ひろげてかゝりしに眼にきりふつてはゝのすがたもみもわかず大ちがさうへさつとさけきやうだいのもの共ははやならくをさしてぞしづみける母は御覧じてなをもおやの御ちひにたすけんとおぼしめしきやうだいの者どもかたぶさをつかんでひきあげむとし給へばむなしきたぶさ手にとゞまりきやう弟のもの共はつゐにならくにしづみける

はゝは御覧じて此たぶさをなににせんとの給ひてこくうをさして（本ノマヽ）なげ給ふ我朝にとびきたり大和國とかやもとより山とこれが成のこるたぶさはろとうにとどまり道しばとなつてじんばのひづめにかゝると承て候ぞかゝる子をだにも親の御ちひにはたすけんとし給ふにましてや申さん五郎ゐが男にこそ成たれど四をんのおもき事存知しゆにく五しんをきんかいしねにふしとらにおききんう東にかゝやけばじやうやのねぶりはやさめかねつく〳〵とざをしめしやもゐがらすのうかれごゑかうぞとないてつげわたるいとどむぢやうをさへぎればねふりもさめきも消入聲のとりの八度なくあひべつりくのはつくつげわたるとりの聲なればあふ物に別ありさかんな物もおとろへくわういんさらにとゞまらずかいらうの身を持ながらわかき時につとめずばおいての後にかなしまん今生てなげかずばみらいを誰かたすけんとかゝるいは

れを存ひめむすに經をよみ夜すがら念佛おこたらずぎやうじゆざくわにしては又父のためには御ぼだいさて又母の御祈禱とせつなもさらにおこたらずつとめ行する身なれ共申あぐる人なふしてあくれば御かんだう又くるれば御ぶけうと承ぞかなしき大ぢをいたゞいてまします佛の御名をばけんらうぢ神と申大ぢはおもき事なくて親のぶけうのものゝふむしたごとに劔となり御身にたつと承るとがありての御かんだう申ともかなひ候まじとがなくしての御ふしんはふびんのいたりこれなり明日も助成のふじのへ御出あるべきになか／＼伊藤の何がしとてみしらぬ物もなき物をかげとかたちに時むねも御供申て出べきにかりばのをのゝならひにて尾こしたにごしのながれ矢にもあたりもしもむなしくなるならばつゐにぶけうのゆりもせでみらいのごうをいかゞせんあはれよのなかに親にゑんなきものは時宗にてとゞめたりそれをいかにと申に父河津どのには三つの年はなるれ

ばゆめともさらにわきまへず今生にまします母上には七さいの春てらへのぼりしとき見まいらせしまでにてまかりくだる事もなしちごにてありし時にこそよそ／＼なりと申共男になりて候はゝ只一人の母上にはそひまひらせんと思ひしにあんにさほひ（うゐノ誤）仕り男に成たるとがによりやがてふけうとの給へば母うへの御すがたをおがみ申事もなしなさけなの御事やたとひふけうはゆるさず共すがたをなどやみせ給はぬとにかくにこれもおもへばつみぞかしいとま申て女ぼうたち御いとま申て母うへと涙をおさへてまかりたつ心づよき母上もあひのしやうじをさつとあけ五郎がたもとをひかへつゝ道理なりはこわうよにくしとさらにおもはぬぞおやの身にてわが子を何しにゝくしと思ふべきこれもなんぢをおもふゆへ今までふけうありつるぞけふよりしてはかんだうをゆるすなりとの給ひて御涙にむせび給へば時宗もはゝうへの御たもとにすがり今は又うれしなきになきければ祐

成もともによろこびの涙はさらにせきあへず御前なかゐの女ばうだちあらめでたや時宗の御ふしんゆるさせ給ふ事よとさゞめきあひ御さかづきをまいらせらる母上さかづきをとりあげさせ給ひて祐成にさし給ふ祐成は時宗へときむねは十郎殿へとやゝしばらくのしきだい也母上御覧じてはこわう法しになるならばさきにのむべけれ共男になる上まづすけなりのめとのたまへば三度くんでぞほされける母上祐成の盃を取上させ給ひ盃をひかへげにやらん五郎は父におとらぬまひの上手と聞一拍子うたへさかなにせんと仰ければ時宗承て母上の御前にて舞まふべき事共もこれをさいごと思ひければいつ〳〵よりのまひよりも心ぼそくぞまふたりけるしづやしづしづのをだまきくりかへし昔を今になす由もがな昔を今になさばやとやゝしばらくうたひしがおつる涙にめがくれてまひをばちうでまひとむる

母上つく〳〵と御覧じてげに〳〵ちゝにもおとらぬ舞の上手にてありけるぞや同は此まひを河津どのもろともにみるとだにも思ひなばいかゞはうれしかるべきと御らくるいはひまもなし涙をとゞめ御さかづきを時宗にさし給ふときむね御さかづき給り三度いたゞきほさんとせし時母上御覧じてしかしさかづきをひかへよみづからもさかなとらせんとの給ひてからあやの御こそでをくださるゝ時宗給はる小袖をききたるこそでをぬぎとある所にをしよせこれなる小袖あかつきみぐるしく候へ共誰か女ばうたちへ参らせ候母うへ御らんじて子どものきたるこそでを女ぼうたちへはかなふまじそれこなたへと仰ければをそれながら母の御手に参らせあぐるはゝうへ此こそでを取まはし〳〵何と御らんぜられけるぞや御かほにをしおほひしばしは物ものたまはずふしぎや是はすぎしやよひの比十郎にかしたるこそでなり祐成はつねにきてみづからにこそでをかるほどにかすとのみばかりにてかへすといふ事さらになしはかなやみづ

かし思ひやう若者にてさふらへばあそびの女いろごのみにもとらせけるかと思ひしにひんなるおとゝはごくみける心ざしこそあはれなれか程に思ひあふなかをふしんをなせるみづからはわが身ながらもうらめしや志ほれたる小袖哉か程志ほるゝ小袖をみづからこそはふけうする共みうらのやへのおばごはなどやすゝいでとらせぬぞおばごがすゝがぬ物ならば二のみやのあねごはなどやすゝいでえさせぬぞあねごがすゝがぬ物ならば御前なかゐの女ばうたちなどやすゝいでたばぬぞやすゝぐとみづから見たりせばかんだうの子也とてうへにはしかりさふらふともないしんにうれしかるべきにおやのにくむ子共をば一ぞくうちのもの迄もにくみけるかやむざんさよ母うへ涙をとゞめいかに時宗去年の五月此二のみやのあねごがかたよりもこそでばしえたるか給はつて候それもあねごはとらせぬぞかんだうの子なればさぞあるらめと思ひこれよりとらせたる小袖なり又みしまの

はうじやう志の此みうらのおばごのかたよりもひたたればしえたるか給はつて候それもおばごはとらせぬぞこれよりとらせたるひたゝれなりそのゝちは給はるかたも候はずと申はゝは此よし聞召いま一しほの御涙やる方なふぞ見え給ふいかに祐成時むねよ玉玉あふたる事なれば何とかたるとつきすまじこよひはとゞまり給へかし祐成五郎承りいたはしや母上の志んしわりなきなかなれ共さいごを志ろしめされずかやうにとゞめ給ふとよはゝの心のいたはしさに志のび〱の涙なり祐成しやく〱取なをし申す我君の此たびふじのへの御出は日本國の侍の名字なのりを志ろしめされんためなり人數にまかり出にげしゝのひとつもとゞめ伊藤が志そんに去物なりと志られ申はんめいのちのかたはしにあんどをなし出入すがたを今一度みせ申さんがためにて候とかくいつはりさまざまに御いとまを申御前をまかり立これをさいごと思はれければかたみのためと思ひやたてまきものと

りいだしすけなりのうたにかくばかり
けふいてゝ又もあはすはをくるまの
　このは（わノ誤）のうちになしと忍れきみ
ときむねもかくばかり
ちゝふやまおろすあらしのはけしきに
　このみちりなははゝいかゝせん
かやうに二しゆのうたをよみしやうじの間にをし入こま引よせて打のり門外さしてうつて出る時宗もばばすゑまで馬ひかせ忍づ〳〵と二陣につゞくあらいたはしや母上數の女ぼうたちをひきぐして中門に立出あれ〳〵み給へ女ぼうたち兄弟の物共が馬うちのれいぎのたゞしさよすけなりはあになればさそく（本ノマヽ）まみ（み上ろくチ脱スルカ）しと思ひしにおとゝにいづきかしづかれ心やすくも有やらん色も忍ろくじんじやうなるや五郎ははこねそだちのものなればさぞ有らぬと思ひしにあにが供をする程に月日に照されけるやらん色も黑くまみたる也あつたら若き物共にうさみくすみをとらせをきいで入姿を今一度みるとだにも思ひなばいかがはうれしかるべきと御なみだにむせび給ひけりげにまことわすれたり弓取のものへのかどいでにあとを見かくす事はなし皆こなたへとの給ひてつねのところに入給ふ是をさいごの別とは後にぞ思ひ忍られたる兄弟の人々こまをはやめて打程にまりこ河につきにけり折ふし水かさまさる祐成御覽じてふしぎや此河のか程にごれる事はなし親の敵にあはんために兄弟がわたるほどに水も心があればこそすまでにごれる色みゆれ時宗承り扨は十郎殿はいづ箱根の權現のゆらいを忍ろしめされぬや昔天ぢくきやうし國の有主をはきんくわ大王と申奉る然に二人の姫宮おはします五つや三つの御時母のきさきほうぎよならせ給はじめてきさきをそなふるに昔が今に至迄けいしけいぼの中程にうたてかりける事はなし有時きさきの宮しちやう官人らを召て二人の姫君をこしにのせそせうが（本ノマヽ）湊へ下くわのきのうつぼ船に作籠鹽みつ島の方

へながしうしなへと有しかばあかぬは君の仰なればいたはしや二人の姫宮をこしにのせそせうが湊へ下くわの木のうつぼ船に作籠鹽みつ島の方へ風に任てつきながす先世此君果報のせうれつましましけるにや鹽みつ島へはより給はで日本秋津島いづの國めらがさきへより給ふ浦人是をみてより船有やとて船をほどいてみてあればさもゆうちやう成姫宮の一人ならず二人迄鳴（泣ノ假借）そほたれておはします浦人きもをけし東西へはつとにげちりけり宮たち御覽じて是は鹽みつ島かととひ給へば日本あきつ島いづの國めらがさきと申宮たち聞召扨はうれしき物かないざやさらば上らんとて船よりも上らせ給姿をみ奉ればすひたいこうがんたへに（にノ下に文字アルベシ）してたうりのよそほひなのめならずまなぶたはふようにてむねは玉にことならずまがきの菊の露をふくみ楊柳の枝よはくせいしがよそをひもかくやと思ひ知れたり宮たち仰けるやうはこれをぼたいのたねとして世をのがれんとの給ひてたけ成かみをそりおとし日本秋津島をしゆ行し給ひけりあねごのりやうさいごぜん三年三月と申にいづの山に上ていづの權現とあらはれて衆生をさいどし給へりいもうとのりやうしゆ姫も三年三月と申に箱根山に上て箱根の權現とあらはれて衆生をさいどし給へりか程れんげんあらた成御神とは申せ共五つや三つの年よりも物を思はせ給ひし也いはんや我兄弟も五つや三つの年よりも親の敵を請取て今又敵にあはん爲此河を渡る程に權現の哀みてながさせ給ふ涙が涙の雨と成水の色はにごる也其上此河はいづ箱根の權現のみたらしにて候へば何かはくる敷候べき一首つらねてお通りあれや十郎殿とぞ申ける祐成聞召れてあら殊しやうや候いづ箱ねの權現の由來を只今承て候へと水を結んで手水とし伊豆はこれをふしおがみ祐成の歌にかくばかり

わたるよりふかくぞたのむまりこ河
　あすはかたきにあふせならまし

ときむねかくばかり

まりこかはかたきのえたにけかけつゝ

かゝりあしくはきりてなかさん

とかやうに二首の歌をよみこまをはやめて打程に年來五郎が住なれし箱ねの寺につき給ふ兄弟のうれしさたとへん方もなかりけり

つるぎさんだん

さる間曾我きやうだいの人々こまをはやめてうつほどにはこねの別當の御坊につき給ふいつしかちごどうじゆくに至るまでめづらしやいまかとてたいめんせぬはなかりけり人もまれなるところへ兄弟をしやうじべつたういであひ給ひいかにきやうだいひさしく見えさせたまはぬものかなはこわうどのは男に成て候へどもにくしと更におもはぬぞ愚老もわかきときならばともにおとこになりたひぞ此ほどはうちつづきゆめにもあしく見ゆればまたなにごとかきゝいだしらうぐにそへてこの法師がものおもはんずらんとこゝろもとなくおもひしにふじ野へいでさせ給ふこそ心もとなき次第かなはこ王とのは七さいにて此寺へのぼりつゝ十六まではいさゝかもおりのぼることもなくあとふところにそだてをきちしやのうげになしたてゝ跡をとはれんためぞかしかくあやなくもわかれて思ひをせんとしらずやくちはつべきむもれ木のつれなくうき世にながらへてきやうだいの人々の親のかたきと討死しきうせんのさきにかゝりなば一時三きのひまもなくしゆらのくをうくべきにあとをとふべき法師の一人ありとおぼしめされ候へとてくろざやまきのかたなをばすけなりにたび給ふ兵庫ぐさりの太刀をばときむねにこそたびにけれ別當の御ぢやうにはそれ人の持たからのいはれをきかねばなにならず時宗にまいらするたちのいはれを語てきかせ申さん昔こんぢくよたうさんにれううんといふ瀧ありかのたきのさうがんに三尺のくろがねのまるかせありて日夜に人をなやますあるときしやりふんといふものいのり出しえみ（本ノマヽ）に八尺のなぎなたに打たてゝもつたりしをかううんといふものぬすみいだしこれをたうへわたすたうより日本へわたさるゝならのみかどの御ときかゝるめいよのなぎなたをたちに

せむとのせんじにてかぢの上手をめさるゝにおくのまうふさと三でうのこかぢとかれらはめいよの上手とてこのなぎなたを二つにわけ二人のかぢにあづけ給ふおくのまうふさは三年にて三尺に打てまいらすれば三でうのこかぢは三年三月にて二尺七寸にうちたてゝ参らせ上るみかどえいらんまし〳〵てにくいかぢかないかさまにもこかぢはかねをぬすみたりとてあらむざんやこかぢをつちのろうにをしこめ給ふ籠のうちのすまゐなか〳〵申ばかりもなしさる間まうふさがうつたるたちをばまくらがみと名つけて一だん上にたてられたりこかぢがうつたるたちをば寸なしと名付て一だんしたにたてられけりこかぢあまりのむねんさになむや九萬八千のかぢの神たちこかぢがあやまりなきところのそのしるしをみせ給へとひるいていきうしかんたんをくだきいのりければまことにかぢのしゆごじんなふしゆありけるか寸なしさやをはづれてまくらがみにながれ懸てちやうとき

るまうふさがうつたるたちもけしやうのかねにてあるあひださやをはづれてわたりあひをふつまくつつさん〳〵にたゝかふたり御てんのうちしんどうすみかとをはじめたてまつりくぎやう大じんこれはいかなるものゝけぞとあやしめ給ふところに寸なしと枕上さやをはづれてたゝかふたりみかどえいらんましましこなたはまくら上かあなたは寸なしかあれはいかにとおほせ有御目をさますばかりなりやゝもすればまくらがみはうけだちになつてぞまいりける猶も寸なしむねんにやおもひけんとあるところへをつつめ我たけにたちくらべきつさき三寸きつてすてもとのさやにぞおさまりけるみかどえいらんましまして寸なしをひきかへてともきりにくわんをなる（本ノマヽ）（なノ下さチ脱スルニアラズ）さてこそこかぢはあふつちの籠をばいだされけれそのゝち二ふりのたちたゞのまんぢうの御手にわたるこかぢがうつたるたちにてとが有ものをめしよせくびを切て見給へばあまりにはやくくびがきれひけを

かけてきれければひげきりにくわんをなるまうふさがうつたる太刀にてとがあるものをめしよせくびをきつて見給へば餘りにはやくくびがきれひざをかけてきれければひざきりと（たノ誤カ）くわんとなるその丶ち彼二ふりの太刀よりみつの御手に渡るこかぢが打たるひげきりにてをにの手をきりければをに切にくわんと（たノ誤カ）なるまうふさがうつたるひざきりにてへんげのくもを切ければちゝうきりにくわんと（たノ誤カ）なる其後二ふりのたち八まん殿の御手にわたるそれよりもためよしの御手にわたりけるそのころためよしのちやく女にたつはらのひめと申て熊野にこそまし〳〵けれかのひめくま野にましますいはれは後白河のほうわう熊野さんけいまし〳〵てせうじやうでんに籠らせ給ひ此やまにべつたうはなきかとたづね給ふ此やまひらけて七百餘さいのいまに至るまで別當は候はずとこたへ申おりふしなつごもりしてはなつみける法師ありほうわうえいらんまし〳〵てこれをべつたうにさだめよとかのひじりを別當に定め給ふ御堂寺のべつたうはしそんにつたへてもつべきにつまなくしてはかなふまじつまをかたらひたまへとてためよしのちやくぢよたつはらのひめをべつたうのつまにさだめ給ふためよし此よしきこしめしなにがしがむこにげんぺい兩家をえらみ弓矢を取てきりやうの人をむこにとらんと思ひしにゆくゑもしらぬ法師をむこにとることそむねんなれとふけうして音信なしかゝりしときのおりふしみやこに事出來たゝかふべきわざはひありけうしゆんつたへきゝこれはかんどうのむこなれどしうとのせんどなる間一見つぎ見つがんとて三つのやまには八しやうじんやまぶしなどをもよほしてきの國を打立てよどやはたに陣を取てかゝりをたかせひかへたりためよし御らんじてあれほどの大せいはいかなるものぞととひ給へば爲義のちやくしむこたなべのべつたうけうしゆんばうとこたへらるためよし聞召さもあれけうしゆんはたがすゑぞととひ給

へばさねかたの中將の末孫也とこたへらるためよし開召さてはさるべき人にてありちゝはあほう親王とて世にかくれなきぞくしやうなりためよしがためにはくわぶんのむことおぼえたり此時たいめん申さんとてたなべのべつたうけうしゆんばうにたいめんしちやくしにつたはるつるぎなればひけきりをよしともにちゝうきりをたなべのべつたうけうしゆんはうにひき給ふふけうこそゆりんめ劔給はりけうしゆんは熊野に歸り給ひけりかくて壽永のあきのころげんぺい兩家たてをつきたゝかふべきわざはひ有けうしゆんの給ひけるやうはわれはすでに法師の身と有て劔もちてもせんなしとて義經にまいらせらる此つるぎのとくによりおごる平家をほろぼし三しゆの神器ことゆへなくみやこにかへしおさめ申關東へくだらるゝかぢはらざんそを仕りさかわの宿よりこのきみ二たびみやこにのぼり給ふがこのやまにあがつて御兄弟の御中のわびやうのいのりのためにとてごんげんにきしんある此とき申おろしてめん〳〵にたてまつるまぼりのためとおぼしめせ明王のけんさくは萬里がほかのてきをうち四天王のゆみ矢は四まのいくさをふせがんため此劔すけつねがくびを討べきつるぎなり是をさかなに今ひとつまいりて御立候へとしゆずさら〳〵とをしもむでしやだんを禮し給ひけり別當の心中末たのもしく見えにけり兄弟の人々はこねのてらのいとまごひ野七里山七里たけ七里廿一里をゆきすぎふもとの宿でこりをかきやしはのみやこにまいり七番つゝのかさかけあふぎをたてゝあそばししよぐわん成就といのつてあひさはのはらにいで給ふ

夜討曾我

去間右大將の御れう信濃の國みはらの丶御かりすぎ其後あひざはのはらのいとりがり三日へて駿河の富士のすそ野へ御出ときこえけれ御れうの其日の御しやうぞく青狩衣にたて烏帽子をばな色毛のいちもつに白鞍おかせてめされたり御馬添には五郎丸赤地のにしきのひたゝれをくだし給ひてきるまゝにちからは八十五人がちからもえぎのはら卷を着ごめにして君をしゆごし申すちゝぶどのいしやうぞく鷹すえて御とも也和田の義盛狩裝束鷹すえて御供なり千葉お山うつの宮何もかりばの出立にてたかすえて御供成惣じてたかは五十本犬は八十四疋犬のすゞたかのすずくつはの音がさゞめひて上下六萬六千餘騎さしもに廣きふぢのすそ野に駒のたちどはなし抑かのふぢ山と申は仁王廿七代の御門けいたい天皇の御代せむき三年三月十五日に一夜がうちにこんりんざいよりゆしゆつしたる山なりあら面白の名山や南は田子の浦波やゝかぬ鹽谷（屋ノ假借）のけふりたつにしは海上濤々としてきわもなしされはよの山を下もにするがのふぢなれば雲より上の八えうは皆金銀のいさごにてまなこにつもる白雪の所々はむらぎえて嶺には煙たえもなしふもとにかすみたな引て山のおひかとうたがはる山は八ゑう九尊（葉歟）にてりやうかひをへうせりみねには九じやく明王の住給へる池有ふもとにせんげん大菩薩のいらかをならべてたち給ふせうじやうけんごのれひちとしてせつしやうかひをきむだんしれうしのいらぬやまなればかせきの數は多かりけり三千餘人のせこのものせんてうをまつくだりに岩をおこし枯木をたゝきおめきさけんでかりくだすおほくのかせきけだものすそのをさしてくだるわかき出たちあひてをくそわれ先にと是をいてとるこのたびふぢの丶まきがりに東八ヶ國の大名小名あるひは鹿の四かし

ら五かしらとゞめきみの御目にかゝり御所領給て皆所知入ときこふる其中に曾我兄弟の人々はしゝに心のいらざれば鹿の子の一つもとゞめずいかにもしてかたきすけつねにめぐりあはでとたくみけるに爰に弓手のそばのかしわぎはらの中を見るに討手のあまた有中に四十斗成おとこひようもむの弓小手さし夏毛のむかばきひつこうで三つあるしゝにめをかけてかりまたつかんでおつかくる時宗たぞと見るにあは（本ノマヽ）すけつねと見るからに氣もそゞろぎ身ふるひうとん花も海中にひらけるよとうれしくてしゝ矢をそろりとすて賴しなかざしぬき出し弓をふせてうちつがひ矢つぼはおほしと申せどもわれらが父の川津殿おくのゝかへり有ときくらの前わのはづれむかばきの引合をいられ給ふときくものをむくひの矢なれば祐經をもおなじ矢つぼに討てをとし川津が矢目はたがはずと諸人に見せ十八年が間のちそくはおなじからざれどかりばと矢目はたがはずうてばひびきたゝけばなるおもひは餘所になのりけり身のせし科の報ぞとしらせばやと思ひはやあらはれていでけるがやまてしばし我心五郎一人無念をはれ十郎殿をむなしくせば今生の恨のみならずくわうせむ迄もはれがたし父母けうやうの矢ならば兄弟して一矢づゝとぶらふにぞとおもひあたりを見れば寺に瓦（本ノマヽ）一つへだて十郎殿餘所目してこそおはしけれ五郎あまりのうれしさに鹿こそとをれ十郎殿御覧せられてさうか鹿ぞといふに心得て東西をきつと見るに瓦を隔たる敵なれば見つけぬは道理五郎餘りにたえかねて夏山やしげみの鹿は射にくふさうそのをにあがつてせこにあひてゆきがたをとはせ給へと申時さては此瓦のあなたにかたきのあるぞと心得てそばをのぼりに駒かけあげてむかひのはらをきつと見るに實も祐經爰に有しかもあたりに人はなし天のおしへ佛神のあたへ給ふとうれしくて十郎はあになり一の矢をば何者かさまたぐべきとおもひてうつぼの底のひさうのとめ矢をとつ

てからとうちつがい矢さきをさゝへはづかへしぢやうの矢をと心得敵のやつぼばかりに目をかけて馬の足は見ざりけりこゝろはやれ共人に色をさとられじとこかげにすゝめあゆませゆくに乘たる馬は國本よりもかふはまれなりのり玄げしよはき馬につよく手綱を乘程にとあるふし木にむねをつきびやうぶを返すごとくにはやまつさかさまにどうとおつ五郎餘りのかなしさにいそぎこまよりとんでおりすけ成をとつてひつたて申馬をこさんとひしめくまに祐經名馬にのりたれば谷みねへだてゝうちのびぬ行方玄らねばいづくをさしてたづねてゆくべき方もなし兄弟の人々たからの山にいりながらむなしく歸風情してうたてやみぬる兄弟の心ざしこそ無念なれ助成涙をながしつゝあゝらゆゝしの敵の果報やうたてしの我等が運めいや候果報いみじき祐經をねらへども不叶こゝまでのきはなればいざや人目をつゝみ腹をきらん時宗承り御諚のごとく弓をれ矢つくるとやらんもかやうの事をこそ申べけれさりながら爰は人目を玄げふ候へば關所をもとめて御自害あるべき也と申兄弟つれて歸るちゝぶどの和田殿此よしを御覽じて重忠仰けるはあふあれ〳〵吉盛御覽ぜよ川津が子共のあり樣を君に捨られ申みなし子と成はて中々とんせいろうきよもせでおやの敵やうたんとて年來つきそひねらふぞや此狩くらへひ見えがくれの御供申て候をあふ御とものためにてはよもあらじびんぎよくば敵にながれ矢一つとこゝろざす望にてこそ有らめと思ひつるにたがはずして唯今の有樣は目もあてられぬ風情なり秋のかりにかりまたをさかさまにはぐるならひは候へども弓矢とる身の心ざしまことやさしきものかなあのとのばらがぶんとして祐經をねらふ事はたうろうがをのとかやちゝうがあみにあひおなじ我等もわかき子共の日數多候へば明日は身のうへにてや候（本ノマヽ）らはすらんいざやかれらにこゝろをそへゆふさり夜うちにせさせん尤玄かるべしとてむかばき

つゞみうちならして重忠發句をこそ出されけりなつ山やおもひしけみのこがるゝはよし盛頓てつけたまふこよひふち野にとふ火もえたつ曾我兄弟は承りかり場の庭のゆいすてはものさはがしき次第かなさりながら我等をとぶらひ給ふぞやよし盛こよひふぢ野に飛火もえ出すとあそはしちるはゆふざりの暮程にようちにせよとの言葉也それをいかにと申に飛火といへる心はむかし大唐に諸國の武士をめさんため町のさつみと申て町に一づゝのたいこをかけはうくわをそえておかれたりだいりにことのあるときはうくわをあげたいこをうてば遠嶋遠國も一度におこり卽時に都へはせ上り帝都をしゆごし申也此はうくわをばなづけてとぶ火とこれを申なりひやうかくの時のかゞり我朝にて夜うちのときたいまつと云事は此御代よりもはじまれりいこくの事をゆい出しわれらに心をそへたまふは狂言ながらまことなるべしいざや我等もつけ申さむとて十郎殿とりあえずうへもなき戀のけぶりのあらはれて時宗やがてつけてけりあまの岩戸を明てとへ君重忠義盛聞食さてはこよひをかぎり明なば跡をとぶらへとやあはれなりいたはしゝよにはゞかりのなかりせばとぶらひ矢をもいつべしとなみだをながし日暮れば野宿にかへり給ひけり此人々のうれしくて柴おりむすぶ草やかたになく／＼かへり給ひけり馬より飼鬼王だう三郎と人なみなみには下ちし給へ其野邊の草より其外は何をさしか（本ノマヽ）かふべし余のや形にはみち／＼たりと申せども曾我兄弟の屋かたには水より外はなしかくてゆふさり敵にあふべき身がつかれなをさでいかゞせんまちやへゆきて宿とれだう三郎承と申處へ長もち一しだかひてきたる是はどれよりぞちゝぶどのより曾我殿へ御ざつしやうと申あふめでたしかき入よだう三郎取そなへける處に又ながもち一しだかいてきたる是はどれよりみうら殿より曾我殿へおざつしやうと申すあふめでたし此間人の酒をえて呑て其振舞もなかりし

にわんれいこゝにて有べしそがとはた野は隣家まねきよせてしばゐに居三々九度五度七度情をかけてもりながすもとより祐成時宗は用心なれば醉ざりけりうまかひつかれなをして酒も過れば十郎殿時宗にいとまをこひけこ見むために出給ふ太刀脇ばさんて敵のやかたのけこを靜に見て通るある屋形をみてあれば明日は鎌倉入あるべしとて馬のゆあらひにわのりしてひしめく屋かたも有又あるやかたをみてあればたいこつゝみうちならしどめひてあそぶやかたもありかく見てとをりければ餘りこくうに存東へ廻り家家のまくのもむをぞ見たりけるくぎぬき松かわ木村こ此木村こは三浦の平六兵衞吉村の紋なり石たゝみはしなの丶國の住人ねんいの太夫大彌太あふぎはあさりの與市舞たる鶴は井原右衞門いほりのうちにふたつかしらの舞たるははするがの國の住人天智天皇の末孫竹の下の孫八右衞門井たら貝は岩長たうあみの手はすがはとうおほすながしは安田の三郎月に星

は千葉殿からかさはなごやどのうちわのもんは小玉たうすそぐろにいろこ方は北條殿の紋なりつなぎ馬は相馬おりゑぼし立烏帽子大一大萬吉白一文字は山のうちの紋なり十文字は島津の紋車ははまのれうわうの末孫佐藤のもん竹笠は高はしたうきつかうわちがひはな空穗三本がらかさ雪おれ竹二つへひしうさ見の左衞門二つがしら右どもへ小山のはうぐわん三つがしらの左どもへはうつの宮の彌三郎友綱かぶら矢は伊勢のみや方水色はときどの四つめゆいは佐々木殿中しろは三浦のもんちゝぶとのはこもんむらがうわりびしは武田の太郎かちわらは矢はずの紋ひたしろは御所の御紋でありこゝに庵のうちにもつかうあり〱と打たる紋あり是は我等が家のもんぞと思食ひとしほなつかしく十郎殿時をうつしてたゝせ給ふかゝりける處に祐經がちやくし犬ばうといつしわつばまくの隙より見つけ父の御前にまいり十郎の御とをり御中有と申すけつねきいてやあ十郎とはたが

事ぞあいざは十郎かぶんごにうすきの十郎がかつまたに遠江の十郎が此たびの御ともに十郎のけみやうその數をしらすなんぢはこくう成事を申もの哉としかられ時ならぬかほにもみぢをさつとちらしさん候いつぞや三浦殿にて花見のけうのありし時舞まわせ給ひたるさがみの曾我の十郎の御通りと申すけつね聞て打わらひあう此もの共がおうち伊藤こそ人のさかゆるをにくみほろぶるをよろこびし人のすえなればかやうになりはてゝ候ぞや昨日谷ごしにてみてあればしたひ曾我殿はふそくの人とおぼしくてやせたる馬にこしばりぐらざうにんの其中に打まぎれゐたるありさまは山田にたてるかゝしも是にはいかでまさるべき國よりもようのものもたせずつかれにはのぞんず推參のためかよふで一つ吞せよ承と申てまくつかんでうちあげ十郎の袂にすがり御入あれと申それはかたきのちやくし犬ばうなり尤とどうしてまくの中へぞいりにけるすけつねかたひざをおしたてしのびに刀の柄に手をかけわざとかびんぎさうかこれへ／＼としやうずる備前の五藤内此由を見るよりもすけつねのしきだひはやうある人ぞとおもひたゝきやくはこなたへとしやうずるあなたへなをらばやとおぼしめすがいや／＼あれは他門にていせんより座上すこなたは一門の事くるしからじとおぼしめしすけつねがめての座敷になをらせたまふいまだすけ成の左右のひざなをらざりけるにすけつねがしよたいめむのことばこそ中々以て無念なれまことやうけたまはれば面々それがしをおやのかたきとのたまひてねらひ給ふとうけたまはるそれは以の外のひが事也御身の父のかわづどののよしなき事によつてうたれさせ給ひて候を永々敷は候へども語てきかせ申さんによく／＼御きゝ候てつねは御入候へよたとへば賴朝十三にて伊豆の田中へはひしよあり伊豆さがみの人々よりあひてひやうぢやうをするやうたれか此きみの父左馬のかうのとのゝ御恩にあづからぬ人やあ

る世に有人をなぐさめ申はそれはときのきら世にな
き人をなぐさめ申さんこそさぶらひのしゆんしにて
は候へ尤とどうして山ごえよりも頼朝を伊藤のたち
へいりまいらせて三日三夜のさかもりはことにこえ
たるあそびなりあげくにはわか侍にはのかゞりにを
りたつておごへをあげてまりをけきみの御めにかく
る時よりとも南を御覽じて山の高く見えたるはいか
なる山ととひ給ふ若侍承り山の見えて候はかしわが
たうげと申也たぎつてたきのおつるをば松がえがふ
ち共申さう伊藤川の水上かまだかふちとも申也たい
せんし山につゞいて候めいよの鹿のかよひ所鹿をか
らせて御見物我君と申されたり頼朝聞めし鹿は所望
との給へば伊豆さが見の人々赤澤山にて三日のかり
くら心ことばもおよばれず後には人々なごりおしみ
のさかもりするしばゐの事なればこゝに座敷中に靑
めな石のたけ五尺ばかりに見えたるをさがみの國の
住人に本間が年は十九にくい石の有やうかな座敷の

わづらひすてんとて此石をおつたてもちは持て候へ
共たもつ所をしらずして本のざしきになをりけり同
國の住人大庭がしやてい又野の五郎かげひさ此よし
を見るよりも居たる所をづんとたちてひたゝれぬい
でふわとすて此石をおつたてちうにづむとさしあげ
座敷を二三持てまはり申候て是程の石をばよのつね
のつぶてにこそ打べけれもたぬは國のなをりとては
るか東へすてんとすかゝつし所に同國の住人岡崎の
惡四郎よしさねの嫡子さなだの與一よしさだ其比年
は十三也父の代官にやさしくみゆる花うつぼけてう
のひたゝれあかねのやがけしちくのむち足かふちな
るこまに乘りはるか東を打てとをる又野きつと見て
爰許をとをらせ給ふをばさなだどのと見申たるが此
石をまいらせんず馬の上にてめされうずかなふさな
だ殿とぞかけたりける眞田きいてあらことゝもなや
又野殿そもかさよりなぐる石を下にて給るおこのも
のやわかさうと笑てとをる又野此よしみるよりもふ

かくなり眞田どの三浦にとつてはふる郡へん見の七郎岡崎の悪四郎おうたうみさき杉本御一門の中に岡田かたはきこふるきりやうの仁と承て候が此いしゐさぬ物ならば其は三うらのなむにては候はぬか如何に〳〵とかくる眞田無念に存ずればいそぎ駒よりとむでおり竹笠ひたゝれをはらりとかなぐりすてそれほどの石をば二つも三つもとくなげよとらんと申ゐのとにぶんざう御袂にすがりつきこはいかなる事を仰候ぞめのとをや御供申ながら此いしもしもゐされそんずるものならば大殿よりの御かんどうは一かうぶんざうめがかふむらふずるにて候になふいかなる事とけうくんするさなだ聞てやあけうくんもことによるぞ三うらのなむとかくるは無念成そこはなせと云まゝにひかふるたもとふり切て此石を持たりけりぢたいまた野はおこのものゑいやつといふてなぐる五尺餘りの大石が花のごとく成與一が上へひらめいておつるを弓手にあひさけきつと取てめてのかたにたうと置てなむぼうとつたぞ又野殿いで〳〵此いしをやがて歸し申さんとゑいやつといふてなぐる又野弓手にあひ附所は取て候へ共力のおつるゑるしにはるか東へすてたりけり伊豆さがみの人々は此よしを御覧じいや又野十人が力をさなだは持て有やとて一度にどつとぞ笑ける時にとつて眞田殿はあつぱれ弓矢の面目哉去間又野は諸人にどつとわらはれちつとも科もなき四方をはつたとねめまはし面々は何を笑ひ給ふぞかゝるちからわざは時によるぞすまひを取て伊豆さが見の人々をすまひのあひてにもち申かた手をはなつて百日百夜うつともやはか笑はれ申べき伊豆の人々きこし召こは無念なる次第哉同國のものがわたりあひいしをなげてとりそんじ他國をかくるはいはれぬ所あふやがて心得たり伊豆は四郡相模は八郡小國とおもひなして伊豆をかくるはどうりいづさがみはねきりのすまふにてあるべしすまいをめさぬものならば弓矢參らんとぞひしめかるゝ伊豆がた

には狩野介もち見つさがみ方には土肥の次郎二人のぎやうじに出給へばすでにすまいははじまりけり先一番に宇治河の十郎よきすまい九番うつて入岩や川の彌二郎十七番打て入ねぶかは廿三番うぬ井の太郎九番打又野此よし見るよりも君の御座にて候にいつまでそれがし出ざるべき唯今罷出ひとりころびしてあそばむといふまゝにすまひのこしらへおもふさまに仕り場中へおどり出げにもちせうの如くよかつしすまふがつつと出ればつきたをしとつと出ればはたとはけたをし手にもためずしてはや五十九番打たりけり今は諸方のすまいが盡て候はぬかすまひつきて候はずはうちどめはかけひさつうぞおいとま申べしと云かゝりける所にと井の次郎さねひらはさがみ方のぎやうじにてましませば又野があたりへたちよつてあつぱれすまいやとつてきひて目ばやきすまい心もきひたりちからもつよしげにやすまいつくればぎやうじ出てころぶよしうけたまはれ共彼殿年寄せ給

ふあはれ土井が年を十も廿も取てのけたらば又野殿と一番花々と參らぬかとてから／＼と笑ひ給ふさるあひだ又野おとなの返事をこはく申すなんぞう土肥殿座敷座上にて盃のとつくめされんこそおとなにてはましませ共かゝるあそびはらうにやくをきらはぬ習にて候へばたとひ土肥どのにてもおわせよ御出候へ花々と一番參て老のなみにかしわがたうげのあか土を付申さむと申土肥どのきこしめされてやあわかいやつに言葉をかけはぢかいたりとおもはれけれどもものゝ上手にてましませばさあらぬていになし給ふ其比伊藤のひめを土肥に置土肥どのゝ姫をいたうにおかるゝ伊藤御覽じて此邊の河津はなきか土肥の次郎さねひらの腹立給ふ色をば見ぬか是非川津がとらずはいとう出てころばんとぞくるはれける河津承せんなさよとは存（ずチ脱ス）れども父の仰にてある間をつとこたへて御前をたちすまひのこしらえひし／＼と云つくろひ又野を引たてゝつれて場中へ出る時にや引立

る所にて人の力はしるゝものをむげに又野はよはかりけりと心の内に存ればかた手をはなつて場中へ打ていづさがみの人々のしんゐのほむらを止ばやともふがいや〳〵名人にふかくをかゝするは却而てかわづがふかく也取てのやうを人々にみせばやなんとおもひつゝはらりとひらき手さきを取てくるりとまはるすまひの手にはむかふつきさかつきかもが入くひ水車かくればはづしいればあますたうくわのせちえの取合いさむ心ははるごまのたちとゞめぬる風情して四十八手の取てをは百やうにみたしたれば伊豆相模の人々はおもしろやとさゞめかるゝいつまでと存れば又野は人ぎわへかつぱとつきたをしとつて引立をくる時かくてもいりたらばいしかるべき事共をうてたるあとをきつと見てきゞ（期ノ假借）まじきすまひなれども愛成木の根にけしとうで又野は一後のふかくをかひて候あにの大庭が是をきゝすまひのかちまけしらね共木の根は是に有といふ伊藤殿御覧じてやあいかにかはづよの常の辻ずまひなんどこそ人ぎ（ハチ脱スルカ）はなむどと申事は候へすでに又野はばんどう國にきこえたるすまひの上手ものその數にてなけれ共坂より東三十三ヶ國が共中にすまひを取て名人とよばれ申は身のふせうまつはなしろにせうぶをつけよ河津とぞいかられける河津承人のなさけのある時こそ我もなさけはこめらるれとおもひてはらりとひらき手さきをとつてくるりとまはる又野河津にふかくをかゝせんそのためにくみいりにつつと入あましておくれをむずと取て前のつゝ一しめしめてかたてをはなつてつゞけて二番とう〳〵と打たるはあふ中々いきたるかひぞなき兄の大庭がこれをみてすまひをとるは常の事片手をはなつて打方はそれは相手をいやしむ所いきては歸るまじなど云土肥と伊藤がひとつに成てやうないはせそたゞうちころせとひしめかるゝすでに弓矢に成べかりしを賴朝如何なることゝ御けうくんあれば御諚そむきがたきによつてゆみやはとま

りけりそのすまひのいこんによつて御身の父のかわづ殿をばいはう山のこなたなる赤澤山のふもとにてあにの大庭がうつた共申又おとゝの又野が討たる共申其比それがしは都にて傳へきくこはむねん成しだひかないそぎ國にくだり大庭がたちにおしよせ一矢いばやとねらひしに御身のおうち伊藤どのそれがしが代官のしわざなりとの給ひて國の留守にとゞめをきおほみやはたをめしとつてりふぢんにきられ申すうらみの矢をもいたけれども一つは養子の父母ふたつにゐぼしおや三つにはくふ四つにしうとゝおもひながらもさてありぬそれこそあらんめとがもなきすけつねを親の敵とねめんより常はさし入給ひて駒に水をけさするならばらうどうとはよもいはじ家の子とこそいふべけれ馬なくは面々さかへに多きあら馬を一疋取て乗ぬかひたゝれなくば犬ばうがぬぎかへをとりてき給へやけふよりしてはすけ成と祐經と中にいしゆはあるまじいわゆのさかづきさすぞとて盃に一つくみ十郎殿にさひたるは座敷のはぢとおもはれて無念たぐいはなかりけりあら口おしやとふにつらさのまさるとは今こそおもひしられたれおんしておかむ家の子にせんなむどゝいはれては親の敵ならず共しなでは何のゐきあらんくんだるさけをすけ經がおもてへさつといつかけ一かたなうらみともならばやとおもひしがまてしばし我心時宗一人殘しをき同じよみぢといひながら本望をばとげさせでざうひやうの手にかけうき名ながさせんずる口おしさよとやせんかくやあらましとくんだりしさけをばほしかねてぞみえにける二人のてうは色をみて御盃のながもちはおさかなの所望かや座敷にてうの有ながらいざやうたひてまいらせんしかるべしとて今やうなむどうたひけり祐成思ひなをしつゝ時はかはると日はかはらじすなはち今夜二人づれようちにせんず敵也此世の中のおもひでに何共申せとがむまじいされ共心ぐるしきは五藤内がみるめは西國武士の見るめ也

二人のてうのきくみゝは東國の人々のきこしめされん所もげむざいおやの敵をまのまへにおきながらかかる忠さんをいはせつゝきゝながらへてたちぬるといはむ後日の恥しくよし〳〵それもゆふさり今のはぢをばすゝぐべしさのみ座敷になかいし無念度々重（本ノマヽ）り處々の死をして時宗にうら見られむよりたうして立にこそとおぼしめし三ごんくんで請ながしゆふさりは御番申度候へども北條殿の方様へ申べき事の候明日五郎ともないまいりて御めにかゝらむと座敷をたちて出樣に敵の屋形のけごを心しづかに見すまして草やかたに歸る去間時宗は草やかたに有けるが十郎殿を待かね申太刀おつとり出るかどの邊にて參ゐふ痛はしや祐成しほ〳〵として出來たまふ時宗見參らせて十郎殿の涙の風情は何事をおなげき候ぞや助（本ノマヽ）成聞召れて某がなみだの風情別のしさゐにて候らはず敵祐經に對面し初對面の言葉のこはかりし時さしちがへてとにもいかにもなるべかりしを御へんにな

ごりおしうてつれなくいのち長らへ二度あふたがうれしさにさてぞなみだやこぼるらん時宗承りあゝら有難の御諚や候しひは上より下るとはいまこそおもひしられて候へかう申時宗ならば助成の御事をばゆめにも思ひ出すまじいたまにあふたる敵なればとおもひざしきになをらぬ先にさしちがへとにもいかにも成べきものをおぼしめし出されて是までの御出はありがたふこそ候へ早々敵のやかたのてい御物語候へ承度候祐成聞食れて安きほどの事出々語て聞せ申さむさてもよりともの御くわほういみ敷御座あるによつて北條殿の給りにてうすひはたに十八間にひたしろのまくをうつてふじおろしにもませたるはたゝはく雲の立たるにことならず國々の大名にするがの國に吉川舟越高橋たう遠江の國によこちかつまたゐの八郎參川の國にあすけ中將星のきやうめひ尾張の國にほんふかいとうあつたの大宮司美濃の國にはときとを山ひらの丶平次八彌のくはんじやあしゝの次

郎近江國ににしごり佐々木の山本柏木木村の源藏成綱やかたをならべひつしと打て君をしゆごし申なりいせの國には加藤の彌太郎伊賀の國にはつとりたう大和の國には宇野が一たう三千餘騎つくし大名に大友ゑよきやう菊地原田松浦たうこれたうこれずみへつぎ山ずみやかたをならべひつしと打丹後の國にはたなべの小太夫おほちのすへたけ若狹の國にはあるのかうけんゑやうくに政が末子あをの太郎鳥羽の兵衛越前の國にはあまや白崎堀江本明加賀の國にはとがしのふんせい林の六郎井上左衛門能登の國には土田武部越中の國にはいしぐろ宮崎南部の殿原むく田の兵衛宮路の左衛門越後の國には五十嵐の小文次信濃の國にはにしな高梨うむの望月くはらきのあんどうじあむどうないねづの甚平これゆき上の宮のすは（ふノ誤）のはうり下の宮のすはのはうり深山がくれのかいげんし一條板垣南部下山へん見武田小笠原下野の國にはなすゑほの屋宍戸佐竹の人々上總の國にはいほういなむちやうふくちやうなんあひろ河か見うさ山野へ下總の國には安さいかなまりまるとうでう武藏の國には横山たう平山たうゑんたうたんのたうせいのたう小玉たう七たうこれたうそうじて四十八たうの人々は屋形をならべひつしと打て君を守護し給ひけりさが見の國には土肥土やさむま岡崎さてもふところ島山のうちの人々ひたはらきの者どもくたんのすけつね君のまちかきやかたには我等か一ぞくに武州にちゝぶ殿相州に和田殿諸司の別當に梶原平三景時其外は千葉小山なし田星田いん田とん田すは内の殿原やかたをならべ打つゞけ君をゑゆごし申也敵のやかたは八千八ながれなり馬はついぢ人はらんぐいきまんこくのきわうとらせつこくのらわういやおにをからめしはくたわうつなきむときやうやう田村としひとよごしやうぐん二さうをさとる人なりとたやすく此陣でおやの敵を討取てやす〳〵と出ん事おもひもよらぬ事なれ共御身と某と心ひとつであらふぞと

本ノマヽ
へんせつはたらふた言葉にはなをさかせ二時計物語おくゆかしうそきこえけれ去間時宗は十郎殿の御物語大息つゐてきヽ居たり扨は案内日雲なし夜更はおもひたちぬべし宵の間の慰に文共書したヽめて古里へ言傳むしかるべしとてやたて卷物取出しあぶり火すこくかきたてありしむかしのおもひより今のうき身のはてまでをことこまかにぞ書れける十郎殿はともすれば大磯の虎が名殘を書れけり五郎が筆のすさみには箱根の別當の御事さて其外は何れも同じ文せうなりけり時宗がよろこび申けるはふしぎに最後の時大かた殿にまいりふけうゆるされ申父母けうやうの命を富士のすそ野に捨置骨を野ぐわいにうづめども名をばん天にあぐる事父が子たれば取傳ふ家引おこす弓矢の名れうもんに骨はくちながらかもんの名（すの誤歟）をうづまつきむきよくのころはさんしゆちく遠島までくもりなしひそかに是をおもむ見るにたうをにぎりけんをたいし弓馬の道にたづさはり戦場に出て命をすつ是かうめいのためなりきほほしそねむのなげきにはかなしみを三五の時是をうけ十八歳のしうたんは唯二人のみなげきあり年たけ月日さつて後時にけんきう四年五月のすゑの八つの夜天はくらしと申せ共今宵晴候なり助成時宗判と書とゞめ次第の形見を取あつめ筆をすてヽぞなきにけり助成には鬼王時宗にはだう三郎と二人の者を召れ文をば御上へ参らせよ弓卒穗をば曾我殿へはだの守とびんのかみをば箱根の別當の御方へ馬と鞍おばわどのはら恩なひ主の形見ぞとおもひ出さむをりふしは念佛と申て得さすべし態文にはかヽぬぞ御上にて申べき事は給はりたる　おんぞを身にまとひ敵とあふてしなん事いきての面目しヽての名只さいごに母上を拜み申心地してとかやうに着て出つると語り申せと云ながら又はら〳〵となきにけり鬼王どう三郎もなみだにくれ御返事を申かねたる斗なりさのみなみだにむせびてもはゞかりおほき事なればしやく取なはし申けるはい

づくにていか程見おとされ申かゝる御諚の下るぞや兄弟の人々のあれほど多敵うたんと出たち給ふ所にたゞ二人ある下人がみすてゝ歸る法やさうあらうらめしのとのゝ御諚やたとへば仰にしたがひかたみのものを給りて曾我ふる里に歸りつゝはじめて人をたのむ其ふだひの主を見すてゝしなぬほどのゆひがいなしが何の用にたゝむとてたれやの人が目を懸むたとひ入道仕り世をいとふ身と成たりと思をしらぬ(やノ誤歟)はつばらがだうしんいかゞあるべきとうしろゆびをさゝるゝならば出家してもめんぼく有まじ上らうも下らうもしぬべき時にしなねばいきがひはさらに候はずいかにやとの鬼王まるようちの御供をこそ申さずともおくびやうしごくのくわじやばらが腹切やうをみせ申さむに爰ゝよれやといふまゝにたがひに刀を拔持てなむあみだ佛を最後にてさしちがへむとぞしたりけるすけ成も時宗もあはてゝ中へとむで入二人を左右へおしのけあふおもひきりたりなむぢらさればせんだんのはやしはけいきよくまでかむばしゝわうちの砂はみな金玉と成風情我らがおもひきりたればなむぢらもおもひきりけるかや見をとす事はなきぞとよこゝろざしにたゞ下れ國へかた見を屆ずば時のちんじ一たんの口論にしゝたりと人もおもひ母上も覺しめされむずる口惜さにわざとくだすぞたゞ下れたとひ千騎萬騎味方にあると申共此ふぢ野にては思ひもよらず只壹人成共忍びいらばうち得む人あまたにてかなふまじいぞはやとく〳〵と仰ければあかぬはきみの御諚とて形見と文を給り主じなきこまの口を引ゆかむとすれば五月やみ涙にくれて道みえずおもひするがの富士の根のけぶりは空によこおれてへだての雲となりにけりすそのゝ草は露しげくまだ秋ならぬ道野べにほたるかすかにとびつれて身より思ひのあまりにむしさへむねやこがすらんいとゞなみだのおほかるになにとかはつのなきそひて井ての屋かたをわかるらん馬も心のあればこそ北風にい

ばひけめげに心なきちくるいもなるればしとふ者有
ましてやいはむしんりんにかたちにかげのそふごと
くふだいさうでんめしつかへ明ればおに王暮れば又
だう三郎と召遣れ申せしが今宵はなれてあすよりも
すけ成共時むね共たれをか申てなぐさむべき同うき
よに生るゝと曾我の十郎時宗のその殿人でなかりせ
ばかほどにものはおもふまじ我等ばかりとおもへ共
むかしを傳へてきく時はしちた太子は十九にてわう
くうを忍びいでだんどくせむのほうれいあら羅仙人
を師とたのみ御出家ならせ給ひし時玉のかふり石の
おび御衣諸共にぬぎすてゝ金札を書添てこんでいご
まもろ共にわうぐうへ歸し給ひけりこんでい駒もし
やの雲君(くも〳〵假借)のわかれをかなし見てせむこくにいばい悲
るいていきうせし事も今のわれらにあひをなじそれ
は佛のさいどにて終には廻りあい給ふかの祐成や時
宗に今霄はなれて明日よりも又もあふべき君ならず
なごりおしとも中々に申もをろかなりけり兄弟の人

仰けるは今ははや此もの共富士の原をば過ぬらんい
ざや最後の出立せん尤しかるべしとて十郎殿の其夜
の御しやうぞくはだには御上より給る小袖ひつちが
へてきるまゝにむら千鳥のひたゝれのそばたからか
にさしはさみ黑ざやまきの刀をさいて三しやく五寸
のしやくどう作りの太刀はひてまきのたい松一尺貳
寸にたばねたるを弓手の脇にかひこふで火は持たる
か時宗とて先にすゝむでぞ出られける五郎がそのよ
のしやうぞく是もはだには御上より給りたる小袖ひ
つちがへてきるまゝに上にはさひみにす見えにてう
を三つ二つ所々に付させ下はこむの小ばりまのそば
たからかにさしはさみ赤木のつかの刀をさいて別當
より給たる二尺七寸のひやうごぐさりの太刀はひて
とうの火もつてぞ出にけるしのびて敵をねらふよは
くらきにしくはあらね共辻々のかゞり火は天をもて
らすばかりなり草のかげなる細道までもかくるべき
やうのあらざればたゞ日中のごとくなりされ共とね

り草かりのむまかふていにもてなし屋形〳〵のまへをすぐるあやしやたそととがむれは是は御内の草かりなりとこたへてかりやの御りやうの御所中へしのび入こそあぶなけれ霄に見たりし事なればまよふべきにてさふらはず數千のかどをゆきすぎ祐（本ノマヽ）つねがやかたへ忍び入にことによつくいふせし用心はたれもかふする物をとがめばやがて亂入てめぬきをかぎりにうちあふべしそれまではしのべとてたいまつに火をたてしづかにふつて見たりければ五藤内にいさめられやかたをかへて叟にねず惣じて人をおかざれば二人ながらあきれてさていかになりなむ弓手はやがて御所なりめてはち丶ぶまへは和田後の陣は横山けいごのぶしはかゝりたき矢さきをそろえたてをつき御用心とよば丶るはたゞなる神のごとくなりうむがつきてさとられ敵やかたをかへにけりきやうだひの人々羽ぬけどりのなかぞらにたちわづらうぞあはれなるか丶りけるところにはらまき着たる男の長刀持

てよりければ兄弟の人々あは敵ぞとおもひ太刀取なをし懸りよふされども此をとこ長刀をとりもなをさす小ごゑに成て申けるはなふくるしうも候はずち丶ぶ殿のこうけんに本田の次郎ちかつねにて候昨日かりばの庭の言すての弓矢のなさけをとはんため本田をいだしたてられて候祐經は霄までは此やかたに有けるが五藤内にいさめられ御所の左の妻戸の脇にしゆくしたり先たいまつをもふりしめし太刀をもさやにおさめよいやたそといふと物云なちかつねにいはせよこちへ〳〵と手をぞ引うれしさはたぐひかぎりなし中門わたりろうまの前をゆき過あやしやたそととがむればち丶ぶ殿のこうけむ本田の次郎ちかつね自番するとい丶ければさらにとがむる人はなし和田の手の人々吉盛かねて今夜はひそかなれとしめされ人をも更にとがめず御し丶りと北條殿五郎が烏帽子おやなれば色衆てさとり何事ありと今夜はさうなくはしり出るなとしのび〳〵にふれらる丶心得たるやか

たには東西ひつそとしたりけりかくはすれ共外様のもの何事もあれかし時の高名仕り御感にまかりあづからんなんどゝ思ふもの共いれちがへてまはれどされども本田付そい引まはしとをれば更に子細はなかりけり

かくてきやうだひの人々を祐經がふしたりし妻戸のわきえをしへいれ人數にちかつねも御供せんと申助成聞し召れてまことの時の心ざしちゝぶ殿の御はうし本田殿の御なさけとかう申におよばれず若も此事玄おふせて雑兵の手にかゝらん時御手にかけてなきあととりかくし給ひなば最後のともにはまさりなむ人あまたにてかなふまじいぞはやとく〳〵と仰ければ本田承げに〳〵是もいはれて候さらばおゐとま申とて本田ははやかへりぬたがひにとりつたへたる弓矢のなさけこゝまでとふたりめと目を見合て風はいつも吹ども今霄の風は身にぞ玄むなごりはいつもをしけれど今夜ことさらをしきなり一日が間に一千歳をふるとはいふとも萬年がそのうちにも兄弟と成事かたかるべし今霄はなれて其後に未來の契りさだめなし未敵にあはぬまに別れの姿よく見む父ゆうれいが見度ばすけ成を見給へや母かうさうとおもひて時宗をみんとてたいまつはつとふりたてゝたがひにかほを見合てもろきは今のなみだなりかゝりける所に風も吹ぬに妻戸がなつてきり〳〵はつとひらいた兄弟の人々さうのわきにひつそうてすまひてものを見給へば女にてこそ候へけれたれなるらんとおもひしに大磯の虎がいもうとにき玄ゆと申者今夜御所中に有けるが曾我殿原のようちのよしをゆめばかりほのきゝてもしさもあるならば此妻戸のかけがねをはづさんためによひよりも待こそ久しくさふらひつれなふこなたへいらせ給へとてかきけすやうにうせにけり妻戸はあひつ人はなしさらばたい松をたてよとてたひまつに火をたて玄づかにふつて見たりければ郎等共はおそれてよりつかざる座敷に五藤内と祐經只

二人宿したり助成御覧有ていかにや五郎敵を見るに二人我等も兄弟御へんはそばにふしたる五藤内をきれすけ成はすけつねをきるべしとぞ仰ける時宗承りこは御諚とも存候はず五つや三つの年よりも十八年が間ねらひたまにあふたる親の敵をば扨置て行衛もしらぬものをきつては何しきあらんそうりやうにてましませば一の太刀をばあそばせ二の太刀におゐては時宗が仕らんと申すけ成聞し召れてあふ思ひあやまつて候但ねいりたるものを切は死人を切ににたるべしあつたら親の敵のいきかほ見てきらん尤しかるべしとてねやまくらにたちより太刀をつか手にとりなをして申けるこそあはれなれ三千年に一度花さき見のなる西王母のそのゝもゝたう花のせちしうどんげのはるおやのかたきにあふは稀なるとは申せ共あふおもへばやすかりけるぞやいかにやとのすけつね大事の敵もつものがかくふかくに見ゆるはおきあひてしんじやうに死霄の念佛は一念な只今の十念申さ

れよちやうもむせん五藤内がさかしら今こそする所よおきあへやつといふまゝにあゆみの板をどうとふむすけつねが最後もよかりけりさつしたりと云まゝにおどろきさまに枕なる太刀おつとりすばとぬきおきんとしける所を助成是にありやとてもつてひらひてちやうとうつ弓手のかたからめてのちの下へはらりつんときつた時宗是に有やとて持てひらひてちやうと打腰のつがひをきりはなす五郎が太刀はつるぎにて疊三てううらかへしあゆみの板に切つけしひやつと云て引間に助成又はたと切時宗つばをかへしとつてなをしてちやうと切せめても切てなぐさめ日比の念やはるゝとおどりあがりとびあがり三刀づゝ切ほどに果報いみじきすけつねも六つになつてころびけりそばにふしたる五藤内太刀風にめをさましかつぱとおきてにげけるがにげはたゞもにげすゝ夜討は曾我のとのばら明日のしよけんは五藤内とのゝしつてもみにもふでにげにけり祐成御覧じにくいやつが

唯今のことばかなにげはにがさんとおもひしに糸よ
けむといふがにくさに人とちぎるはさはなひぞとも
につれてごくそつのか糸やくのせめい所見にまかり
たてとの給ひてすけなりの太刀にてたかゝ丶切てお
とされのつけに返す所を時宗是にありやとてほそく
びちうにうちおとすおと丶ひあんどたまはりせむな
む人にかたらはれひかうの糸にを糸たりし五藤内が
最後をばきせん上下をしなべにくまぬものはなかり
けり

十番切

けんきう四年五月廿八日の夜半ばかりの事なるに曾我兄弟の人々はおやのかたき祐經を思ひのまゝにうちおふせこしばのかげへさつと引しばらくいきをつぐ助成おほせけるやうは本望をばとげついざやこゝにてはらきらん時宗承て御ぢやう尤にて候へどもとても御れうはおうぢ伊藤の敵なればれんちうへみだれ入頼朝を一かたならうらみ申名をこうだいにあぐべきなり助成聞召れてげに〳〵これもいはれたりさりながら祐經にとゞめをさしてありけるかときむね承てあれほどになすうへなにの子細の候べき助成きこしめされてそれはさもなし五郎殿あけてじつけんあらんときあはてたるかをくれたるかあつたらおやのかたきにとゞめをさゝで打すてにしたるなんどゝあらんときかばねのうへのふかくたるべし五郎殿とありしかばさあらばそれに御まち候へとて有しところに立歸りたいまつをふりたてゝ祐經をみてあれば跡も枕も見もわかずされどもしがいをひき返しむなしきかほをつく〳〵とみてかまいてめいどくわうせんまでわれらうらむる事なかれ日ごろ作りしつみとがの只今むくふと思ふべし我等が父の河津殿にたむけんためのめいたうなりさこそそんりやうかはづどのうれしくおぼしめさるべきいひもあへずときむねこしのかたなをひんぬいてこみゝのねにさしたてすこしはたらくやうなるををしうごかしていひけるは此かたなと申は御へんがひさうせし刀いつぞや頼朝のはこねまふでの有しとき御へんは時の御ともにてまことやらん此山に河津殿の三男にはこわうの丸の有なるに見參せんとよびいだしそれがしにたいめんししたしきがむつばぬはぐちのいたせるところなり他人なれどもむつべばこれ又威せいたるべしおとなしくならん迄わきざしにせよとて此刀をとり出しそれ

がしがこしにさしはやかへれよといひしときおやのかたきときくなればほかをばもとむべからず此刀にてたゞなかを一かたなとにらみしをこしの法師がいろをみてをしへだてかきいだきほんばうにかへりぬさてそのゝちにこのかたなうしなはでもつ事は御へんはもとのぬしなればかへさんがそのために今までもちてあるぞとよかねはかねてもしつつらんこゝろ見給へといふまゝにめてのこみゝしたよりも弓手へとをれと三かたなさす刀めかかさなりてくちとひとつになりにけり

あけてじつけんありしときよひのざしきのざうごんにくちをさかれけるやと御ひやうぢやうはとり〴〵なりされども遊女二人がはじめをはりをかたるにぞとゞめにこそはなりにけりよゐにははれてありけれどかたきうちける其時刻にそらかきくもり五月雨うのはなくだしぞふりにふるつじ〴〵のかゝり火も一度にはつときえければ東西俄にくらふ成ておちむどたにもおもひなばこゝろにまかせておちぬべしされども思ひきるうへこゝろ〴〵によばはるたゞいま御れうのかり屋の御前にておやの敵祐經を討て出るつはものをいかなる者とおもふらん伊藤がまこ河津が二人の子十郎時宗爰に有當君の御内にゆみとりはおはせぬかなどおりあひてうちとゞめ名をこうだいにあげたまはぬやつところ〴〵によばはるくらさはくらしあめはふる御ぢん俄にしんどうし弓一ちやう太刀一ふりに二人三人とりついて我人のとむばいあふつなぎむまに乘ながらむちをうつところもありみかたどうしがきりあひてかたきと思ふものもあり前後ふかくにひしめひてうへをしたへぞかへしけるされ共一番にたいらくの平馬のせうと名乘て夜討はたゞめづらしやわれ〴〵が目のまへにてらうぜきをばせさすまじ手なみの程を見せんとておごゑをあげて切て出るすけなりきこしめしかほどにおほき人中に一人名乘ていづるこそたぐひすくなきゆみとりなれ曾我

の十郎是にありうけて見よと云まゝにこしばのかげよりつつと出てもつてひらいてちやうとうつゆんでのうでくび打おとされて言葉には似ざりけりはや御内をさしてぞ引にける二番にあひきやうの三郎と名乘て五郎にむずとわたりあひほうさききられ引て入三番に御所かたのくろ彌五と名乘て十郎殿にわたりあひかたさききられ引て入四ばんにもて木どの五郎にむずと渡り合ひざのくちをわられて御うちをさして引給ふ五番の度には伊勢の國の住人に吉田の三郎もろしげ十郎殿にわたりあひもろひざながれ引ている六番のたびには吉川と名乘て五郎にむずとわたりあひたかもゝきられ引ている七番にはしながはと名乘て十郎殿にわたり合めての小わきをきられてまくのうちへぞひきにける八ばんのたびにはかひの國の住人に市川の別當太郎たゞずみ大音あげていひけるは夜うちといはんに何程の事のあるべきとおごゑをあげて切て出るときむねこれをきゝやあなんぢはおとに聞えたるうすいのたうげなんどにてぬすみこそのふなりともはれわざのきりあひは是はじめにて有らんに手なみのほどを見せんとてもつてひらいてちやうとうつほそくびちうにうちおとされてあしたの露とぞきえにける九番につくしむしやうすきの七郎もろしげ十郎殿にわたり合まつかうわられ引て入十ばんのたびには二たんの四郎たゞつな大音あげていひけるはなにさま東西くらふしてものゝあひ色が見えぬにたいまつ出せとよばはつたりすけなりきこしめしか程におほき人中にたいまつごのみをするやつに手なみのほどを見せんとていれちがへてきりむすぶ其ひまにたい松を我をとらじとさしいだすえびらうつぼみのかさましてからかさなんどをばよきたい松と火をつくるまんどうゑにはことならずいとゞいさめるつはものが此火のひかりにちからを得さんさんに切たりけりれうが雲を引つれとらが風に毛をふるひはんくわいがほこをふりちやうりやうがいき

ほひも是にはいかでまさるべきその夜五郎が手にかけ五十一人に手をおふする直に死するはたゞ一人別當太郎ばかりなりとても今夜はすごすまじつみつくりにとをもひて人をばさらに切ころさず名字を名乘て出るをこそ十人とはしるされけれ兄弟が手にかけてやみうちのすてがたな數をもしらぬところなり扨すけなりとたゞつなはしのぎをけづりつばをわりきつさきよりもくわえんを出しをふつまくつつたゝかへどしばしせうぶはなかりげり二たんいかゞはしけん十郎のたちをうけはづし少手おひてこれまでなりいとま申てさらばとてまへのうちへ引しりぞく助成つゞいてをつかけとても今よひはすごすまじざうひやうの手にかけころさんよりも返しあはせてせうぶをせよたゞつなとて追かくる取てかへしてきりむすぶすこしあしたちかたさがり上手に成て十郎殿二たんを下へをひおろさんとはしりかゝつて打たちを二たんさらりとうけながしつかをつゐてすそをなぐ十郎のめてのちからあしひざのくちをさしさけてつんと切てぞおとしける弓手のあしばかりにて半時おどつてたゝかふたり是やこのれうわうのぼじつにむかふほこの手入日を返し一おどりうしろをふせぎこす刀百手をくだきたゝかへどゆんでの足ばかりにてさのみはいかでこらふべきいぬゐにどうとまろびあたりに五郎やある祐成こそたゝいま二たんにあひてうたれ候へおなしきみちと云ながらたゞつなに合てうたるればうらみとは更におもはずや御へんはいのちをまたふしてきみの御まへに參りわれらがありさま申てしねはや首とれやたゞつな二たんくびを討おとすまんずる年は二十二おしまねものはなかりけりあらむざんやときむね弓づえ二つえ三つえ程へだてここをせんどゝたゝかひしがすけなりのさいごのよしを聞はやうつたちもよはりはて是非をもさらにわきまへずかくてはかなじと思ひ御内をさして切て入爰に御所の五郎丸と申て十八歳になりけるがうすぎぬ

取てかみにかけとあるところにひつそふて今やを
そしとあひ待る是をばゑらで時宗つま戸をはつとけ
やぶつて御うちをさして切ている五郎丸やりすごし
得たりやあふといふまゝにゆん手すがひにむずとだ
くときむね是をみて女とおもひ見そんじいだかれぬ
るところうくわいすされども事のかずにせずちうにづ
むどひつたてゝ七八間ははしりけり五郎丸是をみて
かなはじとやおもひけん夜討をばくみとめたりおり
あへやつとよばはつたり此こゑにしたがつておりあ
ふ者はたれ〳〵ぞみとの九郎源八またの太郎と民部
のぜうわれもと思ひし大ぢから七八人おりあひて手
どり足どりなはかけて大將殿へをつたつるあふむね
んたぐひはなかりけりさるあひだよりとも夜討まぢ
かく參るよしをきこしめし御はらまきをめされ小長
刀よこたへゆるぎ出させ給ふ爰に大ともの一はうし
と申て九つに成けるがきみの御きせながにすがりつ
き君はすでにせいゐしやうぐんにておはしますかゝる

るごとなんどに御手をおろさせ給ふ事かろ〴〵し
くもや候らんととゞめ申たりければよりともげにも
とおぼしめしとゞまり給ふところへあんのごとく夜
討からめとつて庭上にひつすゆるよりとも御らんじ
てあふいしくも申たる一はうしかな父大ともがつた
へ聞さこそよろこび申べきにゑぼし子にせんとの給
ひて大ともの左近のしやうげん義なをとめされ大す
みさつまをくださるゝときのめんぼく世の聞えなに
事かこれにまさるべきさるあひだ頼朝さきの御しや
うぞくをあらためひろびさしまで御いであり曾我の
五郎時宗とはなんぢが事かさむ候と申親のかたきす
けつねをうつは道理といひながら京かまくらのおり
のぼりみちのすゑにてもうたずし頼朝がいはひの座
敷にちをあへすでういはれなし又かたきならばすけ
つね一人こそうつべきに當番のめん〳〵に手をおふ
するでういはれなしおなじざいくわはかぎり有せつ
たうのつみと云ながらかゝるぢうくわはためしなし

ありのまゝに申せときむね承てさん候祐經をば京かまくらのおりのぼり道のすゑにてもうちたくぞんじて候へども君の御覺えめでたふてよきものをあまたつれうつ時は五十騎百騎うたぬ時も二十騎三十騎にはをとり申さずわれらは君の御ふしんかうぶり身はどくしんとなりはておとゝいよりほかむつぶものもなきあひたつきそひねらひまはれ共おりを得ざればうちもえず此かりくらへの人ごみをさいはいと存まぎれ入てうつて候御ぢやうのごとくかねてはすけつね一人をこそうたむと存候ところに當番のめん〳〵がなまじゐになのりいでをくびやうがたなつかふてにげあしふむがにくさにおどしにそつとたち風をおふせつるにて候ぢうおんをまさにかうぶり妻子をふちし身をたて人となるかた〴〵が夜うちの入てみだるゝにたれあつてきみの御ぜんにたゝんと仕るものはなしとざまなれども二たんと御内の五郎丸よりほか御ようにたつべき者もなしその内かの手おひども

みなめしよせてじつけんあれむかふきずはおほく候まじか程をくびやう成人々にあつたらしき御所領をいたづらにたばんよりわれらにすこしくだしたひ御はうしにあづからはこれほどまではにくまじやたとへはおうぢ伊藤はふちうのものにて候ほどにしそん我等にいたるまで御にくみあるは御道理さりながらふんしよにはいかりをたておんにむくへばかたきも味方と成親子兄弟なれどもよくしんうちにふくめば（本ノマヽ）とにてきたうと書れたりせんぴをくひこゝのしよにしたがへと古人もをしへをかれたりおうぢ伊藤はひが事なしむかし源平兩家のときあめがしたのしよさぶらひ二ちやうの弓に一すぢのつるをかけきのふ源氏へひくゆみをけふは又ひきかへて平家へ引やからも有かやうに人はせしかども伊藤はこゝろふたつなくきれてゆみ矢をとりしなりかやうに弓矢とるものはたのもしき弓とりたうせんと是を名付たりそれに伊藤がしそんをうとみはてさせ給ひてめいをつぐ

べきたよりもなしろうてうのくもをこひこちうの魚のわづかにあはにいきつくふぜいにていきてかひなきうき身と成とてもきゆべきつゆの身をおやのかたきとうちじにし名をのちのよにあげむため我きみとこそ申けれ

よりともきこしめされてさほどがうなるものがなにとて五郎丸にはとられけるぞ又かたきうつての其後内所をさして切ていり我にてきをなすでういはれなしありのまゝにかさねて申せときむねうけたまはりさん候すけつねはおやのかたきと申ながらさしてうらみも候はすせめいちしむにきすと申てもあまりありうらみ申てもつきせぬは君の御身にとゞめたりたとへばおうぢいとうはふちうのものにて候へども名にあるものゝ子孫をいかでかたやしはてむと二人が中に一人めしいだされけんめいの地のかたはしにあんどをなしてたぶならばたとへすけつねうちたくともほんりやうがおしさにおもひかへなぐさみてもすぎぬべしされはゆみ取のいのちにかへておしきはけんめいの地の本領なりそれにひとつものこさずめしあげらるゝのみならず剰かたきすけつねに一ゑんにくだしたびうへみぬわしとふるまひしかゝるうらみの數々のそのみなもとをたづぬるにきみの御身にとどめたりすけつねよりもさきにそとこゝろをかけ申せしにそれてにたつものはなし五郎丸きぬかつぎかみゆりさげてゐたりしを女と思ひ見そんじてさうなくとられて候ぞや五郎丸だになかりせばあつぱれ君の御命はあやうかりつるものをやよりともきこしめされてあつぱれ大がうのものかな思ひのいろをのこさず申あぐる事こそ神妙なれたゞし親のかたきうたむとてまゝちゝそがにはしらせけるか京の小次郎越後のせんじ二のみやのあねはゝにはしらせざりけるかときむね承てさん候小次郎はほんしよにしこうつかまつりひまなき身にて候へばしらする事も候はずゑちごなるせんじばうは經をよみねんぶつ申おやの

あとゝふその子をころして何にせんとぞんじゑらする事も候はず二の宮のゐねむこよになきこじうとゝくみし一しよけんめいをうしなはんとよも申さじとぞんじゑらする事も候はずはゝにはゑらせたくは候ひつれども人のおやのならひにてわかき子どもをさきにたてとしよりあとにながらへものおもはんといふおやのよにあらじと存じらする事も候はずまゝ父はなさぬ中けいしけいふのむかしよりなかよき事のあらざればゑらせずとこそ申けれ頼朝御涙をながさせたまひ今は問べき子細もなしはや／＼いとまとらせよと仰出されけるところにいづくよりかきたりけん敵のちやくしいぬばう時宗を見つけこゑもおしまずわつとなきもつたるあふぎにてときむねがおもてをちやうとうつ時宗ちつともわろびれずにつこと笑ひあふゆゝしくもうついぬばうかなうらやましやな犬坊は霄にちゝをうたせいまてにかけてうつ事よかなしきかなやわれ／＼は五つや三つの年よりも父をなんぢが親にうたせ十八年がそのあひだ野にふし山を家としこゝろをつくしきもをけしつゝやはたちに除りつゝうちたるだにもうれしきにさこそいぬばうがこゝろもつくさずをこのけなく打をうれしく思ふらん是もきみの御おんぞやわどのがうでにかなふまじうつてはらだにゐるならばいか程もうてや犬坊とかほふりあげてうたせけり御前に有し人々弓とりにたう座のちじよくをあたふる事もつたいなしといぬばうをだきいるゝ頼朝よりの御諚にはときむねがさいごにすけなりがくびの見たくや有らんに二たんはなきかとおほせければうけたまはると申てむらちどりのひたゝれにつゝみたりしすけなりのくびに討そんじたるたちをそへときむねがまへにをくあらむざんやときむね今まではがうのまなこを見いだしわろびれざりしけしきもかはりなみだをながしうつぶしになりあらいたはしやはやくもかはり給ひたるやちくばにむちをうちしより一つとところにおきふしすこ

しも見えさせたまはねばとや有らんかくやわたらせ給ふらんとこゝろをそへて思ひしにかなしきかなや今ははや五たいふんべつつゞかねばありしかたちもかはりはていたづら事となりにけりとくしてわれもかくなりておなじみちへと思ひければつゝめどこぼるゝなみだは庭のしらすもぬれぬべし

そののちときむねがたちをとりいだしこれにてきれとの上意なりときむね此たちをみてあらふしぎやあのたちはおとゝし京へのぼり四でうまちにてかひとりゆふべのかたきをうち又このたちにてそれがしが首をきられん事のふしぎさよとのぼらぬ京へのぼりたると申はこのたちの出ところをかくさんための言葉なりなはとりはほりの小次郎とぞ聞えける頼朝よりの御諚には大がう一のときむねなればたかゞをかにてきれとの上意なりうけたまはると申てときむねをひつたてたかゞをかへいそぐ折ふしありあふ貴賤くんじゆたゞよのつねのゆみとりさへさいごのていはおもしろきにことさら名にしおふたるときむねなればさいごのていをみんとてわれさきにといそぐ時宗人のおほきをみてあらくちおしやかほどのくわう座にてなはのはぢにをよぶ事よし／＼それも時宗がさんぞくかいぞくをしたる身にてもあらばこそぶもけうやうのそのためについたるなはにてあるあひだかみのまへにてみしめなは佛のまへにてせんのつなきやうのひぼともいつつべし心あらんずゆみ取たちはよつて手かけてけちゑんせよ人々といふまゝにいやたかゞをかへぞいそぎけるたかゞをかにも着しかば九ほんのまつのしたにしきがはをしかせ西むきになをつて申けるはさいはいときむねがこの松のしたにてきられん事もひとへに九ほんの浄土とおほふるなりいかにたちとりなはとりすこしのいとまを得させよまつごの一句にじやうどの三部經をあら／＼とひてきかすべしけもんしゆの人々もなりをしづめてちやうもんあれそれ法花一乘のくりきはたつとし

ありがたきみたいしやうほうまんとくのくらゐ三世の諸佛出世のほんくわいは衆生じやうぶつのむきだう也經にあらはす時は妙法れんけの五字につゞめなにとくときはなむあみだ佛の六字にせつするなりしゆいといつぱ座ぜんの異みやう座ぜんしゆぎやうのてんちにいたりがたきものは六字をせうしてごくらくに往生すぐち成ぼんぶに至てはかうしやうのほうもん也いつしをさゝぐるそのときは大せんせかいもこゝに有たけをうちたうをみてごだうする事ふんみやうなりめうらく大師の御しやくにいはくしよけうしよさんたさいみだ西方をもつてさきとせりゆいしんのみだこしんの淨土なればぼんらいむとうざいかしやう有なんぼくとくわんすべしそれ六字のみやうがうをあつむるきやうろんはけごんきやうにて南の字をつくりあごんきやうにて無の字を作りほうどうきやうにてあの字をつくり大はんにやにて彌の字をつくり法花經をもつてだの字をつくつてなむあみだふつと申なり十方三ぜぶつ一切しよぼさつ八まんしよしやうげうかいせあみだとゝくときはちやうもんの老若もかうべをちにつけときむねをおがまぬ人はなかりけり

かのときむねと申はおさなかりけるときよりもごんぎやうをこたらず一しむ三くわんの月はむみやうのやみをてらしくわんねんのまどのまへにはまゆに八字のゑもをたれいちしちうだうのくるまは無二無三の門にとゞろき一乘ぼだいのこまはびようどうだいゑのそのにいばふとうがく一てんのほとゝぎすはめうかくたいせうのみねになきにうちうけんもむのうぐひすはげゞ衆生の谷にさへづるしよぎやうむじやうの春の花はせしやうめつぽうの風にちりしやうめつめついの秋の月はじやくめつゐらくのくもにかくるゝはんさむにふん／＼しかくのごとくとあるものをたゞねんふつを申べしとをよぶもをよばざりけるもみな念佛を申ける是はたかゞをかの事さてもきみ

の御まへにはわだちゝぶ北條殿とり／＼そせう申されけるはかのときむねと申は大かうのつはもの又は名にあるものゝ子孫なれはたすけも御をき候へかしとをの／＼申されたりけれは頼朝もない／＼たすけたく思召るゝ折ふし三人のそせうをうれしくおぼしめしみづからあんどの御狀をあそばししんへいの右馬のぜうにたぶさてもたかゞをかにはときむねをしきがはになをらせ太刀取うしろへまはるときしんへいの右馬のぜうたてぶみもつてはしりやあ其時宗なきつそあんどの御狀是にありこれ／＼おがみ給へとて時宗がひざにをくこてのなはをゆるされたからかにこそよふだりけれくだす狀さがみのくにの住人そがの五郎時宗はやくくわんゆうすそれくわをこんじてちうとなすしんかうは人に有てしかもみやうのちけんたりおやにけうのふかきものはてんたうのあたへ有是によつてらいてうもれんみんをはげまし非をいたし理になせり天下爰に感應すそくばくの弓とりたうけんをさし置なんだそでをうるほふしおんこむにきく物ひるいきもにめいじたりこれを更にちうばつししざいになしをはんなばきゝうの家たえ弓馬の道はながくすたりなんあふぎてもなをあまり有はんくわいにくらぶればときむねはまさりたりちやうりやうにあはすればかうそのなせしいせいたり一てん四かいがそのうちにかくれぬがうのものなればさきの日をかへしいまよりのちは頼朝にちうしむたるべし本領なればうさみくすみかは津三ケのしやうしいたいあんどの御狀かくのごとくみなもとのよりともはんとぞよみ上たるきせん上下のけもんしゆ一度にあつとかんじつゝゆゝしの人のくわほうやとよろこばざるはなかりけり去程にときむね御教書いたゞきなみだをながしつゝあら有がたやおなじくは此御狀を舍兄助成もろともにおがむとだにも思ひなばいかゞはうれしかるべきに惣領の助成今はうきよにおはせねばときむね一人ながらへそうりやうをつぐと

もいきたる志るし有まじたゞ〳〵きらせ給へと申こうてぞきられけるみる人目をおどろかしきくものこれをかんじけり君もあはれと思召かほどがうなるつはものじやうこも今も末代もためしすくなき次第あらんかみにいはへとてふじのすそ野にやしろを立てあにの宮をとゝの宮と申ていははせたまひけるとかや今當代にいたる迄おやのかたき討人はこのやしろにていのればたちまちかなへ給ひけり

しんきよく

つら〱おもむみるにいにしへより今に至るまで朝敵を一時にほろぼし太平を四海にいたす事武略のこうにしくはなしされば代は異國しうらいのをそれもなくていゐをあらそふかたもましまさず是併武運の天命にかなはせ給ふによつてなり爰にけんこう建武のむかしを思ふに戰場にしてかばねをさらすのみにもあらずあるひは君臣の儀をまぼつて身をさうかいのなみにしづめあるひはいもせのわかれをかなしむで思ひを古鄕の月にいたましむるなかにもあはれなりしは一の宮のみやす所の御事と右衞門のふしやうはたのたけぶんがふるまひなり其ころ宮すてにうゐかぶりめししんきうのうちに人と成給ひしかば御才覺もいみじくようがんもよにすぐれましませばさだめてとうぐうにたゝせ給ひなんとよの人皆ときめ

きあへりしに關東の御はからひとしておもひのほかに後二條の院の御子とうぐうにたゝせ給ひたればこなたへ參りつかへし人々はみなのぞみをうしなひみやもよのなかよろづに付て只うちしほれ明くれば詩歌に御こゝろをそへ風月におもひを添させ給ふ折につけたる御あそびなど有しかどさしてけうぜさせ給ふ事もなしさるによつてはいかなる宮腹一の人の御むすめなどなりともかくと仰いだされば御こゝろをつくさせ給ふ迄の御事にはあらじと覺えしに御こゝろにそむいろもなかりけるにやこれをと思召たる御氣色もなく只ひとりのみとし月をおくらせたまひけるとかや有とき關白家にてなまかんだちめ天（殿ノ借字）上人さしあつまつてしゐあはせのありけるにとうゐんの左大將殿のいだされたるしにげんじのむばそくの宮の御むすめはしらにゐかくれてびはをひき給ひしにくもがくれたりつる月の俄にいとあかくさし出たればあふぎならでもまねきつべかりけりとてばちをあげ指

のぞきたるかほつきいみじくらうたげににほやかなる御けしきを云ばかりもなく筆をつくしてぞかきたりける宮これをつく〴〵と御覽じてかぎりなく御こころにかゝりければこのゑをしばしめしをかれみるになぐさむかたもやとまきかへし〳〵御らんじけれども御こゝろさらになぐさまず昔りふじんのかんせむでんの床にふしはかなくならせ給ひしを武帝かなしみにたへずしてはんごむかうをたかれしにりふじんのおもかげのかすかに見えしを似ゑにうつして御らんぜしにものいはずわらはず人をしうさずと武帝のなげき給ひしもことはりかなと今更に思ひぞしらせたまひける我ながらはかなのこゝろまよひやまことのいろをみてだにも世は皆夢のうつゝとこそおもひすつべき事なるにこは何のあだし心ぞやくわさんのそうじやうへんぜうをつらゆきがうたのさまは得たれどもまことすくなしたとへばゑにかける女をみていたづらに心をなやますがごとしと古今のじよにもかきたりしそのたぐひにもなりぬるものよとおもひ捨させ給へども猶あやにくなる御心むねにみちてぞおぼしめすされはかたへの色ことなる人を御覽じても御目をだにもかけられずましてとき〴〵のたよりにこととひかはされし御かたさまへはひとむらさめのあまやどりにもたちよらせ給ふべき御こゝろげもなしせめてよのなかにさる人ありと聞召御こゝろにかゝらばたまだれのひまもとむるかぜのたよりもありぬべし又わづかに人をみしばかりなる御心あてならば水のあはのきえかへりてもよる瀨はなどかなかるべき是はみしにもあらず聞しにもなくむかしはかなき物語あだなるふでのあとに御こゝろをつくしていかにせんとこひかなしませ給ひて月日をぞをくらせたまひけるせめて御心をやるかたもやと御車にめされかものたゞすの宮にまふでさせ給ひ御手洗川にて御てうづをめされなにとなくかはにせうようせさせ給ひむかしなりひらがこひせしとみそぎせし事

のあはれなるやうに思召いでゝ

いのるともかみやはうけんかけをたに

みたらしかはのふかきおもひを

かやうにうちずんじ給ふときしもむら玄ぐれのすぎゆくほど木の玄たつゆにたちぬれて御そでもいとゞほしあへず日もはやくれぬと申こゑに御くるまをとどろかして一條をすぎさせ給ふにたがすむ宿とは玄らねどもかきにこけむしかはらのまつもとしふりてすみあらしたるやどなればものさびしげなるそのうちにばちをとけだかくせいがいはをぞひきけるあやしやたれなるらんとおぼしめしすぎかてに御くるまをとゞめはるかに見入させ給ふにみる人ありとも玄らずして有明の月のくもまよりほのぼのとさし出たるにみす高くまきあげいとあてやかなるねうばうの秋の別をかなしみてびはをたんずるにてぞありけるせつさんこをくだく一りやうきよくこほりぎよくはんにおつせんばんせいかきみだしたる其こゑ庭のはおち葉にまがひつゝよそにはふらぬむらさめに御袖も玄ほるゝ計也あやしやとおぼしめしみや御めもあやにつくづくと御らんぜらるゝに此ほどそゞろに御こゝろをつくしてゆめにもせめて見ばやとこひかなしませ給ひし似ゑにすこしたがはずなをあてやかなるかたちはいはむかたなくぞ見えたりける御こゝろそらにあこがれてたどたどしきほどになりしかばつき山の松のこかげにたちやすらはせ給ふに女みる人ありけりとてびはをばきちやうのかたはらにさしをきうちへまぎれいりにけり引やもすそもあからさまなるおもかげに又たち出る事もやと夜ふくるまでたちやすらはせ給へばあやしげなる御所さぶらひみかうしおろすをとしてよもふけはや人みな靜まりければかくても有べき事ならねばみやもくわんぎよありにけり

ゑにかきたりしかたちにだに御心をなやまされし御事なりましてまことのいろを御覽じていかにせんと

唯今のことばかなにげはにがさんとおもひしにゑよけむといふがにくさに人とちぎるはさはなひぞともにつれてごくそつのかゑやくのせめの所見にまかりたてとの給ひてすけなりの太刀にてたかもゝ切ておとされのつけに返す所を時宗是にありやとてほそくびちうにうちおとすおとゝひあんどたまはりせむなむ人にかたらはれひかうのゑにをゑたりし五藤内が最後をばきせん上下をしなべにくまぬものはなかりけり

十番切

けんきう四年五月廿八日の夜半ばかりの事なるに曾我兄弟の人々はおやのかたき祐經を思ひのまゝにうちおふせこしばのかげへさつと引しばらくいきをつぐ助成おほせけるやうは本望をばとげつ いざやこゝにてはらきらん時宗承て御ぢやう尤にて候へどもとても御れうはおうぢ伊藤の敵なればれんちうへみだれ入賴朝を・かたなうらみ申名をこうだいにあぐべきなり助成聞召れてげに〳〵これもいはれたりさりながら祐經にとゞめをさしてありけるかときむね承てあれほどになすうへなにの子細の候べき助成きこしめされてそれはさもなし五郎殿あけてじつけんあらんときあはてたるかをくれたるかあつたらおやのかたきにとゞめをさゝで打すてにしたるなんどゝあらんときかばねのうへのふかくたるべし五郎殿とありしかばさあらばそれに御まち候へとて有しところに立歸りたいまつをふりたてゝ祐經をみてあれば跡も枕も見もわかずされどもしがいをひき返しむなしきかほをつく〳〵とみてかまいてめいどくわうせんまでわれらうらむる事なかれ日ごろ作りしつみとがの只今むくふと思ふべし我等が父の河津殿にたむけんためのめいたうなりさこそそんりやうかはづどのうれしくおぼしめさるべきいひもあへずときむねこしのかたなをひんぬいてこみゝのねにさしたてすこしはたらくやうなるをゝしうごかしていひけるは此かたなと申は御へんがひさうせし刀いつぞや賴朝のはこねまふでの有しとき御へんは時の御ともにてまことやらん此山に河津殿の三男にはこわうの丸の有なるに見參せんとよびいだしそれがしにたいめんししたしきがむつばぬはぐちのいたせるところなり他人なれどもむつべばこれ又感せいたるべしおとなしくならん迄わきざしにせよとて此刀をとり出しそれ

がしがこしにさしはやかへれよといひしときおやのかたきときくなればほかをばもとむべからず此刀にてたゞなかを一かたなとにらみしをこしの法師がいろをみてをしへだてかきいだきほんばうにかへりぬさてそのゝちにこのかたなうしなはでもつ事は御へんはもとのぬしなればかへさんがそのために今までもちてあるぞとよかねはかねてもしつつらんこゝろ見給へといふまゝにめてのこみゝしたよりも弓手へとをれと三かたなさす刀めかかさなりてくちとひとつになりにけり

あけてじつけんありしときよひのざしきのざうごんにくちをさかれけるやと御ひやうぢやうはとり〴〵なりされども遊女二人がはじめをはりをかたるにぞとゞめにこそはなりにけりよゐにははれてありけれどかたきうちける其時刻にそらかきくもり五月雨うのはなくだしぞふりにふるつじ〳〵のかゝり火も一度にはつときえければ東西俄にくらふ成ておちむどたにもおもひなばこゝろにまかせておちぬべしされども思ひきるうへこゑ〴〵によばはるたゞいま御れうのかり屋の御前にておやの敵祐經を討て出るつはものをいかなる者とおもふらん伊藤がまご河津が二人の子十郎時宗爰に有當君の御内にゆみとりはおはせぬかなどおりあひてうちとゞめ名をこうだいにあげたまはぬやつとこゑ〳〵によばはるくらさはくらしあめはふる御ぢん俄にしんどうし弓一ちやう太刀一ふりに二人三人とりついて我人のとむばいあふつなぎむまに乗ながらむちをうつところもありみかたどうしがきりあひてかたきと思ふものもあり前後ふかくにひしめひてうへをしたへぞかへしけるされ共一番にたいらくの平馬のせうと名乘て夜討はたぞめづらしやわれ〳〵が目のまへにてらうぜきをばせさすまじ手なみの程を見せんとておごゑをあげて切て出るすけなりきこしめしかほどにおほき人中に一人名乘ていづるこそたぐひすくなきゆみとりなれ曾我

の十郎是にありうけて見よと云まヽにこしばのかげよりつヽと出てもつてひらいてちやうとうつゆんでのうでくび打おとされて言葉には似ざりけりはや御内をさしてぞ引にける二番にあひきやうの三郎と名乘て五郎にむずとわたりあひほうさききられ引て入三番に御所かたのくろ彌五と名乘て十郎殿にわたりあひかたさききられ引て入四ばんにもて木どの五郎にむずと渡り合ひざのくちをわられて御うちをさして引給ふ五番の度には伊勢の國の住人に吉田の三郎もろしげ十郎殿にわたりあひもろひざながれ引ている六番のたびには吉川と名乘て五郎にむずとわたりあひたかもヽきられ引ている七番にはしながはと名乘て十郎殿にわたり合めての小わきをきられてまくのうちへぞひきにける八ばんのたびにはかひの國の住人に市川の別當太郎たヾずみ大音あげていひけるは夜うちといはんに何程の事のあるべきとおごゑをあげて切て出るときむねこれをきヽやあなんぢはおとに聞えたるうすいのたうげなんどにてぬすみこそのふなりともはれわざのきりあひは是はじめにて有らんに手なみのほどを見せんとてもつてひらいてちやうとうつはそくびちうにうちおとされてあしたの露とぞきえにける九番につくしむしやうすきの七郎もろしげ十郎殿にわたり合まつかうわられ引て入十ばんのたびには二たんの四郎たヾつな大音あげていひけるはなにさま東西くらふしてものヽあひ色が見えぬにたいまつ出せとよばはつたりすけなりきこしめしか程におほき人中にたいまつごのみをするやつに手なみのほどを見せんとていれちがへてきりむすぶ其ひまにたい松を我をとらじとさしいだすえびらうつぼみのかさましてからかさなんどをばよきたい松と火をつくるまんどうゑにはことならずいとヾいさめるつはものが此火のひかりにちからを得さんさんに切たりけりれうが雲を引つれとらが風に毛をふるひはんくわいがほこをふりちやうりやうがいき

ほひら是にはいかでゑきるべきその夜五郎が手にかけ五十一人に手をおふする直に死するはたゞ一人別當太郎ばかりなりとても今夜はすごすまじつみつくりにとをもひて人をばさらに切ころさず名字を名乘て出るをこそ十人とはしるされけれ兄弟が手にかけてやみうちのすてがたな數をもしらぬところなり扱すけなりとたゞつなはしのぎをけづりつばをわりきつさきよりもくわえんを出しをふつまくつつたゝかへどしばしせうぶはなかりけり二たんいかゞはしけん十郎いたちをうけはづし少手おひてこれまでなりいとゞ申てさらばとてまへのうちへ引しりぞく助成つゞいてをつかけとても今よひはすごすまじざうひやうの手にかけころさんよりも返しあはせてせうぶをせよたゞつなとて追かくる取てかへしてきりむすぶすこしあしたちかたさがり上手に成て十郎殿二たんを下へをひおろさんとはしりかゝつて打たちを二たんさらりとうけながしつかをつゐてすそをなぐ十郎のめてのちからあしひざのくちをさしさけてつんと切てぞおとしける弓手のあしばかりにて半時おどつてたゝかふたり是やこのれうわうのぼじつにむかふほこの手入日を返し一おどりうしろをふせぎこす刀百手をくだきたゝかへどゆんでの足ばかりにてさのみはいかでこらふべきいぬゐにどうとまろびあたりに五郎やある祐成こそたゝいま二たんにあひてうたれ候へおなじきみちと云ながらたゞつなに合てうたるればうらみとは更におもはずや御へんはいのちをまたふしてきみの御まへに參りわれらがありさま申てしねはや首とれやたゞつな二たんくびを討おとすまんずる年は二十二おしまぬものはなかりけりあらむざんやときむね弓づえ二つえ三つえ程へだてこゝをせんどゝたゝかひしがすけなりのさいごのよしを聞はやうつたちもよはりはて是非をもさらにわきまへずかくてはかなじと思ひ御內をさして切て入爰に御所の五郎丸と申て十八歲になりけるがうすぎぬ

取てかみにかけとあるところにひつそふて今やをそしとあひ待る是をばゑらで時宗つま戸をはつとけやぶつて御うちをさして切ている五郎丸やりすごし得たりやあふといふまゝにゆん手すがひにむずとだくときむね是をみて女とおもひ見そんじいだかれぬるとこうくわいすされども事のかずにせずちうにづむどひつたてゝ七八間はしりけり五郎丸是をみてかなはじとやおもひけん夜討をばくみとめたりおりあへやつとよばはつたり此こゑにしたがつておりあふ者はたれ〳〵ぞみとの九郎源八またの太郎と民部のせうわれもと思ひし大ぢから七八人おりあひて手どり足どりなはかけて大將殿へをつたつるあふむねんたぐひはなかりけりさるあひだよりとも夜討まぢかく參るよしをきこしめし御はらまきをめされ小長刀よこたへゆるぎ出させ給ふ爰に大ともの一はうしと申て九つに成けるがきみの御きせながにすがりつき君はすでにせいゐしやうぐんにておはしますかゝることとなんどに御手をおろさせ給ふ事かろ〴〵しくもや候らんととゞめ申たりければよりともげにもとおぼしめしとゞまり給ふところへあんのごとく夜討からめとつて庭上にひつすゆるよりとも御らんじてあふいしくも申たる一はうしかな父大ともがつたへ聞さこそよろこび申べきにゑぼし子にせんとの給ひて大ともの左近のしやうげん義なをとめされ大すみさつまをくださるゝときのめんぼく世の聞えなに事かこれにまさるべきさるあひだ頼朝さきの御しやうぞくをあらためひろびさしまで御いであり曾我の五郎時宗とはなんぢが事かさむ候と申親のかたきすけつねをうつは道理といひながら京かまくらのおりのぼりみちのすゑにてもうたずし頼朝がいはひの座敷にちをあへすでういはれなし又かたきならばすけつね一人こそうつべきに當番のめん〳〵に手をおふするでういはれなしおなじざいくわはかぎり有せつたうのつみと云ながらかゝるぢうくわはためしなし

ありのまゝに申せときむね承てさん候祐經をば京かまくらのおりのぼり道のすゑにてもうちたくぞんじて候へども君の御覺えめでたふてよきものをあまたつれうつ時は五十騎百騎うたぬ時も二十騎三十騎にはをとり申さずわれらは君の御ふしんかうぶり身はどくしんとなりはておとゞいよりほかむつぶものもなきあひたつきそひねらひまはれ共おりを得ざればうちもえず此かりくらへの人ごみをさいはいと存まぎれ入てうつて候御ぢやうのごとくかねてはすけつね一人をこそうたむと存候ところに當番のめん〳〵がなまじゐになのりいでをくびやうがたなつかふてにげあしふむがにくさにおどしにそつとたち風をおふせつるにて候ぢうおんをまさにかうぶり妻子をふちし身をたて人となるかた〴〵が夜うちの入てみだるゝにたれあつてきみの御ぜんにたゝんと仕るものはなしとざまなれども二たんと御內の五郎丸よりほか御ようにたつべき者もなしその內かの手おひども

みなめしよせてじつけんあれむかふきずはおほく候まじか程をくびやう成人々にあつたらしき御所領をいたづらにたばんよりわれらにすこしくだしたび御はうしにあづからはこれほどまではにくまじやたとへはおうぢ伊藤はふちうのものにて候ほどにしそん我等にいたるまで御にくみあるは御道理さりながらふんしよにはいかりをたておんにむくへばかたきも味方と成親子兄弟なれどもよくしんうちにふくめ（本ノマヽ）ばとにてきたうと書れたりせんぴをくひこゝのしよにしたがへと古人もをしへをかれたりおうぢ伊藤はひが事なしむかし源平兩家のときあめがしたのしよさぶらひ二ちやうの弓に一すぢのつるをかけきのふ源氏へひくゆみをけふは又ひきかへて平家へ引やからも有かやうに人はせしかども伊藤はこゝろふたつなくきれてゆみ矢をとりしなりかやうに弓矢とるものはたのもしき弓とりたうせんと是を名付たりそれに伊藤がしそんをうとみはてさせ給ひてめいをつぐ

べきたよりもなしろうてうのくもをこひこちうの魚のわづかにあはにいきつくふぜいにていきてかひなきうき身と成とてもきゆべきつゆの身をおやのかたきとうちじにし名をのちのよにあげむため我きみとこそ申けれ

よりともきこしめされてさほどがうなるものがなにとて五郎丸にはとられけるぞ又かたきうつての其後内所をさして切ていり我にてきをなすでういはれなしありのまゝにかさねて申せときむねうけたまはりさん候すけつねはおやのかたきと申ながらさしてうらみも候はすせめいちしむにきすと申てもあまりありうらみ申てもつきせぬは君の御身にとゞめたりたとへばおうぢいとうはふちうのものにて候へども名にあるものゝ子孫をいかでかたやしはてむと二人が中に一人めしいだされけんめいの地のかたはしにあんどをなしてたぶならばたとへすけつねうちたくともほんりやうがおしさにおもひかへなぐさみてもすぎぬべしされればゆみ取のいのちにかへておしきはけんめいの地の本領なりそれにひとつものこさずめしあげらるゝのみならず剰かたきすけつねに一ゑんにくだしたびうへみぬわしとふるまひしかゝるうらみの數々のそのみなもとをたづぬるにきみの御身にとどめたりすけつねよりもさきにそとこゝろをかけ申せしにそれてにたつものはなし五郎丸きぬかつぎかみゆりさげてゐたりしを女と思ひ見そんじてさうなくとられて候ぞや五郎丸だになかりせばあつぱれ君の御命はあやうかりつるものをやよりともきこしめされてあつぱれ大がうのものかな思ひのいろをのこさず申あぐる事こそ神妙なれたゞし親のかたきうたむとてまゝちゝそがにはしらせけるか京の小次郎越後のぜんじ二のみやのあねはゝにはしらせざりけるかときむね承てさん候小次郎はほんしよにしこうつかまつりひまなき身にて候へばしらする事も候はずゑちごなるぜんじばうは經をよみねんぶつ申おその

あととふその子をころして何にせんとぞんじまゐらする事も候はず二の宮のあねむこよになきこじうとゝくみし一しよけんめいをうしなはんとよも申さじとぞんじまゐらする事も候はずはゝにはまゐらせたくは候ひつれども人のおやのならひにてわかき子どもをさきにたてとしよりあとにながらへものおもはんといふおやのよにあらじと存しらする事も候はずまゝ父はなさぬ中けいしけいふのむかしよりなかよき事のあらざればまゐらせずとこそ申けれ頼朝御涙をながさせたまひ今は聞べき子細もなしはや／＼いとまとらせよと仰出されけるところにいづくよりかきたりけん敵のちやくしいぬばう時宗を見つけこゑもおしまずわつとなきもつたるあふぎにてときむねがおもてをちやうとうつ時宗ちつともわろびれずにつこと笑ひあふゆゝしくもうついぬばうかなうらやましやな犬坊は霄にちゝをうたせいまてにかけてうつ事よかなしきかなやわれ／＼は五つや三つの年よりも父を

なんぢが親にうたせ十八年がそのあひだ野にふし山を家としこゝろをつくしきもをけしつゞやはたちに餘りつゝうちたるだにもうれしきにさこそいぬばうがこゝろもつくさずをこのけなく打をうれしく思ふらん是もきみの御おんぞやわどのがうでにかなふまじうつてはらだにゐるならばいか程もうてや犬坊とかほふりあげてうたせけり御前に有し人々弓とりにたう座のちじよくをあたふる事もつたいなしといぬばうをだきいるゝ頼朝よりの御諚にはときむねがさいごにすけなりがくびの見たくや有らんに二たんはなきかとおほせければうけたまはると申てむらちどりのひたゝれにつゝみたりしすけなりのくびに討そんじたるたちをそへときむねがまへにをくあらむざんやときむね今まではがうのまなこを見いだしわろびれざりしけしきもかはりなみだをながしうつぶしになりあらいたはしやはやくもかはり給ひたるぞやくばにむちをうちしより一つところにおきふしすこ

しも見えさせたまはねばとや有らんかくやわたらせ
給ふらんとこゝろをそへて思ひしにかなしきかなや
今ははや五たいふんべつつゞかねばありしかたちも
かはりはていたづら事となりにけりとくしてわれも
かくなりておなじみちへと思ひければつゝめどこぼ
るゝなみだは庭のしらすもぬれぬべし
そののちときむねがたちをとりいだしこれにてきれ
との上意なりときむね此たちをみてあらふしぎやあ
のたちはおとゝし京へのぼり四でうまちにてかひと
りゆふべのかたきをうち又このたちにてそれがしが
首をきられん事のふしぎさよとのぼらぬ京へのぼり
たると申はこのたちの出ところをかくさんための言
葉なりなはとりはほりの小次郎とぞ聞えける頼朝よ
りの御諚には大がう一のときむねなればたかゞをか
にてきれとの上意なりうけたまはると申てときむね
をひつたてたかゞをかへいそぐ折ふしありあふ貴賤
くんじゆたゞよのつねのゆみとりさへさいごのてい
はおもしろきにことさら名にしおふたるときむねな
ればさいごのていをみんとてわれさきにといそぐ時
宗人のおほきをみてあらくちおしやかほどのくわう
座にてなはのはぢにをよぶ事よよし／＼それも時宗
がさんぞくかいぞくをしたる身にてもあらばこそぶ
もけうやうのそのためについたるなはにてあるあひ
だかみのまへにてみしめなは佛のまへにてせんのつ
なきやうのひぼともいつつべし心あらんずゆみ取た
ちはよつて手かけてけちゑんせよ人々といふまゝに
いやたかゞをかへぞいそぎけるたかゞをかにも着し
かば九ほんのまつのしたにしきがはをしかせ西むき
になをつて申けるはさいはいときむねがこの松のし
たにてきられん事もひとへに九ほんの淨土とおほふ
るなりいかにたちとりなはとりすこしのいとまを得
させよまつごの一句にじやうどの三部經をあら／＼
とひてきかすべしけもんしゆの人々もなりをしづめ
てちやうもんあれそれ法花一乘のくりきはたつとし

ありがたきみたいしやうほうまんとくのくらゐ三世の諸佛出世のほんくわいは衆生じやうぶつのぢきだう也經にあらはす時は妙法れんけの五字につゞめなにとくときはなむあみだ佛の六字にせつするなりしゆいといつぱ座ぜんの翼みやう座ぜんしゆぎやうのてんちにいたりがたきものは六字をせうしてごくらくに往生すぐち成ぼんぶに至てはかうしやうのほうもん也いつしをさゝぐるそのときは大せんせかいもこゝに有たけをうちたうをみてごだうする事ふんみやうなりめうらく大師の御しやくにいはくしよけうしよさんたさいみだ西方をもつてさきとせりゆいしんのみだこしんの淨土なればほんらいむとうざいかしやう有なんぼくとくわんすべしそれ六字のみやうがうをあつむるきやうろんはけごんきやうにて南の字をつくりあごんきやうにて無の字を作りほうどうきやうにてあの字をつくり大はんにやにて彌の字をつくり法花經をもつてだの字をつくつてなむあみだふつと申なり十方三ぜぶつ一切しよぼさつ八まんしよしやうげうかいぜあみだとくときはちやうもんの老若もかうべをちにつけときむねをおがまぬ人はなかりけり

かのときむねと申はおさなかりけるときよりもごんぎやうをこたらず一しむ三くわんの月はむみやうのやみをてらしくわんねんのまどのまへにはまゆに八字の霜もをたれいちしちうだうのくるまは無二無三の門にとゞろき一乘ぼだいのこまはびようどうだいゐのそのにいばふとうがく一てんのほとゝぎすはめうかくたいせうのみねになきにうちうけんもむのうぐひすはげゞ衆生の谷にさへづるしよぎやうむじやうの春の花はせしやうめつぽうの風にちりしやうめつめついの秋の月はじやくめつゐらくのくもにかくるゝはんさむにふん〱しかくのごとくとあるものをたゞねんふつを申べしとをよぶもをよばざりけるもみな念佛を申ける是はたかゞをかの事さてもきみ

の御まへにはわだちゝぶ北條殿とり／＼そせう申されけるはかのときむねと申は大かう一のつはもの又は名にあるものゝ子孫なれはたすけも御をき候へかしとをの／＼申されたりけれは賴朝もない／＼たすけたく思召るゝ折ふし三人のそせうをうれしくおぼしめしみづからあんどの御狀をあそばし玄んへいの右馬のぜうにたぶさてもたかゞをかにはときむねを玄きがはになをらせ太刀取うしろへまはるとき玄んへいの右馬のせうたてぶみもつてはしりやあ其時宗なきつぞあんどの御狀是にありこれ／＼おがみ給へとて時宗がひざにをくこてのなはをゆるされたからかにこそよふだりけれくだす狀さがみのくにの住人そがの五郎時宗はやくくわんゆうすそれくわをこんじてちうとなす玄んかうは人に有て玄かもみやうのちけんたりおやにけうのふかきものはてんたうのあたへ有是によつてらいてうもれんみんをはげまし非をいたし理になせり天下安に感應すそくばくの弓とりたうけんをさし置なんだそでをうるほふしおんこむにきく物ひるいきもにめいじたりこれを更にちうばつし玄ざいになしをはんなばきゝうの家たえ弓馬の道はながくすたりなんあふぎてもなをあまり有はんくわいにくらぶればときむねはまさりたりちやうりやうにあはすればかうそのなせしいせいたり一てん四かいがそのうちにかくれぬがうのものなればさきの日をかへしいまよりのちは賴朝にちうしむたるべし本領なればうさみくすみかは津三ヶのしやう玄いたいあんどの御狀かくのごとくみなもとのよりともはんとぞよみ上たるきせん上下のけもんしゆ一度にあつとかんじつゝゆゝしの人のくわほうやとよろこばざるはなかりけり去程にときむね御敎書いたゞきなみだをながしつゝあら有がたやおなじくは此御狀を舍兄助成もろともにおがむとだにも思ひなばいかゞはうれしかるべきに惣領の助成今はうきよにおはせねばときむね一人ながらへそうりやうをつぐと

もいきたる志るし有まじたゞ〳〵きらせ給へと申こうてぞきられけるみる人目をおどろかしきくものこれをかんじけり君もあはれと思召かほどがうなるつはものじやうこも今も末代もためしすくなき次第あらんかみにいはへとてふじのすそ野にやしろを立てあにの宮をとゝの宮と申ていははせたまひけるとかや今當代にいたる迄おやのかたき討人はこのやしろにていのればたちまちかなへ給ひけり

しんきよく

つら〳〵おもむみるにいにしへより今に至るまで朝敵を一時にほろぼし太平を四海にいたす事武略のこうにしくはなしされば代は異國しうらいのをそれもなくていゐをあらそふかたもましまさず是併武運の天命にかなはせ給ふによつてなり爰にけんこう建武のむかしを思ふに戰場にしてかばねをさらすのみにもあらずあるひは君臣の儀をまぼつて身をさうかいのなみにしづめあるひはいもせのわかれをかなしむで思ひを古鄕の月にいたましむるなかにもあはれなりしは一の宮のみやす所の御事と右衞門のふしやうはたのたけぶんがふるまひなり其ころ宮すてにうゐかぶりめしてしんきうのうちに人と成給ひしかば御才覺もいみじくようがんもよにすぐれましませばさだめてどうぐうにたヽせ給ひなんとよの人皆ときめきあへりしに關東の御はからひとしておもひのほかに後二條の院の御子とうぐうにたヽせ給ひたればこなたへ參りつかへし人々はみなのぞみをうしなひみやもよのなかよろづに付て只うちしほれ明くれば詩歌に御こヽろをそへ風月におもひを添させ給ふ折につけたる御あそびなど有しかどさしてけうせさせ給ふ事もなしさるによつてはいかなる宮腹一の人の御むすめなどなりともかくと仰いだされば御こヽろをつくさせ給ふ迄の御事にはあらじと覺えしに御こヽろにそむいろもなかりけるにやこれをと思召たる御氣色もなく只ひとりのみとし月をおくらせたまひけるとかや有とき關白家にてなまかんだちめ天（殿ノ借字）上人さしあつまつてゑあはせのありけるにとうゐんの左大將殿のいだされたるゑにげんじのむばそくの宮の御むすめはしらにゐかくれてびはをひき給ひしにくもがくれたりつる月の俄にいとあかくさし出たればあふぎならでもまねきつべかりけりとてばちをあげ指

のぞきたるかほつきいみじくらうたげににほやかなる御けしきを云ばかりもなく筆をつくしてぞかきたりける宮これをつく〴〵と御覧じてかぎりなく御こころにかゝりければこのゑをしばしめしをかれみるになぐさむかたもやとまきかへし〳〵御らんじけれども御こゝろさらになぐさまず昔りふじんのかんせむでんの床にふしはかなくならせ給ひしを武帝かなしみにたへずしてはんごむかうをたかれしにりふじんのおもかげのかすかに見えしを似ゑにうつして御らんぜしにものいはずわらはず人をしうさずと武帝のなげき給ひしもことはりかなと今更に思ひぞしらせたまひける我ながらはかなのこゝろまよひやまことのいろをみてだにも世は皆夢のうつゝとこそおもひすつべき事なるにこは何のあだし心ぞやくわさんのそうじやうへんせうをつらゆきがうたのさまは得たれどもまことすくなしたとへばゑにかける女をみていたづらに心をなやますがごとしと古今のじよにもかきたりしそのたぐひにもなりぬるものよとおもひ捨させ給へども猶あやにくなる御心むねにみちてぞおぼしめすされぱかたへの色ことなる人を御覧じても御目をだにもかけられずましてとき〴〵のたよりにこととひかはされし御かたさまへはひとむらさめのあまやどりにもたちよらせ給ふべき御こゝろげもなしせめてよのなかにさる人ありと聞召御こゝろにかゝらばたまだれのひまもとむるかぜのたよりもありぬべし又わづかに人をみしばかりなる御心あてならば水のあはのきえかへりてもよる瀬はなどかなかるべき是はみしにもあらず聞しにもなくむかしはかなき物語あだなるふでのあとに御こゝろをつくしていかにせんとこひかなしませ給ひて月日をぞをくらせたまひけるせめて御心をやるかたもやと御車にめされかものたゞすの宮にまふでさせ給ひ御手洗川にて御てうづをめされなにとなくかはにせうようせさせ給ひむかしなりひらがこひせしとみそぎせし事

うあはれなるやうに思召いで丶

いのるともかみやはうけんかけをたに
みたらしかはのふかきおもひを

かやうにうちずんじ給ふときしもむらしぐれのすぎゆく丶ほど木のしたつゆにたちぬれて御そでもいとゞほしあへず日もはやくれぬと申こゑに御くるまをとどろかして一條をすきさせ給ふにたがすむ宿とはしらねどもかきにこけむしかはらのまつもとしふりてすみあらしたるやどなればものさびしげなるそのうちにばちをとけだかくせいがいはをぞひきけるあやしやたれなるらんとおぼしめしすぎかてに御くるまをとゞめはるかに見入させ給ふにみる人ありともしらずして有明の月のくもまよりほのぼのとさし出たるにみす高く丶まきあげいとあてやかなるねうばうの秋の別をかなしみてびはをたんずるにてぞありけるせつさんこをくだく一りやうきよくこほりぎよくはんにおつせんばんせいかきみだしたる其こゑ庭のはおち葉にまがひつ丶よそにはふらぬむらさめに御袖もしほる丶計也あやしやとおぼしめしみや御めもあやにつく〳〵と御らんぜらる丶に此ほどそゞろに御こ丶ろをつくしてゆめにもせめて見ばやとこひかなしませ給ひし似ゑにすこしたがはずなをあてやかなるかたちはいはむかたなくぞ見えたりける御こ丶ろそらにあこがれてたど〳〵しきほどになりしかばつき山の松のこかげにたちやすらはせ給ふに女みる人ありけりとてびはをばきちやうのかたはらにさしをきうちへまぎれいりにけり引やもすそもあからさまなるおもかげに又たち出る事もやと夜ふく丶るまでたちやすらはせ給へばあやしげなる御所さぶらひみかうしおろすをとしてよもふけはや人みな靜まりければかくても有べき事ならねばみやもくわんぎよありにけり

ゑにかきたりしかたちにだに御心をなやまされし御事なりましてまことのいろを御覽じていかにせんと

こひかなしませ給ふもことはりなり其後よりはたゞひたすらなる御けしきに見えながらさすが御言葉には出されずつねに御くわいにまいりし二條の中將爲冬いつぞやかものたゞすの御かへるさのほのかなりし霄の間の月又も御らんぜまほしくおぼしめさるゝにやその御事にて候はゞやすきほどの御事にて候此ねうばうのゆくゑをくはしくたづねて候へば今出河の左大臣きんあきこうがむすめにて候を德大寺の左大將に中名付ながらいまだ皇太こうぐうのみくしげにて候なりせつにおぼしめされば歌の御くわいにことよせて彼てゐにいらせ給ひたまだれのひまもみづから御こゝろをあらはす御事にても御覽ぜよと申せばみやれいならず御こゝろよげにうちゑませたまひさらば今夜かのてゐにてほうべんの御くわいあるべきよしを左大臣のかたへ仰つかはされければきんあきこうかたじけなしととりきらめきすきの人あまたまねきよせ案内申せばためふゆのあつそんばかりを御ともにてかのてゐにいらせたまひけりうたの御事は今夜さまでの本意ならねばひかうばかりにてほうべんはなしあるじのおとゞこゆるぎのいそぎ御かはらけ持て參りたればみやつねよりもけうぜさせ給ひゑいきよくげんかのたへ〴〵に御さかづきたばせたるにあるじもいたくゑひふしぬ宮も御まくらをかたぶけさせ給へばはや人みな志づまりて夜すでにふけにけりなかだちの左中將はこゝろありてゑはざりければかれにあんないせさせ此ねうばうの住けるにしのだいに忍のびいらせ給ひかひまみ給へばともし火のかげかすか成に花もみぢちりみだれたるびやうぶひきまはしをきもせずねもせぬさまに志ほれふしつゝ只いま人々のよみたりし歌のたんざく取あげてかほうちかたぶけたれはこぼれかゝれるびんのはづれよりにほやかにほのかなるかほばせつゆをふくめるはなのあけぼの風に志たがへるやなぎの夕部のいろゑにかくともふでもをよびがたくかたるに言葉もな

かるべしよそながらほのかに見ゆる形のよに又たぐひもやあらんずらんとあやしきまでにおぼえしが猶かずならざりけりとおぼしめさるゝ程にはやほれほれと成て志らず我たましゐも其そでのうちに入ぬるやらんとおぼしめさるゝばかりなりおりふしあたりに人もなくともし火さへかすかなるにつま戸をすこしあけ内へいらせ給ふに女おどろくかほにもあらずのどやかにもてなしやはらきぬひきかづき打ふしたりしけはひ云志らずなよやかなり宮もかたはらによりふしたまひありしながらの御こゝろづくしあはれなるまでに聞えけれどもとかくいらへも申さずたゞおもひ志ほれたるその氣色まことにゝほひふかうして花かほり月かすむよの手枕にみはてぬ夢の御こゝろまよひにあくるも志らず打かたらはせ給へどもなをつれなきけしきにてつゆほどもなびかぬさまなるに八こゑのとりのつげわたりなみだのつららとけやらずをのがきぬ〴〵ひややかにたぐひもつらき有明

のつれなきかげにたちかへらせたまひけりそれよりしてたび〴〵の御せうそくありていふばかりもなき御ふみのかずははや千束にもなりぬるやらんとおぼゆるほどになりければ女もあはれなるかたにこゝろひかれてのぼれは下るいなぶねのいなにはあらずとおぼゆる氣色になんあらはれたりされ共人めをなかのせきもりにて月ごろすぎさせ給ひけるにある時式部少輔秀房といふじゆしやをめしてじやうぐわんせいようをよませてきこしめされしにむかし唐の太そうていしんきがむすめをこうひのくらゐにそなへてけんくわでんにかしづきいれむとし給ふをぎてういさめて申やうこの女はすでにりくしにやくせりとそうし申たりければ太宗其いさめに志たがつて宮中にめさるゝ事をやめ給ひきとだんしけりみやこれをつく〴〵と聞召いかなればよのきみはかくけんじむのいさめに付て色このむこゝろを捨はてたまひけるぞいかなるわれなればすでに人にいひ名付事定まりた

るなかをさけて人のこゝろをやぶるべきかと昔のたとへにはぢよのそしりをおぼしめしてそれよりして御心のうちにはこひかなしませ給へどもさすが御言葉にはいだされず御ふみさへかきたえたれば女も百夜の志ぢのはしがきもいまは我や數かくまじとうちわびてあまのかるもにおもひみだれて月日をぞをくらせ給ひける德大寺此よしきゝ及みやのさやうにおぼしめしたらんをいかでびんなふさる事の有べきかとはやあらぬかたへかよふみちありと聞召みやもいまは御はゞかりなくして御ふみをつかはさるいつよりもくろみすきて

志らせはや志ほやくうらのけふりたに
おもはぬ風になひくならひを

女もあまりつれなかりし事を我ながらつらきこゝろかなとおもひ返すほどになりければことばはなくて

たちぬへきうき名をかねておもはすは
風にけふりのなひかさらめや

其後よりかなたこなたへむすぼふれしこゝろの志たひぼうちとけてさよのまくらを河島の水のこゝろもあさからぬ御中とならせ給ひけり

いきてはかいらうのちぎりふかく死ては又おなじこけの志たにもとおぼしめしかはしていまだ十月にもたらざるに天下の亂出來一の宮は土佐のはたへながされさせ給へばみやすどころはひとりみやこにとゞまつてあけくれなげき志づませ給ふせめてなきよのわかれならせばうきにたへぬいのちにて生れあはんずる後のちぎりをもたのむべきが是は又おなじ世ながら海山をへだててたがひに風のたよりのをとづれをだにもきかせ給はず年ごろめしつかへし靑侍くわんぢよの一人もまいりかよはずよろづむかしにかはりたる世とこそならせ給ひけりすみあらしたるよもぎふのやどのつゆけきに御袖のかはくひまもなくおもひくづをれ給ひていかでなみだのたまのをもながらへぬらんとわれながらあやしきほどにて思召宮も

みやこを御出より君のわかれ御身の上一かたならぬ御なげきみやすどころの御なごり今をかぎりとおぼしめし道のくさ葉の露もともきえはつる共おしからじとおぼしめさるゝ御命のながらへてつれもなく土佐のはたといふところのあさましげなるはにふのこや此世のうちとも思はれぬ浦のあたりにながされて月日ををくり給へばはるゝまもなき御なげきたとへむかたもましまさす思ひくづをれ給ひしを御いたはしくや思ひけん御けいごに候ひし有井の庄司なさけ有てすゝめ申けるやうは何かはくるしく候べきみやすどころを忍のびやかにこれへくだしまいらせて御こゝろをもたがひに御なぐさみ候へとていろある御きぬ一かさねてうしん申て其外のみちのほどの用意までねんごろにさたしければみやはよろこびおぼしめしたゞ一人候ひしはたの武文を御むかひにぞのぼせらるゝたけぶん御ふみ給はりていそぎ都へのぼりしにいくほどなきに御座どころみしにもあらずあれはてゝむぐらしげりてかどをとぢ松の葉つもりて道もなくをとづれかはすものとてはふるき木ずゑのゆふあらし軒もる月のかげならでは住人もなくあれはてたり扨はいづくにか立しのばせ給ふらんとかなたこなたと御ゆくゑをたづねけるほどにさがのゝおくなるさとにまつの袖がきひまあらはなるにつたはひかゝりいけのすがたもものさびしくみぎはの松風あきすさまじくふき忍ほり誰すみぬらんとみるも物うげなるやどの内にびはをだんずるをとしけりあやしやと思ひたちとゞまりてこれをきけばまがふべくもなきみやすどころの御ばち音なり武文うれしくおもひかきのやぶれよりうちへいり縁のまへにかしこまりたればやぶれたるみすのうちよりもはるかに御覧じいだされて何とおほせいださるゝ御ことばもなくあれやとばかり御こゑかすかにきこえながら女房たちさゞめきあひてまづなくこゑのみぞ聞えけるたけぶんみやの御つかひにまかりのぼつて候と申もあへ

ずえんに手打かけさめ〴〵とぞなきにけるや丶有てたゞこれまでとめさるればみすのまへにひざまづきくも井のよそに思ひやりまいらするも餘りせんかたもなき御事にて候へばいかにもして田舍へ御くだり候へとの御むかひにまかりのぼつて候と御ふみをさゝげければいそぎひらいて御覽ぜらるゝにげにと御思ひのせつなるいろさぞと覺えてことの葉ことにをく露の御そでにあまるばかり也

よしやいかなるひなのすまゐなり共せめては其うきにこそたへめとてやがて御門出ありければたけぶんかひだ〳〵しく御こしなどをたづねいだし先あまがさきまでくだし參らせて渡海の順風をぞあひまちけるかゝりけるところにつくし人にまつらの五郎と云けるぶし京よりゐなかへくだりけるがこれもおなじやうにかせをまちてゐたりしが御息所の御すがたをかきのひまより見たてまつりこはそも天人のこのどにあまくだれるか此よの人ともおぼえずと目かれもせでまぼりゐたりしがあなあぢきなやたとひぬしある人なり共又いかなる女院ひめみやにてもおはせよかし一夜のほどのちぎりに百年の命にかへむ事何かおしからんむばひとつてくだらはやと思ふところに武文が下部のはま出してあぞびけるをよび寄て酒のませ引出物をとらせさても御へんがしうのぐそくしたてまつる上らうはいか成人ぞととひければ下らうのものゝかなしさはさけにふけり引出物にめで事のやうを有のまゝにぞかたりけるまつらおほきによろこふでけふ此ごろいかなる宮にてもおはせよかしむほんにんにてながされさせ給ふ人のところへ忍のふでくだり給ふ上らうをみちにてむばひとりたらんはさしたる罪科は有まじきものをと思ひらうどうともにやどの案内見せをかせ日のくるゝをぞあひまちける夜すでにふけければまつらがらうどう三十餘人もののぐひし〳〵とさしかためたいまつに火をつけしと見やり戸をけやぶつて前後よりうつてぞいりにける

はたのたけぶんは京家のものとはいひながら日比手がらをあらはして人にすぐるゝものなればがうたう入たると心得まくらに立たるたちをつとり中門さして切ていです丶むかたきを三人手の志たにてきりふせのこるかたきを大庭へ一度にばつとをひいだし大音あげて名乘やう右衛門のふしやうはたのたけぶんといふ大がうの者こゝにありとられぬものをとらんとてふたつとなきいのちをうしなふものゝふびんさよとのつたる太刀をゝしなをして門のわきにぞ立たりけるまつらがらうどうどもたけぶんひとりにきりたてられてもんの外へ引たりしがきたなしかたきは只一人ぞ返せ〳〵といふまゝにそばなる家に火をかけおめきさけんでよせたりけり武文心はたけけれどもけぶりを風にふきかけられてかなふべきやうあらざれば内へはしり歸てみやすどころをおひまいらせむかふかたきをうちはらひみなとの船をまねきつゝいかなるふねにて候ともこの上らうを志ばらくのせてたべとよばはつてなみうちぎはにぞ立たりけるふねどもおほき其中にうんのきはめのかなしさは松浦が船にこれをきゝ一番になぎさへさしよする武文ながめによろこふでやかたのうちへのせ申御供のねうばうたちをもふねにのせむと思ひてはしりかへつてみてあれば宿には火かゝつて我かたさまの人人はゆきがた志らすぞなりにける

其ひまにまつらはこの上らうのわがふねにめさるゝ事はひとへに天のあたふるところなりいそぎ船に乘やとていへの子らうどう百餘人とるものをもとりあへず皆ふねにこそ乘たりけれともづなとひてをしいだすたけぶんなぎさに歸て船はとゝへばなかりけり見ればおきにぞうかんだるなふその船よせられ候へやかたのうちへのせ申上らうをあげ申さんところ志をばかりによばはれ共順風にほをあげければふねは次第にへだたりぬたけぶんあまりのむねんさにあまのをぶねに打乘てみづからろをゝしていそげ共をひて

を得たる大船にをつ付べきやうあらざればあふぎをあげて其ふねとまれ〳〵とまねきけるを松浦がふねに是をきゝどつとわらふこゑしけりたけぶんやすからぬものかなその儀にて有ならば只いま海底のりうじんと成てそのふねにをひてはやるまじ物をといかつて船のへいたにつつ立て腹十文字にかき切てさうかいのそこにぞ入にける
みやすどころは宵のまの夜うちのいりたるさはぎよりきもこゝろも御身にそはず夢のうきはしうきゑづみふちせをたどる心ちして何となりゆく事やらんとなきふしてこそおはしけれふねのうちなるもの共があつぱれ大がうの者かな舟の上らうを人にむばはれてはらを切つる事よといひさたするを武文が事やらんと聞召ながらそなたをだにも見やらせ給はずきぬひきかづき屋形のうちに泣ゑづみてましますところにみるも物おそろしくむくつけげなるひげおとこのこゑいとなまつていろのあくまでくろきが御そばにまいり何をかさして御なげき候ぞおもしろきみちすがら名所うら〳〵を御覧じて御なぐさみ候へさやうにてはいかなる者もふねにはゑふ物にて候ととかくなぐさめ申せ共御かほをもたげさせ給はず只をにー車にのせられしふの三こうにさほさすらんもこれにはすぎじとおぼえしむくつけおとこもばうぜんと成てふなはたによりかゝりこれさへあきれはてたる體なり其夜は大物のうらにいかりをおろし世を浦風にたゞよひ給ふ明ければかせよへなりぬとておなじとまりのふね共もほを引かちを取をのがさま〳〵こぎゆきければ都ははやあとのかすみとへだたりぬ九國へはいつかゆきつかんずらんと人の申を聞召扨はこころづくしへゆくたびなりと御こゝろぼそきにつけても北野の天神のあら人がみとならせ給ひしそのいにしへの御こゝろづくしいまもおぼしめしわすれずばわれをみやこへかへし給へと御こゝろのうちにいのらせ給ふ其日のくれほどにあはのなるとをこぎゆ

きしに俄に風かはりしほむかひ此船さうなくゆきやらず船人おどろきほをついてちかきうらによせむとすればおきつしほあひに大のあな出來てふねを海底にしづめんとす水主梶取共いかゞはせんとあはてゝほむしろとまをなげいれうずにまかせて其ひまにこぎとをらんとしけれども船かつてはたらかずうずのまふにしたがつてなみとともにめぐる事はちやうすををすよりもすみやか也是はいかさま龍神のざいほうにめをかけなやますと覺えたりなにをもうみに入よとて鎧腹卷たちかたなかずをつくしていれけれ共うずのまふ事猶やまずもしも色有いしやうにやめを見いれてぞ有らんとみやすところの御きぬとあかきはかまをいれければしらなみいろへんじこうじつをひたせるごとくなり是にうずはしづまりけれど船はおなじところに三日三夜ぞめぐりける船中の人々一人もおきあがらず皆船底にひれふして前後もしらずぞ見えにける宮すどころはさらでだにいきたる心ちもなきうへにこのなみのさはぎに人ごゝちもましまさずよしやいきてうきめを見んよりはいかならんずるふち瀬にも身をしづめはやと思召けれどもさすがに今をかぎりとなきさけぶこゑをきこしめせば千いろのそこのみくづとなりふかきつみにしづみなん後の世をたれかはしりてとぶらふべきあさましさよとおぼしめす御こゝろのうちこそあはれなれまつらもいまはばうぜんとなつてかゝるやむごとなき人をとり奉りたるゆへにいかさま龍神のとがめも有けるかせんなきわざをしつるものかなとまことにこうくわいの氣色也かゝりけるところに船底よりも梶取一人はひいでゝ申けるは此なるとゝ申はりうぐうの東門にあたりたるところにて何にても龍神のほしがらせ給ふものをうみへしづめたまはねばいつもかゝるふしぎの有所にて候是はいかさまやかたのうちにめされたる上らうをりうじんの思ひかけ申されたるとぞんずる申も中々じやけんになさけなくは候へ共此事

一人のゆへにそこばこの者共が非分のしにをせん事は不便の次第にて候へばこの上らうを海へしづめたてまつり百餘人のいのちを御たすけあれと申まつらももとよりなさけなき田舍人の事なればもし我命やたすからんとおもひやかたの內へまいりみやすどころをあららかにひきおこし申あまりつれなき御けしきを見まいらするも本意なく候へばうみへしづめまいらすべきにて候御ちぎりふかくば土佐のはたへながれよらせ給ひてみやとやらんだうとやらんとひとつうらにすませ給へとあららかにかきいだき申海へしづめ參らせんと是程の御事になりては何の御言葉のあるべきなればつや〳〵御こゑをも出させたまはず御こゝろのうちには佛の御名ばかりとなへたえいらせ給ひぬこれをみて僧の一人便船したりしがまつらがたもとをひかへいかなる御事にて候ぞそれ龍神と申も南方むくせかいの成道をとげ佛のじゆきを得たる者にて候へばまつたくざいごうのたむけをばうくべからず只經をよみだらにをみて龍神のほうらくにそなへむ事こそ眞實のいのりともなるべく候へとかたくせいしければまつらもさすがいはきならねばみやすどころを船底へあららかになげつけ申さるば僧の儀に付ていのりをせよとて船中の上下一句同音に觀音のみやうがうをとなへしにふしぎなるものどもが海上にうかびいでゝぞ見えにける先一番にたいこうのしちやうがながびつをかひてとをると見えてうちうせぬ其次をみてあればあし毛のこまに白鞍をき八人のとねりが引てとをると見えて打うせぬやゝしばらく有て大物のうらにてはら切てしんだりしはたのたけぶん火おどしの鎧着五まいかぶとのををしめきつきげなる馬にのりゆんづえにすがつてみなくれなゐのあふぎをあげまつらがふねにむかつてとまれとまれとまねひでなみのそこにぞいりにける梶取ともがこれをみてなだをはしるふねにふしぎの見ゆるはつねの事にて候へども是はいかさま武文がおん

りやうとこそぞんじ候へ其しるしを御らんせむがためにに小船一そうこしらへかこを一人あひそへ此上らうをのせまいらせなみの上につきながしいかにとこころを御覧ぜよと申此儀尤しかるべしとて小船一そうひきおろし水主一人とみやすどころをのせ參らせさばかりうずのまき返すなみのうへにぞうかべける彼さうりそくりがかいかんざむにはなされてきかんのうれへにしづみしもそれは人すむ島なればたちよるかたもありぬべし是はうらにも島にもなくいかでなるとのなみのうへ身をすてふねのうきしづみしほ瀬にめぐる水のあはのきえなん事こそかなしけれされば龍神も思はぬ中をばさけられけるにや風俄にふきわけて松浦が船は西をさしてふかれゆくと見えしが一のたにのおきにてむこ山おろしにはなされてゆきがたしらずたゞよひしがげききらうふねをくつがへしてそこのみくづとなるとかや其後なみかせ靜れば御息所の御船はむしきにつかせ給ひけりこの島と申はつりするあまのいへならではすむ人もなきひまあらは成あしのやのうきふししげきすみかのうちへぞいれたてまつりける

此四五日のなみかぜに御こゝろもよはりたえいらせたまひぬ是をみてこゝろなきあまの子共までもこはいかにしたてまつらんとなげきかなしんで御かほに水そゝぎなどしてやう／＼いき出させ給ひけり何しにうきいのちの其まゝにたえもせで又うきめをみん事よとなげかせ給へどかひぞなきさらでたになみだのかゝる御袖はかはくまもなきおりからにとまもるしづくあらいそのいはにくだくるなみのつゆきえをあらそふふせいなりいつまでかくて有べきぞ土佐のはたとやらんいふうらへをくりてもあれかしと打わび給へはあまゝ共申けるはかほどまでいつくしくましまず上らうをわれらがふねにのせ申はる／＼土佐迄をくり奉らんにいかなる津どまりにても人のむばいとり申事も候べきにゆめ／＼かなふまじきよしを申

ければちからをよばずなみの立居に御そでをしぼりつゝ今年はこゝにてくらさせ給ふ御こゝろのうちこそあはれなれさても一の宮はかやうの御事をばいかでかしらせ給ふべきなれば御息所の御むかひに武文京へのぼされしのち月日はるかになりぬれども何と御左右をも申さねばいかなるうきめにもあひぬるかとしづこゝろなくおぼしめして京よりくだりけるものに御たづねありければみやすところは去年の九月に都を御たちまし〱てはたへくだらせ給ひしとこそたしかに承りしがと申ければさてはみちにて人にむばはれけるか又世をうらかせにはなされてちいろのそこにもしづみぬるかとしづこゝろなくおもひわづらはせたまひけり有夜の御けいごに候ひけるぶしども中門にとのゐして四方山の事どもをかたりけるなかにあるものゝ申けるは扨も去年の九月に阿波のなるとをすぎて當國へわたりしときふなかぢにかゝりたるきぬをとりて見しかばいつくしかりつるものよ尋常の人のしやうぞくとは見えずこれはいかさまだいり院御所の上らう女房たちのゐなかへ下らせ給ふとてなんぶうにあひてうみへしづませたまひたるそのしやうぞくにてぞ有らんあなあはれさよなどゝいひさたするをみやかきごしにてきこしめし去年の九月の事ならばもしそのゆくゑにても有らんとこゝろもとなくおぼしめし其きぬいまだあらば持てまいれとおほせければいろこそそんじて候へどもわたくしに候とてとりよせて參らせあぐる宮つくぐ〱と御覽せらるゝに御息所の御むかひに武文京へのぼせられしとき有井の庄司が調進申せし御きぬなりふしぎやとてたちのこりたるきぬをめし出しさしあはせて御らんせらるゝにあやのもんすこしもたがはずつゞきたればなにの御うたがひのあるべきなれば宮二目共御覽ぜず此きぬを御かほにをしおほひなきしづませ給へばあり井も御前にさぶらひしがなみだをおさへてまかり立みやすどころを今ははや此世にまします

す人とはつゆもおぼしめされずこのきぬのかぢにかかりし日をなき人のきにちにさだめられみづから御經あそばしてヽ過去のゆうれい藤原の氏の女ならびにはたの武文ともに三界の苦海を出すみやかに九品のじやうせつに至れといのらせ給ふぞあはれなるさるほどに其年より諸國にいくさおこつて六波羅鎌倉九國北國のてうてき同時にほろびはてしかば先帝はをきの國よりもくわんかうなりたまひ一の宮は土佐のはたよりも都にかへりいり給ふ天下こと〴〵く公家一とうの御代と成めでたしとは申せ共一のみやの御かたには御息所のおなし世におはしまさぬ御事をふかくなげかせ給ひしにあはぢのむしまに御座有よしを風のたよりに聞召御むかひをくだされかくて都に入給ふ只わうしつが山よりいでヽ七世のまごにあひ方士がうみに入てやうきひを見たりしもかくやと思ひ玄られたり御息所はおもはずもこヽろをつくしにをもむきし御あはれのみの心うさなみにたゆたふうたかたのきえぬ身ながらながらへふたとせすぎし物おもひ御をしはかりもなをあさくやと御袖を玄ぼり給へば宮は又とわたる船のかぢのはにかくともつきぬ御なげきわかれの中のわかれとなき跡とひし年月のかず〳〵つもりしかなしみたヾ身ひとつのもの思ひわすれかねにし有さまを語過させ給ひけりかくてうかりしよのなかのときのまに引かへ人間のゑいぐわ天上のごらくきはめずと云日もなくつくさずといふ御遊もなし長生殿のうちにはりくわのあめつちくれをやぶらず不老門のまへにはやうりうのかせえだをならさずけふを千年のはじめとめでたきためしにあかしくらさせ給ひけり

張良

去間張良は天下を治めん其ためにじゆぶうせんへぞまいられける彼御寺の御本尊ほ十一面觀世音彼御寺に參り夜も三十三巻書も三十三局の觀音經を讀三十三度の禮拜をまいらせ大慈大悲の願なれば軍にたやすく勝といふ利生をたべと祈念して七日籠せ給ひけりまんじける曉柰も御本尊は御帳のうちよりもあらたに御聲を出させ給ひ我は大悲のちかひにて衆生濟度のためなれば汝に利生をあたふべし此まへにながれ川につゐて百日下へくだるへし百日下へくだるならばしやうみやう國に着べし彼國の中程に一つの橋渡るべし彼橋の詰に七日立て待ならば八十の翁來るべしカヽル其翁に行會一こ諸願の利生を蒙べしと云めさるゝ御云げんに任せて御手洗川に着やう〳〵下らせ給ひけり百日と申にじやうみやう國につきにけり

彼國の中程に一つの橋こそ渡りけれ柱にはるりをのべゆきげたにはこがねを敷簀子はしやことめなう也橋は高し雲にそひ虹をなせるがごとく也されども云げんなりければ向に渡りて人に逢て問ばやと思ひつつ既にすのこをふみつたふ彼張良の心ざし末頼母敷聞えけりッメ橋を見じと目をふさぎ漸々渡り給へば中程に成にけり向ひを急度見てあれば八十餘りな翁の白きかり衣めされて蘆毛なる駒に乘ながらさしもにせばき此橋をとゞろがけして渡さるゝ張良急度見てあとへも渡り戻て馬乘をたやすく透さはやと思ひしが我は先より渡るものあの馬乘は後也かへさば馬をかへすべし我は何しに歸るべき渡るにこそ本ノマヽと思ひて面もふらず渡りけりたゞ中にて馬と人かまつかなつめに渡りあふ既にそこにて馬と人打違むとせし時に弓手の沓を張良が袖のくちに引かけ橋のすのこへ落しけり張良仁儀たゞしくして老たる人はかならず父母のごとくに思ふとて此沓を取上翁にあたへたて

まつるさしかけてはかんとて取はづしをとさるゝなを取上てまいらせるいかゞはして此沓をまたこそをとし給ひけれ取上んとせし時いさめる駒にけられて橋より下へ落て行翁此よし御覧じてあれを〳〵と仰ければ此沓をとらんとて張良川に落にけり彼橋の高さは三十餘丈成けり沓は水にうかべば張良水に落付てくつをとらんとをよぎ寄川の底らんでんしふしだけ五丈ばかりになる大蛇ひとつうかび出つかしらに角は十六ひれに劍を突たてゝ眼はたゞ夕日の水にうつろふごとく也紅のごとくなる舌のさきをふり立既に張良を呑んとこそはしたりけれ張良急度見て少もひるまずおよぎ寄て大蛇にのりこぶしをにぎり角のあひ七つ八つはりければ大じや怒をとゞめ項き上て張良を橋の詰にをろしをく終に沓をば取上翁にあたへ奉る翁御覧じてあつがう(かノ誤歟)なるや張良臆病にて兵法の叶ふべしとも覺えねば汝は剛臆を見て兵法を傳んため種々のざうさう現したりいざ更ば此次而に翁が淨土を拜せん道遠して叶ましひ此翁が乘たる馬の尾づゝに取付かた手にて目をふさぐべし承と申て左り手にては尾づゝを取右の手にては目をふさぎ仰のごとく仕て候と申しければ頓て霞の鞭をあてさせ給ふ馬は天にあがればせつなか間に南方の觀音の淨土に着給ふ翁御覧じて爰こそ我常に住都なれと仰ければ馬は平地に飛をりぬ翁即觀音にて三十二さうをあらはしてみけんびやくがう雲を分左右眼日の輪のごとし御眉すでに桂をかき御唇は蓮のかたふくがごとく也きよいの袖薫していきやうまどかに匂ひありさうのてんだう幡をさし御迎に參ればにさうかんのてんたうは雲の袖を飜し廿五の菩薩たち十三十二さうにわけ歌舞の芥はころ〳〵に曲をなし舞遊せうちやくきむくごびわねうとうはつまでもたつとからすといふ事なし玄ちくの玄らべこまやかにかんたん肝にめいじたり扨張良を引ぐして臺に入せ給ひけりあら有難の御事や淨土を拜むめでたさよ 詞 頓て翁は陰陽卷

と申す巻物を取いださせ給ひ此巻物のとくゆうは他（心ノ誤歟）神通をあきらめ代（本ノマヽ）の吉山をあらはし天下大平國土安穏壽命定穏（長遠ノ誤歟）成べき事どもも此巻物の内に候ぞ給はれ張良張良餘りのかたじけなさに三度いたゞき懐中す一巻の書是也其後さう（本ノマヽ）のどうじを出し淨土のゐかたせんと申てきら〳〵詞もなき酒をべいるりのつぼに入いのちながへのてうし幸ひらく盃ちんみの菓子を肴にて給れ張良ちやうりやう餘りのかたじけなさにたぶ〳〵と請てほさんとせし時翁御覽じて暫張良盃ひかへよ汝がじやうみやう國にてくつの口に酒のいとくを語て聞せんむかしながらこくの大王は父母の恩を報ぜんため須彌の半ふくにあがり白石の塔を卅六堂にくむ彼塔立て七千年と申時たうの中よりもまかまんだらけまかまんじゆしやげとて種々のれんげが咲蓮ちつて百味の菓子となる有ときけぶつ菩薩は須彌の半ぷくにあがり白石の塔を拜みあらめでたやむかしやうにこそ石に花の咲て實のなるとは申せ是はさながらめでたさよと一つをて取ぶくするに天のかんろのごとしいまひとつを取て笈に入なむにやうけんといふ山にすつる彼なんにやうけんといふ山は高さも四萬ゆじゆん廣さも四萬ゆじゆんにて菊より外の草生ず（ひノ字脱スル歟）彼菊の葉のひろき事まはり八十ひろにひろごれり其菊のはにをく露が玄たの水更にをち合て不老不死の藥となる藥師の淨土で不老山この淨土にてあかだやく人間にあたふれば其名を和らげて卽酒と申也ッメことに彼ゐかだせんは一度呑ば一千人二度のめば二千人が力つきつゝ壽命定穏なる酒なりたまはり給へ張良張良餘りかたじけなさにうけて三度汲にけり二獻になれば肴とて扇を一本出さるゝ此扇と申すはたゝめば八つのほねひらけば廿五のほね有廿五のほねは廿五の菩薩八つのほねは藥王菩薩此扇を持ならばたといねがはすとすぐに淨土へまいるべし延命さうとかきて命をのぶるとよまれたり夫を肴に今一つ給玉へ張良張良承りて亦三度こそ汲にけれ

三獻にさかなとてむちを一つ出さるゝ滄海浮とは彼鞭此むちを腰にさし海河を渡るに船にのらねど水上平地のごとくはしれども水の底にもしづまず水中に入れども其水身にもしまぬ也身をかくさんと思ふ時おんぎやうの法を誦し木のはのしたにかくるれど人の目には見えぬなりかゝるめでたき重寶ぞそれをさかなにて今一つ給り玉へ張良張良承り能呑好酒仰はおもしもとよりもちやうりやうは大酒にてさし請さし請呑程に八十一度給りぬ凡そ力は八萬一千人が力也有難しとも中々に申に及ばざりけり酒はよく給りぬ下向せんと思へども道を忘れてしらばこそ其れうにこそ延命草とさうかいふをば給れ招かばやと思ひて我ふる里をまねきけりへだてゝ遠き古鄕にたゞ一時に着て榮花に昌給ひけり

新群書類從第八終

黑川眞道
米光關月　校

明治三十九年十一月二十日印刷
明治三十九年十一月廿五日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地
國書刊行會代表者
編輯兼發行者　市島謙吉

東京市京橋區新榮町五丁目三番地
印刷者　本間季男

東京市京橋區新榮町五丁目三番地
印刷所　內外印刷株式會社分工場

大正十四年二月

香代子様